～三人の転生者～

秋代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
～三人の転生者～

【Ｎコード】
Ｎ７０４９Ｊ

【作者名】
秋代

【あらすじ】
チート最高。
最強、無敵、無敗良いじゃん。
原作ブレイクは確実！！
最初は【ネギま！】の世界で大暴れ！
他にも、憑依者や転生者が敵として現れる事もしばしば。

それではどうぞご覧下さい！

プロローグ（２３／３／２０修正）（前書き）

ふっ…後悔はしない。
反省もするはずない。

この胸にあるのはただ

前を向き歩き出す為にある！！

なんかかっこよさげな事を
言っておりますがまぁ
気にしないで下さい。

プロローグ（２３／３／２０修正）

▼　貴史　視点▼

俺の名は、剣崎　貴史。
ごくごく普通の高校生。

今俺は数少ない友達と、剣道の手合わせをしてる。
相手の名前は、山瀬　薫。
ごくごく普通なチートマンだ。
何がチートかって？　こいつなんでもそつなく一流になるんだ。

料理を作らせたら美味いし、スポーツをやらせたらすぐコツを掴む、その持ち前の運動神経で、プロに張り合う程。
勉強をやらせれば、記憶力が凄まじく…まぁ、瞬間記憶能力だっけ？　そんな感じでスポンジが、水を吸うが如くなんでも覚えて天才だし……。
もうね……こいつ見てると、正直嫉妬とかそんなんじゃなく、やってられねーってのが…ね。

次に審判役をしてるのが、俺の数少ない友達の最後の……

……

……

さっき少なすぎとか思った奴は、校庭十周しとけ。

っと脱線したかえーっと、最後の友達の井上　霞。

こいつもごくごく普通の二重人格者だったり、普通に超がつく能力を使えたり出来んの…。

……

……

……

うわぁ、もう嫌だ。
非常識すぎる。
どうしよう…。
なんで俺だけ普通なんだろう？　いや、こいつらが生まれてくる場所を間違えたんだ。
うん、そうだ。
そうに違いない。

えっ？　どうせお前も何かしらの、能力があるんだろうって？
その考えは間違ってるよ。

だって俺……成績は普通だし、運動神経ったって普通だし、超能力使えないし、魔法や魔術使えないし、強運も凶運の持ち主でもない。
幽霊も見えないし、普通の普通のそのまた普通の人間なんだ。

自己と友人の紹介はこの位で、薫が俺の隙をついて一本取った。

「だーっ！！　やっぱ勝てねーよ！！」

「なんだ？　今日は珍しく弱音を吐くな」

「確かに珍しい。　いつもの事じゃない」

「そうだけどよ」

だけど、一度くらいは勝ちたいものだ。

そのあと、俺達は他の人の邪魔にならないように隅の方へ移動して、雑談で時間を潰した。

そして部活が終わり、下校時間。

俺達は道場の掃除をし終えて、下駄箱へと向かった。

「今日はどうする？」

「霞に任せる」

「私は貴史と……ごにょごにょ…」

霞は顔を赤らめ、ごにょごにょと言うが……正直言って聞こえん。

俺となんだ？

「霞の案は却下」

「なん……だと……？」

薫は霞の案を即座に却下した。

というか、薫は霞が何をしたいのか聞こえたのか？　出来れば教えて貰いたいものだ。

「嫌だ」

却下された。
つか心を読まないでもらいたい。

「読んでないよ」

「いや、完全に読んでるだろ？」

「聞こえただけー」

「たち悪いなぁ！！」

下駄箱に着いて、靴を取ろうとしたら靴の上に手紙があることに気づいた。

「ん、手紙だ」

ーーーーピクリッ

俺が呟いた時、後方から聞き耳を立てる音が、聞こえた気がした。
まぁ、気がしただけだろ。

「ど、どどどど…どんな手紙なんだ？　ん？」

「ちょっと……見せてよ」

霞は動揺したように声を震わせ、薫はドス黒いオーラを放ち笑顔で、こちらに迫ってきた。

手紙一つで、大袈裟な奴らだ。

「別に、不幸の手紙じゃねーぞ」

「わ、私達にとっては、不幸な手紙かもしれんだろ!?」

私達って……。

「わかったよ。　白い便箋に、ハートのシール…」

ーーーーガタッ！

「ん？」

音のする方を向けば、靴を下駄箱に仕舞ってるマブダチ達。

「さぁ、差出人を言うんだ…。　貴史」

「今なら、まだ校舎に居るはずだ」

黒いオーラを放ち、眼が純血してる。
何やってんだよ……。
こいつらは……。

とりあえず、手紙を読むとしよう。
決して、問題の先送りではない。

ぱんぱかぱ～ん。
おめでとうございます。
剣崎様、山瀬様、井上様、あなた方三人は神様の暇潰しに、選ばれました。
光栄に思ってください。

神様。

「……薫、霞…俺も手伝う」

俺は手紙を握り潰し、二人の下へ行った。

たく、少しは期待したじゃねーか。
こんな悪戯、二度と出来ないようにボコらねば。

悪戯主を探してる途中、唐突に意識が落ちた。

「んぅ…むぅ…此処…は」

目を覚ますと、そこは真っ白な部屋だった。
左右には、まだ気絶している薫と霞がいて、前方には長い杖を持ちつるっぱげで、長い髭を生やしてる「いかにも、ワシが神じゃ」とか、痛い事を言いそうな爺さんがいた。

「事実、神なんじゃが」

はいはい、神様だからって勝手に人の心を読まないで下さい。訴えますよ?

「神に人の法は、利かんぞい」

「……」

「無言はやめい」

「此処はど「ん…はれ? 此処は?」起きたか?」

「あっ! 知らな「それは良いから」……うん」

俺が神とやらに質問しようとしたら、丁度二人が目を覚ました。

「おはよう…。 むにゃ…」

「おぃーっす。 で此処どこ?」

「おはよう霞、あと寝るな。　おはよう薫、それは俺も気になっていたんだ」

「此処は、天界と呼ばれる場所じゃ。　そして、お主らはワシが呼んだ」

「うわぁ……いかにもワシg「それやった」そうなんだ。　ちぇっ」

「この爺さんマジ神様？」

「らしいぞ」

「うわっ痛くない？」

「「痛いな」」

「ひそひそ話をしてると思うておるじゃろうが、聞こえておるぞい」

「「「ひそひそ話しじゃないし」」」

「……」

「「「隅で、さめざめと泣いてんなよ。　うざったらしい」」」

「お主らそれちと……いやかなり酷いぞ！！」

俺達は神様を充分に弄ったあと、状況を整理した。

「あ、ちなみにお主ら死んだから」

「何故だ？」

「天界に呼ぶには、一回死んでもらわんといかんからの」

「ふむ、そうか…」

状況を整理していると、神が爆弾発言をした。

「質問だ…。　俺達を殺した理由は？」

「答えろ」

「う、うむ…最近暇でな？　それで別世界の神達に会いに「簡潔に答えろ」はい。　暇じゃからお主らを、漫画やアニメの世界に転生させ暴れて貰おうかと……」

そうか、暇だからか…。

「薫、霞……この方は死にたいらしい……殺レ」

「「ラジャー」」

「ちょ、まっ、はぎゃぁぁあああ……」

俺は屑（神）から呼び出された理由を聞き終えると、薫と霞に屑（神）の始末を頼んだ。

屑（神）が待ったをかけるが、神と言えど人を殺すなど論外。

当然の報いだろう。

数時間後、薫と霞は充分過ぎる程に屑（神）を痛め付けた。

「それで？　話によると、俺達はアニメの世界でもう一度人生をやり直せるんだな？」

「う、うむ……」

「どんな世界なの？」

「ネギま！でどうじゃ？」

「ネギま！かぁ…どうする？　霞、貴史」

「私は二人が居るなら、何処でもいいかなぁ」

「じゃあ此処は貴史に」「決めてもらおー」

薫、霞は俺の判断に任せ、屑（神）をまたボコリ始めた。

ふむ、ネギま！かぁ…。

個人的に別に問題はないが、それだと絶対バラバラになるよなぁ…。　性別とかで……。

此処は、そうだな……。

「おい屑（神）」

「……屑はやめてくれんかのぅ？」

「嫌なこった」

「……」

「隅っこで、さめざめと泣くな！　鬱陶しいったらありゃしない」

「なんで、ワシはこいつ選んだんじゃろ」

「転生について、質問するからさっさと答えろ」

「……わかったわぃ。　グスッ」

「まず一つ目能力と言ったが、なんでも良いのか？」

安全面を考慮する上で、重要なのが能力だからまずはこれを聞かないと、話にならない。

「リクエストがあるなら叶える」

ふむふむ……。

「次は産まれる場所と性別についてだ」

「それもリクエストがあるなら叶える」

「了解した」

これで聞く事はない。

転生なら戸籍とかは、心配はないだろうしな。

聞く事を終えて、俺は三人で相談すると屑（神）に言って待機させた。

「どうするのさ？」

「薫は木乃香嬢と刹那嬢が、好きだったな？」

俺は以前ネギま！のキャラで、好きなキャラを薫から聞き出した時の話を持ち出した。

「うん。　そうだけど」

「なら近衛家か、近衛家に縁のあるとこに転生しろ」

「ふむふむ」

次は霞だな。

「霞は、イギリスに転生だ」

「ネギは嫌だ」

「ちげーよ。　エヴァ嬢の所へ行って、共に行動する…。　その際、悪いが不老不死か真祖にして貰うが、いいか？」

「別に良いが……貴史や薫も不死になって……独りは嫌だからな？」

「「わかってるよ」」

俺と薫の言葉に安心したのか、霞はうっすらと目に涙を溜めて笑顔になった。

そして、転生後の大まかな行動を二人に教える。　その内容は以下の通りだ。

薫の場合、まず木乃香嬢の歳の離れた兄とか（近所、親戚の）お兄さんとして生まれる。
そして時が経ったら、麻帆良へ先生として赴任する。
ただそれだけだ。

「女性の方が良いなぁ」

「何？　お前そういう趣味だったの？」

「ガールズ・ラブを経験したいなと……（あと、貴史を襲うには女の方がいいし）」

「……好きにしろ」

一瞬、寒気がしたが……まぁいつもの事だ。　たいした事はないだろう。

そして霞の場合は、エヴァ嬢と同じ時代に生まれて、十四の誕生日に真祖か不老不死になってもらい。
エヴァ嬢を探して、共に行動。
その後に、サウザンドマスターがエヴァに呪いを掛けるから、エヴァの保護者として麻帆良へ……。

うむ。　完璧じゃね？

「貴史……」

「なんだ？」

「真祖になるのも、エヴァと共に行動するのも良いが、別にアレ（エヴァ）を落としても構わんだろ？」

「……貴様もか……好きにしろ……」

……こいつら普通じゃない。　まぁ元々普通じゃないがな、こいつら。

と、言うわけで話し合いが終わり、その結果を神に話した。

「……よいのか？」

「「「あぁ」」」

「わかった。　では次に能力じゃな」

「じゃ、最初は私からね」

そう言って霞が、屑（神）の前に出る。

霞の能力付加は次の通りだ。

一、吸血鬼の真祖。

二、エヴァ並魔力、羅漢並気力。

三、年が重なる度に、身体能力が向上する能力。

四、直死の魔眼。

「随分とチートな…」

「生きる為だよ」

「わかった。　そろそろ行くが良い。」

そう言って神は、霞をネギま！の世界に転生させた。

「次は剣崎じゃな」

「頼むぜ」

俺の能力は次の通り。

一、神獣騎の海星剣皇の使用権限。

二、ゲットバの美堂蛮の全技能と、全能力の付与（当然、邪眼、悪魔の腕、天使モードも使える）。

三、ゲットバの赤屍の超越者としての能力付与。

四、無尽蔵な魔力、無尽蔵な気力。

バネさんの能力なら、不老不死にもなれるだろ。

「これもチートすぎやせんか？　特に二と三……」

「うっせぇやれや」

「わかったわい」

「またな薫」

「おう、またな」

そして俺は、ネギま！の世界へと転生した。

▲　貴史　視点▲

――おまけ？――

「次はお前さんか」

「頼むね」

薫の能力。

一、ナギぐらいの魔力、魔力と同等の気力、一護の三倍の霊力。

ニ、烈火の炎の型全て。

三、ＢＬＥＡＣＨの全技使用可能。

四、ゲットバの雷帝の能力付与。

五、ある一定の歳になったら不老不死。

「うむ、もう何も言わんよ」

「あ、あとさ俺達三人の前世の記憶なんだけど…」

「わかっとる……。　では、行け！」

「ありがとう！」

こうして、三人はネギま！の世界へと旅だった。

「ふむ……彼らの補佐として、ある者達も送るかの…」

そう言って、転生神はとある世界から複数人呼び出した。

プロローグ（２３／３／２０修正）（後書き）

やっちまったな…。

「あぁ、お前はサイテーだよ」

作者は自覚してるよ。

「なんせ…」

「「今までこの小説を書いてた訳だし」」

許せよ読者…

「うわぁ…上から目線」

「図々しいったらありゃしねぇ」

「殺っちゃう？」

「「殺ろう殺ろう」」

うむ…此処でもかね？

「蛇咬！！！」

「崩！！」

「闇の業火！！」

ぎゃぁぁぁあああああ…

主人公達の設定（２３／３／２０修正）（前書き）

三人の設定等です。

主人公達の設定（２３／３／２０修正）

名前　南武（ナンブ）　貴史（タカシ）

年齢　コウキと出会う頃は５歳
　　原作始めで１９歳

容姿　デルカイザー（美堂蛮の父）似

ステータス（Ｆａｔｅ風）
筋力　ＥＸ　耐久　ＥＸ　速度　ＥＸ　魔力　ＥＸ　気力　ＥＸ
幸運　Ｃ－

能力

超越者：自分が想像しえない事は起きない。
例え致命傷を受けても、自身の死を想像出来ない場合すぐに復活する。

さらに跡形も無く消し飛んだ場合は、何処からともなく血が、敵の背後に落ちそこから復活を遂げる。

蛇使いの宿命：アクスレピオスの力を借りれる。

不現の瞳：一分間の悪夢を見せる事ができ、一日三回同じ相手に一回しか使えない。

悪魔の腕：呪文詠唱により、右手が悪魔の腕になる

天使モード：アクスレピオスを開放させ一時的に身体能力を上げる（既に上げる必要性がないが）。

無尽蔵な魔力：読んで字の如し。

無尽蔵な気力：読んで字の如し（気力＝体力なので疲れる事は稀）。

名前　カスミ・ヴェネーラ

年齢　６１４歳

容姿　リリなののフェイト（１８歳）似

ステータス（Ｆａｔｅ風）

筋力　ＥＸ　耐久　ＥＸ　速度　ＥＸ　魔力　ＥＸ　気力　ＥＸ

幸運　－ＥＸ＋＋＋

能力

真祖の吸血鬼：エヴァンジェリンと同じ。

直死の魔眼：某殺人貴や着物を着た人の魔眼より上。

能力向上：年を重ねる度に、身体能力が上がる。

超不幸体質：マイナス方面で、幸運ランク測定不能スリープラス。

血液操作：他者や自分の血液を操作出来る。

名前　近衛（コノエ）　薫（カオル）

年齢　１４歳

容姿　木乃香似で、眼鏡をかけてる。

ステータス（Ｆａｔｅ風／（）内は雷帝状態）

筋力　Ａ（ＥＸ）　耐久　Ａ（ＥＸ）　速度　ＥＸ　魔力　Ａ＋＋（ＥＸ）　気力　Ａ＋＋（ＥＸ）　幸運　ＥＸ（ＥＸ）

能力

烈火の炎の型：龍之炎壱式　崩、龍之炎弐式　砕羽、龍之炎参式　焔群、龍之炎四式　刹那、龍之炎伍式　円、龍之炎六式　塁、龍之炎七式　虚空、龍之炎八式　裂神の使用可能。

ＢＬＥＡＣＨの技：瞬歩や鬼道、破面の技を全て使える。

雷帝：怒りにより雷帝の力を引き出す事が出来る。

不老不死：修正版にて、カスミの願いにより、ある程度歳をとったらなる。

原作時に、発現してるかは不明。

私と吸血鬼と…俺と未来のマギステル・マギと…俺と二人の妹と…（２３／４／

ややこしいですが今回だけです。
次からは貴史で固定します。

私と吸血鬼と…俺と未来のマギステル・マギと…俺と二人の妹と…（２３／４／

▼　カスミ　視点▼

イギリス南部、私が生まれて十四年の時が経った。　すでに私は、吸血鬼となっており、流れ行く時を有効活用して魔法の研究をした。
そして幾年か時が流れ、世間ではいつの間にか金髪の魔女で大騒ぎになっていた。　私も容姿的に金髪だが、認識疎外の結界が働いてるらしく、標的はエヴァだけだった。

「やれやれ、あの子も大変だ」

まぁ、此処で傍観を決めこむのは簡単だ。　でも、それは私自身望む所ではない。
と言うわけで、結界の外へ出て噂の魔女を捜索する。

「とりあえず人里から離れた一軒家か、森あたりが妥当かな」

……

……

……

……

……

数時間、森を歩いてると、古びた小屋を見つけた。　すぐさま気配を探ると、人の気配があった。
当たりかな？　と、思い小屋へ徐々に近づいていくと、小屋の中に居た女の子が私の存在に気付き、小屋から飛び出してきた。

「ありゃ。　むぅ……」

飛び出してきた女の子は、私の横を通り過ぎようとするが、私は女の子に向かって手を伸ばし捕まえた。

「つっかまえ～た」

「放して～」

私を捕まえに来た人間と同じと思ったのか、必死に抵抗をするエヴァ。
なんというか、可愛いくて軽く死ねる。

「あ、あなた、いっ「居たぞー」は、離して…」

「ん～やだ」

「っ…」

私がエヴァを捕まえたまま歩いてると、私達を見つけた人が追い付いてきた。　エヴァは、私がこのまま彼らに自分を渡すと思ってるのか、絶望に染まった顔をして諦めていた。
私を殺そうとしないのは、もう逃げる事に限界を感じたのか、それとも魔力が尽きて殺せないかのどっちかだろう。

「君、そいつは魔女だ。　こっちに渡してはもらえんか？」

「……」

まぁ、私はアレにエヴァを渡そうとは思ってないんだけどね。
私は孤独を知ってるから……あの冷たい闇の中を知ってる。　だから私は彼女を助ける。　貴史が助けてくれたように……。
「サギタ・マギカ」

「「えっ」」

――ズガガガガガガガガガガ…

私は彼女を捕らえに来た男に向けて、手を伸ばし無詠唱で魔法の射手を連続に放つ。
エヴァは目の前で起こった事がわからず、ただただ死体となった男を見ていた。

「私は、カスミ、カスミ・ヴェネーラ。　貴女と同じ真祖の吸血鬼よ」

「えっ！？」

私が名乗ると、エヴァは驚いたような顔をする。　うん。良い顔だなぁ。

「貴女は？」

「私……？」

「名前」

「……エヴァンジェリン、エヴァンジェリン・マクダウェル」

エヴァを放してエヴァの名前を聞くと、すこし考えたあとちゃんと教えてくれた。

というか、まだA・Kはついてないんだ。　それとも隠してるだけ？　まぁ、いいか。

「じゃあ行こうか。　エヴァ」

そう言って、私はエヴァに手を差し延べる。

「なん、で？」

「ん？」

「なんで……私に優しくするの？　私は……ん！」

私は最後まで言わせないように、エヴァの口に人差し指を当てて止めた。　エヴァは私をジッと見る。

そんなエヴァに私は……

「貴女は私と似てるから……孤独の辛さを知ってるから……だから、助けるんだ」

私の言葉を聞いて、エヴァは私に勢いよく抱き着いてきた。　そして、小さな……本当に小さな「ありがとう」という感謝の言葉が、

エヴァの口から聞こえた。

▲　カスミ　視点▲

時が流れ場所は変わり、視点は元剣崎　貴史。

▼　貴史　視点▼

俺がこの世界で生を受けて、五年の時が流れた。　家はなんの変哲もない一般的な家庭で、魔法も知らずにただただ同じ日々を過ごすだけの家庭。

だが俺は違う。　生まれてから、前世の記憶を持つ俺は森で結界を張り、魔法の練習に明け暮れていた。　独学でな……

というか、前世の記憶があることに正直驚いた。　おそらく、薫が屑（神）に頼んだのだろう。　まったくあいつには、頭が上がらないな。　薫はよく俺が見落とした所は、気付いてさりげなくフォローする。

霞は転生前のある出来事から、俺の行動とか意志が正義……とまでは行かないが、まぁ……依存してる。　俺の自惚れじゃなきゃな。

だから薫には、いろいろと助けてもらってる。

「今日も張り切ってやるか」

さて、長ったらしい説明は終わり！　修行修行っと……。

俺はいつものように、森一帯に結界を張って修行を始めた。

まずやることは、魔力のコントロールから……。

眼を閉じて、体内にある魔力を徐々に表へと出す。　そして、一カ所に魔力を集束させる。　そのあとは、一カ所に集束させた魔力を移動させる。

頭から首、首から右肩、右肩から右の拳と……そして、右の拳からまた戻って右肩、右肩から左肩へ、左肩から左の拳へ、また左肩へ戻す。　次に左肩から腹、腹から右足と……これを数分続ける。

数分後、魔力のコントロールを終えて、次にやるのが召喚。　喚ぶのは屑（神）から貰った神獣騎。

「来い。海星剣皇！！」

手を空に掲げて叫ぶと、七色の炎が溢れ出し神獣騎が召喚される。

『オオォォォォ…』

「行くぜ…突神魔法、蒼斗彗星（ソラトスイセイ）」

喚び出した海星剣皇の背に跨がり、神獣騎の魔法を使う。

――ヒュゥウウウ……ン、ズガガガガガガガガガガン！！

海星剣皇は空を駆け、そして急降下して地面に激突する。　木々は吹き飛び、大地には綺麗なクレーターが……

「うわぁ…やりすぎた…」

どうしようかねー。　この惨状。

――キンッ！

「ん？」

半壊した森をどうやって戻そうかと考えていたら、結界内に侵入してきた者がいた。　俺はすぐに侵入者の所へ行くと、そこには同い年ぐらいの少年がいた。

「やぁ、少し聞きたいんだけど……これは君が？」

「まぁな」

「どうやって？」

「どうやってって……魔法の実験と修行だな」

「実験と修行？」

「俺は誰にも負けないくらい、強くなりてぇんだ」

それからも少年の質問というより、問い掛けに答えた。

「自己紹介がまだだったね。　僕の名前はコウキ。　君は？」

「俺は、貴史」

こうして俺は、当初の目的に達成した。

剣崎　貴史の目的……マナ・アルカナ（龍宮真名）に出会う事。
その為には、コウキと言う名の魔法使いに会う事。

▲　貴史　視点▲

さらに時が流れ、場所は京都。　視点は貴史から薫へ。

▼　薫　視点▼

私、近衛　薫が生まれて四年。　妹の木乃香と刹那と三人で遊んでいた。　遊んでいたんだけど……

「このちゃん！！」

「木乃香！！」

「せっちゃん、お姉ちゃ～ん」

「ほなこの嬢ちゃんは、もろうていくで」

そう言って、鬼は木乃香を抱えて立ち去る。　私は刹那を護りながら、残った鬼達と対峙していた。
何故こんな状況に陥ったかっと言うと、数分前……私達が遊んでいたら本山の結界に侵入してくる者を察知して、二人から離れ侵入

者の下へ向かったら、そこには沢山の鬼達がそこにいた。
すかさず私は鬼道と炎術を用いて、鬼達を還していたが、鬼の数が思ったよりも多く、短時間ですべてを還す事が出来なかった。
そのせいか私が居ない事を気付いて、刹那と木乃香が私を探しに来て、状況が悪化した。
一体の鬼がやって来た木乃香を捕まえると、最初の台詞を言って立ち去ったのだ。

なんというか、悪い事はどんどん重なると言うけど……何も此処までしなくても良かったのに……。
まぁ鬼達の目的は、あの口ぶりからすると木乃香だったのだろう。

「このちゃんが……」

「……」

「えっ!?」

「ちょう静かにしてな?」

私が刹那の眼を左手で遮り、右手の人差し指を突き出して、刹と言う字を宙に書く。

「来(き)いっ!!　刹那!!」

私が竜の名前を言うと、私の後ろに火の竜が現れる。

「キシャァァアアア!!」

「「「「「!!!!!」」」」」

火竜の声に震える刹那、そして火竜の姿を見て驚く鬼達。　そして、私は火竜に眼を向けてる鬼達に、死の先刻を言う。

「瞬炎…」

次の瞬間、火竜の頭から一つの大きな眼が開かれ、その眼を見た鬼達は一瞬にして燃え上がり、悲鳴をあげて還っていった。
そして私は瞬歩で、木乃香を掠った鬼に追いかける。

「なっ！！」

「砕羽…」

一瞬にして鬼に追いつくと、鬼が私の気配に気付いて、驚きの声を上げる。
しかし、今更気付いても遅すぎる。　すでに、鬼は私の間合いにいる。
すぐに砕羽を呼び炎の剣で鬼の首を跳ねた。　そして、鬼の身体が倒れる前に気を失っていた木乃香を抱えて、屋敷へと戻った。

「ふぅ……無事で何よりや」

▲　薫　視点▲

俺とコウキと少女（２３／４／２８修正）（前書き）

他の作品達の更新はまだ待っててね

俺とコウキと少女（２３／４／２８修正）

▼　貴史　視点▼

コウキと出会ってから七年、俺達はコンビを組んで紛争地域を渡り歩いていた。　目的？　当然、紛争を納める為だが？

俺達は、紛争地域を着実に納めて行き、世間では有名人となっていた。

「貴史と出会って大分経ったな」

「なんだ？　年寄り臭い」

「ははっ…だけど事実だろ？」

「まぁな…あれから七年か」

俺達は旅の疲れを癒す為、宿を取ってそこでコウキと昔話に華を咲かせた。

「…気付いてるか？」

「あぁ、有名になるもんじゃないね」

「そうだな…」

折角、話が盛り上がっていた所なのに、それを水差すとは……頂

けねぇなぁ。

俺達が、周りに分かるように警戒し始めると、気配が動き出した。

（コウキはドアを俺は窓を）

（了解）

手早くアイコンタクトで担当場所を指示し、コウキは静かにドアの前に行き、俺はその場で、ジッとする。

一瞬の静寂が場を包む、風が窓を震わせガタガタと鳴り、室内まで風の音が聞こえた。

そして……

――ギシッ

、床が軋んだ瞬間、ドアは蹴り飛ばされ窓から暗殺者みたいな格好をした人が、複数人入って来たが……

「蛇咬（スネークバイト）！！」

「はぁぁあああっ！！」

俺達は一瞬の内に、襲撃者を無力化した。　ふむ、俺はともかくコウキの奴……魔法を使わず、体術で無力化するとは流石俺の相棒だ。

「彼らはなんだろう？」

「どっかの組織の連中だろ？　とりあえず、生きてる奴は縛って拷

問だな」

「そうだね」

俺達は気絶した奴らをロープで縛り、冷水をおもいっきり被せた。

「ケホッゲホッ……」

「耳障りだ」

――ガッ、ドスッ、ゴリッ！

服を掴み床に叩き下ろし、頭を踏み付けると、なんかこう目覚めてはいけないモノに目覚めそうだ。　相手が男だから目覚めんがな……。

「聞きたい事がある」

「誰が貴様なんかに、答えるものか！！」

おやまぁ、反抗的だねぇ。　自分の立場というものを理解させなくては……。

腕を掴んで後ろに持って行き、肩に足を置いて一気に踏み抜く。

――バキャッ！！

「ぎゃあああぁぁぁぁぁぁあああああああ！！」

「答えろ」

「ぐっ…話すものk」

――グシャッ!!

「ぐぎゃぁぁあああああああああああ!!」

いまだ反抗的な態度を崩さない男に、今度は持っていた腕を握り潰す。

「言ってくれるか?」

「く、…ぅ…ぁ……ぐ…」

どうやら痛みに悶えてるらしい、暫く待ってやる事にした。

……

……

……

……

数時間後、既に日付は変わってる。

そろそろ、寝たいという気持ちを押し殺して、再度俺達を襲った奴の素性を聞く事にした。

「で?　あんたら誰よ?」

「……」

「言わないなら仕方ない」

「わ、わかった言う、言う」

軽く脅そうと、次にへし折る骨を考えようとした時、ようやく口を割ってくれた。

まったく、余計な手間を取らせやがって……。

そして、男は話始めた。

この辺りは紛争が鎮静化してるが、また紛争の火が燃えるのは、時間の問題らしい。　そこに紛争を問答無用で納めてる俺達が来て焦り、紛争を引き起こそうとしてる代表に雇われ、俺達に襲ってきたらしい。

まぁ、俺達が此処へ来たのも紛争の再発を抑える為だし、ちょうど良いかな。

「んじゃ、行きますか…」

「じゃあ、僕はこいつらの雇い主の所に……」

「なら俺は相手側の所だな」

「死ぬなよ。　貴史」

「最強無敵の俺が、死ぬわけないだろ」

「ハハッ」

そして俺達は別れた。

……

……

……

走って数分後……首領館前に到着し、門番を無視して通過しようとするが……

「何者だ」

門番二人が、俺の前に槍を交差して通せん坊をした。

「三下に用はねぇよ。　用があんのは、戦争をおっぱじめようとしてる……テメェらの親玉だ」

「貴さゲラパッ」

「ゴガァッ」

一瞬の内に、二人の門番を気絶させて、堂々と館に入っていく。

そして数時間もせずに、俺は館から出た。

「けっ…つまんね」

俺はそうぼやいて、コウキと落ち合う場所へ、向かった。

俺が落ち合う場所に行くと、コウキがマナに似た少女と、楽しく雑談をしていた。

俺は頑張って仕事してるのに、コウキは美少女とお話か……良い御身分だなぁ……オイ。

俺がコウキ達に近付くと、少女が俺に気付き敵意を剥き出しで、銃を向けてきた。そして、コウキもこっちに気付く。

「マナ、そいつは僕の仲間だよ」

「偽物かも」

――ピキピキ。

「いやぁ、それはないって」

「油断大敵」

「ん～そこまで言うなら、証拠を見せるよ」

そう言ってコウキは、俺に向かって質問してきた。

「君の名前は？」

しかも本気で、疑いの眼差しを向けながら……

――ビキビキ…。

「ハッ倒すぞテメェ…」

「答えない。不審者」

俺の返事に少女は俺を不審者と決めつけ、銃をぶっ放すが俺はそれを軽々と回避していく。

つか、マジで撃つとか……

「避けるな！！」

「ざけんな！！」

「アッハハハハ」

――ブチッ

コウキが笑い出した瞬間、俺の中のなにかがキレた。

「コォオキィィイイイ！！」

そして俺は、感情のままに蛇咬（スネークバイト）を放った。

「きゃっ！！」

「おわっ！！」

「覚悟は良いか？　ァァン？」

「お、落ち着けって、ソレは洒落にならない」

――ガタガタガタガタ

コウキは俺を抑えようとし、少女は俺の怒気に肩を震わせていた。
少女のそんな姿を見て、俺は怒りを抑えたが尚もガタガタと震えが止まらない。

まぁ……一度知った恐怖は、早々拭い去れねぇか。

「……チッ後は頼んだ」

俺は罰が悪そうにコウキに、少女を任せてその場を立ち去る。

数分後、コウキだけが俺の所へ来た。

「悪かったね」

部屋に入って早々、本当に申し訳ないとコウキが謝ってくる。

たく……謝るくらいなら、最初っからするなっつーの。　まぁ、
それをぐちぐち言っても仕方ない。　過ぎた事だしな。

「別にいいさ…で、あいつは？」

「寝てるよ」

「そうか……」

「最強無敵の貴史様も女子供には勝てない？」

「……ケッ」

長い付き合いだから解る事。　俺は女子供には、どうしても甘いらしい。　キレる事はあっても、危害は加えない。　まっ常識だろ？

「それより、あいつはどっから拉致った？」

「拉致とは酷いなぁ。　向こうの館で知り合って着いてきたんだよ」

着いてきたねぇ。　ま、いいか。

「あいつの名前は？」

「本人から聞いてよ」

「……完全に恐怖の対象だぞ？俺」

「大丈夫でしょ」

「……はぁ…」

こいつのお気楽ぶりには、溜息もんだな。　まぁ、大丈夫と言う

なら、大丈夫なんだろうけど。　とにかく起きたら、聞いてみるとするか。

俺はベッドに横になり、コウキにおやすみと言って、そのまま意識を闇に落とした。

その時、俺自身眠たかったのか、コウキの眼がピキーンと、光ったのを見逃していた。

俺とコウキと少女（２３／４／２８修正）（後書き）

この小説のストックが無くなってきてる。

せっかくの時間稼ぎが……。

俺達とスカウト（２３／６／６修正）（前書き）

くそっ！！ストックが！！

「まだ書けてないのかよ？」

携帯で長文は疲れんだよ！！

「情けない…」

だがまだ二つは……

「間に合うといいなぁ」

くそぅ…この主人公も
作者に厳しいぜ！！

俺達とスカウト（２３／６／６修正）

▼　貴史　視点▼

日が昇り、俺は深い眠りから一気に眼が覚めた。
何故か？

それは眼の前に、少女が居たからだ。
その上、俺は少女を抱き枕代わりにしているし……。

何故、此処に少女が居る？
どうして俺は少女を抱きしめてる？
わからない、わからない。
なんだこれは？

いまだ抱きしめてる腕を退かさずに、俺は混乱した頭のまま考えてた。

「ん……すぅ…すぅ…」

「！！」

考えていた俺は少女の寝言（？）で、起こしてしまったのかと、一瞬びくつくがそれが、それが杞憂だった事に安堵する。
そして俺は少女の寝顔を、ずっと眺めていたんだが……

「……ん……」

「……」

「……む、むにゃ…zZ」

「無理に寝たふりすんな」

「うっ……」

やっぱり起きてたらしく、少女は顔を赤くして寝たフリをしていた。

顔が赤くしてたのは、寝顔を見られて恥ずかしかったのだろうな……。

昨日の対応なら、銃をぶっ放すと思っていたが……。

「おはよう」

「お、おは……よぅ…」

一応挨拶をしたら驚いた事に、挨拶を返してきた。

てっきり怯えたり、拒絶したりすると思っていたが、案外根性あるんだな。

まぁ拒絶するなら即座に、俺を跳ね退けたり、叫んだりするだろうがな……。

「なん、で私、此処に？」

「知らん」

「……なんで…抱きしめてるの？」

「抱き癖があるんだ…」

「……昨日は…ごめん」

「謝るタイミング違う！　とりあえず、昨日の事は気にしてない」

短いながらも会話をして、だいぶ気を和らげて、ようやく俺は少女に名前を聞く事にした。

「俺は貴史。お前は？」

「……コウキから聞いてないの？」

「お前に聞けって、言ってたぞ」

「……そう……マナ」

やはり少女はマナだったらしく、俺は心奥底で微笑んだ。

第二フェイズ完了っと……クックックッ

「そうか。　よろしくなマナ」

「ん、よろしく」

俺は抱きしめてる腕を退けて、起き上がり部屋を出てコウキの部屋へ向かった。

「すやすやｚＺ」

コウキの部屋に入ると、コウキは幸せそうに寝ていた。
そんなコウキに、軽く殺意を覚える。

「おい」

「ん～…すやすやｚＺ」

「起きろ」

「もう…食べれないｚＺ」

「……お・き・ろ！！」

「いでででで」

典型的な寝言をほざく、コウキの頬をおもいっきり引っ張り、コウキを叩き起こす。

「お、おはよう」

「おう」

「で、何かな？こんな時間に」

「わかってんだろ？」

「え、えっ？」

「なんでマナが俺の部屋にいんだ？」

「あぁ～…マナが……寝ぼけて入ったんじゃない？」

ほほぅ、惚(とぼ)ける気か……。

だけど、こちらには強力な味方が居る。

つい先程、仲間になった……な♪

「私は夢遊病なんてない」

「マ、マナ！！」

「「コウキ…覚悟は良い（か）？」」

マナは銃をコウキに向け、俺は剣をコウキに向けて、コウキは乾いた笑いをしながらベッドを出て、俺達と距離を取る。

だが

俺達二人に距離は関係なく、コウキのお仕置きを始めた。

――バンッバンッ！！　ドスッガスッゴスッ！！

「うわっとっげはっごはっぐはっ」

マナが牽制して俺が剣の腹で、コウキをボコボコにするという、即席にでも簡単に出来る連携でコウキを罰した。

そしてコウキの罰を終えて、俺達はマナに小、中、高の教養を教えつつ、銃の扱いをレクチャーしたりといろいろ教えた。

銃のレクチャーとかに、コウキは一時反対はしたもの渋々と言っ

た感じで、了承を得た。
さらにマナには銃というか、遠距離系の武器の才能があるらしく、メキメキと銃の扱いに慣れていった。

マナにいろいろ教えて二年半、俺達はマナと戦場を駆けていた。
そして今日泊まる宿を探していたら、俺達の眼の前にＮＧＯ団体、「四音階の組み鈴（カンパヌラエ・テトラコルドネス）」の使者が現れた。
どうやらその使者は、俺達に用があるらしく俺達に話し掛けてきた。

話の内容は、俺達三人を自分達の団体に引き入れる事。
所謂（いわゆる）スカウトだな。
俺達は三人で話し合い、そして数日後、俺達はＮＧＯ団体に入った。

▲　貴史　視点▲

俺達とスカウト（２３／６／６修正）（後書き）

カスミ「私の能力はなんか華がないよね？」

貴史「ああ～確かになぁ…」

薫「身体向上に直死だけ…
確かに派手なのがないね」

カスミ「作者～私の能力に
派手なの付け加えてよ」

チート能力をまだ欲するか！？
なんて強欲かつ貪欲な主人公なんだ！？
絶望シタ！！

カスミ「なんでもいいからつけろ♪」

ん～読者に聞いてみようかな。

カスミにチート能力を付け加えても良いと言う方はカスミまで連絡して下さい！！

カスミ「えっ？なんで私？
感想板あたりで良くない？」

さらば！！

カスミ「もしかして付ける気ない！？」

ヒャッホー↑カスミから充分離れてる

カスミ「……」

にっげろー！！

カスミ「メテオー――――！！」

へっ？

《ドッカンドッカンドッカン…》

ぎょわぁぁぁあああああああ…

俺の罪と俺への罰と（前書き）

今回正直…目茶苦茶…
時間が飛び飛びなんは、早く原作に行きたいからです。
ではどぞ

俺の罪と俺への罰と

ＮＧＯ団体に入って三年半、コウキは夢にまで見た、立派な魔法使い（マギステル・マギ）となり、マナは原作通り、コウキのミニステル・マギとなって、コウキを支えていた。
また、狙撃の腕も良く、裏世界で名を轟かせていた。

俺はと言うと、ＮＧＯに入ってから、コウキとマナのサポートしかしていない。
サポートと言っても、マナが全部やるので、実質俺は何もしていない。
それ故に回りからは、「怠け者」など言われてる。

「コウキを見習え、給料泥棒、役立たずねぇ」
「どうした？」
「いや、ちょっとね」
「……そう、か…」
「あぁ…」

俺は、コウキを利用してるだけ…。
昔はこの考えに、嫌悪感も罪悪感もなかった。
だけど一緒に行動していく内に罪悪感が、嫌悪感が募ってきた。
それが苦しかった……。
そんな中、上から任務がきた。

「ミスタ・コウキ、ミス・マナ、
ミスタ・タカシ、以上三名は、
直ちにある魔法使いを捕獲してくれ。彼は危険だ。」

「「はい」」
「それと…ミスタ・タカシ」
「？」
「この任務でなんの活躍を見せなければ
ＮＧＯから抜けてもらう。」
「！！」

上司の言葉に反応したのは、コウキだった。
コウキは、異を唱えたが、役立たずを、雇う金はないと豪語され、
コウキは苦々しそうに黙った。

「…私は構いません」
「マナ！！」
「コウキも私もこんな使えない
サポーターは要りません」
「ミス・マナはわかってるじゃないか」
「しかし、「いいよ。コウキ」！！！…貴史」

未だ異を唱えようとするコウキを止めて、俺は部屋を出た。
マナが俺を役立たず扱いするのは、俺にやる気が無いことに、勘付いてるのだろう。
部屋で出撃の準備を終えると、コウキが俺の所に来た。

「…貴史。何故本気を出さない？
君が本気でやれば評価だって！！」
「…」
「今回だけは…庇えない…ぞ」

そう言って、コウキは立ち去った。
一人残った俺は、ポツリと言葉を漏らす。

「出せるわけねぇーだろ…本気なんざ」

その言葉は、誰の耳にも届かない。
貴史の頭に残るのは、今でも鮮明に覚えてる。
マナの震える姿と、怯えた表情でこちらを見てくるあの眼……。

化け物を見るような眼だった。

北極、此処に魔法使いが逃げたと、報告を受けて俺達は北極の地に下りた。
暫く歩いてると、大きな魔力を感じ、直ぐさま魔力のする方へ、駆けていった。

俺達が着いた頃には、巨大な魔法陣の上に、立つ一人の魔法使いが居た。

「く、来るな!!」
「僕はＮＧＯ団体所属の者だ
君を捕まえに来た」

ターゲットの魔法使いは、魔法の射手で、俺達を威嚇しながら魔法陣に魔力を、流し始めた。

「!!」

コウキ達は、回避運動を行い距離を取るが、俺は魔法陣に、魔力を篭める魔法使いを、止めようと前に出た。

「貴史！！」
「！！」
「やめやがれぇえええ！！」

コウキとマナが、俺の行動に気付き、コウキが俺の名前を言う。
二人から見て、俺をどう捉えたのかわからない。
いや、おそらくは焦って手柄を取る為の行為だと、思ってるだろう。
だが違う。

俺は知ってる。
あいつの上に立つ、あの魔法陣はヤバイ代物だと…。

「ふ、ひひ…もう遅い！！」
「！！」

魔法陣が輝き出し、中から現れたのは、魔神と呼ぶに、相応しい姿をした悪魔だった。
悪魔は術者を殺し、自身の贄として、完全に、この世界に現れた。
そして、悪魔は腕を振り、一瞬にして俺の意識を、刈り取った。

何日？…否…日にちが経過したら、地球はない。
なら、何時間？…これも否、あいつなら1時間もしない内に、この

世界を消してる。
なら、何分?…否、1分あれば、俺は海の藻屑となってる。
なら、秒?…妥当だ。

俺の意識が徐々に浮上し、起き上がると、そこには血を流しながら、
マナを守るコウキの姿が居た。
致命傷を受け、大量の血を流し、それでもマナを守っていた。
俺は近くまで行き、結界を張り、魔神を閉じ込めた。

「やぁ…」
「コウキ…」
「貴史……コウキが…」
「貴、史…何を…悩ん…
でるか、知ら…な、い…」
「……」
「だけ、ど…お前が…
本気を出せ……ば、
救えない…者は、居ない。」
「駄目!!喋っちゃ…」
「頼む、…俺が…憧れた、
お前の力……見せ…れ」

マナがコウキを、喋るのを止めるが、コウキは喋る。
俺（希望）に縋るように……。

「……ああ。」
「あり、がと……マナを頼む
あい、ぼ……。」

俺は静かに答えると、コウキは、満足したのかゆっくりと眼を閉じ、

何も言わなくなった。
マナは眼に涙を貯め、コウキの名を呼ぶが、コウキは全く反応しない。
それで現実を受け入れたのか、貯めていた涙を、一気に流し、マナは泣き叫んだ。

「……」

俺はマナの前に立ち、マナを守るように、マナに攻撃が行かないように立った。

「貴、史？」
「……」

涙を流し続け、声を震わせてマナが俺の名を呼ぶ。
だがその声は、俺の耳に届かなかった。
俺は、コウキとの思い出を思い出しながら懺悔した。

コウキ、俺はお前を利用した。
ただ自分の為だけに、お前に近付いた。

マナと出会う為に、お前が近い内に、死ぬ事を知っていた。
それを利用して、マナの隣に居て、慰め手に入れようとした。

順調だった。

お前は死に、マナは今悲しみに支配されてる。

ああ、計画通りだ…。

一つの狂いもないよ…。

だけど…

だけどな…

望んだ事なのに…

悲しみが…怒りが…

込み上げてくる。

嗚呼、そうだ。

俺はコウキを利用してたけど、お前を仲間と認めていたんだ。

だからこそ俺は自分を許せなかった。

コウキを護れなかった俺が…

仲間を利用した俺が…

許せない。

魔神が結界を破り、こちらへ向かって腕を振るう。

俺はただのパンチで、魔神の腕を弾く。

あいつは俺の意識を刈り取った

にも関わらず簡単に弾けた。

それが許せなかった。

あいつごときに、意識を刈り取られた、俺が許せなかった。

あの程度相手にコウキを守れなかった、自分が許せなかった。

その程度でコウキを殺した、あいつが許せなかった。

俺は怒りを篭めて、ある呪文を唱える。

「今こそ：汝が右手に
その呪わしき命運尽き果てるまで
高き銀河より
下りたもう蛇遣い座を宿すものなり

さすれば、我は求め、訴えたり、
喰らえ――その毒蛇の牙を以て！！」

その呪文は最強の呪文。
そしてあるモノを解き放つ呪文

「汝が神に、我が身を、捧げん！！」

最後の呪を読み上げると、自分の右手に、悪魔の腕が解放された。

「っ！！」

マナが息を呑む気配が伝わる。

マナを見る事が出来ない。
マナの顔が眼が俺を拒絶してないか、確かめるのが怖かった。
だから俺は魔神に向かった。
逃げるように…

魔神が腕を振れば、俺は悪魔の腕で、魔神の腕をもぎ取る。

魔神が魔力砲を放つが、俺が悪魔の腕で、砲撃を切り裂き消し去り、
悪魔の腕による、純粋な技は確実に、魔神にダメージを与えていた。

そして最後の一撃。

「オオォォォオオオオ！！」
「蛇殺（スネークジェノサイド）！！」

魔神の頭を砕いた。

魔神との戦闘が終わり、辺りを見ると、悲惨な光景が眼に入る。
あちこち氷が砕けていて、海や氷が、魔神の血に染まってた。
一言で言うなら地獄だった。

暫くして救助のヘリが来た。
俺はそれを見て、マナに背を向け立ち去った。

「貴史っ！！」

マナが俺を呼び止めるが、俺は足を止めず、その場から居なくなった。

俺の罪と俺への罰と（後書き）

あらゆる不幸を引き寄せるでどうよ？

カスミ「自分…あれやろ…
死にたいんやろ？
なんで私がんなチート欲するかい！！」

いや…だって……ねぇ…

カスミ「確か案だしたんは…
桜井舞人やったか？」

一応先生くらいはつけとけ…
あっちももの書きだぞ

カスミ「一辺シバいてくるわ
貴史～次元切り裂きよろしゅ～」

貴史「キャラ変わってね？」

カスミ「えぇから…はよせぇ」

逃げてぇ舞人氏ぃいい！！

貴史「……」

《次元を切り裂く》

貴史「うん……出来た」

カスミ「よし行こうか…」

貴史「俺もか～？」

カスミ「帰りも頼むよ」

《Ｉｔ　ｉｓ　ｃａｌｍ　ａｎｄ　ｉｔ　ｉｓ　ａ　ｐａｓｓｉｏｎａｔｅ　ｍａｇｉｃ　ｂｏｙ.のあとがきらへんに乱入》

……止めれなかったなぁ…

うん…私、何も見てない。

私とあの頃の夢と（前書き）

ドーゾー

私とあの頃の夢と

真名視点

コウキが死んでから、1年が経った。
今でもあの頃の夢を見る。
私とコウキと彼の夢を…

当時、私はコウキが好きで、彼の事が嫌いだった。
コウキは受ける任務をこなし、私はコウキの補佐をしていた。
でも、彼はただ私達を見てるだけだった。
私は注意するも、コウキが彼を庇う。

「あいつなりに何か
考えてるんだよ」と…。

そんなわけないと私は言うけど、コウキは困ったような笑みを浮かべ頭を撫でてくる。
それで私は何も言い返さなくなった。

何故コウキは、彼を庇うのか私は、コウキに聞いてみた。
するとコウキは……

「あいつは俺の憧れなんだよ
そして俺の理想。」

と、口にした。
正直、信じられなかったけど、コウキの目は羨望や期待に満ちていた。

羨ましかった。
コウキに此処まで言わせる彼が、そして腹が立った。
コウキの期待に応えようとしない彼が、許せなかった。

ある日、ある任務が言い渡された。

それはある魔法使いの捕縛だった。
そしてその任務で彼の活躍が見れない場合は、団体から外すというものだった。
コウキは反対してたけど、私は賛成した。
彼と組むのは、もう限界だったからだ。
上司の言葉に、尚もコウキは反対する。
そんなコウキに怒りが込み上げてきた。
何故そんな奴を未だ庇うのか。
私がコウキを黙らせようと口を開くが、彼が先にコウキを説き伏せて、この話は終わった。

そして、私達はターゲットを捕まえる為、北極の地に下りた。
情報では此処にターゲットが居るらしい。
魔力を辿って行くと、すぐにターゲットを捕捉した。
魔法使いは私達に気付くと、魔法の射手で牽制をしてきた。
私とコウキは後方へ跳んで回避するが、彼は魔法使いへと走って行った。
焦って手柄を取りに行った行動だろうと、私は思った。

迷惑な話だ。本当に彼は……。

次の瞬間、空気が重く圧し掛かった。
魔法使いが立つ、巨大な魔法陣から黒く大きな腕が現れ、その魔法使いを握り潰した。

魔法使いが絶命した事により召喚は完全な物となり、陣から魔神と呼ぶに相応しい、悪魔が現れた。

あの頃の恐怖は今でも覚えてる。
心の底から震え上がり、身体に力が入らず、頭には死への恐怖が支配していた。
魔神が腕を振るうだけで、私達は吹き飛ばされた。

衝撃に備え覚悟を決め、目を強く瞑ってると、いつまで経っても衝撃が来なかった。
いや、正確には多少、衝撃があったくらいだ。
目を開けると、そこには私を抱き庇うコウキだった。
コウキは今にも死にそうな傷を負い、それでも目には強い輝きがあった。
あいつを倒す事を諦めない、強い輝き……。

どうして?

どうして、そんな瀕死の状態で、尚も諦めてないの?

どう足掻いてもアレには勝てないのに…。

「それは…ね…信、じて…から」

信じてる?何を?誰を?

「相棒を…」

どうしてそこまであいつを信じてるのか、わからなかった。
あいつは何もせず、ただコウキについてくるだけの存在。

現にあいつは間近で吹き飛ばされたんだ。
生きてる筈はない。
例え生きていて、あいつが強くても、アレには勝てない。
アレを倒すのは人じゃ無理だ、魔神みたいな存在が、たかがいち人間に倒せる筈ない。
また、魔神が腕を振るうと、今度こそ私は覚悟をした。

死への覚悟。

だがまたいくら経っても衝撃が来ない。
目を開けるとこちらを見てる彼が居た。

「…、……」

私は驚きのあまり目を大きく見開いていた。
彼は魔神の近くに居た。
魔神に吹き飛ばされれば、コウキみたいに瀕死の状態の筈。
だが彼の身体は無傷だった。
服こそボロボロだったが身体に、一切傷が見当たらなかった。
私は彼を見ていた。
暫くして私を庇っていた、コウキの身体が冷たくなっていくのを身体で感じていた。

「コウキ?」

何度かコウキの名前を呼ぶも、一向に動く気配がない。
それどころか魔力や生気が感じられなくなった。
そして私は理解した。
コウキは、もう居ない。
コウキは死んだのだと。

そして私の目から涙が溢れ、身体の奥から悲しみが広がった。

私は声を張り上げ泣いた。
最愛の人が死んだ事に、魔神が未だそこに居るにも関わらず
涙が枯れるまで
悲しみが枯れ果てるまで
暫くして心に深い虚無感が広がった。
悲しみは虚無が飲み込み、身体は疲れ果て声が出せなくなる。
音が無くなるのを、合図に魔神が動き出した。

魔神が腕を振ると、激しい衝撃と共に魔神の腕が弾かれた。
何が起きたかわからず、隣を見るとそこには、彼が静かに怒っていた。
それは幼い私でも感じ取れる。
冷たくて、でも熱くて、魔神に対して、自分自身に対して怒っていた。
そして、彼は小さくそれでいて力強く、呪文を唱えだした。

「今こそ…汝が右手に
その呪わしき命運尽き果てるまで
高き銀河より
下りたもう蛇使い座を宿すものなり

されば、我は求め、訴えたり、
喰らえ――その毒蛇の牙を以って」

それは今まで聞いた事のない呪文。
彼の回りに…いや、此処一帯に、蛇の姿が映し出されていたが、すぐに消え彼の右腕に魔力が集中されていた。

「汝が神に、我が身を、捧げん！！」

最後の一文を読み上げた瞬間、彼の右腕が悪魔のような腕となった。

「っ！！」

怖かった。

これがあの腕の最初の印象。

私の怯えた感情に察してか、否か、彼は魔神に向かって駆け出した。

そこからは、圧倒的だった。

魔神の腕を簡単にもぎ取り、魔神が放つ砲撃をいとも簡単に掻き消す。

彼の…あの悪魔のような腕は、確実に魔神を圧倒していた。

その戦い…いや、これはもはや戦いではなく、ただの虐殺。

この虐殺を見ながら私は、コウキのあの一言を思い返してた。

コウキの憧れ、コウキの理想、コウキが欲しかった力。

確かにあの力があれば、多くの人を救えるだろう。

でもそれは自分を孤独にする。

あれでは本当の悪魔だから。

あれは人に恐怖を与えるだけものだから。

それをコウキは知っていたのだろうか？

今はもうわからない……。

だけど…

今…やっと…理解した。

彼は、何もしないんじゃない。

出来ないんだ。

救うはずの人に恐れられるから。
彼から離れて行くから。
自分が孤独にならないよう。
本気になれず…

「オオオオオオオオオオオオ」
「蛇殺（スネークジェノサイド）！！」

長く考えてる内に、彼は魔神に止めを刺していた。
魔神が死（彼）を威嚇するも、彼の腕は魔神の頭を砕いた。
私達が居る場所は、血に汚れた氷しかない。
暫くしてＮＧＯのヘリが来た。
漸く、帰れると安堵し、彼の方へ向くがそこには誰も居なかった。

一人という現実が私の胸に突き刺さる。
コウキは、死んでもう居ない。
彼も……イナクナッタ。

不意に、私の意識が浮上した。
そろそろ目が覚めるのだろう。
空を突き抜け、深い闇を抜け、私は目を覚ました。

「ん…はぁ、またあの夢か…」

そうぼやきつつ時計を見ると、一瞬時が止まった。
時刻は０８：３０、今から用意して登校しても間に合わない。

「……はぁ」

ため息をつき登校の準備を始めた。

私とあの頃の夢と（後書き）

カスミ「よっと」

貴史「ふぅー」

おっ帰って来た。
どうだったよ？

カスミ「とりあえずは半殺し？」

抑えたな…

貴史「俺が程々にと言ったからな」

？「此処は一帯…」

貴史、カスミ「な！！」

舞人氏のキャラ…花菱叶君か…

叶「Σ何故僕の名前を？」

私なんでも知ってるから

カスミ「というかなんで此処に！？」

叶「空間が裂けてたので…」

貴史「勇気のある行動だな普通は入らんぞ」

叶「所で此処は？それに貴方達は誰ですか？」

私は秋代。此処はネギま！の世界さ

貴史「貴史だ」

カスミ「カスミよ」

叶「ネギま…？」

君からしてみると別世界だね

叶「Σ別世界！！」

貴史「ちょっと所用でそっちの世界で…な」

簡潔に言えば制裁？

叶「制裁って誰がです？」

貴史「……」

……

叶「？」

カスミ「桜井舞人よ」

叶「えぇぇっ！！な、なんで？」

あー…まぁ…うん…舞人氏に聞いてくれ。
一応生きてるらしいし

叶「は、はぁ…（一応…かぁ）」

貴史「そろそろ戻った方がいい」

裂け目が閉じたら帰れないよ

叶「それはいけない。……」

ん？どした？少年よ

叶「また…会えます？」

……

貴史「きっとな」

カスミ「ほれお土産じゃ」

《叶はねぎまの詰め合わせを貰った。》

叶「これは？」

カスミ「焼鳥のねぎま」

貴史「ネギま！とかけてみました。」

笑えねー…（ー_ー；

叶「ありがとうございます。
それではまた…」

《叶は元の世界へ戻った。》

……行ったな…

貴史、カスミ「…あぁ。」

さて今日来たゲストは
桜井舞人先生作
Ｉｔ ｉｓ ｃａｌｍ ａｎｄ ｉｔ ｉｓ ａ ｐａｓｓｉｏｎａｔｅ ｍａｇｉｃ ｂｏｙ.の主人公
花菱 叶さんでした。

貴史「普通最初に言わね？」

ハプニングがあったから

カスミ「あ、救急箱渡すの忘れた」

向こうで治療を受けるだろう

貴史「とりあえず…また会いたいものだ」

カスミ「そだね～」

カスミの能力はと…グフフッ

カスミ「おいおいキモいな
消してやろうか？」

すいやせんしたー！！

カスミ「闇の業火！！」

ぎゃぁぁあああああ

貴史「やはり最後は作者の叫びで終わるのな」

薫「それが此処のクオリティや」

カスミ「んじゃ」

三人「まったねー（な～）」

私と魔導師と交差する二つの世界と（再構）（前書き）

五万Ｈｉｔ記念

Ｉｔ　ｉｓ　ｃａｌｍ　ａｎｄ　ｉｔ　ｉｓ　ａ　ｐａｓｓｉｏｎａｔｅ　ｍａｇｉｃ　ｂｏｙ．とのクロスです。

私と魔導師と交差する二つの世界と（再構）

麻帆良学園、カスミ宅

「ふわ～…あ…」
「ケケケッ随分ト早ェナ姐御」
「チャチャゼロか、おはよう」
「オハヨウ、トコロデヨ」
「なんだ？」
「家ノ前ニ人ガ居ルゼ」
「……人？ふむ」

私は扉を開けると、そこには傷だらけの『女の子』が居た。

「……」
「……」
《助けてください！！》
「却下！！」

突然、刀を機械で作ったようなのが助けを求めてきた。
だけど私は快く断った。

《そ、そんな……》
「助ケテヤリャア良イジャネェカ」
「チャチャゼロがそう言うなら」
《！！あ、ありがとうございます》

よっぽど助けてもらいたいのか、嬉しそうにはしゃいでる刀。
うん、シュールだ。

というか、コレがなんで此処にあるんだろう？

「茶々丸～」

私は未だ部屋でスリープモードに
いるであろう従順な従者を呼んだ。
『女の子』をソファーに寝かせ、デバイスをテーブルの上に置いた。

「遅れて申し訳ありません。マスター」

茶々丸がこちらに来て詫びる。
詫びる程、待ってはないんだけどな～

「今日も綺麗だな…」
「あ、…ありがとうございます」

茶々丸の頬に手を当て、優しい微笑みで褒めると、茶々丸は顔を赤
くし、頭に蒸気が出る。
その表情…正直タマンナイ…

《あ、あの…》
「邪魔するな…
私と茶々丸の愛の時間だぞ」
「あぅ……！！」

私の言葉に蚊が鳴くような声で悶えるも、数秒で刀と怪我人に気付
いた。

「マスター…この方達は？」
「あぁ…朝家の前でぶっ倒れてた」

《お願いです！！
マスターを助けてください！！》
「マスター…私からもお願いです」

私に、許可を求めるように懇願する、茶々丸。
どうやら助けたいらしい。
私より怪我人を取るのか茶々丸よ。
助けを求めるデバイス。
マスター想いのいいデバイスだ。
茶々丸には負けるがな…。
『女の子』の様子を見てるチャチャゼロ。
そんなのより、私を見てくれチャチャゼロ。
未だに寝てるエヴァ。
早く起きて来ないかなぁ…エヴァ。

「助けてやれ…そのために呼んだんだ」
「はいっ！！」

弾けるような笑顔で、ハイ・リペア機能を展開して治療を始めた。

数分後

「どうもすみません」
「いえ」
《ありがとうございます》
「それで貴女達は誰？」
「僕は花菱叶と言います」
《私はマスターのデバイス月詠です》

なんだろう聞いた事のある名前だ。

私が考え事をしてると茶々丸を、口説いてる叶（カスミから見て）が目に入った。

なんだろう…殺そうかしら。

殺気を放ちながら叶を睨み付けると、私の殺気に気付いてガクガクと震え出した。

「カ、カスミさん？」
「君は今日から私の敵よ」
「なんで！？」
「茶々丸は私のなの勝手に口説くな」
「く、口説いてなんか…」
《……ι》

私の言葉に否定慌てて否定し、デバイスは呆れたように沈黙してる。

エヴァが起きるまで、私は睨み続けていた。

「それで叶は何故私の家に？」
「それは、転送ポットに入って転送しようとしたら、ポットが爆発しまして、多分それが原因じゃないかと」
「災難でしたね」
「ケケケケ爆発カオモシロソウダナ」

「「作るならマシなの作れ
安全確認は大事だぞ小娘」」
「僕は男だー－－－－－！！」
「「「「えっ」」」」

叶の魂の叫び？に一同目を疑う。
これが男？ありえんだろ。
まぁいい…性別なんぞ些細な事だ。
しかし、こいつどこかで……

「叶…お前どこかで私とあったか？」
「えっ？」

とても意外そうな顔で見てくる。
なんだ？その「覚えてないんですか」的な目は…絞めようか。

「僕ですよ？ほら焼鳥もらった」

焼鳥？…ふむ……
ポクポクポクポク…チーン！！
思い出した！！

「あぁ…あの時の」
「はいっそう「太郎くん」
誰ですかそれ！！」

ズサァァアアっと、ずっこける叶君。
からかいがあるな…少し遊ぶか。

「はっはっはっはっはっ

いやすまんすまん…
ちゃんと思い出してるよ叶」
「よかったぁ…」
「ところでカスミ…
ジジイには報告したのか？」
「あ…」

エヴァの言葉を聞いて、そういえばしてないやと気付く。
ぶっちゃけ、メンドイのだが、まぁ規則だ。
私は叶をからかうのを断念し、学園長室に行く準備をする。

「これから責任者の所に
連れていく用意しろ」
「あ、はい」

こうして私は学園長に、遅い報告をしに行く。

「おい、ジジイ」
「失礼しま…」

私と叶が入るとそこには、ぬらりひょんが居た。
叶はあの頭に驚いてるようだ。
そんなに驚いてると、断念していた遊びが蘇ってくる。

「どうした？」
「叶！！化け物退治だ！！」
「は、はい！！」

初めて見る人間は、アレを見れば、絶対に人間じゃないと思う。
寧ろ化け物と思うだろう。

そして叶は月詠を、展開し構えた。
私はニヤニヤと笑いながら、魔導の書を出してる。

「ま、待つんじゃおぬしら」

「命乞いか。
だが、問答無用!!行け!!叶!!」
「はい!!行くよ月詠」

そして叶君は私の言葉に、騙されマジで斬りに掛かった。

数分後

「アッハハハハハ」
「むー……」
「やれやれじゃ」

あれから、学園長が必死に叶を説得し、私が後ろで爆笑してる事から、からかわれたとわかり頬を膨らます叶と、肩をすくめやれやれと呟く、学園長の姿があった。

「そいで彼は誰なんじゃ?」
「ハハハッ…はぁ…はぁ…
えーと、そうだったな」

私は叶の事を包み隠さず話した。
別世界から来た事も、あっち側の魔法も全て。

「別世界、ワシらと違う魔法のぅ…」

学園長は叶に目をやると、叶は判決を待つ、死刑囚のように立っていた。

「あー、楽にしてよいぞ」
「あ、はい…わかりました」
「それで叶君…じゃったな」
「はい」
「別世界から来たらしいが
帰る宛てとかはあるのか？
もし無いのなら此処で暮らす事も」
「あ、あります
今、月詠に救難信号を出しています」
「そうか…それはよかった」
「ジジイ…叶の迎えが
来るまで家で預かるぞ」
「えっ」
「ふむ…わかった…
叶君の迎えらしき人が来たら
知らせよう」
「い、良いんですか？」
「私は構わんが
茶々丸を口説くなよ」
「そういう事じゃ」
「あ、ありがとうございます」

こうして叶の迎えが来るまで、私が叶を預かる事になった。
ちなみに迎えの人の名前を教えて貰った所、なんとあのジェイル・スカリエッティらしい。

何と言うか……いろいろと驚愕である。
それにしても叶が弱い。
弱い人間を見てるとこう…ねぇ。
ふむ、叶を鍛えてやるか。
あとこちらの魔法魔法を、教えるのも一興だな。

今私と叶は私の別荘にいる。
へ？私の別荘がわからない？
原作ではエヴァの別荘のアレだ。
なんでエヴァじゃなく私なのかは、本編で語られたり、語られなかったりする。
というか納得せずに理解しろ。
それで何故、私と叶が居るのかと言うと…

「いい？これがサギタ・マギカよ
此処の魔法使いが使う基本魔法」
「いろんな種類があるんですね」
「まぁね…さて次は…」

叶に此処の魔法を見せてます。

大方こちらの魔法を見せ終え、次の魔法を見せる事にした。

「次は君んとこの魔法を見せよう
君も頑張れば扱えるから」

「えぇぇえ！！出来るんですか？」
「フッ私を嘗めてはいけない」
私は手を翳し魔力を集めていく
「集え星の輝き…」
そう…魔王の魔砲をｗｗ
《こ、これは…》
「す、凄い…」
「スターライト…」
周囲の魔力を集め、どんどん肥大する『星』の魔力。
そう…ただのスターライト・ブレイカーじゃつまらない。
私が改良したスターライトは、星の魔力を集める。
地球や火星とかいろいろな星から…。
「ブレイカー！！！」
まぁ…人間には扱えない代物だけどね。
ドゥゥウウウウウン…
ズドー――――――ン
「《……》」
「今ので一割」
「《！！！！》」
「さあ！！やりなさい！！」
「《無理です！！》」

「人間何事もチャレンジ」
《カスミ…私には
扱いきれないわ
許容オーバーよ》
「僕も無理…」
「や・れ☆」

魔力を集め脅す私。
最近悪に染まってきたと思う。
まぁ、人が怯えて震えてる姿は、なんとも快感と言うか、ずっと見ていたい。

私が脅してる時に、茶々丸から叶君の迎えの者が、来たとの報告を受けた。

「どうやら迎えが来たみたいよ」
「ほ、本当ですか？」
「えぇ」

私達は別荘を出てリビングに入ると、そこにはスカリエッティが居た。
茶々丸をマジマジと見ていた。
茶々丸が裸じゃないのが救いだろう…が、そうマジマジと見られたら、こう…殺意が…

「叶…」
「なんですか？」
「アレ…消していいか？」
「だ、駄目です！！」
「ん？」

叶の大声でこちらに振り返った、スカリエッティ。
そして茶々丸はすぐに私の隣に来る。

「何か変な事されてない？」
「はい…」
「無事だったかい？叶君」
「はい、なんとか」
「それはよかった」
「貴方がジェイル・スカリエッティさん？」
「えぇ、そうです
この度は叶君を助けて
頂きありがとうございます」
「人として当然だ」
（《最初は助けなかったくせに…》）
「それでは…来て早々ですが
帰ってもよろしいですか？」
「本来なら責任者に
会って貰いたいが
流石に長引くと帰れないし
まぁ良いだろう」
「ありがとうございます。では」

そう言ってスカリエッティは、転送ゲートを開いた。

「カスミさん、茶々丸さん
エヴァンジェリンさん、
チャチャゼロさん…お世話になりました」
《またどこかで…》
「はい」

「短い間だったが
それなりに楽しめたよ坊や」
「ケケケッマタナ」
「しっかりと頑張れよ」
「はいっ！！」

そして、叶とスカリエッティは、ゲートの中へと消えて行った。

「さて…これはもう要らないな」

誰も居なくなったのを見計らって、私は一冊の本を燃やす。

その本の名は――――――

――――――交差する二つの世界

私と魔導師と交差する二つの世界と（再構）（後書き）

貴史「祝五万Ｈｉｔ！！」

やー！！

カスミ「私の話し！！」

やー！！

薫「うちの出番まだー？」

やー！！

貴史「ところで今回の話しは
ＩＦ物語なのか？」

ん～…ＩＦだね
本編とはまったくの無関係

薫「うちの外伝はまだなん？」

第二章が終わったら書くよ

カスミ「一章、二章があることに驚きだな」

一章は貴史とコウキで
二章は２－Ａの三学期の期末試験さ
それかカスミ戦にしようかと…

カスミ「ネギと私か…
フッ返り討ちだな
というか何故茶々丸が
私の従者なんだ？」

ネタバレになるから言わないが
あえて言うとカスミの体質のせいだ

貴史「この話しではあの体質は
発動しなかったな」

まぁね♪
さて今回はカスミが使う魔法を教えよう。

カスミ「ほぅ…」

まずはサギタ・マギカ
これは全属性を扱えるが
雷と光が苦手だ。

虚・魔法の射手（サギタ・マギカ・ゼロ）
全属性を混ぜた魔法の射手

次は闇の劫炎
これは闇の吹雪や雷の暴風と
同レベルの魔法

闇の氷炎

これは闇の劫炎の上だね

断罪の剣
原作にエヴァが使ってたのと同じ

漆黒
エヴァの闇の魔法の数段上の魔法

スターライト・ブレイカー
星の魔力を直に集めて放つ
最強最悪の魔法。
ちなみに自身の魔法は使わないので、いくらでも撃てる。

記憶の書
開発した魔法を記憶する書

神明魔祓の書
記憶した魔法をコピーしカードに封じていつでも使える状態にしてるもの

一応こんな感じ?

カスミ「ほう…」

貴史「まだあるんだろ?」

あったり前さ!!
(考えてないがな!!)

薫「かっこええなぁ〜」

次回は薫の魔法と技だ

貴史「薫はまだ駄目だろ」

カスミ「順当に貴史だな」

うっせー！！

作者の勝手だろ！！

貴史「やれやれ…」

ではまたね～

俺と麻帆良とあいつら（前書き）

さてストックもなくなったしぃ～
どうするかなぁ～

俺と麻帆良とあいつら

貴史視点

ＮＧＯを抜けて一年、俺は世界各地を回って現在、麻帆良学園に来てる。
理由は簡単、雇われたからだ。
学園長からタカミチへ、タカミチからテオドラへ、テオドラから全国と……。
正直こいつらの頭を疑った。

だってよぉ…返事がなければ懸賞金をかけて、あぶり出すとか全国放送するし…。
まぁそれはさておき…

「今の時期だと…原作より少し前か」

世間では、長い長い夏休みが終わった頃だろう。

「霞は…来てるよな…さすがにすると……薫は…来てるのか？」
「キテマス。キテマス。」
「……」

うん。
後ろで、何かほざいてるのは無視しよう。

俺は（予想というより確実に）薫を無視して学園長室に向かう。

「無視せんといて～な」

だが歩き出そうとした瞬間、薫?が俺の腰に引っ付き止める。
正直、うざいし止めて欲しい。

「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ！！」
「やぁ～」
「何やってるの?」

なかなか離さない薫（確定）を振りほどこうと、暴れてる所にフェイト（リリなのね）が現れた。

「あ、カスミィ～」
「薫…誰彼構わず抱き着かないの」
「でもあの人、貴史やよ」
「それは知ってる」

どうやらフェイト似の女の子は霞らしい。
そしてやはり、木乃香似のアレは薫か……。

「やはり霞と薫か…」
「今はカスミね」
「ウチは変わらんよ～」
「性格は変わったか?」
「薫も私も全然」
「そうか」
「「久しぶり」」
「あぁ」

俺は二人に学園長室に案内を頼みながら、二人の経過を聞いた。

霞は名前をカタナカにしただけで、薫も姓と性が変わっただけ。
まぁこちらとしてはその方が良い。
別の名前だと違和感あるしな。
まぁそれはさておき

「なんでカスミは……
そんなに魔力が低いんだ？」
「ぐっ……それは…」

俺がカスミを見て思った感想を尋ねてみると、カスミは言いにくそうに語り出した。

カスミ視点【回想開始】

「極東の地、漸く追い詰めたぞ
サウザウンドマスター…」
「ほんと、しつこいなぁ」

エヴァに連れられ、私はナギ・スプリングフィールドを追っていた。
どうやらエヴァはナギが最強を名乗るのを良しとせず、最強の名をかけて勝負を申し込んでいた。
今のところ、全て引き分けとなってる。
それはいつもいつも決着間際に、ハンター達が私達を討伐しにくるからだ。

「うるさい！！人間風情が最強を
名乗った事を後悔させてやる」

ちなみに私はナギが最強だろうが、エヴァが最強だろうが、一向に構わない。

寧ろナギに関わりたくない。
呪いの件があるし……。
えっ？原作通りにならない？
どうでもよくない？
というかエヴァには、私の意志を言ったのだが、エヴァが聞く耳を持たなかった。
普段は私の言う事を聞くのに…。
これが世界の修正力なのだろうか？

くっ嘗めていたよ修正力…。

「今日こそは…！！」

エヴァが駆け出しナギに掴み掛かろうとした、瞬間、エヴァが消えた。
正確には落ちた。

「お、落とし穴だと！！」
「エヴァ…」
「ほれこれもやろう」

エヴァは落とし穴に掛かり驚き、私はそんなエヴァを眺め、ナギは原作通りニンニク等を落とし穴に放り込んだ。
吸血鬼になってわかったのだが、真面目にニンニクは辛い。
嗅覚が馬鹿みたいに鋭いので…もう…ね。

「や、やめろ！！」
「フハハハハ…お前達の弱点なんざお見通しなんだよ」
「貴様！！サウザウンドマスターだろ

だったら魔法で勝負しろー！！」
「嫌だね！！俺はこれでも
魔法学院を中退してんだ
覚えてる魔法も二、三個だ」
「なっ！！」

うん、エヴァの気持ちはわかる。
サウザウンドマスター…世間では、千の呪文を持つ男として名を馳せてる奴が、覚えてる魔法が二、三個しかないと言われてこれほどショックな事はない。
寧ろ想定外だろう。
まぁ現実に千も呪文はいらんと思う。
そしていよいよ運命の時、助けに入ろうと前に出るが、ナギの呪いが穴の中ではなく、私の方へやってきた。

「へ？」
「あ、やべ」
「ん？」
「い、いやぁぁぁあああ」

はい、呪いが私に直撃。

【回想終了】

貴史視点

「て、具合に」
「……直死で解除は？」
「言っておくがアレ
普通に怖いんだぞ」

「じゃあエヴァは居ないのか？」
「いや…エヴァは居る…
封印もかかってないけどね」
「そうか…でも何故そうなるんだ？」
「あぁ、それはなぁ」

今度は薫が説明を始めた。
どうやら神の手違いでカスミの幸運が、年を重ねるごとに下がるらしい。
そして今のカスミの幸運が【－ＥＸ＋＋】らしい。

「なんだよ…－ＥＸ＋＋って」
「知らないわよ！！」
「あ、着いたえ～」

話に区切りがついた頃に、学園長室についた。

「じいちゃん、入るえ～」

薫、カスミ、俺の順で中に入る。
俺達を出迎えたのは、ぬらりひょん、タカミチ、エヴァ、茶々丸だった。

「すまんかったな薫」
「えぇんよ、ほなうちは帰るな～」
「私も帰ろうかな…またね南武先生
行くよ。エヴァ、茶々丸」
「はい、マスター」
「ああ、じゃあなジジイ」

カスミ、薫、エヴァ、茶々丸は学園長室を出て行った。
途中ガンッと頭をぶつける音が、聞こえた気がするが、あくまで聞こえた気がするだろう。
気のせいだな…うん。

「で、学園長…全国指名手配までしようとして俺を雇った理由は？」
「うむ、学園の警備と、孫の護衛じゃ…
あと２－Ａの担任と数学教師を…」
「殺すぞ…ジジイ（怒）」
「無理かのぅ？」
「多過ぎる…せめて孫の護衛は外せ」

木乃香は桜咲と薫がやってるだろうし、薫は護衛の必要性を感じない。
断っても問題はないはずだ。

「というか今の２－Ａの担任はどうすんだ？」
「あぁそれなら僕だけど近頃出張が多くなってねだから僕からも頼むよ」
「はぁ…わかったよ…担任と警備と……
不本意だが数学教師の件受けてやるよ」
「すまんのぅ
三学期からは担任から副担任にするから

忙しいのは二学期だけじゃ」
「なんだ？降格か？」
「いやいや、実は三学期には
新しく赴任してくる教師が来るのでな」
「ふむ、わかった」

ネギ少年か…さて、あの無関係な人を、巻き込もうとする少年に、
備えてどうするかな…。

「そんじゃな」
「案内は良いのか？」
「あぁ…外の人に頼みますよ」
「わかった。
明日は８時に此処に来てくれ」
「はいはい」

俺が学園長室を出ると、褐色肌の中学生とは思えないスタイルの女
性がいた。

「マナ…」
「久しぶりだね…」
「案内頼む」
「あぁ、わかったよ」

そう言って踵を返し歩き出した。
俺はその後を追う。

「一年ぶりだね」
「あぁ」
「「……」」

ムギュ

「ひゃあっ」

後ろから胸を掴む俺。
それに驚くマナ

むにむにむにむに

「ん、あ、ぅ…貴、史…さ…」
「ふむ、良い胸だ」

あらかた揉んでマナを解放する。
マナは腰が抜けたように、その場にへたりこんだ。
そしてこちらに振り向き、銃を出して発砲してきた。

バンッ

頬を染めて少し涙目だ。
可愛い奴だ。
ケケケケッ
銃弾？勿論避けたさ

「何の真似だい？」
「暗いから明るくしようと」
「〜〜〜〜っ（怒）」

バンバンバンバンッ

今度は銃を乱発し撃ってくる。
当然、避ける俺。
どうでもいいが、最近…美堂蛮の性格に近づいて来たなぁ。

「とりあえず案内しろ～」
「くっ…」

あらかた回って、現在世界樹の前。

「これが世界樹かぁ…」
「なぁ…貴史…」
「ん？」

再会した時はさん付けだったねが、今日一日付き合って前みたいな呼び方に戻った。
やはりマナは呼び捨てで、呼ばれた方が良いな。

「あれから一年何をしていたんだい？」
「魔法世界を旅していた
そこでいろんな奴に会ったよ」
「……私を置いて行ったのは？」
「化け物と居たかったか？
それもコウキを殺した」
「違うだろ！！コウキを
殺したのはあの悪魔だ」
「俺だよ…俺が本気だったら
あいつは死ななかった
何事も本気で掛からないから」
「それでもアレは仕方がなかった」

「……サンキューな」

俺はマナの髪をくしゃくしゃと、撫でて立ち去った。

それでもな…マナ……

俺はこの罪を背負ってくぜ…

おまけ

「そういや…俺は

何処で寝れば良いんだ?」

このあと俺は三時間回って、カスミの家に泊まり込んだ。

俺と麻帆良とあいつら（後書き）

貴史「俺の性格…ｏｒｚ」

カスミ「まぁ蛮でもいいだろ」

カッコイイぜ

貴史「うっせぇよ…なんだよ
マナの胸を揉むって……最悪だ」

カスミ「最低だな」

つか屑だな

貴史「第一なんで俺は
いつも通りなんだ？」

神「それはだね…あの空白の
一年で色々悟ったのだ…」

貴史「久々に出たな屑…」

神「ワシの出番がないからな」

次神様出ますよー

神「マジでか！！」

薫「ウチはー？」

いつか出るさ

《バチチッ》

ん？バチチッ？

《作者が振り返るとそこには
雷帝化した薫が居たそうな》

やばい！！

《作者は逃げ出した》

貴史、カスミ「させん！！」

《しかし、貴史とカスミに
回り込まれた》

き、貴様ら…正気か？
巻き添えくうぞ！！

薫「あああああああああああ！！」

ドゥゥウウウウ！！

なっ…ぐぉおおおおおおお！！
おぉぉぉぉぉぬぅおぉぉれぇぇぇえ！！

俺と２－Ａの連中と夜の模擬戦（前書き）

飛ばしまくりです…

俺と２－Ａの連中と夜の模擬戦

貴史視点

「おい、起きろ」
「ん…んぅ…あと１０時間」
「ふざけるな！！」

ガスッ

「痛っ」

よぉ、おはよう？
今さっきカスミに起こされた貴史だ。
なんで俺がカスミの部屋に居るかと言うとだな、メンドイから説明無しでよくね？
あ、ダメ…ですよねー。
えっと職員男子寮を探しても見つからなかったんだ。
んで仕方なくカスミ＆エヴァ＆茶々丸の家に泊めてもらったんだよ。
んで空き部屋が無かったから、カスミの部屋に、あぁ許可は取ったぞ。
エヴァは殺気を篭めて睨んでた事を此処に記録しとおく。

８時、俺は学園長室に来ていた。

「おいーっす学園ち…妖怪」
「何故言い直すんじゃ？」
「あー…なんとなく？」
「なんとなくでワシを

妖怪にせんでくれ」
「自覚がねぇって恐ろしいな」
「何が言いたいんじゃ！！」
「とりあえず朝っぱらから呼んだ理由は？」

このままだと話しが進まないので、とりあえず呼ばれた理由を聞こうと思う。
まぁなんとなくわかる。
先達者の習わしでは、夜に世界樹へ～って奴だ。

「今夜０時に世界樹前の
広場に来てくれんか？」

はい、予想的中～。
まぁ警備も受けたしね～当然か。

「はいはい。わかりました」
「うむ、頼んだぞ」
「んじゃあ担当クラスに
行ってきまーす」

学園長室を出て俺は職員室に寄った。
何故かって？挨拶しねぇとダメだろ？

「失礼しまーす
南武　貴史です
これからよろしく！！」
「貴方が新任の…
よろしくお願いします」

俺の挨拶に返してきた人は、新田先生という眼鏡のおっさん教師。
二次作では転生者の方々に、好評の新田先生です。

「それでは早速
２－Ａに行ってきます」
「あぁ、しずな先生が
案内するので
少し待っていて下さい」
「わかりやしたー」

しずな先生って誰？
まぁいいや、てかタカミチじゃないんだな…まぁ野郎より女がいいけどな。

新田先生と話してたら、後ろから気配がして、こちらにやってきた。
後ろを振り返ると大きなメロン…いやスイカが二つ、揉み応えありそうじゃねぇか。
っとまた蛮になってるな。
治さねば……。

「はじめまして源しずなです」
「南武貴史です」
「それでは行きましょうか」

軽く挨拶をして、俺達は２－Ａに行った。
そして２－Ａ前、外からも聞こえる程騒がしかった。

「おい超」
「どうしたカ？カスミ」
「今夜やらないか？」

「やらないネ」
「カスミ！！私なら
何時でもＯＫだぞ？」

「明日菜～」
「薫何ー？」
「ウチとやらへん？」
「やらないわよ！！／／／／」
「お姉ちゃんウチはええよ～」

……。
あいつらは何をしてるんだ？

「くっ…おい超！！
いい加減デレてくれ」
「それは無理な注文ヨ」
「私じゃダメなのか？カスミ」

「明日菜～」
「うっさいわね～ダメよ
というか私は女よ！！」
「なぁなぁ…ウチは～」

「源先生…」
「なんですか？」
「帰っていい？」
「ダメです」

クソッ…やはりダメか。
おっと勘違いすんなよ？

いくらＮＧＯでは不真面目だったとしても、原作に近い時期に、怠けたりしねぇよ。
ただ、２－Ａに入るのが、激しく顰になっただけだ。

「私が呼ぶまで
待ってて下さいね」
「はーい」

そう言ってしずな先生は中へ入った。
すると徐々に２－Ａ内は静まった。
どうやって静めてるか、激しく気になる。
まぁ考えてもしょうがないか。
窓から空を眺め呼ばれるまで、ぼーっとしていた。

「……コウキ…」
「オイッス！！」
「！！」

突然、横から声がして振り返ると、そこには神がいた。

「返事がないのぅ…
もう一度オイッス！！」
「声がデケェ！！」

さっきよりでかい声を、あげる神にツッコミを入れた。
が、即座に周囲の異変に気付いた。

「止まってる？」
「神のワシが来たのじゃ
時間を停止させた」

「ふーん…で？用件は？」
「主のパートナーの件じゃ」
「……」
「コウキの死は必然じゃ
主に会おうが会わまいがな」
「…原作で死んでるからか？」
「それもあるが…ちょい違う
あやつの魂は死の運命に
魅入られとるんじゃ」
「あ？なんだそりゃ」
「読んで字の如くじゃよ
主も気付いておったろ？
あやつの危うさを……」

そう言われ妙に納得した。
確かにコウキは危うかった。
俺の力を見て恐怖する処か、憧れや理想と言った感情が占めていた。

「あやつの魂名は
『死を追い求めし者』じゃ」

魂名…その者の在り方、存在そのものの証。
型月風で言えば根源と言えばいいか？

「故にあやつが待つ先は死…
主の介入を物ともそん絶対的な死じゃ」
「……だから…だからアレは
俺のせいじゃねぇってか？
冗談じゃねぇ…絶対的な死？
人間は誰しも死ぬ！！

俺があそこで本気出してりゃ」
あいつはまだ死なずに済んだ。

「主が本気でやればその
巻き添えにあやつは死んだぞ」
「……っ…」
「どうする事も出来ん…」
「死ぬ運命の奴は…
これからも助けれねぇのかよ…」
「あるぞ」
「本当か!?」
「うむ」
「どうすればいい?」
「何…結果を変えたければ
変える準備をすればよい」
「変える…準備?」
「ではな…」
「待て!!詳しく…クッ」

そして神は詳しく教える事なく消えた。
それと同時に時間が動き出す。

「クソッ…」
「南武さん入って来て下さい」
「……」

ドアを開けて教室に入る。
急な赴任だから罠の類いはなかった。
そして教卓前に行く。

「今期此処の担任になった
南武貴史だ。よろしく」

自己紹介をして教室を見渡す。
茶々丸とエヴァ、カスミは廊下側、桜咲と木乃香と明日菜、薫は真ん中の後ろ辺り、真名はザジと同じ窓側で後ろの席か…そして、朝倉の横にポツンと居て、こちらを見てる相坂嬢。
と、不意に眼があった。
すると眼を輝かせて喜んでる。
若干涙目だが…薫、カスミを見ると、小さく頷いてくる。
どうやら二人も見えてるらしい。
何故転生者には、相坂嬢が見えるのだろうな。
原作知識としては片付けられんぞ…。
あっ…俺達も一度死んでるからか?
そうだそうだそうに違いない。

「一一一言う訳でこの時間は
質問の時間とします。」

あれ?考えてる最中に話しが進んでる。
しかもこの時間って、俺の授業だよな?
何決めてんだ?
このスイカは、揉むぞ?
いや、何をとは言わんが…。

しずな先生の言葉に皆次々と質問をしてくる。
出身は何処だの、趣味はなんだの、好きな女性はだの、付き合ってる人は居るかだの、勝負して欲しいだの、見えるんですか?見えますよね?見えてるんですよね?と、もう…ね、凄い凄い。

「はーいはーい
先生も戸惑ってるし
此処は麻帆良学園の
パパラッチ事私に任せてよ」

呆然としていた俺を見兼ねたのか、いや多分違うか。
目立ちたいだけ、又は…スクープ独占?
まぁなんにせよ朝倉が出て来た事で騒ぎは収まった。

「それじゃまずは自己紹介を」
「さっきしたろうが…」
「もう一度お願いします」
「……南武貴史…」
「歳はおいくつで?」
「十九だったかな」
「……本当に教師?」
「雇われたからな教師だ」
「はぁ…では次に趣味は?」
「ん~無いな」

それからも、いろいろ質問をされては答えていった。

「では最後にこの
クラスの中で
好きなタイプは?」
「問題発言じゃね?」
「いいからいいから」
「あー……薫とカスミ…
……と龍宮とザジ

強い奴は無条件で好きだな」

名指しで言われた生徒は、ほんのり頬を赤くしてる。
かわいい奴らだ。
あとエヴァと桜咲と木乃香の視線がうぜー。
あれか？カスミと薫の名を出したせいか？
だが仕方ないだろ？
あいつらの容姿がストライクなんだし、転生者の特権？なのかねぇ、
なんで二人して俺好みの容姿なんだか…。

結局この時間は授業をせずに終わった。
そして時間は加速して放課後。
俺は職員室で明日の準備をしていた。

「南武先生、お疲れ様です
初日の授業はどうでしたか？」
「人に教えるのがちょっと」
「はっはっはっ…時期に慣れますよ」
「だと良いんですが」

暫くして新田先生と会話してると、真名がやってきた。

「南武先生…迎えに来ました」
「は？」
「２－Ａ主催の南武先生歓迎会です」
「……あー…はいはい
それでは新田先生また明日」
「はい」

新田先生に挨拶をし、真名と一緒に教室に向かう。

歓迎会ねぇ…確かネギ坊の時もあったな。
俺は真名と一緒に教室に入った。
すると、三、四発のクラッカーが鳴った。

『ようこそ2－Aへ』

……まぁ…少し感動ものかな。
運動部仲良し四人組に、連れられ真ん中の席に座る。
カスミはエヴァや茶々丸と一緒に隅の方に、薫は明日菜や木乃香、
刹那と楽しくやってる。

数分経ち、タカミチがやってきた。
明日菜を見ると原作と違い、タカミチに依存していない事が判明。
薫のお陰……なのか？
まぁそこは後で聞くか……。

歓迎会を終え現在0時。
えっ？時間経つの早い？
特に面白い事はなかったよ。

そして俺は今学園中の、魔法先生と魔法生徒の前に居る。
学園長がなんか言ってるが、やっぱり此処は無視っしょ。
俺はカスミ達と喋ってた。
顔黒眼鏡とかどこぞのギャルゲと同じ名前（姓は違う）のババァの
視線がうぜー。

「ではまず実力を
見せてくれんか？」
「えっ？何？」
「……」

急に話を振られたので、聞き返すと空気が凍り付いた。
なんだよ…お前ら…こっちは全く聞いてなかったんだから、聞き返しても良いだろ？

「実力試しじゃ
高畑君と勝負して
もらうんじゃよ」

やれやれと言う風に、そう言う学園長。

「おいジジイ…」
「なんじゃ？カスミ」
「タカミチで足りると？」
「それはどういう意味だい？」

カスミの言に皆（薫除く）が「何を言ってるんだ？」と言う具合に、カスミを見て、タカミチはその言の意味を問い質した。

「言葉通りだよタカミチ
お前では貴史には届かん」
「カスミよ…タカミチ君は
君達を除けば
学園トップクラスじゃぞ？」
「ああ、だろうな

私やエヴァ、そして薫を
除けば学園トップの実力者だ」
「せやけど…世界は
まだ広いんよ？
おじいちゃん」

今まで黙っていた薫がカスミに同意する。

「まぁ…とりあえずやるか」

皆の前に出て既に待ち構えてる。
タカミチと対峙する。

タカミチ視点

今僕の目の前には南武貴史が居る。
彼とはＮＧＯに居た頃からの、顔見知りで彼の噂はよく耳にしていた。
その噂はとても良いモノではなかった。
彼を侮辱したモノが大半…。
龍宮君とコウキ君の相棒。
コウキ君が居た頃の、龍宮君は彼を批難していた。
でも、何時だったか…龍宮君は彼を批難する人を排除していった。
彼女に何があったのか…それはわからないが、コウキ君が頑なになって彼を離さなかった理由…此処で見極めさせてもらおう。

おそらく…

「それでは……」
それが……

「始め！！」

龍宮君が変わった理由だから！！

貴史視点

学園長の合図と共に、タカミチの無音拳が放たれた。
だが俺は拳圧が生まれる前に右手で、タカミチの拳を止めた。

「食われちまいな」

瞬間、握り潰そうとしたら、頭に衝撃が来た。
おそらくタカミチがもう片方の腕で、無音拳を繰り出したのだろう。
俺は握っていた、タカミチの腕を解放した。

「いっ……つう～
さっすがは英雄さん…」
「僕の拳を止められたのは
久しぶりだよ……
まるであの人達と戦ってるみたいだ」
「そこまで綺麗な力じゃねーよ」
「ふっ…そう…かい！！」

タカミチは右手と左手を合わせ、咸卦法を使ってきた。

「へー…それがあんたの切り札か」
「豪殺　居合い拳!!」
砲撃並の無音拳が、俺に直撃した。
さて…圧倒的な暴力を見せてやる。
俺は自分自身を、傷つけ血を垂れ流す。
俺が使う技はジャッカルの力。
「赤い分身（ブラッディ・アバター）」
流れた血は、たちまち俺の分身を作り出した。
分身と言っても劣化品ではなく、完全に俺自身と扱ってもなんの支障はない。
その数、２０!!
『なっ!!』
カスミ達を除き全員が驚愕で、目を見開いていた。
『さぁ、俺を失望させるなよ』
こうしてタカミチとの、実力試しと称した模擬戦は、終盤を迎える。

俺と２－Ａの連中と夜の模擬戦（後書き）

久々の更新！！

貴史「一日二、三行書いて
終わりとか有り得ねぇだろ」

集中力が途切れるんだよ！！（汗

貴史「しかも最低なのが
更新しない時がある」

更新された小説を読んでたら…

貴史「んなもん理由になるか！！
次はちゃんと決まってんのか？」

とりあえず…タカミチの
模擬戦を終了させて……
貴史の技や魔法を公開しようかと

貴史「そういや俺この世界の
魔法つかわねーよな」

ちゃんと使えるんだけどね

貴史「なら何故使わないんだ？」

だって君の選んだ魔法技術と

戦闘技術があれば負けはないもん
寧ろ…バネさん（赤屍）の力だけでも反則級

貴史「最強の座は複数居ても良いが
無敵の座だけは譲らねぇ！！！」

はいはい。頼むから挑発しなーい
どうせ決着すら着かんのだから

貴史「ゲイボルクとか
マジ効かんの？」

あれねー…マジ効かないから
まず血一滴あれば蘇生ちゅーか
再生可能つーかバネさん死なないから
バネさんの超越力は超越者としての
力すら超越してる存在だから
そこに蛮の力っしょ？
もはやどーにもならん（笑）

貴史「俺に勝てる候補は？」

ん～最強の路を行くの主人公ぐらい？
あとどーなんだろうね？

貴史「結局挑発してんのな」

ん～……貴史に挑戦する
人が居ても断るさ
大変なのは作者なんだよ

貴史「大切なのはキャラクターだろ」

カスミ「読者だ。たわけめ」

薫「もうええやんなんでも
はよ～締めてぇな」

そうだなそれではまた会おう！！

※貴史達の挑戦は受け付けておりません。（汗

タカミチとの決着とそれぞれの過去（前書き）

作者むっちゃくちゃ眠い

タカミチとの決着とそれぞれの過去

タカミチ視点

『さぁ、俺を失望させるなよ』

「っ！！」

土煙りの中から現れたのは、２０人の貴史さん。

２０人の貴史さんから溢れ出る威圧感に当てられ一歩後ろに下がった。

これが…あの貴史さん？

タカミチはＮＧＯに居た頃の貴史と今の貴史がまったくの別人に見えていた。

学園長が彼を引き入れた理由が、ようやくわかったよ…。

『行くぞ…』

「くっ！！」

一豪殺　居合い拳！！一

僕は突っ込んでくる貴史さんに向け、砲撃並の居合い拳を放つ。

『はい、残念賞！！』

貴史さんは豪殺　居合い拳に対し、腕を振りその衝撃波で掻き消した。

「っ…」
『終わりだ…
喰らえ――
その毒蛇の牙を
以って!!』

貴史さんから放たれた衝撃波に意識を刈り取られ、僕は地面に膝を着いた。

貴史視点

「それまでじゃ」

妖怪が終了を告げ、俺はアバターを消した。

「実力は十分じゃ
これからよろしく頼むぞい」
「ああ」
「ちょっといいか?南武君」

妖怪と俺の間に、割って入ったのは顔黒の先生。
誰だっけ?こいつ……。
つか馴れ馴れしい…。

「なんだよ?」
「君のその力は一年で
身につくものじゃない」

「だから？」
「君は一年前まで…
実力を隠してたな？」
『！！！』

顔黒の言葉に目を見開く、他の先生方と生徒達。
真名は……平然としてやがるな…なんでだ？
つかマジこの顔黒の名前なんだよ？
教えろ～屑（神）！！

「どうなんだ？」
「ああ、隠してたな
つかやる気出なかった」
「随分あっさり認めるんだな」
「事実だしな…」
「君が…君が始めっから
本気なら君や龍宮君のパートナーは」
「本気……か…無理だな」
「なんだと？…！！」

俺はいい加減うざくなって殺気を放つ。
すると顔黒はいや他の先生、生徒は、膝を着き冷や汗を、流しながらこちらを見てくる。
膝を着いてないのは、妖怪、カスミ、薫くらいだ。
流石だな…

「これでも１％だぞ？
本気だしたら回りの奴ら自害すっぜ」

俺の言葉に全員が息を呑む。

「南武君…そろそろ…」
「……チッ」

舌打ちと共に殺気を霧散させ、俺はカスミの家に向かった。
後ろからは、真名、薫、桜咲、カスミ、エヴァ、茶々丸、チャチャゼロが着いてくる。
カスミ達（薫含む）は解るが、何故、桜咲達が来るんだ？
聞いてみよう。

「ウチは話があるんよ」
「貴史さんと居たいから」
「薫お嬢様の護衛です」
「私とカスミと茶々丸、チャチャゼロの家だ」
「「同じく」」

聞いてみた。
上から薫、真名、桜咲、エヴァ、茶々丸とチャチャゼロだ。
成る程、桜咲やエヴァ達はわかるが、真名…お前はただの我が儘じゃね？
薫の話は……多分あの事かな…

「一年間放置されたんだいいじゃないか…」

まぁいいけどよ。

「報酬として身体検査な」

あれ？俺教師として今の発言やばくね？

まぁいいや…唯我独尊…良い言葉だ。

「……鉛玉でいいかい？」
「はっ当たるかよ」

《チュンッチュンッチュンッ！！》

サイレント付けて撃ってきやがった。
マジおっかねぇなぁ…。
まぁ余裕で避けたがな。

「まだまだアメェ」
「くっ…」

真名は悔しそうに顔を歪めたとさ。

はいはいそうこうしてる内に、カスミの別荘に移動したよ。

「なぁ貴史…聞きたい事がある」
「ん？」
「貴様の中に別の魔力を感じるんだが」
「あ～それウチも聞きたかったんよ」

どうやらカスミと薫は俺の中に、ある物に気付いたらしい。
まっこの世界を見てる奴にも、言ってないがな…つか語ってないし。

「そうだなぁ…アレは真名と
別れた後の事だ。」
「いや、まず貴様の生い立ちからだ」
「……あいよ」

《貴史はカスミ達にコウキに出会った事や、真名に出会った事を語った。そして……》

「魔神を倒した後、
俺は罪悪感から空間を裂いて、
世界の果てまで逃げた。」
「どんだけ逃げれば
気が済むんだお前は…（呆）」
「フッ…褒めんじゃねぇよ」
「褒めてない！！」

俺の茶目っ気にバンッ！！と机を、叩きながら突っ込むカスミ。
あっ今は魔法球にある城の中だ。

「まぁまぁとりあえず続き話してぇな」

薫がカスミを宥めて、続きを促した。

「わかった……まぁそれで
世界の果てまで逃げたわけだ

そこはかなり古い遺跡の前で
さらに奥へ入ったんだ」
「それで？」
「罠がたくさんあった」
「遺跡ならあって当然だ～（怒）」

カスミは俺の襟首を掴み、ガクガクと揺さぶる。
正直辛いな…鞭打ち症になりそうだ。

「まだ続きあるんだろ？話せ」
「あ、あぁ…」

今度は一人で落ち着いた、カスミが続きを促す。

「まぁそれなりに歩いて
それなりに罠を突破して
最奥まで辿り着いたわけだ
そこにあったのがコレだ」

俺は手を翳すと、手から血が出て、血は一本の剣となった。
黄金の装飾、そして剣とはとても言い難い、あえて言うならドリルのような剣だ。
はい、もうお気づきかと思いますが最古の英雄王・ギルガメッシュさんの宝具です。
本物ですよ。

「「！！」」
「流石、気付いたか」
「それ…本物なんか？」
「あぁ、本物さ」

「何故それが…此処に…」
「これはおそらくだが
この世界にいた英雄王の宝具だ」
「「「!!」」」

カスミと薫はさらに驚いた。

いや…エヴァも驚いてるな。
おそらく理解が追い付いたか?
真名や桜咲はまだ気付いてないみたいだな。

「いくつか質問がある」
「なんだ?」
「真名解放は出来るか?」
「普通なら無理だ」
「普通ならか…ならお前は
普通じゃない方法を取ったんだよな?」
「あぁ、察しの通りコレに俺の血を
付着させて自身の武器にした
真名解放は……出来る」
「……やはりな……
次の質問だが…それは各世界にも?」
「あるだろうな…
一つに付き一本
ただし地球がある世界に」

そしてカスミはそうか…と呟いた後、何も言ってこなかった。

「それで?まだあるんやろ?」
「ん?あぁ…まぁな…」

このあと語ったのは…
魔法世界に行った事。
そこで大戦の英雄に会った事。
罪悪感に押し潰された時に、別次元の世界に行った事を話した。
これが空白の一年間の話。

ん？この作者が書く作品全て、一年が濃すぎ？
まぁ、確かに闇色の修行期間が、一年にしちゃあ濃いわな…
そこは作者に言っとけ。
多分、無解答か話逸らされるから。
おっとシリアスから脱線したな。
此処で使うんだっけ？
この「閑話休題」って奴

「以上が俺の体験だ」
『……』

話を聞いてた皆は何も言わず、暗い雰囲気を醸し出していた。

「ほれ、次はお前の過去教えろよ」
「……あぁ、そうだな……
何から話したものか……」

暗い雰囲気の中、俺はカスミに話を振った。
無理矢理って言うな…わかってるから。

カスミ視点

貴史が大切な戦友を、守れなかった事を知った。
貴史がその罪に、押し潰されそうになったのを知った。
貴史がその罪から、逃げた事を知った。
貴史がその罪に、押し潰された事を知った。
その時に私が貴史の力に、なれなかったのが悔しかった。
これは…おそらく薫も同じだろう。
私と薫はそれほどまでに貴史が好きだから。

《過去～前世～》

「お前、いつも一人で居るのな」

いつものように私は、一人で公園にいた。
私の能力に皆、気味悪がって近寄らなかったからだ。

「あんたには関係ない」

コイツも私の能力を知れば、気味悪がるに決まってる。
当時はそんな考えだった。
だから深く関わらず、そして自ら皆から遠ざかった。
だけど…あいつは……

「関係はないな…でもよ
しゃーねぇじゃん泣いてる奴
放っておけるかよ」

自ら率先して、関わってきた。

最初何を言ってるんだ?的に、眉を潜めた。

「泣いてない」
「いいや、泣いてる
このままじゃうるせーし
泣き止むまで一緒に居てやるよ」

かなりうざかった…。
自分勝手、人の話を聞かない。
最悪な人間…だけど……
私は貴史に出会った時から、一人じゃ無くなってた。
そこから薫も加わって、私達は貴史に救われた。
普通な奴、でも皆とは違う。
普通な奴、でも相手の心を見抜く。
普通な奴、絶対に離れなかった。
普通な……奴、普通だけど私達よりも変な奴。
気付けばかなり貴史に、依存してたものだ。

「ほれ、次はお前の過去教えろよ」
「……あぁ、そうだな……
何から話したものか……」

私はお前を守る。
だから貴史の敵は私が……私達が消す。
これは薫との誓いだ。

タカミチとの決着とそれぞれの過去（後書き）

もーいーくつねーるとー
おーしょーおがつー
お正月には餅食って～
コマを回して遊びましょー
はーやーくぅこーいこい
おーしょーおがつ♪

※作者壊れてます。

俺様の技のほんの一部を見せてやるよ（前書き）

貴史「ずっと俺様のターン」

俺様の技のほんの一部を見せてやるよ

貴史「俺様の技、魔法特集～」
カスミ、薫「わ～パフパフパフ」
貴史「んじゃ早速行くぜ！！」
カスミ「最初はこれだな」

蛇咬（弱）

アクスレピオスの力を使わず
ただの筋力のみで放つ
おそらく貴史の最弱技
ちなみに貴史の握力は
蛮同様２００？ぐらい

蛇咬（中）

呪文詠唱する事で
アクスレピオスの力を借りる蛇咬
詠唱中や放つ時に
蛇の幻が見える。
威力は蛇咬（弱）と
天と地程違う。

蛇咬（強）

完全詠唱する事で
悪魔の腕を解放し
蛇咬を放つ技。

威力は蛇咬（中）と
天と地程違う。

蛇咬（極）

完全詠唱＋アクスレピオス完全
開放状態で蛇咬を放つ
全蛇咬中最強技。
アクスレピオス完全開放状態は
悪魔の腕が昇華し
元の人の腕、背中に天使の翼が
見える状態。
貴史の最強無敵状態。

カスミ「もう蛇咬だけで
生きていけよ」
薫「強うなったな～」
貴史「まだ行くぜ」

蛇殺（弱）

呪文詠唱によって
アクスレピオスから力を借り
放つ技。
蛇咬（中）より遥かに強い
詠唱中や放つ時
龍の幻が出る

蛇殺（中）

呪文詠唱によって
アクスレピオスから力を借り
さらに悪魔の腕で
放つ技。
蛇咬（強）より強い。

蛇殺（強）

呪文詠唱＋アクスレピオス完全
開放状態から放つ技。

真・蛇殺一極

呪文詠唱＋アクスレピオス完全
開放状態で放つ極奥義。
蛇咬を放ち、さらに追い撃ちで
蛇殺を以って撃殺する。

カスミ「もうコレ以上ダメだ」
貴史「俺様の知り合いが
チート自重ダメと叫ぶぅ！！」
薫「あかん！！もう止めきれへん」

赤い乖離剣（ブラッディ・エア）

英雄王ギルガメッシュの元宝具
真名解放可能。

カスミ「これは空白の濃い
一年で入手した奴か」
貴史「これからも乖離剣を求めて旅を」
薫「次の世界でしようかな～」

赤い槍（ブラッディ・ランス）

自分の血で作った槍。
次元とか裂いたり
不死殺し能力が付与されたり
チートアイテム。

赤い分身（ブラッディ・アバター）

自分の血で分身を作る秘技。
劣化はせず現れた分身は全て
貴史自身なのだ。
ただし消滅しても復活はしないので
本体よりはマシ。

カスミ「私でも対象出来そうだ」
貴史「直死使えばいいしな」
薫「それあまりいい気せんよ？」
カスミ「私もごめんだ」

赤い十字（ブラッディ・クロス）

十字に切り裂く技。

覇皇拳

この流派は学び途中です。

カスミ「……おい」
貴史「ん？」
カスミ「なんだこれ」
貴史「覇皇拳」
カスミ「……」
貴史「次行こう」

流派・東方不敗

コンプリート

薫「……なんでなん？」
貴史「出来たもんは仕方ねぇま、あんま使わねぇけど」

斬罪魔法　黙示録大霊剣

巨大な剣槍を振り抜き
海星剣皇の突貫と
同時に攻撃する。

カスミ「ほう…」
貴史「次行ってみよー」

突神魔法　蒼光彗星

海星剣皇に魔力を纏わせ
突っ込む魔法。

カスミ「本当に魔法なのか？」
貴史「街一つ消滅できるぞ」
カスミ「……そうか」

終末魔法　黙示録大霊剣　絶対終末

巨大な魔力の刃が全域に
渡って放たれる魔法。
海星剣皇の最大奥義。

貴史「まぁこう書いてみたが
技が少ないな…」
カスミ「いや、もういいよ…」
薫「まぁこれからも
頑張ってや…ウチらの
主人公さん♪」
貴史「任せろ…
さてサモンサーヴァントで
何が出て来るんだろうな」

カスミ「使い魔を呼ぶのか？」
貴史「お前らも呼ぶんだぞ」
薫「は～い」
カスミ「作者の限界を軽く
超えるなコレ」
貴史「むしろ積極的に許容
オーバーに行ってるぞ」
薫「なに考えてんやろ」
カスミ「空気化されるだろうな」
貴史「もはや真名達が空気だ」
薫「まぁ多分大丈夫やろ」
貴史「そうだといいが…さて
そろそろ締めるか」
薫「ほな、今日は此処まで！！」
貴史「次はカスミの過去だ」
カスミ「薫の過去が見たい奴は
もう少し待つんだな」
貴史「それではまたお会いしましょう」

三人「待ったね～」

俺様の技のほんの一部を見せてやるよ（後書き）

貴史「質問があれば受け付けてやるよ

あぁ、そうそうオリキャラとか
募集すっから案があったら
感想かメッセージボックスまで投稿しな

とりあえず…
名前
性別
性格
能力
武器又はデバイス
これくらいか？あぁ、あと容姿もな
容姿がなけりゃ勝手に決めっから

あと能力に関しては
俺様が言うアニメの技なら
なんでもいいぞ
ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ
ドラゴンボール
トリコ
魔法少女リリカルなのは
魔法先生ネギま！
型月（ＤＤＤは除く）
ＢＬＥＡＣＨ
烈火の炎
ゲットバッカーズ

NARUTO
あとは……なんかねーかなぁっと
ねぇな…うしっこんくらいだ

あ？なんだよ作者……
……いやそれはダメだろ
いや…でもなぁ……あー
わーったよ…たく……
先着十名様に限り自分で書いてる
小説のオリ主出して来いってさ
勝敗等は引き分けか負けだな
引き分けは先着三名だ
あとは俺や「あいつ」が負かす
以上…後書き終了だ。」

私の昔話（前書き）

貴史のターンが続くとでも？
だが残念今回は私のターンだ

私の昔話

カスミ視点

私は貴史達に自分の過去を語り始めた。

「あれは…エヴァを助けて数百年…」

私はいつものように、エヴァと一緒に魔法の練習をしていた。
フリーの魔法使いの拠点に行っては、魔法の本を奪ったりして学ぶ。
そして時たま、私達の首を狙ってくる正義の魔法使い達を倒していった。
それの繰り返し……。
しかしある日突然その日常は崩れる。

「なぁ…カスミ」
「ん？なぁに？」
「人間が最強を語ってるらしい」
「へぇ～」
「へぇ～、じゃないだろ！！」

私の薄い反応が釈に触ったのか、エヴァは大声を上げた。

「人間ごときが私達を
差し置いて最強と
言ってるんだぞ！！」
「や、私最強とか興味ないし」
「これはアレだな」
「アレ？」

「格の違いとやらを
教えてやらねばなるまい」
「……エヴァ？」
「そう思うよな？カスミ」
「いや、だから「行くぞ！！」
ねぇ…聞いてよ私の話し」
「ケケケケケッ」

私はエヴァに襟首掴まれて、引っ張られた。
あの時強く止めておけば良かったと、後悔したぐらいだ。

一月辺りで最強を名乗る魔法使いの情報は得た。
だがそいつは旧世界ではなく、魔法世界に居るらしい。
これで私はそいつを追う旅は、終わりだと思ったよ。
ああ、あの時の私は、なんて馬鹿なんだろう…っと思ったくらいさ。
今でも、思い出すと情けなくなってくる。

「魔法世界に居るのか…くっ」
「これじゃあ
どうしようもないな
さぁ、エヴァ…今日は寝て
明日は日本に行こう」
「そうだ…」
「ん？」
「魔法世界に行こう！！」
「……あの…もしもし？」
「行くぞ！！カスミィ～」
「なんで私の話し聞かないかなぁ～
このパツキンロリータ…」
「ケケケケケッ反抗期カ？」

エヴァは私の言葉を聞かず、チャチャゼロは面白く笑い、もうアレだ…うん……諦めよう。

私はもうエヴァを止めるのを止めて、最強の魔法使いとやらを追うため、魔法世界に行った。
ゲートでは、エヴァが暗示をかけ問題無く通過できた。

そしてやってきました魔法世界。
そして最強の魔法使いとやらの、名前と所属組織？名が、わかりました。

えっ？どうせナギだから言わなくていい？
ああ、そうだよ。
ナギだよ。
あいつのせいで、私は此処まで来たんだよ。
これはもうアレだな。
大戦の介入するかな……。

「待っていろナギ・スプリングフィールド
最強はカスミに相応しい称号だ」

うん？なんか今、エヴァの口から不穏な予感ビンビンな事を、言われた気が…。

「しかしカスミが手を下すまでもない
貴様ごとき人間は私一人で十分なのさ
ハーッハッハッハッハッ」

私を支持してくれるのは有り難いけど、私にも負ける相手は居るからね？
そういえば、もう産まれてる頃よね？
おそらく…赤ちゃんか、幼稚園辺り、いや小学生かも…。
小学生の貴史…じゅるり…。

Σハッ私はいったい何を考えて…

「で？此処何処？」

考え事（主に貴史の）をしていたら、いつの間にか森に来ていた。
おそらくエヴァが、引っ張ってきたんだろうけど…。

「森だな」
「そのくらい見ればわかる！！」

《ズビシッ！！》

「くはっ！！っ～～～…」

私のツッコミチョップを受け悶えるエヴァ。

「痛いだろ！！」
「アン？」
「ひッ…」

本気で殺気とか出してみた。
だって最近立場が逆になってたんだから仕方ないと思う。

一世紀前までは「カスミ～カスミ～」って言いながら、私の後を追ったり、「カスミ～許してぇ～」って言いながら修行を頑張ってたり、いったい何処で教育を間違えたんだろう。
教育の才能皆無とか、言われた日には軽く凹む。

「いや、無いと思うぞ？」
「どうしてこういう子に
育っちゃうかなぁ～」
「主に貴様の修行とかのせいだ！！」
「さっさと街に行くぞエヴァ」
「流した！！」

私は森を出るため歩き続けた。

時間の流れって速いわね…。
今私は原作で言うと、アリカ姫とナギが誓いを立ててる所に居る。
そしてエヴァは空気を読まずに……

「貴様らが最強を名乗る馬鹿か？」
「なんだテメェ！！」
「最強だよ！」
「ナギ！！アレはあの闇の福音です」

「闇の福音ってなんだよ？」
『！！』
ナギの一言に空気を凍った。
まさか闇の福音を知らないとは、世界を救うなら世界の事を知るべきだろう。
まぁ本人に自覚があるかわからんが…。
ただ私の横でプルプル怒りに震えてるエヴァをどうにか止めないと…。
「きさ《ガシッ》カスミ！！
えぇい離せ！！あいつは消す！！
消すんだぁぁああ！！」
「落ち着け！！アレはただの馬鹿だ
私達の事を知らないただの馬鹿だ
消す必要は何処にも感じられんから」
「馬鹿馬鹿って俺は少し
頭が悪いだけで馬鹿じゃねぇ！！」
「いや、馬鹿じゃろ」
「お師匠さん！！」
「だー！！もう貴様らいい加減に…」
エヴァが怒りを込め、ナギ達に襲う瞬間、事件は起きた。
いや、事件っていう程じゃないけどね。
ただ魔族が召喚されただけ。
原作ではこんなシーン無かったはず、いやエヴァが居る時点で、原作とは違うんだけどね。
「ナギ！！今は退くしか」

「退く？なんでだよ
あんな奴ら物の数じゃねぇよ」
「ナギ！！」」

詠春やアルビレオがナギを退くよう促すが、その努力も虚しく突貫していくナギとラカン。
そして頭を抱える詠春。

……お疲れ様だな…いろいろと。

私は心の中で合掌した。

結果的に言えば私達の圧勝。
まぁ、ナギやラカンで十分な上に、チャチャゼロにエヴァが加勢してたしね。
私？私が手を出したら可哀相だろ？
ただ、あのいざこざでナギ達を逃がしてしまったけどね。

私の昔話（後書き）

募集されたオリキャラは
【転生神は暇で暇でしょうがない】の
小説にて出します。
むろんこの三人の転生者シリーズにも出します。

私の昔話2（前書き）

カスミの過去～か～こ～

私の昔話2

カスミ視点

なんだかんだで決戦の日。
ん？早い？足取り掴めなかったんだ。
そしてイベントもたいして無いしな。

「凄い数の人形に魔族だな」
「完全なる世界…これほどとは」
「ケケケケッ殺ッテイイカ？
イイヨナ？コンナ祭リ…
見セ付ケラレテ…モウ我慢デキネェヨ」

チャチャゼロは、数え切れない魔族や人間、人形を見て、殺戮衝動が抑え切れ無いらしい。

「人間はダメだ。他は殺れ」
「人間に加勢する気か？」
「人間が負ければ世界が消え
私達も巻き添えだ…
人間と一緒に心中する気はない」
「確かに私もないな…」
「行ッテイイカ？」
「……あぁ、行くぞ」
「私は人間側に警告をしてくる」
「わかった」

そして私は人間側に向かって宣言をした。

「聞け！！人間共…我は漆黒の吸血姫…
貴様らと心中したくないのでな
加勢してやるよ……ただし
こちらに攻撃してみろ……
その時は奴ら共々消してやる」

私の声を聞き動揺しまくる人間共。
まぁ、悪の魔法使いが加勢してやると言ったんだ当然か…。
そして私はエヴァ達の下に戻った。

「キリが無いな」
「チィッ御主人…モウチョイ
良イ得物クレヨ…モタネェ」
「うるさい！！
それでも一応業物だ」
「どうだ？」
「「カスミ（姐御）！！」」
「苦戦してるのか…
どれ…少し掃除してやるよ」

《ギンッ！！》

そう言って、私は直死の魔眼を開放した。

直死の魔眼（ＥＸ）
遠野志貴や両儀式のソレを遥かに越える魔眼。

魔眼は世界を包み、魔族を、人形を包みこむ。
包みこまれたモノは死を露出し、そして…私の任意で死を露出した

モノは崩れ落ちた。

「これがお前達の死だ…」

《ズドォォオオオン》

私が敵を排除し終えると、同時に宮殿から大きな音がした。
原作では造物主の攻撃だと思うが、私というイレギュラーが居るため気になって宮殿へと向かった。

「他愛のない…」
「う…く……そ…」

ナギ達が居る所へ来てみればかなり大ピンチ。
ラカン、詠春、アルビレオ、ゼクト、ガトゥ、ナギが倒れてた。
なんというかもう…アレだな…こちらが強ければ敵が強くなるって奴か？
確か昔のスパロボにそういう設定あったな…
主人公達が強いと、その分敵が強くなるとか。

さてさて怪我を見てみるか…。
私は改めて紅き翼達の怪我を診るべく、近寄ると絶句した。

アルビレオは身体の八割消し飛び…即死。
ラカンは右腕と首が無くなって即死。
ガトゥは右足、両腕を失って瀕死。
ゼクトは両腕が無くなって瀕死。
詠春は腹に穴が開き死ぬ寸前。
ナギは左腕が無くなってる。

正直最悪な状況だ。

「くっ早く応急処置を…」

私は紅き翼の事で頭がいっぱいになり、創造主の事を失念していた。

《カッ！！》

瞬間、私の視界が光に包まれた。

「しまっ……」

光が収まった頃にはすでに誰もおらず、造物主がただ佇んでいた。

「これで…邪魔者は消えた」

「危ない危ない…」

「！！」

「少し気付くのが
遅かったら消えていたぞ」

「お前は……」

「カスミ・ヴェネーラ
漆黒の吸血姫さ！！」

私は自己紹介と同時に漆黒の炎嵐を放つ。

漆黒の炎嵐
黒い暴風に黒炎が付加された魔法。
ランク的には上級の中辺りだ。
まぁ闇と火、風の合わせ魔法。
トリプルとしては弱い方だな

漆黒の炎嵐が造物主に直撃する。

「がぁぁぁあああああっ！！」

造物主は炎の嵐に巻き込まれ吹き飛んだ。
その隙に私は詠春とナギに完全回復の魔法をかけた。
本来なら紅き翼全員にかけたいが魔力が惜しい。
膨大な魔力持ちでも底はあるからな。

治療を終えナギ達に結界を張り終えた頃に、造物主が炎の嵐から抜け出した。

「ぎりぎりだったか…」
「何故だ」
「？」
「何故私の邪魔をする？
私を倒して貴様になんの価値がある？」
「そうだなぁ…とりあえず
私は有象無象と共に心中したくない
それとお前を倒したら…
貴史に褒めてもらえそうだからな」
「たった…それだけのことでか」
「ああ、貴様にとっては
『たったそれだけ』の事だろうよ
だが私にとってそれが1番の褒美さ」

問答は終わりとばかりに、私は造物主に間合いを詰めた。

「フッ！！」

そして六百年鍛えた体術と魔法を織り交ぜながら、造物主を圧倒する。

蹴り、殴り、射手を穿ち、さらに間合いを詰め大火力の炎をぶつける。

造物主は一瞬にして間合いを空け、古代上級魔法を乱発していく。

私の拳が造物主を捉え、

造物主は対物理障壁を張り、

私が放った射手は造物主の障壁を破壊し造物主に迫る。

造物主は瞬時に古代上級魔法で私の射手を消し飛ばす。

私はそれを回避しつつ、中級魔法を放つ。

これらの繰り返し、周りは瓦解し始め宮殿が崩壊する。

「ハァァアアアアアッ！！」

「オオオオオオオオッ！！」

魔力と魔力が衝突する。

カスミのスピードはもはや目にも止まらず、カスミの力は造物主の障壁を破壊する程。

カスミの魔力は造物主と拮抗し、造物主は負けの一途を辿る。

「レク・リク・ラク・ライネック…」

私はある魔術書からカードを取り出す。

カードは私の魔力と呪文で力を解放され、待機状態で私の手に収まる。

「天壌の劫火（アラストール）

形状槍（モードランス）」

燃え盛る劫火の槍は造物主に固定される。

「フ、フハハハハハハ…
私を滅するか！！
良いそれが我が運命なのだろう
だが貴様がどうあがいても
世界の崩壊は止められぬ
せいぜい一時の幸せに
浸るが良い！！真の英雄よ！！」
「消え去れ…造物主ッ！！」

《ブンッ！！》

カスミの槍は造物主へ放たれた。

《ズシャァアアアッ！！》

「……奴の全てを焼け…」

《ゴォォオウッ！！》

槍は造物主に刺さり、カスミの言葉通り全てを焼いた。
肉体も、魂も……。

そして私は戦場を後にした。

私の昔話2（後書き）

カッコー鳥…

えっ？意味？
過去とカッコーをかけただけ

２０万アクセス記念（前書き）

正直アテムに根性が無さすぎて出しきれなかった。

次のタッグ？デュエルでは出し切って見せよう！！

20万アクセス記念

遊戯視点

僕は今、もう一人の僕。
ファラオの魂と対峙してる。
それはアテムが冥界へと旅立つ為の儀式。

遊戯「いくよ!!もう一人の僕!!」

アテム「来い!!相棒!!」

《ピカーン》

アテム「えっ？」

千年パズルが輝き、僕は彼に主導権を譲る。
もう一人の僕は驚いていたけど…
ごめん…正直君に勝てる気がしないよ。

貴史視点

遊戯と人格を代わり俺がアテムとデュエルする。

貴史「行くぜファラオ…」

アテム「待て!!相棒は何処だ?」

貴史「勝ったら教えてやるよ」

アテム「くっ…」

アテム、貴史「「決闘（デュエル）！！」」

こうして俺とアテムのデュエルが始まった。
ちなみに城之内達には「アレ？遊戯なんか変わった？」程度の認識。
チートなモンスター出せば…「へぇ…あんなカードあんのか」ぐらいの認識。
海馬は知らんがな！！

アテム「俺のターンからだ」

貴史「ふざけるな！！
俺様のターン！ドロー！！」

俺が引いたカードは融合賢者。
確か融合をデッキから手札に加えるカード。
俺様の手札は…

《貴史の手札》
融合賢者
柳川　駆
アリス
聖なるバリアミラーフォース
ワタポン
デーモンの召喚

確か…ワタポンってドローフェイズ以外のドローなら特殊召喚出来

るカード。
……使えねぇ…何これ？

貴史「俺は手札より融合賢者を発動
デッキから融合を手札に加える」

さてまず先鋒はコイツだ！！

貴史「更に手札から融合を発動！！
手札の柳川　駆とアリスを融合する！！」

遊戯「くっ…」

貴史「現れろ！！変態（駆子ちゃん）！！」

駆子『好きでやってるんじゃ…

「うるさい！！黙れ変態！！」』

駆子『貴様にダイレクトアタックしてやろうか？』

貴史「モンスターは黙ってろ！！」

駆子『貴史ー！！！』

貴史「天地乖離す開闢の星！！」

《ズガァァァァアン！！》

駆子『グハッ！！』

貴史「言う事を聞け」

駆子『くそ…いつか俺も同じ事を「黙れ！」…』

（※上記の一連の行動（戦闘）は幻術空間で行ったものです）

貴史「俺はターンを終了する」

遊戯（貴史）
ＬＰ　４０００
Ｍ　駆子ちゃん
ＡＴＫ　３０００
Ｒ　無し

アテム
ＬＰ　４０００
Ｍ　無し
Ｒ　無し

アテム視点

アテム「俺のターン！！ドロー！！」

ヤツの場には訳の解らないモンスターが一体。
しかも攻撃力　３０００のモンスター。
今の俺にアレに対抗する手段は一つ。
罠にかけて破壊するのみ。

アテム「俺はクイーンズナイトを

攻撃表示で召喚して、
リバースカードを一枚セットし
ターンエンドだぜ」

遊戯（貴史）
ＬＰ　４０００
Ｍ　駆子ちゃん
ＡＴＫ　３０００
Ｒ　無し

アテム
ＬＰ　４０００
Ｍ　クイーンズナイト
ＡＴＫ　１５００
Ｒ　一枚

貴史視点

貴史「さて俺様のターン!!ドロー!!
俺は暴走迷惑少年を召喚する」

レイ『来てやったぜ』

アテム「また俺の知らないカード!!」

レイ『つか今どんな状況?』

駆子『アテムを冥界へ誘う儀式だって』

レイ『って駆か?なんでそんな…』

貴史「話は後だ…」

レイ『固い事言うなよ』

貴史「うっさいドS」

レイ『言ったな…貴史…』

《幻術空間戦闘中…結果貴史の勝ち》

貴史「俺の言う事に従え！！」

レイ『いつか同じ目に合わす！！』

貴史「暴走迷惑少年の攻撃力は
フィールド上のモンスター一体につき
３０００ポイントアップする」

城之内「攻撃力九千だとぉ！！」

海馬「馬鹿な…あれがレベル４の
モンスターだとでも言うのか！！」

アテム「くっ…随分と大火力な
カードじゃないか」

貴史「フッさぁて行こうか…
駆子ちゃんでクイーンズナイトを攻撃！！」

アテム「掛かったな！！
リバースカードオープン
聖なるバリアミラーフォース」

貴史「笑わせるよ！駆子ちゃんの
特殊効果発動！！
駆子ちゃんに対する魔法、罠、
モンスター効果は無効となる」

レイ『ちょい待った俺は？』

貴史「おやすみ」

レイ『即答？えっマジ？』

貴史「おやすみ」

レイ『こうなったら駆を…』

駆子『自分、モンスター効果無効だから』

レイ『助けろよ！！』

駆子『無理みたい…』

レイ『くそー！！！』

《レイは墓地へ》

貴史「レイを生存させる

生贄がいなかったか
だがクイーンズナイトへの
攻撃は生きてる！！」

駆子、貴史「『レイの仇ー！！』」

《クイーンズナイト撃破。
アテムに１５００のダメージ》

アテム「ぐぁぁぁああっ…くっ」

貴史「ターンエンド」

遊戯（貴史）
ＬＰ　４０００
Ｍ　駆子ちゃん
ＡＴＫ　３０００
Ｒ　無し

アテム
ＬＰ　２５００
Ｍ　無し
Ｒ　無し

アテム視点

あのモンスター…勝てるのか…無理だ…どうあっても勝てる気がしない…。

アテム「くっ…」

貴史「どうした？アテム」

アテム「俺のターン！ドロー！！」

俺が引いたカードは……
ドローカード　手札抹殺
俺の手札は…以下の通り

《アテムの手札》
手札抹殺
バスターブレーダー
翻弄するエルフの剣士
熟練の黒魔術師
ブラック・マジシャン・ガール

……本当に…無理だ…

アテム「俺は熟練の黒魔術師を
守備表示で召喚
手札から魔法カード手札抹殺を発動
互いのプレイヤーは墓地に捨てた
同数枚デッキからドローする」

《アテムの手札》
オシリスの天空竜
強欲な壺

……俺はなんで神のカードなんて入れたんだ…。

アテム「強欲な壺を手札より発動」

貴史「ブラック・マジシャンか…」

マハードでもダメだ…負ける。
俺はこんな……くっ…負けない！！
俺は負けない！！

アテム「カードを二枚ドロー」

《ドローしたカード》
ラーの翼神竜
死者蘇生

マジいらねぇな神！！
だが死者蘇生が来たのはラッキーだぜ。

アテム「俺は死者蘇生を発動！！」

貴史「まさか！！」

アテム「使わせてもらうぜ！！
相棒の墓地に眠りし
訳の解らないカード！！
今此処に蘇れ！！！」

レイ『ジャンジャジャーン』

アテム「さらに魔力カウンターが
三つ溜まった事により

熟練の黒魔術師を生贄！！
来い！！マハード！！」

マハード『ファラオ…
三千年の時を越え私の魂
再び貴方に！！』

アテム「行くぜ相棒！！
暴走迷惑少年の攻撃！！
駆子ちゃんを粉砕せよ！！」

貴史「駆子ちゃんの特殊効果！！
相手の場に男性型モンスター
一体に付き１０００ポイントアップ」

暴走迷惑少年　ＡＴＫ　９０００
駆子ちゃん　ＡＴＫ　５０００

アテム「だからどうした！！
こっちは９０００だぜ！！」

貴史「第二の効果発動！！
作者パワー！！これは
攻撃力４５００以上のモンスターを
問答無用で破壊する」

アテム「マハード！！」

マハード『異界の戦士よ』

レイ『任せな！！』

マハード『頼んだ』

《マハード墓地へ》

アテム「これで効果は無効となる」

暴走迷惑少年　ＡＴＫ　６０００
駆子ちゃん　ＡＴＫ　４０００

貴史「チッ…」

レイ『見捨てた怨み！！
天地乖離す（エヌマ）
開闢の星（エリシュ）！！』

駆子『うわぁぁぁあああ！！』

《駆子ちゃんを墓地へ、
貴史に２０００のダメージ》

貴史「チッ…まさか此処まで
敵になるとはな…ちったぁ
共闘精神持とうぜ？」

レイ『テメェが言うな！！』

遊戯（貴史）
ＬＰ　２０００

M　無し
R　無し

アテム
LP　2500
M　暴走迷惑少年
R　無し

貴史視点

貴史「俺のターン！ドロー！」

《貴史の手札》
ツカサ
花梨
士貴
強欲な壷

……さて…勝負と行くか

貴史「魔法カード強欲な壷発動
デッキからカード二枚ドロー！！」

《加わったカード》
みんな一緒にやろうよっ！（魔）
ピンクの死神

……なんだろこれ…負ける気しねぇｗｗ

貴史「ピンクの死神を召喚！！」

アテム「ピンクの死神!?
（え?何それ…）」

レイ『奴が来る!!』

優太『初めてのコラボだ…
メッセージや感想で大概
弄ってくれたよな?二人とも』

レイ『俺なんかしたか?』

貴史「記憶にねぇな…」

優太『みんなみんな…
いつも俺を弄りやがって…
覚悟しろよ!』

暴走迷惑少年　ＡＴＫ　６０００
ピンクの死神　ＡＴＫ　１００００

レイ、アテム『「は?」』

貴史「ピンクの死神が
召喚に成功した時
攻撃力、守備力を五倍アップ」

レイ『ちょ…それチートすぎ!!』

アテム「待て!!そいつは明らかに

レベル４のモンスターじゃないぜ」

海馬（ピンクの死神の前では
勝率０％…まさか遊戯が
これほどまで強くなっていようとは）

マリク「あれは本当に器の遊戯なのか」

暴走迷惑少年　ＡＴＫ　６０００
ピンクの死神　ＡＴＫ　５００００

貴史「さぁ行くぜ！！
ピンクの死神…裏切り者に
必滅の魂を！！！」

優太『うぉおおおおお！！』

レイ『ぎゃふっ！！』

《暴走迷惑少年を墓地へ
アテムに４４０００のダメージ》

アテム「うわぁぁぁあああああああああああああああああっ…あぁぁぁあああああああああああああ、あああああぁぁぁ…うっぁ…」

アテムのＬＰ　０

貴史「アテム爆殺！！」

アテム「……あい…ぼう…」

遊戯「もう一人の僕…」

アテム「俺は…こんな結末を…」

遊戯「……」

アテム「望んでなんか…いなか…た」

遊戯「……おやすみ」

アテム「うっ……あ…」

アテムは意識を手放し地へと落ちた。

２０万アクセス記念で出るチートカード（前書き）

ルール説明

アテムと貴史は普通のデュエルでしたが
次のデュエルは遊戯王なのはのルールで行きます。
プラス　私ルール

いつでもドロー可
禁止カード解禁
シンクロカード解禁
（ただしシンクロモンスターは
私が生み出したある主人公です）
鬼引き乱発。
魔法、罠は好きな時発動可。
組んだ味方のモンスターを
勝手に生贄可能。
魔法、罠ゾーンにもモンスターを出せる

チートモンスターの契約

チートモンスターの自由気ままに行動させる
チートモンスターを本人許可無く
生贄にしてはいけない。
するとチートモンスターが一斉に襲い掛かります。

２０万アクセス記念で出るチートカード

名前：暴走迷惑少年（レイ・ツァイベル）
☆×４
種類：効果モンスター
属性：光属性
種族：チート族
攻撃力：？
守備力：？
効果：このカードの攻撃力・守備力はフィールド上に存在するモンスター一体につき３０００ポイントアップする。
このカードが魔法・罠・モンスター効果の対象になった時自分フィールド上のモンスターを身代わりにできる。
このカードが戦闘によって破壊された時、デッキ、手札から「ドＳ王（ドＳレイ）」を特殊召喚できる。

名前：ドＳ王（ドＳレイ）
☆×１２
種類：効果モンスター
属性：神属性
種族：チート族
攻撃力：？
守備力：？
効果：手札からカードを一枚捨てることで相手の魔法・罠・モンスターの効果を無効にできる。
このカードは攻撃対象にならない。
自分のターン終了時に自分フィールド上のこのカード以外のモンスターを一体をリリースする。しなければこのカードを墓地に送り、

墓地の「暴走迷惑少年（レイ・ツァイベル）」を通常モンスター扱いとしてフィールドに攻撃表示で特殊召喚する。
このカードの攻撃力・守備力はフィールド上のモンスターの最も攻撃力の高いモンスターの五倍になる。

永続魔法カード「四重結界」
このカードは「ドS王（ドSレイ）」がフィールドに存在するときのみ発動可能。このカードは「ドS王（ドSレイ）」がフィールドから離れたとき以外では破壊、無効にされない。次の効果を任意のタイミングで発動できる。

・デッキ・墓地・手札から任意の装備魔法を「ドS王（ドSレイ）」に装備できる。

・相手フィールド上のモンスター一体を選択する。その後「タタリ―選択したモンスター名」を自分フィールド上に特殊召喚する。選択したモンスターと戦闘を行ったときそのモンスターを破壊する（ダメージ計算は適用されない）「タタリ」は同名モンスターが存在しなくなった場合破壊される。

・「ドS王（ドSレイ）」のコントローラー以外魔法カードを発動できない。

・手札から魔法カードを捨てることで、
1、相手プレイヤーに１０００ポイントのダメージ。
2、相手モンスターを破壊。
のどちらかを選択し、このカードに魔力カウンターを乗せる。
このカードが破壊されたとき、このカードに乗っている魔力カウンター一つにつき、

相手の手札を一枚、相手のデッキの一番上のカードを一枚、相手の墓地の一番下のカードをゲームから除外し、相手プレイヤーのライフを魔力カウンター分の１にする。

一条要
☆☆☆☆
効果モンスター
地
戦士
１５００
１５００
効果
ターンエンドの度に攻撃力と防御力が５００アップ。最大５ターン。

ＯＲＴ
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
効果モンスター
神
アルティメットワン
１２０００＋α
１００００＋α
効果
５ターン以上経った一条要と2体のモンスターを生贄にすることにより召喚出来る。
生贄にした一条要以外のモンスターの攻撃力と防御力をプラスする。
このモンスターは召喚されればフィールド上に残り続ける。

水晶渓谷
フィールド魔法
効果
このカードは場にＯＲＴがいるときのみ発動できる。
相手の攻撃力と防御力を１５００ダウンさせる。
このカードはＯＲＴがある限り発動し続ける。

名前：”抹消されし神の代行者”ツカサ
☆×４
種類：効果モンスター・チューナー
属性：光
種族：人神族
攻撃力：１０００
守備力：１０００
効果：召喚エリアで表返る瞬間にデッキの中から花梨又は士貴と名の付くカードを一枚手札に取ってくることができる。また、花梨又は士貴が召喚された場合、このカードを装備カードとして装備させることができる。

特殊効果
？手札や召喚エリアからいつでもこのカードを墓地に移すことができる。
？墓地からいつでもリムーブにすることができる。
？や？を行った際、次のどれかの効果を一つ選んで実行できる。

A、デッキの中から花梨又は士貴と名の付くカードを一枚取ってくることができる。
B、手札にある、花梨又は士貴と名の付くカードを特殊召喚することができる。

C、指定したプレイヤーはこのターンの間ダメージを受けなくする。

名前：みんな一緒にやろうよっ！
種類：魔法カード
効果：リムーブか墓地もしくは手札に『ツカサ』、『花梨』、『士貴』の名の付くカードがあるとき、すべて召喚エリアに特殊召喚することができ、即座に敵のモンスターを無視して3人攻撃力あわせたどれか一人のカードが相手プレイヤーにダイレクトアタックをかけることができる。

名前：柳川　駆
☆×4
種類：通常モンスター
属性：無
種族：人
攻撃力：１９５０
守備力：１２００
効果：劫の眼「駆が攻撃の対象になった時、ワンターンに一度だけ攻撃してくる敵の攻撃力分を自分の攻撃力と守備力にプラスする。自分のターンになると攻撃力は戻る」
不屈の精神「場にアリスがいる場合、何度やられても復活する。その時の貫通ダメージ等は無効化する」
復讐の一手「もしアリスがやられた場合、アリスをやった奴の攻撃力を３０００下げて、駆の攻撃力を３０００上げて強制バトルする。この効果は敵のターン味方のターン関係なくアリスがやられた瞬間発動する。ちなみに劫の眼と重ねがけ出来る」

名前：アリス
☆×９
種類：特殊モンスター
属性：腐女子＋神
種族：神
攻撃力：２５００
守備力：２０００
効果：駆の存在「場に駆がいないと特殊召喚出来ない。逆に駆が居れば特殊召喚可」
腐女子パワー「アリスが場にいる限り、魔法や罠を無効化し、破壊等の効果を持つものは敵に対象を移しかえる。絶対に味方には魔法や罠の破壊効果は当たらない」
愛「ワンターンの内にアリスと駆が同時にやられた時は、次のターンの自分のスタンバイフェイズに復活させられる。ただしこの効果で復活させた場合、駆の不屈の精神は使えなくなり、愛も使えなくなる」

名前：駆子ちゃん
☆×１０
種類：融合モンスター（アリス＋駆）
属性：男の娘
種族：美少女
攻撃力：３０００
守備力：３５００
効果：羞恥心の力「相手に男性キャラがいた場合、一体につき１００攻撃力が上がる」
腐乙女の味方「自分の場に女性キャラがいた場合、守備力が一体につき１０００上がる」

作者パワー「退魔師見習いが時々アリスに貸す力。攻撃力４５００以上のモンスターを問答無用で破壊する」
神様の加護「罠や魔法、モンスター効果で駆子に対する効果は全て無効化する」

名前：赤茶眼の変人漢（ノーマル・アイズ・マサナリ・ヘンジン）
☆×１０
種類：通常？
属性：漢（オトコ）
種族：人間？（ヒューマン）
攻撃力：５０００
守備力：９０００
効果：『限界突破』天使にもらったチート力、鍛えれば強くなれる限界無し！えとつまり・・・ターン事に徐々に攻撃力&防御力が上がるとか？

名前：ピンクの死神
☆×４
効果モンスター
属性：神
種族：死神（笑）
攻撃力：１００００
守備力：１００００
効果
召喚に成功した場合、以下の効果を得る
攻撃力、守備力が六倍に上がる
戦闘、魔法、罠、効果モンスターの効果によって破壊されない（ダメージ計算は適用されない）

相手のフィールドにモンスターが存在する場合、任意の数に攻撃してもよい
自分のターンに相手モンスターを破壊した場合、もう二回攻撃してもよい
このモンスターが除外された場合、相手フィールドの魔法、罠を破壊し
自分のデッキから、任意の数で特殊召還してもよい

名前：終焉に誘いし死神
☆×１０
効果モンスター
種族：死神
属性：神
攻撃力：１０００００００
守備力：１０００００００
効果：このモンスターを召喚する場合、ピンクの死神を生贄に捧げる事
このモンスターは戦闘、魔法、罠、効果モンスターの効果によって破壊されない
除外無効
このモンスターが、フィールドから離れた場合
このモンスターの所有者は負けになる
このモンスターがバトルフェイズに相手モンスターを破壊した場合、相手のフィールド上のカードを全て破壊し、相手の手札全て捨てさせてもよい

名前：紅き翼の片翼　キョウ
☆×７

種類：効果モンスター
属性：闇
種族：神鳴流
攻撃力：２６００
守備力：２８００
効果：このカードは種族：神鳴流が場にいる時に特殊召喚することができる。場に種族：神鳴流のモンスターがいる場合発動することができる。
攻、守備力を４００ＵＰする。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。このカードは魔法、罠カードの効果では死なない。

マギア・エレベア
効果：キョウ、ネギ、エヴァンジェリンと名の付くモンスターのみ装備可能。このカードを装備したモンスターの攻撃力は２５００ポイントアップする。このカードが破壊されたターンは－１５００される。

花梨
☆８
攻撃力　２５００　守備力　２１５０

効果はツカサ、士貴が場に居ると攻撃力が１０００上がる。
召喚に成功した場合、士貴を手札、デッキ、墓地、除外から特殊召喚出来る。
このカードが場に有る限り相手は魔法カードが使用出来ない。

士貴
☆８
攻撃力　３０００　守備力　２６００
効果はツカサ、花梨が場に居る時、攻撃力３０００アップ。
召喚に成功した時、デッキ、手札からツカサを特殊召喚出来る。
次のメインフェイズまで場に存在してたら花梨をデッキ、手札、墓地、除外から特殊召喚出来る。
このカードが場に有る限り、相手は罠カードが使用出来ない。

ＫＡＲＩＮ
☆×２０
攻撃力　１７５６１００　守備力　９９９９９９
効果：ツカサと花梨、士貴が居た時に、特殊召喚出来るカード。
特殊召喚した時、墓地からツカサと名のつくカード全て場と魔法、罠ゾーンに特殊召喚する。

ツカサと名のつくカードが居た場合。
攻撃力が上がる。
一体なら８倍アップ
二体なら１６倍アップ
三体なら３２倍アップ

ツカサが魔法、罠ゾーンに居る場合
ＫＡＲＩＮの装備カードとして扱う。
一体装備に付き攻撃力を倍にする

２０万アクセス記念で出るチートカード（後書き）

出し切れるか不安だなぁ

２０万アクセス記念（前書き）

過去最長……びっくり……

20万アクセス記念

《三週間後》

城之内「遊戯!!行くぜ!!」

遊戯「うん!!」

海馬「ちょっと待った!!
この決闘(デュエル)
主催者権限により俺が凡骨と組む
フェアな条件でな!!」

城之内（助かったぜー…
正直遊戯に勝てる自信なかったしな）

遊戯「海馬君!!」

貴史（随分楽しめそうな決闘じゃねぇか）

アテム（俺達の結束の力
見せてやろうぜ相棒、貴史君）

遊戯、貴史（（うん（ああ））

顔芸(マリク)「決着をつけるぞ遊戯!」

虫野郎「昆虫の恐ろしさを
味あわせてやるよ」

闇バクラ「遊戯…俺様も入れな」

遊戯「マリク！！バクラ君！！」
→ハガを無視するＡＩＢＯ

城之内「こっちは海馬と俺と
マリクか…へっ
負ける気しねぇな！！」
→ハガを無視する凡骨

貴史「そいつは気がするってだけだタコ」

城之内「あんだとこの野郎！！」

虫野郎「俺を無視するなー！！」

海馬「磯野！！デュエル開始
宣言を高らかにあげろ！！」

磯野「デュエル開始ＧＯ！」

海馬「俺のターンからだ」

貴史「なわけあるか俺のターン」

城之内「先攻は俺からだ
俺のターン！！」

闇バクラ「アメェんだよ

俺のターン！！」

顔芸「俺様のターンだ」

虫野郎「俺のターンなんだよ！！」

貴史「蛇殺！！」
《ハガに蛇殺を放ち》

虫野郎「うわぁぁぁぁぁ…」

海馬「この瞬間にドロー！！」

城之内、闇バクラ、貴史、顔芸『ドロー！！！』

海馬（ふぅん…勝利は我が手中にあり）

城之内（おっし！こいつは良い手札だぜ）

闇バクラ（おいおいこれじゃあ
勝ちは決まったもんじゃねぇか）

顔芸（クックックッ…）

貴史（ハッ馬鹿げた手札だな）

城之内「行くぜ！！手札から
鋼鉄の騎士ギア・フリードを召喚だぜ
さらに魔法カード拘束解除発動！！
ギア・フリードをリリースして

デッキから剣聖ーネイキッド・ギア・フリード特殊召喚!!
リバースカードを
一枚セットしてターンエンドだぜ」

剣聖ーネイキッド・ギア・フリード
ＡＴＫ　２６００

貴史「俺のターンだな
俺は暴走迷惑少年を召喚!!
リバースカードを二枚セット
ターンを終了する」

レイ『呼ばれた!!飛び出た!!
「うるさい!!」また俺の
登場シーンの邪魔すんのかよ!?』

貴史「今デュエルの最中だ!!」

レイ『やるか？』

貴史「また墓地に送り返してやろうか」

レイ『それだけはすいません!!』

暴走迷惑少年
ＡＴＫ　６０００

虫野郎「お、おい遊戯…
そいつマジでレベル４か？」

貴史「当然だ！！」

闇バクラ「馬鹿げた攻撃力だぜ」

レイ『ｃｈｅａｔだからな』

城之内「チート過ぎだぜ」
→さりげなくドロー

海馬「ふぅん…」

顔芸（どんなモンスターでも
ラーの前じゃゴミなんだよ）
→ラーが最強だと信じてやまない人

海馬「俺のターンだな
俺は手札から融合を発動！！
手札のブルーアイズ三体を融合！！
見よ！！これが我が究極のしもべ
青眼の究極竜！！」

青眼の究極竜
ＡＴＫ　４５００

貴史「この瞬間、暴走迷惑少年の攻撃力アップ」

暴走迷惑少年
ＡＴＫ　６０００→９０００

城之内「攻撃力９０００だと！！」

海馬「貴様ァア！！恥を知れ！！」

レイ『ｃｈｅａｔだからな』

闇バクラ「便利な台詞だぜ」
→ドローするバクラ

顔芸（ラ、…ラーさえ喚べば…）
→ラーが史上最強だと信じてる人

貴史「……」
→二、三回ドロー

海馬「くっ…リバースカードを
一枚セットしてターンを終了する」

闇バクラ「オレ様のターン！
リバースカードを四枚セットして
ターンを終了だ」

海馬「ふぅん…手札事故か…」

城之内「真っ先に血祭りにあげてやるぜ」

顔芸「ご愁傷様だな…」

虫野郎「ぷっ…あっはははは
ダッセェー事故ってやんの」

闇バクラ「続けな…（あの虫殺す…）」

顔芸「オレのターン！！
オレは手札より魔法カード
古のルールを発動！！
このカードはレベル５以上の
モンスターを特殊召喚出来る
オレが喚ぶのはライダー！！」
（※本来は通常モンスターだがマリクのオレルール採用）

レイ『ライダー？…
おい貴史…ライダーって
カードあったか？』

貴史「いや…ねぇな…
……まさか…」

ライダー『サーヴァント・ライダー
召喚に応じ参上しました…
優しく…殺してあげましょう』

ライダー
ＡＴＫ　２７００

貴史「あーやっぱりかぁ
そうじゃないかと思った」

レイ『まぁ普通じゃ楽しくねぇしな…いっか』

城之内「すげぇ…目のやり場に困るぜ」

→カードをドロー

海馬「ふぅん…下らんな」
→カードをドロー

マリク「さらにリバースカードを
三枚セットし、ターンエンド」

貴史「暴走迷惑少年の効果により
攻撃力３０００ポイントアップ」

暴走迷惑少年
ＡＴＫ　９０００→１２０００

城之内「一万二千…くっ…
…下手に手は出せないぜ…」

レイ『勝てる気しねぇなぁ…』

貴史「罠発動されたらたまらないけどな」

レイ『あっ…リリースするカードがない』

貴史「発動されたら終わりだぜ」

レイ『そのリバースカードはなんだよ?』

貴史「えっ…うーんカウンター罠、魔法
じゃないのは確かだな…」

レイ『使えね…』

貴史「墓地に送ってやろうか」

レイ『それだけはマジすまん』

虫野郎「次は俺のターンだぜ」

虫野郎除く全員（誰だっけ？こいつ）
→ハガの存在を忘却中

虫野郎「俺のターン」

貴史「無効！！」

虫野郎「何！！」

貴史「うっそぴょ～ん」

虫野郎「（……イラッ）
俺のターン！！ドロー！！
俺はアルティメット・インセクト　ＬＶ３を召喚！！
そして手札から魔法カードレベルアップ発動！！
デッキからアルティメット・インセクト　ＬＶ５特殊召喚！！
」

アルティメット・インセクト　ＬＶ５
ＡＴＫ　２３００

貴史「はいはい…レイの攻撃力アップ」

暴走迷惑少年
ＡＴＫ　１２０００→１５０００

虫野郎「アルティメット・インセクト　ＬＶ５の効果発動！！
遊戯のモンスターを弱体化させる！！」

レイ『たった５００ポイントだろ』

貴史「無駄だな…」

暴走迷惑少年
ＡＴＫ　１５０００→１４５００

虫野郎「リバースカード二枚セット
ターンを終了するぜ」

貴史（遊戯・アテム）
ＬＰ　４０００
Ｍ　暴走迷惑少年
ＡＴＫ　１４５００
Ｒ　一枚
闇バクラ
ＬＰ　４０００
Ｍ　無し
Ｒ　四枚

ＶＳ

城之内
ＬＰ　４０００
Ｍ　剣聖ーネイキッド・ギア・フリード
ＡＴＫ　２６００
Ｒ　二枚
海馬
ＬＰ　４０００
Ｍ　青眼の究極竜
ＡＴＫ　４５００
Ｒ　一枚
マリク
ＬＰ　４０００
Ｍ　ライダー
ＡＴＫ　２７００
Ｒ　三枚
ハガ
ＬＰ　４０００
Ｍ　アルティメット・インセクト　ＬＶ５
ＡＴＫ　２３００
Ｒ　二枚

城之内「俺のターンだぜ！！ドロー！！
ネイキッドにデーモンの斧を装備！！」

剣聖ーネイキッド・ギア・フリード
ＡＴＫ　２６００→３６００

城之内「さらに手札を一枚捨て
閃光の双剣ートライス装備」

剣聖ーネイキッド・ギア・フリード
ＡＴＫ　３６００→３１００

城之内「まだまだ！！
流星の弓ーシールを装備するぜ」

剣聖ーネイキッド・ギア・フリード
ＡＴＫ　２１００

アテム「まさか！！二回とも
俺にダイレクトアタックを！！」

城之内「遊戯に勝つには
これしか無いからな…」
→よくある効果忘却

海馬「凡骨の…」
→予想外な行動で効果に追求無し

顔芸「ワンターン・キル！！」
→上記同じ

城之内「剣聖ーネイキッド・ギア・フリード！！
遊戯にダイレクトアタック！！」

アテム「リバース罠発動！！
和睦の使者！！
これで相手から受ける全ての
戦闘ダメージは０になる！！」

→効果に気付いてるけどあえて無視

城之内「甘いぜ！！リバース罠発動！！
トラップ・ジャマー！！
和睦の使者の発動を無効にし破壊する」

アテム「なんだと！！」

闇バクラ「おっとそうはいかねぇ
リバース罠発動！！
沈黙のダーク・スピリッツ！！
ネイキッドの攻撃を無効！！
城之内の場はネイキッドのみ
だがこのデュエルは組んだ奴の
場も自分の場となる…
虫けらが代わりに攻撃しろ」

虫野郎「なっ！！」

闇バクラ「ただじゃすまさねぇ
リバース魔法発動！！融合解除！！
青眼の究極竜は青眼の白龍三体となる！！」

海馬「くっ…」

貴史「レイの攻撃力アップ」

レイ『漲ってキター！！！！』

暴走迷惑少年

ＡＴＫ　１４５００→２０５００

顔芸「攻撃力二万五百！！」

虫野郎「うわぁぁぁぁぁぁっ！！」

貴史「反撃の…」

レイ『チートハンドクラッシャー！！』

《アルティメット・インセクト撃破》

ハガ　ＬＰ　－１８２００

城之内「すまねぇ…ハガ…」

貴史「バクラが早く対処してれば
俺の和睦が破壊されずにすんだんだが」

闇バクラ「まぁ良いじゃねぇか
（ざまぁみやがれ虫野郎…お前は
虫ポケモンとじゃれあってな）」

貴史「まぁいいか」

顔芸「使えねぇ虫けらだなぁ」
→カードを二枚ドロー

海馬「ふぅん…」

ライダー『少しは頑張って欲しかったですね』

レイ『まぁ時間が経てば経つ程
こっちは極悪になるしな』

城之内「俺はターンを終了する」

貴史「レイの攻撃力は変動する」

レイ『変動すんの多くね？』

暴走迷惑少年
ＡＴＫ　２０５００↓１８０００

貴史「しょうがないさ…
俺のターン！！ドロー！！
一条　要召喚！！」

要『明らかに場違いじゃね？』

一条　要
ＡＴＫ　１５００

貴史「さらに融合賢者発動！！
デッキから融合を手札に加え
さらに発動！！手札のアリスと
柳川　駆を融合させる！！
駆子ちゃん特殊召喚！！」

駆子『またこの姿…』

駆子ちゃん
ＡＴＫ　３０００

貴史「召喚が楽なんだ…
さらに駆子ちゃんの効果発動！！
相手の場に男性型モンスターが
居るなら駆子ちゃんの攻撃力１０００アップ」

駆子『恥ずかし過ぎる／／／』

駆子ちゃん
ＡＴＫ　３０００→４０００

貴史「まだまだ…魔法発動！！
二重召喚！！
乳製品飲料ヒーロー・ミ○ミ○ン召喚！！」

乳製品飲料ヒーロー・ミ○ミ○ン
ＡＴＫ　１００

レイ『なぁ…それってまさか』

駆子『俺の見間違いじゃなければ』

ライダー『まずいですね…』

要『？どうしたんだ？お前ら』

貴史「おっと一気に召喚したから

忘れる所だったぜ…
レイの攻撃力アップする！！」

城之内「しまった！！」

海馬「おのれぇ…」

顔芸「くっ」

レイ『よっしゃぁぁぁっ！！』

暴走迷惑少年
ＡＴＫ　１８０００→２７０００

貴史「まずは凡骨を消すか…
暴走迷惑少年でネイキッドに
攻撃する！！」

城之内「うげっ！！」

レイ『約束されし（エクス）
勝利の剣（カリバー）！！』

城之内「リバース罠発動！！
攻撃の無力化！！」

貴史「チッ…ターンエンド」

一条　要
ＡＴＫ　１５００→２０００

海馬「俺のターン！！ドロー！！
ふぅん…遊戯…貴様の最後だ
ブルーアイズでその雑魚を
蹴散らす！！
滅びのバーストストリーム！！」

青眼の白龍
ＡＴＫ　３０００
乳製品飲料ヒーロー・ミ○ミ○ン
ＡＴＫ　１００

ライダー『まずい！！』

貴史「やはりな…この瞬間
ミ○ミ○ンの効果発動！！
この飲料が粗末に扱われた時
ミ○ミ○ンを愛する者が
ミ○ミ○ンを守るぜ！！」

海馬「なんだと！！」

貴史「デッキに眠りし我が友！！
今、ミ○ミ○ンを守るため
現れろ！！
赤茶眼の変人漢（ノーマル・アイズ・マサナリ・ヘンジン）！！」

マサ『ミ○ミ○を粗末に扱うんじゃねー！！』

赤茶眼の変人漢

ＡＴＫ　５０００

海馬「攻撃力五千だと！！」

城之内「ブルーアイズを上回る攻撃力！！」

貴史「迎撃の！！」

マサ『素手バリアー！！』

《素手でバーストストリームを跳ね返し
ブルーアイズを撃破》

海馬「くっ…おのれぇ…」
ＬＰ　４０００→２０００
青眼の白龍　残り２体

城之内「バーストストリームを素手で？」

闇バクラ「信じらんね！」

マサ『バグキャラだからね
カッチカチやぞ？』

ライダー『やはり来ましたか…』

マサ『おっライダーじゃね？
久しぶり（？）だな』

レイ『俺達も居るぜ』

マサ『レイも駆もか！！』

駆子『もはやこの格好に
誰も違和感を感じないとか…』

要『まぁ…その頑張れや』
→最初女と思ってた人

駆子『ありがとう…（泣）』

貴史「話の最中悪いが後にしてくれ」

チート達『了解～』

海馬「またしても…
忌ま忌ましいチート共め」

貴史「ミ○ミ○ンの効果は
マサが場に居ない時
デッキ、手札からマサを召喚して
ミ○ミ○ンの代わりに戦闘をするのさ
さらに戦闘を終えお疲れのマサに
自己を捧げる事によってマサの
攻撃力をアップさせる」

マサ『ごくごくごく…』
ＡＴＫ　５０００→６０００

城之内「攻撃力六千！！」

海馬「馬鹿な！！」

貴史「だが一体居なくなった事により
レイの攻撃力が三千下がる」

レイ『まぁしゃあねぇか』

暴走迷惑少年
ＡＴＫ　２７０００→２４０００

マサ『攻撃力二万代？えっマジ？』

レイ『マジマジ』

マサ『どんだけチートなん？』

レイ『チートじゃねぇｃｈｅａｔだ』

マサ『単に言い換えただけじゃね？』

レイ『そうとも言う』

マサ『まぁいいか』

海馬「だが貴様にはまだ
雑魚モンスターが居る事を忘れるな」

要『俺だよな…すまん貴史…』

貴史「大丈夫だ信じろ」

要『リバースカードが無いのにどう信じろとおっしゃる？』

アテム「バクラを信じるんだ！」

闇バクラ「……ｚＺＺ」

マサ『寝てるますがな！』

貴史「バクラ！！イケるな？」

闇バクラ「！…ん？あ、あぁ任せな遊戯」

要『無理だ！！俺は此処で終わる！！』

闇バクラ「おいおい信用しろよ」
→さりげにドロー

要『出来ねぇよ！！』

アテム「信じる事は大事だぜ」
→ダイレクトに二枚ドロー

海馬「行くぞ！！
滅びのバーストストリーム！！」

青眼の白龍
ＡＴＫ　３０００

一条　要
ＡＴＫ　２０００

闇バクラ「リバース罠発動！！
攻撃の無力化！！」

レイ『ファルコンはこねぇのか』

要『寧ろファルコンだったら
次の攻撃で俺が終わるわ！！』

闇バクラ「そういう事」

レイ『ちぇっ生で見たかったんだがなぁ』

闇バクラ「焦るなよ…」

海馬「くっ…」

城之内「バクラが遊戯を守って
遊戯を倒せねぇなら
バクラを先にやるしかねぇみてぇだな
頼んだぜ？マリクちゃんよ」

顔芸「うるせぇよ…オレ様に
指図すんじゃねー！！」

海馬「俺はリバースカード二枚セット
ターンを終了する」

闇バクラ「オレのターン！！
ドローカード！！
行くぜ…オレは魔法カード
死者蘇生を発動！！
蘇生させるのは勿論！！
青眼の白龍！！」

青眼の白龍
ＡＴＫ　３０００

海馬「キサマァ！！」

遊戯「さらに！暴走迷惑少年の
攻撃力３０００アップ！！」

レイ『キタキタキタキタキター－－－ッ！！』

暴走迷惑少年
ＡＴＫ　３００００

レイ以外のチート達（あいつ何処まで行くんだ？）

城之内「ちったぁ自重しやがれ！」

レイ『自重？何ソレ美味しいの？』

顔芸（怖い怖い…まぁラーの
攻撃で奴の場のカードを一掃
すりゃあ攻撃力がいくらあろうが
無駄な事なんだよ…クックックッ）

闇バクラ「さらに！…
手札より儀式魔法
闇の支配者との契約発動！
手札から2体モンスターを
墓地に送り、そして現れな！！
闇の支配者ーゾーク！！」

闇の支配者ーゾーク
ＡＴＫ　２７００

遊戯「さらに！！」

レイ『ぐんぐん漲って来ます！』

暴走迷惑少年
ＡＴＫ　３３０００

城之内「頭痛くなってきたぜ」

海馬「さっさと続けろ！」

闇バクラ「おいチートと変態」

レイ『ｃｈｅａｔだ！バーカ』

駆子『変態言うな！！』

闇バクラ「うるせぇ
いいから聞きやがれ」

レイ、駆子『なんだ？』

闇バクラ「攻撃力減るが構わねぇか？」

レイ『リリースしなければなんだって良いぜ』

駆子『別に構わないけど…』

闇バクラ「そんじゃ遠慮なく
闇の支配者ーゾーク
ネイキッドを攻撃！！！」

闇の支配者ーゾーク
ＡＴＫ　２７００
剣聖ーネイキッド・ギア・フリード
ＡＴＫ　２１００

城之内「うえっ！！マジかよ！！
なーんてな…リバース罠発動！」

闇バクラ「させるか！ポルターガイスト発動！」

城之内「魔法除去発動！」

闇バクラ「アメェんだよ魔法除去発動！」

城之内「くそっ！！」

《ネイキッド撃破》

城之内「うぉぉぉぉっ！！」

ＬＰ　４０００→３４００

暴走迷惑少年
ＡＴＫ　３３０００→３００００
駆子ちゃん
ＡＴＫ　４０００→３０００

闇バクラ「そして！
ブルーアイズの攻撃！！
滅びのバーストストリーム！」

城之内「うぉぉぉぉぉぉっ！！」

ＬＰ　３４００→４００

闇バクラ「ターンエンドだぜ」

顔芸「オレのターン！ドロー！
オレは手札より魔法カード
おろかな埋葬を発動！
デッキからモンスターを一体
墓地に送りデッキをシャッフル
そして死者蘇生発動！！」

アテム「まさか！！」

顔芸「遊戯…これでお前はおしまいだ

墓地に眠りしラーを特殊召喚！！
さらにライフ１０００払う…
ラーよ！！今こそ不死鳥となりて
敵を焼き尽くせ！！
ゴッド・フェニックス！！」

ラー『キシャァァアアッ！！』

闇バクラ「リバースカードオープン」

顔芸「無駄無駄ァァア！」

闇バクラ「エネミーコントローラー」

顔芸「！！」

アテム「確か神への魔法効果は」

闇バクラ「ワンターン有効」

顔芸「オノレェェエエ！！」

闇バクラ「ゾークをリリースして
ラーのコントロールを得る！！」

顔芸「ぐっ…ターンエンドだ」

《ラー墓地に戻る》

貴史（遊戯・アテム）
ＬＰ　４０００
Ｍ　暴走迷惑少年
ＡＴＫ　３０００００
Ｍ　一条　要
ＡＴＫ　２０００
Ｍ　駆子
ＡＴＫ　３０００
Ｍ　赤茶眼の変人漢
ＡＴＫ　６０００
Ｒ　０
闇バクラ
ＬＰ　４０００
Ｍ　青眼の白龍
ＡＴＫ　３０００
Ｒ　０

ＶＳ

城之内
ＬＰ　４００
Ｍ　無し
Ｒ　０
海馬
ＬＰ　２０００
Ｍ　青眼の白龍×２
ＡＴＫ　３０００×２
Ｒ　３
マリク
ＬＰ　３０００

M　ライダー
ＡＴＫ　２７００
Ｒ　３
ハガ
ＬＰ　－１８２００

城之内「俺のターン！ドロー！」

レイ『さてさて何が出るかな？』

駆子『俺らに勝てるのかな？アレで』

要『俺はいまだにピンチだけどね』

マサ『大丈夫大丈夫
マサさんが守ってやるよ』

貴史「いや…んな特殊能力
マサには無いぜ？」

マサ『うそ～ん…えっ…マジ？
こう…アレ的な…なんかないの？
友情パワー！！みたいな…』

貴史「ねぇなぁ…」

要『マサ……』

マサ『……わりぃ出来んらしい』

要『いや…気にすんな…』

城之内「よしっ！！来たぜ
俺の切り札！！カズマを召喚！！」

カズマ『やっと俺の出番か』

カズマ
ＡＴＫ　２５００

貴史「レイと駆子ちゃんの
攻撃力がアップ」

暴走迷惑少年
ＡＴＫ　３００００→３３０００
駆子ちゃん
ＡＴＫ　３０００→４０００

城之内「相手のモンスターの
攻撃力が上がった瞬間カズマの
攻撃力も上がるぜ！！」

カズマ
ＡＴＫ　２５００→５０００→７５００

マサ『おぉ！！すげぇ！！』

要『七千……終わった…』

駆子『俺の攻撃力を…上回った』

レイ『ハッ上等!!』

城之内「カズマで要に攻撃!!」

カズマ『嫌だね』
→言うことを聞かないカズマ

城之内「なんだと!!」

カズマ『あの兄ちゃん（レイ）
と戦った方が万倍
楽しそうじゃねぇか』

アテム「奴の狙いは…
暴走迷惑少年か!!」

レイ『ん?俺?』

城之内「待て!!わざわざ
自滅する気かよ!!」

カズマ『行くぜ…』

城之内「お願い!!待って!!」

レイ『来な…返り討ちにしてやるよ』

カズマ『言ってろ!!衝撃の…』

城之内「ＮＯｏｏｏｏｏ！！」

海馬（今こちらがわの
最高戦力を失うわけにはいかん
チッ手間をかけさせてくれる）

顔芸（今あいつを失うわけにはいかねぇ…
チッ…しょうがねぇ手を貸すか）
海馬、マリク『受け取れ凡骨！！』

海馬「リバース魔法発動！！
共闘する絆！！！」

海馬と一部のチート以外全員『なんだと！！』

貴史「海馬が共闘！？」

闇バクラ「信じらんねぇ！！」

レイ『俺は夢でも見てるのか？』

要『馬鹿な！！』

駆子『これはどういう事だ！』

城之内「お前どうしちまったんだよ？」

海馬「うるさい！！今ここで
奴を倒さなければ俺達は

塵と化すのだぞ！！

共闘する絆は自軍の場にある
モンスター全て一体のモンスターに
上乗せする！！！
ブルーアイズ２体とマリクの
ライダーの攻撃力を凡骨の
モンスターの攻撃力に加算する」

カズマ
ＡＴＫ　１６２００

貴史「だが残念！！」

闇バクラ「攻撃力はまだたんねぇなぁ」

カズマ『うぉおおおおっ』

レイ『でりゃぁぁぁぁぁぁっ』

顔芸「オレの
リバースカードがまだあるぜ
リバース魔法発動！！限界突破！！
このカードは装備した
モンスターの攻撃力を倍にする」

貴史「何！！」

カズマ『もっと…もっと輝けぇえ！！』

カズマ
ＡＴＫ　１６２００→３２４００
暴走迷惑少年
ＡＴＫ　３３０００

海馬「これでもまだ届かないだと」

顔芸「チッ世話が焼けるぜ
リバース魔法発動！！
太陽神加護（ラー）！！
このカードは墓地に眠るラーの
効果をモンスターに与えるカード」

城之内「おっし！！海馬のブルーアイズ
一体をカズマに捧げるぜ！！」

海馬「キサマァァアア！！」
カズマ『おぉぉぉおりゃぁぁああ！！』

レイ『くっそ…』

カズマ
ＡＴＫ　３２４００→３５４００
暴走迷惑少年
ＡＴＫ　３３０００→３００００

貴史「しまった！！
ブルーアイズが一体
消えた事によって
レイの攻撃力が」

海馬、顔芸、城之内『勝った！！』

要『そんな！！』

駆子『レイが……』

マサ『負け……た…』

城之内「よっしゃぁああ！！」

顔芸「ふはははははは
あっはははははは！！」

海馬「くっ…ブルーアイズ…
だがよくやった凡骨」

貴史「そいつは…どうかな？」

城之内、海馬、マリク『何！！』

顔芸「おいおい負け惜しみか？」

海馬「ふぅん…見苦しいぞ遊戯！！」

城之内「諦めて負けを認めな！！」

貴史「ふっ…」

ＬＰ　４０００

城之内「ライフが変動していないだと！！」

海馬「まさか！！」

貴史「そう…クリボーを墓地に送り
戦闘ダメージを０にしたのさ」

顔芸「だが貴様にはあのチートはいない」

貴史「ふっ…そいつは
これを見ても言えるか？
暴走迷惑少年が戦闘により
破壊された時、デッキ又は手札より
ＤＳ王が特殊召喚される！！
デッキより現れろ！！
究極のＳ…ＤＳ王！！！」

海馬、城之内、顔芸『なんだと！！』

レイ『よくもまぁやってくれたなわっぱ共
ただで死ねると思うなよ……』

貴史「ＤＳ王の攻撃力は
場に居るもっとも攻撃力の
高いモンスターの五倍となる！！」

カズマ
ＡＴＫ　３５４００
ＤＳ王
ＡＴＫ　１７７０００

城之内、海馬、顔芸『……』
→チートに絶望した人
凄い顔をしてます。
１８歳未満の方には見せられませんｗｗｗ

貴史「速く進めな」

城之内「ハッ！！カ、カズマの
攻撃力がアップするぜ」

カズマ
ＡＴＫ　３５４００→３７９００

城之内「リバースカード二枚セットしてタ、ターンを終了するぜ……」

貴史「俺のターン！！ドロー！！
行くぜ…天よりの宝札発動！！
互いのプレイヤーは手札が
六枚になるようドローする」
→テレビ版です。

貴史「俺は神鳴流剣士を召喚する！！
そして場に神鳴流が居る時
デッキより紅き翼の片翼　キョウを
特殊召喚する！！」

神鳴流剣士
ＡＴＫ　１２００
紅き翼の片翼　キョウ

ＡＴＫ　２６００

駆子『このデュエルでは
魔法、罠ゾーンにも
モンスターを配置出来る…』

香『ようやく出番か…』

貴史「さらに！！二枚目の
二重召喚発動！！
手札よりピンクの死神召喚！！」

優太『やっほー』

ピンクの死神
ＡＴＫ　１００００→６００００

顔芸「攻撃力六万！！」

海馬「くっ…」

貴史「さらに装備魔法
服パーン！！発動！！」

チート達『えっ…』

レイ『ち、ちょっと待てわっぱ
なんだ？その服パーンってのは
悪い予感しかせんぞ？』

貴史「服パーン！！は
チートモンスター専用カード
これを装備する事によって
チートモンスターの服が
……」

チート達『（ゴクリッ）』

貴史「……爆発する」

駆子『ま、まさかと思うけど
本気で発動しないよね？』

要『このままでもイケるって』

レイ『そうそう』

香『よ、余裕ですよ』

マサ『だからそれしまって！！』

闇バクラ「大変だなぁ…」

貴史「行くぜ！！」

チート達『行かないで！！』

貴史「その肉体！！
女性に魅せつけてやれ！！マサ！！」

マサ『お、俺?!』

他チート達『(ホッ…マジ助かった)』

マサ『ちょっ…待った…
アレですよ?そんな事したら
マサさん変態政成変人に
なっちゃうよ?
変態で変人になるんだよ?
いいの?本当にいいの?』

貴史「構わないぜ!!」

マサ『躊躇無し!!』

《パーン!!とマサは
海パン一枚の姿になる》

マサ『あっ海パンになるんか
ならいいさね!
ってアレ?なんでライダーこっちいんの?
つかドラゴンも来てる!!』

顔芸「どういう事だ!!」

ライダー『気付いたらこちら側に』
ブルーアイズ『……／／』
→二人共事情によりバクラの場に

海馬「俺のブルーアイズが」

貴史「マサの裸体は女性を虜にする
ライダーは勿論…海馬…
お前のブルーアイズは……」

青眼の白龍＝キサラ

海馬「！！！」

レイ『そうかキサラは女』

要『つまりは…』

駆子『マサの肉体の虜…』

香『マサさん凄い…』

アテム「まだだ！！
手札から強欲な壺発動！！
二枚ドローする！！
行くぞ…二枚目天よりの宝札！！」

城之内「まただと！！」

海馬「しかし俺達は既に六枚」

顔芸「遊戯だけに許された手札補強」

貴史「ふっ…ご都合主義と
言うなかれ…鬼引き乱発の

知らせはついてるぜ…
魔法カード発動!!
みんな一緒にやろうよ!」

チート達『!!あ、あのカードは…』

貴史「バクラと俺の場に
三体のチートモンスターを出現させる」

士貴『うぃーっす』
→バクラの場に特殊召喚

ツカサ『やっと出番が来たよぅ』
→バクラの場に特殊召喚

花梨『さぁやりましょうか…』
→遊戯の魔法、罠ゾーンに特殊召喚

貴史「士貴は場に花梨とツカサが居ると
攻撃力３０００アップする」

士貴
ＡＴＫ　３０００↓６０００

貴史「花梨もツカサと士貴が
場に居る時攻撃力が１０００アップする」

花梨
ＡＴＫ　２５００↓３５００

貴史「そして三体のチート達
の攻撃力を一体に注ぎ
モンスターを無視して
ダイレクトアタックする！！」

士貴
ＡＴＫ　６０００→０
花梨
ＡＴＫ　３５００→９５００
”抹消されし神の代行者”ツカサ
ＡＴＫ　１０００→０
花梨
ＡＴＫ　９５００→１０５００

城之内、海馬、顔芸『何！！』

城之内「き、汚ねぇぞ！！」

海馬「デュエリストとしての
誇りはどうしたー！！！」

顔芸「己ぇえええ…」

貴史「だからなんだよ
花梨！！マリクにダイレクトアタック！！」

花梨『我が勝利の為に…
消え去るがいいわ……』

カズマ『待てよ…あんた

俺と喧嘩しようぜ？なぁおい！！』

花梨『貴方は私以外の方がやります』

カズマ『逃げるのかい？』

花梨『……そこまで言うのなら』

カズマ『へっ…』

花梨『頼みます…貴史…』

貴史「任せな」

花梨『士貴！！ツカサ！！』

ツカサ『了解だよ！！』

士貴『行くぜ…』

貴史「レベル８花梨と
レベル８士貴に…レベル４
ツカサにチューニング！！
集いし想いが真の我が儘姫を
呼び出す…シンクロ召喚！！
降臨せよ！！ＫＡＲＩＮ」

ＫＡＲＩＮ
ＡＴＫ　１７５６１００

貴史「特殊召喚に成功した時
ツカサを魔法、罠ゾーンに
召喚して花梨に装備するが
俺の空きはもうない…よって
ＫＡＲＩＮの効果は発動出来ない」

カズマ『…………………』
→予想外な攻撃力に口が塞がらない

貴史「さらにドS王の攻撃力が変わる」

ＫＡＲＩＮ
ＡＴＫ　１７５６１００
ドS王
ＡＴＫ　１７５６１００×５＝８７８０５００
カズマ
ＡＴＫ　３５４００↓３７９００

城之内（冗談じゃねぇぞ…）

カズマ『撃滅のシェルブリット
バーストォオ！！』

花梨『ＤＥＡＴＨ』

カズマ『うぅぅおぉおぉおぉおっ！！』

《カズマ破壊》

城之内「う、うぅ…うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

ぁぁぁぁ、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

ＬＰ　４００→－１７１７８００

貴史、花梨、ツカサ、士貴『凡骨爆殺！！』

海馬「……ι」
→頭の中が恐怖で彩られてる

貴史「まだだ…まだ俺の
バトルフェイズは終わっちゃいない！！
ドＳ王！！マリクにダイレクトアタック！！」

レイ『クッハハハハ……
覚悟は良いか？わっぱ…』

マリク「ぐぅ…おぉ…」

貴史「粉砕しろ！！撃砕しろ！！殲滅しろ！！」

レイ『エクスカリバー（改）！！』

顔芸『ぬぅぅぅおぉおおおおおおおお、おぉおぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぎゃぁぁぁぁ…っ！！』

ＬＰ　３０００→－８７７７５００

貴史、レイ『マリク撃殺！！』

貴史「さぁ海馬…」

遊戯「覚悟は出来たかい？」

海馬「お、俺は逃げんぞ…」

アテム「良い度胸だぜ…
なら行くぜ俺達のラストアタック！！」

貴史「要！！」

要『ニードルガン！！』

海馬「ぐぁぁぁぁっ！！」

ＬＰ　２０００→０

遊戯「まだだよ…マサさん！」

マサ『追撃すんの？もうよくね？』

遊戯「ダメだよ…やるなら徹底的にさ
それがデュエルの基本なんだ」

マサ『そうか…んじゃ…
マサさんデコピン！！』

《ガスンッ！！》

海馬「ぐわぁぁぁぁっ！！」

ＬＰ　０→－６０００

アテム「香！！頼むぜ！！」

香『すいません…
神鳴流奥義！！百花繚乱！！！』

海馬「ぬわぁぁぁぁぁぁぁっ」

ＬＰ　－６０００→－８６００

貴史「楽にしてやれ駆子、優太」

駆子『蛇殺！』

優太『必滅の…魂…』

海馬「ガッ……」

《ドサッ》

ＬＰ　－８６００→－７２６００

貴史「長かったぜ…
これで終わったな…
そんじゃまぁここいらで一つ
宣伝タイムと行こうじゃねぇか」

チート達『賛成～』

貴史「まずは初出演から」

マサ『なら俺から…
ンッッン！！え～元・配達人の
作品…来る世界(とこ)間違えてね？
・　やる職、間違えてね？
・　来る世界(とこ)間違え…いやそうでも…いややっぱ間違えだわ！で
主役をしてる政成です！
皆からね…マサとかマサさんとか
マサナリとか言われてます
結構ね…え～楽しい！！面白い！！
小説なんで見ていただけたらと
思います！では！』

貴史「キャラ崩壊してね？」

マサ『細かい事は気にしないでくだせぇー』

貴史「まぁいいや…次～」

香『では今度は私が行きます
作者、桜井舞人が書きます
作品名、紅き翼の片翼　片翼の魔剣士の伝説
という小説の主役で香と言います。
かおりと書いてきょうです。
この作品はまだ十話にも満たないんで
まだまだ面白い部分がちらほらとしか
無い……でもこれから…
面白い部分も増えていきます
なので是非眼を通して気に入っていただけたら

嬉しいです。それでは…
今度は私の居る世界でお会いしましょう。』

貴史「じゃんじゃん行こう
もうキャラ崩壊してもいいや」

要『次は俺かな…えー…皆さん
初めましての方は初めまして
俺を知ってる人はこんちは
こんばんはかな?…まぁそれはいいや
置いとこう…俺が主役で出てる小説は
作者、雨季が書いてる
チートじゃ済まないって作品だ
まぁ他のチート達と比べたら
チートって呼べる程じゃないんだけど
まぁ…死徒二十七祖の…
O.R.Tを身体に宿してるって
設定でリリカルなのはの世界で
活躍してます。
コラボとかも結構してくださって
かなり繁盛?……ん?人気って言うのか?
まぁ人気で見てない方も是非
見て下さい!…一条　要でした。
……バイバイ!!』

貴史「勝手にバイバイすんな
まだ居るんだぞ!!次は…駆子~」

駆子『このままやるの?』

貴史「おうやれ！！」

駆子『せめて戻して』

貴史「ダメダメ…ほら
さっさとする…」

駆子『はぁ…えーどうも…
作者、退魔師見習いの作品
欠陥チート勇者で主役をしてる
柳川　駆です。
先に言っとくけど男だから！！
この駆子ってのはとある腐女子の
神様が俺に女装させた事から
生まれた名前です！
本当は嫌なんだけど…
何故か逆らえ無いんです…
まぁその辺は置いといて…
やっ置いとくのもアレなんだけどね…
とりあえず今は作品の宣伝を
感想ではね外伝が多いんじゃないのって
言われてます…でもね
まぁ外伝で参加してくれる
人達と交流するの楽しいんだ
作者の退魔師見習いもね…
楽しいからこそ本編より
外伝を先に書いちゃうと思うんだ
うん……本編……本編も…
楽しいので外伝だけじゃないって
事を見て……欲しいです…はい

以上…柳川　駆でした！』

貴史「次は…ツカサ～」

ツカサ『は～い…どうもこんにちは
作者、香多詩路が書く
作品名、フラグをたてたい！の
主人公をしますツカサと言います
え～この作品はですね…空の軌跡という
ＰＣゲームの世界に迷い込み、
フラグを乱立させていくお話です。
香多詩路の処女作品…だね…
うん…処女作品なので…
暖かい眼で見て下さい。
読んだらきっと空の軌跡を
したくなると思います…多分
あはは…曖昧でごめんなさい
以上…ツカサでした。』

貴史「次！！優太！！」

優太『皆さんこんにちは…
又はこんばんは…
作者、ＲＥＤＥＸが書く
作品名、黒き翼‡ＢＬＡＣＫ　ＷＩＮＧ‡の
主役の如月　優太です
チート仲間からは…リア充とか
よく…言われます…
……作者からも言われてます
作中とかかなりピンク色で

最近やっとシリアスてか
ピンク以外の話しで…うん…
本当に…ピンクピンクピンク…
ピンクばっかりな人生を…
送っちゃって…そして作者や
皆から弄られ…しょうがないよ…
理性持たないし…あんなに迫られたらねぇ？
ほんと…速く俺以上のリア充
生まれないかねぇ…っと脱線したな
まぁピンクが多いけど面白い作品なんで
是非…見てってください。
如月　優太でした。』

貴史「次はレイだな」

レイ『ようやくか…
チッス！作者Ａｒｉｓｈｉａ作
神様の力で異世界へ～チートってありですか？～の
主人公…桜井　怜です
皆からはレイって呼ばれてます
えーっと…まぁこれが俺も
結構なチートでさ…一部からは
万能チートと呼ばれたりしてる
まぁ実際なんでも出来るんだよな
っと作品の宣伝だったな…
え～…結構周りもチートな強さを持つ
仲間とドンチャン騒ぎをしながら
学園生活を満喫する作品でね…
タグにこれは酷い作品だってあるけど
まぁ俺はそんなに酷いとは思ってないぜ

コラボしてくださる作者さんも
居てさ…結構人気ある作品だよ
他の皆もね結構面白い作品で
見る事をオススメするよ…
んじゃ今度は俺の小説で会おう！！
』

貴史「はい！以上…
この二十万アクセス記念で
参加して下さったキャラの
作品宣伝でした…
俺様からも…一言…
本当に皆素晴らしい作品で
見ていて楽しい作品だ…
まだ見てない読者さんも
騙されたと思って
一度は読んでみてはいかがでしょうか…
それでは…
魔法先生ネギま！～三人の転生者～
二十万アクセス記念を読んで戴き
ありがとうございました！！
これからもよろしくお願いします。」

２０万アクセス記念（後書き）

これからも三人の転生者を
よろしくお願いします。

薫の過去と救済（前書き）

フッ…言い訳はしない…ぜ

貴史「今回は不評…甘んじて受けてやんぜ……秋代が」

……貴史に向けて下さい。ＯｙＺ

貴史「ちょってめ！」

薫の過去と救済

貴史視点

「とまぁ、こんな感じかな」

開いた口が塞がらないとはこの事か。
まさか紅き翼の大半は、死亡してるなんてな。

「アルビレオ、ラカン、ゼクト、ガトウがねぇ…」

「そっかぁ…父様を助けたのカスミやったんやねぇ」

「まぁな」

「ありがとうな、カスミ」

薫が礼を言うと、カスミは照れ臭そうに頬を掻いた。

「そういや、アリカ姫は？」

「処刑なら代わりに私が受けた」

「なんだと？」

カスミの言葉を聞き、俺はブチ切れ寸前になる。

「目先の悪（完全なる世界）が消えて、近くの悪（吸血鬼）に全て

の責任を押し付けたんだ。　元老院の奴らがな」

「せやけど、どうやって助かったん？」

確かに、処刑は原作と同じだとしたら、カスミが助かるはずがない。

「あぁ、それならナギと詠春がな助けてくれた」

へぇ…紅き翼がねぇ…

「そうか…さて次は…薫だな」

あの爺共はいずれ消すとして、次は薫か…。

「せやね～…ほとんど話す事ないんやけど…」

薫視点

まぁ、アレは木乃香が鬼達に、拉致られた翌日な。

「待て…」

「ん？」

「なんで途中から？」

「大人の都合や」

「……」

ジト目で、貴史が睨んでくるけど、無視して話を進めるかな。

《薫の過去》

翌日、ウチは父様に内緒で、木乃香に魔法を教えた。
最初は信じひんかったけど、ウチが火竜を見せたら信じた。

「うわ～お姉ちゃん凄いなぁ…」

「木乃香も出来るようなれるよ」

「ほんま？」

「うん。　どうする？」

「魔法使いたい！！」

そして、木乃香の意志を尊重して、ウチは魔法を教えた。
ただ唯一の誤算は、木乃香が父様の前で、魔法の事を喋った事や。

「薫！！　木乃香に何故魔法を？！」

「いつまでも隠しておけんやろ？　昨夜かて、鬼に連れ去られて…
今回は助けれた。　せやけど、次は助けれんかもしれん。　なら木
乃香にも強うなって、自分の身を守って、連れ去られる可能性を、
少しでも減らしたいんや」

「危険を回避するための護衛です。　それに薫も居ます。　……正直、薫にも魔法とは無縁な、安全な世界で幸せになって欲しいんです」

「ウチでも、どうにも出来ん事もあるし、せっちゃんかて、まだまだ未熟や！！　木乃香の安全なんてまだ保証出来ん！！」

この後、言い合いがデットヒートして、互いに剣を取り、壮絶な親子喧嘩が始まったんや。

「神鳴流奥義！　斬空閃！！」

「竜之炎伍式！　円！！」

父様の繰り出す斬撃が、ウチの炎の壁が衝突。

「竜之炎壱式！　崩！！」

「神鳴流斬魔剣・弐之太刀！　斬空閃！！」

父様はウチが、繰り出す炎球（フャイヤーボール）を、斬魔剣で断つ。

瞬間、ウチ自身の斬魄刀を出して、瞬歩で近付く。

「はっ！」

「む！」

《ギャンッ！》

交差し、刀と斬魄刀が火花を散らす。
幾千、幾万と切り掛かり、高かった日は傾き、ウチらの身体に、数えきれない傷が出来た。
「はぁ…はぁ…」
「っ…はぁ……はぁ……はぁ……それほどの…力を、持っても…木乃香を…守れないと?」
「そう、や……」
父様は、しばらく考えた後、「好きにしなさい」と、言ったんや。
《過去終了。》
「こうしてウチは、木乃香に魔法を教える事となりました。」
「すんげぇー、はしょられた気がするんだが?」
貴史が不満げな顔をする。
しゃあないやん…作者がウチの過去を書く気になれへんのやから…。
貴史視点
薫の過去話が終わった。
というかごく一部が…。
千草とか、桜咲とか、明日菜とか、聞きたい事が、たくさんある。

薫は、なんかこれ以上話す気が、ないみたいだ…というか書く気が無いだろ？　作者。

（はい、まったくありません）

腐ってやがる…死ねばいいよ。

（番外編で許して下さい。）

読者に聞け。

とりあえず、この過去話は、終わりとする。
納得出来ないと思うが、番外編で我慢してほしい。

さて、すっかり空気になった真名達はっと…

「カスミ…こいつらとは知り合いだったのか？」

「あぁ、そうだ」

「いつ出会ったんだ？」

「エヴァと会う前だ。　信じられんと思うが、私達は前世からの知り合いなのさ」

「なんだと？！」

「まさか薫お嬢様も？」

「そうやよ」

どうやら、俺達三人の関係性を知って、驚いてるみたいだな。

「貴史先生…彼女達が言ってる事は…」

「事実だ」

「……そうか…」

「真名…怨むなら怨んでくれて構わねぇぞ」

俺の言葉に一瞬、顔を歪めたが、すぐにフッと笑い、元に戻した。

「昔は怨んでたよ…コウキの後をついてくるだけの男…コウキが死んだあの時…何故もっと早く、あの力でコウキを、助けてくれなかったのか…てね」

「……」

「そして、力を望んだ…貴方を殺す為に」

真名の一言に、カスミと薫が反応した、桜咲やエヴァも多少は反応したが、カスミ達が速かったな…。

攻撃しなかった点では、成長したかな。

昔は、俺の悪口を言った瞬間に、そいつらを血祭りにあげてたし…。

「でも…私を養子に、引き取ってくれた、婆ちゃんが言ってたんだ。」

「へぇ～…なんて？」

「貴方が最後の最後になってまで、力を使わなかった事には理由があるって」

……理由があろうと罪は罪。

「……正直に答えてほしい」

「……いいぜ」

「…あそこで本気になっていたら…私達はどうなってたんだい？」

「俺の攻撃の余波でおだぶつ」

「……制御は？」

「ぶっ飛ばされる前は不可…あん時は、ごり押しで使ってたしな…」

「……罪の「あるぜ…」」

俺の答えに「そうか」と呟き、どこか晴れた顔を向けて…

「なら…貴方を許すよ」

俺にそう言ってきた。

最高の笑顔を見せて……。

「ありがとよ」

ウチとあたしと『私』（前書き）

貴史、薫「「そうだ！　使い魔（従者）を喚ぼう」」

ウチとあたしと『私』

貴史視点

さて過去話も終わり、真名達も落ち着きを取り戻したし、何をしよう？

「寝るという選択肢は、ないのかい？」

「もう寝るのか？」

「もうって…今、４時ですよ」

桜咲が、現在の時刻を言う。

てか、もうそんな時間なのか。

こりゃあ、明日っつーか今日に響くなぁ。

「んじゃ、寝るか…」

『賛成～』

そして、この日は解散と相成った。

《次の日》

俺は屋上で、時間を潰してた。

はい、そこ！　サボりとか言うんじゃない。
ちゃんと授業はしてるぞ！　赤い分身（ブラッディ・アバター）で作った俺が…。
そして、カスミ、エヴァンジェリン、薫も屋上に居る。

「おまいら、勉強しろ」

「15年も同じ事してられるか」

「貴史だってサボるなよ」

「ウチはそれなりに頭ええから…」

なんて奴らだ。
ガキの癖に学業放棄とは…。
あまつさえ、俺にサボるなだと？　サボってはいないぞ！！　分身が授業してるだけだ！

「……あー従者が欲しいなぁ……」

「あ、ウチも欲しいかも……」

どうやら薫も従者が欲しいらしいので、一緒にカスミの方を見る。

「……なんだ？　お前達ぃ」

「いやぁ、誰か召喚する場所を提供して、欲しいなぁと…」

カスミは少し考えた後、ため息をついて「わかった。　別荘を使っていい」と言った。

「サンキュー♪」

「ありがとうなぁ」

感謝の言葉を言い、俺はカスミの頭を撫で、薫はカスミに抱き着いた。

「ふ、ふん／／／」

カスミは顔を赤くして、そっぽを向いた。

一つ言おう……かわいいじゃないか。

まぁ、その前に一つやる事はやらないとな。

《ピポ》

「なんじゃ？」

「これから従者契約するから許可ちょーだい。　あ、孫の薫もするみたい」

学園長に許可を得る為、電話をすると何故か焦ったように、学園長が待ったを掛ける。

「なんだよ？　もう決めた事だぞ？」

「か、薫は了承しておるのか？」

了承？　薫もやるって言ってんだから了承も何も……あ、そういや従者契約ってキスとか、ふざけたもんが代表だったな…この世界。

「あー…言っとくが俺とは契約しねぇよ」

「む…なら誰とじゃ？」

「さぁな…それじゃ」

「ちょ、待つん《ピッ》」

薫の使い魔が幻獣だと、良いんだがな……。

《カスミの別荘》

場所は移り、カスミの別荘。
いま、薫がゼロ魔風に使い魔を喚ぶとこ。

「全次元のどっかにおる、ウチの使い魔出ておいでっ！」

薫が詠唱を唱え終えると、薫の前に大きな鏡が現れた。

そして数分後、現れたのは憤怒の表情を表現した、二本の角を持つ鬼の骨面を被り、薫を白くして、白い着物を着た人が出てきた。

「……え、誰なん？」

明らかに、虚（ホロウ）のお前じゃん。

薫視点

今日の昼前に、貴史が従者とか使い魔とか欲しいと言い出して、それならウチも欲しいから一緒にやることになったんやけど、ウチが呼び出した使い魔は幻獣や動物の類いやのうて、虚化したような自分が出てきた。

「えっと……どちらさん？」

「どちらさんも何も、あたしはお前の力に決まってんだろ」

口悪いなぁ…もう一人のウチ。

「んで？　あたしを呼び出した理由はなんだよ？　せっかく隠れてたのによ…」

どうりで何度も精神世界に、行ったのに会えん訳や、お陰で虚化が出来ひんし…。

「ほな、ちゃっちゃ契約してあんたの力もらうえ」

「ハッ！　簡単に出来ると思うなよ」

もう一人のウチがそう言うと、始解前の斬魄刀で切り掛かってきた。

「！！」

ウチも斬魄刀を出し迎え撃つも、時既に遅く肩を斬られた。

《ブシャァアアアア！！》

「っ！！」

此処で一つ補足や、ウチが出す斬魄刀は霊的ダメージの他に、肉体的ダメージも与えられるんや。

どうやら、それはもう一人のウチにも言えるみたいやね。

「オセェな…あんた」

くっ阿保言うな…あんさんが速いんや…。

「り、竜之炎壱式！　崩！！」

「竜之蒼炎壱式！　真・崩！　まだだ…竜之黒炎壱式！　裏・崩！」

なっ…

ウチに合わせるように、ウチに似た二つの炎術を使うもう一人のウチ。

ただ違うのは、炎の色。

ウチは赤く、橙色が混ざったような普通の炎。

もう一人のウチは蒼く、白が混じった神聖な炎と黒い、漆黒の炎。

ウチの炎術は一つも、もう一人のウチの炎術すら相殺されず簡単に掻き消されて、黒い炎と蒼い炎がウチに直撃する。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

そして…ウチは……墜ちた。

貴史視点

薫が墜ちたなぁ…

「薫お嬢様！」

桜咲が薫の下へ走るが、障壁に邪魔され近付けないらしい。

この障壁は……虚の薫が張ったもんか…。

桜咲は頑張って障壁を斬ろうとしてるが、ひび一つ付かず膝を着きついには泣き出した。

にしても、強すぎね？　なんだよ真って…黒炎とかも俺は知らねぇぞ。

そんな感想を抱きつつ、高笑いしてる虚の薫を見上げる。

薫視点

あかん…せっちゃんが泣きよる…。

はよう起きて…無事って事…教えな…。

でも……あかん…眠い…力が抜けてく。

ウチ……

……死ぬんかなぁ。

『よっ』

「ん？」

暗闇の中漂ってると、急に声が聞こえた。
振り向くとそれは……

『誰？』

『俺は剣崎　貴史』

『……何の用？』

『うっわ…暗っ…』

『余計なお世話…』

『こら、霞』

『だって～』

昔のウチと貴史、霞との出会いの場面だった。

「これ…いったい……」

『で？　何さ…あんたら』

『悪い悪い…お前が昼休みという貴重な自由時間を、一人で黄昏れてるから一緒に飯を食おうかなってな』

『……結構です』

『それはダメ』

『は？』

ウチは生前異常な成長速度で、回りの人から化け物を見るような目でウチが近付けば、相手もそれに合わせるように、離れていく。
そんな事が長くあったせいか、ウチから一人になるようになったんやけ。

『貴史が誘ってるんだから、貴方に拒否権はない！』

そして霞は……今やだけど昔もかなり貴史至上主義やったなぁ…。
んで…拒否権を奪われなし崩し的に、一緒に食べる事になって…。

一人で帰る時も…

『帰るぞー』

『拒否権は？』

『ない！』

『だそうだ』

『……はぁ…』

ウチの意見も取り合ってくれず…まぁ、暇やったんやけどな…。
そんな日が続いたある日。
何処から聞き付けたかわからんけど、ウチの知り合いからウチの異常性を、二人の前でばらされた事があった。
ウチは二人から逃げるように立ち去った。

次の日が日曜日でよかったって思った。
だけど…

『おーい』

『薫～…』

あの二人はウチの所へ来た。

『『ドーン！』』

ウチの殻（部屋）を破って無理矢理…いつものように…。
ウチの噂を聞いてもなお……。

『お前が化け物でも構わねぇよ…こっちは元々疎まれてた奴が組んでただけだし』

『私は貴史と二人っきりがよかったんだが…貴史が薫はもう仲間だって言ったから仕方なくだ…仕方なく』

ウチが化け物でもいいって…言ってくれたんや…ウチが仲間やって……。

まだあの時の恩を返してへんし、なにより…まだ……貴史に想いを伝えてない！

虚・薫視点

死んだか…随分呆気ない終わりだったな。

「つまんねぇなぁ…」

あたしは背を向け立ち去ろうとした瞬間、突然後ろに巨大な雷が落ちた。

「あん？」

振り返って見ると…

「まだや…」

そこには……

「まだやよ……」

青白い電気を纏わせた、雷帝姿の奴が居た。

貴史視点

一度は決着が着いたと思われた、戦いは薫が雷帝化した事で再開となった。

「フフッ…」

「ん？　どうした？　カスミ」

「いや、何…私とあいつは少し……いや、大分似ていてな…わかってしまうんだよ」

「何が？」

「……薫が考えてる事だ。　あいつはさっきまで走馬灯の如く、私たちが出会った出来事を思い出していたはずだ」

「……まさか」

カスミの言葉に否定気味な言葉を呟く。

それをカスミは…

「いや、間違いないさ……私は、お前に救われた恩を返してないん

だからな…」

「？」

最後の言葉がよく聞こえなかったが、カスミの言葉に嘘は無いなと感じ、再び薫へ視線を向けた。

薫視点

「……」

「はっ！　喋ったと思ったらだんまりかよ。　わざわざ雷帝化して立って、ジッとしてるだけとはな」

もう一人の『私』が吠える。

『私』はそれに反応せず、ただ黙ってもう一人の『私』を見る。

『私』の視線に耐え切れなくなったのか、もう一人の『私』はソニードで『私』の後ろに回り、斬魄刀を振る。

「もう死ねよ…」

「……」

しかし、もう一人の『私』の体は真っ二つに斬られ、斬魄刀を振る事が出来なかった。

「なっ！」

声が驚愕に満ちて、自分の体を見つめるもう一人の『私』、おそらく仮面の下も驚愕に彩られ、面白い顔をしてるのだろう。

もちろん、斬ったのは『私』だ。

もう一人の『私』が横を擦り抜け、後ろに回った間に斬っただけ。

その証拠に、『私』の手にはさっきまで無かった斬魄刀があり、その刃はもう一人の『私』の血で赤く染まってる。

「ぎ…さまぁぁあああああ！！」

もう一人の『私』が逆上するがもう遅い。

炎術を行使する間も、斬魄刀を振る間も、鬼道を放つ間も、雷帝化する間も与えずに切り裂き、そして……

「卍解、火之迦愚土大神」

一気に通常状態から始解、そして卍解へと解放した。

「ま、待て……」

「焼き尽くせ…」

「あたしを消せば…あたしの力は！！」

もう一人の『私』が何を喚こうが知らない。

『私』は……敵ヲ消ス。

「ぐおぉぉおおおお、ぎゃぁぁあああああああああ…ぁぁ…あああああああああああああああ！！！」

貴史視点

うわぁ…超速再生と無限消却のループかぁ。
苦しそうだな……。
暫く見てると薫の体が崩れ、虚・薫を焼いていた炎は消えた。
近付いて虚・薫を見ると、かなり悲惨だったと言っておく。

「で、どうよ？　薫を認めるか？」

「……」

「喋れんだろ？　虚さーん」

「……チッ…認メテヤルヨ」

「そうかい…」

こうして、薫はもう一人の自分を使い魔に、そして虚化という能力も手に入れたとさ。

あぁ、刹那やカスミ、茶々丸、真名とエヴァは薫の看病をしてる。

ウチとあたしと『私』（後書き）

次回は彼が彼女を喚ぶ！

？？？「……クスッ♪」

無敵の英霊とパクティオー×3（前書き）

カスミの従者は茶々丸です。

無敵の英霊とパクティオー×3

貴史視点

さて、薫ｓを（纏められた！！）ベッドに寝かせて、次は俺の従者を喚ぶか。
喚び出す手段はＦａｔｅ風サーヴァントいらっしゃ～いで。

陣をちゃっちゃ書くかな

「書くもん……血でいいか」

てなわけで書きました。
自分の血で魔法陣。

「触媒はどうしよう……おぉ！」

此処で閃いた俺。
自分自身を触媒にしちゃえという考えに至りました。

中央に立ち……呪文を呟く。

「――――――告げる」

空気中の魔力が、俺を中心に渦巻く。

「――――告げる。　汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

俺から溢れ出る魔力は魔法陣に流れ、周囲を渦巻く魔力も陣に流れていく。

「誓いを此処に。　我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。　汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――――！」

《カッ》

陣が輝き一人の英霊が顕れる。
英霊が顕れたと引き替えに、陣の輝きは消えた。

喚ばれた英霊は、黒衣を纏ったおとk……待て…俺はアレを知ってるぞ…アレって……バネさん？

「クスッ♪　サーヴァント、アサシン。　召喚に応じ参上しました。問います――貴方が私の主（クライアント）ですか？」

……？　声が若干高い？　女性なのか？　だけどこの存在感…間違いなくバネさんだと思うが…。

「どうしました？」

「！！　あ、あぁそうだ…俺があんたを喚んだ」

「そうですか♪　では以後よろしく…もう一人の私」

……は？

「何を惚けてるんです？」

「今、なんて？」

俺の聞き間違いじゃなければ…

「はい、もう一人の私と言いました」

……Ｏｒｚ

「？《ニコニコ》」

か、薫といいなんで俺らは自分しか喚べないんだ？　ステータス見たら…なんかわかるか？

そう思い、俺はアサシンのステータスを見た。

《ステータス》

ＣＬＡＳＳ　アサシン
マスター　南武貴史
真名　アカバネクロナ（赤屍クロナ）
宝具　赤い魔剣（ブラッディ・エクスカリバー）
キーワード　転生者
　　崇められただけの存在

筋力　３ＥＸ→ＥＸ　耐久　３ＥＸ→ＥＸ　俊敏　３ＥＸ→ＥＸ
魔力　３ＥＸ→ＥＸ　幸運　３Ｂ＋→Ｂ＋

超越者　４ＥＸ→ＥＸ　蛇使い座の使者　３ＥＸ→ＥＸ　気配遮断
３ＥＸ→ＥＸ

《キーワード》

０１　赤い魔剣（ブラッディ・エクスカリバー）

アサシンが持つ、赤い宝具の中でもっとも最大攻撃力を誇る宝具。
アーサー王の死後、泉の精を斬殺し奪い取った物。
自身の血を染み込ませ、自身の武器として使えるようになった。
アーサー王が所持していた頃より強く禍しくなり、もはや魔剣の域に達してる。

０２　転生者

生まれ変わる者。

０３　崇められただけの存在

彼女はまだ生きており、世界と契約してない存在。
彼女が成した偉業の数々で恐れられ、崇められた事により英霊として昇華された。
信仰や崇められただけの英霊なので、本来のステータスよりかなり下がってる。

《技能》

０１　超越者　［　４ＥＸ→ＥＸ　］

人という枠に収まりながらも死を超越し、また成長限界すら無く、

永久的に成長する存在。
また、己の血で武器を精製したり出来る。

本人曰く、自身の死がイメージ出来なければ、例え心臓を貫かれても、存在を消されても死ぬ事は無いとの事。

崇められただけの存在なので、ステータスが下がってる

０２　蛇使い座の使者　［　３ＥＸ→ＥＸ　］

呪文を唱える事で自らの能力を上げる事が出来る。また追加呪文により、更なる力（悪魔の腕）を得る事が出来る。その際、右腕の形状が変化する。

崇められただけの存在なので、ステータスが下がってる

０３　気配遮断　［　３ＥＸ→ＥＸ　］

相手に一切気取られずに、近付き心臓を一突き出来る。
ただ、これをするのは暗殺するのみ。

崇められただけの存在なので、ステータスが下がってる

《詳細》

０１　人物背景

転生する前はただ人。
転生後、ＧｅｔＢａｃｋｅｒｓ－奪還屋－の世界で、赤屍蔵人の代

わりに赤屍クロナとして転生。

02　『アカバネクロナ』

赤屍の人生を辿り、その後にＦａｔｅの世界へと渡る。
しかし、渡ったＦａｔｅの世界はかなり昔で、その腹いせに街や村を破壊しまくり、反英雄として祭り上げられた。
現在もどこかの世界で楽しくやってる。

……見なきゃよかった。
つか、バネさんの人生歩むのに、なんで蛮様の力もあるんだ？

「あの二人はファンですから」

「だよねー」

……俺か？　俺が自分を触媒にしたからか？

「貴史！！」

あ、カスミがこっちに来た。

「なんだか凄まじい力を持つ……もの…が……」

あ、カスミが固まった。
まぁ、気持ちはわからんでもないよ。
俺も驚いてるし……。
カスミの後に続いてどんどん来ては石化していく生徒。

まぁ…規格外な存在だし？　直視したらまず寒気するわなぁ…。

あぁ、アサシンの容姿言ってなかったな。
赤屍蔵人をベースに、出るとこ出て引っ込んでるとこは引っ込んでる……つまり、バネさんの性転換。

うん、美人だ。

「貴史…」

「ん？」

石化から立ち直ったカスミが代表して言う。

「誰だ？　そこの女赤屍…」

「アサシン…俺が喚んだ従者」

「よろしくお願いします♪」

クロナ視点

血に惹かれて来てみたら、何やら面白い所ですね。
リリカルキャラにネギま！キャラが居る。
そして、我が主はゲトバの蛮さん……いえ、デル・カイザーですか。
後で、ウニヘアーにしておきましょう。

「ところで…主」

「ん？」

「此処はどういった世界ですか？　ネギま！キャラが多いようですが…あそこに居るのはリリカルキャラのフェイトですよね？」

「あぁ、フェイト似のあいつはカスミ・ヴェネーラ…俺と同じ転生者で生前の仲間だ。　もう一人居るが今は療養中だ。　んで、此処はネギま！の世界だ」

「成る程」

私の問いに丁寧に答えてくれる主。

「あとパクティオーしたいんだが」

「クスッ…自分自身とキスですか…」

私がそう言うと、主はＯｒＺ↑こんな感じで、凹んでました。
それをするなら、やはり蛮さんみたくウニヘアーにしなくては…。

「と、とにかくするぞ」

「「待った！」」

主がパクティオーの陣を書こうとした時、二人の少女（片方はカスミって娘ですが）が待ったをかけた。

貴史視点

パクティオーをしようとした直後、カスミと薫に待ったをかけられた。

「なんだよ…つか薫は起きて平気なのか？」

「大丈夫や！」

「何故パクティオーする必要がある！？　十分に強いだろ！？」

まぁ、確かに強いな……俺だし。
なんで女かはわからないが…。

「あ、薫はしたのか？」

「えっ？」

「パクティオーだよ」

「あ…う、うん」

それはそれは興味がある。
つかアレがさらに強くなったらやばくね？

「それで？　結局やるのですか？　やらないのですか？」

「あぁ…やるやる」

「だからダメだと言ってるだろ！！」

「なんでだよ？」

「やるなら私達が先だ！！」

と、言うわけで先にカスミ、薫、真名とパクティオーする事になった。

まずはカスミから…

「「ん…」」

《パアァァァ…》

光が収まりカードを見てみると、リリカルキャラのフェイトの真・ソニックフォームを着ているカスミ。

ただ……下のひらひらした部分が無い。

完全に黒のレオタードだな…ごちそうさま。

「ひゃぁぁぁぁあああああ…み、見るなぁぁぁぁあああああああああああ」

「ブッ！！」

カードを覗き見したカスミに、奪われ顔面パンチ貰いました。

関係ないが此処でカスミの髪型について…ポニテです。
それは生前、フェイトのポニテ姿の素晴らしさに、2時間程掛けて語ったお陰だろう。
ポニテの良さに感動したに違いない。
（※違います）

ストライカーズの終盤見てもう衝撃的だった。
いただけないのは真・ソニックフォームの下部分…なんか…こう…
…ねぇ？
そして…今、俺の想いが昇華してカスミのパクティオーカードに…。

まぁそれはさておき…。

「どんなアーティファクトなんだ？」

「む、待ってろ」

カスミは「来たれ（アデアント）」と唱える。
すると、カードが輝きカスミの手に一振りの剣があった。
姿は勿論、あの真・ソニックフォーム。

「っ！！」

剣より先に自分の格好に気付き、消えた。

……は！？

「見るなぁぁぁあああ！！」

「へぶっ！！」

感知した時には遅く、俺の意識は遠退いた。

カスミ視点

私は羞恥のあまり貴史を殴った。
そこまではよかった……いや、異変に気付いた。
アサシン以外、私に気付いていなかった。
「これが…私のアーティファクトの能力なのか？」
とりあえず解除するか…。
私はアーティファクトを仕舞う。
すると、皆が私を認識した。
「い、いつの間にそこにおったん？」
「さっきから居た」
「どうやら加速する能力を持つアーティファクトみたいですね。
それも超がつく程の加速…クスッ♪　主レベルなら対応出来そうですが…とんでもないアーティファクトです」
アサシンの言葉が本当なら、確かにとんでもない。
……この世界で使う機会はあるのか？

「でも消える前に見えた、あの剣はいったいなんや？」

「魔剣の類いみたいですが、恐らくあの剣の能力が超加速の正体かもしれません」

普通に考えればそうなるかもな…。

名は、加速する雷

……うん、あきらかにこれが超加速の能力を秘めてる。

「いったたた…」

そうこうしてると、貴史が目を覚ました。

貴史視点

「いったたた…」

いったい何が起きた？　カスミが消えた…いや、あれは瞬間移動？　どうも違う……加速…いや、加速なんてちゃちなもんじゃねぇな、瞬間移動に近い加速……超加速？　おいおいギリ俺にわかる加速って反則だろ？

「大丈夫か？」

「まぁな…つか反則級じゃね？　ソレ」

「安心しろ…使わん」

「まぁ妥当か…」

「次はウチや！！」

張り切ってるなぁ…なんでだろ？　まぁちゃっちゃ終わらすか…。

あ、学園長に許可取ってないや……まぁいいか。

「「ん…」」

《パアァァァ…》

「さぁ、薫ちゃん。　君の力を見せてよ？　アデアントと言っちゃいな」

「来たれ（アデアント）」

薫の服装が制服から陰陽師の格好となり、手には一振りの刀。

「また刀剣類か…」

「そうみたいやね……」

どんな能力を秘めてるのやら…。

薫視点

パクティオーのカードから現れたこの刀。
むっちゃ見覚えある…。
この刃紋といい、パクティオーにある武器名といい。

名は、心刀。

生前、ウチが考えた厨二全開の刀。
普通の剣やのうて、術者の心を具現化した武器。
術者によって様々な形として出る事から、心具シリーズと付けた。

威力は術者の心次第。

貴史視点

……めっちゃ恥ずかしいわぁ～／／／／／

なんか薫が顔を赤らめて悶えてる。
とりあえずソッとしておこう。
アーティファクトの能力が気になるが…。

「次は私だね」

そして真名……正直……恐いぜ。
目がギラギラと……。
とりあえず終わらせよう…迅速に……。

「「ん…」」

《パアァァァ…》

三度目のパクティオー。
もう慣れた……。

「それじゃ…言ってみよー」

「来たれ（アデアント）」

とりあえずコピーの方…アーティファクト名だけでも見とくか。

「え～何々…アースラ」

……は？
いや、名前が同じだけさ…きっと……。

カードに描かれた真名を見てみる。

アースラがロボットになったような感じのパーツを着けてる真名だった。

何故わかったか？　ハッ…生前、俺が考えたアースラロボット化して、さらにそれを擬人化したのとよく似てるからだよ。

「武器はＤＦ（ディストーションフィールド）に、魔力砲、アルカンシェルか…」

《ピシッ》×３

「おやおや♪」

石化から回復したら、外の時間は7時だったのでアサシンのパクティオーと、俺のパクティオーは放課後する事になった。

追伸

出勤したら学園長室に呼ばれ、質問攻めされました。

無敵の英霊とパクティオー×3（後書き）

ぶっちゃけカスミが強くなった。

３ＥＸや４ＥＸとは…ＥＸランクが三つ、四つあると思って下さい。

ＥＸは計測出来ないランクだから三つとか四つは変って言う感想は受け付けぬ！

ＥＸじゃ足りないって思ったから付けたのだ！！

無敵とｃｈｅａｔと未来の救世主（改）（前書き）

なかなか頑張りました。

今回出て来るキャラについて説明が無かったので、此処に説明を付け加えました。

今回は他作品のキャラとのコラボです。

Ａｒｉｓｈｉａ様の神様の力で異世界へチートってありですか？から主人公のレイ、主人公のユニゾンデバイスのヴィード、主人公の友達のクロード。

八神カイト様の無限にして無窮なる旅人から主人公の八神カイト、カイトの妻にして妹の八神はやて、カイトとはやての子供の八神風音です。

（※ただし、カイト達は過去軸の人物です）

無敵とｃｈｅａｔと未来の救世主（改）

貴史視点

「あ～暇だ……」

アサシンを喚んだ日から大分経ったある日。

「暇で死にそうです」

「そうですね……」

隣に居るクロナも同意する。
性別がアレでも、やはり同一人物なのだろう。
考える事が一緒だ。
今は冬休みで授業は当然無し。
やる事がないのだ。

カスミは茶々丸の整備に超の所へ…。
薫は木乃香と刹那、明日菜に振り回され青春を謳歌してる。
真名は龍宮神社で巫女さんしてる。
つまり、俺達だけ手持ち無沙汰なのだ。

「散歩してきます」

「了解～」

クロナは散歩か……。

なんかフラグ立ててきそうだな…。

俺がゴロゴロだらけてると、ピンクの扉が現れた。

《ガチャ》

「よ《バタン》」

扉が開いたので、何かが出て来る前に閉めた。

《ガチャ！》

「閉めるなよ！！」

「いやぁ…まさかお前が来るとはなぁ…」

「呼んだのそっちだろ！？　感想とかメッセで！！」

なんでこいつはメタ発言すんのかね。

「俺だから！」

「まぁいいか。　とりあえず久しぶりだなレイ」

「おう！」

「ところで…」

「ん？」

「へー、此処がレイの友達の部屋かぁ…」

《ガシャン！》

「うわっ落ちた！　つか壊れた！！　どうしよ！！」

「あの、他人の部屋を物色して、さらに物を壊してるヴァカはなんだ？」

俺の目の前で壊した置物を、どこかへ隠そうとしてる赤髪の少年。
つか、マジでヴァカだろ？　本人が見てるところで壊した物を隠すなんて…。

「あいつはクロード。　俺の友達だ」

「そうか…」

「よし、此処ならなんとぐぼぁ！」

「モロバレだってヴァカが」

後ろから踵落しでツッコム。

「で、なんで友達を連れて来たんだ？」

「ん？　いや、クロードがな強くなって俺のチート友達にも、引けは取らないって言ってたから…」

「へー…ならやっちゃっても？」

「ｏｋ」

レイの許可が出たので、指をパキパキ鳴らしながらクロードに近付く。

「いきなりだがバトルでいいな？」

「その為に来たからな」

クロードは構えを取りながら同意する。
俺達の殺気に場がシンッと静まる。
そして、外の鳥達が羽ばたく音と同時に俺達は動いた……

「ちわー♪」

《ズサササササササー》

……と同時に邪魔が入った。

「誰だよ!?　戦いにチャチャ入れる馬鹿はって……お前…カイトか？」

「ん？　俺を知ってるのか？　もうそんなに有名になったか…」

「凄いなぁ…カイト兄は」

そう、邪魔してきたのは宇宙の救世主とか、世界の破滅者とか言われてる八神カイトがいた。
八神はやてと女の子を連れて…。

「知り合いか？」

「おぉ、上位のチートのナンブに会いに来たら、さらなるチートのレイまで！！」

「チートつかｃｈｅａｔな」

レイを見たカイトは、変な事を口走りながら興奮していた。

「てか、何しに来たんだ？」

「あ、あぁ…俺と戦ってもらうぜ？　ナンブ」

成る程、戦いに来たのか…だけどなぁ…カイトとは何故か戦う気しない。
前会った時より弱くなってるし……カイトがな。
だから俺は……

「却下」

……断った。

「なんでだよ！？」

「だってさ…お前今弱いじゃん。　つか何故そんなに弱くなったんだ？」

「？　俺はお前とどっかで会ったか？」

……。

さっきから違和感があるな…。

「よし、まずは状況整理だ」

そう言って、レイ、クロード、カイト、はやて、女の子を連れてカスミの別荘に来た。

《数分後》

いろいろ話し合って、違和感の正体がわかった。

「つまり、俺と会う前にナンブは未来の俺に会ってると？」

「それしか考えられねぇし」

「成る程…まぁ、それはさておき一応自己紹介するか？」

カイトの提案に賛成して自己紹介となった。

「んじゃ、まずは俺からな。　南武貴史」

「俺はレイ・ツァイベル」

「クロード・レヴァンだ。　レイの親友なんだぜ」

「親友なのか？」

「残念ながら…」

俺がレイに聞くと残念な返事が返って来た。

「うおぉい！　なんだよ残念ながらって！！　親友だよな？　俺達親友だよな？　レイ！！」

「残念！」

「最悪だー！！」

「話が進まんから黙れ」

そして再び始まる自己紹介。

「八神カイトだ！」

「八神はやてです」

「八神風音です」

「うし、自己紹介終了！　さぁ、ナンブ！！　勝負してくれ！！」

自己紹介も終わり、カイトが俺に勝負を持ちかけてくる。

どうするかと悩んでると……

「レイでもいいぜ？」

と、言ってきた。

俺とレイはアイコンタクトで会議する事に…。

（どうする？）

（俺は手加減出来るけど無理、たるい）

（だよなー）

レイも手加減がたるいらしくどうするか悩んでると、レイはクロードを見て何か閃いた顔をした。

（クロードにやらせよう）

（大丈夫なのか？）

（一応クロードも強い）

（ならそれで…）

「ダメか？」

俺達が返事を返さなかった事に、不安を覚えたカイトが再度聞いてきた。

「「クロードに勝ったらいいぞ」」

「え？」

俺達の言葉に、若干空気化してたクロードは呆けた顔をしながら、こちらを見た。

「クロードの好きな戦闘だ！」

「レイには及ばんがなかなかに強いぞ」

「なら、勝負だ！　クロード！！」

「勝負か…いいぜ。　やってやる！！」

カイトが高らかに勝負を申し込むと、クロードは呆けた顔から楽しそうな顔になり、カイトとの勝負を受けた。

数十分後、勝負はいまだ均衡を保っていた。

「まだ勝負着かないのか…」

「見てるだけってのも退屈だなぁ…」

レイと俺が呆然と勝負を眺めてると、はやてと風音が自分達の家族であるカイトを応援していた。

「頑張れ～パパ～」

「カイト兄～負けんなや～」

瞬間、俺の脳内に雷が落ちた。

「なぁ…レイ」

「ん？　どうした？」

レイの方を見ると、レイはニヤケ顔で見てきた。
どうやら同じ事を考えついたらしい。

「いや、お前はさいっこーのダチだ」

「お前もな」

そして、俺達ははやての所へ向かった。

「頑張るんや～」

「はい、奥さん」

「ん？　なんやってこれは！？」

レイが転移ではやての前に行き、夜天の魔導書によく似た本を見せる。

「はい、阪神タイガースです」

「阪神タイガース？　野球の？　夜天の魔導書やないん？」

「魔導書ですよ？　名前は阪神タイガースです。　あ、夜天とか野球の球団ではありません」

「違うんや…」

「はい、偶然の一致です」

「で、これで何するん？」

「これを使って貴女が魔法少女となり、夫を支えるんです」

「いや、もう支えとるし、魔法少女って…」

たじろぐはやて、しかし逃さない！！　俺達の暇潰しの為に！！
そこで用意するのは八神家の娘だ。

「お母さんスゴーイ！」

「そうか？　私○○歳やよ」

「「……」」

はしゃぐ風音に辛い現実を告げるはやて…。

「と、とにかく貴女の助けが必要なんです！」

「お母さん…」

「……うぅ…せやけど…奥さんになってまで魔法少女は…せやけど私の助けが必要だって言うし…わかった！　やってみる！！」

「やるの！？　お母さん！」

キラキラとした目ではやてを見る風音。
純心ってのはいつも酷いもんだな…。

「ちょっとだけや。　で？　普通にセットアップすればええの？」

「いいえ、それにはある呪文を詠唱をしないとダメなんだ」

「ふーん。　どんな？」

「それはもうわかってるはずです」

「え？」

「その本を持った時に心に言葉が浮かんだはずです。　それを声を高らかに！」

「う、うん…キューティー○リティーソサエティー！！」

はやては確かに声を高らかに叫んだ。
しかし、本は何も反応しなかった。

「全然違います」

「全然違います」

「に、二回言わんといて～／／／　なんで違うん？　言われた通りにしたで！？／／／」

「キュ…キューティープリティー…」

「言わんでフーちゃん／／／」

はやては顔を赤らめて、悶え始めた。

「正解は貴史が…」

「リリカルマジ「その呪文だけは嫌や～」ひでぇな…あんたのダチはよく叫んでたぞ？」

「それなのはちゃんが小さい頃やん！」

「まぁ、嘘なんだがね」

そう言うとはやては盛大に転んだ。
そんなにやりたいのか？　魔法少女…。

「正解は道産子ラーメンパワーメークアップだ」

「な、なんや…さらに恥ずかしゅうなっとる…あ、ところで魔法少女って変身する時裸になるけど…」

「「ご心配なく（心配すんな）…裸になるのは貴女（あんた）の旦那さん（夫だ）です」」

「なんでカイト兄が？」

「此処の魔法は不思議なんだ」

「不思議すぎやろ！！　まぁええや…やってみよ」

そして、はやてが魔導書を天に掲げ…

「道産子ラーメンパワーメークアップ！！」

呪文を唱えた。

カイト視点

よ！　俺は八神カイトだ。
今、レイの友達のクロードって奴と戦ってる。
こいつが中々に強い。
流石、チートの友達だぜ。
まったく勝負が着かない。

「やるなぁ…クロード」

「お前もな…カイト…」

「これ以上…長引くと面倒だ」

俺がそう告げると、クロードは不敵ににやけた。
どうやら俺が言わんとしてた事に、気付いたのだろう。

「なら…」

「あぁ…本気で行くぜ」

「……子……メン……メ……ップ」

俺は魔力を開放した。

《ビリリリッ！》

「「……」」

あ…ありのまま、今起こった事を説明するぜ。
俺が魔力を開放した途端、俺の服が破れて真っ裸になった。
俺自身、何を言ってるかわからないが、俺も何を言っているのかわからねぇ…。
頭がどうにかなりそうだった…。
ネギ坊主みたいなくしゃみだとか、瞬間脱衣術だとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…。

貴史視点

「おーちょうどいい所で真っ裸になったな」

「流石はカイト…空気が読めてるぜ」

「お前らのせいか!!」

俺とレイがカイトを見てると、カイトがこちらに気付いた。

「よくわかったな。　真っ裸」

「素晴らしい洞察力だ。　真っ裸」

「わからいでか!!　つか真っ裸言うな!!」

カイトが叫んでるが…

「はやてがやった事なんだぞ。　真っ裸」

「そうだぞ。　真っ裸」

「うがー！！」

世の無常に吠える真っ裸…。

とりあえず可哀相なんで服を提供した。

「たく、せっかく楽しくなってきたのに水を差しやがって…」

「ごめんなぁ…カイト兄……」

「まったく駄目だろ？　はやて、真剣勝負を邪魔しちゃ」

「まったくだ」

「えぇ～…」

「「お前らがやらせたんだろうが！！」」

レイと俺がはやてに罪をなすりつけたら、クロードとカイトがツッコミを入れた。

お前ら、仲良いな…。

「さてどうする？　戦うか？」

「いや、俺はパスする」

「俺も…なんか疲れた」

「そうか…ならレイ、やるか？」

「おう！」

こうして、レイと俺の戦いが始まった。

クロード視点

レイと貴史の戦いか…。
前に大会で戦っていたが、かなりのレベルだったしなぁ。
こいつは見物だな。

カイト視点

ｃｈｅａｔＶＳ無敵……か。
正直どっちが勝つかなんて想像出来ねぇ…。

「カイト兄はどっちが勝つと思う？」

「さぁな…俺にもわからん」

「……」

俺の答えに黙って二人を見るはやて…。
願わくは、今始まる戦いに乱入者が出ない事を……。

貴史視点

「んじゃ…」

「行きますk！」

俺が言い終えるか言い終えない辺りで、レイが突撃を噛まして来た。
咄嗟に避けるも、後にやってきた衝撃波で多少のダメージは受けたも、なんとか踏み止まった。

「避けたか」

「おいおい、フライディングだぜ？」

「お前相手なら大丈夫さっ！　ショートバスター！！」

「赤い（ブラッディ）魔導式ハンドガン（ガン）」

ディバインバスターの下位にあたいするショートバスターを撃つレイ。
それに対抗して、一条要から貰った魔導式シリーズのハンドガン（赤いシリーズにした）で魔導砲を放つ。

ピンク色の砲撃は、赤い砲撃とぶつかり合い相殺された。

「そら、蛇咬（スネークバイト）！！」

直ぐさまレイの後ろに回り込み、無詠唱での蛇咬を放つ。

「対物障壁！」

「アメェエエ！！」

レイが対物障壁で蛇咬を防ごうとするが、無詠唱の蛇咬とて常人には必殺。

レイの馬鹿魔力で張った障壁は、俺の蛇咬を一時止めるも一瞬にして障壁を破壊した。

「おらっ！　赤い（ブラッディ）龍殺しの魔剣（バルムンク）」

「龍殺しの聖剣（グラム）」

俺は即座にバルムンクを出し切り掛かると、レイはグラムで対抗してきた。

同じ属性を持つ剣。

原典（オリジナル）とその子がぶつかり合う。

親は子には勝てない。

そんな台詞を誰かが言っているのを聞いた。

けど…その子が親よりも強い存在に力を授けられたら？

《ピキッ…パキッパキッ……》

答えは簡単ーーーーー。

《バキンッ!!》

ーーーー親は子に負ける。

「なっ!!」

外野…カイトが驚きの声を上げる。
当然だろう。
宝具とは原典に近いものこそ、強大な力を持つ。
この理(ことわり)は絶対と言っていい。
だが…未熟なカイトでは、俺の持つバルムンクを理解する事は、出来ないだろう。

「貰った!!」

「なんの!!」

そのまま切り掛かろうとしたら、レイは三千程の防御術を使って防いだ。
バルムンクは二千四百程の障壁を切り裂いて止まった。

「ご苦労さん♪」

レイの回りに複数の魔力の塊があり、周囲の魔力を集めながら次第に大きくなる。

「ッ!!」

「喰らいやがれ!!　スターライトブレイカー・ファイナルブラスター!!」

十にも及ぶ極大砲撃魔法を放って来た。
障壁を張ろうが、魔導砲を放ち相殺するにしても時間が足りず、俺は砲撃に呑まれた。

はやて視点

驚いた…。
もうこれしか言えへんかった。
なのはちゃん以上の砲撃を放つあの子や、それと互角に戦えるあの人。
この別荘言うんのもそうやけど、彼らが出す武器の類い…。
管理局の連中が見たら、もうロストロギア認定として、回収されるもんばかりや…。
それを制御して振り回したり、防いだり…ほんまに人間なんか?

クロード視点

すげぇ…これがレイのダチ…。
こんな奴らがまだ居るって言ってたな…。
俺もあそこまで行きてぇなぁ…。
いや……越えたい…あいつらを……。

レイ視点

「……」

やった……わけないか…。

そう断言した瞬間、威圧感が重くのしかかった。

「ッ！！」

「スターライトブレイカーの直撃はきついわぁ～」

よく言う……無傷なくせに…。

そう、煙りから現れた貴史は無傷で突っ立ってた。

「よぅ…もう終いか？」

「はっ…まさか、もっと持っていけ！！」

俺は約束された勝利の剣（エクスカリバー）を出して、貴史に切り掛かる。

「赤い（ブラッディ）魔槍（グングニル）」

貴史はグングニルを出し、俺の剣劇を捌いていく。

「グングニルまであるとはな…」

「たいていは宝具を持ってるぜ」

「ハッ！　もう人間じゃねぇよ」

「うっせぇ！」

加速する俺の剣劇と貴史の槍捌き。
その速度は人知を越え、並のチート達にすら見えない速さとなった。

にしても、なんか貴史の奴…強くなってねぇか？　ゲットバッカーズってあまり知らないしなぁ…あの世界のトップに君臨する奴らの能力だっけか？　ドラ○ンボールよりチート能力じゃねぇか。

貴史視点

そろそろ…蛮様の能力に気付く頃か…。
美堂　蛮…戦闘センスが天才級であり、成長限界が無く、強い奴との戦いでは戦いの最中に成長するという…まさにチートな力だろう。

「そらそらそらぁ！」

「はあぁぁぁぁぁぁ！！」

まだまだ俺は強くなれるみたいだな。

カイト視点

なんだよ…これ……俺ですら見えない攻撃だと？　俺が見る事が出

来ないなら他の奴らも見えないだろうな…。

「あんな戦闘見れる奴いんのかよ？」

「クスッ♪　私は見れますよ」

「「「「！！！」」」」

俺の後ろから聞こえた声に、俺達外野陣は振り向いた。
そこに立っていたのは…刃を持つ死神だった。

クロナ視点

私が散歩から戻ったら誰も居らず、貴史が外に行く事はないので別荘に行くと、案の定居た。

それにしても…クスッ♪　面白い事をしてますね。

誰にも気付かれずに、外野陣の所へ行くと一人の男性が…

「あんな戦闘見れる奴いんのかよ？」

と呟いてたので、私には見えると答えたら皆さん（外野のみ）驚きながら振り返りました。

「クスッ♪　初めまして…赤屍クロナと言います」

「や、八神カイトだ…（気付かなかった？　こいつも化け物かよ…）

」

「八神はやてです…（び、びっくりしたぁ～）」

「八神風音です（綺麗なお姉ちゃんだなぁ）」

「クロード・レヴァンだ…（底が知れねぇ…何者だ？）」

「おや？　あちらは本気を出すみたいですね」

私の本気発言に皆さんが、顔を驚きに満ちた顔をして、戦ってる二人へと目を向ける。

貴史視点

わかっちゃいたがやっぱり強いなぁレイは…。

まぁ、俺も強いけど。

「赤い（ブラッディ）天の鎖（エンキドゥ）！！」

俺の捕縛術（具）の中でも、最強の宝具をレイに放つ。

「捕らえろ！」

赤い天の鎖はレイをがんじがらめにして、レイの身を拘束した。

だが……。

「俺には効かねぇ！！」

バキンッと赤い天の鎖を砕くレイ。
そう、あいつはさらなる力を得て俺より上の捕縛術しか、捕らえられない。
まさに厄介極まりない相手だぜ。

「あいっかわらずの化け物だな」

「まだまだ行くぜ？」

「たりめぇよ…」

互いに距離を取る。
全力を出す為に……。

「今こそ…汝が右手に、その呪わしき命運尽き果てるまで、高き銀河より下りたもう蛇遣い座を宿すものなり。　されば、我は求め訴えたり、喰らえ――その毒蛇の牙を以て！！　汝が神に、我が身を――捧げん！！」

俺の右腕は、アクスレピオスの完全詠唱により封印されてた悪魔の腕（デモンアームズ）が解放された。

「ヴィード！！」

「初参加です！」

「行くぞ」

「はい！！」

「「ユニゾン・イン！！」」

レイは自分のユニゾンデバイスであるヴィードを呼び、融合した。

「「さぁ…楽しい楽しい全力勝負の再開だ！！」」

俺はレイに向かって駆け抜ける。
レイは右手を俺に向けて、簡易砲撃を放ってくる。

「来い…我が傀儡…海星剣皇！！」

「オオォォォォォォッ」

海星剣皇に跨がり、さらに駆け抜ける。
レイの砲撃は海星剣皇の障壁にぶつかるも、俺の魔力により強化された障壁を貫通する事なく消えていく。

「チィッ」

間近に迫り、止める事が出来ないと悟り、横へ跳んで回避するレイ。
そして先程とは、比べるのも馬鹿らしいくらいの魔力を篭めた砲撃を放って来た。

「なら…突神魔法、蒼光彗星！！」

さらに加速し突貫する海星剣皇と、こちらを飲み込まんと向かう魔力砲が、ぶつかり合う。

《ドウウウゥゥゥゥゥゥゥン》

《ズガガガガガガガガン》

海星剣皇は砲撃に負けじと進むが、砲撃は海星剣皇と俺を押し退けようとする。

「ぐ、うぅぅぅ…ヴィー…ド…出……力をもっと…あげろ…」

【こ、これ以上は…】

「海星剣皇…踏ん張りやがれぇぇえええ!!」

【……】

海星剣皇の速度は上がり、レイの魔力の出力も上がって中々決着が着かない。

しかし……。

時間が経つにつれて、海星剣皇の障壁にひびが入りそこから砲撃が漏れ出して、海星剣皇と俺を飲み込んだ。

「くっ」

レイ視点

「やったと思うか?」

【まったく…】

「だよな…」

さっき海星剣皇に向かって放った煙りの向こう側を眺めてると、悪魔の腕を肥大化させて防いでる貴史が姿を現した。

「やっぱり楽しいなぁ…レイ」

「あぁ…この楽しみは…滅多に味わえないぜ」

互いに睨み合い、静かな時が流れる。

数分という時間が経つ。

そんな冷戦状態に、貴史の魔力が揺らいだ。

来る!!　そう思った時、貴史が俺のすぐ目の前に居た。

【そんな!!】

「蛇咬(スネークバイト)!!」

悪魔の腕の方を振りかぶり、必殺の技が放たれた。

「ぐっ!!」

衝撃と打撃に耐えれるよう、対物障壁を張るが、貴史はやすやすと障壁を切り裂いた。

《ザグン！！》

「カハッ！！」

肩から大きく引き裂かれた。

貴史視点

落ちていくレイを見ながら、警戒を解かずいた。

「ここで終わんじゃねぇぞ…」

俺の能力（チート）は…デモンアームズだけじゃねぇんだ。

レイを見てると、レイの魔力が上がっていくのを感じた。

「そうでなくっちゃな…」

「今のはだいぶ効いたぞ…わっぱ…」

「そうかい」

さてさて…レイがまたもドS王モードになったわけだが…アレと戦うのは正直勘弁…。

だが前は負けたし…挽回はしたいわなぁ。

「本気で　来い」

言霊を使ってまで本気にさせるとか…。
作者ぁ…邪魔すんなよ？

（好きにしたらええよ…くすん…）

作者の許しも出た事だし、やるか…。

「【目覚めろ】赤い（ブラッディ）乖離剣（エア）」

俺の手に魔力を凄まじい勢いで消費しながらエアが現れた。
それは今までのエアとは全く異なり、されど今までと同じエアだった。

「封印は解け、今…エアは目を覚ました」

「ほぅ…」

「お前も…切り札を出してみろよ…」

「ならば…」

レイは約束された勝利の剣を出し、構えた。
勝利の剣は今までにない程の、輝きを見せていた。

「鮮血の（ブラッディ）…」

「約束された（エクス）…」

周囲の魔力は俺達が手にする宝具に、吸い込まれるように二分した。

「天地乖離す開闢の星（エヌマエリシュッ）！！」

「勝利の剣（カリバーーーー）！！」

黄金の斬撃と鮮血の魔力波がぶつかり…

《ズガガガガガガガガガガガーーーー》

「なっ！！」

合わず…鮮血の魔力波はたやすく黄金の斬撃を掻き消すように、レイもろとも飲み込んだ。

外野視点

「はやて！！　風音！！」

「カイト兄！！　フーちゃん！！！」

「パパ！！　ママ！！！」

「レェイイイイィィィィ！！」

「クスッ♪　心踊る戦いですね」

そして、舞台は外へ移る。

三人称視点

《ドウウウゥゥゥゥゥゥゥゥ――――ン》

中で貴史が赤い乖離剣を完全真名解放した時、別荘が光り輝き大きくひびが走った。
そして数秒経った瞬間…別荘は砕け散り、中に居た者達を外へ出した。

《ドサドサドサ…》

「うわっ！」

「おわっ！！」

「きゃっ！！」

「うわっ！」

上からクロード、カイト、はやて、風音の順番で落ち人間タワーが出来上がった。

「クスッ♪　楽しそうですね」

そこに、気絶したレイとヴィードを抱えてクロナが現れた。

「「「楽しくない（わ）！！」」」

「あーしんど…つか疲れた…」

と、さらに貴史が現れた。

全員無事な事にはやてはホッと安堵の息を吐いたとか…。

貴史視点

あの後、帰るつもりだったが大分疲れが溜まってたらしく、全員一日だけ泊まる事になった。

そして、日が昇り…

「もう少しゆっくりしていけばいいのに」

「こっちにも都合があんだよ」

「また来させてもらうわ」

「またね。　お兄ちゃん、お姉ちゃん」

「「おう（はい）」」

カイトとはやて、風音は元の世界へと戻った。

「んじゃ俺らも帰るかな」

「いろいろあったけど…じゃあな貴史」

「強くなって出直してきなクロード」

「あれ見たら戦う気失せたよ」

「また呼んでくださいね」

「作者が覚えてたらなヴィード」

「あう～（泣）」

「次は俺が勝つ」

「また負かしてやんよ」

「あんたとも、やりたいな」

「クスッ♪　楽しみにしておきます」

「「「じゃあな（またね）」」」

レイ達も元の世界へと戻っていった。

おまけ

「別荘が見当たらないんだが…貴史、知らないか？」

「（ビクッ）…さ、さぁ…し、知らねぇなぁ…」

「そうか…じゃあこの貴史の魔力が篭ってる水晶球のかけらはなんだろうな」

「な、なんだろうな？（冷や汗ダラダラ）」

「……」

「（ダラダラダラダラダラダラダラダラダラ…）」

「……」

「ご、ごめんなさい…壊しました」

「良い度胸だ…坊や…」

《ズガァァァァァァァン》

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ…」

今日もネギま！の世界は平和だった。

私は魔道を極める（前書き）

残念ながら今回も本編じゃなかったり

カスミ「私の（ごく一部の）魔法事典だ」

貴史「はやく本編進めた方がよくないか？」

薫「なんでもまたコラボ話があるらしいんよ」

貴史「何考えてんだ？　あの作者」

カスミ「はやく原作に突入してもらいたい」

薫「せやね～…」

貴史「んで？　うちにコラボしてくれる物好きは誰だ？」

薫「物好きって……レイ君達に失礼やろ」

カスミ「どうやら…『気常　狸由』様が書いてる『不死の無限の”概念”剣製と真祖の少女』の佳奈・K・ホーエンツォレルンらしいぞ」

貴史「あ、俺が招待したんだっけ」

薫「まぁ次の話で出て来るゲストキャラや…今は関係ない」

貴史「じゃあ…なんで今言ったんだ？」

薫「その時になって…もし紹介し忘れたら「このキャラ誰だ？」っ

てなるから今紹介しておこうと…」

カスミ「まぁ、知らない人はこっちが更新されるまでそのキャラの事を調べられるだろ？」

貴史「ふぅん…っとそろそろ今日の本題行くか」

カスミ「だな…」

貴史「それではカスミの魔法公開の始まり～」

《カスミのごく一部の魔法事典》

漆黒

？？？

記憶の書

開発した魔法を記憶する書。

神明魔祓の書の原典。

神明魔祓の書

記憶した魔法をコピーし、カードに封じていつでも使える状態に納めてる本。

断罪の剣

原作でエヴァが使ってたのと同じ魔法。

サギタ・マギカ

炎、水、氷、風、雷、砂、光、闇の全属性を撃てる。

虚・魔法の射手（サギタ・マギカ・ゼロ）

全属性を混ぜた魔法の射手。
通常の魔法の射手と威力が十倍違う。

漆黒の劫炎

闇の吹雪や雷の暴風と同レベルの魔法。
闇の力と炎の力を合わせて放つ魔法。

漆黒の氷炎

漆黒の劫炎の上位魔法。
闇、氷、炎と三つの属性を合わせた魔法。

漆黒の炎嵐

黒い暴風に黒炎が付加された魔法。
ランク的には上級の中辺りで、闇と火、風の合わせ魔法。

水神の戦槌

エヴァンジェリンが使う氷神の戦槌の水版魔法。
水圧数千トンを越える一撃は形在る物全てを粉砕する。
巨大な水鉄砲みたいな感じ

雷の斧

ネギ、ナギがよく使う魔法。

風の大鎌

雷の斧と同ランク魔法。
見えない風の刃が相手の首を刈り取る。

スターライト・ブレイカー

星の魔力を直に集めて放つ最強最悪の魔法。
ちなみに自身の魔法は使わないので、いくらでも撃てる。

天壌の劫火（アラストール）

カスミの炎熱系最強の魔法。
燃え盛る灼熱の炎を放ち、敵を焼滅させる。
様々な形状（モード）があり、下にいくにつれてランクが上がる。
剣（ブレイド）
斧（アックス）
槍（ランス）
砲（バスター）
狼（ケルベロス）
鳥（フェニックス）
龍（ドラゴン）

星の息吹

契約した星の魔力を相手にぶつける。

ＤＥＡＴＨ

ペルソナ３のラスボス…ニュクス・アバター（アルカナ：死）が使ったものと同じ魔法。
星の魔力と自身の魔力を混ぜ、凝縮したもの。
指から一滴の雫のように落ち、地面に触れた瞬間…数キロの範囲に渡って死滅させる。

「金色の母」の召喚

スレイヤーズで魔族に崇拝されてる、金色の魔王（ロード・オブ・ナイトメア）を喚ぶ魔法。
ただ、喚ぶのにリナみたいに呪文を詠唱しなくても「来い」の一言で呼べてしまうので質が悪い。

ハルマゲドン

光と闇の力が混じった爆滅魔法。
ペルソナ3のミックスレイドを参考に作り出した魔法。

ナンバー・オブ・ビースト

―――
―6―
―6―
―――

癒の春木

治療系魔法。
GetBackers－奪還屋－に出て来る四木族の力を参考に作った魔法。
たいていの怪我はすぐに治る。

死の夏木

生命力吸収魔法。

上記に同じく四木族の力を参考に作った魔法。
自身を中心に手の届く範囲（ケンイチで制空圏みたいな間合い）の動植物の生命力を死ぬまで吸収し続ける。

眠の秋木

強制睡眠の魔法。
上記に同じく四木族の力を参考に作った魔法。
死に近い眠りを強制する魔法。

覚醒の冬木

強化系魔法。
上記に同じく四木族の力を参考に作った魔法。
自身や他人の身体能力を底上げする魔法。
眠の秋木の眠りからも覚醒させる事からも出来る。

カスミ「他にもあるんだがな…」

貴史「なぁ…どうなのよコレ」

薫「やりすぎとちゃう？」

カスミ「お前らがチートすぎるから私は魔道を極めようとしたんだ！！」

貴史「でもやりすぎだろ…」

薫「なんやねんの？　金色の母って…ＤＥＡＴＨって…」

貴史「仕舞いにはゲトバのチート一族の特性を魔法化…」

カスミ「私だってゲットバッカーズの技が欲しくなったんだ…」

薫「ならあん時言えばよかったやん…」

カスミ「後になって欲しくなるものもあるだろ…」

貴史「まぁ…あるわな……」

薫「あ、血液の操作はどない？」

カスミ「使えるぞ…相手の血を増幅させて破裂させたり…血を枯渇させたりいろいろ出来る」

貴史「アレ？…俺の天敵？」

カスミ「逆だ…逆…貴史のは自分の血を武器化するからな…」

貴史「枯渇したら？」

カスミ「傷が瞬時に塞がり治るのと同じだよ…」

貴史「血が元に戻ると？」

カスミ「恐らく…」

薫「次はウチかなぁ…」

カスミ「いや…案外技、魔法事典は作らない方がいいかもな」

貴史「だな…どんどん技増えるし…」

カスミ「というか未公開魔法のオンパレードなんだが…」

薫「カスミの戦闘が少な過ぎるんよ」

カスミ「いや…貴史が目立ちすぎなんだ」

貴史「俺が主役なんだから当然だろ？」

カスミ、薫「「違う（ちゃう）！！」」

カスミ「私達三人が主役なんだ！！」

薫「そやのにウチは出番を省略されたり…グスッ…」

貴史「虚の薫は省略されてないからいいじゃん」

薫「当たり前や！！　アレで省略とかされたらウチほんまに怒るえ！？」

カスミ「確かに省略はつらい…」

薫「カスミはええよね…皆に同情してもらえて…人気やし…その点ウチなんか…省略されるし…人気ないし…三人の中で幸運ランク上なんやで？　なんやウチが不幸体質みたいやんか…」

貴史、カスミ（（うわぁ…））

カスミ「に、人気については私と同じだったじゃないかぃ」

貴史「俺はその下だったかなぁ…」

カスミ「コメディーキャラとしても」

薫「それもカスミの方が上や…」

カスミ「シ、シリアスにも使えて万能キャラじゃないか（汗）」

貴史「俺は戦闘以外使いづらいキャラＮｏ．１なんだぞ」

薫「……そう考えるとウチ…恵まれとる？」

カスミ「そうだな…確かに恵まれてるな…死ねばいいよ…」

薫「ふふん…嫉妬はあかんよカスミ～」

カスミ「嫉妬せねばやっていけん！！」

秋代「此処で貴史が皆の事をどう思ってるかのコーナーに入ります」

薫「い、いきなりやな…よく見とかな…」

カスミ「突発的すぎるぞ…ドキドキするな」

秋代「それでは……はい！！」

《貴史の周りの評価》

カスミ……幼なじみ
薫……幼なじみ
真名……妹、生徒
学園長……ぬらりひょん
タカミチ……同僚
桜咲……生徒
木乃香……生徒
明日菜……生徒
茶々丸……俺も欲し…素晴らしい生徒
超……茶々丸作ってくれたら計画を協力してやる
葉加瀬……上に同じ
エヴァ……生徒

秋代「今の所これくらい」

カスミ「ちょっと待てー！！！！　なんだこれは！！？」

薫「超ちゃんの計画に協力って何考えてんねん！！」

超「これはこれは…コレ以上にないくらい美味しい相談ヨ」

カスミ「Σ超！！　作るなよ？　作ったりしたら私達はいったいどうしたら…」

薫「もう駄目かも」

真名「ふっ……燃え尽きたよ……真っ白に……五月…あんみつ…おかわり」

五月「元気出してください。　はい、あんみつ」

真名「あぁ、ありがとう…フフッあんみつが心に染み渡る……（泣）」

貴史「なんだ？　このカオス…」

秋代「時間も迫ってきたし今日は此処まで！」

貴史「そんじゃ…」

秋代、貴史「「バイニー」」

私は魔道を極める（後書き）

次回予告

「私の……マクロス…（泣）」

鉄屑にされた自身の機体を眺める一人のＴＳ主人公。

学園祭を終え、傷が癒えた頃に学園長に弁償させる為、交渉。

「おぬしんとこのウェルフェン君とビューレン君が学園祭最終日に光り輝く世界樹の前で告白してのぅ」

逆に責任を問われるＴＳ主人公。

注意しようと二人の下へ行くも、彼らの行為に当てられ一人虚しく消化させる。

「わたし…えっちくないもん」

自身に言い聞かせるように言い訳のように呟く。

そんな不憫過ぎるＴＳ主人公に見るに見兼ねて発散させようと空間を越えてやってきた我らが主役。

「あー……運動でもして発散しないか？　相手はより取り見取りだぜ」

ＴＳ主人公にいろいろと気を使う雲丹の主人公。

「おい、なんであいつに接待しないといけない？」

「見てて不憫すぎたから…それにな…」

「ま、まさか……」

「あーパスパス…流石に恋愛「トイレでやってるとこ見ちゃったし…その御礼。」死ねぇぇぇえええ！！！／／／／／／／／／／」

「ケケケケッ」

次回！！
雲丹と不死の無限の”概念”剣製と御礼

それは…貴史の気まぐれ

雲丹と不死の無限の”概念”剣製と招待

《とある世界の麻帆良学園》

▼　佳奈　視点▼

おはー…ちわー…ばんわー……。
最近心がポキポキと折れ、やることなすことあんまりうまくいかない…佳奈・K・ホーエンツォレルンでーす。
現在私はエヴァの別荘で、壊された機体を作り直してるのさ…。

「おい。　佳奈」

「ん～な～に～？　今、私すんごい忙しいんだけど」

「ポストにお前宛ての封筒が来てる」

「封筒～？」

エヴァの方へ振り向き、封筒を受け取る。
どこにでも売ってあるような封筒に、私の名前が書いてある。
裏を見ても相手の名前が書いてない事から、直接ポストに入れたのだろう。
しかし…

「なんでエヴァの家のポスト？」

私宛てなら私の家のポストに入れれば良いだろうに…。
びりびりと封筒の端を破ると、中からカードが落ちた。

「招待状？」

落ちたカードをエヴァが拾い読む。

「拝啓…省略」

これ書いた奴馬鹿だ…。

「何？　その馬鹿っぽい出だし」

「拝啓…省略」

私のツッコミを切り捨てるように、最初っから読み始めるエヴァ。
なんか、突っ込んだ私が馬鹿みたい…。

カードの内容は以下の通り…。

拝啓…省略。
多分、心がボッキリ折れかかってるＴＳ主人公さん。
一度、ストレスとか気分転換に運動しないか？
迎えに行くから返事はそん時に……。

美堂蛮（笑）より

「……なんだ？　コレ？」

とてつもない人からの手紙だった。
ていうか裏新宿に行けと？　いや、それよりもあの人ってこんなん出すキャラだっけ？　というかＴＳ主人公って…まぁ、私よね…なんで知ってんだろ？　つか（笑）って何よ！？　あーもう、ツッコミどころ多いなぁ…でも突っ込んだら負けな気が……。

「知り合いか？」

と、私が頭の中でいろいろ葛藤してたらエヴァが聞いてきた。
知り合い…ふむ…知ってる人（キャラ）と言えば知ってる。
でも相手は私を知らない……よね？　一度も会ってないしさ…。

「ん～知ってるようで……知らないようで」

「なんだそれ？」

どうしよう…まさか私の他の転生者？　アンジェに聞いたとか？
いや、私は聞いてないし…。

《ぷに》

「なっ！？」

「……」

何やら胸が変な感触がする。
エヴァはなんだか驚いてるし…。
てか…

「いつまで触ってるのさ！！」

黒鍵を瞬時に投影して切り裂く……

《スカッ》

……も空振り。

「ん～足触ると変態扱い受けそうだったし」

「胸も一緒に決まってんじゃん！！」

声がした方へ突っ込むと、そこには髪をぴんぴんと雲丹みたいにセットした美堂蛮が居た。

これが…私と彼「の恋の始まり」「じゃないっ！！」

「何言っちゃってくれてんの！？」

「いや、好きにしていいって言われたし」

「メタ発言！！　というかそれは違う意味の好きにしていいって意味のはず！！」

「まぁな♪　ケケケケッ」

こいつ…ムカつく……。

▲　佳奈　視点▲

《世界は変わり、貴史達の麻帆良学園》

▼　貴史　視点▼

ヤッホー…アサシンに蛮様ヘアーされた貴史だ。
いや、好きなんだけどね蛮様…。
でも、髪だけは普通でいたい。
だけど、元に戻そうとするとアサシンが、赤い魔剣（ブラッディ・エクスカリバー）を出してくるから諦めた。

そんで今何をしてるか？　とある不憫なＴＳ主人公の迎えに行くとこ。
どうしてこうなったのか…回想ドンッ☆

《回想開始》

「貴史くん」

「あ？　って秋代！？　なんで作品に出てくんだよ！？　ただでさえ駄作なのにさらに駄目な作品にする気か！？」

何考えてんだ？　こいつ…阿保か？

「なんでそう酷い事言うかなぁ…」

「作者が作品に介入する作品って読者から駄目だし出ないか？」

「私がルール」

駄目だコイツ…。

「んで？　何の用だよ」

早く用件聞いて退場させよ…。

「実はね…とある主人公の心を救って欲しいんだ」

「レイか？」

「違う、違う…佳奈・K・ホーエンツォレルン」

……誰さ？　それ…。

「まぁ、好きにしちゃっていいから…とにかくヨロッ」

《回想終了》

まぁ、言いたい事はわかるが無視する。
という訳でさっき招待状を書いて出した。
そして、時間を置いて迎えに行くと…今、此処。

「さて…行きますか…」

腕を軽く振り、世界に穴を開けてその中に　入る。
穴の先は、目的人物であろう女性の背後。

女性を挟んでエヴァンジェリンが居る。
うむ、背後からでも解る…スレンダーな身体！　足がなかなか魅力的だ。
よし、悪戯しちゃろ。

《ぷに》

「なっ！？」

「……」

エヴァが驚きの声を上げるが無視！　流石に、足を触るのは止めた。
紳士的にな！！　しばらく触ってるとアクションのなかった女性…もう佳奈でいいや。
佳奈が振り向き様に切り裂こうとした。
黒鍵で…

《スカッ》

まぁ、当然避けたけどな！

「ん～足触ると変態扱い受けそうだったし」

「胸も一緒に決まってんじゃん！！」

ごちゃごちゃと…減るもんじゃあるまいし…。
……ん？　なんかキュピーンと来た！！

……「の恋の始まり」「じゃないっ！！」

うまく佳奈の思ってる事に合わせるように、台詞を被せてみた。

「何言っちゃってくれてんの!?」

「いや、好きにしていいって」

「メタ発言!!　というかそれは違う意味の好きにしていいって意味のはず!!」

「まぁな♪　ケケケケッ」

青筋立てながら、拳を震わす佳奈であった。

つか、エヴァが空気だ。

▲　貴史　視点▲

▼　佳奈　視点▼

まったく、なんなのよ…こいつは…。

「おい、佳奈…この不法侵入者は誰だ?」

どうやらエヴァが硬直から戻ったようだ。

こいつが誰なのか…おそらく……は

「招待状を送った人だと思う」

「正解！」

つか、本当に美堂蛮にそっくりね…。
性格は若干違うみたいだけど……。

「じゃあ…美堂蛮（笑）…」

「ああ、アレはおふざけだから」

やっぱり別人か…となると…

「転生者…それもとびっきりのチート」

「正解！！　俺は南武　貴史…この世界の並行世界から溜まりに溜まった佳奈のストレスを発散させに来た」

やっぱり…

「並行世界だと…？」

「イエス」

「それで？　どう発散させてくれるの？　なんか招待状見る限り、あんたが居た世界に招待するって、書いてあるけど…」

「その通り！　んで返事は？　言っとくが発散相手に満足させる自信がある」

あの目…嘘じゃないね。

でも、私は無限の剣製の概念を持つ黒鍵を投影したり、槍を振るだけ…流石にチート持ちと満足に戦える自信はない。

「自分で言うのもアレだけど…私は弱いわよ…」

「おもいっきり動けばすっきりはするだろ？」

こいつ……まるでナギみたいだなぁ…。

「待て！」

「あん？」

私と南武の間にエヴァが入る。
なんか嫌な予感しかしない。

「私をのけ者にして話を進めないでもらおうか…」

「なら来る？」

「いいのか！？」

んな、あっさりと……ι

「おう…食われても知らんがな」

「私を誰だと思ってる」

止めときな、向こうは魔窟、食われるよ
佳奈心の俳句。

なぁんて言えない。
自信に満ちてるエヴァを見たら…もう、ご愁傷様。

▲　佳奈　視点▲

《世界移動中》

▼　貴史　視点▼

つう訳で連れて来ました俺達の世界へ…。
場所はカスミが新しく作った別荘。
仕事が速いなぁ…カスミは……。

「なんで…別荘内なんだ?」

エヴァががっかりしたように呟く。
外だとお前の呪いがなぁ……。

《バタンッ》

「南武先生!!　助けるヨ!!」

突然、建物の扉が開き超が俺を発見して、助けを求めてきた。

《シュルルッ…ガシッ》

「カ、カスミ…止めるネ…今ならまだ間に…あぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ」

影の触手が超に絡み、ズルズルと中へ引きずっていった。

《バタンッ》

そして、扉は閉まる。

「止めるアルーーーーーーーッ!!」

「食われたか…」

「お、おいなんだアレ!?　食われたかって何に!?」

佳奈の世界のエヴァが一連の出来事を見て騒いでる。

だが…それはアウトだ…エヴァ。

《バタンッ…シュルルッガシッ》

「なっ!?」

《ズルズル…》

「エ、エクスキューショナーソード…」

《ギリギリギリ》

断罪の剣で影を斬ろうと奮闘するエヴァ。

それも虚しく、エヴァは建物の中へ入っていった。

「アー――――――――――ッ！！」

そして、佳奈の世界のエヴァは食われた。

……おそらくカスミに…。

「「……」」

佳奈はエヴァが、引きずられた建物を見ながら、呆然としていた。

「さっきのは？」

数分後、ようやく意識が戻った佳奈はさっきの事を聞いてきた。

「ん？　カスミ・ヴェネーラ…生前は俺の幼なじみ」

「へー……その人も…チート？」

「チートだね…」

「薫お嬢様ァァアアッ！！！」

「ビクッ！！」

建物の中から桜咲の声が聞こえ、佳奈がびっくりした。

「なんだ…薫も居たのか」

「い、今のは？」

「桜咲刹那…どうせ薫に食われたんだろ」

「薫？」

「近衛薫…生前は俺の幼なじみ」

俺の解答にあっそう…と呆れた声で建物を眺めてた。

待つ事、３０分。
建物の中からカスミと薫が出てきた。

▲　貴史　視点▲

▼　佳奈　視点▼

まず、私が驚いたのは容赦なく人を食べる建物。
いや、この場合転生者達？　貴史（楽屋で呼び捨てで良いと言われた）に聞いたら、同意の下で行われてたらしい。
刹那ならわかるけど……絶対に超は必死に逃げてた。
あと、エヴァは巻き込まれただけ…。

まぁ、事前に教えてたもらってるにも関わらず、着いて来たんだし自業自得か。

そして、声が途絶えて３０分後に、二人の女の子が現れた。
一人は、金髪でポニーテールしてるリリなののフェイト。
もう一人は、木乃香にそっくりな人。
おそらく、木乃香のそっくりさんは薫って子かな。
だとしたら…エヴァを食べたのは……フェイトか。

「超は？」

「ん？　あぁ、大丈夫だ。　マッサージしたら寝た」

嘘だ！！　声を大にして否定してやりたい。

「疲れを『殺して』やれば良かったんだがな」

「ふぅん…」

ちょ、殺してって……。

「ところで貴史」

「あん？」

カスミって子が私を見る。
あ、若干殺気が……。

「またか？」

「いやぁ…今回はちが「貴史はやらんえ！！」」

「はっ？」

「貴史にどう吹き込まれたか知らんが、貴史の取り合いは私と薫とスナイパーだけで十分だ！」

なんか…物凄い誤解を受けてない？　私…てかなんで私？　この場合、貴史じゃないの？

▲　佳奈　視点▲

▼　カスミ　視点▼

私は超のマッサージを終えて、外に出たら貴史と女が居た。

……またか！？　またなのか！？

薫も同じ気持ちなのか、殺気を出しながら女の方を見てる。

▲　カスミ　視点▲

▼　貴史　視点▼

カスミと薫がヤンキー並にメンチ切ってるので、とりあえず説明する事に……。

《スーパー説明タイム》

「なんだそれならそうと早く言え」

「ストレス発散かぁ～」

どうやら信じてくれたらしい。

「あー…ところでうちのエヴァは？」

説明が終わり、カスミ達が納得した時にエヴァの事を聞き出した。

「うちの？……まさかあぁ、あの反抗エヴァか…何やらストレス溜まってたからマッサージで昇天させたぞ」

「食べなかったの？」

「お前なぁ…いくら私でも本気で嫌がればしないさ…最初はやる気満々だったが…いつもと違ったからな…」

「へ、へーぃ」

「そいじゃ、始めるか…佳奈、この三人の内一人選べ」

俺の言葉に一瞬だけ考える佳奈。

まぁ、聞かなくてもわかるけど……。

「貴史で…ただで胸を触った罪…今此処で断罪しちゃる」

ほらね…。
カスミと薫がピクリと反応したが、直ぐさま戦闘するため距離を取った。

▲　貴史　視点▲

▼　佳奈　視点▼

と、意気込んでたものの…まったく隙が見当たりません。
一応、魔力と気と獄力を合一して、メインウエポンの槍を構えてるんだけど。

私に反して貴史は、ポケットに手を入れて直立不動。
最初はタカミチみたいに、居合い拳使うのかと思ったけど…違うみたいらしく全く動かない。

「どうした？　動かねぇとすっきりしねぇぞ」

隙がないから動けないだけですー。

「はぁ…これはお前のストレス発散だぞ？　何も考えずに来いよ…」

……そこまで言われちゃあしょうがない…うん。

「疾ッ！」

怒りとか不満とかストレス、その他諸々含めて突き出した私の槍は、とんでもない速度を持って貴史に向かった。

しかし、貴史は余裕を持ち回避する。

「こんのっ」

《ズガガガガガガガガガガガガガガ》

私の突きの嵐、それでも貴史は薄紙一枚分開けて避けていく。

「うがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

「唸るだけじゃ断罪出来ねぇぞ」

私の攻撃を嘲笑うが如く、避け続ける。

てか、本当に嘲笑ってるし！！

▲　佳奈　視点▲

▼　貴史　視点▼

いやはや、秋代に聞いてるとは言え、凄いなぁ…そんなにストレス溜まってたのか。

（※違います。）

高速で繰り出される突き突き突き。

剥きになって、槍しか使ってない事に気付いてないらしい。

黒鍵はどうしたんだ？

魔力と気と獄力の合一は使ってるのに、黒鍵を使うって考えがない

のか？

「なぁ…」

「ん？　何！？」

なんか、すんごい形相で睨んできた。

恐い、恐いっと…。

「黒鍵使わねぇーの？」

「……」

一瞬、そうほんの一瞬だけ槍が止まった。

そして次に槍が動いた時は、なんか思いが篭った連撃だった。

どんな思いか…気になる？　読者諸君。

まぁ、言うけどね…なんつーか……なんで気付かなかった自分！！　ってな感じの思い。

「単なる八つ当たりですね…はい」

「う、うるさいなぁ！！　もう！」

その後から、佳奈は黒鍵や分体を屈指して戦った。

と、まぁんな事しても負けなかったけど…。

とりあえず、出すもん出して疲れた姫さんをカスミ達に任せるか…。

▲　貴史　視点▲

《数時間後》

▼　佳奈　視点▼

「ん…はれ？」

眼が覚めると誰かの部屋に居た。

「佳奈！！」

「やっと眼が覚めたか」

声がした方を見ると、エヴァとカスミさんが居た。

「怪我はないか？」

「あ、うん。　平気…というかなんだかすっきりしてる」

「当たり前だ。　あんなに暴れたらな」

あーそっか……暴れたんだっけ…。

《回想開始》

「剣軍流星弾！！　アーク、ランス！！　突撃！！！」

無限とも言える黒鍵を投影して、さらに分体であるアーク、ランスと…そして自分も一本の矢として突っ込んだ。

《ズガガガガガガガガガガガガ…》

貴史を通り過ぎた私の槍に血が着いてて…。

一矢報いた事に感動した次の瞬間……

《ふわ…》

視界の端に天使の羽根が見えた。

ーーー今こそ…汝が右手に、その呪わしき命運尽き果てるまでーーー

私はゆっくりと上を見上げる。

ーーー高き銀河より下りたもう蛇遣い座を宿すものなりーーー

落ちてくる天使の羽根が、私の視界を遮っててなかなか見えない。

ーーーされば、我は求め訴えたり、喰らえ――その毒蛇の牙を以てーーー

しかし、やがて視界は拡がり私が見たのは……。

ーーー汝が神に、我が身を、捧げんーーー

「天…使……」

天使の片翼を背中に生やした貴史の姿。
それは…神々しくも荒々しい存在。

「強くなったら……今度は最初っから全力でやってやるよ…」

ーーーーー蛇咬(スネークバイト)!!ーーーーーー

《ズバァンッ!!》

《回想終了》

……よく生きてたな…私。

「にしても、貴史が天使モードになった理由がわからん」

て、天使モード？　アレって見方が違えば悪魔じゃない？　本気モードだしさ…。

「他のチート連中にも見せてないぞ」

マジっすか!?

何度目かの衝撃的事実にびっくりな私。
なんで…私に見せたんだろ……。

▲　佳奈　視点▲

▼　薫　視点▼

「なぁ、なぁ…」

「ん？」

「なんであの娘に、天使モード使ったん？」

今、ウチは貴史にさっきの戦いの疑問を聞いてる。
天使モード…蛇使い座（アクスレピオス）の力を完全に開放した姿。
はっきし言って、赤い乖離剣の真・真名解放以上の切り札。
相手に見せるメリットがない！！

「それは…」

「それは？」

「あいつは他の奴らと違って技を真似しないから…あいつら普通に使うより、極めた奴の技喰らって経験値だけ取るからなぁ…」

あー成る程…他の人に使わないのは経験値を取らせない為かぁ…。

「南武先生、薫様…佳奈様がお目覚めになりました」

タイミング良く、茶々丸が知らせに来たので佳奈ちゃんの所へ戻った。

▲　薫　視点▲

▼　貴史　視点▼

佳奈が起きたらしいので、部屋に向かった。
まぁ、此処までは良かったんだがなぁ…。

現在、佳奈から黒鍵を投げられてます。
避けてるけど…。

「なんで貴史っていつもいつもラッキースケベ起こすんやろ」

「幸運ランクＣ－のお陰か？」

「さぁ？」

まぁ、外野からの話しを聞いての通りラッキースケベとやらを、起こしてしまった。
ノックせずに扉を開けたら、風呂上がりの佳奈とばったり。
シンジ君の気持ちがわかった一日でしたマルっと…。

「ノックくらいしろー！！／／／／」

「ボロボロのチャイナで夜道を歩いてた癖に」

「！！」

「やや、電波が」

この後も、ヒートアップした佳奈は服も着ずに、俺を殲滅しに掛かった。

《数分後》

ようやく、いまだ服を着てない事に気付いた佳奈は、俺を閉め出した。

んで、待つこと30分。
部屋に入って良いらしいので入った。

「まったく…いちおー私には好きな人が居るんだから…「あ、居るんだ。　よかったな」…えっ…あ、うん」

部屋に入るなり、説教受ける所だったので回避！　あぁ言う手の説教はなんか苦手だ。
苦手じゃない奴って居るのかね？

「ところで佳奈…魔法くらいは使え」

「使わないんじゃないもん…使えないんです！！」

「なんだかなー…カスミ～アレ」

俺はカスミを呼んで魔法カードを貰う。

「何それ？」

「魔法カード。　発動寸前の魔法を固定しカードに封印。　使う時は魔力を流してカードを握り潰して相手に向ける」

実際に見て貰おうと、窓を開けて手順通りにする。
カードに魔力を流す。
そしてカードを握り潰す。

《パキンッ》

そして……放つ。

ーーー魔法の射手（水）！！ーーー

《バシュバシュバシュッ》

「やる事は魔力を流すだけ…術式はカードにあるからな。　使い捨てだから一枚につき一回」

「いちいち、一から作るんだぃ」

「確か魔力流すだけで、何度も使えるカードあったな」

「一応…私の魔法なんだがな」

「そう言うな…一枚あればエヴァが再現出来るだろ」

「いいの？」

佳奈はカスミに聞いてるが、そいつは地雷だ。

「良い訳あるか！！　だが貴史がやれと言うんだ…やらん訳にはいかん」

「ありがとう…」

「時間も差し迫ってるし、そろそろ送るぞ」

カスミはエヴァに魔法カードを渡して、薫は佳奈に握手したりと別れの挨拶をしてた。

「また来るといいさ」

「うん。　魔法カードありがとう…カスミ」

「今度はウチと勝負や」

「お、お手柔らかに…」

そして、大きく手を振りながらカスミ達と別れた。

《佳奈の世界》

「送ってくれてありがとう」

「いろいろと楽しかったぞ」

佳奈とエヴァはそれぞれ俺に礼の言葉を向ける。

「まぁ、こちらも楽しめたしな…」

「また会える？」

「さぁ？　俺の気が向くまま…じゃあな」

そして…俺は自分の世界に戻った。

▲　貴史　視点▲

《数時間後》

▼　佳奈　視点▼

貴史が帰ったあと、私はバルキリーを作り直すべく格納庫へ向かった。

格納庫に行くと赤いバルキリーと白いバルキリー、緑のバルキリーがそこにあった。

中を見てると楽器が内蔵されてあった。

「マクロス7？　ん？　手紙？」

《手紙の内容》

ファイヤー！！

「……ボ、ボンバー…」

さらに奥にはサウンドブースターが三つあった。

おわり。

雲丹と不死の無限の”概念”剣製と招待（後書き）

次回はとうとう原作突入。

物語が始まる（前書き）

【２－Ａ出席簿】

１　相坂さよ　気弱な幽霊。

２　明石裕奈　Ａ組一のお祭り娘。

３　朝倉和美　パパラッチ。　スクープのためなら手段を問わない。

４　綾瀬夕映　理屈屋で勉強嫌い（バカブラック）。　宮崎のどかの親友。

５　和泉亜子　関西弁。　血を見るのが嫌い。

６　大河内アキラ　長身で寡黙だが、世話好き。　小動物が好き。

７　柿崎美砂　チアリーダー。　Ａ組で数少ない彼氏持ち。

８　神楽坂明日菜　しっかり者で努力家でいつも元気な娘。　魔法生徒。

９　春日美空　いたずら好きで、いい加減なシスター。　魔法生徒。

１０　絡繰茶々丸　ロボット。　カスミの従者。

１１　釘宮円　チアリーダー。　ボーイッシュ。

１２　古菲　中国から来た格闘家。　バカイエロー。

１３　近衛薫　京都のお嬢様。　チート能力を持つ魔法生徒。

１４　近衛木乃香　薫の妹。　京都のお嬢様。おっとりしているようで切れ者。　薫と同様、魔法生徒。

１５　早乙女ハルナ　同人絵師。　噂好き。　周囲のラブを感知できる。

１６　桜咲刹那　生真面目な神鳴流剣士。　薫と木乃香とは幼馴染。魔法生徒。　ちなみにバカレッドだったりする。

１７　佐々木まき絵　天然ボケ。　元気で明るい。　バカピンク。

１８　椎名桜子　チアリーダー。　強運の持ち主。

１９　龍宮真名　長身の巫女で色黒。　スナイパー。　魔法生徒。

２０　超鈴音　中国人。　万能の天才。

２１　長瀬楓　長身の忍者。　バカブルー。

２２　那波千鶴　母性ある大人の女性。　年相応に見えないことを気にしている。

２３　鳴滝風香　いたずら好きの双子の姉。　強気。　見た目は小学生。

２４　鳴滝史伽　掃除好きの双子の妹。　弱気。　見た目は小学生。

２５　葉加瀬聡美　マッドサイエンティスト。　成績優秀。

２６　長谷川千雨　ネットでは人気Ｎｏ１のネットアイドル、リアルでは目立たない。　皮肉屋で人づきあいが悪い。

２７　カスミ・ヴェネーラ　チート能力を持つ、真祖の吸血鬼。

２８　Ｅｖａｎｇｅｌｉｎｅ　Ａ．　Ｋ．　ＭｃＤｏｗｅｌｌ　吸血鬼。。

２９　宮崎のどか　本の虫。　夕映とは親友。

３０　村上夏美　庶民的。　そばかすと赤毛でくせっ毛がコンプレックス。

３１　雪広あやか　委員長。　大金持ちでお人よしのお嬢様。　明日菜の親友。

３２　四葉五月　料理人。　温和な性格で人気者。

３３　Ｚａｚｉｅ　Ｒａｉｎｙｄａｙ　無口なピエロ。

物語が始まる

▼　貴史　視点▼

朝起きたら、ぬらりひょんから呼び出しが掛かった。

カレンダーを見てみると、今日の日付に赤丸がある。

これは俺が忘れないように、カスミが印してくれたものだ。

「……今日か…」

そう、物語が始まったのだ。

そして学園長室ーーー。

「急に呼び出してすまんかったのぅ」

「別に…んで、噂の先生は?」

「タカミチ君が迎えに行っとるよ」

「そうかい」

俺は近くのソファーに座ると、ぬらりひょんがまた話し掛けてきた。

「以前から知らせておいた通り、お主にはネギ君の補佐をしてもらいたいんじゃ…先生としても、魔法使いとしてもものぅ」

「まぁいいけど」

「よろしく頼むぞい」

「失礼します」

ちょうどぬらりひょんとの会話が終わった頃、ネギを連れて明日菜と木乃香、タカミチが来た。

「あ、南武先生や～。　おはよ～。　おじいちゃんも」

「おはようございます。　学園長、南武先生」

「おはようございます。　学園長、貴史さん」

「おはようさん…木乃香、明日菜、タカミチ」

「うむ、おはよう…」

顔なじみの挨拶も終わり、ぬらりひょんはネギ少年に声をかける。

ぬらり…もう学園長でいいや…学園長の言葉に、元気良く返事をするネギ少年。

まぁ、アレだ…「大変じゃと思うが修行に励むように」　「はい！！」　こんな感じだ。

そういや…皆に明日菜の立ち位置を教えてなかったな…。
明日菜は本来、ガトウの遺言で記憶操作を受けて、なんらかの方法で成長を留めてる呪いを解呪して、一般人として過ごす筈なんだが、どうやらこの世界では赤き翼のメンバーが殆ど亡くなっているため、呪いの解呪だけ施され魔法生徒として過ごしてるらしい。

まぁ、それでも最初は記憶操作も受けるはずだったんだが、赤き翼の連中の事を忘れたくないと泣き出したらしい。
当事者のタカミチに聞いたから、間違いはない。

「これ、南武君」

「あん？」

「ネギ君に挨拶を…」

「へいへい…」

どうやら学園長との挨拶は済ませたらしく、ネギ少年がこちらをボーッと見ていた。
明日菜達は先に教室に行ったのかな…居ないし…。

「俺は南武貴史だ。　困った事、わからない事があればなんでも聞いてくれ…たいていな事なら教えるし助ける」

「ネギ・スプリングフィールドです。　よろしくお願いします」

屈託のない笑顔を向けるネギ少年。
まぁ、とりあえず……

「ところでネギ少年…」

「は、はい」

「魔法は秘匿するものだ」

「はぁ…」

そんな事、知ってますよという顔をしながら俺の言葉を聞く少年。

「さらに言うならば…此処は旧世界だ…」

「……」

「危険はそれほどない…言いたい事わかるか？」

「？？？」

首を傾げ、はてなを三つ頭に浮かべる少年。

「よし、…率直に言おう…障壁を常時展開してんじゃねぇよ…と、言いたいわけだ」

「！　あ、す、すいません」

俺が言い終えると、謝りながら慌てて障壁を消す少年。

うむ、それで良い。

「そいじゃ…ぬらり学園長…ネギ少年を担当クラスに連行します」

「連行！？」

「頼んだぞぃ（……ぬらり学園長って…）」

ネギ少年が連行という単語に、驚いてるが無視する。

別に深い意味ないしな…。

――2－A前――

「此処が2－A…ネギ少年が担当するクラスだ。　ほい、クラス名簿」

「あ、ありがとうございます」

「んじゃ呼ぶから待ってろ」

「はい！」

教室に入ろうと扉に手をかけるが、若干扉が開いていたので上を見ると、黒板消しが挟まれてた。

「……」

扉を開け、黒板消しをキャッチして扉を閉め、さらに進む。

「チィ…」

鳴滝風香の舌打ち。
後でげんこ決定。
足元のロープを踏んで、バケツをキャッチして、バケツを盾にしておもちゃの矢を防ぐ。

「あっ…」

「クソゥ」

鳴滝史伽の残念そうな声。
春日美空の悔しそうな声。

「三人共、後でげんこな」

「「「うにゃーーーーー!!」」」

俺の宣言に悲鳴をあげる三人。
周囲のクラスメイト達は、三人にご愁傷様と黙祷を捧げる者も居れば、哀れみの目を向ける者も居る。

《ガラッ》

「な、何事ですか!?」

三人の悲鳴を聞き、廊下で待っていたネギ少年が入ってきた。
魔法関係者以外の連中は「何故此処に子供が?」って顔をして俺の方を見る。

「……」

『……』

「お前らの新しい担任だ。　ネギ少年自己紹介を」

「え、あ、えっ…は、はい…今日からこの２－Ａの担任するネギ・スプリングフィールドです。　担当科目はまほ…じゃないや英語です」

めちゃくちゃ緊張してるなぁ…まほって…ι

『か』

「か？」

やばっ耳栓耳栓…

『かわいい～～～～～』

「え、うわっ…ぷはっ…うぅ～」

元気の塊という名の雪崩に埋もれるネギ少年。

アレだ…人間の雪崩って怖いよなぁ…。

見ていて恐ろしい…。

とりあえず先に進まないので助ける事にした。

「席に着け～。　着かなくてもいいがそん時は席に着くまでげんこだから」

俺がこう言うと素早く、自分の席に着く生徒達。

「素直な子は先生好きだよ…」

（（（（強制じゃん！！））））

生徒の心の声なんて聞こえナーイ。

「んじゃ、俺は別のクラスで授業あっから」

そして、俺は教室を後にした。

▲　貴史　視点▲

▼　カスミ　視点▼

貴史が去って、朝倉がネギ坊に質問を始めた。

というか…原作でも朝倉がやってたか？　どうも記憶が…まぁ６０年も経ってるんだ…もった方だろ。

ん？　魔力の高鳴り？　ネギ坊から？

魔力の高鳴りを感じ、ネギの方を見るとくしゃみ発射二秒前。

えっ？　マジ？　というか…うわっ凄い上がってる。

「はっくしゅん！」

ネギがくしゃみをした瞬間、教室が吹き荒れた。

近くにいた朝倉を始め、２－Ａに居る全ての生徒の制服がぶっ飛ん

だ。

最近、（不幸が）来てなかったからなぁ…

そう、原作なら明日菜だけが下着姿を晒すだけなんだが…明日菜は既に魔法関係者で、そのお陰か問い詰めたりせずに席に座ってる。ならば、近くに居た朝倉だけのはずだが…私の幸運ランクーEX＋＋は伊達ではない。

個人に収まりきらない程の不幸。

周りにも、ちゃっかり影響を与えてる。

これを知ってるのは、長年の付き合いであるエヴァに茶々丸…そして薫に貴史だ。

他の魔法関係者は、怒りを抑えて震えてる。

一般生徒は、当然騒いでる。

「あわわわわ、ご、ごめんなさぁぁああい！」

あ、ネギ坊が逃げた。

そして、事実を知ってる者は……

（カスミ！　これはどういうことやねん！？）

（カスミィイイイイ！！）

こちらに念話を使った質問や怒号やら…とりあえず…

（エヴァうるさい…夜覚えておけ…）

（ガタガタガタガタ…）

足腰立てないと思え…エヴァ……クックックッ…

八つ当たり？　違うよ…最近上下関係を無視してるからな…どちらが上かはっきり再確認させねば…。

「茶々丸…ジャージ」

「此処に…」

茶々丸にジャージを用意させ着替えた。

何時までも下着姿じゃあなぁ。

騒いでいた皆や怒りで震えてた連中も、ジャージへと着替えた。

全員着替えたのを確認して、雪広嬢がネギを呼びに行った。

そのあとは何事もなく授業は終わった。

▲　カスミ　視点▲

――昼休み――

▼　貴史　視点▼

「先生、先生～」

ん？

昼休み、職員室で茶々丸の手製弁当を食ってたら佐々木まき絵が来た。

「なんだ？」

「今日の放課後ネギ君の歓迎会するから先生も来てよ」

歓迎会…そいやあったな…そんなの…。

「わかった。　暇な先生も連れて行くよ」

「それじゃあねー」

俺の答えを聞いて、まき絵は職員室を出て行った。

元気だな～あいつら……。

「さっき…まき絵君が来てたみたいですね」

まき絵と入れ違いで入って来た、タカミチがこっちに来た。

「ネギ少年の歓迎会するんだと…タカミチは放課後暇か？」

「ネギ君の歓迎会かぁ…仕事が終わったら行くよ」

「そうかい…多分、教室でやってるから暇になったら来な」

一応、もう一人くらい誘うか…ネギ少年も先生との親睦深めなぁな…。

――放課後――

暇な先生…暇な先生…瀬流彦先生が居るな…あ、新田先生に連れて行かれた…。

なんかヘマでもしたか？　えーっと他は…む？　あのスイカごとき胸は…スイカ先生に決まりだな。

「そこの素晴らしいスイカをぶら下げて《バチンッ》ブッ！！」

叩かれた…。

「セクハラで訴えますよ？」

「ずびばぜん…」

「で？　なんですか？」

「２－Ａの連中がネギ少年の歓迎会をやるそうなんで…先生側もネギ少年との親睦を深める為にも一緒に歓迎会に参加しませんか？って誘おうと…」

「そうですね…では行きましょうか」

スイカ《バシンッ》…痛い。

コホンッ……気を取り直して、しずな先生を連れて２－Ａに移動。

途中タカミチが加わり、三人で移動。

――2―A――

やって来ました2―A。
来たのはいいけど、薫に連れられカスミ達の所へ…。
カスミ達の所へ行くと、明日菜が荒れていた。

「かなり荒れてるな…明日菜」

「あ、南武先生！　聞いてよ！？　ネギの奴ったらね～…くしゃみで教室に居る皆の服を吹き飛ばして下着姿にしたり、本屋ちゃんがこける所に遭遇して魔法を使ったり、目撃した私と目を合わせた瞬間に記憶を消そうとしたのよ！？　関係者だって言ってるのにテンパって人の話を聞きやしない！！　いや、まぁ人助けに魔法を使った事に不満はないんだけど…でもね～…」

どうやら相当ご不満のようだ。

「とりあえず大声で魔法魔法言うな…」

「大丈夫よ！！　木乃香が結界張ってるから」

木乃香に確認取るように見ると、困ったように笑みを浮かべながら頷いた。
まぁ、ちゃんとやってるならいいが…。

「ナギやアリカにネギを任せられたから、フォローとかするけどさ…はぁ、南武先生も手伝ってよ？　皆にも頼んでるけど協力者は多い方がいいし」

「皆ってカスミや薫も？」

「了承得たのは薫、木乃香、刹那の三人…返事待ちがカスミさん、エヴァンジェリンさん、茶々丸さん、真名よ。　美空ちゃんも頼んだんだけど…無理って言われた…」

ほぼ全員に声掛けたのか…。

「んで？　返事待ちの奴らは迷ってるのか？」

「私は貴史が協力するならするさ」

「マスターに従います」

「メンドイがカスミが協力するなら、私も協力してやらんでもない」

「報酬…貴史が払うかい？」

上からカスミ、茶々丸、エヴァ、真名が答えた。

「だからぁ…南武先生が協力してくれたら安心出来るのよ…人数増えて…」

「タカミチは？」

「高畑先生はもう担任や副担任じゃないし、魔法関係で出張も多くなるじゃない」

確かに、となると俺くらいなもんか…。

他の魔法先生は、２－Ａに関わりが少ないし……（？）

「わかった…出来る限り協力する」

「じゃあ、これで美空ちゃんを除いて、全員が協力ね」

こうして、ネギ少年の補佐部隊が結成された。

「はっくしゅん！」

《バシュゥウウウウウウウッ！！》

ネギ少年のくしゃみで、教室内に居た全員下着姿。

ってな、何ぃぃいいいい！！

スイカ先生の下着はしｒ《ガスンッ！！》……中身が入った２リットルペットボトルを投げられた。

……ふっ…投げる時のスイカの揺れを脳内に納めてやったＺＥ。

▲　貴史　視点▲

物語が始まる（後書き）

ネギ視点は殆どないと思ってください。
一応、この作品の主役は三人の転生者なので…。

薫の日常と警備（前書き）

薫視点だー！！

おめでとー薫ー

薫の日常と警備

▼　薫　視点▼

「キャー――――ッ」

今日のウチは、隣の部屋の明日菜の悲鳴に起こされた。

「ん～…なんやぁ…敵襲ぅ？」

４時まで学園の警備をしていたウチは、寝ぼけながらも探知能力使って敵の気配を探るも、敵の気配は無かった。
すると、隣からネギ坊主と明日菜の大きな声が聞こえてきた。

「あぁ…ネギ坊主のアレか…ふわぁ」

確か…明日菜は原作と違(ちご)うて、バイトしてないんやったなぁ。

「まだ５時じゃない！　は…、…るに…しても……」

明日菜の声が段々と小さくなった。
寝たか、完全に起きたかのどっちかやろうなぁ。
さて、ウチも起きよ。　まだ眠いけど…。

制服に着替え、朝食の準備をしてると木乃香が来た。
どうやら朝食で目玉焼きを作るらしく、玉子がないんだとか。
我が妹ながら…抜けてるとは思う。

朝食を食べ終え、余裕を持って登校してるとカスミ達に出会った。

「おはよ～カスミ～、茶々丸～、エヴァ～」

「薫か…おはよう」

「おはようございます。　薫さん」

「おはよ…」

エヴァはなんやフラフラやなぁ～。
また深夜までゲームやってたんやろうか？

「早いなぁ」

「たまにはな」

「私はもっと寝ていたい…」

「エヴァンジェリン様…ファイトです」

どうやらカスミ達も、たまたま早く起きたらしい。
エヴァはウチとおんなじで、眠気を引きずっとるけど…。

そして教室、ウチはカスミ達とたわいない話しをしたりして、朝のＨＲまで時間を潰す。
此処でネギ坊主の事やねんけど。
ネギ坊主の直接的なフォローは、明日菜がする事になった。

そして間接的にフォローするのが、ウチとせっちゃん、木乃香の京都組。
そんで危機的状況での助っ人で、カスミとエヴァ、茶々丸。
その中でも稀に動くのが真名に貴史。
所謂、切り札的存在っちゅー奴や。

「ん…来たみたいだぞ」

カスミの声で振り返ると、黒板消しをキャッチしてる委員長が居て、
その委員長の前にネギ坊主が居た。
私はカスミに「また」と告げ、自分の席に着いた。

そして、ネギ坊主と貴史が来た。

「き、起立ーーーー」

本屋ちゃんが号令をかける。

「気をつけーーーー」

「あ…ども……」

全員、立ったのでネギ坊主は戸惑いながらも、小さな返事を返す。

「礼ぃーーー」

『おはよーございます』

本屋ちゃんの礼の合図の後、全員で挨拶をする。
これ…中学生でやったかなぁ…ウチ……。

ネギ坊主は、また小さく挨拶をした。
その後、本屋ちゃんの着席の号令で全員座る。

「じゃあ、1時間目をはじめます。　テキスト76ページを開いてください」

HR後、貴史は教室を出てそのままネギ坊主の授業に移った。

「The fall of Jason the flower. Spring came. Jason the flower was born on a branch of a tall tree. Hundreds of flowers were born on the tree. They were all friends.――今の所、誰かに訳してもらおうかなあ…えーと…」

ネギ坊主が左を向けば

《サッ》

顔を反らし……。

ネギ坊主が右を向けば

《ササッ》

顔を反らす。

そして、ネギ坊主の眼の前には明日菜。
ネギ坊主と明日菜が（傍から見たら）見つめ合ってる。
それは、ウチらの委員長が見て何も言わないわけがない。

「ちょっと！　明日菜さん！！　何、ネギ先生と見つめ合ってますの！？」

「ブッ…あんた馬鹿じゃないの！？　見つめ合ってないわよ！？」

そして始まる。
委員長ＶＳ明日菜
周りはトトカルチョを始め騒ぎが拡大。
アレ～…この流れって全員脱衣？　そう思ってカスミの席を見ると、
カスミがおらんかった。
どうやら屋上に行ったらしい。
ウチも屋上行こうかなぁ…でも、カスミの不幸体質が怖い。
屋上なら何が…フェンスが外れて屋上から落下？

《ひゅん、ひゅんっ》

……なんや、窓から緑の金網と金髪の人が落ちてるのが見えたで…。
幸い、全員委員長と明日菜の喧嘩で見てないから良かったけど…。

《カシャァンッ！！》

外からフェンスが落ちた音に、騒動は収まり窓際に行く。
カスミは……どうなったんやろ？

（カスミが空から落ちてきたから回収した）

お、貴史からの念話や

（フハハハハハ…薫、真名よ。　今、私は貴史にお姫様だっこされてるぞ！？）

なっ！？

カスミが上機嫌で念話して（ウチにとって）、衝撃的な発言をした。

（どうだ？　羨ましかろう…私にはお前達の感情が手に取るようにわかるぞ）

真名の方を見ると、怒りに震えていた。

わかる！　わかるえ…その気持ち！！　ウチも授業中やなかったら抹殺しに行っとるとこや。

（ククク…ハッハッハッハッ…アーッハハハハハ！！）

この時間、ウチらはカスミの馬鹿笑いを聞かされ続けた。

念話を切らんのは、カスミの殺意が無くならんようにや。

せやけど、これは予想以上に堪えた。

休み時間、きっちり真名と一緒にカスミをぶちのめそうとしたら、逆に返り討ちされた…流石、腐っても６００年生きたカスミや…体術だけでやられるとは…。

そして、その日の夜。

「薫～居る～？」

勉強の復習しとったら、明日菜が部屋に来た。

「居るえ～…何やウチの想いに応える気なったん？」

「なわけあるかーーーーーーーーーッ！」

扉を開け、明日菜が来た理由を推測して喋ったら、気で張ったハリセンでパコーンッと叩かれた。

明日菜の他に、木乃香とネギ坊主が居た。

「お姉ちゃん、大丈夫なんか？」

「うん、大丈「えぇぇ～」…（ピキッ」

うるさいネギやなぁ…なんやねん？　そない大声あげて…。

「薫さんと木乃香さんって姉妹なんですか！？」

い、今頃……ι
苗字がおんなじなんやからわかるやろ…普通。

「そうやよ～」

頭を抑えてると、木乃香がネギ坊主に答えた。
そしてキョロキョロと、部屋を見るネギ坊主。
いくら子供でも、女性の部屋をキョロキョロ見るのは失礼すぎひん？

「あ、貴史さんの写真…」

もうシメてええやろうか？　ベタベタベタベタと…。

「ネギ！　女性の小物をそんなに触らない！！　写真なんて以っての外！！　あとキョロキョロするな！！　あんた仮にも英国出身でしょ！？　もうちょっと紳士的に振る舞いなさいよ！！　（ナギは紳士じゃなかったけど）」

怒りが爆発する瞬間、明日菜がウチの代わりに怒ってくれた。

「あ、は、はい！　すいません…」

「私に謝ってんじゃないわよ！！」

「は、はい！！　えっと薫さんすみませんでした」

明日菜に怒鳴られて、慌てて謝罪するネギ坊主。
まぁ、子供やからしゃあないか…。

「…明日菜が言いたい事を言ってくれたからええよ…もう」

ネギ坊主にそう言って、笑顔を見せる。
明日菜と木乃香は、ウチの行動を見て「やっぱお姉ちゃんは優しいわ～」とか「ほんと…これで私の貞操を狙ってなかったらいいんだけどね…」とか言ってる。
い、言えない…怒りの余り炎術で焼却しょうとしたなんて…ι

このあと、明日菜に勉強を教えながら勉強してると、本屋ちゃん、夕映、パルちゃんが中途参加してきたり、委員長が乱入したりした。
最終的に、プチ宴会になって明日菜の雷が落ちた。
あと、ネギが風呂嫌いという事が発覚して、明日菜が大浴場「涼風」に連行してった。

「ほな、木乃香…ウチは学園の警備行ってくるなぁ」

「お姉ちゃん今日もなんか？　昨日もやっとったやろ？」

「高畑先生が出張やもん…しゃあないって」

「む～」

膨れる木乃香の頬を潰して、仕事着に着替える。
木乃香には淋しい思いさせるけど…。

「今日は貴史と組むんや♪」

これぱかりは、最愛の妹だろうと親友のせっちゃんや明日菜でも譲れへん。

「そっかぁ…ならしゃあないな…いってらっしゃい」

「いってきます」

▲　薫　視点▲

▼　貴史　視点▼

現在、２２時ちょうど。
学園の（裏側の）警備はだいたいこの時間帯から始まる。
今、世界樹に今日警備に当たるメンバーが居る。
今回、俺のパートナーは薫だ。
学園長からしっかり護るようにと言われたが、正直こいつに護衛も糞もないだろ。
強いんだし……。

俺らの役割は遊撃として、自由に動き回っていいとの事。

「それでは…しっかり頼むぞ」

学園長の「散れ」の一言で、全員持ち場に向かった。

「んじゃ…行くか…」

「お～♪」

「クスッ」

「あ～…やっと外だ…」

俺、薫、クロナ、虚・薫を連れて、警備が薄い所へ向かう。
正直、過剰戦力も良いところ。
敵さんには同情するぜ…。
ちなみに、普段虚・薫は薫の精神世界に居るが、警備の時はちゃんと従者をしてくれたりする。
あと虚・薫を倒した事により、虚化出来なかった薫が虚化が出来るようになった。
虚・薫が外に出ても、普通に虚化が出来るらしい。
それにしても、虚・薫ってのが言いにくい。
名前を考えないとな…。

と、説明してる間に少し空けた所に出たな。
それも、異形の気配がする事から侵入者だな。

「なんや…女が仰山おるなぁ」

「男は殺して、女は食うか…」

「久々の柔肉か……雇い主にはいい酒を用意させるか…」

薫を見ても食い物扱い。
なら、世界樹か図書館島が狙いの奴らか…。

「クス♪　面白い事を言う鬼ですね…食べる……ですか」

「まぁ…確かに食べられるかもなぁ…」

―虚―
《轟ッ！》

「テメェら雑魚がな…」

―虚―
《轟ゥ！》

ダブル薫の後ろに、一つ目の蒼炎の竜と赤い炎の竜。

「虚空！」

「真・虚空！！」

異形に向かう二つの破壊光線。
一瞬にして異形達を蒸発する。
悲鳴もなく、命乞いする間もなく。

「ヒィイ…ば、化け…」

遥か前方に運よく破壊光線を避けた、召喚者が怯えてる。

「見苦しい…」

クロナが手術メスを一本放つ。
それは、召喚者の胸に吸い込まれるように向かい…そして――――

「ギッ…」

《ストン》

ーーーー軽い音を立て真っ二つに『切り裂いた』ーー。

というか薫達はやり過ぎ…森が吹っ飛んでんじゃん。

「土生金…金生水…水生木」

薫が五行思想の相生を紡ぐと、木がにょきにょき生えてきた。
流石は関西呪術協会の長の娘、陰陽術もお手のものってか。

「これでええやろ？　ほな、次行こうか～」

次に行こうとしたら、突然学園長から念話が届いた。
なんでも高音と佐倉、顔黒組が敵の侵入を許したそうな…。
至急、対処しに行ってくれとの事。

「「「「……」」」」

俺達全員、呆れてモノも言えん。

「はぁ…」

「何してるんでしょうね…まったく」

「突破されるとは呆れるぜ…」

「しゃあない…行こうか…」

薫の言葉に、やる気が出ないものの顔黒組の所へ向かった。

「少しやられたが…まぁ、突破出来たから良しとしよう…さて、関西呪術協会の長の娘が居る所はっと…」

顔黒組の警備範囲に着いた瞬間、薫が相手にわからない程度で探知能力を使って、薫が向かう方向へとついて行くと、侵入者を発見した。
どうやら近衛姉妹が狙いみたいだ。

「探す必要はないで…」

「ッ！　だ、誰だ！？」

薫が声を掛けると、侵入者は吃りながら薫の方を振り向いた。
だが、時既に遅く……薫は火竜の中でも気性が荒い、極悪竜を呼び出していた。

ー刹ー

「竜之炎肆式　刹那　瞬、炎」

《火（カ）ッ！》

「「「「うぎゃぁぁあああああああ…」」」」

容赦の無い攻撃。
一瞬にして、侵入者は焼死体となった。

そして、夜は更けていき…警備の時間が終わった。

▲貴史　視点▲

暗殺者の日常（前書き）

図書館島イベント…どうするか……。

仮にも裏の人間がバカレッドだから普通に回避しそうな気も……。

バカレッドを除いたメンバーで行くってのはありですか？

暗殺者の日常

▼　クロナ　視点▼

どうも、アサシンの赤屍クロナです。
今回は、私の日常をお見せしましょう。
本来なら、私が主役なんて無いんですよ?
さてさて、挨拶もこのくらいにしましょう。

私は基本、寝ないので夜から朝日が昇るまでは延々と、麻帆良の敷地内を歩いています。

朝日が昇ると、私は主である南武貴史の居る場所まで戻り、主を起こします。
そのあと、主の出勤を見送り…昼まで読書をして時間を潰します。
本当なら次元を裂いて、どっかの世界のチート達を見に行きたいのですが、主に自重するよう言われてるので諦めました。
まぁ、たまに休みの日に主が連れてってくれるので、不満はありません。

昼になり、私は部屋を出て食堂棟へ…英霊なので、昼ご飯は食べなくても良いんですが……。

「おーい、クロナさーん」

食堂棟付近まで来ると、サイドポニーテールをした活発そうな女の子に、呼ばれます。
彼女の周りは、ポニーテールをした長身の女の子や薄い水色の髪の

大人しそうな女の子、桃色の髪をしたまだ幼さを残す元気な女の子が居ました。

「こんちは、クロナさん」

「クロナさん、こんちゃー」

「こんにちはです。　クロナさん」

「クロナさん、こんにちは」

「はい、こんにちは。　裕奈さん、まき絵さん、亜子さん、アキラさん」

そう、彼女達は２－Ａの生徒さん。
元旦のあの日、散歩をしていたらこの四人が男達に絡まれていた所を助けたら、懐かれました。
そのあとも、何度か出会っていたら、いつしか知り合いが友達という関係になったり、友達になった後日…昼休みになる度に私を見つけ出して一緒に昼ご飯を食べようとしたりと…まぁ、いろいろあるんですよ。

合流した後は、食事をしたながら子供先生の話や最近の事など会話が尽きない楽しい食事の時間です。
まぁ、主に喋ってるのは裕奈さんやまき絵さんですが…。

食事が終わり、裕奈さん達と別れた後は世界樹の枝に乗り、麻帆良を眺めます。
時々、貴史達が来ますがだいたい一人です。

放課後、麻帆良学園では帰宅部の方がちらほらと生徒が寮へと帰り始める。
私は散歩も兼ねて、散歩しながら帰ってると、近くの建物から悲鳴が聞こえました。

様子を見に、建物に入ると異形の気配を感じ、即座に本体の所へ行くとそこには水泳部の方達が、水鬼に捕まっていました。

「さぁて…オラの嫁に相応しいのはっとぉ」

どうやらあの鬼、嫁探しに来たみたいですね。
人間からしたら、はた迷惑この上ないのですが…。

「おお、こいつにしよう」

「いっ！！」

水鬼はアキラさんの腕を掴みあげ、嫁になれだのなんだのと理解しがたい事をしてます。

「本当に…理解しがたいですね…」

私の友に手を出した事、後悔させましょう。

私は水鬼の後方に立ち、コツコツと接近。

「クロ…ナ……さん…逃げ…」

自分だって怖いだろうに、それでも他人の安全を優先するとは……。

「あん？」

水鬼がこちらに気付き振り向く。

あぁ、実にあの鬼には勿体ない女性だ。
だから――――

「死んでください」

《ザンッ！！》

手術メスで十字に水鬼を切り裂き、アキラさんや周りの気絶してる人達を、安全な場所に移動させる。

「あ、……れ？」

水鬼は遅れて反応した後、血も残さずに消えていった。
そして私はそのまま処理せずに、立ち去った。

この事件の後、しばらくプールは使えなくなったとか……。

そして、夜。

「それじゃ、皆の衆…今日も頼むぞい」

学園の警備が始まった。

昨日襲撃にあってから、全員気を張り詰めながら警戒にあたる。

「さて、今日はカスミさん達とですか」

「よろしくお願いします。クロナ様」

「過剰戦力極まりないな…」

「別に良いんじゃねぇの？　どうせ俺達みたいな戦力…一カ所より全体を守らせた方が最良なんだし」

「そうですね…しかし退屈な仕事です」

「まぁ、そう言うな」

「……」

まぁ、こうやってたわいもない会話をしながら、学園を歩き回っているんですが…一向に侵入者が来る気配も感じずに夜が更けていった。

まぁ、昨日の今日ですしね。

▲　クロナ　視点▲

中学生ＶＳ高校生～流せ！　青春の汗～（前書き）

三人の転生者ストック切れ。
次回はいつになることやら……

今回、オリジナル神鳴流が出ます。
オリジナルです。
大事な事なんでもう一度…
オリジナルです。

中学生VS高校生～流せ！　青春の汗～

▼　貴史　視点▼

ネギ少年が来てから五日経ち、原作のようなホレ薬騒動は無く、平和に過ごしていた。

「いい天気ですね。　貴史さん」

「そうだなぁ…」

ネギ少年と……。

しかし、平和は長く続かない…とはどっかの偉人さんが言ったように、ある生徒により平和は打ち砕かれた。

「うわああ～～ん。　センセー！！」

「ネギ先生～～～～っ」

「……はい？」

亜子とまき絵が、職員室に駆け込んで来た。

「こ…校内で暴行が……」

「見てくださいこのキズッ！！　助けてネギ先生っ」

なんで俺には来ないのかね？　少しの間、担任やってたのに俺……

…。

副担になったら戦力外か？

そんな事思っていたら、ネギ少年はすでに居なくなっていた。

どうやら現場へ、急行したようだ。

校内暴力は職員室で起きてるんじゃない！　現場で起きてるんだ！！　ってか…。

「南武先生は行かないんですか？」

俺の隣に座ってるしずな先生が、聞いてきた。

「えっ…行くの？　俺も？」

「ネギ先生の補佐でしょ？」

「……行かないと駄目？」

「今まで喧嘩とかの仲裁をした事の無いネギ先生じゃ、喧嘩を収める事出来ないと思いますよ。　それに…貴方もあの子達の生徒でしょ？」

「へいへい…行きますよ…」

しずな先生に促されて、現場に行く事に…。

俺が現場に行くと明日菜と雪広嬢が、介入しようとしていた。

原作として違ってるのは、二人共ボールを持ってないとこだ。

随分とまぁ……乖離してね？
大筋は変わってないけど、細々してるとこが変わってる。
まぁ、いいか…そろそろ原作と比べるのもアレだし…。
あ、ネギ少年の頬にキスをした…。

それを見て、雪広嬢はキレて大乱闘。

俺が止めようとさらに近付くと、いつの間にかクロナが乱闘を止めていた。

つかいつ介入したよ……あいつ。

「誰よ！？　貴女！！」

「これは失礼…麻帆良学園、広域指導員の赤屍クロナです。　どうぞお見知り置きを…」

「広域…指導員……？」

「はい♪　それと…あまりオイタが過ぎると……ね」

そう言ってクロナは、一般人に少し余裕を持てる程度に威圧感を出しながら、高校生を睨む。
高校生は蛇に睨まれた蛙のように、冷や汗を出し数歩下がる。
そして高校生側に居るネギ少年も、クロナの威圧感に曝されて畏縮してる。

「ほら、クロナ…そこまでだ」

「おや…貴史先生……そうですね。　後は頼みます」

そう言って、立ち去るクロナ。

「ほら、お前ら昼休み終わっちまうぞ」

「くっ…覚えてなさいよ」

俺の言葉に、この騒動の原因である高校生は、立ち去ろうとする。
が、俺がそれを許すはずないし。

「待てや。　女子高生」

「なんですか…」

「俺が散らしたのは野次馬であって、お前らじゃねぇよ。　謝れ」

「謝る？」

「そうそう…こっちも悪いが挑発したのはそっち…先にそっちが謝るのが筋だ」

そして、俺の後ろで我が物顔で頷く雪広嬢。

「おいこら…そこのお嬢…」

「へ？　わ、私ですか！？」

「そうだよ…こいつらが謝ったら、お前も謝れや」

「な、何故ですの!?　そこのオバサマ方はネギ先生に…」

「だからどうしたよ？　ネギ少年にちょっかい出したから、オバサマとか言っていいんか？　挑発されたから手を出していいんか？」

「でも、南武先生…こっちも被害は受けてるわよ？」

俺に反論するように、雪広嬢を庇う明日菜。

「それでも悪口言っていいわけじゃねぇし、掴みかかっていいわけじゃねぇ…」

例え、相手が悪かろうが悪口または手を出して良い理由にはならない。

裏関係じゃねぇんだし、話し合いで解決出来る事なら話し合って解決…。

平和一番ってね。

俺の誠意が伝わったのか、両者謝罪して解散した。

まぁ、誠意が伝わるまでげんこしたけど……。

▲　貴史　視点▲

▼　カスミ　視点▼

「ねえねえ、やっぱクロナさんってすごくない？」

「……うん」

「確かに綺麗だし、頼りにはなるかにゃー」

体操着に着替えてると、何故かクロナの名前が和泉亜子の口から出てきた。

聞く限りじゃ、和泉亜子だけでなく大河内アキラや明石裕奈も、知ってるみたいだ。

というか何があったんだ？

「何かあったん？」

「高等部と場所の取り合いよ…」

成る程、確かクロナは広域指導者だったな…。

「ネギ君はちょっと情けなかったかなー」

「でも１０歳なんだからしょーがないじゃん」

いや、あの坊やは９歳だよ。　佐々木まき絵。

「まぁ、うちの担任より…広域指導者のクロナには気をつけた方がいいぞ…明石裕奈、和泉亜子、大河内アキラ…」

「「「えっ？」」」

「アレは…生粋の殺戮者だ」

着替えを終えて、私と茶々丸は屋上へ向かう。

呆然としてる皆を置いて……。

▲　カスミ　視点▲

▼　薫　視点▼

「アレは…生粋の殺戮者だ」

そう言って、カスミと茶々丸は教室を出た。

って、カスミのアホー！！　めっちゃアウトな言葉やんそれ！！

まぁ、注意したい気持ちはわかるけども！！

「えっ…な、何だったの？」

「カスミちゃんが喋った」

「殺戮者？」

ざわざわと、やばい感じでざわめく皆。

やばい、なんとかせな…。

（ちょ、ちょっと薫…カスミさんが言った事って…）

（本当なんかぁ？）

対処を考えてると、明日菜と木乃香から念話があった。

おそらく、教室内の魔法生徒全員念話で聞いてるんやろう。

（……）

（（（（（（ゴクリ…））））））

（…普段は優しいんやけどなぁ…ι）

（じゃあ…やっぱり…）

（そんな危険人物…傍に置いておいて良いんですか！？）

（うひゃ～）

（まぁ、そんな事よりこのざわめきを収めな…）

（そ、そうだったぁ）

いまだざわめく皆を宥める為に、行動に移す。

恨むで…カスミ……。

皆をなんとか宥めて、現在屋上。

えっ？　どうやって宥めたか？　そんなんどないでもええやん。

ただ、すんごい疲れただけと言っておく。

まぁ、そんな事より今は……

「おい、確かにさっきのは言い過ぎたかもしれんが、これはないだ

ろ？」

カスミに制裁中や…。
縛道の四「這縄（はいなわ）」で縛って、人払いの極小版を張ってな。
ちなみに皆は高校生の相手をしとるよ～。
カスミへの制裁はウチに任されたみたいや…アレ？　押し付けられた？　まぁええか…。

「なんであんな事、言ったんや？」

「あれでも一応私達のクラスメートだからな…」

「せやかて、殺戮者は無いやろ…」

「……それはだな…まぁなんだ…つい口が」

「滑る程の歳やないやろ」

「うぐっ…」

ウチがカスミを言葉巧み（？）に追い詰めよた瞬間…。

「ハックシュン！！」

ネギ坊主の特大なくしゃみで、巨大な竜巻が起こりかけた。
何故、完全に発生しなかったと言うと、流石に竜巻はやばいと思ったのか、木乃香が無力化したらしい。
木乃香ＧＪ！！

「それでも不審に思ってるの二名」

「夕映と千雨かぁ～」

「み、皆さん、どんな争い事も暴力だけはダメです」

風が巻き起こった事により、放心状態からネギ坊主による説得。

「それで、こういうのはどうでしょう。　両クラス対抗でスポーツで争って勝負を決めるんです。」

さらに、追撃で勝負方法を決める提案を出す。
これにより、風に関しての疑問を取り除く。

「なかなかの手腕や…」

「残念…一人残った」

カスミが言ってるのは、千雨の事やろ。
……うん。

「現実逃避してもらおう…」

「お前…」

カスミが呆れた表情で、こちらを見てくるけど無視や。

「そんなこと言ったって、年齢も体格も全然違うじゃん！」

「ふん、確かにバレーではちょっと相手にならないわね。　じゃあ、ハンデをあげるわ。　種目はドッジボールでどう？　こっちは全部

で１１人。　そっちは倍の２２人でかかって来ていいわよ」

カスミと話してると、高校生組が賛成して…今後の事とかで条件を出してきたみたいや。
ちゅうか…ドッジのハンデで人数を増やして良いって……中学生やからって、馬鹿にしてへん？

「待った！！」

委員長が優雅なポーズを取りながら、了承しようと口にする……前に明日菜が待ったを掛けた。

「どうかして？　神楽坂明日菜…」

「ドッジで多人数はハンデにすらならないわよ！！　まさか高校生が中学生に枷でもつけないと勝てないの？　ハンデをつけるなら貴女達が、人数を減らさなければいけないわ！！」

「うぐっ…」

ビシッと指をさしながら、言い放つ明日菜。
おおー明日菜もっと言ったれ～。

「い、いいでしょう…ならば私達は６人でいいです」

「じゃあ私達は１０人で行くわ」

そして、２－Ａ代表チームは……。

神楽坂　明日菜。

近衛　木乃香。
大河内　アキラ。
佐々木　まき絵。
和泉　亜子。
明石　裕奈。
雪広　あやか。
鳴滝　風香。
鳴滝　史伽。
ネギ・スプリングフィールド。

この１０名で行くらしい。
えっ？　ウチは出んのかって？　出たら可哀相やろ？　高校生が…。

そして始まるドッジボール。
まずネギ坊主の後頭部に、ボールが直撃。
跳ね上がったボールをジャンプして、キャッチする明日菜。
これによりネギ坊主はセーフ。
そして、ボールをキャッチした明日菜は、ボールを投げて高校生一人外野へ。

「よろしいですわ。　このケンカ絶対勝ちますわよ！」

「ええ！！」

「あうぅ…ケンカじゃないのにーっ」

ケンカしとった人達が、さわやかに汗流すはずないやん…。
大会やないんやし…ネギ坊主もまだまだやな。

そして今度は、高校生チームの攻撃。

鳴滝姉妹と木乃香が当たった。
本当なら余裕で避けれるんだけどね。
ゆっくりめに動いてるのに、残像を残したり……うん、自重するの忘れとったわ。
まぁ、今はどうでもええか…。

「必殺ーーー太陽拳!!」

ブフゥーーーーーーッwwww
あ、あかん…吹いてもうた。
で、でも…太陽、拳って……。

「クッ…クフフ…アッハハハハハハハ…アハハハハハ…イッヒヒヒ…クハ…太陽……拳って…アッハハハハハハハハ…ヒ~やめて…し、死ぬ…うっふふふ…ぷっ…アハハハハ」

「ちょっと…そこの貴女!! うるさいですわよ!!」

「だ、だって太陽…ブフッ…アッハハハハハハハハ…」

「お姉ちゃんがこないに笑うの初めて見るわ~」

ツボにはまったウチは、笑いを堪えるので必死でこのあとの事をあまり見てなかった。
そして、チャイムがなり試合終了。
笑いもようやく収まって来た。

「…だ……イムよっ!!」

「危ない、薫さんっ」

「へ？」

振り返ると、迫ってくるボール。
当たる瞬間……

「ちっ…退け！　坊や！！」

「へブッ！！」

《バチンッ！！》

「くっ…」

ネギ坊主とカスミが、同時に動いたのだろう。
カスミは右手でネギ坊主を突き放し、そのせいでカスミの顔にボールが直撃、ボールは跳ねて上へあがった。

《ブチッ　ダッ！》

ウチの中で何かが切れた瞬間、ウチはボールの元へジャンプしていた。

――神鳴流投球術、雷神弾――

ボールは雷と為り、敵のリーダーに撃ち落と――

（テメェの力って他人を傷付けるもんなのかよ…）

「！！」

一一一敵のリーダーの前に撃ち落とした。

《ズガァァアアア…ンッ！！》

『……ι』

「お、お嬢様が…」

「キレた……」

「カスミ…大丈夫なんか？」

「まは…いはい…」

「……プッ」

「わはふは！」

「プハハハ…ごめんごめん」

このあともまた、ボールの跡がついたカスミの顔を見て笑った。

でも……さっきの念話は……。

▲　薫　視点▲

――屋上、扉越し――

▼　??　視点▼

「……へっ」

それでいいんだよ…薫。
俺達が得たチートは、一般人に向けるもんじゃねぇ。
もっとも…アレもギリアウトだけどな…。

「おや、貴史さんも来てたんですか？」

俺が立ち去ろうとしたら、タカミチとしずな先生が来た。

「まぁな…もっとも…もう戻っけどよ」

「そうですか」

「あぁ、んじゃあな」

「ええ…」

タカミチとしずな先生と別れ、俺は屋上を後にした。

▲　貴史　視点▲

3学期終了と薫との見合い（前書き）

貴史の構成するものは

薫、カスミ…７５％
自分を好きになってくれた人、友達…２０％
親…４％
その他…１％

……です。

3学期終了と薫との見合い

▼　貴史　視点▼

「えーと、みなさん聞いてください！」

朝の朝礼、ネギ少年がある提案をしてきた。

「今日のＨＲは大・勉強会にしたいと思います。　次の期末テストは、もうすぐそこに迫ってきています。　あのっそのっ…実はうちのクラスが最下位脱出出来ないと、大変なことになるので～～～みなさん頑張って、猛勉強していきましょ～～～」

……大・勉強会…ねぇ…。

ん？　ネギ少年のポケットに何か……。

俺は気配を隠し、ネギ少年のポケットに入ってる封筒を取った。

「何々…ネギ教育実習生、最終課題？」

「えっ？」

ネギ少年がこちらを見るが既に遅し、中身をバッチリ見たぜ。

「ねぎ君へ…次の期末試験で２－Ａが最下位脱出できたら正式な先生にしてあげる。　麻帆良学園学園長　近衛近右衛門…」

生徒の前で暴露。

「だ、ダメですよ～。　返して下さい。　貴史さん」

ネギ少年が焦りながら、俺から手紙を取り返そうと奮闘する。
いや、もう手遅れだし……。

「つか、ネギ少年…大変なのって２－Ａじゃなくて、ネギ少年自身？」

「あうあうあうあう…」

ネギ少年、涙目である。
つか…これ何処が大変なんだ？　クビとは書いてないわけだし……。

「皆さん！　ネギ先生の為に勉強会をしますわよ！！」

俺が暴露した事により、雪広嬢が張り切ってクラスメートを仕切る。
まぁ、数人嫌そうにしてたがネギ少年の為と、仕方なしに協力してくれるそうだ。
俺はネギ少年の頭に、軽く拳を落として諭す事に…。

「さっきのは教師としてダメだぞ…。　これはテメェの課題だ。
主語をぼやかしての説明は誤解を招く場合があり、その結果生徒を危険にさらす可能性が出る…わかったか？」

「は、はい」

しゅんと小さくなるネギ少年。
流石、子供だ。
精神が脆弱すぎるぜ……。

結果からいうと、２－Ａはブービー賞となり最下位を脱出した。
だけど、「最下位で小学生からやり直し」という噂が出回ったが、俺が学園長に「噂は噂」だと言質を取り、それを薫に教えて（ちゃんと録音したテープも渡した）それを聞いたバカレンジャー達の（主に夕映の）図書館島イベントは無くなった。

まぁ、あのイベントは小学生に戻りたくないという事で発生したしな…。

そして、３学期終了式。

「フォフォフォ、皆にも一応紹介しておこう。　新年度から正式に本校の英語科教員となる、ネギ・スプリングフィールド先生じゃ。　ネギ先生には、４月から「３－Ａ」を担任してもらう予定じゃ」

学園長による、新任教師の紹介。

「えっと…これで終わりか？　はぁ～やっぱめんどいよなぁ…終了式とかって…」

学園長の解散の後、２－Ａの教室に向かう。

「というわけで、２－Ａの皆さん。　３年になってからも、よろしくお願いしまーす」

「よろしくネギ先生ーっ」

「先生こっちむいてこっちーっ」

わいわいがやがやと騒ぐ、２－Ａの生徒。
そして、鳴滝姉妹の提案により「学年ビリ脱出おめでとうパーティー」をやることになった。
……しょぼ、帰るか。

――職員室――

「そいじゃ、お先に失礼しやーす」

職員室で挨拶した後、職員寮に帰った。
その途中に、ネギ少年と長谷川の鬼ごっこを見かけた。

「で、でも今日くらいはいいんじゃないですか。　だってほら、今日はこんなにいい天気ですよ」

ネギ少年は腕を広げて、いいことを言ってる……が、確かオメェ学園時代ひきこもりのがり勉だったよな？　まぁいいや、長谷川を助けておくか…。

「オーイ、ネギ少…先生」

「あ、貴史さん」

「外で遊ぶのは結構だがな…長谷川の今の格好は人目のある所で遊べるような服ではない。　長谷川の着替えを待ってからでもいいだろ？」

「えっそうなんですか？」

首を傾げ、長谷川に確認を取る少年。

「ま、まぁな…これは部屋着みたいなもんだし」

苦しい言い訳だが、まぁ…少年を騙すには上等な嘘だろ。

「そうですか…わかりました。　では僕は此処で待ってますので、着替えてきてください」

強制的な発言だなオイ。
長谷川も怒りに震えてやがる。

「わかりました…」

「そんじゃ、俺はこれで」

ネギ少年に別れを告げ、帰ろうとしたら…

「えっ？　貴史さんも遊びましょうよ」

なんて言ってきやがった。
遊ぶ？　二十歳前だぞ？

「ネギ少年…大人は祭り以外遊べない生き物なんだよ」

「えっ！　そ、そうなんですか！？」

さぁ？

「そうなんです。　そういうわけでじゃあな…」

「あ、はい。　さようなら……」

こうして、３学期は終了した。

あ、ちなみにくしゃみイベントはあったらしい。

だが、長谷川が来たと同時に薫が、長谷川に障壁を張り脱衣イベントを回避したとか、なんとか…。

《春休み割愛》

新学期を明日に控えた今日。

街を歩いてると、黒服の人と着物を着た女性。

「貴史～助けて～な」

薫だった。

薫は俺の後ろに隠れるように、身を潜めた。

「お嬢様を渡していただこう」

そして、薫を追ってきた黒服の人が、そんな事を言ってきた。
つーか…。

「おい、薫…テメェ一人で蹴散らせるだろ。　こんな雑魚共…」

「此処は騎士様に助けてもらうシーンなんよ？　お姫様が倒したらおもしろうないやん…」

はぁ…オヒメサマねぇ…。

「そんじゃあ、オヒメサマとやらを助けますか…」

俺の言葉に、警戒の色を見せる黒服達。
警戒しようがしまいが、俺には関係ないけどな。
静かに殺気を当て、黒服を気絶させる。

「流石、貴史やなぁ」

「たくっ…」

薫の頭をコツンと軽くげんこして、薫と散歩する事にした。

「そういや、最近カスミの不幸がショボイな」

「せやなぁ…屋上落下、ボールが顔面直撃…どれもショボイな」

「……桜通りの吸血鬼…」

「噂…出回っとるなぁ……」

「嫌な予感がしてならねぇ…」

「……まぁ、様子見よう…」

「だな…」

だいたい薫と話すのは、カスミの事ばかり…。
よく喧嘩するが、薫とカスミの仲は良い方だ。
俺とカスミの時も、話すのはたいてい薫の事。
今、何をしてるんだろう。
前に、こんなことがあった。
そんなたわいもない話で、一日が終わる事もしばしばあった。
昔も今も変わらない関係。
俺は霞だった頃の、カスミを忘れない。
俺は薫だった頃の、薫を忘れない。
カスミは貴史だった頃の、俺を忘れない。
カスミは薫だった頃の、薫を忘れない。
薫は貴史だった頃の、俺を忘れない。
薫は霞だった頃の、カスミを忘れない。

俺は霞と薫が好きで、カスミと薫もまた好きなんだ。
だから、だからこそこいつらは幸せでいて欲しい。
こいつらを悲しませる存在は許さない。

「気をつけるべきは…」

「茶々丸襲撃と最終決戦やな…」

俺達は学園を睨みつける。
今後、敵となるであろう……学園を…

▲貴史　視点▲

《番外編》　割愛された春休み（前書き）

今回はＧｅｔＢａｃｋｅｒｓ－奪還屋－に出て来るあの人登場。

雨季様のチートじゃ済まないの一条要くんと神様登場。

副音声は秋代と雨季様がお送りします（嘘です）

《番外編》　割愛された春休み

▼　貴史　視点▼

3学期が終わり、現在春休み。

「ん？」

「どうした？　カスミ」

俺はカスミと一緒に、喫茶店Ｈｏｎｋｙ　Ｔｏｎｋで寛いでる。
いや、まぁ麻帆良にＨｏｎｋｙ　Ｔｏｎｋにあったのが驚いた。
マスターは勿論……

「ほい、ブルマンお待ち」

ナイスなスマイルを見せる。
王（ワン）　波児（ポール）だ。

「おい、ポール…私のハンバーグセットはまだか？」

「ちょっと待ってよ。　カスミちゃん」

「早くしろ…」

カスミの言葉に「はいはい」と言って、ハンバーグを作る波児。

「で？　さっきの質問に答えてくれ」

「あぁ、星からだ。　究極の一が、麻帆良に現れた」

「……アルテミット・ワンが？」

「あぁ…」

「はい、ハンバーグセットお待ち」

「波児…釣りはいらねぇ…」

俺は五百円玉を波児に渡し、Ｈｏｎｋｙ　Ｔｏｎｋを出た。

▲　貴史　視点▲

▼　波児　視点▼

貴史が出て行った、ドアを眺める。

俺の右手には、貴史が投げた五百円玉。

ブルマン一杯……八百円也。

「……三百円足んねぇーよ」

「ポール…」

「カスミちゃんは、あんな大人にならないでね？」

「……」

「お金をまともに払わない大人には」

「……金を持ち合わせてないからツケで」

「……」

カスミちゃんは、いったい誰に似たんだか…。

まぁ…後で茶々丸ちゃんが、払いにくるから良いんだけどね。

でもさ……ツケはないと思うんだ。

「……はぁ」

「ため息一つにつき、幸せ一つ逃げるそうだ」

……誰のせいだい。

▲波児　視点▲

▼貴史　視点▼

相手がアルテミット・ワンなら、今頃大騒ぎだろう。

だが、大騒ぎどころか普通だ。

街中を歩く人達。

街中を走る人達。

街中で待ち合わせする人達。

平和そのもの…ならアルテミット・ワンは？

「お、いたいた」

はて？　聞き覚えのある声が…。

「お～い、貴史～」

声がする方を振り向くと、そこにはアルテミット・ワンを宿した一条　要が、手を振っていた。

「……」

「ん？　どうした？」

一条　要。

雨季様が書く、チートじゃ済まないの主人公。

身体にＯＲＴという、型月の最強生物を宿している。

今ではチートじゃ済まないは完結して、現在はチートじゃ済まないｉｎネギまで、主人公として活躍してる。

面白いから見てない人は、見てみるといい。

「要か……老けたか？」

「あの大会から７年くらい経ったしな」

「何歳だよ」

「だいたい２９歳だ」

「……だいたい…ねぇ」

ふむ、あの大会何歳だったっけ？　確かＪＳ事件の後で、機動六課は解散してて…少なくとも２２ぐらいか？　確かにだいたい２９歳になるな。
まぁ、それよりも……だ。

「何しに来たんだ？」

「あれから鍛えに鍛えてな、貴史で試そうかなって」

つまりは、計測器扱いって事かい…。

「場所は？　別荘は無理だぞ」

「はぁ？　なんでだよ」

「前にレイとやり合ってな、壊したから別荘でも戦うなってな」

「ん～しゃあねぇ…なら神様が用意した世界でどうだ？」

神様ってのは要の方だろうな…。
まぁ、あそこなら破壊してもいいか……。

「おう、いいぜ…」

俺が返事をすると、周囲ががらりと変わった。
騒々しい街中も、俺達二人を残して一面の荒野。
成る程な…此処なら本気で、はしゃいでも良さそうだ。

「んじゃ、始めようぜ」

「おう…格の違いみしてやんよ…」

こうして戦いは始まった。

▲　貴史　視点▲

▼　要　視点▼

「おう…格の違いみしてやんよ…」

そう貴史が言った瞬間、俺は地面に激突した。

「がっ！！」

「強くなったからどうしたよ…」

顔を上げると、貴史は元の位置に居た。

速い…。

「お前が強くなっても、レイや俺もさらに強くなんだよ…」

油断……いや、履き違えてた。

貴史の成長速度。

「こちとら放課後にクロナを相手してんだぜ？」

そうだった…あっちは化け物並が傍に居るんだったな。

修行相手には不自由無いんだった。

「立てよ…テメェが計測器扱いしたダチが計ってやんよ…」

「いや、…訂正する……俺はお前に挑戦しに来た！！」

俺の眼を見て貴史は、いつもの戦いを楽しむ顔になった。

▲　要　視点▲

▼　貴史　視点▼

「よっ！　ほっ！」

限界まで身体能力を上げた要は、すぐに間合いを詰めて蹴りを繰り出した。

俺はそれを片手で捌き、蹴り返す。

要は直感により、即座に後退の為に跳び上がる。

「シールドスライサー！　五連！！」

要は攻撃の手を止めず、跳び上がった状態でシールド五枚出し、それをブーメランのように飛ばす。

鋭く回転し続けるシールドは、空気を切り裂きながら俺に迫ってくる。

だが斬撃機能を上げる為に、薄くしたのが仇となったのか容易に迎撃が出来る。

「無影脚！」

蹴りの連撃で、シールドスライサーを砕く。

「ニードルガン！」

シールドスライサーの次は、貫通力のあるニードルガンを放ってくる要。

しかし、普通に取れる速度なんでニードルガンを指で挟み止める。

だが、着地し終えた要は次の行動に移っていた。

「魔導式ハンドガン（改）」

「赤い魔導式ハンドガン（ブラッディ・ガン）」

砲撃と赤い砲撃がぶつかり合う。

「くっ…このっ…」

「ワリィが、勝つぜ。　赤い不殺の魔弾（ブラッディ・バレル）」

赤い魔導式ハンドガンの真名解放をして、ぶっ放す。

【不殺】なる字があるが、とても信じられない程…禍しい輝きをしている。

《ズガァァアアン！》

直撃、要は無事か？

「Ｇｉｉｉ」

土煙りの中から現れたのは、でっかい蜘蛛。
まぁ、アレだ…ＯＲＴだ。

（あっぶねぇな！　貴史！！）

ＯＲＴを眺めてると、要から念話が届いた。

「非殺傷設定だから大丈夫大丈夫」

（嘘だ！！）

ＯＲＴは足を振り、俺を踏み潰さんばかりに下ろしてくる。
俺は軽く避けて、ブラッディ・ガンを放つがまったくもって効果がない。

「やれやれ…」

（ハアアアアアアッ！！）

ＯＲＴは足を鎌のように振り、俺の命を刈り取ろうとする。
まぁ、こんなもんで死ぬ事はない。

「赤い龍殺しの魔剣（ブラッディ・バルムンク）」

龍殺しの剣だが、蜘蛛殺しの宝具なんざ……あったな。　まぁ、とりあえずはバルムンクで様子見だな。

数合打ち合い、とうとうバルムンクを弾かれた。

「シマッター」

（もらった！！）

ここぞとばかりに、ＯＲＴは俺を潰そうと腕を振り下ろす。

…龍殺しに特化してる剣とはいえ、傷一つ無いとはショックだな…。

「赤い蜘蛛殺し（ブラッディ・スパイダーキラー）」

一閃、ＯＲＴの足を両断する。

（ガァァアアアアアアアッ！？！？）

「お～流石は蜘蛛殺しだな…」

痛みに耐え切れないのかＯＲＴは、要へと戻りこちらを睨みつける。

「なんだ？　それ…」

「ん？　あぁ、これ？　宝具」

「宝、具だと？」

「そうそう…赤い蜘蛛殺し。　元は蜘蛛殺しといってな…オリジナルの宝具だ」

「オリジナル？」

「そう、魔法球に魔道を極めてるカスミが、世界を造った事から始

まった」

その世界に型月のルールを用いた。
英雄となった者は、死後守護者として世界の為に働くとかな？　それの応用みたいなものかな…蜘蛛が支配する星を造るんだ。
勿論、人間も居る。
蜘蛛が捕食者として、人間を食べるんだ。
その星に一振りの剣を与える。
剣は蜘蛛を遠ざけ、そして絶対なる捕食者たる蜘蛛を斬る事が出来る。
この事を知れば誰でもが、蜘蛛に戦争をしかけようとするだろ？
結果は八人の英雄が誕生して、人間の勝利となった。

「……お前…」

「勘違いするなよ。　人間と言っても人形だ。　蒼崎燈子が作るような人形…ちゃんと老けるし、病気になるし、怪我をすれば血が出る。　感情だってあるし、寿命もある」

まぁ、今は人形は関係無い。
ようはそれと同じ、英雄が英雄たらしめんとする武器。
この宝具は、その世界から回収した物。
今も尚、語り続けられてるこの剣は、神秘を秘め宝具となったわけだ。

「この剣は、蜘蛛の形をした生物又は蜘蛛属性を持つ者の天敵だ。
ＯＲＴですら死を与えるかもな…」

「前は殺したくないと、言ってなかったか？」

「馬鹿を言うな。　お前はこれから俺らクラスの戦いに、踏み込むんだぜ。　攻撃は常に必殺クラス…お前の親友ゼフィリスは常に楽しむから最後くらいしかやらないのだろうよ」

「なら、お前とレイは？」

「もち、最初っから必殺だ」

「んじゃ、あんたらの戦いの楽しみ方ってやつを教えてもらうぜ！！」

ＯＲＴの一部を解放して、攻撃を再開する要。
俺はそれを片手で防ぎ、赤い蜘蛛殺しで切り落とす。

「アアアァァアアアァァアアアッ！！」

要はさらにＯＲＴの一部を解放して、すかさず俺の手ごと蜘蛛殺しの剣を吹き飛ばし、さらに一部解放して俺の胴を貫く。

「ゴフッ…」

《ブシュゥウウウウ》

腹から大量の血が流れる。
そして要はＯＲＴを完全に解放して、腕を振り落とし俺を潰した。

《ズガァァアアン！！》

▲　貴史　視点▲

▼　要　視点▼

腕を振り下ろして、貴史を潰したがどうも倒した感覚がない。

――我こそは、蛇遣い座の使者なり――

何処からともなく、貴史の声が聞こえる。

（何処だ!?）

――その呪わしき命運受け入れし者にのみ賜うべきは、毒蛇の牙に秘められし高き天と深き地獄の力なり――

世界に貴史の声が反響する。

そして、俺の周りに龍に近い蛇が現れる。

（これは!?）

――されば、愚者共に鉄槌を打ち下ろせ、荒ぶる神魔の怒りを以て!!――

貴史の気配は世界を満たし、俺の探知機能を封じられる。

――――――蛇殺（スネークジェノサイド）!!!――――――

《ズドンッ》

（ガァァアアアアアアアッ！！！）

上からえぐられるような、衝撃が炸裂した。

▲　要　視点▲

▼　貴史　視点▼

上半身と下半身が引きちぎれたＯＲＴは、完全に沈黙した。

「気絶したか…」

まぁ、悪魔の腕を使っての蛇殺だ。

無傷だったら傷つくしな…。

「まったく…君といい、魔王といい」

突如、上空から要側の神様が現れた。

「あん？」

「なんで君ら二人は、要君を瀕死に追い込むんだい？　ゼフィリス君ですらしないよこんな事…」

いやいや、ゼフィリスもたいがい斬ってるからな？

「要の奴…相当天狗になってたろ？」

「あぁ……まぁ、否定はしないよ。　あの世界じゃ要君は最強だからね」

「なら、その鼻を悪役を買ってまでした俺様を敬えや」

「君もたいがい天狗だよ…」

そう言って、神様はＯＲＴを再生させて元の世界へと転送した。

「……天狗ねぇ…」

「気をつけるといい…君は無敵でも負ける事はあるんだから」

そう言って、神様は俺を麻帆良へと戻してくれた。

「……心配しすぎだな…」

俺は天狗にはならない。

いや、なれねぇんだからな……。

▲　貴史　視点▲

▼　神様　視点▼

「ふぅ、あの超越者には一度敗北を味合わせないとね」

「それは大丈夫じゃよ」

突然、僕の前に貴史君達を転生させた神が現れた。

「どういう事だい？」

「２５６戦０勝２５２敗４引き分け」

「それは？」

「貴史とクロナの真剣勝負の貴史の戦績じゃよ」

！！　な、一度の勝ちすらないのか？

「彼は彼なりに、上に向かって前進している。　貴史が強くなればクロナが一段強くなる…これの繰り返しじゃ…」

「だから天狗ではないと？」

「貴史が知る限り、最強の一角じゃからの…それに殆ど負けている」

やれやれ、彼を見誤ってたのは僕みたいだね。
だけど、彼に敗北を与えるのは何も彼女だけじゃない。
これからも見極めさせてもらうよ…。

ケンザキ　タカシ。

▲　神様　視点▲

桜通りの吸血鬼（前書き）

一般人を巻き込まない形でやってみました。

▼　カスミ　視点▼

「で、どうかのぅ…此処は一つネギ君の修行の為に」

「私にメリットはあるのか？」

「ふむ…そうじゃのぅ…」

ん？　なんだ…読者か…。
どうも…これを読んでる読者達。
私の事を知ってると思うが、簡単に自己紹介をしよう。
カスミ・ヴェネーラだ。
気軽にカスミ様と言え……ってのは冗談として…現在私は、朝っぱらからじじいに呼び出されて「ネギ君の修行の為に、問題行動を起こしてくれんかの～」と頼まれてるところだ。

「こうしよう。　ワシとの対戦の時、待ったは使わん」

「この話はなかった事に…くたばれじじい」

「フォッ！　ま、待つんじゃ…冗談じゃ」

たく、このじじい…ふざけるなよ…。
高々、囲碁・将棋の勝負で待った無しとは…第一、勝負してるのはエヴァだし…。
私にはなんの益もない。

等価交換ですらないとは……。

「貴史くんを《ガッ》ヌッ」

「貴様…良イ度胸ダ…一度死ンデミルカ?」

こいつ、貴史をダシに使うとはな…。
絶対に許せん……殺す。

「カスミ…学園長から手を離すんだ」

隣の部屋から出てきたタカミチが、ポケットに手を入れ警告を入れてくる。

「タカミチ坊や…私に勝てるとでも?」

「ッ……」

タカミチが動揺してるのが、見ていてわかる。
じじいはいつ殺されるかと、汗を流してる。
手がじじいの汗で、気持ち悪い。

「まぁいい、受けてやるよ…その話」

私はじじいの首から手を離して、坊やの修行に手を貸す事を承諾した。

「むぅ…すまんの…」

「何に対して謝ってる? だが、次に貴史の名を使ってみろ…その

時は殺す」

「ッ…わ、わかった…」

直死の魔眼を発動させ脅すと、こくこくと首を縦に振って応えてくれた。
それを確認して、私は学園長室を出た。

「魔力…溢れてたがなんかあったか？」

壁に背中を預けてる貴史が声を掛けてきたが、私は「別に」と言って教室に向かった。

▲　カスミ　視点▲

▼　学園長　視点▼

ふぃ…カスミを動かすのも、苦労するわい…。
エヴァンジェリンの方が、まだ扱いやすいのぅ。

「大丈夫ですか？　学園長」

「うむ、助かったぞい…」

タカミチ君の介入が無かったら、死んでたかも…。
しかし、最後に見せたあの眼は危険すぎるのぅ。

▲　学園長　視点▲

▼　カスミ　視点▼

「お前達…ちょっと耳を貸せ」

教室に着いた私は、薫達に声を掛けた。
結界を張り、私はじじいと話し合った事を話した。

「ネギの修行でって…学園長……」

「カスミさんとネギ先生が…」

「ネギ君大丈夫なんかなぁ…」

「ご愁傷様というかなんというか…」

明日菜は、学園長に呆れ。
桜咲刹那は、坊やの結末を想像して顔面蒼白。
木乃香は、坊やの心配。
薫は、坊やに同情してる。

「そんで？　ウチらに話した訳は？」

「あぁ、木乃香…悪いが坊やを誘い出す餌になってくれ」

「なっ！　いくらカスミさんでも」

「坊やに見つけてもらう為だ。　安心しろ決して危害は加えん」

「絶対……ですね？」

何故こうも疑われるのかが、わからない。
信用を失うイベントでもあったか？

「せっちゃんは心配性なだけや」

「薫お嬢様！　わ、私は護衛として…」

「ウチはええよ…何すればええの？」

「こ、このちゃん！」

「大丈夫やって」

「……わかりました」

木乃香の説得（？）により、桜咲刹那は渋々了承した。

「木乃香はただ夜になるまで寮に帰らず、夜になったら桜通りを通って帰ればいいさ」

「わかったぁ」

「私は何をすればいいの？」

「明日菜は坊やを桜通りに、連れてくるんだ」

「ん、了解」

「頼んだぞ」

協力を得たとこで、結界を解いて席に戻る。

今夜が楽しみだな……ネギ先生。

▲　カスミ　視点▲

▼　明日菜　視点▼

そろそろ…かな…。

「木乃香さん遅いですね…」

「そうね…あ、そうだネギ」

これを利用して、鉢合わせればいいかな。

「最近、桜通りで吸血鬼が出るって噂なんだけど…ほら、木乃香は一般人じゃない？　だから護衛の為に迎えに行かない？」

「きゅ、吸血鬼…ですか……そうですね。　迎えに行きましょう」

さてはて、どうなるかしらね…。

▲　明日菜　視点▲

▼　カスミ　視点▼

「そろそろやな…」

「ああ、じゃあ盛大に頼む」

「わかったえ…」

そう言って木乃香は息を吐き、そして大きく吸った。

「やあああああああああああああああ～ん！！！」

大音量の悲鳴。
端から見て首筋に噛み付いてるように見せてる為、鼓膜が裂ける程痛い。

「待てーっ」

近くから坊やの声が聞こえる。
案外近かったんだな…。

「う～～ん…」

木乃香は気絶するフリをして、その場へ倒れる。

「ぼ、僕の生徒に何をするんですかーっ」

何って、貴様の修行だよ…とは言えんしな…。

どう言うか考えてると、坊やは魔法の射手・戒めの風矢を放ってきた。

「やれやれ…闇楯」

それを私は少量の魔力で、闇の楯で坊やの魔法をはね返す。

「僕の呪文を全部はね返した!?」

いやいや、まったくもって全部では無いんだがな…。
指が少し切れたくらいだ。

「凄まじい魔力だな……」

魔法の射手と楯のぶつかった余波で、被っていた帽子が飛んでいく。

「えっ……き、君はウチのクラスの…カ、カスミさん!?」

「新学期に入ったことだし、改めて歓迎のご挨拶と行こうか。　もっとも英雄の子供など、激しくどうでもいいがな…しかし、１０歳にしてこの魔力…流石は奴の息子だけはある」

「な、何者なんですか、あなたはっ？　僕と同じ「魔法使いのくせに何故こんな事を…　か？」ッ！！」

「良い事を教えてやるよ…。　この世には…いい魔法使いと悪い魔法使いが居るんだよ。　ネギ先生」

言い放つと同時に、炎熱・武装解除を放つ。

「うあっ」

木乃香の制服は完全に燃え散り、坊やは肩の方まで服が燃える。

やばいな…後で怒られそうだ…。

「レジストしたか…」

「こ、木乃香さん、大丈夫!?　ってわあっ」

木乃香の安否を確かめるべく、木乃香に問い掛け見るとそこには、木乃香の全裸が…。

子供には刺激が強すぎたか？

っとと、今のうちに逃げるか…。

（カスミ？　後でお仕置きな？）

薫が何やら念話で物騒な事を言ってるが、あえて無視する。

「いた！」

「ん…はやいな…」

そういえば身体能力を、魔法の力で上げてるんだったな。

後は風属性が得意だから、その恩恵か？

私はそのまま空を飛び、さらに逃げた。

すると、坊やも杖に跨がり私を追い掛ける。

「待ちなさーい！　カスミさん、どうしてこんなことするんですか!?　先生としても許しませんよー！！」

やれやれ…

「奴のコトを知りたいんだろ？　私を倒せば教えてやるよ」

「……本当ですね」

此処でナギについて補足、原作ではナギの生死は公式に死亡とされている。
が、この世界のナギは生きてるが行方が掴めないという状態なのだ。

「フフッ…」

「ラス・テル・マ・スキルマギステル…風精召喚！！　剣を執る戦友！！」

そうこうしてる内に、坊やは精霊召喚を行い風の中位精霊による複製を同時に、８体召喚してきた。

「捕まえて！！」

坊やの命令で８体の精霊が、こちらに向かってくる。

「レク・リク・ラク・ライネック…魔法の射手・追弾・闇の８矢」

闇の射手に追尾機能を付けて、８体の精霊を相殺する。

「追い詰めた！　これで終わりです。　風花・武装解除！！」

私が精霊の相手をしてる内に、坊やは回り込み武装解除で、マント等を吹き飛ばす。
マントは無数の蝙蝠となりどこかへ行き、私はちょうど屋根の上に着地した。

「……」

ふぅ、つまらん…。

「こ、これで僕の勝ちですね。　約束どおり教えてもらいますよ？　何でこんなことをしたのか。　それに……お父さんのことも」

「お前の父親……サウザンドマスターのことか？」

私がサウザンドマスターと強調して言うと、坊やが驚いたような顔を見せる。
何故驚くかわからんな…。
ナギ・スプリングフィールドは、魔法世界を救った英雄だ。
同じファミリーネームなのだから、調べれば誰にでもわかるだろうに…。

「と、とにかく！！　魔力もなくマントもない、あなたに勝ち目はないですよ！！　素直に降参してください！！」

「追い詰めたから私の負けだと？　笑わせる…私は人々から恐れられた真祖の吸血鬼だぞ？　一端の若造ごとき…魔力が無くとも遅れはせんよ…さあ、お前の得意な呪文を唱えてみるがいい」

「ラス・テル・マ・スキル…」

私の言葉通り、呪文を唱える坊や。
まさか、敵に言われて馬鹿正直に唱え始めるとはな、些か滑稽すぎる。

「風の精霊１１人…」

「馬鹿が…」

《パァンッ！》

即座に接近して、坊やの頬を叩く。

「……うっ…」

どうやら強く叩きすぎたようで、坊やは涙を流し始める。

「はぁ、つまらんつまらんと思ったが、私もどこか貴様に期待していたようだ。　坊やの不様な姿を見て……失望したよ」

私は本格的に泣いた坊やを放置して、屋根から飛び立ち家へと帰った。

▲　カスミ　視点▲

カモの計画を阻止せよ！（前書き）

さてと…
今回、薫が刹那に……
その時の感想を刹那に聞いてみたいと思います。

アレはどうでした？

刹那「し、知りません！！　わ、忘れました！！／／／」

では、思い出させていただきましょう…。
さぁ、本文へゴー！！

刹那「お、思い出しました！！　とっても……やっぱり言えません！！／／／／」

……では、読者の皆様。
気にせずに本文へ…

カモの計画を阻止せよ！

▼　カスミ　視点▼

「ふぅ…」

昼休み、屋上でぼけーっとしてるとエヴァがやってきた。

「昨夜はやり過ぎたんじゃないか？　坊やの目が赤く腫れてたぞ」

「あの程度で……と言いたいが、アレはやり過ぎたな。　加減するつもりが加減を誤った…」

年々身体能力が向上するのも、考えものだな。

魔力、気に関係なく上がるから手加減もちゃんとしないと……。

《パシッ》

ん？

「カスミ……」

「なんか入ってきたな…」

こんな昼間に侵入者か？　しかし、気も魔力も弱い…。

まったく、無駄な手間をかけさせてくれる。

「どうするんだ？」

「調べるよ…ちゃんとな…」

そう言って、屋上を後にした。

▲　カスミ　視点▲

▼　薫　視点▼

学校が終わり、部屋で勉強しとると明日菜と木乃香がやってきた。

なんでも、ネギ坊主の旧友であるオコジョ妖精のカモが、来たらしい。

旧友がオコジョって……。

まぁ、ええか…。

それで、そのオコジョはネギ坊主を心配してるネカネさんが、ネギ坊主のサポートにと思い向かわせたと、オコジョが言ったらしいんやけど胡散臭いな…。

そして、オコジョは３－Ａのクラス名簿を持ち、ネギ坊主のパートナーがこの中に！！　なんて言い出したらしい…。

一応、明日菜が聞いてみるとオコジョは、本屋ちゃんの写真を指差したんだとか…。

「っておもっきし一般人やないか」

「だから薫に聞きに来たのよ…」

「ん、わかった。　ほな、明日の朝せっちゃんに頼んどくな…監視

のため」

「お姉ちゃんありがとうなぁ」

そう言って抱き着いてくる木乃香。
そんな木乃香の頭を撫でつつ…

「ところで明日菜…」

「何？（嫌な予感……）」

「ウチの愛情はいつになったら明日菜に、受け止めてもらえるんやろうか？」

「（はぁ…またか…）あんたの友情は受け止めるけど、愛情だけは受け止めれないわ」

呆れた風にそう言い放つ明日菜。
まったく明日菜は頑固やなぁ～。

「なぁなぁ」

ちょいちょいと、ウチの服を引っ張る木乃香。
下を向くと、頬を赤く染めて上目遣いでこちらを見てる木乃香。

こ、これは……。

「ウチはお姉ちゃんの愛情を受け止めるえ」

カフッ…

ウチに９９９９のダメージを与える木乃香。

「我が生涯に悔いなしや…」

木乃香を優しく抱きしめると、木乃香は嬉しそうに「えへへ～」と最高の笑顔を見せてくれる。

木乃香はウチに止めでも、刺す気なんやろうか？

「最近、あんたらの将来が不安だわ…」

明日菜がウチらを見て、そんな事を言ってきた。
安心し、木乃香はウチが養う！

「ダメじゃん！！」

▲　薫　視点▲

――朝――

▼　刹那　視点▼

朝早くに、薫お嬢様が私の部屋に来て下さった。
どうやらネギ先生の事で、頼みがあるらしい。

「監視……ですか？」

「そっ…ネギ坊主が連れてるオコジョの監視や」

「どうして、また…」

「それがな…」

薫お嬢様は、明日菜さんから聞いた事を私に説明してくれた。

「ネギ先生のパートナー…ですか」

そして、その第一候補が一般人である宮崎のどか…。

「一応、明日菜が釘をさしたみたいやけど…お願いな」

「はい、お任せを…」

「とは言うても、授業中はどないしよう」

「それならご安心を」

私は式紙のちび刹那を呼び出す。

「おお、ちっちゃいせっちゃんや」

「監視はこのちび刹那が、随時念話で状況を教えてくれます」

「ちび刹那と申します。　よろしくお願いします」

「よろしくなぁ」

握手し合う、薫お嬢様とちび刹那。

そして、自然な動作でちび刹那の服を脱がす…

「って何をやってるんやぁぁあああ!!　薫ちゃぁぁあああああん!!／／／／」

「あうあうあうあう／／／／」

「何って…身体検査やけど?」

なんでそんなん「せっちゃん、何を言うてんの?」って顔で言ってるん!?

「身体検査って…必要ありますか!?　今、此処（私の部屋）で!!」

「ウチがやりたいからやる!」

この言葉でウチの頭が、一瞬真っ白になった。
その隙を薫ちゃんが逃すわけもなく、ちび刹那は剥かれていじくられた。
いじくられた後、ちび刹那が「もうお嫁に行けません」と言っとったが、いろいろツッコミたいとこだが時間も押してるので、無視することにした。

そして、監視中。

（手紙?）

（はい、のどかさんの靴箱にオコジョが手紙を…）

一応、回収しとくか…。

（なら、その手紙の回収をしてオコジョの監視に戻って下さい）

（了解です）

そして、昼休み。

ちび刹那に念話で指示を出す。

ちび刹那を呼び出して、明日菜さん達の所へ……。

「それで？　どうだった？」

「宮崎さんの靴箱にオコジョが手紙を…」

手紙を薫お嬢様に渡す。

「裏にはネギよりって、書いてるみたいやけど…明らかにネギ坊主の字やないな？」

「そうね。　ネギがクラス名簿に落書きしてる字とは違うわね」

「開けるえ？」

「「「……」」」

薫お嬢様の言葉に、コクりと全員が頷く。

「うわぁ…汚い字や…え～何々…」

以下の文が、オコジョが書いたと思われる手紙です。

宮崎のどかさま
放課後、りょーの裏で
まてます。

ぼくのパートナーに
なてください。

ねぎ

「「「……」」」

「何にもわかってないじゃない…カモの奴…」

読まれた手紙を聞いて、明日菜さんは怒りに震えていた。
いや…明日菜さんだけじゃなく、薫お嬢様も木乃香お嬢様もその瞳に、怒りを宿している。
明日菜さんは知っている。
魔法の世界の危険性を……。
薫お嬢様は知っている。
魔法の世界が、死と隣り合わせだと言う事を……。
木乃香お嬢様は知っている。
魔法に死者蘇生がない、幻想（ファンタジー）な世界じゃない事を……。

だからこそ、一般人を巻き込む事は許容出来ない。
特に、宮崎さんみたいな人は来てはいけない。

「放課後だったわね…」

明日菜さんはそう言うと、教室を出た。

「明日菜かなり怒っとったなぁ」

「わからんでもないけどな…」

話が着いたとこで、昼休みは終わりを告げた。
結局、明日菜さんは午後の授業を全て欠席した。

▲　刹那　視点▲

▼　明日菜　視点▼

午後の授業を休み、部屋に戻るとごみ箱にネカネさんの手紙らしき物があった。
それは朝、カモがネギに渡すからと言って渡した手紙。
その事も含め、私は自分の中のどす黒い感情に変えた。
そして放課後、寮の裏でネギが来るのを待った。
カモもおそらくネギと一緒に来るはず…。
そして……

「明日菜さーん!!」

ネギは空から降りてきた。
そんなネギの行動に呆れたけど、今はカモだ。

「明日菜さん、大変なんです！　宮崎さんが！！」

本屋ちゃんがどうかしたのだろうか？　慌ててるネギは私の怒りに、気付かずに説明をする。

ネギの話を聞くと、本屋ちゃんが不良にからあげ（多分、かつあげ）されてるとの事。
先生として、放っておけず助けようとするが本屋ちゃんが見つからないので、たまたま近くに居た私に助力を求めた。　そんなところ。

「ところでネギ…」

「なんですか？」

「その情報は誰が言ったの？」

「カ、カモくんです…」

私の威圧的な質問に、声を吃らせるもしっかりと答えるネギ。
そしてオコジョを見てみると、今まさに逃げようとしていた。

「カモ…」

「は、はい！！」

「私は言ったわよね？　魔法関係者ならいざ知らず…一般人を巻き込むなって…」

「し、しかしですね？　姐さん。　現時点でわかってんのは姐さんですぜ？　その姐さんが断ったじゃないですか…」

「契約はしないけど、協力はするって言ったわよ」

「で、ですが…（それじゃあ金になんねーんだよ！！）」

「あ、あの…明日菜さん？」

「ネギ！　あんたコイツに騙されてるのよ？　本屋ちゃんが、不良に絡まれてるってのは真っ赤な嘘！　本屋ちゃんを、ネギのパートナーにしようとしたのよ！？」

ネギにオコジョがやろうとした事を教えると、大声を上げてオコジョに問い質し始めた。

オコジョは「兄貴の為でさぁ」とかいろいろ言ってるが、一般人を巻き込んでいいって理由にはならない。

だが、そこまで考えに至れないネギはオコジョと友情を深め、抱き着いた。

悪いのはオコジョ、悪いのはオコジョ…オコジョが悪いのよ……ね？　ナギ…あんたならどうするの？

こうして、カモの企みを無事阻止したけど……。

私の中では、やり切れない思いが募った。

▲明日菜　視点▲

吸血鬼の逆鱗に触れし愚者1（前書き）

今回は視点が結構変わります。
じっくり見て落ち着いて見てください。

吸血鬼の逆鱗に触れし愚者1

▼　クロナ　視点▼

どうも、皆さん。
アサシンこと、赤屍クロナです。

「依頼？」

「そうそう…」

今、私は主（クライアント）である南武貴史に依頼を持ち掛けられてます。　朝っぱらから…。

「どういった内容で？」

「完全なる世界を、あの世に運ぶ」

要は殺せ…と……。

「それと、行方不明のナギを麻帆良祭までに、此処へ連れてくる事の二つだ」

「なかなか、骨が折れる仕事ですね…」

「出来るよな？」

「わかりました…。　受けましょう」

さて、期限は麻帆良祭まで時間がありませんし、急ぐとしましょう。

部屋を出て外へ……。

「……へい、タクシー」

玄関先で、タクシーを止める動作をする。

「んなんでタクシーが来るかぁぁあ！！

《キキッ》

ってマジで来んのかよ！！！」

貴史がぎゃあぎゃあ喚いてますが、この際無視しましょう。

私は後部座席に座ると、運転手の馬車さんに行き先を告げる。

「魔法世界（ムンドゥス・マギクス）まで」

「あいよ！」

「タクシーで行けるかよ！！　つか何で運転手が馬車！？」

「ノーブレーキで突っ切るぜよ！！」

では、発進♪

「誰か俺の質問に答えろやぁぁぁあああ！！」

タクシーが爆進した方向に向かって、貴史さんの叫びが天まで届いたとか届いてないとか…。

▲　クロナ　視点▲

▼　貴史　視点▼

「はぁ、はぁ…」

クロナを見送るのも疲れるわ…。

《ピロリン♪》

部屋に戻ろうとしたら、メールの着信音が聞こえた。
携帯を開いて見てみると、発信者はクロナだった。
メールの内容は……

王　波児が居るのだから、他にも居ますよ。

クロナより

「……」

とりあえず、疲れた。
てか、タクシーで魔法世界行けんのか？
まぁ、いいや…出勤しよ…。
そういえば、昨日オコジョが居たな…。
カスミも動いたって事後報告で、教えられたし……。

てか、ネギ少年に一度たりとも、魔法や教師の事で相談されてねぇ…。

アレ？　困った事があったら相談しろって言ったよな？　明日菜の事も、協力者が出来ましたーっていう報告もない（する必要もないが、あってもいいと思うんだが）。
そして今回のカスミの事…。
もしかして、戦力外って認識されてる？

「補佐の意味あんのかねぇ…」

そうぼやきつつも、俺は職員室に向かうのだった。

▲　貴史　視点▲

▼　明日菜　視点▼

朝、学校に登校した。

までは良かったんだけどなぁ…。

靴箱で、カスミさんとネギが出会った。
ネギとカスミさんが、何回か言葉を交わしたあとネギは泣きながら、走り去ってしまった。

って、説明より追いかけなきゃ…。

「ネギーっ！」

「ネギの兄貴、しっかりしろよ！」

ん、オコジョの声…。

二階か……。

二階に上がると、ネギはカスミさんの正体をオコジョに話していた。

カスミさんの正体を知って、オコジョは青ざめてる。

「そのあとに、茶々丸さんに聞いた事なんだけど、茶々丸さんはカスミさんのパートナーらしくって…」

「やべーじゃないっすか！　それ！！　あぁ～あ、姐さんが俺っちの計画を邪魔しなかったら…」

むかつくオコジョね…。

「どうです？　責任取って姐さんが、兄貴と仮契約しやすか？」

「協力じゃ、ダメなの？」

「契約すれば、今より強くなれるんすよ！」

また同じ展開、この間からずっとこれだ。

特に、昨日の夜なんかは平行線で話が着かない。

「というか、カスミさんは正々堂々と戦いを重んじる人よ。　決闘状とか果たし状とか出して、一対一の勝負を条件にすれば大丈夫よ…」

「でも、一対一だって勝てなかった」

「それに、姐さん…相手は悪い魔法使いって言ってるんですぜ？　一対一の条件飲んでも、素直に一対一で勝負しますかねぇ？　というかやけに詳しいっすね？」

「悪い魔法使いでも、誇りはあるわよ。　詳しいのは、少し魔法関係でお世話になったことあるのよ。　その時に……ね」

体術系統の師匠なんだよねー…。

カスミさんは…。

南武先生や薫が体術系だから、カスミさんは魔法を極めてるんだって、言ってるけど…。

６００年磨き上げただけに、体術も凄いのよねぇ。

「誇りだろうがなんだろうが相手は悪。　二人で攻められないよう一人ずつたおしゃーいいんすよ。　あのカスミって奴も魔力感じませんですし…」

「ちょっ…」

「姐さんが契約ねぇ代わりに、協力はしてくれるんすよね？」

「確かにそう言ったけど、その案には反対するわ」

「はぁ…姐さん…アレ（仮契約）は嫌だ、コレ（パートナー探し）はダメ、ソレ（奇襲）もダメって、そりゃあないんじゃないすか？　姐さんは兄貴が、あの吸血鬼にやられてもいいんすか？」

なんか痛いところを突いてくるわね…。

まぁ、確かに仮契約は嫌だ。
私だって女だし、出来れば最初は好きな人がいい。
従者になるにしても、ちゃんと仕えるに値する人がいい。
その点、ネギは好きな人じゃないし、仕えるに値しない。
というか私って、元はといえ姫なのよねぇ…。
それを従者にするって……。
まぁ、これは置いておこう。

パートナー探しについては論外。
魔法関係者なら本人の了承で良いけど、オコジョの奴は見境ないからいずれ、一般人も巻き込む…。
これは絶対に譲れないわ。

奇襲については絶対ダメね。
カスミさんは身内に、危害を加える人に容赦が無い。
きっとネギを殺す。
学園を敵に回しても……。というか、学園全ての魔法関係者が敵になっても、カスミさんとカスミさんの身内には、絶対に勝てない。

「良い？　オコジョ。　これは脅しじゃない…カスミさんの身内に手を出したら、死ぬわよ。　いえ、死ぬなんて生温い。　彼女は学園全てを、敵に回しても勝てるのよ」

「そん……な…そんな人と、どう戦えば…」

私の忠告にネギは青ざめ、オコジョは震えていた。

「カスミさんをやるなら、正々堂々とやりなさい。　カスミさんも殺したりはしないでしょう…」

▲明日菜　視点▲

▼ネギ　視点▼

「カスミさんをやるなら、正々堂々とやりなさい。　カスミさんも殺したりはしないでしょう…」

そう言って、明日菜さんは教室へ行った。

「ど、どうしよう…」

「構わねぇ…やりやしょうぜ」

「で、でも…」

そうなると、学園壊滅……。

「姐さんは少し大袈裟すぎんすよ…」

カモくんはそう言うけど……。

うぅ～、先生として悪い事は止めさせたい。

でも、一度惨敗しちゃってるし…。

「このまま、あのカスミって奴に好き勝手されやすぜ？　それに話を聞くところ、あいつも一般人を巻き込んでますし」

「！！」

そうだよ…。
実際、彼女は薫さんを……。

「わかったよ！　カモくんやろう！！」

「そうでなくっちゃ！！」

この時、僕は間違った選択をした事に気付けなかった。
いや、気付くはずもなかった。

カスミさんの事で、焦っていた僕には……。

▲　ネギ　視点▲

▼　カスミ　視点▼

放課後、（そこ、飛びすぎと言わない）今日は茶道部で、茶々丸の茶を飲むか。

《チャカ…チャカ…》

茶々丸がお茶をたてる。
この音が、心を落ち着かせるな…。

ーーーカスミ満喫中ーーー

「あぁ、そういえばネギ・スプリングフィールドに助言者がついたかもしれん。　当分は私と居ろ」

「はい、マスター」

茶道部の活動が終わり、茶々丸に私の傍から離れないよう命令する。

……というより、どっかで見た光景だな…。

……知識として、あのオコジョに警戒が必要とあるが…。

まぁ、思い出せないなら仕方ないかな…。

「おーい、カスミ」

ん、タカミチ？

「……何か用か？」

「学園長がお呼びだ。　一人で来いだってさ」

「何、一人で？」

今此処で、茶々丸を一人にさせたくない。

何故かわからんが、一人にすれば後悔してしまう気がする。

「ちょっと待て」

私は、携帯を手に取り開くと圏外と表示されてた。

次は念話で貴史に連絡を入れようとするが、何故か念話が出来なか

った。

「……タカミチ…」

「なんだい？」

「貴様の携帯は圏外か？」

「何を言ってるんだい？　そんなわけ…」

タカミチは携帯を開くと、同時に固まった。
私が横から見ると表示されてるのは、圏外という文字。

「タカミチ…これは私と貴様の携帯が、たまたま壊れているだけか？」

「そんなはずは、さっきまで使えたよ」

「タカミチは、茶々丸と一緒に居ろ。　私一人で、じじいの下へ行く」

「それはダメだ。　カスミはこの間、学園長に危害を加えたからね」

「それはあいつが悪い」

まずい、このままじゃ茶々丸が一人になる。
こうなったら少し賭けになるが……。

「茶々丸、貴史や薫の所へ行って共に行動しろ」

「わかりました」

そう言って、茶々丸と私は別れた。
少し、ほんの少しだけ一人になるが大丈夫だろう…。
そう信じて、私はタカミチと一緒にじじいの下へ向かった。

▲　カスミ　視点▲

▼　茶々丸　視点▼

マスターは何故あんなにも、焦っていたのでしょうか？　とりあえず、南武先生を探しましょう。
まずは、職員室へ行きましょう…。

――職員室――

「あら、絡繰さん…どうしたの？」

職員室に着くと、しずな先生が声を掛けてきました。
この人に聞いてみましょう。

「南武先生はおられますか？」

「今は居ないわ。　屋上に居るんじゃないかしら」

「そうですか。　ありがとうございます」

しずな先生に御礼を言って、屋上へ移動。

――屋上――

屋上の扉を開けて、外へ出る。
そこには誰も居なかった。
そして、戻ろうと扉の方へ向かうと、

「！　こんにちはネギ先生…」

「茶々丸さん…」

ネギ先生とオコジョが居た。

▲　茶々丸　視点▲

▼　貴史　視点▼

トイレから戻って来ると、しずな先生がこちらに来た。

「なんすか？　スイカ先生」

しずな先生は何かと、俺の頭や顔を叩く癖がおありで…。

《パシンッ》

ほら、叩かれた。

「私は源しずなです」

「南武先生、懲りませんなぁ」

そして流れるような勢いで、しずな先生と新田先生のダブル説教が始まった。

なにこれ？　いじめ？

説教が始まって5分。

微弱な魔力反応を感じた。

これは…上？　屋上か？

「聞いてますか？」

「あ、はい…あ、そうだしずな先生って、なんで俺んとこ来たんだ？　なんか用があったの？」

「あ、そうそう…さっき絡繰さんが貴方を探しに行ったわ。　何の用事か聞くのを忘れちゃったけど」

なんか嫌な予感。

「茶々丸は、今何処に？」

「屋上に居るんじゃないって言ったから多分…」

その言葉を聞いて、すぐに屋上へと向かった。

▲　貴史　視点▲

――貴史が気付く少し前――

▼　茶々丸　視点▼

「まさか、一人で来るとは…」

「茶々丸さん…カスミさんに悪い事するのを、やめさせていただけませんか？」

ネギ先生が困った顔をしながら、私に言ってくる。
しかし、私はマスターの忠実な従者。
マスターには逆らえません。

「すみません。　マスターを止める事は出来ません」

「そう、ですか…では茶々丸さん」

ネギ先生が杖を構えと、同時に結界が張られたのを確認した。

「兄貴！　おもいっきし、ぶちかましてやりなぁぁああ！！」

なるほど、あのオコジョが…。
ということは、一般人に魔法が知れる事は無いですね。

「ラス・テル・マ・スキルマギステル…」

呪文詠唱…させません。

私はネギ先生の下へと駆け寄ると、視界の端からオコジョが飛び出し、

「オコジョフラァァアアッシュッ！！」

《閃！！》

視界に強烈な光が炸裂し、一瞬機能が停止した。

機能が復旧した頃には、ネギ先生が魔法を放つ寸前…。

間に合わない…。

「魔法の射手・連弾・光の２９矢！！」

追尾型魔法、至近弾多数…回避不可能。

「すいません…マスター……」

《ズガァァアアアアアン》

▲　茶々丸　視点▲

▼　ネギ　視点▼

「はぁ、はぁ、はぁ…やった…の？」

煙りが晴れるとそこには、上半身だけの茶々丸さんが居た。

赤い『何か』を付着して……。

「えっ…」

急に頭が冷える。

茶々丸さんはロボットだ。

赤い『何か』を出すはずがない。

じゃあ、アレは何？　まるで、人間の…。

そこから先、僕はまったく覚えていなかった。

気付いた時は、保険室で寝ていた。

▲　ネギ　視点▲

吸血鬼の逆鱗に触れし愚者1（後書き）

ネギ死にそ…。
誰か助けてあげてー！！
もしくはカスミを鎮めて～！！

吸血鬼の逆鱗に触れし愚者2（前書き）

ごめんなさい…。
ええ、言い訳としましては…作者の力量不足です。

ただ、それだけ…。
駆け引きだとか下手な言い訳とかそういった事一切才能がないのでクオリティ低いです。

おそらく今作、最低の話です。

吸血鬼の逆鱗に触れし愚者2

▼　虚・薫　視点▼

オイオイ…こいつはやべぇぞ…。
薫やカスミが気付く前に超って奴の所へ行くか…。
小僧が気絶したのを確認して、迅速にあたしは茶々丸の残骸を、工学部へ運んだ。

「ちゃ、茶々丸!?」

「おい、早くコイツを助けろ！　あの鬼が来る前にだ!!」

「わ、わかったネ」

（虚のウチ！　聞こえるか?）

王様か…まさかばれてねぇよな…?

（あぁ、聞こえてるよ）

（茶々丸はどうなったんや?）

……なんて説明する?

一一以下、虚・薫の予想応対一一

例1

Q1、茶々丸は無事か？
A、上半身は無事。
Q2、上半身無事って何？
A、誰か盾になったから…
Q3、誰かって誰？
A、貴史が盾に……。

結果、カスミと王様大激怒……ボツ。

例2
Q1、茶々丸は無事か？
A、無事だぜ。
Q2、おい、茶々丸が帰ってきてないぞ。本当に無事なんだろうな？
A、すまん、嘘だ……。

結果、カスミ大激怒……ボツ。

例3
Q1、茶々丸は無事か？
A、無事じゃねぇ…。

結果、カスミ大激怒……ボツ。

アレ？　詰んでね？

（どうしたんや？　まさか……）

やばい、早く答えねぇと…。

超と葉加瀬を見ると、茶々丸の修理に集中してる。

しゃあねぇ……。

あたしは……例3の応対をした。

頼むぜ…王様よぉ。

▲　虚・薫　視点▲

▼　薫　視点▼

虚のウチが答えた結果は、最悪なモノやった。

茶々丸は無事ではない。

「薫お嬢…様？」

「なん、だって？」

刹那と明日菜が聞いてくる。

青ざめてるであろうウチの顔を、信じたくないんやろう。

微かな希望に縋り…。

「お、お姉ちゃん？」

木乃香も不安げにウチに近付く。

「茶々丸は……半壊したらしいえ。　ネギ坊主が魔法を使って攻撃して、オコジョが秘匿を守って結界を張ってな…」

「「「ッ！！」」」

「ネギ坊主は半壊した茶々丸を見て気絶。　茶々丸は虚のウチが回収して、工学部に…」

《ガタッ》

「「「明日菜(さん)！！」」」

突然、明日菜が床に手と膝を着いて、四つん這いになった。

「私が…私がもっと…厳しく忠告してれば…」

「明日菜…」

「明日菜にも責任はある…」

「薫お嬢様！！」

「せやから、明日菜には明日菜なりの償い方を見つけるんや」

ウチは震えてる明日菜に、あえて厳しい言葉を放つ。
この事は、きっと明日菜だけやない。
ウチらにも、責任はある。

「とりあえず、ウチはカスミの所へ行くな」

三人に、そう告げてウチは教室を出た。

▲　薫　視点▲

▼　カスミ　視点▼

「なん……だと？」

薫から告げられたモノは、私に強い衝撃を与えたモノだった。

「まさかネギくんが…」

「む、むぅ…」

「ふ、ふふふっ…」

クッハッハッハッハッハッ！！　やってくれるじゃないか…私の不幸体質とやら…思い出したよ。

私の不幸体質が、個人に収まりきれないモノだってね…。

携帯が圏外なのも、念話が通じないのも『不幸』にも、なんらかの理由でそうなった。

そして、私の原作知識すら消すとはな…。

「カ、カスミ？」

「どないしたん？」

「…あの屑（神）を殺す。　あの野菜（ネギ）を殺す。　あの馬鹿（ナギ）を殺す。

そして、私を縛る貴様（呪いの精霊）をコロス！！」

直死の魔眼を最大にして発動する。
赤い眼から蒼い眼となり、蒼い眼から血涙が溢れる。
そして、腕をひと振り。

『ギッ！！』

登校地獄という呪いの精霊を殺した。
さらに、ひと振り。

《バシュン！！》

馬鹿（ナギ）の残りの魔力を殺す。

「な、なんと…」

「ジジイ…ネギもしくは貴様あるいはオコジョを殺してもいいか？」

「む、…ネギくんは許してく「なら貴様だ」ッ！！」

「カスミ！！」

タカミチが殺気を放ちながら臨戦態勢を取るが、タカミチごときに負けはしない。

「なんだ？　貴様が命を張るか？」

「高畑先生…カスミに手を出したら……」

「薫！！」

薫は斬魄刀を具現化すし、じじいは薫の行動を抑制する。

私はじじいでじじいは薫、薫はタカミチでタカミチは私と、三竦みならぬ四竦みが出来上がった。

何時間、この状態を保っただろう。

部屋は人払いの結界のおかげで、誰も来ない。

誰も声を発さずに居た。

《カシャァアアアン！》

「「「「！！」」」」

長く続くと思われた状態が、結界が破壊された事により解かれた。

私はじじいから離れ、タカミチはじじいの傍に、薫は斬魄刀を消して、私の傍に着いた。

しかし、部屋に漂う雰囲気は殺伐としている。

これぱかりは、誤魔化す方法はない。

コツ、コツ、と足音をたてて、結界を破壊した人物はこちらに向かってくる。

そして、

《コツ》

止まった。

《カチャ》

そして、入って来た人物は……。

▲　カスミ　視点▲

▼　三人称　▼

時は、少し遡る。

屋上、虚・薫が茶々丸を運んだその後。

《ゴポッ》

血溜まりは、泡立った。

『ソレ』は一人の人間へと象る。

「……ふぅ…」

血溜まりから再生したのは、貴史であった。

「いくらなんでも、俺がやられるレベルのサギタ・マギカはないだろ…」

貴史はそう呟き、ネギを抱えて保健室へ向かうのだった。

▲　三人称　▲

▼　貴史　視点▼

此処で少年を殺してやりたいけど、そうなるとクロナの依頼が無駄になるからなぁ。
オコジョは生贄にするか…。

「さて、少年は此処に寝かせればいいか」

保健室のベッドに少年を寝かしつけると、俺は学園長室へ向かった。

「ん？　人払いの結界？」

結界の境目に、手をひと振りする。

《カシャァアアアン》

それだけで、結界は音をたてて崩れた。

「さて、行きますかね」

コツ、コツと学園長室に向かう。
気配は四名。
学園長にタカミチ、カスミと薫だな…。
そして、学園長室前。

《カチャ》

と、ノブを動かし扉を開く。
扉を開けた瞬間に、ピリピリとした雰囲気が俺の身体を突き抜ける。

「殺伐としてるなぁ…」

「貴史…」

「よっカスミ…眼から血が出てるぞ」

アレは直死を使ったのか…。
カスミを縛ってる呪も消えてる。

「た、貴史そない暢気に…」

「茶々丸なら無事だよ…」

「「「「!!」」」」

俺の言葉に全員が驚いたような顔をする。

「本当か!?」

「でも、虚のウチが…」

「ネギ少年が魔法を放つ瞬間、俺が茶々丸の盾になったからな。
頭と心…つまりは記憶と感情は守ったぜ。　身体を取り替えれば大丈夫だ」

「そう、か…ありがとう…貴史」

カスミは安心したように、感謝の言葉を告げる。
俺はカスミの顔に着いてる血を拭った後、「気にするな」と言って頭を撫でた。

「貴史が盾にってウチ聞いてへんけど…」

「黙ってたんだろ？」

薫の疑問に俺が答えると、薫は「そうなんかぁ」と呟いた後、学園長室を出て行った。

なにやら霊力や魔力、気まで放出してたけど大丈夫か？

「むぅ、助かったぞぃ…」

「ありがとう…」

おいおい、タカミチと学園長は何やら凄い勘違いしてねぇか？　とりあえず……。

「助かった？　ありがとうだぁ？　ざけんなよ三下ァァァ…こちとら既にキレてんだよ」

「「ッ！！」」

部屋に俺の殺気が充満する。
関東最強の学園長だろうが、英雄の一員だろうが俺の足元すら及ばねぇ…。

「ネギ少年の処罰と今後を決めようか…」

「貴史…あの坊やは私がやる。　私が罰する…いいな？」

「俺は構わねぇぜ」

「それは「テメェら認めりゃあいいだけだよ！」ぬぅ…」

学園長が反論しようとするが、俺の殺気で黙らせる。

「学園長と少年の生存は保証してやる」

（（……ホッ））

俺の言葉にあからさまに、ホッとするタカミチと学園長。

「だが…コレは殺す」

屋上から連れてきたオコジョを見せる。

今回の原因の元、幸せそうに寝てるのがむかつく。

「そのオコジョくんならウェールズへ」

「強制送還、そしてまた檻の中へってか？」

「う、うむ」

「頭カチ割るぞ…こいつが脱獄してるのは知ってるんだよ…また脱獄されんだろうが…」

マジ、ストレス貯まるわぁ…。

「わ、わかった…容認しよう」

「学園長！！」

「決まりだな…んじゃあ少年に説明よろしく」

こうして、俺はカスミと一緒に工学部へ向かった。
途中、明日菜とすれ違った。
何やら決意した表情だったが……。

▲　貴史　視点▲

吸血鬼の逆鱗に触れし愚者2（後書き）

次回はネギへの説明と最終決戦に行きます。

やっぱり戦闘が1番楽です。

吸血鬼の逆鱗に触れし愚者3（前書き）

更新です。

吸血鬼の逆鱗に触れし愚者3

▼　ネギ　視点▼

今、僕は学園長室に居る。
あれから保健室で目が覚め、タカミチが来て学園長が呼んでると言われて、タカミチと一緒に学園長室へ向かった。

そして、今学園長は考え事をしてるのか、眼を閉じてウンウン唸ってる。

いったい何の用だろう…。
まさか…カスミさんの事がバレたんじゃ……。
ど、どうしよう……。
このままじゃ、生徒が起こした問題すら対処出来ない先生として失格…。
立派な魔法使いになれない…。
うぅ～、なんで僕の担当クラスにあんな人が……。

「ネギ君には…正々堂々とカスミと戦ってもらう」

▲　ネギ　視点▲

▼　三人称　▼

ネギが学園長室に居る頃、工学部では…。

「超、葉加瀬…茶々丸はどうなんだ？」

「いやー…南武先生は良い仕事をしてくれたヨ」

「茶々丸のメモリーが無傷ですからね～」

「これなら新しいボディに移すだけで問題無いネ」

カスミと超、葉加瀬は茶々丸の修復をしており…。

「いやぁ…黙ってたのは悪かった…」

「謝って済む問題ちゃうで…」

「もう許してやれよ…」

「貴史は甘い！　もう二度とこんなこと出来んようキッチリお仕置きせな！！」

薫は縛道の六十三「鎖条鎖縛（さじょうさばく）」と呼ばれる、太い鎖で虚・薫の自由を封じて、極めつけは佗助を使って虚・薫の身体の重みを六十倍にして、首に佗助の刃を当てていた。

貴史は薫を説得して、虚・薫を助けていた。

▲　三人称　▲

▼　ネギ　視点▼

「えっ？」

学園長先生が、何を言ってるのかわからない。

「実はの…あの吸血鬼事件はネギ君への課題だったんじゃが……」

学園長先生は、僕にカスミさんと戦えって？　そんな事出来るわけないよ…。

だって、だって僕は……彼女に負けてるんだから…。

「聞いておるか？」

「あ、…は、はい…」

「ふむ、まぁそういう事じゃ…。　カスミからは、ワシがなんとか話を着けよう…」

「それでは…」

僕はお辞儀をして、学園長室を出た。

早く、カモくんにこの事を話さないと…。

あと、明日菜さんにも……。

僕は走って僚へと帰り、明日菜さんとカモくんを待った。

▲　ネギ　視点▲

▼茶々丸　視点▼

――すいません…マスター……――――

此処、は……何処でしょう？　暗い……。

「ふむ、目が覚めたかい？」

あなた……は？

「私？　私はね……一部では屑（神）と呼ばれてる神様さ」

神、様？

「そう…」

私の思いを肯定するように頷く神様。

では、此処は死後の世界と呼ばれる場所なのだろうか？　でも、機械である私が何故？

「その疑問はもっともだ…だけどね？　物に意思を持つ怪異を知ってる？」

物が意思を？

私の疑問に神様は丁寧に教えてくれた。

「付喪神…大切に扱われた古き物に宿る妖怪さ。　ただ、神とは名ばかりかそれほどの力はない。　最弱な妖怪さ…」

「ですが、私は古い物では……」

「確かに古い物ではないが、大切にされたろ？　カスミ君達に」

マスター…。

『おはよう…茶々丸……』

『今日から茶々丸は我が家の家族だ』

『何を突っ立ってる？　はやく席に着け、食べれないだろ』

『茶々丸～…眠い…』

『茶々丸は今日も綺麗だな…』

『今日は一緒に寝るぞ』

『い、痛い…いたた…くっ…カキに当たるとは…茶々丸……胃薬……はぐっ！』

『エヴァ、茶々丸、チャチャゼロ好きだぞ』

エヴァンジェリン様…

『カスミが水中で足つって溺れたぞ！　茶々丸！！　救出に行くぞ！……って私は泳げ……いん…だった…ぷはっ…茶々……』

『た、助かった……』

『カスミの役に立ちたい？　ならカスミを不幸から守ってやれ…』

『茶々丸…よくやったぞ』

姉さん……

『オ前ガオレノ妹カ？　オレハチャチャゼロダ』

『ケケケッ…苦労シテンナ妹…』

『妹、ヤロウゼ』

『オメェ…中々ヤルジャネェカ』

薫様

『和食の作り方？　ええよ…ついでに後で必要になってくるある人の好みの味教えとくな？』

『これがカスミの好きな味や』

『こっちはカスミとウチの好きな人が好きな味』

『うん、美味しいえ…』

『いつもカスミをありがとうなぁ』

貴史様

『猫に餌やりか？　カスミに頼めば飼ってくれるだろ』

『美味い…茶々丸結婚しよう！』

『カスミって寂しがり屋なんだ…だからずっと居てやってくれ…』

……。

『茶々丸さん』

明日菜さん

『茶々丸さん』

木乃香さん

『茶々丸さん』

刹那さん

『絡繰…』

真名さん…。

『ちゃちゃまる～』

皆さん……。

マスターや皆さんの顔を思い浮かべると、眼から何かが零れ落ちる感覚があった。

「……どうだい？」

「はい、…よくしてもらいました……」

「どうだい？　私なら君を生き返らせる事出来るよ？」

「本当…ですか？」

「ああ…」

私は…またマスター達と一緒に居たい。

「……お願い、します」

「それじゃあ眼を閉じて、次に眼を開ける時は生き返ったあとだ…」

私は神様に御礼を言って、そのまま眼を閉じた。

しばらくして、周りが騒がしくなった。

もう生き返ったのだろうか？　期待を胸に私は眼を開ける。

「おい！　茶々丸が起きないじゃないか！！」

「お、おかしいネ…これでちゃんと起動するはずヨ」

なんでしょうか？　これは…。
物凄く取り乱したマスターが超を揺さぶり、ハカセはモニターとにらめっこ。

「■■■■■■■■■■！！」

「あっははは…よう燃えとるなぁ…」

「やれやれ…」

燃え盛る薫様（虚）に、火竜を出してる薫様、そして呆れ果ててる貴史様。

「これは……なんてカオス？」

『！！』

私の言葉に皆さんは驚いたように、こちらを振り向く。

どうかしたのでしょうか？

小首を傾げて皆さんの反応を待つ。

「茶、々丸……」

「はい、マスター」

「茶々丸！　茶々丸～！！」

マスターは眼に涙を溜めて、私に抱き着いてきた。
私はマスター支えるように、抱きしめてマスターの温もりを感じる。
泣きながら私の名前を言うマスター。
マスターの気持ちが伝わってくるのがわかる。
それと同時に、また此処へ戻ってきたと実感した。

「気分はどうカ？」

「良好です。　超」

「身体に異変はありませんか？」

「問題ありません。　完璧ですハカセ」

「おはよう…茶々丸」

「おはよう…ございます。　薫様」

「……」

「大丈夫ですか？　薫様（虚）」

「辛くも楽しい現実世界におかえり…」

「ただいま戻りました。　貴史様」

皆さんに一言挨拶し終え、マスターと向き合う。

「ご心配かけました…」

「本当だ…まったく……今日はずっと私といろ…拒否権はないからな」

「はい」

▲　茶々丸　視点▲

▼　カスミ　視点▼

茶々丸が目覚めた後、軽い検査を行い現在、家でまったりと茶々丸の隣で寛いでる。
そこへ、戸をノックする音が聞こえた。
茶々丸が対応に出ようと立ち上がるが、茶々丸の腕を掴み止める。

「あの…マスター？」

「茶々丸は今日は家事、対応はお休みだ」

「ですが……」

「俺が出るから茶々丸はカスミと居ろ」

「貴史様…」

茶々丸の代わりに貴史が、応対しに行った。
しばらくすると、貴史がタカミチを連れて戻って来た。

「来客はタカミチか…」

「学園長からの伝言だ」

ジジイから？

顔をしかめてると、タカミチが話を続けた。

「今度の停電の時に、ネギ君と一騎打ちすること…」

「待て…一騎打ち？　なんだそれは？　私がやるのは断罪だよ…ぼーやの」

「受けてくれるならカスミから供給されてる学園の結界を…」

何を勘違いしてるんだ？　この馬鹿は…。

「タカミチ…良い事を教えてやる…私が此処に居るのは貴史が居るからだ…登校地獄という呪いもあるが…もう呪いは殺した。　私の魔力をダシにしても無駄だ」

「無駄？」

「私が学園の外に出れば魔力は戻る。　そして、警備の時に使わなかったが…私はどこからでも地球の魔力を使える」

「なっ…」

「わかるか？　私は魔力無しでも魔法が使えるんだよ…星からの支援でな…」

星との契約。
その名の通り、星と契約するもの。
契約すれば、契約した星の魔力を使うことが出来る。
まぁ、使えるのは魔力だけ。
型月の真祖みたいに、相手よりワンランク上になるとかはないがな…。

「もうメンドイからそれで受けろ…」

痺れを切らしたのか、貴史が受けろと言ってきた。

メンドイとはなんだ…メンドイとは…

「カモを好きにしていいぞ」

そんな魅力的な言葉を言われると悩む。
しかし…カモか……いいな…。

「わかった…停電の時だな」

「感謝するよ…」

そう言って、タカミチは帰ろうとする。

「一つ言っておく…今回の件……学園側にも責任があるぞ」

「……わかってるさ…それでも…」

ネギ君を見殺しには出来ない…。
と、言ってタカミチは私の家から出て行った。

▲　カスミ　視点▲

▼　明日菜　視点▼

「これでよし…」

アリカ宛の手紙を出して、私は自分の部屋へと戻る。
手紙の内容は、もちろんネギの事。
本当はナギにも送りたかったけど、どこにいるかわからないし…まぁ、アリカから連絡が行くでしょう。

「明日菜さん！」

部屋に戻ると、ネギが慌てながら私の方へ来た。

「何？」

「ぼ、僕カスミさんと戦うことになりました！　カモくんに相談しようとしたら、何処にも居ないし…僕はどうしたら！」

カスミと戦う……か…。
きっと報復でしょうね……。

「自業自得よ」

「えぇ～」

私の言葉に驚きの声を上げるネギ。
何をそんなに驚いてるんだか……。
まさか…自分がやったことを理解してない？

「ねぇ、ネギ…」

「はい…」

「私は言ったわよ。　カスミは一対一の戦いを申し込めば、それに重んじるって…」

「で、でも相手は吸血鬼で…悪い魔法使いだからって……カモくんが…」

「ッ！！」

ネギの言葉に怒りが頂点を達した。

カモくんが？　自分の行った行動をオコジョが言ったから…僕には責任が無いとでも言う気なの！？

「ネギ！！」

「わっ…うっ」

ネギの襟首を掴み持ち上げる。
苦しそうに顔を歪めるけど知らない。
私は絶対に緩めず、口を開く。

「あんたは1番最低な事をしたわ！」

「ぐ、ぐぇ…」

「木乃香を襲ったのはカスミよ。　茶々丸さんは何をしたって言うの？　カスミの従者だから殺してもいいっての？　オコジョにたぶらかされたとしても、実行したのはあんたでしょ！？　なら責任くらい持ちなさいよ！！」

「で、でも…」

「あんたの父親…ナギはねぇ…馬鹿だったわよ…。　魔法使う時はメモを見て唱えてたし、（旧世界でスクナの時以外は）何処でも魔法を使ってたわ！！　それでも周りには迷惑は掛けてなかった！自分のした事、決めた事には責任を持ってた！！　それに比べあんたは…困った時には魔法。　一般常識は殆ど無し、困った時は副担の南武先生すら頼らない！　南武先生の実力がわからないなら、高畑先生を頼りなさいよ！」

「か、はっ……」

言いたい事を吐き出し終えて、ネギの襟首から手を離す。
ネギは空気を貪るように、息を荒らげる。
私はネギを無視して、部屋を出た。

▲　明日菜　視点▲

▼　三人称　▼

そして、ネギ少年の気持ちは晴れないまま停電の日間近となった。

物語はさらなる悲劇を産むのか……。

はたまた、喜劇を産むか…それを知る者は誰一人として知らない。

▲　三人称　▲

吸血鬼の逆鱗に触れし愚者４（前書き）

いちお、吸血鬼の逆鱗に触れし愚者は終了です！

▼　カスミ　視点▼

ジジイが指定した日。
坊やは、グランドに一人で居た。
まるで、死刑執行される囚人のような顔で…。
まぁ、気持ちはわからんでもない。
頼りになる明日菜は見限り、悪知恵を授けるカモは私が持つ籠の中。
正直、よく逃げなかったな…と褒めてやりたいくらいだ。

「よく一人で来れたな…」

「！！　こ、これは正々堂々の勝負なんですよね？」

一瞬びくつき震える声で、確認を取る坊や。
これで坊やに、実戦を経験させようっていう魂胆なんだろうが…。
こんな生温い実戦で得る経験はあるのか？　と、疑いたくなる。

「ああ、そうだな…。　だがその前に……」

私の肯定の言葉に、ホッと安心する坊やだが、後に続く言葉にまた硬直する。

そして、坊やに見えるように籠の中を見せる。

「ッ！　カ、カモくん！？」

「アニキィ～～」

ネギの言葉にオコジョが反応し、縋りつくような声を出す。

「カスミさん！　カモくんを離して下さい！！」

「ほら…」

坊やの言葉通り、籠から手を離す。

籠はオコジョが入ったまま、下へと落下していく。

坊やが慌てて駆け寄ろうとするが……

「ッ！！　カスミさん！！」

魔力の反応を感じたのか、私の方を一瞬見る。

私の周りには、無数の魔力スフィアがある。

「断罪の時間だ…」

カモは殺す。

これは、私達三人の総意だ。

《パチンッ》

指を鳴らすと、無数の魔力スフィアは弾丸となって籠を破壊し、逃げる間もなくオコジョを貫いた。

「あ、……ああ……あ……」

眼を限界まで開く坊や。

何が起きたのか、理解したくないのだろう。
眼を逸らしたいだろう。
夢と思って、現実から逃げたいだろう。

だが……

「世の中とは、上手くいかないものだな？　ネギ先生…」

瞬間、坊やの魔力が吹き荒れ、私に憎悪の眼を向ける。
まぁ、目の前で親友を殺した相手が居るんだ…当然と言えば当然だろう…。
だがな？　私にもその眼で、貴様を見る資格はあるぞ。

「なんで、カモくんを殺したんですか？」

「なんで？　ならなんで茶々丸を壊したんだ？」

私の言葉に、坊やの眼から力が揺らぐ。
罪悪感は少しはあったのか…。
まぁ、無ければくびり殺すがな……。

「貴女が悪い事をしたから…」

「なら私を襲撃すればいい。　あの夜、茶々丸はお前に危害を加えたか？　茶々丸がいつ一般人に、危害を加えたんだ？」

「そ、それは……」

吹き荒れた魔力も、徐々にそよ風となっていく。
私はそれを見て、段々やる気が無くなってきた。

だが、怒りはまだ収まらない。
オコジョを殺したのに、収まってはくれない。

「何故…オコジョを殺した？　と聞いたな…では問おう、何故茶々丸を破壊した…」

「ちゃ、茶々丸さんは貴女の従者で、ロボットだし…」

「ああ、茶々丸はロボットだな…修理すれば次の日には登校出来る……」

確かに茶々丸は修理し終え、登校出来る状態だったが…あのあと、私は茶々丸に命令を下した。
それは……。

「だが、茶々丸の破損状況が悪くてな…」

麻帆良学園を退学。

「メモリーが生きてれば、別の駆体に入れるだけで良かったんだが…そのメモリーが破壊されて……修復不可…一から作っても、メモリーのバックアップはない…」

死亡による退学。

「つまり、３－Ａが知る茶々丸は死んだ」

あの日から、茶々丸の机の上に花が添えられている。
いつも明るかったクラスは暗く沈み。
他の教師達も、茶々丸の名を上げる事もしばしば…。

まぁ、当の本人は超包子で働いてるがな…。
認識疎外の魔法で、気付かれる事はない…。

そして、坊やは私の言葉に衝撃を受け、手から杖を落とし呆然としていた。

「さて、問答はもういいな？」

「……え？」

「何を惚けた顔をしてる？　今から私と戦うんだろ？」

「あ…」

私の言葉に、此処へ来た当初の目的を思い出したらしい。

「さぁ、構えろ…」

「ぼ、僕は……」

「オコジョの仇が取れるかも知れんぞ…」

私の一言で、先程の怒りを思い出したのだろう。
魔力が高まったのを確認した。
しかし、それだけじゃあつまらん…。
坊やの本当の力を見てみたい。

なら……

「そういえば…」

やることは一つ。

「ネギ先生の故郷は悪魔の襲撃で、村人の殆どは石にされたらしいな？　吸血鬼の私を倒せば…悪魔にも勝てるんじゃないか？」

奴の古傷に触れる事。

「ッ！！　……行きます」

私の言葉を聞いて、坊やの眼に強い意志が篭められ、杖を手に呪文を唱えだした。

「ラス・テル・マ・スキルマギステル…光の精霊１１柱！　集い来たりて、敵を射て！！　魔法の射手！！　連弾・光の１１矢！！」

「レク・リク・ラク・ライネック…闇の精霊１１柱…集い来たりて、敵を射て…魔法の射手！　連弾・闇の１１矢」

坊やと対なす属性を同数放ち、相殺させる。

まだまだ…

「レク・リク・ラク・ライネック…闇と闇交わりて、闇より暗き漆黒の精霊３０柱…集い来たりて、敵を穿て…魔法の射手！　連弾・漆黒の３０矢」

さらに、闇の上位属性の漆黒の射手を３０追撃で放つ。

「くっ…ラス・テル・マ・スキルマギステル…風楯！」

風属性による楯で、防ごうとするが私が使う闇の上位属性の前では…

「紙屑同然だよ…」

《ズガガガガガガガガガガ…ン》

「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁッ！」

漆黒の矢は坊やを容赦無く襲い、吹き飛ばした。

坊やはすかさず、杖で空へと上がり戦闘は地上から空へと移る。

▲　カスミ　視点▲

▼　三人称　▼

カスミ達が戦ってる最中、その戦闘場所から遠く離れた場所に二つの影があった。

「手加減しとるな？」

「まぁ、茶々丸生き返ったし、カモを断罪したし…もう満足したんじゃね？」

貴史と薫である。

二人は、とある理由である人物を探しながら、カスミとネギの戦いを見ていた。

「にしても、ホンマにおるん？」

「俺の勘だよ…とにかく探していなけりゃいいんだ…」

「まぁ、部屋におらんらしいからなぁ…」

「とにかく、探すぞ」

「わかった…」

彼らが探してるのははたして……。
そして、貴史達が動いてる事を知らないカスミは、ネギとの戦いに決着を着けるところだった。

▲　三人称　▲

▼　カスミ　視点▼

「ラス・テル・マ・スキルマギステル…闇夜切り裂く、一条の光！
我が手に宿りて、敵を喰らえ！！　白き雷！！！」

「レク・リク・ラク・ライネック…白夜切り進む、一条の闇…我が手に宿りて、敵を穿て！　黒き氷！！」

坊やの手から白い雷放たれ、私の手から鋭く尖った黒い氷が放たれる。

本来なら雷と氷。
氷が撃ち負けるが、そこは六百年生きてきた私。
技術と魔力の力技で、雷に撃ち勝つ。

「あぐっ！！」

氷は坊やの肩をえぐり、貫く。
そして、杖から落ち橋の上に倒れた。

「まぁ、魔法学園首席卒業ならこの程度か…慣れない教師生活に休まる事のない最終課題…そして、私との戦闘…学園を卒業して以来…魔法を一つでも覚えたか？　まさか、そのままでやっていけるとでも思ったか？」

「う、うぅ…」

「見せてみろ！！　坊やの本気の一撃を！！」

坊やは立ち上がり、ナギの杖を持って唱える。
自身が持ちうる最強の切り札を…。

「ラス・テル・マ・スキルマギステル…来れ雷精、風精、光の精！！」

何…原作では雷と風の精のはずだぞ？　まぁいい、何をするか…これで見極める。

「レク・リク・ラク・ライネック…来れ黒精、炎精、風の精…」

「ッ！！　雷を纏いて、吹きすさべ南洋の嵐…闇を明るく照らす閃

光！！」

私が出す魔法に一瞬驚くも、呪文を唱え続ける坊や。

それでいい…。

「漆黒に染まりて、燃え上がれ灼熱の業火…荒れ狂う東方の嵐！」

さぁ、来い！　ネギ・スプリングフィールド！！！

「「雷神の暴風（漆黒の炎嵐）！！！」」

闇を掻き消す程の光線を中心に、雷を纏う暴風が私に目掛けて来る。

そして、私の黒き炎を纏った黒き嵐がネギの魔法と衝突した。

互いの魔法が押し合い、ネギと私の間を何往復もする。

周りは魔法の衝突の衝撃により、どんどんボロボロになっていく。

永遠と続くと思われた魔法の衝突は、原作のようにネギのくしゃみによって、私の魔法は掻き消えた。

それに備えて、無詠唱による漆黒の炎嵐を放とうとした時、異変が起きた。

突然、私の中の魔力が抑えられ発動体制だった魔法が消えて、私は暴風を直に喰らった。

そう……魔法障壁すら、消えていたのだ…。

そこからは記憶が曖昧だ…。

だが、一つだけ覚えてる事は……。

「お疲れ様です。　マイマスター」

私のかわいい従者の労いの言葉だった。

▲　カスミ　視点▲

――おまけ――

▼　クロナ　視点▼

「着いたぜよ」

「ありがとうございます♪　馬車さん」

まさか本当にタクシーで、魔法世界に行けるとは…流石馬車さん…
と言ったところでしょうか？

「お客様が行きたいとこへ何処へなりと…が信条…」

「決して止まらず…がモットーなんですよね？」

何度も聞いたそのフレーズを言う…。
正直、うざかったです。

「そう言うことじゃき…」

「では、帰りもまた電話しますので」

「了解ぜよ…」

そう言って、馬車さんはタクシーを走らせ去って行った。
まさか…あのまま旧世界に戻るのでしょうか。
若干気になりますが……まぁ、いいでしょう。

「さて、私は私の仕事をしましょうか…」

完全なる世界、あなた方は私を楽しませてくれますか？

▲　クロナ　視点▲

剣崎貴史と山瀬薫の逆鱗に触れし者（前書き）

３－Ａの生徒がどんどん減っていく…。
なんとかせねば！！

でも最初っから決まってた事なんだよね…

貴史「はぁ…（呆れ）」

悲しいけどこれ……二次創作なのよね。

剣崎貴史と山瀬薫の逆鱗に触れし者

▼　貴史　視点▼

俺と薫がある人物を探してると、橋の方からカスミの魔力が下がり、ネギ少年の魔法が天を貫いた。

「「！！」」

「貴史！！」

「わかってる！　見つけた…屋上だ！！」

薫の言葉に応えるように、屋上へ向かう。

そう、カスミの魔力が下がる少し前、屋上で微弱な魔力反応を感じたのだ。

そして、屋上。

予想通りというか何と言うか…。

本来なら、居てはいけない人物が屋上に居た。

「これで、イレギュラーはあと二人…か」

屋上で、確認するように呟く人影。

イレギュラー…この言葉を聞いて完全に理解した。
奴は俺達に近しい人種。

そしてイレギュラーを極端に嫌い、原作を忠実に進めたがる奴。

転生者……いや、この場合は……。

「一般生徒は部屋で、大人しくお寝んねの時間だぜ……村上夏美」

憑依者。

「！！　な、南武先生…」

声を掛けた瞬間、驚き振り返って俺を見る村上。
その眼は若干焦りが見える。
まぁ、当然だろうな…見つかるはずないと思ってたら見付かったんだし…。

「ホンマにおったな…」

「近衛薫……さん…」

薫も後から来て、村上と対峙する。

「チェックメイトって奴だ…」

「な、なんの事ですか？」

「さっきの呟き…聞こえてないとでも？」

「くっ……」

俺の言葉に、顔を歪ませる村上。

そして……

「……達が……から…」

「「……」」

「お前達が居るからいけない!!　シナリオを!　原作を無視する貴様らが居るからいけない!!　何故世界の意のままに任せない!?　何故世界の流れを変える!?　私は多くの原作維持派の代弁者だぞ!!　私の行動は世界の意志だぁぁあああ!!」

世界の流れ……か…

「正直なぁ…」

「世界の意志やの…原作やの…」

俺の言葉を繋げるように、薫が口を開く。

そして、

「「そんなの、どーでもいい」」

俺達の声は重なり合う。

そう、どうでもいいんだ…。

俺達は三人で楽しくやってればいい。

そして、出会った仲間が居ればそれでいい。

「どーでも……いい、だと…」

「だいたいよ…この世界は原作と完全に乖離してんだ…どうしようもないだろ？」

「……ふっ…ふはははは…その為に私は神様から【脚本】を貰ったのさ」

そう言って、ある一冊の本を掲げる。

その本に篭められた魔力は凄まじく、以前戦った魔神の魔力を凌駕していた。

しかし……

「やからなんや？」

ただの魔法の本。

俺達に見付かった時点で、終わりだ。

「そいつで何するかわからんが、魔法を発動する前にボコるだけだ」

「君達はこの本の恐ろしさを知らない。　私は今まで多くのイレギュラーに出会いこれで消してきた。　当然、君達レベルのチートもね……」

結構な自信だな…。

「かくして、憑依者の眼の前の転生者は生前の頃へと戻るのであっ

た…」

村上が本を持って、意味不明な文章を口にする。
すると本が光り、俺達から力が消える感覚と、姿が転生前へと戻った。

「なるほど……つまり俺達は転生前に戻ったのか…」

「これで、お前らは雑魚同然さ！」

やれやれ、しょうがない雑魚だ。
たかだか、生前前に戻しただけで勝ち誇るとは…。

「救いようがないとはこの事か…」

「可哀相だよ…貴史」

薫が割り込んで来るが、事実なものはしょうがない。

「なん、だよ…お前ら……なんでそんな余裕なんだよ……あぁ、そうか…いまだ能力があると思っ《スッ》て、るん……だ…れ？」

村上が喋ってる途中、現状最速で薫が村上を一刀両断。
そして、上半身と下半身が滑る。

「言い忘れてたけど…僕……生前もチートマンで通ってたんだ……」

「俺は普通だったんだけどな……」

「普通に過ごしてくれたら、見逃してやったんだけど…」

「お前はやっちゃあいけない事をした…」

「なん、で……」

ゆっくりと滑る村上の上半身は、見ていて滑稽だ。
完全に落ちるまで、意識はありちゃんと生きてるのだから…。

「「カスミに手を出した時点で死刑」」

薫と一緒に親指を立てて、そのまま親指を下へ向け地獄へ落ちろのポーズをする。
それに合わせるように、村上の上半身は落ち絶命した。

村上が死んだ事で、脚本とやらは消えて俺達も転生後の姿に戻る。

「あ、戻った…」

「俺やる事なかったなぁ…」

「まぁまぁ…ええやん」

「はぁ…」とため息着きつつ、カスミの家へ向かった。

そういや、村上の事どうすっかなぁ……。
引越しと言う事にするか？　暗示とかでごまかせるだろうし……。
いやー世の中便利だわ。

▲　貴史　視点▲

皆さんに悲しいお知らせがあります。（前書き）

ＧＢキャラまたまた登場！

皆さんに悲しいお知らせがあります。

▼　貴史　視点▼

「えー、皆さんに悲しいお知らせがあります」

朝、学校に通勤して３－Ａでの朝のＨＲでの事。
ネギ少年はどこかすっきりとしたそれでいて、暗い表情という物凄く器用な事（表情）をしながら、３－Ａ全員に重大な発表をした。

「皆さんの中に、もうすでにご存知の方が居ると思いますが、村上夏美さんは転校しました…」

少年の悲しいお知らせに、ざわめくクラス達。
事前に知っていたのは、寮の部屋が同室だった那波千鶴と、雪広あやかだ。
事前と言っても昨夜寝てる時に、暗示をかけただけなんだがな…。

カスミの作った人形で、代わりを用意しようという意見があったがやめた。
人形ごときで、絆を維持したくなかったしな…。
まぁ、暗示をかけるのも許容範囲ぎりぎりの行いだ。

まぁ、ダークネスな話は此処までにして、授業でもするか…。

テクテクと保健室に行き、扉を開ける。

「工藤センセー…頭痛と腹痛と身体の節々に強烈な痛みが」

「黙れ！　いけしゃあしゃあと嘘をつくな！！　寝ようと、す・る・な！！！」

ベットに寝ようとしたら、布団を剥がれてたたき起こされた。

工藤卑弥呼…ゲットバッカーズでは運び屋で通称レディ・ポイズン、7つの毒香水を操る魔女という通り名を持つ。

この世界では、麻帆良学園女子中等部の保健室の先生をしている。

ちなみに、俺様の初恋相手だぜ。

フラれたがな！！　何がいけなかったのか今でも疑問に思う。

「あんたがセクハラするからよ…」

「心を読むなよ…」

「口に出てたわよ」

「え、マジ？　うわっハズッ…」

「はぁ、一時間だけならいいわよ…」

俺が頭を抱えて恥ずかしがってたら、ため息着いきながら滞在許可がおりた。

こういう所が工藤卑弥呼の魅力というかなんというか…。

「素直じゃねぇな」

「やっぱ帰れ…」

酷い奴だ。

剥かれたベットの隣へ行こうとしたら、顔面に膝がめり込んだ。

「っ……てえな！　あにしやがる！！」

「そこはさっき私が寝ていた場所なのよ！！　セクハラ雲丹魔人が潜るといろいろ寒気がするわ！」

「ざけんな！！」

「大声を出す元気があるなら追い出すわよ」

「静かにさっきのベットで寝てまーす」

ひでぇと思わね？　いつもこうなるとすぐ追い出すわよだし…お陰俺が仕方なく…そう、仕方なく折れてやってんだぞ？

「あ、そうだ筧先生が…」

やば…寝たふり寝たふりっと……。

「針マッサージの代金を払えって」

「ぐー…ぐー…」

「……はぁ…」

卑弥呼のため息が聞こえるが関係ない！　今は金がねぇんだ…。

昼休み。

「ふわぁ～…よく寝た…」

「それはそれはよかったわね…」

ベットから起きると、卑弥呼がジト目で睨んでくる。

……はて？　何かしたか？

「今何時だと思ってんのよ…」

「？　何時って…あれから一時間だろ？」

何を言ってんだ？　こいつは…。

時計を見ると、俺は石のように固まった。

「午後１２時３０分……今は昼休みよ」

俺が寝たのは朝のＨＲ直後だから、完全に午前は潰れたな…。

「やっべ…どうすっかなぁ…午後はともかく午前の授業が……」

「私が代わりに課題出して自習って言っといたわよ…」

「……サンキュー…」

「いつもの事だしいいわ…」

卑弥呼のこういう所が、好きなんだよなぁ…。
面倒見が良いというか…。

「はやく学食行かないと昼ご飯食べれないって何よ？　その手は…」

「いや、弁当」

「食べたわよ」

なん……だと……？　この俺を差し置いて食べただと？

「何よ…その顔……」

くっ…奴はなんて非道な奴なんだ……。
膝と手を床に着け、四つん這いな恰好してると保健室の扉が開いた。

「此処に居たか…」

「貴史～昼ご飯食べよ～」

「いい加減腹が減った…」

「もうすぐの辛抱です。　エヴァンジェリン様…」

入ってきたのは薫、カスミ、エヴァ、茶々丸だった。

「ちょうどよかった…さぁ、食おうぜ」

というわけで、保健室で昼飯。
そして、時間も少なくなり俺達は別れる事に…。

「さて、俺も午後の授業はやるか…またな卑弥呼」

「またね」

保健室を出て授業の準備…。

授業カット！

授業も終わり、職員室でまったりしてると新田先生が来て「学園長が呼でますよ」と言われた。

午前の授業の事か？　と考えて学園長室へと向かうと…。

「え…修学旅行の京都行きはが中止～～！？」

扉越しに、少年の叫び声が響いた。

あ、そうか…修学旅行か……。
問題は……

近衛　木乃香…原作とは違い魔法をしていて、今では薫と並ぶ最高峰の陰陽師。

桜咲　刹那…原作よりも遥かに強く、薫を除けば麻帆良学園最強の

神鳴流剣士。

近衛　薫…ＢＬＥＡＣＨの技をほぼ使え、雷帝の力を宿しさらには、烈火の炎に出て来る花菱　烈火の炎術が使える。
さらには陰陽術、神鳴流にも手を出して最強。

カスミやエヴァが最初っから居て、原作みたいに後手に回ることなく、最初っから全力で迎撃出来る。
俺も居るし……あれ？　俺はともかくカスミとかエヴァは名が売れてるから過剰戦力…そりゃあ先方も嫌がるよな。

もし俺があっち側でも、受け入れたかぁねぇし…。

「わかりました。　任せて下さい、学園長先生」

っと、考え事をしてたら少年と学園長の話が、終わろうとしてるし…。
入るか…。

「失礼しまーす」

「あ、…どうも」

「遅かったのぅ…」

「まぁまぁ…来てやっただけ奇跡だと思え」

「ワシ……学園長なんじゃが…」

俺の敬意すらない言葉に、落ち込む学園長。

まぁ、そこは仕方ない。
だって威厳ないし……。
まぁ、こんな事今に始まった事でもなし。
さっさと用件を聞く事にした。

「んで、用件はなんだよ」

「んむ、実はの…」

「「関西呪術協会に渡す新書をネギくんに託したので、ネギくんのサポートを頼みたいんじゃが」と言う確率１２５％」

学園長の言葉をハモる形で言うと、むぅ……と学園長が唸った。

「やってもらえんじゃろうか？」

少年のサポート…。
というか子供に新書渡すとか…おいおい、母親が子供に頼むお使いじゃないんだぜ？　正直勘弁願いたい。
と、まぁ思っていても村上の件での借りがあるし…しゃあねぇか…。

「別にサポートするならいいが…ネギ先生は吸血鬼事件の時すら頼らなかった俺を、先の事件より重大な任務で俺のサポートに頼るか心配だ…」

「そ、そんなことは…」

少年が俺の言葉を否定するような声を上げる……が…

「ない！　と言い切れるか？」

「うぅ……」

少し追い詰めるように言うと、顔を俯かせて黙り込んだ。

「まぁ、俺は俺で自主的にサポートをしてやるよ…んじゃ…」

落ち込んだ少年と、冷や汗を掻きまくってる学園長を残して、俺は立ち去った。

▲　貴史　視点▲

皆さんに悲しいお知らせがあります。（後書き）

ＧＢキャラのこの世界での役割。

王（ワン）　波児（ポール）
喫茶店Ｈｏｎｋｙ　Ｔｏｎｋのマスター。

馬車（まぐるま）　號造（ごうぞう）
タクシーの運転手。

工藤（くどう）　卑弥呼（ひみこ）
麻帆良学園女子中等部の保健医。

筧（かけい）　十兵衛（じゅうべえ）
麻帆良にある病院の医師。
針によるツボマッサージもしてくれたりする。

他の人達は今後の登場に期待。

再会する蛇使い座（アクスレピオス）を宿す者（前書き）

今回は烈火様の魔法少女リリカルなのは～少女達の未来を奪りかえせ！～の主人公、神楽　蛮くんとのコラボです。

再会する蛇使い座（アクスレピオス）を宿す者

▼　貴史　視点▼

学園長から、少年をサポートするようにと、言われて次の日。
俺は今、修学旅行の荷造りに勤しんでた。

「衣類はこれでよし…あとは…」

衣類と言ってもスーツ。
まぁ、教職だから仕方ないだろうけど…。
あとは、仕事に使うものを入れて終了かな…。

《パックリ》

「ん？」

かなり至近距離で何かが開く音がして、そちらを振り向くと、雲丹みたいなものが眼に写った……と思ったら、針（？）みたいな物が眼にダイレクトアタックした。

感触的に柔らかく、一本の針はなんというか筆みたいに、小さな毛が纏まってる感じだった…だが痛くないと言えば、目茶苦茶痛い。

「いっ…つ……」

「は？」

俺の声に反応して返ってきた声はどこか聞き覚えのある声で、どうかしたか?的な感情の声だった。

「おう、こら雲丹坊主…テメェ俺様に負けたからって…んなしょぼい仕返ししてんじゃねぇよ!!」

ガシガシと烈火様が書いてらっしゃる【魔法少女リリカルなのは～少女達の未来を奪りかえせ!～】の主人公、神楽(かぐら)蛮(ばん)の頭を乱して(見た目は既に爆発してるから乱れてるけど…)、頭を掴んで潰れない程度に絞める。

「あだだだだだ…ちょ、ギ、ギブギブギブ…」

「却下だ!　あと20分はこうな…妨害すんなら一回につき5分追加」

「ざけんなっ!」

蛮は腕を振って衝撃波を出すが、衝撃波ごときで俺からは逃れられん!

フハハハハ…さぁ5分増えた。

何分増えるか試すのもいいかな?

▲　貴史　視点▲

▼　蛮　視点▼

貴史によって、俺の頭は一時間程痛め付けられた。

抵抗しようにも動いた瞬間、頭を強く絞められ抵抗する前に防がれ…さらに絞められる時間は増えるという悪循環。

流石は貴史…容赦がない！！

「んで？　わざわざ作品の壁を越えて来た理由は？」

メタ発言…。

…これが秋代さん作クオリティー…なのか？

「お前の考えもアウトな…メタだぜ。　で、何しに来た？」

貴史のツッコミは、この際置いといて……。

「前門のなのは、後門のユーノから逃げてきた」

奴らは、眼と息遣いと思考がやばいからなぁ…。

特になのはは、以前よりも（病んでる性格が）進化してるからな…。

ユーノも、なのはに植え付けられた女性の恐怖から逃げるように、やばい方へ目覚めたし…。

「このまま帰れ」

「なんでだよ！？」

こいつ！　状況も知らずに……。

「なんつーか…人の不幸は幸せ味って言うし？」

「蜜の味だからな!?　つか性格最悪だったんだな!?」

前会った時の、バトマニで爽やかな性格はどこ行った!?

「基本は変わってないぞ」

「マジで!?」

いや、もうなんつーか……マジで?　これしか考えられねぇ…。

▲　蛮　視点▲

▼　貴史　視点▼

さてさてあれから蛮を落ち着かせて、俺は蛮に麻帆良を案内する事にした。

やることないしな…。

「此処が麻帆良病院…筧　十兵衛が居たりする」

「本物!?」

「針使うし……平行世界の筧じゃね?」

「ん?　ちょうどよかった。　おい、南武」

「やべ…」

蛮に十兵衛の事を話してたら本人が登場してしまったので、とりあえず逃げる事にした。

「あ、待て」

「筧先生！　患者さんの容態が！！」

「む、すぐ行こう」

逃げる俺を追おうとした直後、患者の容態が急変したのだろう。
報告しに来た看護師と十兵衛は、若干早歩きで病院の中に戻った。

「なぁ…」

「ん？」

さっきまで黙っていた蛮が、俺に質問してきた。

「貴史って怪我しても治るよな？」

「精神的に来るもんがあってなー」

「そうか…それと」

「まだなんかあんの？」

いや、質問されたの今のが最初だけど…。

「あの看護師さん！　春木だよなァ！！」

……名前出すなよ…。
最近、ＧＢキャラがこの世界を占領してるみたいに見られてんだぞ？　名前出したら説明しないといけないだろ？
「ＧＢキャラの四木族の一人、癒の春木の春木（はるき）　薫流（かおる）さんだよな？」
説明しちゃったよ……。
まぁ、手間が省けて問題無し。
「なんで貴史の世界に、筧　十兵衛やら春木　薫流という魅力的な方達が…」
「お前が居る世界にも居ると思うぞ？　それこそお前の居る世界は無数にある…案外管理局に危険視されてる世界に居そうだよな…」
蛮は考え込むように俯いた。
一応、俺の後を追ってるから、そのまま麻帆良都市の案内を続ける。
公園では――。
「土管がな？　どっかんどっかん言いながら爆発してまんねん！！」
『……』
「え、えみやん…子供達の眼が厳しい…」
「耐えるんや！　あもやん！！　あもやんのギャグは最高やで！！」

「えみやん…」

「あもやん…」

見つめ合う馬鹿二人。
まぁ、これはいつもの事だから放っておこう。
凍り付いた蛮を引きずって、次に行ったのは……。

タクシー会社ーーー。

……んだよ？　その眼は？　何故か来てしまったんだよ。

「お、どっか行きたい場所があるのか？」

そして、なんでコイツいんの？
俺らを出迎えたのは馬車のおっさん。

「いつ戻ってきたんだよ？」

「昨日の朝ぜよ」

規格外だせ……。
この場合、馬車のおっさんが規格外なのか…タクシーが規格外なのか……。

「そういや…このタクシー他の人が使ったりするのか？」

一応聞いてみよ。

「そうじゃが？」

馬車のおっさんが規格外決定だな…。

「そうか…んじゃ…」

「乗らねぇの！？」

おいおい、なんつー事言うんだコイツは…。
運転手が誰かわかってる？　馬車のおっさんよ？　ミスターノーブレーキだぜ？　クー○ーの兄貴よりやばいぞ？（ク○ガーの兄貴は危なくなればブレーキを踏むが、馬車のおっさんはノーブレーキ）
吐きたくなきゃあ止めとけ。

「あの…眼で語んの勘弁…言葉よりダイレクトに伝わってくるから」

俺の言いたい事がわかったのか、蛮は若干…いや、おもいっきり肩を落とす。

ワリィな蛮…俺は馬車のおっさんが運転する乗り物だけは、全面的に拒否するぜ！！

馬車のおっさんと別れ、次は……。

喫茶店Ｈｏｎｋｙ　Ｔｏｎｋ－－－。

「いらっしゃい！」

「波児さんだ!?　スゲー本物だー」

今まで落ち込んでた蛮は、波児を見ておおはしゃぎ。
ああして見ると、歳相応のガキに見えるな…。

「あー…俺は君に会った事あったかな？」

「ない！」

「だ、だよねー……」

ある作品のファンなら、お前に会えて嬉しいんだよ…波児。

と、まぁ…んな喜びなんか波児がわかるわけないか……。

「一度でいいから、波児さんが容れた珈琲をカウンターで、飲みたかったんだ!!」

「!!　ハハッそうかい？　ありがとう。　しかし、俺の珈琲をカウンターで、か」

そう言って、俺の方を見る。

「ん？」

それを見た蛮は、なんの事かわからずに頭に、はてなを浮かべる。

「調度…お前が座ってるカウンター席で、年甲斐なくはしゃいでた俺も、言ったんだよ…」

「成る程…」

「それよりいいのか？　貴史の指定席だろ？」

「えっマジ？」

「別に構いやしねぇよ…」

波児に無理を言ってもらった席だし…。
それに……。
ガキが凹んでる姿は、あんま見たかねぇし…。

「よかったな？　あ、俺の事は波児でいいよ…さんは要らないからさ」

「うん！　わかった波児！　俺は神楽蛮だ！！　蛮でいいぜ」

「わかったよ…蛮。　貴史も飲んでくだろ？」

「まぁな…」

「じゃあ…」

蛮と俺は互いを横で見合い。

「二人はどんな珈琲をお望みで？」

自分達の考えが同じ事を確認して、不敵に笑う。

「「もち、ブルマンで！」」

▲貴史　視点▲

再会する蛇使い座（アクスレピオス）を宿す者（後書き）

神楽蛮くんをもっと知りたいって方は、烈火様のマイページへＧＯ！！

次回は秋桜様のキャラとコラボしちゃいます！

再会は意外と早い（前書き）

予告通り…秋桜様の魔法先生ネギま！～Ｋａｋｉｔｕｂａｔａ～とコラボです。

ただ秋桜様がこれはダメと言われたら即座に消して、新たに書き直します。

再会は意外と早い

▼　カスミ　視点▼

修学旅行の荷造りが終わり、余った時間を貴史で費やそうと考えた私と薫は、貴史の住んでる教職の寮へ向かったが、部屋には貴史が居なかった。

まぁ、居ない者は仕方ないと思い。
これから薫と何をしようかと考えた結果……作品の壁を越える事にした。

だが…作品の壁を越えると言っても、私と薫が出会った者は数が限られてくる。
しかし、少ない人数と言えど全て回るには時間がない。
そこで、くじで決める事にした。

「それじゃあ引くえ？」

「ああ…」

引くのは薫だがな…。

「ジャーン！　ええと…誰かなぁ～」

紙を広げる薫の横から覗き込む。

「ん…なんだ最近会ったばかりだぞ」

「まぁ、ええやん」

「そうだな」

紙に書かれた名前は、アサ。

▲　カスミ　視点▲

▼　エリカ（アサ）　視点▼

やっほー。
元気～？　私？　私は元気だよ。
エヴァちゃんとネギの勝負も終わったしね。

「さてと、何しようかなぁ」

んで、今はテキトーに麻帆良を歩いてるんだけど、やる事ないんだよねー。

「！！」

突然、上空に膨大な魔力反応を感じて上を見ると、パックリと空が裂けていた。

「な、何？」

「うおー！！　空に出たー！！」

「せやからウチがやるって言ったんやー！！　カスミの不幸体質ー！！」

「は？」

裂け目を警戒して見てたら、最近会った事のある二人が落ちて来た。

そして、森の中に……。

「……アレって…カスミと鬼？　いや…この魔力は薫かな？　と、とにかく助けに行かないと…」

私と同等かそれ以上の実力者が、空から降ってきても大丈夫な気もするけど…まぁ、一緒に空を守るって誓い合った仲だしね……。

▲　エリカ（アサ）　視点▲

▼　薫　視点▼

どうも～。

近衛　薫や。

あのな？　今カスミの魔法で、別世界に飛んだんやけど…出た先が地上やなく空やったんよ。

そんで、下に待ち構えてたのが大量の木。

森に落ちたんやねー。

服が枝とかに引っ掻け、ビリビリに破けて…なんやエロい恰好に…

……。

「うぅ～酷い目にあった……」

木の枝から、なんとか脱出したカスミが全裸で、ウチの傍へ来る。

全裸でな…。

重要な事やから二回言うたわ。

来る前までは、確かに服を着とったはずなんやけど…。

まぁ、そんな事より……

「酷い目にあったんわこっちや！！　カスミがやると、何かしら不幸事が起こるからウチがやる言うたのに！！　無理矢理やりよって！！」

「今日はイケる気がしたんだ！」

「どっから来るんや！？　そないな自信！？　てか、最初は突っ込まんかったけどもうええか？　突っ込んだる！！　服や下着はどないした！？」

「ん…」

私のツッコミにカスミは左手を胸に、右手を上に刺した。

翻訳するんなら…自信は胸から、服は上って事かいな？

上を見ると、枝に破れた服に下着。

「つまり、脱いだやなく…破れて脱げた？」

うんうんと、ウチの言葉を肯定するカスミ。

……はぁ。

さてさて、カスミと漫才しとる内に麻帆良学園の魔法関係者に、囲まれたウチらやけど……どないしよう。

辺りを見渡せば、ガンドル組やマフィアさん（神多羅木）、シスター　シャークティに葛葉　刀子、真ん丸先生（弐集院　光）、そして裕奈の父親の明石教授までおった…。

幸い、虚の仮面を付けてるから顔はバレんから安心やし…。

「空から堂々と侵入とはね…」

というか……おっさんらカスミを見すぎやろ!!　これ、セクハラで訴えたら勝てるんやないやろうか？　あ、その前に不法侵入でウチらが負けるか…。

「いつまで見てる気だ？　変態共…まさか欲情でもしたか？」

「ば、バカバカしい…君達が何か仕出かさないか監視をしてるのだよ…」

ガンドルさんが言い訳じみた事を言うとるが、説得力が全くない。

とりあえず…

「やろうか？」

「だな…」

『ッ！！』

ウチらが魔力を開放すると同時に、警戒を強めるけど…。

《ドサドサドサ…》

「対応が遅い」

ウチらを囲ってた魔法関係者は、一人残らず気絶した。

ウチらがやった事は二つ。

魔力開放と、気当て。

魔力開放に隠すように殺気を、囲んどる連中に当て意識を刈り取っただけや…。

簡単に言うても、結構難しいんやよ。

「あっちゃー遅かったか…」

カスミが連中の記憶を書き換えてると、ウチの背後からアサが現れた。

「やっほー」

「ん…ア……エリカか…」

カスミはアサを見て、本名を言おうとするが一拍置いてエリカと言い直した。

本名、アサ。

現在名乗ってる名前は、エリカ・スプリングフィールド。

アサは紅き翼の一員で、仲間の一人ナギと親友であるアリカ姫の頼みでネギの妹として、ネギを守っているらしい。

と、言うより……

「カスミはいつまで裸でおるん？」

「む、そういえばそうだな…」

カスミは本からカードを一枚取り出し、魔力をカードに篭める。

「神明魔祓の書、防具カード選択…漆黒のドレス」

瞬間、カスミは露出が高めの黒いドレスを着ていた。

ドレスから発せられる魔力を感じたところ、カスミの手製やろうなぁ…。

「うわぁ…凄い魔力…」

エリカもカスミのドレスの魔力を感じ取り、驚いたように呟く。

「私が作った魔法服だからな…」

エッヘンと胸を張り、威張るカスミ。

まぁ、いつまでもこないなとこおったら、やっかいやし移動しようと思う。

「まぁ、とにかくこっから離れようか」

「そうだな…」

「薫……だよね？」

「そうやえ」

誰か来る前に森を出ると、ウチを見ながら、エリカが聞いてきたので仮面をずらして、素顔を覗かせる。

「なんで仮面被ってるの？」

「ウチの世界ならええけど…エリカの世界やと面倒臭い事になるんよ…」

「あ、薫の容姿って」

「そういう事や」

ウチは向こうでは木乃香の姉やから大丈夫やけど、こっちじゃあ混乱の元やしな…。

んで、着いた先は…。

「ん、エリカか……って誰だ？　そいつら」

エヴァの家や。

「私のお客さん」

「カスミ・ヴェネーラだ」

「薫や」

「ほぅ…エリカの客なぁ……おい、そこの仮面…」

なんやろ？

「ん～？」

「素顔を見せろ…家主に対して仮面越しは失礼だろ」

あーそういう事な…。

説明メンドイなぁ～……あ、せや。

「ん～外してみ？」

「面白い……ついて来い！！」

そう言ってエヴァは茶々丸を連れて、地下の方へ向かった。

なんや楽しくなってきたな♪

「ちょっと…エヴァ……て、手加減してね？　薫？」

「ちゃんとするえ」

ウチの言葉に、ホッと胸を撫で降ろすエリカ。
友達想いな子やな～。
「ちょっ…」
エリカの愛くるしさに、ウチは抱き着いて、カスミは頭を撫でる。
エリカは、顔を赤らめあわてふためとるけど離さんえ♪
「エリカに抱き着いてないで、さっさと来い！！」
しばらくそうしてると、エヴァが戻って来た。
中々ウチらが来ないから、来てみたんやね。
かわええなぁ。
しかし、これ以上エヴァを刺激しないように、エヴァについて行く事に…。
まぁ、地下からして予想はしとったけど……着いた先はエヴァの別荘。
「フフフッ…ようこそ…我が別荘へ」
「ケケケケッ」
エヴァはチャチャゼロと茶々丸を、横に連れて待っていた。
茶々丸は一礼し、チャチャゼロはこの後に始まるであろう戦闘に目を輝かせてた。

「勝敗は私が、貴様の仮面を外せたら勝ち」

「なら、ウチは貴女を倒したら勝ちな」

「くっくっくっ…やれるもんならな」

エヴァが言い終えると、チャチャゼロが駆け出して手に持ってるナイフで、切り掛かって来た。
それを軽くいなして避ける。

それをウチの動きを読んだように、茶々丸がロケットデコピンで襲って来る。
ウチは身体を捻ってロケットデコピンをかわし、茶々丸の懐に身体ごと体当たりをする。
そして、茶々丸のこちらへ向かって来る勢いを殺さずに、後ろに回ってたチャチャゼロにぶつけるように投げる。

開けた前方には、詠唱を終えたエヴァが居た。

「なかなか速いが…残念だったな！　闇の吹雪！！」

すかさず宙に、虚と言う字を書く。
すると、一つ目の火竜が現れて火球が出る。

「竜之炎漆式、虚空！！」

闇の吹雪が至近距離まで迫って、直撃するギリギリで破壊光線を放つ。

「何！？」

破壊光線は、闇の吹雪と拮抗せずに押し返した。

「これでも最強クラスなんやえ…」

「くっ…」

エヴァは即座に、破壊光線の射線から逃げる。

すかさず、チャチャ姉妹が後ろから襲い掛かる。

宙に崩の字を書き、無数の火球を出す。

「「！！」」

無数の火球を見て、破壊光線が来ると思ったのか、直ぐさまチャチャ姉妹は距離を取る。

せやけど…

「残念やね…」

これはただの火球弾や！！

無数の火球を、チャチャゼロ達に放つ。

チャチャ姉妹は土煙りと、爆炎に埋もれる。

これで時間は稼げるな…にしても……ん～手加減難しいわ。

貴史って、いつもこんなんやってんのやろうか？

そう…仮面を着けた状態のウチは、洒落にならないくらい強くなっ

とる。
魔力、霊力、気と言ったウチの殆どの力の源は、通常時より３０倍
跳ね上がっとるんや。
いつもの調子で撃てば殺してまう…。
ｃｈｅａｔな転生者なら、全力やってもええって感じやけど……。
「氷神の戦鎚！！」
とと、考え事しとったら氷の塊が上空に……。
「虚空で破壊……いや、此処は……」
ウチは鞘から斬魄刀を抜き、刃の部分に指を添える。
指から血が溢れ、斬魄刀の刀身の血で染める。
「さて、終演と行こうか…」
霊力が血に集まり、空間が震える。
「……王虚の閃光（グラン・レイ・セロ）……０．０００００００００００００００００１％」
ウチが放った閃光は、氷の塊を消し飛ばしエヴァをも飲み込んだ。
「……」
エヴァ（この場合セロ）が飛んでった方を眺めるカスミ。
「……」

エリカは何が起きたか理解が出来ず、呆然として…。

「「……」」

チャチャ姉妹に至っては、カスミと一緒にポカンッと口を開けて、地平線の彼方へ…。

「……こ、こほん…みね撃ちや…」

ウチは小さく咳をして、言い訳がましく告げる。

今無き（距離的に）エヴァと、見学してた皆に向かって。

（（（（みね撃ちって…薫（薫様）（オメェ…））））

四人の心の声を無視して、エヴァが戻ってくるまで建物の中で寛ぐ事に……。

そのあとにエヴァが戻って来て、また一悶着あったけど割愛するな…。

だって時間ないんやもん。

「ん？　そろそろ帰らないと…」

あれ（戦闘）からしばらくして、カスミがそんな事を言い出した。

「あ～もうそんなに立つんや…」

「名残惜しくはあるがな…」

楽しい時間は過ぎるのが、早く感じる言うけどホンマやな…。

「戦闘で時間が大幅に削れたんだ…」

「ねぇ…私とのコラボだよ？　出番これだけ？」

「ごめんなぁ…エリカ…でもまた来るえ」

「次は貴史も連れてくさ…」

「うー…」

まだ不満なのかブーたれるエリカ。

ホンマ…しゃあないなぁ……。

「ん…」

「んんっ！？」

エリカの顎を上げ、唇にキスをする。

エリカは驚いてたが、しばらくすると受け入れた。

「ん…また会えるから…な？」

「うん…」

エリカの言葉を聞いて、ウチはカスミにパスをする。
カスミは戸惑いながらも、エリカに唇を許し口付けをした。
「出血大サービスだ……」
カスミは、懐から神明魔祓の書をエリカに渡し……ってちょい待て！！
それは出血大サービスにも程があるやろ！！
「な、なんだ？　その魔力が篭った本は…」
「魔力がある人間なら、誰でも使える本だよ…」
カスミが使う、全ての魔法の集大成。
『少量』の魔力でも、さらに無詠唱で大魔法を使いたいと思って、二百年の歳月を掛けて作った本。
中にはカードがあり、その一枚一枚は別々の魔法が刻まれている。
原典である【記憶の書】があれば、また新しい神明魔祓の書が作れるらしいけど……。
あまり他者に、与えようとしないカスミが……。
「説明書はこれだ…」
「うん、ありがとう……」
あまりのモノに、エリカが呆然としとる。
説明書を受け取ったのも、あれは無意識やな…。

「じゃあな…」

そう言ってそそくさと、次元を裂いてカスミは帰った。

「あー…まぁ、またな」

ウチもカスミを追うように、ウチらの麻帆良へ帰るのだった。

さて、明日はどーなるかなー。

▲　薫　視点▲

▼　エリカ（アサ）　視点▼

「エリカ……」

「あったかい……」

この本から伝わる温もり……うん、頑張ろう…私も！！

「ところで…私の出番本当にこれだけ？」

▲　エリカ（アサ）　視点▲

再会は意外と早い（後書き）

次もコラボですよー。

アイテムクリエイターと三人の転生者～貴史Ｓｉｄｅ～（前書き）

今回は竜華零様の魔法先生ネギま～とある妹の転生物語～とコラボです。

今回は竜華零様がアリアＳｉｄｅを、私が貴史Ｓｉｄｅを書いてます。

※片方だけでなく、両方見る事をオススメします！

アイテムクリエイターと三人の転生者～貴史Ｓｉｄｅ～

▼　貴史　視点▼

夜ー一。
俺は現在、カスミとエヴァ、茶々丸と共に麻帆良の警備にあたっていた。

「暇だなぁ…」

「そうだな…」

たいていカスミとの警備は、侵入者排除に忙しい事が多い。
それはカスミの不幸体質のせいで、普段の数十倍は侵入者が出るからだ。

しかし、今日はその不幸体質は不発らしい。
侵入者が来る気配がないのだ。

血の気が多いと、自覚してる俺達だから正直に言おう。
侵入者が来んと、暇で暇でしょうがない！　ぶっちゃけ侵入者が来て欲しい。

《カッ！！》

「何！？」

「こいつは！？」

突然、近くの木が輝き出した。
すぐさま、臨戦態勢を取る。
光が収まると、さっきまでと異変は……。

「うっ…うぅ…」

あった。

発光した木の前には、さっきまで居なかった女の子が倒れていた。
宝石剣・ゼルレッチを持って……。

「貴史！」

呆然と見てる俺に向かって、女の子に近付いたカスミが俺の名を呼ぶ。

「どうした？」

「この娘……」

「？」

「めちゃくちゃ可愛いぞ！」

《ズルッ》

何、眼を輝かせて言ってんだ？　こいつは……。

俺はカスミに近付き、倒れてる少女の顔を見る。

「うぅ…アリス……お兄……様…」

アリスお兄様？　ふむ、聞いた事がない名前だ。
まぁ、広い麻帆良だ…。
男でアリスという名の奴も、居るだろうが……。

持ってる物がアレだ…。
明らかに、平行世界から来ましたよ～って感じだしの物だ。

「貴史様、マスター、エヴァンジェリン様……お客様です」

少女について考えてると、茶々丸が辺りを警戒しながら教えてくれた。

「ちっ…これからこいつを……」

「カスミ？」

「なんでもない…」

「ふざけてねぇでやるぞ……たく、次から次へと…」

いきなり現れた少女を背に戦うとか、危険極まりないなぁ……。
不意なんざ喰らわねぇけど、気持ち的に……。

さてさて、侵入者…ってより鬼は何匹だ？

「六千体を確認」

多過ぎね？

「おいおい、んな大量に召喚した術者…アホだろ？　侵入して強盗紛いな事するよりも、組織で任務してたら昇格出来るだろ…」

「いつもの事だろう…」

「勝負と行こうか…南武先生？　より多く敵を倒した方が勝ち……私が勝ったらカスミから距離を置け…」

既に二百体程倒し終えたエヴァが、俺に勝負を持ち掛ける。

ちなみに俺はまだ倒してない。

「まぁ、いいけどよ……」

俺は、返事を返しながら残りの鬼を殲滅する。

「判定…」

既に目に見えた勝敗をカスミに聞く。

茶々丸に任せても良かったが、俺の動きを見る事が出来ないのだ。

「エヴァは２６３体、私は２３０５体、茶々丸は４００体、貴史は３０３２体だ」

「俺様の勝ち～」

「くっ……化け物め！」

ハッ…なんとでも言え…。

さて、あの少女はっと……お？

「あ……」

少女と俺の眼が合う。

ふむ、起きてたか……。

まぁ、とりあえず……

「お嬢ちゃん、おはよう…早速だけど……お嬢ちゃんの名前は？」

名前を聞かないと……な…。

光と共に現れた少女の名前は、アリア・スプリングフィールド。

またスプリングフィールドだよ…。

話を聞く限り、ネギの妹で転生者との事。

んで、こっちに来たのは事故みたいなもんで、帰るには宝石剣の魔力を充填しないといけないらしい。

携帯みたいな宝石剣だな…。

そして、今はカスミの家に向かってる。

本来なら学園長のとこに行って報告しなきゃいかんが……自分達で

対処出来るレベルだし…事後報告だけでいいだろう。
問題が起きたら……だけど……。

「結構歩くんですね…」

カスミにお姫様抱っこされてるアリアが、ぽつりと言葉を漏らした。

「歩いてないだろ…お前は…」

「す、すみません……」

「エヴァ！　意地悪言わない。　アリアちゃんは気絶してたんだから…」

「マスターの言う通りですよ…エヴァンジェリン様」

「むぅ…私に「えぇ～！！」ッ…今度は何だ!?」

エヴァが落ち込むと同時に、アリアが大声を上げた。
全員が「どうした?」的な眼をアリアに向ける。
アリアは、俺達の反応に一瞬戸惑ったがしばらくして、恐る恐る口を開いた。

「一応…確認として聞きたいのですが…」

「何?」

「？」

「何だ？」

「……」

「茶々丸さんのマスターって……」

ＯＫ、把握した。

あの驚きは、茶々丸がエヴァをマスターと言わず、名前を言った事にたいしての驚きだったらしい。

「茶々丸のマスターはカスミだ」

「いろいろあってね」

「そうなんですか……」

俺が詳しく説明してもいいが、正直メンドイからな…。

カスミの家、そして別荘へと着いた俺達は建物の中に入った。

そしてカスミが宝石剣に魔力を充填する事になって、アリアから宝石剣を受け取る。

「……」

「？　どうかしましたか？」

宝石剣を手にしたカスミは眉を歪め、ジーッと宝石剣を見る。

何か異常でもあったのだろうか…。

一向に返事が返ってこないのに焦ったのか、アリアがカスミを揺さぶってる。

「ん？　何？」

「あの…そんなに見てどうかしたんですか？」

「ああ、ただな…これ……所持者の軽い想いで反応、発動するモノみたいだから…勝手に世界移動したりするんだけど、大丈夫かなーって…」

「え〜」

カスミの説明に眼を見開くアリア。

あの様子じゃあ知らなかったと見える。

しかし、勝手に発動する魔法具ってタチ悪いな……。

「で、でも宝石魔法に詳しい人に一度見てもらって修復して…」

「これ…何で造った？」

「ま、魔力です……」

「宝石魔法に詳しい奴が修復したと言ったが…どうやって？」

「制御系に使う宝石をいくつか使ったと聞いて」

アリアの言葉を聞いた瞬間、パンッと乾いた音が響いた。

カスミがアリアを叩いたのだ…。

「え…」

「馬鹿が……魔力で造った物なら最後まで魔力で造れ…純製と魔力製とじゃ違いが出る。　たく、今まで正常発動で良かったが一歩間違ったら大爆発だぞ…」

「あ、すい、ません……」

魔力で造った宝石…。

いかに精巧に造っても、それは魔力だった事に変わりはない。

ギルガメッシュではないが…贋作は贋作。

真作ではない。

偽物と純粋は決して交わらない。

今までは良かったが、これからはわからない。

死ぬ可能性だってあるのだ。

「とにかく…これは基礎として新たにって…二つ同じのは無理だったな…」

そう言ってカスミは奥へと向かった。

アリアも行こうとしたが、俺が行かせない。

「アリアは座ってな」

「でも…」

「カスミなら平気だ…あいつは魔法関係に関しては誰の追随も許さないからな…だから、あの魔法具の危険性も許さない」

「……」

アリアは俯き、心なしか場も暗くなった。

はぁ……励ますのは得意じゃねぇんだよなぁ……。

「やっほーお仕事お疲れー」

静かな空間に薫の声が響いた。

アリアもびっくりして、薫の方を向く。

「お、可愛い子や」

「こ、木乃香さん!?」

即座にアリアに気付いて、抱きしめる薫。

アリアは木乃香似の薫に、戸惑いを隠せずやられ放題。

「うりうりうり～」

頬すりをしたりと、多少擽ったそうにしてるがさっきよりは、アリアの顔が明るくなった。

「ところで薫」

「ん？」

「木乃香と刹那は？」

「木乃香ならせっちゃんを治療してるえ。　せっちゃんはなぁ……やりすぎちゃったテヘッ☆」

コツンッと自分で頭を小突き、チロッと舌を出す薫。

はぁ、またか……。

「か、薫って……」

「ああ、そいつが薫」

「近衛　薫。　木乃香のお姉ちゃんや」

「アリア・スプリングフィールドです」

「やーん。　かわえぇ～」

自己紹介を終え、薫はまたアリアに頬すりをする。

はぁ、まったくカスミといい。

薫といい。

「ところで、なんで最初アリアちゃん落ち込んでたん？」

「それは…」

アリアがさっきの事を説明する。

説明終わり。

「そっかぁ…そんな事があったんかー」

「はい…」

「珍しい事もあるんやね」

薫が俺に向かってそう言うと、アリアは頭上にはてなを浮かべ俺を見る。

薫が言う事ももっとも…。

いくらカスミ好みで可愛い子だろうと、初対面でそんな親切心は見せない。

表では優しいかもしれないが、裏では無関心なのだ。

だから、アリアに取った行動は珍しい。

「カスミはウチらの中では1番冷めとるからなぁ…」

からからと笑いながらアリアに説明する。

本人が後ろに居る事を知らずに…。

「私が冷たい人間と誤解を受けるような言い方は、止めてもらいたいな…」

「うへっ！　カ、カスミ…」

「クックックッ…ちょっと裏で話そうじゃないか…」

直死の魔眼を発動しながら睨み、薫の襟首を掴んで裏に向かった。

「「……」」

そして、取り残される俺とアリア。

「……まぁ、アリアの為に怒ったカスミの優しさだ。　あまり深く考えるな」

「は、はい……」

薫が心配なのか、ちらちらと薫が連れて行かれた先を見る。

要らぬ心配だと思うがな……。

薫とカスミが来るまで、俺達はいろいろと話し合った。

「ええい、離せ！！」

「嫌です！　お師匠様（マスター）！！」

「だから…マスターじゃ…」

ええと、今アリアはカスミに抱き着いてる。
何故かカスミの事を師匠と言いながら…。
何故こうなったか……振り返ってみようと思う。

1、カスミが薫と戻って来て、カスミが（短時間で）造った宝石剣を渡す。

2、自分の為に……とアリアが感激。

3、今に至る。

うむ、まったくわからんな！

しかし、口では嫌がってるが……

「満更でも無さそうやな」

「だな…」

カスミの顔は笑顔だ。
それを見てるアリアもますます……。

「やっぱりカスミ人気やね…」

「……言うな…」

ああ…カスミの人気が羨ましい。

アリアからもらった苺を薫と摘みながら、カスミとアリアの漫才を見た。

しばらくしてようやく落ち着いた……が、アリアはカスミの傍に引っ付いたままだった。

カスミが移動すると、親鳥を追い掛ける雛鳥みたいに、ピヨピヨと着いてくる。

なんつーか見ていて微笑ましいな…。

「だー！！　いつまでついてくるんだ！！」

「お師匠様の技術を知りたいんです！！」

「対価は何を払う？　数千年掛けて得た技術だ…生半可な対価では無理だと知れ！！」

「むむ……」

カスミが実際に費やした時間は、６００年の内数百年だがそこで出て来るのが、今俺達が居る別荘。

本当に便利だよな……これ。

「ううー……」

「……はぁ……私は甘くなったかもな…」

「え？」

唸り続けてるアリアを見て、カスミの方が折れた。
カスミは奥へ行って、ある一冊の本をアリアにって…

「ちょっ…カスミ!?」

「そいつは…記憶の書だろ!?」

記憶の書。
それはカスミの戦術理論。
魔法知識。
魔法具知識などのカスミの全てとも言える本。
そして神明魔祓の書の原典、俺達ですら見せるのを躊躇う一品。
それを初対面の人間に……。

「これは記憶の書コピーだ…だが神明魔祓の書でもない」

「どういう事なん?」

「記憶の書の一部…魔法具知識のみを編集したものだ…毎度毎度世界を渡るわけにはいかんだろ」

だからって……。
見ろよ…アリアの奴。
俺らの反応を見て、書を持つ手をガタガタと震わせ表情が固まってるぞ?

「アリア…」

「は、ははい!!」

無茶苦茶緊張してるな……見ていて面白いが……。

「貴様は、この漆黒の吸血鬼から一部とは言え、知識を受け継いだんだ…またあのような不完全な魔法具を造ってみろ……私の顔を泥で塗り潰すものと思え…」

「ッ……はい！」

カスミが殺気を放ちながら忠告をする。
不完全なモノを作れば、許さないと……。

アリアはカスミの殺気に耐え、まっすぐな返事を返す。
それは師であるカスミの誇りを、守るという決意に満ちた目をして……。

カスミはフッと笑い、アリアを抱きしめる。

夕日があれば美しい師弟の抱擁なんだが…。
いや、カスミの場合は夜空だな…。

「そら…そろそろ…時間だ……」

「はい」

「あっちの木乃香達をよろしゅうな…」

「はい！」

「またな…」

「また……来ても良いんですか？」

「当たり前だ…お前は私の弟子だぞ」

「当然やよ…アリア先生♪」

「お前が望めば……」

「ありがとう、ございます…」

アリアは目に涙を溜め感謝する。
最後に俺は、アリアの涙を拭う。
俺達の別れに涙は要らない。
一生会えないってわけじゃない。
だから、俺達は……

「「「またな（ね）…」」」

再会する言葉を紡ぐ。

「はい！　また」

無理矢理笑顔にして、アリアは宝石剣を発動して世界を移動した。

▲　貴史　視点▲

――おまけ――

「んで？　アリアが持ってた宝石剣は？」

「ああ、アレなら私が研究室に着いた瞬間、私を消し飛ばす程の爆発を起こして消えた」

「流石、不死やなぁ…」

「本気で死ぬかと思ったがな…」

「にしても……」

「所々飛ぶ場面多いコラボになったな…」

「これからは普通形式で行くよう作者に話を進めとくな…」

「「頼む……」」

アイテムクリエイターと三人の転生者～貴史Ｓｉｄｅ～（後書き）

次回はクロナＶＳ完全なる世界です。

が、資料の単行本（少なくともデュナミス戦の資料）が出るまで書きません！

その間に他を進めよぃ

娘（前書き）

香崎　真琴様の転生夫婦の並行世界旅行に出てくるジェイルとトーレとのコラボです。

香崎　真琴様のとこのジェイルは女の子で、貴史と【放送禁止用語】をして子供が居たりしまーす。

とりあえず…質問があるなら感想でお答えします！！

娘

▼　貴史　視点▼

「さて、何すっかなー…」

とある休日。
俺はものすごく暇である。
クロナは魔法世界だし…やることがない。

……とりあえず、することもないので家でごろ寝する。

これでも俺は主役の一人なんだぜ。

「って、自慢にもなんねーよ!!」

《Ｐｉｐｉｐｉ…》

俺が一人でノリツッコミしてると、突然携帯が鳴った。

「あん？」

ディスプレイを見ると、表示されてある名前は……「ジェイル」

「……」

《Ｐｉ》

あいつからとは珍しいなと思いつつ、通話ボタンを押し電話に出る。

ジェイルから用件を聞いた後、俺は赤い（ブラッディ）剣（ソード）で空間を裂いて、世界から消えた。

▲　貴史　視点▲

▼　乱　視点▼

俺の名前は「神武　乱」。
八歳だ。
母さんの名前は「神崎　ジェイル」。
何故、苗字が違うのかと言うと…母さん曰く、俺の親父の苗字と母さんの苗字を合わせたから…。
親父の名前は「南武」って奴らしい。
下の名前は知らない。
知る気もないしな…。

あ、言っとくけど…俺は女だからな？　勘違いすんなよ？　挿絵が無いからなぁ…わかんねぇと思うが俺は女だ。
母さんに似て美人だぞ。
母さんの父様と母様が言ってたから、間違いはない！！

「乱」

「あ、トーレ姉さん」

俺が一人で外を歩いてると、トーレ姉さんがやってきた。
どうやら母さんが呼んでるらしい。

また模擬戦なのかねー。
まぁ、暇潰しにはなるかな…。

母さんが俺を呼ぶのは、だいたいが模擬戦だ。
なんでも鈴おじさん達を落とせる程の存在に、成長させたいらしい。
俺としては、無謀な挑戦だと思うんだが…。

とは言っても、すでに母さんを凌駕しつつある俺の力。
戦闘訓練したのも五歳から。
僅か二年で、ナンバーズの皆を追い越す成長速度。
そして……

チラリと、包帯でグルグル巻の右腕を見る。
それはまるで、何かを封印してるような雰囲気が漂う。

まぁ…封印してるようなじゃなく、実際に封印してるんだけどな。
包帯（封印）を解けば、そこにあるのは人間の腕じゃなく、禍禍しい悪魔のような腕。

「化け物だな……俺」

これを見てると嫌な気分になる。
この腕に俺が飲み込まれそうな…そんな感覚が。

「馬鹿なことを言ってないで、早く行ってやれ」

「わかったよ…」

馬鹿なこと……か…はぁ…。

▲　乱　視点▲

▼　貴史　視点▼

「アレがお前の子だ」

乱が立ち去った後、トーレは俺が隠れてた場所に視線を送る。

「ふぅん…」

俺は茂みの中から現れ、トーレの横へ並ぶ。

しかし、悪魔の腕を包帯で封印って……。

殺人貴が魔眼を抑えた時に、巻いてるのと同じ奴かな…。

つか…

「なんで、悪魔の腕を包帯なんかで封印してんだ?」

「それが母上の能力でも、封印が出来ないのだ」

「は?」

嘘だろ?　おい。

だって百合の能力っつーたら【あらゆるモノに干渉する】能力だろ？

「母上も戸惑ってたが、別に使えなくなったわけじゃない。　なんせ超越者と言うんだったか？　赤屍とやらの能力をその干渉する能力で、開花させたからな」

つまりは、封印だけが出来ねーわけか…。
ジェイルが俺を呼んだのも、封印関係だろうな……。

「それで、会ってやるのか？」

「そうだなー…」

といっても、いまさら過ぎるし…。
まったく、どーすりゃいいんだか…。

「まだこんなとこに居たのか」

「お、ジェイル」

「ドクターが此処に来るという事は」

「ああ、乱はすでに寝た」

いったいどんな事をしたのやら。

「何、食事にちょっと細工をね」

「心を読むな。　つか薬で眠らせたのかよ」

「まぁ、いいじゃないか。　話は聞いてるのだろう？」

「ああ、封印だろ」

「よろしい。　では行こうか」

ジェイルの後ろについて行きながら、俺は乱が寝る部屋へと向かった。

――乱の部屋――

「すぅ…すぅ…」

随分とまぁ、穏やかな寝息を立てて寝るなぁ…。

「んじゃ、始めるか」

乱の右腕に巻かれてある包帯を解くと、現れたのは真っ赤な悪魔の腕だった。

「こいつは……」

俺の悪魔の腕の色は灰色だ。

それに、力も俺のとは比べもんにならない程……。

「出来るかね？」

「やるしかねぇだろ……娘なんだし」

こんな無骨、不気味なモン…女には不要だ。
悪魔の腕に手を重ねるようにして、小さく詠唱を始める。
そして、詠唱を終える時には悪魔の腕は無く、人間の腕があった。

「ん……ん…親、父……くぅ」

「いつも寝言で父を求めるのだよ」

「……そうかい」

ったく…最低な親父を求めるなんざどうかしてる。
だけど、まぁ……いずれ一緒に居てやるよ。
その間までは…

「乱ッ！！」

「うわぁぁあああっ！　へっ？　だ、」

《キィィイイインッ！！》

「あ、ぅ……」

この《夢》で我慢してくれや…。

「あとは頼むわ」

「ふむ、任せるといい」

ジェイルに後の事を任せて、俺は自分の世界へと帰った。

▲　貴史　視点▲

▼　乱　視点▼

突然、誰かの声で呼ばれて跳び起きると、そこは青空が広がる草原だった。

「此処は……俺は確か…」

母さんに呼ばれて……そう、飯だ。
新しい料理に挑戦したからって言われて、試食を頼まれたんだ。
そして、一口食って……あー駄目だ。
そっから先が思い出せない。

「ん？」

ふと、右腕が目に入る。
それは包帯が巻かれておらず、あの無骨で不気味な腕は無かった。

「腕が……」

それは夢にまで見た。
人の腕。

「いったい誰が……」

あのユリおばさんでも手を挙げたのに。
ふと、俺の前に人の気配が現れた。
顔を上げると……

「あんた……誰だよ」

スーツ姿の男が居た。

「はじめまして、南武と言う」

「え…」

親父の……名前？

「う、嘘をつけ！！」

「やれやれ、嘘なんかじゃねぇんだがな…」

だって……そんな……。

「親父は…親父は今忙しいって」

「まぁ、合間を見て来たからな」

「じゃあ、本当に……」

「ああ、お前の父…南武　貴史だ」

こいつが…。
こいつが……親父！！

一一一一蛇咬（スネークバイト）！！

何故、攻撃したのか自分自身よくわからなかった。
いや、本当はわかっていたんだけど…。
この時は、とにかく一発殴りたいと思ったんだ。

《パシッ》

「随分急だな…」

「うるさい！！」

何年も俺達をほったらかしにしやがって！！

腕を捕まれたまま、親父の鳩尾に蹴りを入れる。
それもまた防がれて、左手の蛇咬を叩き込むと、距離を置かれる。
すかさず、距離を詰めて赤い（ブラッディ）剣（ソード）を出して切り付けるが、相手も赤い（ブラッディ）剣（ソード）を出して防ぐ。

「ぐっぬぬぬぬ…」

「どうした？　乱…この程度じゃ俺に一発入れられないぞ」

「うっせぇえええ！！」

俺の切り札を見せてやる！！

親父から距離を置いて、俺はあるモノを自身から取り出す。
鈴おじさんからクリスマスプレゼントで、もらったモノ。

「朱き（ブラッディ）失われし王剣（カリバーン）」

「！！」

親父が、目を見開かんばかりに驚いてる。

へっ…もっと驚いてもらうぜ……。

「勝利すべき（ブラッディ）…」

「【目覚めろ】赤い（ブラッディ）乖離剣（エア）」

なっ！？

エアって……ギルガメッシュの宝具…。

「鮮血の（ブラッディ）」

チッ…

「朱き王剣（カリバーン）！！」

「天地乖離す開闢の星（エヌマエリシュ）！！」

朱き斬撃と鮮血の魔力波が、ぶつかり合う。

俺の切り札と同じ、親父も切り札を切ったのだろう。

なかなか、勝負が着かなかった。

「……」

「！！」

ふと、親父と目が合う。
親父は穏やかな笑みを浮かべていた。

「強くなったな…」

まるで、私の切り札を…

「ナンバーズのおかげか…」

いつでも押し返せるように……

「ジェイルの奴か？」

わかってしまう。
この決着が着いたら、父さんとの時間が無くなる事を……。

「……だ」

「百合達かもしれないが」

「や、だ…」

父さん…。

「あいつらは旅を続けてるだろうしな」

「やだ…やだ…やだ…やぁだぁ！！」

父さん…父さん父さん父さん父さん父さん父さん父さん父さん父さん父さ

ん父さん！！

「またな…今度はお前から来い」

「とぉおさぁぁあああああああん！！！」

鮮血の魔力波は私の斬撃を押し返し、私を吹き飛ばす。

そして……

ーーーーーーーージャスト、一分だ。

私の耳に父さんの声が聞こえたと同時に、世界が砕けた。

「……父、さん」

「良い《夢》は見れたかい？」

横を見ると、母さんが優しい笑みを浮かべて立っていた。

「母さん……父さんが…」

「私が呼んだんだがね。　乱が起きる前に帰ってしまってね」

「……そう、なんだ…」

ふと、右腕を見る。
そこには、包帯が外された人間の腕があった。

「うっ…うぅ……えぐっ…あぁ…」

私は右腕を抱えるように、抱きしめて泣いた。
いっぱい泣いた。
日が変わっても泣き続けた。

▲　乱　視点▲

《番外編》　新年会（前書き）

ふぅ…さてさて…

感想が怖いなー……。

《番外編》　新年会

貴史「さて、会場はこれくらいでいいか…」

カスミ「転移魔法陣の設置は完了したぞ」

薫「お節料理出来たえ～」

貴史「こっちも飾り付けは終わったぞ」

カスミ「最初は誰が来るかな…」

花梨、士貴、葉生、アキラ「「「「あけましておめでとー！！」」」」

カスミ「なんだ…お前達か」

花梨「なんだとは何よー」

士貴「まぁ、他から来る人達をおもてなししないとな」

葉生「そうだね…」

貴史「まぁいいけど…一応自己紹介しろお前ら」

四人「「「「はーい」」」」

花梨「最初は私ね？　なんたって1番最初に書かれた小説の主人公なんだし」

貴史「今じゃ放置喰らってるがな」

花梨「うっさいよ！　そこ！！　コホンッえー、私は小林　花梨。秋代が初めて投稿した小説の主人公よ。　タイトルは【オリ主によるオリ主の我が儘】よ。」

士貴「んで、俺は小林　士貴。　花梨のもう一つの人格だ。　本来なら花梨の中に居て、たまに現れる存在なんだが今日は特別にという事だ」

アキラ「次は僕だね…。　僕はアキラ・シュヴァイアー。　【闇色の六王権に愛されし者】の主役をやってるよ」

カスミ「それで？　その六王権はどうしたんだ？」

アキラ「今日はお留守番かな」

貴史「へぇ～」

薫「次は葉生くんやね～」

葉生「そうだな…。　俺は麻倉　葉生。　【転生者はシャーマン】という小説の主人公だ。　まだまだ未熟者だけどよろしく！」

薫「こちらこそよろしくな～」

アサシン「おや…来たみたいですね」

貴史「ん？　来た？」

クロナ「あけましておめでとございます♪」

全員（アサシンを除く）「「…「……はっ？」…」」

クロナ「クスッ♪　秋代さんが考えた貴方方をも圧倒する存在。
そちらのアサシンの本体で言うなれば真・クロナです」

貴史「こいつはすげぇ客が来たな…」

カスミ「まったくだ…」

アキラ「うぐっ…ま、魔王……やめて…死ぬから……」

花梨「どうかしたの？」

アキラ「魔王が……彼女と戦いたいと…」

全員（クロナs除く）「「…「どんだけー」…」」

蛮「やった！　1番の……」↑クロナ2人を見て石化

貴史「おう、蛮か」

蛮「……」

貴史「おい？」

クロナ、アサシン「「どうかしましたか？」」

蛮（ふ、増えてらっしゃる…あ、あれか？　赤い分身（ブラッディ・アバター）だよな。）

クロナ、アサシン「「違います♪」」

蛮「心を読まれた！！」

貴史「とりあえず自己紹介しろ…」

蛮「いや、もうなんかいっぱいいっぱいで帰りたいんですが…」

カスミ「此処では逃げる事は許されん」

蛮「帰らして……生きた心地しねぇ……」

貴史「クロナを引き取るなら」

蛮「今日は全力で楽しむぞー！！」

薫「せやから自己紹介してーな」

蛮「あ、すんません。　えっと【魔法少女リリカルなのは～少女達の未来を奪りかえせ！～】に出てる神楽　蛮だ」

貴史「烈火様の作品だとさ」

蛮「よろしくな。　それとあけましておめでとう」

貴史「おう、おめでとさん」

百合姫「あけましておめでとー！」

鈴「遊びに来たぜー！！」

ジェイル「ふむ…よい別荘だ」

乱「遊びに来たぜ！　親父！！」

蛮「親父？」

乱「？　んだよ…オメェ」

貴史「俺の娘だ」

蛮「は？」

貴史「だぁかぁらぁ…俺の娘だって…。　あけおめ～チート家族共」

百合姫「一括りｗｗｗ」

カスミ「後ろのナンバーズが居るからそうなるさ」

鈴「把握ｗｗ」

ジェイル「手ぶらってのもアレなので、お酒を土産に持って来た」

薫「お～気が効くやん」

ディエチ「師匠はこちらのノンアルコールです」

薫「あ～んイケずやな～」

アキラ「そろそろ自己紹介した方が」

貴史「っと、そうだな……」↑チート家族を見る

カスミ「多いなぁ…」

貴史「やめるか？」

花梨「一応やろうよ」

百合姫「花梨も久しぶりね～」

花梨「あ、あの時はどうもお騒がせを……」

鈴「気にするなw」

貴史「んじゃ、自己紹介開始！　香崎　真琴様が書く【転生夫婦の並行世界旅行】の…」

百合姫「主役の一人、御神　百合姫よ！」

鈴「んで、俺がユリの夫の神北　鈴だ！！」

葉生「？　夫婦なのに苗字が違う…」

百合姫「私たちは苗字に神の字が、入ってればそれでいいのよ」

葉生「へぇ～」

ジェイル「そして、私は神崎　ジェイルだ」

ウーノ「神崎　ウーノと言います」

ドゥーエ「神崎　ドゥーエですわ」

トーレ「神崎　トーレだ」

クアットロ「神崎　クアットロですぅ～」

チンク「神崎　チンクという」

セイン「神崎　セインとは私の事だー！」

セッテ「か、神崎　セッテです」

オットー「……神崎　オットー」

ディエチ「神崎　ディエチです」

ノーヴェ「神崎　ノーヴェだ」

ウェンディ「神崎　ウェンディっす」

ディード「……神崎　ディード」

乱「で、俺は神武　乱！　南武　貴史と神崎　ジェイルの子供だ！！」

カスミ「貴史…」

薫「ちょうこっちに来ぃ」

貴史「気持ちよかったぞ？」

薫「誰も聞いてへんわ！！」

カスミ「死にさらせ！！」

貴史「断る！！」

ゼフィリス「新年おめでとうって結構大人数だな…」

要「みたいだな…こっちの雑談と大差ないかもな……」

葉生「あ、要さん……と…」

ゼフィリス「ゼフィリスだ」

葉生「ゼフィリスさん…いらっしゃい」

ゼフィリス、要「「うむ（ああ）…」」

花梨「とりあえず自己紹介をお願いします」

ゼフィリス「では…私から行こう。【魔法少女リリカルなのは～輝く月の滴～】で主役をさせてもらってる…ゼフィリスです」

士貴「書いてる作者は黎音様らしいぜ」

ゼフィリス「こちらとのコラボは初めてだな…」

アサシン「そうみたいですね」

ゼフィリス「ふむ…まぁ、これからもよろしくな」

アサシン「ええ…」

要「次は俺だな【チートじゃ済まない】での主役をしてる一条「胃痛」要だ……」←ギロリと貴史を見る

貴史「サーセンｗｗｗ」

要「潰す！！」

貴史「ちょろい！！　ふはははは！！」

ゼフィリス「やれやれ…新年明けても変わらんな…」

カイト「あけおめー！　そしてクロナー！！！！　勝負だー！！！！！」

黄宇「主殿！　落ち着いてください！！」

カイト「うっせー！　格の違いって奴を教えんだ！！」

紅蓮「アサシンか貴史！！　勝負だー！！！！」

水薙「だから貴方は空気を読みなさい！！」

紅蓮「へ、やなこった！！　相棒だけなんてずりぃしよ」

クロナ「私は構いません♪」

貴史「別に良いけどよ」

アサシン「私は遠慮しておきます。　主に負けそうですしね…」

紅蓮「んだと……」

カイト「んじゃ、俺が創った世界に行くぞ」

《カイト、貴史、紅蓮、クロナ退場》

カスミ「自己紹介してからいけよ……」

黄宇「すみません…」

カスミ「なら龍斗…お前がやれ」

龍斗「私ですか？　はぁ…えー先程、秋代様の最強キャラのクロナさんに勝負を挑んだのが我等が主、救世主にして世界の破滅者…八神カイト様です。　小説タイトルは【無限にして無窮なる旅人】です。　そして、我等はカイト様の従者であり家族でもある…龍斗です」

黄宇「黄宇と申します」

水薙「水薙です。　それと貴史殿に喧嘩を吹っ掛けたのが馬鹿…もとい紅蓮と言います」

鋼牙「僕は鋼牙だよ～」

要「それより貴史とクロナは大丈夫なのか？　カイトや紅蓮と戦うなんて」

龍斗「流石の紅蓮もカイト様も殺しはしないでしょう」

乱「そんなに強いの？」

要「チートの枠には収まらん程だ」

ジェイル「ふむ…」

百合姫「まさか…カイトの《放送禁止用語》を取ろうなんて」

ジェイル「いやアレは遺伝ではないみたいなので要りません。ただ調べたい対象ではある」

鈴、百合姫「「流石は俺（私）の娘ｗｗ」」

《ドシャッ》

全員「「…「「！！」」」…」」

貴史「まぁ、これでちたー大人しくなるだろ」↑上半身裸で登場

乱「親父！！」

カスミ、薫、ジェイル「「「む、むぅ…／／／／」」」

龍斗「紅蓮！！」

紅蓮「ぐ…なんつー…ゲボッ…成長ぞくどじてやがる……」↑再生しながら喋り

黄宇「な、何があったのだ！？」

要「おいおい…マジかよ……」

紅蓮「はぁ…はぁ…」↑完治

ゼフィリス「……紅蓮が貴史をなんと？　これは貴史が紅蓮を殺す一歩手前まで追いやってるぞ」

紅蓮「……俺は真の姿になって、あいつを焼滅させた…はずだったんだが」

黄宇「！！　あの姿でやったのか！？」

貴史「そのあと、こいつが「その程度か…一条鏡より弱いな」とか言ったからぶちギレた」

紅蓮「最初は余裕だったんだが…段々……」

トーレ「……言葉も出んな…」

黄宇「主殿は？　主殿はどうなったのだ？」

紅蓮「ああ、相棒なら大丈夫だろ…圧倒してた」

クロナ「重かったですね」

《ドシャリ》

???「ゲフッ」

全員（貴史を除く）「「…「「なっ！？」」」…」」

紅蓮「あ、相棒！！」

蛮「な、なぁ…要さん……カイトさんって」

要「う、嘘……だろ？　カイトが負け、た？」

カイト「誰が…ゲホッゴホッ…負けただと？」

クロナ「そうですよ……私たちは引き分けです」

全員（貴史、カイト除く）「「…「「はぁ！？」」」…」」

紅蓮「嘘だろ？　相棒…だって圧倒してたじゃねぇか！！？」

カイト「ああ？　圧倒なんざしてねぇよ…こいつ最後の最後しか全力出さなかったんだぞ」

蛮（よし…絶対クロナさんには逆らわない）

要（カイトと互角……胃が…痛くなってきた……）

ジェイル（流石は貴史のもう一つの可能性……）

クロナ「それよりもお客はこれで？」

貴史「いんやまだ来るはずだぜ」

せつな「かな兄だぁ～」↑要に突撃

要「おっと」↑抱き止める

ラスト「待って下さい。　主～」

魔理亜「少年まずは挨拶が先だぞ」

せつな「あ、そうだった。　あけましておめでとう」

ラスト「あけましておめでとうございます」

魔理亜「あけましておめでとう！」

貴史「おう」

カスミ「ああ」

薫「おめでとうなぁ～」

貴史「んじゃ、早速自己紹介頼むわ」

ラスト「主が、ああなので私が」

クロナ「頼みます」

ラスト「要さんに抱きしめられてるのが【俺の異世界物語】の主人公…如月　刹那です」

せつな「よろしくね～」

ラスト「今はある理由で子供の状態です。　そして私は色欲のラストです」

魔理亜「私は少年の幼なじみというもので魔理亜と言う」

貴史「作者は七つ夜＆ａｍｐ;夜つ七様だ…」

飛翔「もう始まってるかな?」

アリサ「まだなんじゃない」

アインス「ん…此処みたいだな」

飛翔「ちわー飛翔便でーす。　お届け物を届けに来ましたー」

貴史「間に合ってまーす」

アリサ「飛翔便って何よ!?　それとあんた!!　間に合ってますって何よ!?　追い返してんじゃないわよ!!」

葉生（アリサは何処でも喧しいなぁ…）

飛翔「あけましておめでとう…とはじめましての人は、はじめまして」

ユーノ「うわっ結構いっぱいいるなー…」

ゼフィリス「む、最初来た者が既に空気化してるが…」

アリサ「なんだか早くもその仲に仲間入りしそうね……」

花梨「自ら空気化に入りたいって言うなんて変わってるね」

アリサ「今までの経験上仕方ないのよ！！　でも空気化は嫌！！」

要「諦めな…」

カイト「ふひーあー酒が美味い」

葉生「さっきまで重傷だった人が、酒をガバガバと…」

カスミ「カイト！　ペースを考えろ！！　他にも来るんだぞ！？」

カイト「いいじゃねぇか…足らなくなったら出してやるよ」

貴史「とりあえず飛翔ファミリー＋αは自己紹介な」

飛翔「了解。　えーっと【魔法少女リリカルなのは　～ＳｔｒｉｋｅｒＳＳｗｅｅｔ　Ｓｏｎｇｓ　Ｆｏｒｅｖｅｒ～】で主役をしてます。　不破　飛翔です」

アリサ「アリサよ！」

アインス「アインスだ」

すずか「すずかです」

アリシア「アリシアよ」

鈴音「鈴音です」

リニス「リニスと言います」

ユーノ「ユーノです」

カスミ「……なんか皆と違わないか？」

飛翔ファミリー＋α「「…「「？？」」…」」

貴史「ああ…なんか話数を見て、もうなんか理解を深めるのを諦めたらしい。」

飛翔ファミリー＋α「「…「「！！？」」…」」

カスミ「……」

鈴「ひでぇｗｗ」

貴史「まぁ、飛翔は出すからいいだろ？」

アリサ「私たちにも出番を増やしなさいよ～」

《ポム》

アリサ「へ？」

チンク「諦めろ」

クアットロ「私たちは紹介だけだったわぁ」

ナンバーズ「「「…「うんうん」…」」」

飛翔ファミリー＋α「「「…「「ｏｒｚ」」」…」」

クロナ「書いてる方は海人様らしいです」

睡蓮「あけましておめでとー！！」

貴史「……誰？」

睡蓮「いや、そうマジに返されたら対応に困る」

貴史「嘘だよ…確か……水仙だっけ？」

睡蓮「違う！！」

薫「貴史…失礼やろ？　雫ちゃんであっとるやろ？」

雫「それは私です……」

カスミ「ハッハッハッ…馬鹿だな薫は…こいつの名前は凛のはずだ」

凛「それは俺…」

睡蓮「三人共わざとやってるでしょ！？」

貴史「隠しイベント発生！　この人の名前当てゲーム！！　空気読めない人は罰ゲーム！！」

睡蓮「名前当て！？」

蛮「っても知らねぇしなぁ…」

ゼフィリス「桜でどうだろう？」

睡蓮「違う！！」

要「ん～す…」

睡蓮「！！」↑輝く笑顔

要「すい…」

睡蓮「うん！　うんうん」

要「西瓜？」

《ズザザザザザザザッ！》

睡蓮「ち、違うわよ！！　というか弄られる役は凛の方よ！！　弄るなら凛にして！！」

凛「なんでだよ！？」

貴史「そっちはまた弄るから」

凛「なん……だと？」

アリサ「そんな事より！　私に出番」

すずか「あっちでお節料理食べよ？　アリサちゃん」

アリサ「あ、離しなさいよ！　すずか！！　これは私たちが空気化しない為に」

すずか「薫さん、ゼフィリスさーん。　カイトさん達が凄い勢いでお節料理を」

薫「はいはーい」

ゼフィリス「料理できる者は手伝ってくれ！！」

《料理が出来る人はキッチンへ退場》

貴史「もういいや…自己紹介しな」

睡蓮「くっ…この」

蛮「落ち着け…お前じゃ確実に返り討ちだって」

雫「では、私が【星降る地にて】の小説に出てる…神藤　雫です」

凛「同じく月影　凛だ」

睡蓮「花咲　睡蓮よ…」

士貴「作者は迫川　巧様だと、さ！　ほい、追加料理だ」

カスミ「他は…と」

アリア「ちぇえりおー――――――っ！！」

《ドッカーン》

全員「「…「「！？」」…」」

アリア「【魔法先生ネギま！～とある妹の転生物語～】からアリア・スプリングフィールド！！　お師匠様（マスター）の宝石剣でやって来ました！！」

薫「カスミ…」

貴史「……」

カスミ「な、なんで私を見る？」

薫「到着場所に爆発を轟かせるって…」

貴史「魔法具に何した？」

カスミ「何もしてないぞ！？」

鈴「可愛い娘キター！！」

要「ん？　スプリングフィールド？」

百合姫「何々？」

貴史「作者、竜華零様が書いてるネギの妹が来たんだ」

百合姫「か、可愛い！！」

アリア「むきゅ…」↑鈴と百合姫に挟まれて抱かれてる

レイ「来たぜー！！」

ラスト「レ…」

フェイト「いらっしゃいレイくん♪」

レイ「さいならっ！」

フェイト「フフフッ逃がさないよ！」

ラスト「レイ……」

貴史「ラスト…」

ラスト「貴史さん」

貴史「今此処でレイを助ければレイとの好感度が上がるぞ」

ラスト「ッ！！　いってまいります！！」

《レイとフェイト、ラスト一時退場》

貴史「んで？　なんでさよを連れてんだ？　立てたか？」

優「立ててない！！」

貴史「もう言わんとした事がわかったか」

優「毎回アレでからかわれたら、いくらなんでもわかる！！」

貴史「まぁ、いいや…自己紹介シクヨロ！！」

優「えーっと……【魔法少女リリカル……なんとか！】の暁「フラグ神」優ですってうおぉぃ！！　何言っちゃってくれてんの！？」

要「何を今更…」

優「要さんまで！？」

乱「フラグ神って？」

ジェイル「恋愛や死亡フラグを立てるの者の事を言う」

優「子供に何を教えてやがる！！」

ジェイル「子供の作り方からアブノーマルプレイまで教えた」

優「子供の教育に悪い事この上ない！！」

レイ「助かったよ…ラスト」

ラスト「い、いえ」

貴史「お、帰ってきたか…ほら自己紹介しろレイ」

レイ「お前！　来なかったらフェイトを送るって言ったから来たのに、そこにもフェイトが居るとかふざけんなよ！！」

貴史「嬉しいサプライズだｗｗｗ」

レイ「嬉しかねぇよ！！　後でボコる！！」

貴史「まぁまぁｗｗ」

レイ「つか俺の自己紹介要らなくね？　常連だぞ？」

カスミ「一応やってくれ…初めての奴も居るんだし」

レイ「確かに見ない奴が居るな…ならしゃあねぇか…【神様の力で異世界へ～チートってありですか？～】の主役、レイ・ツァイベルだ。　気楽にレイって呼んでくれ」

貴史「優とレイは両方ともＡｒｉｓｈｉａ様の作品だ」

カイト「鋼牙、せつな食べてるか？」

鋼牙、せつな「「うん！」」

萌えに弱きチート達「「…「「か、可愛い～」」」…」」

乱「親父…まだ来るのか？」

貴史「まだ来るな」

乱「うへぇ…」

貴史「嫌ならジェイルか蛮と遊ぶなりしな」

乱「い、嫌じゃねぇよ！！　俺は此処（親父の隣）で良いんだ！！」

貴史「そうか？」

霞「あけましておめでと～って…な、何…この過剰戦力は…どっか戦争でもするの？」

貴史「せんて…とりあえず自己紹介してくれ」

睡蓮「サプライズやネタは？」

貴史「ある人にはある」

アリサ「ならわた…」

すずか「アリサちゃん料理を運んでー」

アリサ「私にも出番をやりなさいよー！！」

貴史「無い人には無い」

睡蓮「卑怯じゃない！！」

レイ「そうだ！　俺よりも要の胃を」

要「やめろ！！　胃痛イベントだけは！！」

レイ「だが断る！！」

霞「あー……じゃあ自己紹介を…えっと【唯一神を継ぐもの　とあるなう】で主役を張ってるカスミ・レーヴェンスです」

カイト「偽名乙ｗｗ」

霞「ソッコーでバレた！！」

要「カイトは全てを知ってるからなぁ…隠し事は出来んぞ」

霞「うー…霧雨　霞よ…」

貴史「作者は葵（仮）様だったな」

霞「そうよ」

レイ「お、これ美味い」

ラスト「私が作ったんです」

レイ「そうなのか…」

霞「んで……私はどうしたら」

カイト「テキトーに寛いでろよ…」

カスミ「ご飯を食べるのもあり、親睦を深めるのもありだ」

アリア「お師匠様、こういう服を魔法具化にしたいんですけど…いくらやっても構成が甘くなって」

カスミ「ん？　どれ……あーこれはだな…」

霞「ん～」

百合姫「こっち空いてるわよー」

霞「じゃあお邪魔します」

ドゥーエ「歓迎するわ」

叶、香「「あけましておめでとうございます」」

貴史「よう…久しぶりだな」

カスミ「叶は久しぶりだな…で、こいつは？」

香「【紅き翼の片翼～片翼の魔剣士の伝説～】で赤き翼の一員、桜咲　香と言います」

カスミ「ほう…赤き翼か…」

貴史「懐かしい名前だな…」

薫「そうやねー」

香「三人も赤き翼の？」

三人「「「いや、違う」」」

百合姫「私と鈴は赤き翼に喧嘩を吹っかけたわ！！」

香「えぇぇっ！！」

アリア「……」

香「？　な、何？」

アリア「あ、い、いえ…なんでもないです」

香「そう？」

貴史「次は叶だな…」

叶「【Ｉｔ　ｉｓ　ｃａｌｍ　ａｎｄ　ｉｔ　ｉｓ　ａ　ｐａｓｓｉｏｎａｔｅ　ｍａｇｉｃ　ｂｏｙ.】の主人公、花菱　叶だ」

霞「どんな小説なの？」

叶「ん～確か……リリなのの二次創作って作者、桜井舞人が言ってたな」

霞「ああ、リリなのねぇ…」

アリス「あけましておめでとう！！　アリアちゃんに会いに来た！！」

全員（アリア除く）「「…「「それはどうよ？　人として…」」…」」

アリア「お、お兄様ったら…」

シルヴィア「あけましておめでとうございます。　皆さん」

貴史「とりあえず…自己紹介ヨロ」

アリス「ん、ああ…そうだったな…えっと【英雄と女王の子】に出てるアリス・スプリングフィールドだ。　ネギの兄をしてる」

シルヴィア「そして、私がアリス様の補佐…シルヴィア・オーギスです」

貴史「パートナーって奴か…」

シルヴィア「はい」

アリス「ま、よろしく頼むよ」

恭也「すまない。　少し遅れた」

貴史「気にするなよ…自己紹介もお前らで最後だ」

恭也「それはちょうどいい」

花梨「では最後の自己紹介シクヨロ！！」↑最高の笑顔

全員（（…（（ああ、笑顔が似合うってこの事か……子供の無垢な部分を残し、且つ大人の魅力がマッチした素晴らしい笑顔だ））…）

花梨「ん？　どうしたの？」

恭也「い、いや…なんでもない（姿形が似てないのに、なのはの笑顔と重なるとはな）…【魔法少女リリカルなのは～永遠を担う風の御神～】の主人公をしてる…不破　恭也だ」

エターナル「そして、私が恭也様のユニゾンデバイス…エターナルです」

カイト「古代ベルカ最古のユニゾンデバイスか…」

エターナル「救世主……」

恭也「知り合いか？」

エターナル「……はい」

カイト「まぁ、昔に会った事があるんでな」

恭也「そうか…」

貴史「ちなみに…アリスと恭也の作者は剣の舞姫様だ」

アキラ「これで全員？」

貴史「おう…」

蛮「ずいぶん掛かったなぁ…」

貴史「流石に骨が折れた」

カスミ「貴史は戦闘も一度してるしな…」

レイ「へぇ～勝ったの？」

貴史「まぁな」

貴史「そいじゃ…各自好きにやってくれ。　料理は茶々シリーズがやるぞ」

全員「「…「「はーい」」…」」

要「そういやカイトは、なんで瀕死でクロナが無傷なんだ？　引き分けたんだろ？」

カイト「あいつの再生力が俺を上回ってたんだよ」

要「へぇ…」

士貴「んじゃ、戦ってみた感想は？」

カイト「ムカつくかな…ニコニコと笑いながら俺の攻撃を防ぐんだぜ？　力で！」

要「それは……嫌だなぁ」

カイト「だろ？　たくっ…もう飲むしかねぇよ」

ゼフィリス「よもやあのメシアと、互角に戦えるとは思わなかったぞ」

クロナ「まぁ、準備運動としては最適でしたよ」

トーレ「準備……」

クアットロ「運動……って」

クロナ「本当に最後しか本気を出しませんでしたから…」

ゼフィリス「なるほど…」

貴史「どうだ？　食ってるか？」

紅蓮「見りゃあわかんだろ…もぐもぐ」

龍斗「にしても…貴方は規格外ですね…紅蓮を倒すなんて」

貴史「ん？　まぁ、俺には戦闘しかねぇんだ…レイやゼフィリスみたいに、なんでもは出来ねぇから…これを鍛えるしかねぇのさ」

龍斗「なるほど…究極の一を極めるですか…」

紅蓮「究極の二だ」

龍斗「紅蓮？」

紅蓮「こいつ…究極の一が二つあるんだよ。　だから合わせて究極の二だ」

龍斗「なんとまぁ…」

貴史「頭の悪い言い方だ」

紅蓮「んだと！？」

貴史「だけど…」

龍斗「わかりやすいですね」

カスミ「此処をこうすれば魔力の節約が出来るぞ」

アリス「ふむ…威力はそのままで？」

カスミ「寧ろこれをすれば、威力は上がる」

アリス「式を弄るだけで…流石は魔道を極めたと、豪語するだけの事はある」

アリア「お師匠様！！　この剣なんですが…」

カスミ「ああ、それは剣としてはナマクラだよ…」

アリア「やっぱり魔法具…」

カスミ「あらゆる事象を絶つ剣だ」

シルヴィア「あらゆる事象……魔法もですか？」

カスミ「まぁな…その変わり万物は斬れん」

アリア「流石は、お師匠様です！！」

恭也「なかなかの足運びだな」

薫「淑女達の足を凝視するんなんて、セクハラやよ？」

恭也「ち、違う！！」

ドゥーエ「師匠に鍛えられましたから」

ディード「……鍛えられた」

ディエチ「鍛えられたというより…ドゥーエの胸を凝視してたような……」

薫「そ、そんな事ないで！？」

恭也（師匠ってこいつなのか…）

乱「いただき！」

蛮「ぬあああああ！！　それは俺が取っといた蟹だぞ！！」

乱「へへ～ん。　名前でも書いてるのか？」

蛮「テメ……ならこいつを貰う！」

乱「俺が目を付けてた大トロが！！」

蛮「ん～脂が乗ってて最高！！」

乱「テメェ…」

蛮「んだよ…」

乱「やるかぁぁああ？」

蛮「上等だよ！」

乱、蛮「「格の違いってもんを見してやんよ！！」」

《乱、蛮一時退場》

百合姫「ジェイルはどっちに賭ける？」

ジェイル「乱でｗｗ」

百合姫「鈴は？」

鈴「乱だろｗｗ」

飛翔「蛮も強そうだけど？」

百合姫「乱にはね…」

鈴「貴史の能力だけじゃないんだ」

飛翔「それじゃあ…」

ジェイル「私の能力も受け継いでる」

飛翔「納得だ」

貴史「そいじゃ、最初のイベント始めるぞー！！」

全員「「…「「おお～！！」」…」」

貴史「最初のイベントはこちら！！」

《ババンッ！！》

貴史「□女子達が好きなイベント！！　□□男子コンテスト！！」

百合姫（あの不自然に空いてるスペース気になるわね～）

貴史「男子全員だと、また長引くから呼ばれた奴は出る事ー」

カスミ「発表するぞ。　レイ、優、凛、鈴、貴史、アキラ、飛翔だ」

貴史「俺も入ってんのか…」

《呼ばれた人は一時退場》

百合姫「この隙に見てみましょうかね…あ、白い紙が貼られて隠されてある」↑紙を剥がしていく。

百合姫「何々…腐女子達が好きなイベント!!　女装男子コンテスト!!…ブフッｗｗｗ」

呼ばれた男子共（鈴を除く）「「…「ふざけんな!!」…」」

花梨「と、言われてもやらざる終えないのよねー♪」

カイト「俺特製のノリノリハイテンションドリンクを飲み物に混ぜておいたぜ!!」

百合姫「さっきの怒声聴く限りじゃ…ノリノリってわけじゃないみたいよ?」

カイト「時期に効いてくるｗｗｗ」

《数分後》

カスミ「さぁ!　コンテスト参加者が乗ってきたみたいなので始め

ます！！」

花梨「エントリーナンバー1番、暁　優ちゃんです！！」

優「暁　優です！　キラッ☆」

さよ「優さん可愛いです～」

花梨「確かに可愛いわね」

蛮「あれは男あれは男あれは男あれは男あれは男あれは男あれは男…」

花梨「続いて、エントリーナンバー2番、月影　凛さんです」

凛「月影　凛です。　皆さんよろしくね？」

ラスト「お姉様系でせめて来ましたか…」

睡蓮「凛にはうってつけね！」

雫「な、何…これは…凛ちゃんをお姉様って呼びたくなるこの衝動は…」

アリア、鋼牙「「お姉様ー！！」」

アリア「ハッ！！　私は今なんと？　私のお姉様はシンシアお姉様ただ一人なのに！！」

士貴「次はエントリーナンバー3番、アリス・スプリングフィール

ドちゃんだ」

アリス「お兄様、お姉様方…こんにちわ。　あなたの妹、アリスです」

士貴「なんか、変なテンションに駆られたレイがアリスを幼女にしたとかなんとか……女装じゃねぇな…これ」

シルヴィア「アリス……様…ぷはっ」

紅蓮「うおっ！　おい！　アリスの従者が鼻血を出して倒れたぞー」

アリス「シルヴィお姉様！　大丈夫ですか？」

シルヴィア「シ、シルヴィお姉様!?　ガハッ!!」

紅蓮「今度は吐血かよ!?」

龍斗「何をしてるのです！　紅蓮!!　アリスをシルヴィアに近づけさせるな!!」

紅蓮「お、おう!!」

アリス「いやーシルヴィお姉様ー」

シルヴィア「私の妹に何するかー!!」

龍斗「暴走!?」

水薙「チッ…面倒ですね…マスター。　なんとかして抑えてて…」

カイト「アッハハハハハ…ゲホッゲホッ…ブフーッ…アハッハハハゴホッｗｗｗｗ」

水薙「むせ返るほど爆笑してないで、何とかろ！！」

カスミ「随分とカオスな状態になってきたな」

花梨「そうね…でもやめられないから次行くわ」

薫「エントリーナンバー４番、レイ・ツァイベルちゃんや」

レイ「あら何？　このカオスっぷり」

紅蓮「オメーがアリスに変な事をしたからこうなったんだよ！！」

ジェイル「ふむ…外見はロリ姿で中身は落ち着いた大人……」

百合姫「リアルじゃお目に掛からないけど、二次じゃあ在り来り過ぎるわね」

葉生「でも、可愛いと思いますよ？」

叶「すずかみたいに居てて癒される」

レイ「そう…（ニヤリ」

葉生、叶（（ゾッ…なんだ？　今の寒気））

ドゥーエ「ああ、良い…」

ラスト「あの笑顔堪らない」

せつな「ラストがこわいよ～」

魔理亜「うむ…少年にはまだ早かったな」

カスミ「続きましてエントリーナンバー5番、アキラ・シュヴァイアーさん」

アキラ「こんにちわ…」

ウーノ「和服か……」

チンク「大和撫子という奴だな」

トーレ「他と比べてパンチが無いな」

ジェイル「しかし、清楚感が凄まじい…これでも彼は死徒なのだから、逆に素晴らしいの一言だな」

ゼフィリス「うむ、その意見は同意だ」

クアットロ「……なんで…白いワンピースを着てるのぉ？」

ゼフィリス「？　おかしいか？」

ウーノ「その胸はパットか？」

ゼフィリス「天然だが？」

ウーノ、クアットロ、ジェイル「「「「……」」」」

ゼフィリス「？？」

カイト（へっ…超越者だろうが俺に掛かればチョロイ）↑ゼフィリスを女にした犯人

薫「エントリーナンバー6番、不破　飛翔ちゃんや」

飛翔「どうも……」

要「こいつは意外だな無口キャラとは」

薫「ただ単に作者が飛翔を扱いきれんだけや」

ユーノ「や、やっぱり（苦笑）」

水薙「もうちょっと工夫をこらしたほうが…」

エターナル「前の連中と差が開きますね…恭也様」

恭也「なんでそうお前は目を爛々と輝かせてるんだ？」

エターナル「どの子も可愛いくって…ただ出てくる順番のミスですね…そう思いませんか？」

恭也「知らん！！」

葉生「次はエントリーナンバー7番、南武　貴史さんです」

《♪～》

乱「？　曲？」

ミク「カットだよ～」

《♪～》

《歌終了》

全員「「…「「うまっ！！」」…」」

百合姫「は？　何今の歌！？　もろ初音〇クの声じゃん！！」

要「それにダンスも凄まじいかったぞ！！」

蛮「というかその姿なんだよ！？　クロナさんみたいに長くして、ツインテール…そして真っ黒にした初音ミ〇の服だと？」

カイト「見せもんにしては上々だなｗｗ」

貴史「良いからさっさと進めろ」

薫「へ？　あ、そうやね…そ、それでは最後や…エントリーナンバー8番、神北　鈴さんです」

鈴「真☆打ち☆登☆場！！」

《ズガァーン！！》

女子全員（乱とか一部の子供と鈴の連れを除く）「「…「「お、男に負けた……この私が！！」」…」」

鈴「あれ？　どうした？」

要「いや…洒落にならんくらい綺麗だから、女子の誇りがボロボロになったんだろ…」

鈴「把握したｗｗｗ」

士貴「こりゃあ審査出来んな」

葉生「腐女子が審査員だしね……」

貴史「なんだよ。　それ」

士貴「んじゃ、次のイベントまでまた食ったり騒いだりしてくれ」

全員「「…「「はーい」」…」」

アリス「なんで私はあんな事を……」

シルヴィア「可愛いかったですよ」

アリア「アリスお兄様が妹…」

アリス「もうしないから！」

シルヴィア「そんな……」

アリア「良いじゃないですか？」

アリス「嫌だ！！　あれは私じゃない！！」

叶「良い歌でしたよ」

貴史「そうかい」

乱「あれっていつ考えたんだ？」

貴史「即興」

蛮「マジかよ！？」

貴史「まぁな♪」

ラスト「すごく良かったですわ」

レイ「……そうか…」

魔理亜「暗いな。　少年」

レイ「……よしっ！　忘れよう！！　今日は飲むぜー！！」

魔理亜「酒はいかんぞ」

レイ「良いじゃねぇか」

ラスト「ダメですよ」

せつな「メーッ！！」

アリサ「私たち代表のあんたが、なんで無口だったのよ！！　せっかくの出番だったのよ！？」

飛翔「しょうがないだろ！！」

アリサ「しょうがなくない！！」

アインス「まぁ、落ち着けアリサ」

アリサ「落ち着けるわけないじゃない！！」

鈴音「でも、何気にアリサの出番あるよね」

ユーノ「秋代さん…アリサが好きなのかな？」

薫「なんや知らんかったん？　アリサちゃんは、からかいやすいキャラやから使いやすいんよ」

飛翔「そうなんだ…じゃあこっちのアリサは恵まれて」

葉生「出番はそれほどでもないよ（苦笑）　すずかも殆ど出番無いし」

アリシア「憐れねぇ…」

すずか「強く生きようね？　アリサちゃん（苦笑）」

アリサ「すずかぁ～」

ゼフィリス「いつの間に私まで」

花梨「ゼフィちゃんの写真居る人ー！！」

全員（ゼフィリス除く）「「…「「はーい！」」」…」」

ゼフィリス「って、花梨ちゃん！　何を！！」

花梨「ゼフィちゃんが可愛くって…だぁめ？」

ゼフィリス（うっ……なんか逆らっちゃいけない気がする……）

花梨「ふみゅ…」

ゼフィリス「ま、まぁ…今回だけは」

花梨「みんなー許可貰ったよー！！」

ゼフィリス（変わり身早いなぁ……）

鈴「まさか…腐女子諸君の残った女性の誇りに止めを刺すとは……」

百合姫「綺麗だったわ…」

鈴「ユリのほうが綺麗さ」

ナンバーズ「「…「「ざばざばざばざば」」…」」↑口から砂糖が…

カイト「貴史には驚いたな…」

黄宇「顔は整ってますから…まぁ予想範囲内でしょう」

クロナ「一人だった私には出来ない事ですね…」

カイト「そういやお前の過去は」

クロナ「殺しますよ…」

カイト「っとワリィワリィ（笑）」

要「しかし…なかなか尽きないな料理が」

士貴「皆が満腹の頃は軽めの奴を、動いて空かしてる時は重量感ある料理って、言っといたからなー」

要「酒やジュースは？」

士貴「まぁ、絶えないよう調達してる」

要「へー」

士貴「要の世界のエヴァから要名義で買ったからな」

要「ブフッ…ゲホッゲホッ…はい？」

士貴「すべて持って来た！　空のワインセラーを見たエヴァは、放心状態だったらしいぞ」

要「いだっ…」

アキラ「大丈夫？」

要「大丈夫……じゃねぇ…なんであいつは俺の金を使うんだよ…つか絶対帰ったら……ぐぅ……」↑うずくまる

貴史「おい、要！　大丈夫か！？　傷は深いのか？」

要「深すぎだっ！！　テメ…人の金をなんだとっ……」↑貴史の方を振り返り固まる

《胃痛復活大成功！！　酒の件は嘘だよ！　ごめんね♪》

貴史「ケケケケッ」

要「潰すっ…はぐっ！　くそ……いてぇ……」

ゼフィリス「治すか？」

カイト「治したら今度はレイがやるだろ」

恭也「見ていて悲しいな…」

霞「チートなのに病気持ちなんて…」

香「病気というよりも持病？」

薫「そうやね～」

《ビービービー》

百合姫「あら？　何かしら…」

カスミ「茶々丸！　モニターを」

茶々丸「了解ですの事よ」

《ウィ～ン……ピコンッ》

フェイト『やぁ、チート諸君』

アサシン「完全なる世界……」

カイト「後ろにアースラ数機…アルカンシェル搭載型があるな」

要「尾獣が九体…」

鈴「遊戯王の神のカードも召喚されてるなー」

ジェイル「あれは……ナンバーズか…」

カスミ「まだまだ出てくるぞ」

フェイト『新年早々悪いけど……消えてくれ…』

貴史「俺達三人に挑むならわかるが…全員？」

フェイト『勿論さ…超越者』

貴史「おもしれぇ…」

フェイト、貴史『「戦争だ！！」』

フェイト（さて…チート相手に僕らが勝てるか謎だけど…行かせてもらうよ！！）

管理局員「「「「アルカンシェルスタンバイ終了！」」」」

フェイト「なら……撃とうか…」

艦長「本当によろしいので？」

フェイト「安心しなよ…相手はそんなもの軽く防ぐから」

艦長「はっ…しかし……」

フェイト「早くしないと…ほら…来たよ」

管理局員「魔力測定機振り切れてます！！」

艦長「化け物か！！」

フェイト「化け物なんだよ…いいから撃って」

艦長「っ！　全艦！！　アルカンシェル……発射！！」

《《《《ドゥーーーーンッ》》》》

貴史「アルカンシェルが来たぞ！！」

カイト「任せな！！　うりゃっ！！」

《アルカンシェルを異空間に転移》

カスミ「あの戦艦うざいな…合わせろ！　アリア！！」

アリア「はい！　お師匠様！！」

カスミ、アリア「「魔法具！！　斬艦剣！！」」

《《《《ズガガガーン！！》》》》

《アースラ退場》

香「ロボット？」

カイト「危険な代物ばかりだぜ」

レイ「ラーゼフォンにエヴァ初号機暴走、ゼオライマー、ダンクーガ、真・ゲッターロボ、マジンカイザー、オリジナルグレートマジンガーやまだまだ来るな…」

紅蓮「だー！！　うざい！！」

ゼフィリス「機械人形は私が一掃しよう。　カラドボルク、フルンディング、方天画戟、グングニル、レヴァンティン、エクスカリバー、ゲイボルク、デュランダル、グラム！！　ナインライブズ！！」

《ズバババババババンッ！！》

ゼフィリス「ブロークン・ファンタズム！！」

《ズガァーン！！！》

《ロボット軍団退場》

恭也「凄まじいな…」

エターナル「ええ…ですが……こちらも観戦ってわけにはいかないようです」

セイバー「私達の相手は貴方達ですか」

バーサーカー「……」

アーチャー「やれやれ…これは骨が折れるな」

ライダー「優しく殺してあげましょう」

ランサー「楽しませてくれよ？」

小次郎「さて、私の相手は誰になるか…」

キャスター「後ろは任せなさい」

葉生（クー）「「ハッ…槍使い…テメェは俺とだ」」

ランサー「ハッ…坊主が…俺を嘗めてると痛いめ合うぜ」

葉生（クー）「「それは俺の台詞だ…」」

ランサー、葉生（クー）「「「……、…行くぜぇ！！」」」

恭也「エターナル！！」

エターナル「はい！」

恭也、エターナル「「ユニゾン・イン！！」」

小次郎「ほぅ…」

恭也「……永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術と永遠の風の主、不破　恭也とユニゾンデバイス、永遠の風・エターナル…」

小次郎「フッ…アサシンがサーヴァント。　佐々木　小次郎……」

恭也、小次郎「「いざ、参る！！」」

セイバー「私の相手は貴女か」

アサシン「クスッ♪」

セイバー「名を聞こう…」

アサシン「アサシンのサーヴァント…赤屍　クロナ」

セイバー「セイバーのサーヴァント…アーサー・ペンドラゴン…」

アサシン「そちらの赤い騎士も加わっても良いですよ？」

アーチャー「フンッ…暗殺者風情が…私とセイバーを同時に相手をするか…舐められたものだ」

バーサーカー「■■■■■■■■■■■■！！」

ライダー「どうしました？　さっきから避けるばかりですが」

クロナ「いえいえ…あまりにもつまらないのでやる気がないのです」

ライダー「そうですか……」

バーサーカー「■■■■■■■■■■■■■！！！！！」

小次郎「秘剣…」

恭也「……斬式奥義之極　『閃』！！」

《ズバッ》

小次郎「カハッ……よ、よもや…振り切る前に我が横を……抜けるとは……」

恭也「良い死合いだった」

小次郎「フッ……数合しか交えぬ死合いであったが……確かに……」

《小次郎退場》

ランサー、葉生（クー）「「「刺し穿つ死棘の槍（ゲイボルク）！！」」」

《《ズブッ！！》》

葉生（クー）「「グッ！！　ゴファッ…」」

アル『葉生！！　葉生オォォォォッ！！』

ランサー「チッ…ゴフッ…俺の必殺の槍まで同じとはな……」

葉生（クー）「「はぁ…はぁ…はぁ…」」

ランサー「テメー…何者だ？」

葉生「……シャー…マン……の、麻倉、葉生だ……」

ランサー「シャーマン……か…まぁ、いい……存外…楽しめた……」

葉生「……」

《ランサー、葉生退場》

セイバー「そん……な…」

アーチャー「ガハッ…馬鹿な……」

アサシン「退屈な戦いでした。　よもや油断でもしてましたか？
でしたら不愉快です。　実に……ね」

キャスター「魔術が封じられて……」

ライダー「はぁ、はぁ…掠りすらしない……とは」

バーサーカー「……」

クロナ「三体一緒に相手してこれですか…興ざめですね…」

《セイバー、アーチャー、ライダー、キャスター、バーサーカー退場》

香「神鳴流奥義！　斬岩剣！！」

優「ディバイン…バスター！！」

シルヴィア「はぁぁあああああああっ！！」

霞「私の力がなんでモブ相手かなー…無双しても自慢にならないー」

『仮面ファイナルアタッククライド、ディディディディケイド！！』

飛翔（ディケイド）「タァァアアアアア！！」

『仮面ファイナルアタッククライド、ディディディディエンド！！』

アリシア（ディエンド）「フッ！！」

カスミ「アリア！！」

アリア「問題ありません！！」

カスミ「叶！！」

叶「いつでも！！」

カスミ「見ていろ…これが魔道の真髄だ！！」

カスミ、アリア「「魔法具！　神明魔祓の書！！　砲撃魔法選択！！」」

叶「月詠！　チャージ！」

月詠『チャージ完了です』

カスミ「合わせろ…」

アリア、カスミ「「スターライト…」」

叶「星光砲」

アリア、カスミ「「ブレイカー！！！」」

叶「発射！！」

《ズドーーーーーーーーーーーーンッ！！》

《モブ敵Aグループ退場》

アリス「あっちはかなり凄いなぁ」

薫「やり過ぎやり過ぎ…」

鈴「薫も虚空乱発してるじゃんｗｗｗ」

薫「ほな、鈴と連携を」

薫、鈴「「散れ（散りぃ）、千本桜・影厳」」

《ズバババババババババババッ》

アリス「私……居る意味あるのか？」

《モブBグループ退場》

敵側ナンバーズ「「…「「つ、強い」」」…」」

クアットロ「当然ですわぁ」

トーレ「準備運動すらならんな」

ドゥーエ「もっといたぶりたかった」

チンク「ふむ…こんなところか…」

《敵側ナンバーズ退場》

尾獣「「…「■■■■■■■■■■!!」」…」」

百合姫「うるさいわねぇ…静かに叫べないのかしら」↑尾獣の精神に干渉して破壊してる

貴史「もう面倒臭くなったな…」

百合姫「終わらす？」

貴史「おう…お前ら！！　シメ入っぞー！！」

アサシン「では…」

クロナ「やりますか…」

蛮「……ああ…」

乱「大丈夫だ……怖くなんかない…」

貴史「今こそ…汝が右手に」

アサシン「その呪わしき命運尽き果てるまで」

クロナ「高き銀河より下りたもう蛇遣い座（アクスレピオス）を宿すものなり」

蛮「されば…我は求め」

乱「訴えたり……」

貴史、アサシン、クロナ、蛮、乱「「「「「喰らえ――その毒蛇の牙を以て！！　汝が神に、我が身を捧げん！！」」」」」

《貴史、蛮は腕を悪魔の腕に変える》

《アサシン、クロナ、乱は腕を赤い悪魔の腕に変える》

貴史、アサシン、クロナ、蛮、乱「「「「「血に染まれ…」」」」」

フェイト「突撃！！」

貴史、アサシン、クロナ、蛮、乱「「「「「赤い（ブラッディ）蛇（スネー）咬（クバイト）！！！！！」」」」」

《閃ッ！！》

フェイト「やっぱり……勝てないか…」

《残りの敵退場》

《数時間後、あのあと葉生を蘇生させて、また楽しく騒ぎましたマル》

百合姫「はーやっと終わったわねー」

鈴「なかなか楽しめたぞｗｗｗ」

ジェイル「さて、我々は帰るとしよう」

士貴「またな」

花梨「みんなもまたねー」

ゲスト全員「「…「「ああ！」」」…」」

貴史「っと、待った…せっかくだ読者にも新年の挨拶…しようぜ」

薫「ほな！　みんなご一緒に…」

全員「「…「「あけまして！！　おめでとうございます！！！」」」」

《番外編》　超の憂鬱（前書き）

今回はＧＢキャラのあの人と、超が出来てると判明。

《番外編》　超の憂鬱

▼　超　視点▼

「はぁ……」

「どうかしましたか～？」

研究室でモニターと睨めっこし、ため息をついてると、葉加瀬が声を掛けてきた。

「む、いやいや、なんでもないヨ」

「そうですか？」

「ちょっと考え事を、ネ」

私が見てるのはカスミ、薫、貴史先生の戦闘データネ。

カスミ・ヴェネーラ……三人の中で、魔法が凄まじい。

未来でも現代でも彼女が真祖でなければ、普通の魔法使いなら、偉大なる魔法使いになれたと言われる程。

近衛　薫……前大戦の英雄、紅き翼のサムライマスターである青山詠春（現在は近衛家に籍を入れてる）の娘。

内包してる魔力と気は、計るのも馬鹿らしい程。

そして神鳴流を修めていて、現代では次期関西呪術協会当主と言われてる人物。

南武　貴史……他の二人とは、比較するにも馬鹿らしい究極のチート。
その天才的なバトルセンスで、格上だった者達をバトル中成長して倒す。
５０は超える武器を体内に内包しており、怪我をしても即座に再生する。

味方であるなら、これ以上ないくらいの最高の存在。
敵なら、これ以上ないくらいの最悪の存在。

「一人でも厄介と言うのに……これは酷いネ」

「あー……南武先生達ですか？」

「そうネ」

葉加瀬の問いに肯定する。

まぁ、対策の為に戦闘映像でも見直すとしするカ。

【カスミ・ヴェネーラ】

「魔法の射手！　連弾・漆黒の２６８５０矢！！」

漆黒の矢を複数放ち、魔族を還す。
というか、多過ぎネ。

「断罪の剣！！　最大出力！！」

手の形を手刀のようにし、そこから魔力で刃を造る。
その大きさと魔力の密度は凄まじく、森の木々を全て切り裂く。
やり過ぎヨ。

「雷の斧!!」

腕を振り下ろすと、雷が敵に向かって落ち薙ぎ払う。
あ、地面がえぐれたネ。

「風の大鎌!!」

腕を横に振り、風の刃で敵の首を刈り取る。
木もまた真っ二つ。

「漆黒の炎嵐!!」

炎を纏いし嵐が、敵を吹き飛ばす。
カスミは魔法の秘匿云々より、自然環境を考えた方が良いと思うヨ。

【近衛　薫】

「竜之炎壱式　崩!!」

無数の火球が、敵を襲う。
容赦の欠片も無いネ。

「竜之炎漆式　虚空！！」

一つの破壊光線が、敵を一掃する。
なんだか、敵が哀れに思えてきたヨ。

「虚空！！　崩！！」

無数の破壊光線が、敵を殲滅する。
あ、涙目の鬼が……きっと何度も喚ばれては薫、カスミにやられてる鬼ネ。
可哀相に……。

「月牙！！　天！　衝！！」

巨大な斬撃を放つ。
泣き叫ぶ鬼達に攻撃するチート。
どっちが悪いのか、迷うとこネ。

「ビューティフル・シャルロッテ・クールホーン・Ｓ　ファイナル・ホーリー・ワンダフル・プリティ・スーパー・マグナム・セクシー・セクシー・グラマラス虚閃（笑）」

いろいろとツッコミたい気持ちになるけど、とりあえず破壊光線を出す映像。
自然環境を考えて！！　と言いたいネ。

【南武　貴史】

「……」

ただ歩いてるだけで、襲い掛かって来る鬼を吹き飛ばす映像。
おそらく、凄まじい程の速度で倒してるのだろう。
というか、なんか喋って欲しいネ。
技名を叫ぶとか……いろいろ。

プツンッと映像が終わり。

「こ、これだけ？　南武先生一つだけでしたよ？」

「南武先生は普通の戦闘では、この程度しか戦わないヨ」

「そ、そうなんですか……」

「うむ…」

このままでは私の計画が～。
そもそも、近衛　薫には従者が居ないはずネ。
なのに……鬼が居る。
南武先生だって、従者は金色一色と言わんばかりの人が従者なのに、
此処では赤屍　クロナという人物に変わってる。

「あ、南武先生といえば…手紙を預かってますよ？」

「手紙？」

「はい」

葉加瀬から手紙を受け取り、照明に翳して見たりする。

ふむ、なんだろうカ？

封を切って手紙を取り出す。

そして、書いてある内容に眼を向ける。

よう。

まずはじめにお前が知る過去に、俺達が居るかどうか……と聞きたかったんだが、カスミの話からすると、知ってるみたいなんで略すな。

んで、次だ。

現在、俺の従者が完全なる世界を殲滅しに、魔法世界に行ってる事は知ってるだろ？

そのついでとして、魔法世界に振り起こるであろう災いの対策を頼んでおいた。

魔力の枯渇では、カスミが知ってる星の契約の儀式で、他の星から魔力を火星へ供給する。

とりあえず数億の星と契約すれば、これから先…何万、何億と年数が経とうが枯渇する事はないだろう。

自然についても魔力があれば、再生するだろ。

てな訳で、麻帆良祭ではただ盛り上げる為に動いてくれ…。

南武　貴史

「……」

「あの…何が書かれてたんですか?」

手紙から顔を上げて天井を見てると、葉加瀬が手紙の内容を聞いてきた。

《♪~》

「ん?」

葉加瀬の問いに答えようとした時、私の携帯が鳴った。
それは今では鳴る事のない着信。

ワタシノセカイノ、ニンゲンカラクルトキニナル、チャクシン。

震える手で携帯を開き、メールを見る。

魔力が戻った。
緑も徐々に、増えてきてる。
歴史が日を追う事、改善されてるよ。
計画は成功したんだね。

おめでとう。

鏡　形而

発信者は、鏡（かがみ）　形而（きょうじ）。
私の……彼氏ネ。
そうカ……歴史は変わるカ。
なら、私の計画は必要ないネ。
少し過去を満喫して帰るとするヨ。

「葉加瀬…」

「はい？」

「計画は中止するネ。　未来は変わる…」

「そうですか」

「計画は中止するが、麻帆良祭は共に盛り上げようではないカ！！」

「はい！！」

未来は変わりつつある。
今よりもっと……良い方向へと……。

▲超　視点▲

これも一種の家族関係？（前書き）

雨季様のキャラとコラボです。

コラボ話……GBキャラ出しやすいのなんの……。

今回も貴史の『優しさ』が強調される話になりました↑

では、どうぞ……。

これも一種の家族関係？

▼　貴史　視点▼

ある日、要から手紙が届いた。
もう常連になりつつある要だが、一応説明しておこう。

俺って優しくね？

一条　要。
雨季様が執筆してる【胃痛じゃ済まないシリーズ】あれ？　違った？　ああ！　そうそう思い出した。

【チートじゃ済まないシリーズ】だ。
ええ、その【チートじゃ済まないシリーズ】の主人公だ。

可哀相な事に、胃痛という持病持ちだ。
原因はストレスらしくってな……。
まったく、適度にストレス発散しないからそうなるんだよ。

一刻も早く要の胃痛が治るように、俺は毎日神様にお祈りしてる。
嘘だけど…。

で、なんだっけ？

ああ！　思い出した！！　手紙だ手紙。
そうそう、要から手紙が来たんだった。
それで中を見てみると、近々こちらに来るらしい。
娘の叶を連れて……。

此処でさらに説明。

叶。
本名、神条（しんじょう）　叶（かなえ）
神崎　ジェイルと一条　要との間に出来た子供。

読者の皆さんには、既にお気づきの方も居るだろう。
そう、神崎　ジェイル。
俺の娘、神武（じんむ）　乱（らん）の母親も、神崎　ジェイルだ。

つまりこんな関係だ。

貴↓▽↑ジ↓▽↑要
史　←　ェ　←
　　神　イ　神
　　武　ル　条
　　乱↓異↑叶
　　父
　　姉

なんつーか、図にするとアレだな。
異様だなｗｗｗ

まぁ、説明もこのくらいに……乱の妹が来るらしい。
叶が姉の乱に会いたいと要の手紙に書かれてるのだが、正直ジェイルのとこへ行けと言いたい。

なぜなら俺の所へ来ても、乱はジェイルの所に居るからだ。

「はぁ、どうすっかなぁ」

「親父～」

俺が困り果ててると、後ろから聞き覚えのある声が……。

はて？　何故あいつが此処に？

後ろを振り向くと、そこには俺の娘である神武　乱が居た。

「おう、なんで此処に居るかは知らんがちょうど良いとこに」

「？　修行しに来たんだけど、どうかした？」

修行って……。

たまには、普通に遊びに来て貰いたいものだ。

「要とジェイルの子供が来る」

「そいじゃ！」

片手を上げて、帰ろうとする乱。

「まぁ、待て…帰ることはないだろ？」

「やだ！！　離せぇえ！！」

なんだ？　この慌てっぷり……嫌いなのか？

「叶の事、嫌いなのか？」

「ど、どうでもいいだろ！？　んなこと！！」

此処は一つ、聞き出すとしようか。

え？　乱の意見？　そんなもん知らん！！

「無理矢理にでも聞く」

「いやぁぁあああああああああっ！！」

そんな痴漢に、会ったような声を出すなよ。

耳が痛い。

数分後、そこには顔を真っ赤に染めて肩で息をしてる乱が居た。

「なるほど…嫌いじゃなく苦手なのか…」

「む、娘のおっぱいを揉みしだいておいて……変態」

「いや、前会った時は8歳だったし？　13となると結構あんだな」

「感想で白い目で見られるよ？」

「欲情しなきゃ良いんだよ」

娘の成長を見るのも親の勤め、親らしい事してねぇけど…。

しばらく乱を弄って遊んでると、馴染みある魔力を感知した。

「貴史パパ～。　乱お姉ちゃ～ん」

「うっ…」

「よう、叶一人か？」

「パパと一緒に来たよ」

にしては、居ないみたいだが……。

「美味い珈琲の匂いだ！！　とか行ってどっか行っちゃった」

何をしてんだ？　あいつは……。
美味い珈琲ねぇ……あそこか？
俺は携帯を取り出し、波児んとこに電話する。
「はいは～い。　喫茶店Ｈｏｎｋｙ　Ｔｏｎｋです」
「波児か？」
「おう、どうした？」
「そこに、珈琲飲んでのほほんとしてる長髪の親馬鹿は居るか？」
「特徴がわかりづれぇよ」
ふむ、ならどうするか……あ、そうだ。
「店内で俺の名前を出して、渋い顔をした奴」
「ちょい待ち……居たぞ」
やっぱり居たか……。
「そうか、サンキューな」
「よくわからんが、ああ」
携帯を切って、乱達の方を向くと叶が乱に甘えて抱き着いてた。
乱は、離そうとするが怪我をさせたらいけないと思ってるのか、
あまり力を入れずにもがいてる。

まるで、俺と要の関係を逆にした感じだな。

まったく、要もあんな顔をしてたのか？　腹立たしい。

「ほれ、要んとこ行くぞ」

「はーい」

「ふぅ…」

叶が乱から離れると、乱はあからさまにホッとした。

……まぁ、いいか。

そしてＨｏｎｋｙ　Ｔｏｎｋ前、乱達を連れて中へ……。

「波児…ブルマン一つとハンバーグランチ二つ」

「あいよ」

波児へ注文した後、店内を見渡す。

カウンターには、飲みかけの珈琲。

「波児…」

俺の言葉に波児は多くを語らず、ただこくりと頷いた。

するとまだ居るのか……。

気配を探ってみると、要の気配はまったくしない。

うまく隠れてるみたいだが……甘い！！！

「蜂蜜水よりあめぇえええええええええ！！」

植木鉢の物陰に一撃放つ。

「げぼるぐあっ！！」

すると、植木鉢の陰から要が奇声を発しながら吹き飛んだ。

フッ、いくら要が強くなろうが…ホンキートンクは俺の城（せかい）。

気配を断とうとも、俺の眼からは誤魔化せん！！

（※ホンキートンクは波児の城です。）

「いきなり何しやがる！！」

「乱、叶…美味いか？」

「うん！」

「美味しい…」

「そいつは何より」

「無視！？」

要の言葉を無視しつつ、波児が入れた珈琲を飲む。
いつものカウンター席で、隣に乱がさらにその隣で叶が、ハンバーグランチを頬張る。
要の席は叶の隣だ。

「んで、貴史。　その子達は？」

「俺の横に居るのが俺の娘で、その隣がそこで珈琲飲んでる奴の娘だ」
「へぇ～」

「お前ら、自己紹介しろ」

「神武　乱だ」

「神条　叶です」

「一条　要です」

「俺は王　波児。　よろしくね」

「「「はい（うん）」」」

「にしても、叶ちゃんと乱ちゃん似てるね？」

自己紹介も終わり、乱達はハンバーグランチをまた食べはじめた。
それを見て、波児がぽつりとそう言った。

まぁ父親が違うだけで、母親は一緒だしな……。

「まぁ、異父姉妹だ」

「すると…母親が同じで……」

波児は俺と要を交互に見る。
さっきの自己紹介前の説明を聞けば、誰だってそんな反応するわな。

「まぁ、そんなとこ」

「ふーん」

「「ごちそうさまでした」」
説明が終わった頃、タイミング良く乱達は食べ終わる。

「んで、どうすんだ？」

金を払いながら、叶に何がしたいかを聞く。
こちらは他の麻帆良と少し違うだけで、後は全部同じなのだ。
ゲトバの熱狂的ファンでない限り、ゲトバキャラ巡りなんてのは出来ない。

つまり、別世界とは言え麻帆良に住んでる奴に、麻帆良の名所案

内は無意味だろう……。

「ん～パパに針治療させてあげて」

「か、叶！！」

叶の発言に、感動して抱きしめる要。

此処でダメと言ったら、俺が悪者になるだろう。

だがな？

悪者扱いされても、やらなきゃいけないんだ！！

「パパ～苦しい～」

「いい娘に育って！！」

故に……

「駄目だｗｗ」

「おまっふざけんな！！」

間髪入れずにキレる要。

まったく、飽きないぜｗｗｗ

「親父……流石にそれは……」

「冗談だよ…。　ただ言っておかないと、いけないイベントなんだ」

「要らねぇよ！！　んなイベント！！」

「針治療なら名医を知ってる。　こっちだ」

要を無視して、麻帆良病院に向かう。

「患者の俺を無視すんなぁぁあああ！！」

よく吠える奴だ。

んで、麻帆良病院。

「金を払いに来たのか？」

こいつは……登場第一声がそれかよ…。

「ほらよ…」

今日の分を加えて金を渡す。

「ん？　多いぞ？」

「こいつの針治療分だ」

「よろしくお願いします」

「初回は無料だ。　だが、これは利子という事でもらおう」

汚っ！！　俺ん時はきっちり取りやがったくせに！！

「まぁ、いいか…。　んじゃ、俺達はサーカスでも見るか？」

確かこの時間帯は土度が、やってるはずだし。

「見るー！！」

「んじゃ、春木。　俺達は曲芸部の公演会場に居るから」

「わかりました」

さて、伝言も残したし行くとしますか。

はい、時間短縮。

麻帆良曲芸部のナイトメアサーカスは、いつものように満席だった。

猿が綱渡りしたり、ライオンが火の輪を跳んで潜ったりと、様々な演目があった。

その中で、うちの生徒を見つけた。

露出が高く、道化が被ってるような帽子を被った褐色肌の少女。

うまく虎を使役して、様々な芸を見せる。

乱や叶も眼を輝かせながら、楽しんでるようだ。

叶は予想範囲内だが、乱の反応は意外だった。

まぁ、楽しんでるから良しとする。

「ガァァアアアアアッ！！」

「ザジ！！」

「「「！！」」」

虎の咆哮と士度の叫びに、慌ててステージを見ると、虎がザジに向かって襲い掛かってた。

チッ…躾がなってねぇじゃねぇか！！

ーーーーブワッ！！

「「「「「！！！」」」」」

俺の殺気に叶、乱、ザジ、士度、虎が反応する。

しかし、その反応はそれぞれが違った。

叶と乱は頬に冷や汗をかいて、ザジと士度は俺の方を向いて、虎はガタガタと顔を青ざめながら震えていた。

その隙に士度が慌てて、虎を裏方へと退場させた。

俺に、感謝の意を込めた眼をして……。

しかし、一般人であるザジが俺の殺気に気づいたのは驚いたな…。

毎日、動物と居るからか？

（※貴史はザジが魔法関係者とは、知りません）

まぁ、いいか。
そのあとは、なんの問題もなく公演は終わった。

「はぁ、助かった」

「躾くらいしろよ」

「十分したはずなんだがな」

「手でも抜いたんじゃねぇの？」
俺の言葉に、ピクリと反応する士度。

「あんだと…オラァ！！　あんまり調子こいてると、スネークダンスさせるぞ？　蛇野郎」

「やれるもんならやってみろ！！　ヘボテイマー」

互いに超至近距離での、メンチの切り合い。

「お、親父…抑えて」

「そうだよ？　貴史パパ！！」

「士度さんも…」

「「チッ！！」」

乱や叶、ザジが止めに入った事で、一発触発状態は収まった。

「お、此処に居たか」

ちょうど良く、要が戻ってきた。

何処かすっきりした表情を見ると、憑き物が落ちたって感じだな。

せっかくの胃痛が……。

「パパ！！」

「んじゃ、次は何処行く？」

「サーカスは？」

「本日の公演は終了しました」

要の問いに答えたザジは、営業スマイルをしながら「またのお越しを」と言い、土度と奥に入って行った。

「終わったかー。　見てみたかったなぁ」

「まぁ、次の機会にな」

「今度は……ストレスを解消するお香が欲しいなぁ」

「……」

あれ？　もしかして父親の胃痛をしようと努力してる？　俺は手助け？　要もまた娘に抱き着いて感動してる。

やばいな……。

このままでは要のアイデンティティーが……。

「駄目？」

此処は乱に賭けるか……。

「乱は行きたいとこあるか？」

「別に無い」

「……そうか」

くっ…退路が断たれた！！

「というかお香を売ってるとこあるの？」

「俺んとこの麻帆良はあるにはあるが、なかなか効かなかった」

「じゃあ、無理なんじゃ…」

「いや、要の世界の麻帆良に無くて、俺の世界…まぁ、此処だが…こっちは専門家が居るんだよ。　お香とかに関してはチート級だ……」

「「あるんだ！？」」

乱と要は驚いた反応をする。

叶は驚いてないとすると、いくらか当たりはつけてたのだろう…。

針治療といい、お香といい……侮れねぇな。

「まさか、胃痛の元が居る世界に胃を癒せるものがあるとは……」

「シバくぞ…」

とにかく行くか……。

あんまゲストを連れて、あいつんとこ行きたくねぇが……。

そんでもってやってきました。

工藤家。

「普通の家だな」

「家だね」

「……」

「俺のダチの家だ」

ーーーピンポーン

「はーい。　どちら様…ってなんだ。　あんたか、どーぞー」

チャイムを鳴らして出てきたのは、工藤　卑弥呼だった。

よりによって会わせたくない奴を、手早く終わらせよう。

「邪馬人は居るか？」

「兄貴？　居ないけど」

こいつはラッキーだ。

「そうかそうか…そりゃあ運が悪かった……つーわけで叶、要…あき」

「ストレス解消するお香を、貰いに来たんだけど……」

「ああ、それなら私が調合するわよ。　ちょっと待っててね」

乱の一言で俺の全てが終わった。

卑弥呼のお香は邪馬人に劣るものの、超一流の腕を持つ。

要が抱えるストレスも、すぐに安らぐだろう…。

ああ、要の胃痛が……。

「はい、出来た」

「へぇ、早いな」

「伊達にレディ・ポイｚ…けふんっ…それほどでもないわよ」

「？　そうか」

「そいじゃ、またな」

「もう帰るの？」

「お香を貰いに来ただけだからな」

「そう…」

俺は要達を急かすように、いそいそと工藤家から離れた。

そして、たどり着いたのが公園。
先客、数十名。
殺気むんむん。
はて？　俺なんかした？
手に胸を当て、考える。

しかし、いくら考えてもまったくわかんなかった。
ん～これは……

「要…どう考えてもお前の客じゃね？」

「此処はお前の世界だろ…。　お前しか居ない」

「いや…奴（やっこ）さんは、お前を睨んでるし」

「どう見てもお前だ…」

「南武　貴史……」

殺気出しまくり集団の一人が、俺の名を口にした。

フルネームで……まぁ、わかりやすいっちゃあわかりやすい。
だが……

「ほら見ろ…やっぱりお前だ」

空気を読んでもらいたいね。
此処は要の名前を言うべきだろ…。

「要の名前がわからないなら、わからないと言ってくれれば教えるのに…」

「お前何言っちゃってるの!?」

「一条　要……」

「「!!」」

要の名前を……フルネームで……つまり、あいつらは……。

「要が狙いか」

「んなわけあるか!!　先にお前の名前が上がった事を忘れんな!!」

「声を張り上げんな…うっせぇ……」

「「!!」」

要との会話を楽しんでると、集団から魔力の集まりを感じた。
そして……ある言葉口にした。

「「…「「我が骨子は捻れ狂う」」…」」

その一言で、あいつらが何かよくわかった。

「「…「「カラドボルク！！」」…」」

要は即座に叶を抱え、回避に専念する。

そして、俺達親子は……。

「乱…見とけ……お父様の戦いって奴をな」

「頑張って～」

1%の力で、向かって来る宝具を蛇咬で破壊する。

「「…「「何！！」」…」」

「なんで襲ってきたか知らんが……悪(わり)ぃな…格が違いすぎる」

「……」

「「…「「！！」」…」」

要の無言の殺気に、後ずさる転生者共。

この程度で、後ずさるなら逃げる奴も居るかもな…。

そんな事を思ってると、後ろから魔力を察知…。

そして、結界が張られた。

「これなら逃げられない」

「フッ…上出来だ……乱」

さぁて……

「「殺るか…」」

「「…「ヒィッ」…」」

ーー蛇咬ー！

「「…「た、助けてくれー！！」…」」

ーーオラオラオラオラッ！！

「「…「死にたくなーい」…」」

ーー死ねや…蛇咬（シールドランス）！！

数秒後、ゴミの山が出来上がった。

そのあと、神（屑）とゼウスがやってきて転生者を回収。

そして、転生者を送り込んで来た元凶を教えてくれた。

転生者を送り込んで来た元凶……セト。

エジプト神話に出てくる神で、オシリス神の弟。

敵対、悪、戦争、嵐、外国の土地などが象徴とされてる存在。

ならそいつを殺そうと思い、ゼウスに言うと勘弁して下さいと頭を下げられた。

例え悪の象徴だろうと神は神。
世界を支える存在。
一体でも減れば崩壊するらしい。

神なんざ増えてんじゃんと言うが、神一体増える事にその神の力の分だけ、世界が増えるらしい。

いろいろあるんだねー。

と、まぁゼウス達が帰った後は、ショッピングしたり、ゲーセンで遊んだり、要の胃痛を起こしたりと、それなりに楽しむ事が出来たとさ…。

▲　貴史　視点▲

《特別番外編》　ラカン&カゲタロウVタカシ・ナンブ（前書き）

三人の転生者のノクターンは書けなかったけど！！

ｉｆ魔法世界編は書いたどー！！

《特別番外編》　ラカン&カゲタロウVタカシ・ナンブ

▼　貴史　視点▼

『予選Dブロック決勝。　南方、ボスポラスのカゲタロウーッ』

カゲタロウと呼ばれた黒い人（？）は、片手を上げ自己アピールをする。

いやぁ、勢いで出たはいいが……。

此処レベル低すぎだぜ……。

せっかくこの俺様が誰とも手を組まずに、さらに1%の力だけで相手してるってのによ……（まぁ、実際は1%も出して無いがな）。

ちったぁ、根性出せってんだ。

『さぁ、此処までタッグ戦を一人で勝ち進み、話題を作ってきたカゲタロウ選手。　予選決勝において、遂に新たにパートナーをエントリー！　そのパートナーとは…』

一緒に来たクロナのやる気に火が点かず、結局一人で出たけど…

…つまんね。

俺も観戦してりゃあよかった。

『驚くなかれ、公式の場に姿を現すのは十年ぶりとなります。　彼こそは、伝説の傭兵剣士！！』

つかさ……

『自由を掴んだ。　最強の奴隷拳闘士!!　大戦期平和の立て役者……』

『紅き翼!!　千の刃のジャッ…』

戦闘まだ？　……ん？　ああ、登場シーン邪魔した？　すまんすまん（笑）

『対する対戦相手は!!　カゲタロウ選手同様に一人で出場、カゲタロウ選手の二番煎じと思われたが、その試合のすべては一発ＫＯ勝ち!!　試合時間は一秒以内という偉業を成し得た…』

お、俺だ…。

『タカシ・ナンブーッ!!　その脅威的力は、ジャック・ラカンに通用するのかーっ!!』

「何やってるのー!?　あの人ー!!」

ん？　少年の声が一瞬聞こえたなぁ…。
見に来てるのか？　何処だ？

キョロキョロと観戦席を見ると、黒髪で犬耳の兄ちゃん発見。
その隣に、ネギを大人にした感じの人を発見。

あれか……。

俺が手を振ると、面白いくらい慌ててた。

▲　貴史　視点▲

▼　ネギ　視点▼

今日は、僕が強くなるきっかけになって下さったカゲタロウさんの観戦に来た……はず、だったんだけど。

『紅き翼！！　千の刃のジャック・ラカーンッ！！！』

「え…」

「何やて！！？」

なんで此処にラカンさんが！？

そんな思いが、何度も何度も浮かび上がる。

「あのおじさん。　ネ…ナギさんのお師匠じゃなかったっけ？」

「オイッどーゆーことやナギッ！」

小太郎くんは僕の胸倉を掴み揺するけど……。

「ぼ、僕にも何がなんだか…」

「あの人が出たら、優勝なんて無理やろっ！」

そ、そんな事言ったって～……。

あっ！！

そんな時、僕はある答えに行き着いた。

そうだよ…。

うん、きっとそうだ！！

「ニセモノのソックリさんかも！」

「ニセモノ！？」

「うん！　そう考えれば納得」

『タカシ・ナンブーッ！！　その脅威的力は、ジャック・ラカンに通用するのかーっ！！』

ラカンさんの方をもう一度確認しようと、闘技場を見るといつの間にか、司会が進みラカンさんの対戦相手が現れた。

って…

「何やってるのー！？　あの人ー！！」

「あかん！　あの兄ちゃんが出てきた時点で、俺ら優勝出来ひん…」

貴史さんの強さを、よく知ってる僕たちにはわかる。

彼ははっきり言って、ラカンさんより上……。

例え本物のラカンさんでも……って…ん？

まさか……

「あの人もソックリさん？」

「アホッ！　あんなんが二人もおったら世界が終わるわ！！　現に見てみぃ！！　こっち見て手を振っとるで！！」

あ、ホントだ……。

僕らは、本当に優勝出来るのだろうか？

▲　ネギ　視点　▲

▼　貴史　視点　▼

『開始（インキピテ）！！』

司会の合図と共に、大きく構えギュルルルッと回転しながら跳躍。

そして……

――羅漢適当に右パンチ！！

巨大な拳圧が飛んできた。

「安心しな、寸止めだ…」

寸止め？　はぁ…なんか締まらねぇなぁ…。

こんな気分はいつ以来だ？　確か最初はカスミ達だったな…。

クロナ（アサシン）と本気で組み手するようになった頃、カスミが「弱くなったか？」と聞いてきたんだったな。

最初はカスミが何を言ってるかわかんなかったが、話を聞いてみると俺の潜在能力が感じ取れなくなったらしい。

それからだ……。

今までへーこらしてた魔族や鬼共が、嘗めて来たのは。

まったくもって……不　愉　快　だ　ぜ！！

ーーーーブワッ！！

拳圧で起きた土煙を、殺気だけで吹き飛ばす。

さっきまでラカンの勝利で盛り上がってた、観客の声もシンッと静まり返った。

「おいおい…マジかよ…」

「寸止めってのは、こうやんだよ」

俺はラカンと同じ構え、同じ跳躍をして……

ーーーー南武超適当に右パンチ！！

ラカンの拳圧よりも、巨大な拳圧で叩き付けた。
そして煙りが晴れると、ラカンは防御をしたポーズをしていて、カゲタロウは地面に減り込んでた。

「安心しな…1%未満の力でやった」

「おいおい…これで1%未満かよ……」

『な、なんとー！！　ラカン選手の勝利と思いきやラカン選手の技を喰らい、倒れるどころか反撃をしたーっ！！』

瞬間、会場は観客の声に包まれた。

「ハッ…まさか実力を隠してたとはな…」

ラカンは構えてそう口にした。

だから……

「一応訂正しといてやる……。　俺は実力なんざ隠してねぇ…。ただ、テメェが感じ取れねぇだけだ」

勘違いされちゃあ…堪らんしな…。

俺はそのままタカミチのように、ポケットから手を出さずに立っているだけで、ラカンと対峙する。

「そうか、よ！！」

ラカンは縮地に近い瞬動で、俺の前まで近づき正拳突きを繰り出す。
常人なら必殺級の威力を誇る正拳だろうが、俺にとってはカウンターしてくださいと言ってるような攻撃だ。

だが、カウンターで伸びてしまってはつまらん。
故に……俺は回避を選んだ。
それも相手から見たら、まるでビデオのコマ送りのような動きで……。

これはＧｅｔＢａｃｋｅｒｓ－奪還屋－で、出てくる回避方法。
本来なら無限城のベルトラインという特殊空間でしか使えない避け方だが、ある一定レベルに到達した時、通常空間でも出来るようになったのだ。

「！！」

ラカンは目を見開かんばかりに、驚いていた。

だが、驚いてばかりでは困る。

俺はがら空きの横腹に、軽く拳を減り込ませる。
すると、ラカンは壁に減り込んだ。

「……やべ…やり過ぎたかも」

司会が何か言ってるが、正直描写するのも飽きたから、これからはラカンと俺の戦いだけ、描写することにする。

そして、壁から抜け出しラカンは幽鬼の如く、ゆらりとした動作で少し歩いて立ち止まった。

「くくく…くくくく、フフフ……フフフフハハハハハハハハハハ…」

『ど、どうしたんでしょうかラカン選手。　あ、頭でもぶつけてしまったんでしょうかぁ？』

「ハハハハ…フゥフフハ、ヌフウフハ、ウハハハハ、ワーハッハッハッハッハハは…」

ラカンはひとしきり爆笑した後、気を解放した。
気は圧力（プレッシャー）となり、俺を押し潰そうとする。
まったく効かんがな…。

そして一瞬構えを取って、すぐにラカンは動き出した。
俺から見てゆっくりゆっくりと、ネギ達から見るとラカンの動きは、見えてないだろう。

俺は１５センチ程身体をずらして、ラカンの拳をいなす。
それに反応したラカンは、空いてる左腕で拳を繰り出す。
次はコマ送りのように見える避け方で、ラカンの後ろまで行く。

「蛇咬！！」

そして、がら空きの後ろから蛇咬を放つ。

「グフッ！！」

すかさずラカンは回し蹴りを放つが、はっきり言って遅すぎる。

「終わらすか」

後ろへ下がり、ラカンの足が通り過ぎたのを確認したあと、１％で出せる最速で元の位置まで戻り一撃を放つ。

それは疾風の王が弥勒　紫紋を撃破した一撃。

その名も――――

――――疾風の一撃!!　（ネーミングセンスが悪くて、すまねぇな）

「ぐっ……ハッ」

ラカンは地に膝を着き、倒れた。

そして、カウントが始まる。

『２０!!』

２０カウント経っても、ラカンとカゲタロウは起き上がる事は無かった。

『タカシ・ナンブの勝利です!!　彼の伝説の英雄を打ち倒したーッ!!』

まぁ、それなりに楽しめたぜ。

そ・れ・な・り・に……な。

▲貴史　視点▲

《特別番外編》　会議（前書き）

ｉｆ魔法世界編その２

此処で一つ我が小説内の豆知識。

《番外編》と《特別番外編》の違いについて……

《番外編》は本編に何かしら影響が出ますが、《特別番外編》は完全に影響しません。
ただｉｆ貴史の強さですが、いずれは本編の貴史もｉｆ貴史の領域に入ります。

《特別番外編》　会議

▼　貴史　視点▼

あのあと、少年の行動を見てみるとラカンとカゲタロウが、少年と犬の修行に加わってた。

いやー少年も頑張ってるねー。

そして、俺はと言うと……

「1%でも瞬殺では、救いようがありませんね。　もっと制限をつけましょうか」

クロナと会議をしてる。　その会議内容は、いかに大会が楽しくなるかどうかの事。

「制限つーか…相手が話にならん。　いっその事、少年を強くさせるか？」

「却下で♪」

「じゃあ、どうすんだよ……」

「そうですね……。　とりあえず1%以下で戦いましょうか」

1%以下って、0．0000000001%とかか？　それでも勝てそうなんだが……。　たく、加減とかいろいろ考えてるの俺だけだぜ？　きっと…うわっ俺優しい……あまりの優しさに全チートが泣

くね。

「誰も泣きません」

「心を読むな」

こうしてだらだらと会議が延びるわけだが、一向に妙案が閃かない。

「お、此処におったか」

机でだれてると、後ろから聞き覚えのない声が聞こえてきた。
人違いだと親切に教えようと後ろを振り向けば、そこにはローブを着た女性が居た。

はて？　何処かで見たような……誰だ？

「お主が南武　貴史じゃろ？」

「そうだけど」

「あの試合には驚かせたぞ？　まさかあのジャックを倒すとはな」

馴れ馴れしいなぁ、おい。　マジ誰だ？

「ヘラス帝国第三皇女、テオドラという方です」

「へぇ…王族ねぇ」

「き、気付いておらんかったのか！？」

「興味ないしな」

「ま、まぁ…良いじゃろ。　ところで何をしておったのだ？」

顔を引き攣らせ、クロナの後ろにあるホワイトボードに眼を向けて、固まるテオドラ様ー。

「つまらない大会をどう楽しくするか……じゃと？」

「おう」

「ちょうどいい…。　貴女も考えてください。　とりあえず１％の力で戦っても先の予選と同じ…さらなる制限を」

「ふざけるな！！」

クロナの発言を遮るように、テオドラ様ーの怒声が部屋に響き渡る。

はて？　俺何かしたか？

「参加者は皆、一試合一試合全力でやっておるのだぞ！？　それをおぬしらは…」

「そうは言いますがね。　レベルが低すぎて話にならないんですよ……。　実際…」

「ッ！！」

キッとクロナを睨みつけるテオドラさまーだが、クロナはいつものようにニコニコ顔。

「ならば…お主らはお主らで、制限なりなんなりするがいい！！」

そう言って、もう此処に居たくないと言わんばかりに、この部屋から出ていった。

「で、どうします？」

「テオドラさまーが言うんだ。　一度全力でやってやろうぜ…」

「それでは……」

そして、本戦第一試合。　俺が全力のさらに本気でやろうとした試合。　結果は相手側の気絶で終了。

ちなみに俺は何もしてない。　相手と対峙しただけで、相手側が勝手に気絶したんだ。

ＶＩＰルームを見てみると、呆然としたテオドラさまーが居た。

テオドラさまーがこちらに眼を向けた時、俺は口パクでこう言った。

な？　は　な　し　に　な　ら　な　か　っ　た　ろ？

ラカンも居たから俺が言った事も伝わるだろ…。　さてと、制限……決めないとなぁ……。

▲　貴史　視点▲

▼　テオドラ　視点▼

今、妾は南武　貴史の試合を見に来とる。　正直…来たくはなかったが、ジャックの奴が見たいと、言い出したからしょうがなくだなぁ……。

「ん？　相手フラフラじゃねぇか…」

ジャックの言葉に貴史の対戦相手を見ると、確かにフラフラしておる。　頭でも痛いのじゃろうか？　と思っておったが、これもジャックの言葉で原因がわかった。

「成る程な……あいつ本気（マジ）だぜ」

「あいつ？」

ジャックの方を向くと、ジャックは貴史の方へ視線を向けてた。

そうか、本気か……。

妾の言葉に心を打たれたのだな。　と思ってた時期が一時期あったのじゃ…。

試合は一瞬にして着いた。　相手側の気絶で……。　一瞬何が起きたかわからなかった。　開始の合図と共に、相手側の気絶。

ジャックに何故相手が気絶したか聞いてみると……。

「そりゃあ…オメェ貴史の気に、当てられたんだろうぜ。　あいつは余裕で俺を倒せる男だぜ？　なんの制限もなく、マジでやるなら誰でもああならぁ…いや、勢い余って自殺でもするんじゃねぇか？」

ジャックの言葉に、言葉が出なかった。　もう一度、貴史の方を見ると口パクで何か言って退場した。

「ほぅ～」

「貴史はなんて言っておったのだ？」

「ああ、「な？　話にならなかったろ」って言ってたぜ」

「そうか……」

あやつはあの強さを手に入れるのに、どれ程の努力をしたのじゃろう…。

（※最強の暗殺者（クロナ）との殺し愛です）

あやつを倒せる奴はおるのか？

（※沢山居ます）

妾はあやつの背中を見えなくなるまで、見続けた。

その背中は何処か孤独に満ちて…

（※いえいえ、貴史は孤独ではありません。　カスミや薫、クロナにチート達が居ます）

さっきから電波が……うるさいのじゃ…。

（※事実だよ！！　コノヤロー！！）

もう、わかったからあっちへ行け

「何してんだ？　ほれ、戻るぞ」

「あ、待つのじゃ」

電波の相手をしてると、ジャックはすでにドアを開けて出ていく前だった。

▲　テオドラ　視点▲

《特別番外編》　会議（後書き）

次はいよいよネギとの試合！！

貴史の制限は１％未満で戦う事と、ネタ技のみ使用となっております。

何卒…ネギ達を応援もしくは黙祷をｗｗ

《特別番外編》　ナギ（ネギ）＆コジロー（小太郎）ＶＳタカシ・ナンブ（前書

読者の声を作品に入れちゃった♪

何処にあるか、わかるなら答えてみそ？

そして、貴史の戦う時に引き出す実力の数値を当てた香崎様には…

……すいませんまだ決めてません。

いつかきっと賞品を出しまーす！！

《特別番外編》　ナギ（ネギ）＆コジロー（小太郎）ＶＳタカシ・ナンブ

▼　貴史　視点▼

数々の試合を勝ち抜いて、ついに決勝戦へと進んだ俺。　いよいよ、少年と犬との大勝負。

あいつらがどれほど強くなったか、今から胸が高鳴るぜ。

ハンデは三つ…。

一つ、１％未満で戦う事。

一つ、【蛇咬】などの本気技を使わず、ネタ技を使う事。

一つ、少年または犬が俺に、一撃ぶち込めば俺の負け。

ここまでやったんだ。　楽しませてくれよ？　少年！！　……にしても遅いなぁ。　かれこれ１５分だぞ？　まさか逃げた……ってわけじゃなさそうだな。

少年が闘技場へ現れた事で、会場は歓声に包まれた。

「よう…少年。　逃げずに来れた事、褒めてやるよ」

「貴史さん……。　お願いがあります」

お願い？　まさか負けて下さいとか、賞金を譲って下さいとかか？　やっべ、もしそうなら殺してしまうかも…。

「僕はあなたに勝って、絶対に優勝しなくてはいけません」

少年の言葉に殺気が、滲み出てくる。　だが、それも次の言葉で消えた。

「それに、ラカンさんに一人前と証明しないといけません」

「だから？」

「全力でお願いします」

「断る」

「な、なんでですか？」

「本気で言ってるのか？」

もし本気で言ってるなら、一切合財容赦のかけらもなく消してくれる。

しかし、少年は顔を歪める。　今、少年の考えはおそらくこうだろう。「優勝して亜子さん達を助けないと」「ラカンさんに一人前と認めてくれるよう戦わないと」「でも、本気の貴史さん相手に勝てるのか？」　この三つの思考がぐるぐると回ってるはず……。

「……ダメ、ですか？」

「一撃だ」

「え？」

「少年もしくは犬が、俺に一撃ぶち込めば負けてやるよ」

「兄ちゃん。　そいつは嘗めすぎやで」

今まで黙っていた犬が、気を放出しながら言う。

「俺らはアレから、必死に修行したんや！！　一撃くらいなら、楽に当てられるで！？」

「なら、当ててみな。　言っとくがな？　エヴァの弟子入門試験みたいな、ヘロヘロ攻撃が一撃とは認めんからな？」

「では！　全力全開！！　どんな手を使ってでも勝たせてもらいます！！

――――――――来れ！！！」

『それでは決勝戦……開始！！！』

少年がアーティファクトを出して、決勝戦の幕は上がった。

にしても、アーティファクトは手帳型。　原作と同じか、別物か……。

「ラス・テル・マ・スキルマギステル！　契約に従い我に従え、高

殿の王！！」

へぇ～【千の雷】かぁ……。　ちゃんと習得してるとは、えらいえらい。

「ナギばっか見ててええんか？」

俺が少年の詠唱が終わるまで、立ったままで居ると後ろに回り込んだ犬が、殴り掛かってきた。

それを流れる動作で、犬の手首を掴み背中を合わせるような形になる。

「！！」

背中越しで犬が驚いてるのを、手に取るようにわかる。

「んじゃ、少年の準備が整うまで相手してくれや…」

ーーーーネタ技その１

「【超（スーパー）オーバーキル】！！」

犬の手首を解放し、まずは腹に肘打ちして、そこから顎に絶招を放つ。

「まだまだぁ！！」

左右の鎖骨に、手刀を放ち叩き折る。　トドメに胸板を蹴り抜くように蹴る！！

「が…」

ーーーーーブワッ！！

「術式兵装、【雷天大壮】！！！」

「ん？」

後ろから魔力の嵐が吹き荒れ、後ろを見ると少年が拳を放つ寸前だった（俺の顔面に向けて）。　それをひょいっと軽く避ける。

俺が避けたあと、少年は急停止したかのように止まって振り返りながら、肘を放って来る。

カウンター気味に少年の顔面を殴ろうとしたら、さらに速度を上げて回り込み肘打ちを放つ少年、それを蹴りでカウンターで放つが、少年はさらに速度を上げて後方へ回避する。

そして、また少年から攻撃……。

「はぁ…」

これは少し癪だが、原作通りの対処でやるか…。　えっとストリーマーはっと……ああ、これか…。

と、などなど考えつつ少年のラッシュを回避中。　あ、犬が入ってきた。

それじゃ……ぼちぼち…。

ーーーネタ技その2

「流派・東方不敗が秘技！　【十二王方牌大車併】！！」

腕を大きく円を描くように動かし、そこから梵字が現れ、そこからさらに小さい俺が犬と少年に向かってラッシュする。

そしてーーーーパチンッと指を鳴らして小さい俺爆発。

その爆発に巻き込まれ、倒れる少年と犬……っていうかもろすぎね？　流石にこれは無いだろ。　ほら、立って観客を楽しませろ。　そして、読者の予想を裏切れ！！　秋代の限界を無視するんだぁぁあああ！！　っとメタ思考は置いとくか…。　少年と犬が立ち上がったし……。

「はぁ…はぁ…」

「くっ…ナギ、まだ行けるか？」

「うん。　大丈夫だよ」

「ほな、行くでーーーー我流犬上流獣化最終奥義！！　【狗音影装・千影爪牙】！！」

犬は獣化して、さらに千の影精で編まれた爪や牙を装備した姿となる。

それは原作の狗音影装よりも、禍禍しい姿だった。

「行くで！！」

コジローは、狼姿のまま瞬動で近付く。　今までのどの瞬動より

も速く、そして鋭かった……が、俺にはまるわかりだ。

「【覇皇終焉波動覇】」

九つの気弾を作り上げ、一つへと集める。　そして、コジローに向けて撃ち込む！！

「んなもん！！」

コジローは影爪で気弾を引き裂き、速度を緩めずに向かって来るが、既に俺は次の攻撃に移っていた。

「流派・東方不敗！　【超級覇王日輪弾】！！」

拳に高めた気をコジローへ放つ。　その気弾は先の【覇皇終焉波動覇】と違い、巨大で簡単に引き裂く事は、出来ないモノだ。

「なっ！　ガァァアアアアアアッ！？」

気弾はコジローを包み込み、その灼熱の熱を持ってコジローと、コジロー周辺のステージが蒸発した。

（※コジローは蒸発しておりません！！）

「１％未満？」

観客席からハッキリと聞こえた声。　安心して欲しい……俺も内心びっくりしてる。

「切り札、その３！！」

少年の声がしたので、ようやく準備が終わったのかと少年を見れば、まだ掌握すらしていなかった。
はやくしてほしい…。　いつまで待たせる気だよ。
そして、左腕と右腕に【千の雷】を固定して掌握。　原作で言う【雷天大壮2】となった。

つまらん。　犬でさえ、原作を超えてるのに少年はこれか……はぁ。
そして、また始まる少年のラッシュ。　常時雷化により、出がかりを潰される事を克服。　そして思考加速と身体機動加速による近接戦闘。

「だが、まぁ……避けれるんだがな」

「へへっ、罠にハマりましたね？　貴史さん」

ニッと主人公スマイルをして、笑う少年。　そのスマイルで、いったいどれだけの女性を落として来たんだろう？　そしてこれから、どれだけの女性を落とすんだろうな……。　知りたいようでどうでもいい。

まぁ、そんな事より影の沼みたいなのにハマった俺だが……どうするかな。
普通に抜け出せる。

少年は後ろへと下がり、左右の魔法を解放して、統合をさせる。

「切り札、その４！！　ネギオリジナル！！　【雷神槍・巨神ころし】！！！　いきますよ。　貴史さん」

「んじゃ、やるか……流派・東方不敗が最終奥義！！　オレのこの手が黄金に輝く！！　貴様を喰らえと轟き叫ぶ！！　喰らえい！！　【石破！！　天驚ゥゥウウ！！　蛇（スネーク）ッ……咬（バイト）】ッ！！！」

俺が極限まで高めた気弾は、黄金に輝く悪魔の腕の形となり、少年へと向かっていくが少年は掲げた槍を下げて、左手を突き出す。

――そして、原作通りに切り札その５が発動した。

「切り札、その５！！　ネギ流闇の魔法！！　【敵弾吸収陳】！！！　うおおおおおおおおおっ！！！」

俺の【石破天驚蛇咬】と、ネギがぶつかり合う。　そして、ネギは俺の攻撃を吸収し続ける。　どっかの誰かが不可能だと叫んでるが、ネギは諦めずに掌握しようと頑張っていた。

というか……勢いでネタ技に【蛇咬】を合わせたけど、これは大丈夫なのか？　ふと、観客席の方を向くと、クロナと目が合った。　クロナはいつものようにニコニコして……訂正、いや……ニコニコはしてる。　してるんだが…キレてらっしゃる。　首を刈っ斬るジェスチャーをしてるし……。

これが終わったら、また殺し愛だな。　それも一方的な……。

えっ？　少年？　少年ならいつの間にか俺の【石破天驚蛇咬】を掌握してこちらを殴り掛かってきてるが、俺の分身（アバター）が少年を殴り飛ばす。

既に俺の生きる道は終わった。　ならば思いっきり使ってやるぜ！！

「「「「「いくぜ？　少年…」」」」」

俺を含めて、五人が指定位置に並ぶ。　やる技はこれだ！！

「「「「「この魂の炎！！　極限まで高めれば倒せない者などぉぉおお……ない！！！」」」」」

五人の俺は金色に輝きだし、掲げた拳は赤く輝く。

「俺のこの手が！！」

ーーーー拳はさらに輝き

「真っ赤に燃える！！」

ーーーーそして、紋章が何故か浮き上がり

「お前を喰らえと」

ーーーー少年は立ち上がるが、時既に遅し！！

「轟き叫ぶ！！！」

一一一一五つの紋章は重なり合う。

「ばぁぁああく熱！！」

一一一一そして…

「「「「「シャッフル！！　同盟けぇぇえええんッ！！！」」」」」

【シャッフル同盟拳】は解き放たれた。

『試合終了ー！！　優勝は……』

こうして、俺の人生は終わった。

ん？　最後？　ハハッ…クロナによって星にされたよ……。

火星は――――――赤いです！！！
ハッハッハッ…アッハッハッハッハッハッハッハッ……。

▲　貴史　視点▲

《特別番外編》　ナギ（ネギ）＆コジロー（小太郎）ＶＳタカシ・ナンブ（後書き）

ｉｆ貴史……ネギま！永住ルート。

恋人キャラ、アサシン（そこ！　自分自身に恋とかナルシー？　とか言わない！！　前は自身であっても転生後は別人なんだから！！）。

カスミ・ヴェネーラ。

近衛　薫。

龍宮　真名。

ザジ。

神崎　ジェイル（？）

ハッピーエンドならず、バッドエンド。

原因、クロナの約束を守らなかったから。

さらば、相坂　さよ！！　～さよ、涙の卒業～（前書き）

後半にＡｒｉｓｈｉａ様の魔法少女リリカル……なんとか！とのコラボ！！

さらば、相坂　さよ！！　～さよ、涙の卒業～

▼　貴史　視点▼

「はぁ？　少年に魔法がバレた時の対処の方法を、教えてやってほしい？」

「はい」

あ、どうも…。　唐突でついていけない読者の為に、説明するとこうだ。

ホンキートンクでコーヒーを飲んでぼーっとしてる俺に、突然明日菜がやって来た。　どうでもいいが久々の登場だな。　まぁ、それはいいとして、少年が魔法バレで困らないように、その対処法を教えてあげてほしいとの事だ。

というか……

「少年を見限ったんじゃねーの？」

「まぁ、そうですけど……」

「まぁ、いいけど」

「あ、ありがとうございます」

「はいはい…」

それじゃ、とりあえず少年の所へ行くか。　波児にコーヒー代を払い、俺は少年を探す。

テクテク歩くこと2時間。　校舎の裏で少年を発見。　ついでに綾瀬も発見した。

「ん？」

少年の方へ向かおうと足を進める事に、少年の顔色が青くなってるのがわかる。

だんだん声も拾える距離まで、近付いたので聞いてみる事に……

「あわわわわわ…」

「ネギ先生……貴方はまさか……魔法使いですね！？」

「！！」

綾瀬の発言に、弁明しようもない顔をするネギ。

確かにアレじゃあ、すぐバレるわな…。

「やはり」

「ち、ちちち違いますよ！」

まぁ、バレるのもまずいので助けるとしますか……。

「おーい。　少年と綾瀬ー」

「あ、貴史さん！」

「南武先生！！」

俺の言葉に反応して、少年は助かったというふうな顔をして、綾瀬は聞いて下さいというふうな顔をして、俺の所へ来た。

「お前ら何してんの？」

「聞いて下さい南武先生！！　ネギ先生は魔法使いです！！」

「……」

さて、どうやって誤魔化すか……。　少年はまたあわあわと慌てるし……しょうがない、あまり気は進まんが……。

俺は綾瀬の額に手を添え、もう片方の手を俺の額に当てる。

「あの…南武「熱はないみたいだな」わ、私は正常です！！」

「はぁ…綾瀬」

「なんですか？」

「この科学の時代…魔法使い？　小説の読みすぎだ」

「で、でも…ネギ先生は杖に跨がって！！」

俺が誤魔化そうと綾瀬を諭すが、綾瀬は自分で目撃した少年の奇

行を言いはじめた。
なんでも少年は杖に跨がって空を飛び、木の上から降りられない猫を助けたとかなんとか……勘弁して…。

「綾瀬…俺もまだまだ若い。　世界の全てを知ってるとは言わんが、これだけは言っておく……」

「なんですか？」

「魔法なんてもんは、お伽話の中だけだ」

ってオイ…少年。　なんだ？　その「魔法は本当にありますよ」みたいな顔は…。
あと、「貴史さんも関係者ですよね？」的な顔は…誰の為にやってると思ってんだよ。

「でも！」

「綾瀬……武術には虚空瞬動というもんがある」

このままじゃ引き下がらないと悟った俺は、バラしても問題ないようなモノで誤魔化す事にする。

「虚空、瞬動？」

「空気を蹴り、宙を走る技術だ。　綾瀬が見たのはそれだろ。　少年の杖、体型を見て綾瀬の脳内は、少年が魔法で飛んでると認識したんだよ」

さて、これで信じてくれよ？　たるいから……。

「でもネギ先生は…」

「本当に飛んでたのか？　ほ・ん・と・う・に？」

「……見間違い、かもしれないです。　そう、ですね。　現、実に……魔法が、あるはずない、、です」

眼から光が消えて、魔法を否定しながらフラフラと綾瀬は立ち去った。

はぁ…軽い暗示だからまた目撃したらどうしょうもないな。

「あ、あの」

「少年……君の為の補習授業を行う！」

「え？」

魔法を使わせないってのもいいが、それでは駄目な気がするし…魔法を使うにしても、周囲から見て違和感無いようにしないとな…。

綾瀬が戻って来ないように、人払いの結界を張って少年の前に向き直る。

「いいか？　少年。　まず魔法がバレた時、自身が魔法使いだとバレた時……驚くな……ってのは無理なのはわかるが、出来る事なら顔に出すな！　つか慌てるな！」

「で、でも…」

「黙れ！　返事はイエスかサー・イエッサーだけだ！！」

「えええええっ！！」

「慌てず冷静に対処すれば記憶を消さなくても、協力関係に持ち込まなくても誤魔化せる！！　いいか？　いくら麻帆良が常識はずれの学園都市でも、魔法は非常識の塊、幻想（ファンタジー）だ。　一般人ではアニメや漫画、小説の産物……現実には有り得ないと認識されてる。　なら誤魔化すのは簡単だ。　現実に有り得るモノと、すり替えればいい。　これは一例だ」

俺はある用紙を少年に渡す。　少年は首を傾げて、用紙を見て俺の方へ見る。

「現実にあるんですか？　コレ」

「ある」

ん？　俺が渡した用紙内容が気になる？　なら見せてやる！！

▼　魔法を誤魔化す方法Q&A　▼

Q1、飛んでる姿を見られた場合はどうしたらいいの？

A、武術には虚空瞬動という宙を走る技術があります。　これで誤魔化しましょう。　しかし、飛び方にも注意を！！

ほうき、または杖に跨がらずに、普通に片手で持ってる風に演じましょう。

Q2、魔法の矢を見られちゃった!!　どうしよう。

A、それも心配いりません。　武術には遠当て、気弾というモノがあります。　これで誤魔化しましょう。

Q3、え〜ん、魔法を使ってる決定的瞬間を、写真に撮られちゃったよ〜

A、落ち着け。　こんな時は「合成写真ですか？　凄いですねー」「CGってやつですね!?　初めて見ました」こうやって誤魔化す…無理っぽいなら上の二つで

Q4、雷の暴風を見られちゃったよ〜

A、死ね。　まず雷の暴風以上の魔法を使う時っていつだよ？

▲　魔法を誤魔化す方法Q&A　▲

「あと、虚空瞬動と遠当てだと誤魔化すのに、決定的な手立てもいくつかある」

「そ、それは!?」

「他の人も出来ますよ〜と言って、出来る人に紹介して実演してもらう事だ」

「その出来る人とは？」

「桜咲　刹那、龍宮　真名、近衛　薫、カスミ・ヴェネーラ、そしてこの俺の計五名だ」

長瀬　楓も出来るが、あいつは魔法関係者じゃないしなぁ。　まぁ、魔法関係者同士なら助け合えるし、いいか。

「わかりました！　ありがとうございます！！（これで心置きなく魔法が使える！！）」

少年は用紙を大事に抱えて、笑顔でお礼を言った。　……なんかこれで心置きなく魔法が使えるぞーとか考えてないよな？

「一応言って置くがな？　少年」

「はい？」

「魔法は使わないで、問題解決するに越したことはないぞ？　その方がバレない。　魔法を使ってないから当然だけど……」

「あ、はい。　そうですね」

「おう。　そんじゃあな…」

「ありがとうございます！！」

これで朝倉にバレた時に、対処が出来るかな……。

「南武先生〜」

「あん？」

少年と別れて校舎を歩いてると、俺の名を呼ぶ声が聞こえた。
振り返って声の主を探そうとするが、俺の他に誰も居ない。

ふむ……気の「南武先生〜」せいじゃないみたいだな。

「ん〜……」

二度、聞こえても声の主が見つからない。　しかも二度目はかなり近い。　……よし！　此処はアレだな。

目を閉じて……レッツ！　心☆眼！！

「南武せんせぇ〜い」

「って、うおぉっ！！」

心眼を使った瞬間、視界いっぱいに広がる号泣したさよの顔。
正直怖い。

「なんだ…さよか……」

内心バクバクの心臓を落ち着かせて、さよに話し掛ける。

「どうしたよ？」

「えぐ、えぐ……優さんは何処ですか～？」

「優？」

ふむ……優……ああ、フラグ最高神の事か。

「優がどうかしたか？」

「会いたいです」

といってもなぁ……世界が違う。　ん～……あっそうだ。

「優の所に連れてってやるよ」

「本当ですか！？」

「ただし！　対価を貰う」

「対価……ですか？」

「優が居る世界は、此処とは違う世界でな？　たまにならいいが毎日は無理だ。　そして、そのたまにも俺の力が必要だ。　生徒の頼みを聞くのも、教師なら出来る限り力になりたい。　だが！　すんごい私事だが……超だるい」

「そんなぁ…」

俺の言葉に喜んだり、落ち込んだりするさよ。　忙しい奴だな。

「だが、お前がこの世界を捨てて優の所で、優が死ぬまで居るってんなら連れてってやる。　さよ……お前に故郷を捨てる覚悟……あるか？」

さよは俯いた。

きっといろいろな事を、考えて居るんだろう。　六十年という年月を振り返って……。

そして約2時間かけて、さよは眼に強い意志を宿して顔を上げた。

他の奴ならきっと2時間で決めた覚悟等と、否定するだろう。

それだけ短いのだ。　六十年という時間を歩んできた世界を、捨てるかどうかを決断する時間は……。

だが、俺はそれを否定しない。　きっとさよは後悔するだろう。

だが……それでも俺はさよを止めない。

「……わ、私は……」

「そいじゃ…さよをよろしくな？」

「はい…」

「南武先生……我が儘を聞いて下さりありがとうございます！！」

「別に構わねぇよ。　生徒の頼みだ。　達者でな」

「はい！　多分、この選択はいつか後悔します。　でも、私はこの知らない世界で……優さんや優さんの友達と一緒に頑張って行きます！！」

「……餞別だ」

さよの言葉にフッと笑い、俺はぬらり学園長から預かった物を渡す。　とは言っても、さよは霊体だから優に渡すんだがな…。

「これは……」

「六十年前の麻帆良学園の卒業証書だ」

「！！」

「ちと（あいつらより）早いが……卒業、おめでとさん」

「はい……」

こうして、相坂　さよは（一部を除いて）誰にも知られる事なく、麻帆良学園を卒業した。

▲　貴史　視点▲

さらば、相坂　さよ！！　～さよ、涙の卒業～（後書き）

繰絡　茶々丸（A組から）退場。
カモ（この世から）退場
村上　夏美（この世から）退場。
相坂　さよ（世界から）退場。

……退場させすぎ？
でも、正直必要性ないキャラなんです。
原作の後半辺りに活躍してる村上さんと相坂さん……まず完全なる世界がなくなるので必要性なしといいますか……まぁ、そんなこんなでまた次回！！

暗殺者のお仕事1（前書き）

クロナさんのお仕事です。

暗殺者のお仕事1

▼　クロナ　視点▼

馬車さんと別れてから、早一週間。
完全なる世界の拠点や前大戦の英雄ナギ・スプリングフィールドの所在が、未だわからず。　もうめんどくさいのでウェスペルタティア王国の王女、アリカ・アナルキア・エンテオフュシアの動向を監視中です。　至近距離で♪

いくら王族でも人。
疲れれば休息する時もあれば、寂しくなって愛する人と、密会する事もあるでしょう。　これでナギ・スプリングフィールドの所在地がわかるはずです。　多分。
それに、完全なる世界に関わっている老害の排除も出来るし、まさに一石二鳥ですね。

にしても、前大戦から数十年は経ってるというのにも、関わらずこの仕事量。
人手不足というのもあるでしょうが、仕事をしてる人が低能すぎるのも原因でしょうね。

（※クロナがメガロの老害を、一日一殺してる所為でもある）

「クロナ。　そっちの書類を…」

「終わらせてます」

「……では、軍の」

「すでに部下に指示を出してます」

「……財」

「それについても……」

アリカ様の考えを先読みして、手早く報告するとアリカ様は、私の方を（呆れたように）見て一言。

「あいも変わらず仕事が速いな？　いや、むしろ徐々に速くなってはないか？」

「クスッ♪　お気になさらずに……」

「しかし、こうやる事が無くなるとどうしたものか……」

そう言ってアリカ様は腰を上げて、窓の外を見る。　おそらくは旧世界に居る息子の事を、心配してるのでしょう。　私には関係ありませんが……。

それよりもやることがないなら、ナギ・スプリングフィールドの所へ、案内してもらいたいですね。

「そういえば最近、メガロメセンブリア元老院が一人一日の速度で、殺害されてるが何か知らぬか？」

「まったく知りません♪」

「そうか……」

「ご安心を……もし、メガロメセンブリア元老院を殺害してる犯人が、御身の前に現れたとしても、私が首を刎ねますので」

まぁ、その犯人が私なんですがね。

「頼もしいな。　ああ、そうそう少し所用で出掛けるのだが……」

「お供します」

「うむ。　少々危険な場所故な、助かる」

こうしてアリカ様と出掛ける事へなったんですが、まさか危険な場所が此処とは……。

着いた場所は、ケルベラス渓谷の真下にある森。

此処へ入ったが最後、魔法は一切使えずに魔物達の餌になるだけという危険区域。

まぁ、それは一般知識。　私には通じません♪

「では、しっかりと護ってくれ……」

「はい♪」

まずは赤い剣（ブラッディ・ソード）を出して、剣を一閃する。

「？」

アリカ様は首を傾げ、私の行動に疑問を持ったようだ。
まぁ、それもそのはず。　私はケルベラス渓谷が発する、魔力封じの力を絶っただけで、常人ではそれがわからないのですから……。

「道案内よろしくお願いしますね？」

「うむ」

森に足を踏み入れると、魔物の気配が私達に向いたのがわかる。
どの気配も私の相手にならないモノばかり、メス一本でもお釣りが来ますね。

というわけで、剣からメス一本に武装チェンジです♪

「では、行きましょう♪」

「待て」

「はい？」

先へ進もうとしたら、アリカ様から待ったを掛けられました。
何故でしょう？　アリカ様の肩が震えて……

「まさか……寒いのですか？　それでしたら…」

「違う」

「？　それでは何か？」

「お主が持っておるソレはなんだ？」

私が持ってる？
手術メスを持った手を見て、指をさしてみるとコクコクと頷くアリカ様。

「……………メス、手術といえばメスというくらい認知度が高い器具で、実際には皮膚を切開する際に用いる程度であり、大小様々な形状のメスがありますが、私は先のとがったメスを好みます♪　これは尖刃刀と呼び、刃の丸いメスは円刃刀と呼びます。　他にも……」

「それくらいわかっておる！　私が言いたいのは、何故剣からメスに切り替えたのだと言っておるのだ！！」

「「「■■■■■■■■■■■■！！」」」

「しまった！　長く留まりすぎた」

「メスに切り替えた理由？　それはですね？　この程度いくら千匹集まろうとも……」

私は魔物の方を向き、一瞬の内に魔物の群れを切り刻んだ。

「貴女に、指一本触れさせませんよ」

「…………」

「顔が赤いですよ♪」

「ッ！！　き、気にするな！　行くぞ！」

「はい♪」

クスクスと笑い、私はアリカ様の後を追った。

▲　クロナ　視点▲

▼　アリカ　視点▼

まったく、クロナの奴め…あのような事を言いおって……。

一一一一貴女に、指一本触れさせませんよ。

～～～～ッ！　い、いかん思い出したらまた顔が熱く……。

ゴホンッ！　と、とりあえずはクロナとの出会いを思い返してみるか……。

読者も、気にはなってるだろうしな…。

あれは、一週間前。

～回想開始～

私が政務の仕事をしていると、突然兵達がなだれ込み、私に剣を突き付けて来た。

「……」

「大人しく着いてきてもらおうか……アリカ王女」

兵達に剣を突き付けられたまま、先頭を歩く兵に着いていく。
しばらく城の中を歩くも、人っ子一人会わなかった。
まぁ、その日は運悪く外の仕事が多かったから仕方あるまい。
しかし、今私に剣を突き付けてる兵も、いくつか案件を任せていたのだが……困ったものだ。
まぁ今困った状態なのは、国より私なんだがな……。

ナギは動けん……というか、私がこのような状態とは知らぬだろうしな。
うむ、絶対絶命だな。

そんな時だった。

「誰だ!?」

「ようやく見つかった。　いえ、アリカ王女に雇ってもらおうと、城に来たのは良いのですが誰も居ないので留守なのかと……」

だからと言って、勝手に城に入るのもどうかと思うぞ？　見知らぬ者よ。

「雇う……と言ったな？」

「喋るな！」

「ええ♪」

「護衛でも良いか？」

「構いませんよ」

「無視を…」

「ならば腕試しだ。　見事私を助け出して見せろ！　傷一つ付けるでない！！」

私は兵に囲まれて剣を突き……いや、振り下ろされる寸前。　いくらプロでも無理であろう。

だが、クロナはクスリと笑い。

「了解です♪」

と言った。

私が課した無理難題を、なんでもないと言わんばかりに……。

結果を言えばクロナは、私の無理難題をクリアした。

剣をひと振りで、私を囲っていた兵とクロナに向かった兵を斬ったのだ。　その時の私の顔は、驚愕に満ちていただろう。

それからクロナと面談をして、信用に足ると判断して雇った。

決め手は、麻帆良学園で警備の仕事をしていたという言葉だな。

なにやらネギの事も知っておったみたいだし…べ、別にネギの話が聞けるから雇ったわけでは無いぞ？　う、腕の方も十分だしのぅ。

それに他の仕事も……と、とにかくそんな経緯で雇ったのだ。

しかし、アスナの手紙から聞いておったが、本当に常識を疑う行為をしてるだとか……やはりどんなに多忙でも、私が直々に育てていれば良かったやもしれんな……。

～回想終わり～

「まだまっすぐですか？」

「……」

「……」

「ん…」

――――――ふに。

回想が終わると、クロナが私の胸に手を……って、

「何をする！」

腕を振りクロナにビンタをするが、爽やかな笑顔を崩さずに、私の手首を掴みビンタを止めるクロナ。

「くっ……この、隙あらば私の胸を……」

「すみません♪　性分なので、そろそろ諦めて下さい」

「直そうと努力はせんのか！？　あと、とても詫びてるとは思えんぞ！？　語尾に音符マークを付けるでない！！」

「すみません♪」

くっ…何度指摘しても直そうとしないし、周りの人間もクロナの

発する威圧感で何も言えず……というか手を出せば返り討ち。　解雇しようにも、完全なる世界に与するメガロメセンブリア元老院の刺客達に、対応出来るのはクロナのみと来た。
　というよりも、何故メガロメセンブリアの刺客が、あんなに強いのだ？　納得がいかん。

（※この世界はスパロボ方式として、味方ユニット側が強いと、敵も強くなるという法則を持つからです。）

ん？　なにやらおかしな電波が……。

「……、……。　……また揉みますよ？」

「む、すまん。　だからその手は止めてくれ……」

「はぁ…」

いや、ため息を着きたいのはこちらなんだが……。　まぁ、今は良い。

「まだまっすぐで？」

「いや、この辺りで平気だ。　しばらく此処で待っておれ」

「はぁ…わかりました」

一般兵だと此処で待たせては危険だが、クロナなら心配無いだろう。

そう思い、私はさらに奥へ進んだ。

▲　アリカ　視点▲

▼　クロナ　視点▼

アリカ様に待つように、言われて数分が経った。

「……そろそろ行きますか」

そう呟いて、私はアリカ様の後を追った。

アリカ様を追って奥へ行くと、小さな小屋がぽつんとあった。

中から二つの気配。　一つはアリカ様。　そしてもう一つはおそらく……。

私は小屋に近付いて、ノックをせずに扉を開けた。

扉の向こうでは、驚愕に満ちた顔をしたアリカ様と、警戒心を最大にして私を警戒してるナギ・スプリングフィールドが居た。

「誰だ！　テメェ！！」

「クロナ……何故此処に」

「クスッ♪　初めまして、赤屍　クロナと言います。　クライアントの依頼により貴方方をクライアントの下まで運ばなければいけま

せん。　御同行願います♪」

そう言って、アリカ様の首に剣を突き付ける。
一時期とは言え、主と慕った方に剣を向けるのは心苦しいですが、
これもクライアントの為、思えばこそです♪

「テメェ…」

「クロナ……冗談で」

「冗談ではありませんよ。　アリカ様」

「……わかった。　着いていくぜ」

「ナギ！」

「ありがとうございます♪」

これで、貴史の依頼の一つは完遂。
あとは、完全なる世界ですね。

▲　クロナ　視点▲

暗殺者のお仕事2（前書き）

さてさて…アサシン（クロナ）の仕事はいつ完遂するのか……あ、後書きにアンケートします。

よろしければご協力をお願いします。

暗殺者のお仕事2

▼　クロナ　視点▼

さて、英雄の確保は出来ました。
次は完全なる世界ですね。　やれやれ何処に居るのやら……。

「クロナ……何故だ？　何が目的でナギを……」

「安心して下さい。　クライアントの下へ、連れていくだけです。
その前に、寄り道しますが……。　ああ、逃げだそうと思わないで下さいね？　逃げられると、追いたくなりますので♪」

「……ああ」

アリカ様の質問に答えつつ、警告を言う。
一週間共に過ごしてきた人の裏切りとも言える行動が、かなりショックなのか顔を伏せたままで、私の顔を合わせない。

その表情が、また私の心を揺らす。　もっと、もっとアリカ様を……イジリタイ。

「あー暇だ」

「うるさいですよ。　赤毛さん。　喋らないで下さい」

「だって暇だし……。　せっかくの外なんだぜ？　退屈凌ぎにはなるかと、思ったんだけどなー」

やれやれ、これだから単細胞は……。

「……私はこれからちょっとした用で出掛けますが、くれぐれも外に出ないように……それでは」

私は単細胞（バカ）だけ、もう一度警告を言って部屋から出た。

「まずは老害を一掃しましょうか。　赤い分身（ブラッティ・アバター）」

自身の血で分身を作って、老害へ差し向ける。　分身が老害から、情報を掴んで来れば良し。　情報が掴めなくても、老害は消えるから良し。　良いこと尽くしですね♪

「気付くのが早いですね」

もう追っ手が、凄まじいカリスマですね。
私をゆっくり囲うように迫る、ウェスペルタティア王国の兵士。
兵の質と錬度からして、アリカ様の近衛兵。
指揮官はクルト・ゲーデルでしょうか。

「赤屍　クロナ！　王女陛下を誘拐した容疑で逮捕する！！　大人しく投降し、王女陛下が居る場所を……」

「赤い雨（ブラッディ・レイン）」

さりげなく、大量のメスを上空へと投げる。
ある程度空へ上がった、大量のメスは重力に従い刃を下に落ちて来る。
ちょうど兵達の真上に来るように、ね♪

「「「「「うぎゃぁぁぁあああああ！！！」」」」」

「ハッ！」

取るに足らない兵達を死なない程度に一掃すると、兵達の影からクルト・ゲーデルが飛び出し、斬撃を飛ばして来た。

「まぁ……ただそれだけで、私にとっては取るに足らない攻撃ですが……」

飛んできた斬撃を避け、クルト・ゲーデルの肩をバッサリ斬る。

「ああ、安心してください。　殺しはしませんよ。　ですが、腕はもらっていきます」

「ぐっ……きさ」

クルト・ゲーデルの横を通ろうとした時、下から刀を突き付けられるが、それを無視して通る。

「時間を無駄にしましたね」

誰に言うでもなく、そう呟く。　以前……いえ、本物の《アカバネクロナ》なら無意味な時は、過ごさなかったでしょう。

墓守り人の宮殿一一一一。

本物からの原作知識という記録から、こんな初期に此処を拠点にするはずないと、踏んでましたが……

「来てみるものですね」

「知人との久々の交流に来れば、侵入者が来るとはな……ポヨ」

私の目の前に、ザジ・レイニーディに酷似した少女が、通せん坊するように道を塞ぐ。

彼女は完全なる世界ではないが、奥に数人の気配を感じる事を考えると、間違いなく当たりですね。

「邪魔です。　出来れば、貴女を殺したくはありません」

「そうはいかんポヨ」

「なら無理にでも通ります」

言い終わった瞬間、一瞬にして彼女の横を通りすぎる。

「！！　なっ！」

「邪魔です♪」

ーーーズバババンッ！！

「くっ」

手加減して斬ると障壁か何かに当たり、その衝撃で彼女は吹き飛んだ。　ふぅ……なかなか手加減とは、難しいですね。

「生きてますか？」

「生きてるポヨ。　いや、まさかメスで障壁を全て破るとは、思ってなかったポヨ」

アレだけで全ての障壁を……ですか。　貧弱にも程がありますね。

「それではおやすみなさい♪」

「！！　来た…（アデア…）」

ーーーードンッ！

彼女がアーティファクトを発動する前に、さっきより少し力を入れて衝撃波を放ち気絶させる。

「さて、次ですね」

奥へ進むと小さい人影が……。
ローブを被り、顔はフードの影に隠れてよく見えない。

「貴女は？」

「この宮殿の主じゃよ」

「やれやれ……私は依頼を完遂したいのですが通っても？」

「私の質問に答えたらな」

……斬っても良いでしょうか？　少々面倒になりました。

「なんですか？」

「そう嫌そうにするでない。　……質問じゃ。　魔法世界に魔力が満ち始めておる。　何かしたか？」

「さぁ、なんの事だか……。　私は運び屋です。　依頼を完遂しただけですよ」

「……そうか。　で？　お主は何をしに此処へ？」

「完全なる世界を主の下へ運べと依頼がありまして」

「ほぅ」

「もう行っても？」

「うむ。　時間を取らせた」

「まったくです」

宮殿の主との話も終わり、主の横を通りすぎる瞬間……

「そうそう……ついでに」

ーーーーーザンッ！

主の首を切り落と……

「彼女は……完全なる、世界の一……員ではない、ポヨ」

せなかった。

間には先ほど眠ってもらった彼女が、左腕を抑えて主を庇っていた。

「……そうですか♪　それでは」

完全なる世界の一員でないなら対象外。

彼女らを無視して、私は奥へ進んだ。

「よく来たな……人間」

大きな広場に出ると、この世界に居ないはずの存在がそこにいた。

「……イレギュラーですか」

やれやれ……勘弁してもらいたいですね。

「人の事を言えるのか？　お前もイレギュラーだろ」

「少なくとも、人間をやめたつもりはありませんよ」

「安心しろ。　こんな形（なり）をしてるが、オレも人間だ」

「名前を聞いても？」

こういうのは描写するよりも、相手に名乗ってもらいましょう。
めんどくさいので♪

「ウルキオラ・シファーだ」

というわけで私と会話してたのは、ＢＬＥＡＣＨに出てきたウルキオラと、同じ姿をした転生者でしたとさ。

それにしても好きなキャラの容姿、能力を得て名前まで一緒とは、典型的な転生者ですね。　人の事言えませんが……いや、自分を見てるようで少し恥ずかしいですね。

「私は赤屍　クロナと言います。　完全なる世界を壊滅しにやって参りました♪」

「出来るのか？　貴様に……」

「クスッ。　楽しませて下さいね」

「一瞬で終わるさ……貴様の死をもって！！」

そう言って、ウルキオラは刀（恐らくは斬魄刀）を抜く。

「さぁ、貴方のチートを見せて下さい♪」

私は、赤い剣（ブラッディ・ソード）を出して構える。

――――――ズガアアアアアアンッ！！

こうして、転生者（ウルキオラ）と転生者の伝説の塊（わたし）との戦いが始まった。

▲クロナ　視点▲

暗殺者のお仕事2（後書き）

はい！　次回は転生者との戦い。
もう容姿で能力もわかると思いますが、楽しみに待ってて下さい。

さて、前書きで言った通りアンケートです。

この小説……魔法先生ネギま！～三人の転生者～ですが、麻帆良祭で終わります。
そのあと、カスミと薫の話を番外編で書きますが、実は貴史達の二作目があります。
リリなのの世界に行きます。
ネギま！キャラ連れて……そこでアンケートです。

1　タイトルを【三人の転生者】にして、リリなの編として連載する
2　新たに新作として出す。

以上です。

それでは、感想をお待ちしております。

暗殺者のお仕事3（前書き）

アンケートの途中経過

三人の転生者の二作目アンケート

1　続編……7票

2　新規……2票

暗殺者のお仕事3

▼　クロナ　視点▼

私の剣と彼の刀がぶつかり合うと、大きな衝撃波が発生して、周辺の柱や窓が砕ける。

あの刀を折る気でやったのですが、意外に硬いですね。　もう少し力を入れてみましょうか……。

「オレのスピードに、着いて来れるとはな。　褒めてやる」

「……」

やれやれ、自身が強いと自負して已(や)まない方は疲れますね。　もしかして彼は私を……いえ、あの方を知らない？

「聞いてみますか……」

「何を呟いてる？」

――――閃ッ！！

私と彼の距離が開くと、彼はタメ無しの虚閃(セロ)を放ってくる。

それを赤い楯(ブラッディ・シールド)で防ぐ。

赤い楯(ブラッディ・シールド)とは、メスを花弁状に開いて、相手の攻撃を防ぐ赤屍　クロナの唯一の防御技。　故に、その防御力は並の攻撃では突破出来ない。

「タメ無しの虚閃とは言え、ソレをメスで……だと？」

「貴方の知る漫画に、ＧｅｔＢａｃｋｅｒｓ－奪還屋－というモノはありますか？」

「なんだソレは？」

「いえ、気になさらずに……」

なるほど、どうりで彼は私の名を聞いても、反応しなかったんですね。

「まぁ、いい……貴様には勿体ないが、オレの本気を見せてやる」

「どうせなら、第二帰刃までやってみては？」

「驕るなよ。　人間が……鎖せ（とざせ）、黒翼大魔」

彼は斬魄刀に帰刃の合言葉（？）を言うと、魔力が膨れ上がり背中に悪魔の羽を生やした姿となった。

「これで、終わりだ！」

彼は瞬時に私の後ろへ回り、手刀で私の首を跳ねようとするが、ソレよりも速く私は彼の腕を切り落とす。

「な……」

「第二帰刃をしなさい。　でなければ私の身に届きませんよ」

第二帰刃でも、届くかわかりませんけどね。

「……そこまで言うなら見せてやる。　絶望を」

そう言って、彼は魔力を溜めて一気に解放した。

――――ズガアアアアアン！！

魔力解放の衝撃で、広場に転がっていた瓦礫が粉々に砕け散り、さらに魔力の渦の中心には、角を生やし上半身裸で胸元に虚の証の穴、下半身は獣のようなモノとなり、尻尾を生やしてこちらを見ていた。

薫さん、虚の薫さん、カスミさんより下で、龍宮さん、桜咲さん、繰絡さんより若干上と言った所でしょうか……。

「あ、もう結構です。　消えて下さい♪」

ニッコリといつもの笑顔を相手に向けて、メスを手に彼の体を「J」字に切り裂く。

「カハッ……オレより、はや……い、だと」

「赤い十字架（ブラッディ・クロス）」

――――ドサッ

彼は膝を着き、ゆっくりと床に倒れた。

そのまま彼は、動く事の無いモノへとなった。

「さて、先へ行きましょうか」

ーーーーザ…

「おや？」

「その必要はない」

「フェイト様が留守の間、私達が此処を護る！！」

「シネ！！」

突如、私を囲うようにフェイトさんの従者が、襲い掛かる。

「やれやれ、命を大切にした方が良いですよ？　もっとも完全なる世界に属してる人間は殺せとの命令ですから、結果が早まるだけですが……」

メスを一閃して、ツインテール、おかっぱ、角持ちの女性を殺す。

あと一人居るはずですが……

ーーーージャリ…

「ああ、此処に居ましたか」

ーートスッ

「ッ！？！？」

音がした方向へ向かい、もう一人の従者を確認して、剣で彼女の胸を貫いた。

「これであとは……」

デュナミスという魔法使いのみ。

さぁ、きりきりと行きましょう。

「よく来たな……」

「はぁ、またですか……。」

「フンッ！　転生者があいつだけと思っていたのか？　少しは頭をつか」

「邪魔です」

――ザンッ！

「な……俺の出番……これだけ？」

――ドサリ

英雄王の姿をした転生者をバッサリ斬って、私はそのまま奥へ進んだ。

少しゲート・オブ・バビロンの中にある宝具が惜しい気もしましたが、剥ぎ取り等やりたくないので無視して進む。

そして、最上階一歩手前の広場。

「まさかシファーとメッシュを、倒すとはな」

「一応、確認します。　貴方がデュナミスですか？」

「ほう…我が名を知っているか。　シファーといい、メッシュといい何処からその情報が漏れたのやら。　如何にも！　私がデュナミスだ！！　そして……」

「４（クウァルトゥム）、『火』のアーウェルンクスを拝命」

「５（クウィントゥム）、『風』のアーウェルンクスを拝命」

「６（セクストゥム）、『水』のアーウェルンクスを拝命」

「７（セプテゥム）、『闇』のアーウェルンクスを拝命」

……なんでしょうか？　このフェイト達は、ネギま！の新キャラ？　この世界のオリキャラ？　まぁ、良いでしょう。パパッと終わらせましょうか。

「では、始めるとしよう。　ふんッ」

――ズバァッ！！

「は？」

突然デュナミスは自らのローブを脱いで、私の目の前に汚らわしいモノを見せてきた。

なんでしょう？　彼は露出癖でも、あるのでしょうか？　こ、これは即刻消さねばなりませんね。

「行くぞ！」

パンッ！　と手を合わせて、影を纏うデュナミス。

そしてアーウェルンクス達は、私の方へ大魔法を放ってきた。

とりあえず私は、燃え盛る剣を斬ったり、雷がほとばしってる槍を避けたり、津波のように押し寄せる水を引き裂き、黒いレーザーみたいな闇を赤い楯（ブラッディ・シールド）で凌いだ。

「よく耐えたな……が！　まだ私が居る！！」

そして、後ろに回って殴り掛かるデュナミスを赤い魔剣シリーズの一つ、赤い魔剣（ブラッディ・ガラティーン）で切り裂く。

「「「「デュナミス様！！」」」」

「貴方は早々に消えて下さい。　私にあんなものを見せて……」

そして、

「さぁ、出番ですよ」

ガラティーンは赤く朱く輝き、天井付近で小さな太陽を作り出す。

小さな太陽は、そのままガラティーンに宿り力を増す。

「朱き転輪の勝利の剣（ブラッディ・ガラティーン）！！」

そして、ガラティーンをデュナミスに振り下ろした。

「グォォオオオオ！！」

ガラティーンの一撃を受けて、デュナミスは苦しみながら蒸発した。

「デュナミス様が……」

「一撃で……」

私が振り返り、アーウェルンクス達を見ると、彼等はビクッと身体を反応させ、顔を絶望へと染めた。

「そうですね……。　クライアントに土産として、いくつか連れていきましょうか」

「何を言ってるかわからないが、倒させてもらうよ！　死のはどッ！！」

「まずは貴女……」

ズブリと、7番目のアーウェルンクスの胸を貫き核に触れる。

やはり土産にするなら、女の子ですね♪

「や、やめ……」

「とりあえず…赤い洗脳（ブラッディ・コントロール）」

「うがぁぁあああああ！！」

脳ではなく、核を弄ってるんですがね♪

「貴様ァ！！」

私が7番目を洗脳してると、6番目が水の矢を千単位で放ってくる。

それを避けて、一瞬にして背後に回ってズブリと、背中を貫き核に触れて7番目にしたのと同じ処置をする。

「あああああああぁぁぁぁ……」

「セクストゥム、セプテゥム。　そのままそいつを抑えているんだ。炎帝召喚！」

「雷帝召喚！」

「セクストゥム、セプテゥム。　彼等を消しなさい」

「「はい、クロナ様」」

洗脳を終えた二人に彼等の始末を頼むと、炎帝と雷帝を一瞬にして還し、4番目と5番目の核を破壊した。

いやはや、洗脳時にいろいろ弄りましたが、これほど強くなると

は良い拾い物をしました♪

▲　クロナ　視点▲

―おまけ―

「ナ、ナギ！　もう少しゆっくり」

「出来るか！！　速く逃げねぇとあいつが」

「部屋に居ないと思ったら、此処でしたか」

「「！！」」

「まったく……余計な手間を掛けさせないで下さい♪」

暗殺者のお仕事3（後書き）

セプテゥムについて……オリジナルのアーウェンルンクスです。
外見はセクストゥムを長髪にして、黒髪、黒目の女の子。

7をラテン語にするとセプテムらしいので、他のアーウェンルンクス達と同じニュアンスでセプテゥムと付けました。

修学旅行～初日の朝～（前書き）

修学旅行編突入～！！

今回は香崎　真琴様が書いてる【転生夫婦の並行世界旅行】で登場した神崎ジェイル、神崎ディエチ、神崎オットー、神崎ディードが出ます。

そして、ジェイルと貴史の子共。　乱も出ます。

今後は、彼女達はうちの作品のキャラとして出てきますので、よろしくお願いします！

尚、香崎　真琴様からの許可は頂いております。

そして、増えたキャラクターも多くなったので、キャラの設定とかステータスを早ければ今日、遅ければ明日に投稿します。

修学旅行～初日の朝～

▼ジェイル　視点▼

住んでた世界から麻帆良へと転移して、私達がまず向かったのは世界樹だった。

「「絶景かな絶景かな～」」

「オットー、ディード危な……くないか」

世界樹の前に着くと、オットーとディードは世界樹のてっぺんへと登り、学園を見渡しながら何かまた変な事を言ってる。

もう彼女らに関しては、ディエチに任せよう。

「というかドクター」

「ん？　なんだい？」

「乱は何処ですか？　確か現地集合のはず」

「うむ。　私も気になっている」

乱は１８の誕生日。

自身の死のイメージと歳老いるイメージが、出来なくなったと報告を受けた翌日。

置き手紙を残して、乱は旅に出た。

それ以来、乱の行方を追っては居るもの、行方がまったく掴めず

にいた。

そして、昨日。
乱から連絡があった。
その内容は……

『明日（昨日の連絡だから今日）、親父の世界のでっかい木で合流な？　ｂｙ神武　乱』

出来れば時間も書いて欲しかったぞ？　乱。

ーーーース…

「ドクターー！！」

「何！？」

考えに浸っていると、隣の空間がいきなり裂けた。
そして、裂けた空間から漂ってくる死。
正直、心臓を鷲掴みされた感覚を受ける。

「クスッ♪　そう警戒なさらずに……。　大丈夫ですよ。　何もしません。　何も♪」

「ッ！！」

後ろから、聞き覚えのある声が聞こえた。　その声は、絶対に忘れてはいけない存在。　我々（チート）が、束になっても勝てない存在だ。

ゆっくり、ゆっくりと後ろを振り向くと、彼女はそこに居た。

「赤屍　クロナ……」

「はい♪」

ニッコリと笑顔を見せる彼女は、彼女の伝説（アサシン）から発せられるソレを越えるモノだった。

「何故、此処へ？」

「娘さんを連れて来ました♪」

「なっ！？」

「久しぶり……母さん」

赤屍　クロナの後ろから、乱はひょっこりと顔を出した。

「乱」

「乱！　いままで何処へ！？」

先程まで黙ってたディエチが、乱を見て叫ぶように問い質す。
私も気になるが、彼女から目を逸らしたくはない。

「何処って、クロナさんとこ」

「彼女は、ずっと私と共に居ましたよ。　弟子にしてくれと、頼まれましてね」

「本当なのかい？」

「うん」

まったく、恐ろしい事をする娘だよ。

貴史ならいざ知らず、貴史の上位である存在に弟子入りを頼むなんてね。

「では、私はこれで」

「今までありがとうございます。　師匠」

「私からも礼を言うよ」

「いえいえ、十分楽しませてもらいました♪」

ーーーーひくっ

彼女の言葉に顔が引き攣る。

楽しませてもらいました？　ソレはつまり……乱が彼女を楽しませるくらい、戦えるという事なのか？

父上、母上……乱は強くなりました。

……父上と母上を落とせるくらいに、戦ってみませんか？

『『死にたくないから辞退するｗｗｗ』』

でしょうね。

「では、これで♪」

そう言って、彼女は空間の裂け目に入り立ち去った。
私達は彼女を見送ったあと、久々に乱成分を補給する為、乱にハグをした。

▲　ジェイル　視点▲

▼　貴史　視点▼

さて、今日から修学旅行。
それなりに楽しみだ。　転生前からこういった行事は、いつも霞と薫とはしゃいでたしな。
ただ、唯一気になるのは関西呪術協会だな……。
特に過激派がうざそうだ。

まぁ、俺達がフォローすれば大丈夫だろ。

――ピンポーン

「ん？　誰だ？　こんな朝早く」

扉を開けると、そこにはジェイル、乱、ディエチ、オットー、ディードが居た。

えっ？　これ本編だよな？　番外編じゃないよな？　俺は間違ってないはず……じゃあこれはなんだ？　ドッキリか？　ドッキリだろ？　ドッキリなんだろ？

「ゲームが終わったから、約束通り住みに来たんだが」

「ん？　なんだ。　そうだったのか。　コラボかと思って焦ったぜ」

「そうかい？　それはすまなかった。　では、ふつつか者だがよろしく頼む」

「よろしくな。　親父」

「「よろしく～」」

「よろしくです」

ジェイル、乱、オットーとディード、ディエチを見て「ああ、よろしく」と返事を返した。

にしても、乱の奴。

強くなってね？　胸もでかいし……。　正直、勝てないかもな……。

「貴史さん」

「ん？　なんだ？」

乱を観察してると、ディエチが話し掛けてきた。

「私は薫さんの所で、また腕を磨きたいのですが、口添えをお願いしても良いですか？」

「その事なら大丈夫だろ。　カスミならいざ知らず、薫も俺と同じ

ように、来るモノ拒まずだからな。　唯一違うのは去るモノ追わずだな」

「そうですか……（きっと貴史さんが去れば追うだろうなぁ）」

「そういや、薫の部屋は四人部屋を一人で使っていたな…。　んじゃ、ディエチは薫の部屋に住むって事で！」

「（いいのかなぁ…）ありがとうございます…」

師事する人と同じ部屋の方が、いろいろ学びやすいだろ。　つかディエチは生徒じゃなかったな……まぁ、薫が学園長に頼めばなんとかなるだろ。

「ディードやオットーはどうする？　薫に弟子入りするか？」

「僕達は……」

「貴史師匠に弟子入りする～」

「そうかい。　ならジェイルと乱と一緒に俺の家な」

「「はーい」」

さて、住まわせる場所も決まったな。
あとは……学園長に連絡かぁ……。
やれやれ、今日は忙しいぜ。　早起きしててよかった。　よかった。

こうして俺は何故早起きしたのか、今日何があるのかを完全に忘

れていた。
　気づいた頃には、すでに集合時間が過ぎてて新幹線が出た後だった。

▲貴史　視点▲

修学旅行～初日の朝～（後書き）

アンケート途中経過～

三人の転生者の2作目アンケート

1　続編……8票

2　新規……2票

現在のステータス＋新キャラ（２３／３／２０修正）（前書き）

はーい、ステータスです。

そして、ステータス欄で疑問とかがあると思います。
そこで、後書きにステータスの事を説明します。

現在のステータス＋新キャラ（２３／３／２０修正）

名前　南武（ナンブ）　貴史（タカシ）

年齢／性別　１９歳／男

容姿　デル・カイザー（美堂　蛮の父）似から美堂　蛮に変更。
（つまりは頭を雲丹みたく爆発させただけ）

ステータス（Ｆａｔｅ風）
筋力　ＥＸ→ＥＸ／Ｂ＋　耐久　ＥＸ→ＥＸ／Ａ　速度　ＥＸ→２ＥＸ　魔力　ＥＸ→ＥＸ／Ｂ－　気力　ＥＸ→ＥＸ／Ａ＋　幸運　Ｃ－

能力

超越者：自分が想像しえない事は起きない。
例え致命傷を受けても、自身の死を想像出来ない場合すぐに復活する。

さらに跡形も無く消し飛んだ場合は、何処からともなく血が敵の背後に落ちて、そこから復活を遂げる。

蛇使いの宿命：アクスレピオスの力を借りれる。　不現の瞳：一分間の悪夢を見せる事ができ、一日三回同じ相手に一回しか使えない。

悪魔の腕：呪文詠唱により、右手が悪魔の腕になる

天使モード：アクスレピオスを開放させ、一時的に身体能力を上げる。
（既に上げる必要性がないが）

無尽蔵な魔力：読んで字の如し

無尽蔵な気力：読んで字の如し
（気力＝体力なので疲れる事は稀）

５０の宝具：体内に５０個の宝具を持ち、その全てが赤い〇〇シリーズと化して、宝具のランクが大幅に上昇してる。

名前　カスミ・ヴェネーラ

年齢／性別　６１４歳／女

容姿　リリなののフェイト（１８歳）似で、ポニーテールにしてる。

ステータス（Ｆａｔｅ風）
筋力　ＥＸ　耐久　ＥＸ　速度　ＥＸ　魔力　ＥＸ　気力　ＥＸ
幸運　－ＥＸ＋＋＋

能力

真祖の吸血鬼：エヴァンジェリンと同じ。

直死の魔眼：某殺人貴や着物を着た人の魔眼より上。

能力向上：年を重ねる度に、身体能力が上がる。

超不幸体質：マイナス方面で、幸運ランク測定不能スリープラス

血液操作：他者や自分の血液を操作出来る。

加速する雷：カスミのアーティファクト。
貴史との仮契約により、手に入れた。
効果は、仮面ライダーカブトのクロックアップと同じ。
さらに読者サービスで姿が、フェイトの真・ソニックフォームとなる。

名前　近衛（コノエ）　薫（カオル）

年齢／性別　１４歳／女

容姿　木乃香似で眼鏡をかけてる。

ステータス（Ｆａｔｅ風／（）内は雷帝状態）
筋力　Ａ（ＥＸ）　耐久　Ａ（ＥＸ）　速度　ＥＸ　魔力　Ａ＋＋（ＥＸ）　気力　Ａ＋＋（ＥＸ）　幸運　ＥＸ（ＥＸ）

能力

烈火の炎の型：龍之炎壱式　崩、龍之炎弐式　砕羽、龍之炎参式　焔羅、龍之炎肆式　刹那、龍之炎伍式　円、龍之炎陸式　塁、龍之炎漆式　虚空、龍之炎捌式　裂神の使用可能。

ＢＬＥＡＣＨの技：瞬歩や鬼道、破面の技を全て使える。
自身のオリジナル斬魄刀もあり、卍解が可能。

雷帝：怒りにより雷帝の力を引き出す事が出来る。
雷系の技を喰らっても、ダメージを受けるどころか回復し、電気があるなら鼻コンセントで回復。

心刀（シントウ）：薫のアーティファクト。
貴史と仮契約をして、手に入れた。
効果は、薫の感情や想いによって威力を変える。

不老不死：修正版にて、カスミの願いにより、ある程度歳をとったらなる。
原作時に、発現してるかは不明。

名前　赤屍　クロナ（アサシン）

年齢／性別　？？／女

容姿　赤屍　蔵人の女性版。　スタイル抜群です。

ステータス（Ｆａｔｅ風）
筋力　ＥＸ→２ＥＸ　耐久　ＥＸ→２ＥＸ／Ａ＋　俊敏　ＥＸ→２ＥＸ　魔力　ＥＸ→２ＥＸ／Ｂ＋＋　気力　ＥＸ→２ＥＸ／Ａ＋＋　幸運　Ｂ＋＋→Ａ＋＋

能力

超越者：自分が想像しえない事は起きない。
例え致命傷を受けても、自身の死を想像出来ない場合すぐに復活する。

さらに跡形も無く消し飛んだ場合は、何処からともなく血が敵の背後に落ちて、そこから復活を遂げる。

蛇使いの宿命：アクスレピオスの力を借りれる。

不現の瞳：一分間の悪夢を見せる事ができ、一日三回同じ相手に一回しか使えない。

赤い悪魔の腕：呪文詠唱により、右手が悪魔の腕になる。　貴史の悪魔の腕は黒いが、アサシンの本体であるクロナは悪魔の腕が赤い。　これは赤屍の能力の力のせいという説が……。

天使モード：アクスレピオスを開放させ、一時的に身体能力を上げる。
（既に上げる必要性がないが）

無尽蔵な魔力：読んで字の如し

無尽蔵な気力：読んで字の如し
（気力＝体力なので疲れる事は稀）

赤い三大魔剣：約束された勝利の剣（エクスカリバー）、無毀なる湖光（アロンダイト）、転輪する勝利の剣（エクスカリバー・ガラティーン）を持っており、当然赤い○○シリーズ化して、魔剣と言うに馬鹿らしい宝具となった。
一応、宝具のカテゴリーに入る。

名前　虚・薫（ホロウ・カオル）

年齢／性別　？？／女

容姿　見たまんま薫の色違い。　髪は白、瞳は白眼部分が黒で、黒目部分が金色、後ろの頭に虚の仮面をつけて、戦闘時必要な時に被る。

ステータス（Ｆａｔｅ風／（）内は雷帝状態）
筋力　Ａ＋（ＥＸ）　耐久　Ａ＋＋（ＥＸ）　速度　ＥＸ　魔力　Ａ＋＋（ＥＸ）　気力　Ａ＋＋（ＥＸ）　幸運　ＥＸ（ＥＸ）
能力

烈火の炎の型：龍之炎壱式　崩、龍之炎弐式　砕羽、龍之炎参式　焔羅、龍之炎肆式　刹那、龍之炎伍式　円、龍之炎陸式　塁、龍之炎漆式　虚空、龍之炎捌式　裂神の使用可能。
さらに、虚・薫だけ火龍のオリジナルが二つあり、黒炎が裏、蒼炎が真とつく。

ＢＬＥＡＣＨの技：瞬歩や鬼道、破面の技を全て使える。
薫のオリジナル斬魄刀も持っていて、卍解が可能。

雷帝：怒りにより雷帝の力を引き出す事が出来る。
雷系統の攻撃と電気があれば、回復する出鱈目な体質。

心剣（シンケン）：虚・薫のアーティファクト。
薫と仮契約をして、手に入れた。
効果は、虚・薫の感情や想いによって威力を変える。

神崎　ジェイル（※１）

女、２０歳（この時点で不老の術式を起動）

身長１７５センチ（ちなみに百合姫は１７７センチ、鈴は１８２センチ）、Ｇカップ（ちなみに百合姫はＥカップ）

普段はブラジャーと紐パンに白衣という、１２０パーセント露出狂な格好。

本人は暑いからこの格好らしいが、冬はこれにニーハイだけをプラスした格好で過ごしている為、確実に露出狂。

胸は百合姫より大きいが、肩が凝って少し不便とのこと。

髪はいつもはポニテ、たまにアップ、うなじを見せたいらしい、露出狂。

香崎様のお気に入りで何をやっても大抵許される超好待遇の為、夫婦以上にチートになってしまった。

特にずば抜けているのは、機械弄りと薬作り。

神崎　オットー（※１）

？？？、１７歳

１４３センチ、？？？

普段は某薔薇乙女第４ドールの格好。

性別は謎、夫婦やジェイルも分からない。
何故か『解析』でも分からない。
唯一ディードは知っているらしいが、教えてくれない。
猫耳猫尻尾（髪と同じブラウン、イメージは某ガムＣＭの某宇宙人）で、隠れ甘えん坊。
頭をナデナデされるとデレる。

ＩＳ……『光の魔術師（ライトマジシャン）』
レイストームをさらに強化し、空間に普遍的に存在する『光』も操作できるようになった。
他にも他人の放った光線や光弾、魔力光等の『光』と認識されるものや、自ら光を発する魔力弾も『光』と認識されて、オットーの支配下に入る。
さらに『光』の操作において『世界』の優先順位の１位がオットーとなっているため、他人の操作する『光』でさえも操作できる。
つまりは『光を操る程度の能力』。

基本武装、固有武装共に無し。

神崎　ディエチ（※１）

女、１７歳

１６６センチ、Ｇカップ

普段はいろんなマンガやアニメ、ゲームの中の学校の女子制服。
一番のお気に入りはリ○バスの朱鷺○沙○の格好。
性格は某魔法先生マンガの巫女スナイパーに酷似していて、仕事

人気質。
憧れはゴ○ゴ１３で、近接戦闘の修業もしている。
甘いものが好き過ぎて、もはや中毒になっている。
常に甘いものを口にしているが栄養は全部胸に行っており、姉妹で一番巨乳。

ＩＳ……『天国への案内人（ヘブンズシューター）』
ヘヴィバレルと異なり、魔力によって銃火器を作り出せる能力。
射撃や砲撃の性質、弾の種類、砲撃の魔力光の色は自由に変えられる。
目は本人の希望で両目とも改造し、右目（緋色）にはサーモグラフィー（温度検知センサー）の術式を、左目（群青色）には『解析』と『千里眼』の魔術式を埋め込んだ。
基本武装は無し、固有武装はパニッシャー（ウルフウッドモデル）。

神崎　ディード（※１）

女、１７歳

１４３センチ、Ｄカップ

普段は某薔薇乙女第３ドールの格好。
オットーと似ていて、喋り方なんかが某宇宙人。
犬耳犬尻尾（髪と同じブラウン）で、隠れ甘えん坊。
頭をナデナデされるとデレる。

ＩＳ……『双刀の使い手（ツインブレイザー）』

ツインブレイズと異なり、自身の知っている双刀を精製、使用することが出来る。

そしてこの能力で精製された双刀は、その双刀が本来持つ能力と、その双刀の所持者の持つ能力をも発揮出来る。

主に使うのはアーチャーの『干将・莫耶』か、魂魄妖夢の『楼観剣・白楼剣』。

基本武装は『強化』がかけられた小太刀、固有武装は無し。

（※１……香崎様の転生夫婦の並行世界旅行から抜擢。　許可あり。）

名前　神武（ジンム）　乱（ラン）

年齢／性別　１８歳／女

容姿　髪はポニーで、瞳の色は紫。

身長は高く、スタイルは抜群。　とりあえずＩに限りなく近い、Ｈとだけ言っておく。

ステータス（Ｆａｔｅ風）

筋力　－－　耐久　－－　速度　－－　魔力　－－　気力　－－

幸運　－－

能力

超越者：自分が想像しえない事は起きない。
例え致命傷を受けても、自身の死を想像出来ない場合すぐに復活する。

さらに跡形も無く消し飛んだ場合は、何処からともなく血が敵の背後に落ちて、そこから復活を遂げる。

蛇使いの宿命：アクスレピオスの力を借りれる。　不現の瞳：一分間の悪夢を見せる事ができ、一日三回同じ相手に一回しか使えない。

赤い悪魔の腕：呪文詠唱により、右手が悪魔の腕になる。　貴史の悪魔の腕は黒いが、クロナと同様に赤屍の力のせいと思われる。

天使モード：アクスレピオスを開放させ、一時的に身体能力を上げる。
（既に上げる必要性がないが）

無尽蔵な魔力：読んで字の如し

無尽蔵な気力：読んで字の如し
（気力＝体力なので疲れる事は稀）

他、なんでも出来る。

備考：貴史とジェイルの子供。
貴史と歳の差が近いのは、乱が別荘（ダイオラマ魔法球の）使い過ぎ。
１８の誕生日に自身の死のイメージと、老化のイメージが出来な

くなり、その翌日に本物の赤屍クロナの下へ行って、弟子入りする。
ステータスの【――】は漠然とした強さ故に、『書けない』。
そしてオットー、ディードに、胸を狙われてる可哀相な女の子。
（今のところ揉ませてない。）

現在のステータス＋新キャラ（２３／３／２０修正）（後書き）

今回のステータスで……

ＥＸ／Ａ＋

と、このような記号を見たはずです。
これはＥＸとＡ＋と言う事で、ＥＸ／ＥＸとなると２ＥＸとなります。

わかりにくいですが、言わんとしてる事がわかったら良いなと思います。

交通ルール。　それは全員が守らねばならないルール。　特に馬車ァア！　テメ

馬車と言えばタクシーとトラック。
タクシーとトラックと言えば車。
車と言えば？

交通ルール。　それは全員が守らねばならないルール。　特に馬車ァア！　テメ

▼　貴史　視点▼

ーーーーピッ！

学園長に連絡を終えて、携帯を切った。
そして、切る前に学園長が……

「もう既に、新幹線は出とる時刻じゃが？　大丈夫かのぅ？」

と言ってきた。

大丈夫じゃねぇよ。　かなり楽しみにしてたんだぞ！？　舞妓さんの胸！！

「「……」」

なんかディエチと乱が、それでいいのか？　的な視線で見てるが、この際無視だ。　無視！

「どうするのかね？　転移魔法の許可を出してくれれば、やるが？」

転移だと！？

「馬鹿が！？　修学旅行はな家に帰り着くまでが、修学旅行なんだよ。　それは行きも然り！！」

「ふむ、そうか……」

くそっ！　どうする？　今から大宮駅で東京に行き、新幹線に乗っても間に合わねぇ。

俺が思考を走り巡らせてると、一つのタクシーが目に着いた。

「……クックククク」

「「「「？」」」」

「良いぜ。　ゼッテェ利用しねぇと誓ったが、乗せてもらう！！
出ろォォオオオオ！！　馬ァア車ァアアアアアアッ！！」

ーーーーパチンッ！！

俺は機動武闘伝Gガ〇ダムの主人公のように、指パッチンをしてあいつを呼んだ。

「いや、Gガン風に呼ばず」

ーーーーパッパァー！

「「「！？」」」

ジェイルの言葉を遮るように現れたのは、大型トラックに乗った馬車だった。

「「「本当に来たー！！」」」

「「おお～」」

ジェイルとディエチと乱が、有り得ない事にツッコミを入れて、オットーとディードが感嘆の声を上げる。

トラックの窓が開いて、そこから馬車が顔を出し、クイッと顎を動かし「乗れ」と促す。

その指示に従い俺は助手席に乗り、ジェイル達は荷台の中に乗り込んだ。

（※トラックの荷台に、人を乗せてはいけません。）

「何処まで？」

「安全運転で京都駅まで……。　いいな？　あ・ん・ぜ・ん・う・ん・て・んでだからな」

「任せろ！」

グッと親指を立てるが、正直信用出来ん。　だってよぉ……

「行くぜよ！　ハッハ～ッ！！」

目が血走ってやがるもん！！

「ハッハ～！！」

公道で爆走する大型トラック。　今のところ信号が青なのは奇跡だ。　そして、公道の端にパトカーを発見する。

流石に減速するだろうと思いきや、さらに速度を上げる馬鹿（まぐるま）。

あ、頭いてぇ～。

そして、当然の如く警察が見逃すはずもなく……

「そこの爆走トラック！　止まりなさ～い！！」

「うらぁー！　止まれー！　この埼玉県警交通安全課！　成実　ゆいの前を走るなー！！」

……は？　成実　ゆい？　どっかで聞いた覚えが……。

「見つけたぁ！！」

ーーーブゥンッ！

パトカーを高速で抜き去り、トラックの横に並ぶ見慣れた派手なスポーツカー。

「なぁ、おっさん」

「チィッ！　ホーリー部隊・交通安全課のクーガーも来よったか！！」

何？　そのツッコミ所満載の……さらには聞き覚えのある人物名は？

「こらー！？　ホーリー部隊！！　これは私達の獲物だぞー！！」

！！　思い出した。　成実　ゆいって、ら○☆すたのこなたの姉さんじゃん！！

「そいつは違うな！　こいつは俺の獲物だ！！　あんた！　勝負しようぜ？　目的地に先に着いた方が勝ち！　俺が勝ったらあんたの身柄を！　あんたが勝てば見逃してやる！」

「その話！　私も乗ったー！！」

「おいおい、普通のパトカーじゃ勝ち目ないぜ？　諦めて署に戻ってな？」

「ふっふ～ん。　ゆい姉さんを馬鹿にするなよー！」

な、なんて熱い奴らだ。　馬車の奴、こんな熱い奴らに勝てんのか？　って、いや待て俺！　あいつらに感化されんな！！

「面白いぜよ！　その勝負……受けて立つ！！」

「よし！　それでこそ漢だ！！　目的地を言いな？　ミスター！！」

「京都駅が目的地ぜよ！！」

「なら次の信号機でスタートだよ？」

「俺は問題無いぜ！」

「……フッ」

そして、ゆいが言ってた信号機が見えて来た。

偶然にもその信号機は青から赤へとなって、三車線とも前の車は居なかった。

「♪～　こりゃあ都合がいい」

「さぁて、腕が鳴るぞ～」

――――パッパァー！

ゆい、クーガーは信号機手前で止まる。　正々堂々とフェアな条件で、戦う姿勢だ。

だが、俺にはわかっていた。　あの馬車が……。　あのミスターノーブレーキと名が高い馬車が……。　たかが赤信号で、ブレーキを踏む筈がない。

――――ブゥンッ！！

「「なっ！？」」

案の定、トラックは止まる事なく突っ切った。　赤信号で……。

「「あ、あれは!?　今は失われしレーシングファイトが秘奥義!!　信号無視だと!?」」

まんまじゃねぇか!?　つかなんだよ!?　レーシングファイトって!?　秘奥義も何も交通違反だからな!?

「くっ……俺の最速のスタートダッシュをあんな大技で回避するとは」

「く、私達じゃ…とても出来ない芸当を、ああも簡単に」

馬鹿なの!?　あいつら馬鹿なのか!?　そして、馬車ァァアアアアア!!　何勝ち誇った顔をしてやがる!?　舐めてるだろ!?　お前舐めてるだろ!?　大事な事だから二回も書いたぜ!!

「む、前の車が……」

しばらく進むと、前方に車が走っていた。　それも何台も……

「ジグザグ走行……行けるか?」

馬車が、なんか言ってるが無視する。　もう疲れた。

ん?　ゆいとクーガー?　着いて来てますよ?　遥か後方から…赤信号で止まっていたのと、馬車の信じられない行動に出遅れたのが痛手だったろう。

そして、京都駅。
生徒達もちょうど着いたのか、駅から麻帆良の団体が現れた。
ん？　レースの結果？　それは、信号無視を乱発した馬車の勝ちだぞ。

そして、馬車はというと……

「システムチェー――ンジ!!　タクシー!!」

大型トラックを、普通のタクシーにした。
過程とかそんなん無視して……。

「またのご利用を……」

そう言って、タクシーは走り去った。

もう利用したくねぇよ。

▲　貴史　視点▲

交通ルール。　それは全員が守らねばならないルール。　特に馬車ァア！　テメ

頭痛が酷くて死ねる。

清水寺から物を落とさないように…。　人も落とさないでね？（前書き）

夜の襲撃まで書こうとしたんですが……なんか区切りが良かったので切りました。

そして、あの人達登場。

清水寺から物を落とさないように…。　人も落とさないでね？

▼　貴史　視点▼

馬車のおっさんを見送った後、麻帆良団体と合流した俺は新田先生に怒られた。

説明すんのも鬱になるからしない。　そしてついでにジェイル達の事を説明して、同伴出来るように交渉した結果……深い溜息をついた後、「特別ですよ？」と許可をもらった。

うん。　良い先生だ。

「ナンブーセンセー」

３－Ａの団体へ向かうと、鳴滝姉が俺の所へ来た。

「あん？　なんかあったか？　つかナンブー言うな」

「まぁ、良いじゃん。　それより、センセーが連れてきた人って…センセーの彼女？」

にししし……と、弄る気満々で聞いてきた。

彼女？　ジェイルの事か？　もしくはディエチ？　オットー、ディードは無いな。　たぶん。　あ、傍から見たら乱も入りそうだな。

あいつの年齢１８だし。

「あー。　あの白衣が……」

ジェイルはどうする。　ん～娘（らん）が居るし……妻でいいか。

「……妻で」

「「「…「「「な、何ぃ～～～～！！」」」…」」」

「ッ！！」

俺の発言に連中は驚き、大声を上げた。
超うるせぇ。

「どういう事かキリキリ説明してくれるかい？」

「ならこめかみに、デザートイーグルを突き付けるな」

正気に戻った真名が、即座に俺のこめかみへ、デザートイーグルという物騒極まりない銃を突き付けてきた。
こめかみから伝わる冷たい感触に、弾から微かに匂う火薬、本物だな。

「なんの事だい？　これはエアガンだよ」

真名の言葉に、こちらを見ていた３－Ａの連中は、ホッと胸を撫で下ろす。

いやいやいやいや、んな安心されても人に、向けるもんじゃねぇからな？

「ご紹介に預かった。　貴史の妻（笑）の神崎　ジェイルだ」

「あれ？　神崎？」

「ああ……まぁ、訳ありと言うことで！　私の事は、ドクターとでも呼んでくれ」

「んじゃ、次な…神武　乱。　あのポニテの俺っ娘は、俺とジェイルの娘だ」

「「……「「娘ー－－－－－－－－！？」」」……」」

－－パンッ！

乱の説明を終えると、頭の中でに警報が鳴り響いた。　直感に従って頭を後ろへ動かすと、弾が俺の目の前を通った。

発砲音は改良されてあるのか、朝倉達の叫びで掻き消された。

一般人では、誰も気付いた奴は居ないみたいだな。　つか、マジで撃ちやがったよ。　こいつ。

「俺の事は乱でいいぞ」

「んで、ジェイルの妹達のディエチ、ディード、オットーだ」

「妹……まぁ、感覚的に妹ですね。　私達は」

「「いえ～い！」」

「紹介終了！　質問は時間が無いからバスの中でな……いや、すぐに清水寺へ着くから清水寺の見学が終わって、旅館までの間だな。

わかったらバスに乗れ～」

「「…「「はーい」」…」」

朝倉達がバスへ乗り込んでるのを見計らい、俺はカスミ達の方へ向かった。

「貴史はなんで京都に来たん？」

「「……」」

俺が来たのに気付いた薫は、衝撃的な発言をした。

これは……あれか？　いじめか？

「の、乗り物や乗り物。　ウチがそんな酷い事、言うわけないやん！」

「あー。　ああ、乗り物ね。　馬車の……」

「あ、もうええ」

「そうかい。　んで？　そっちはどうだった？」

俺の京都駅までの冒険を感じ取ったか、薫は俺の言葉を切って止めた。

そして、今度は俺が薫に気になってた事を聞くと……

「出たえ。　蛙」

「そうか……」

「あと燕もな。　刹那が切り落として、親書を坊やに返したよ」

「カモがおらへんから、せっちゃんは疑われてへんと思うえ」

ならフォローするのも、すんなり出来るかな。

薫とカスミとの話を終えると、ほとんどの奴らがバスに乗り終えてた。

また置いて行かれたら堪らんので、走ってバスに乗った。

カスミが乗る時、やはりというかなんというか、扉が閉まってぶつかったり、扉に挟まったりと不幸な目にあってた。

このあとに聞いた話だが、大宮駅と東京駅の改札機でも幾度となく引っ掛かったとか……。

なんというか、頑張れ！　カスミ！！　こっそりと、涙目のカスミの写真を撮ったけど！！

▲　貴史　視点▲

▼　３－Ａの班員紹介　▼

１班（一般人組）

鳴滝　風香。
鳴滝　史伽。
椎名　桜子。
釘宮　円。
柿崎　美砂。

２班（忍と肉まん）

超　鈴音。
古　菲。
葉加瀬　聡美。
長瀬　楓。
四葉　五月。

３班（一般人組）

朝倉　和美。
長谷川　千雨。
那波　千鶴。
雪広　あやか。
ザジ・レイニーディ。

４班（一般人組＋魔法生徒）

大河内　アキラ。
明石　裕奈。
和泉　亜子。
佐々木　まき絵。

春日　美空。

５班（図書館探検部組＋京都組）

綾瀬　夕映。
早乙女　ハルナ。
宮崎　のどか。
近衛　このか。
近衛　薫。
桜咲　刹那。

６班（チート組）

カスミ・ヴェネーラ。
エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル。
神楽坂　明日菜。
龍宮　真名。
？？　？？？（ステルスモード中）。

特別班（自重を忘れたモノ組＋まだ常識と自重を持つ少女）

神崎　ジェイル。
神武　乱。
神崎　ディエチ。
神崎　オットー。
神崎　ディード。

▲　３－Ａの班員紹介　▲

▼　刹那　視点▼

どうも、桜咲　刹那です。　今回は京都という事もあり、私視点で話を進めたいと思い

「なんでー！？」

ビクッ！？

「ど、どうかなさいましたか？　薫お嬢様！？」

突然、大声を上げたのは近衛　薫。　私の護衛対象の一人でして、護る必要性がまるでない方ですが、一応私の大切な方の一人です。

と、今は薫お嬢様でしたね。

薫お嬢様は、その場でしゃがみ込み泣いていた。　明日菜さん達は何かあった？　と言った風に、こちらを見てくる。

ネギ先生も、こちらに向かって来る。　一時、ネギ先生に任せようかと思ったが、きっと対応出来ずに、薫お嬢様のみっともない姿をさらに広める光景が浮かんだ（もう遅いかも知れんが……）。

うむ、却下だ。　となると、この場で頼りになりそうなのは……

「南武先生。　お願いします」

「へいへい」

彼しか居ないだろう。　薫お嬢様の話によれば、前世からの付き合いだと言うし……

「どした？　薫」

「ウチの出番が、せっちゃんに取られた～！」

――ズルッ

しょうもない。　そう思ったのは、あかんのやろうか？　周りを見れば、目を点にしてる者達。

木乃香お嬢様は、アハハハ…と笑っていて、カスミさんと南武先生は、またか……みたいな表情で、薫お嬢様を見ていた。

「ほれ、泣き止め……きっと薫の出番はあるさ」

「ほんま？」

「ほんまほんま」

「なら今は我慢する……」

「よしよし…えらいえらい」

南武先生が二、三話し掛けると、あれほど喚いてた薫お嬢様が、落ち着きを取り戻し泣き止んだ。

南武先生が薫お嬢様の頭を撫でて、薫お嬢様はえへへ～と笑う姿を見て、私は南武先生が羨ましいと思った。

南武先生だけじゃない、カスミさんも羨ましい。　私の知らない薫お嬢様を知っていて、私よりも薫お嬢様と長く付き合ってるあの人達が……。

このちゃんの方へ目をやると、私と同じ目をしていた。　このちゃんもあの二人が羨ましいんやね。　ウチと同じく……。

ウチはこのちゃんの手を握ると、このちゃんはウチを見た。

「ウチらもあの二人が、羨むくらいの幼なじみを目指そうな？」

「せやね」

そしてバスは清水寺に着き、私達は清水寺の見学が始まった。

（※ダイジェストにお送りしまーす。）

「京都ぉー――――っ！！」

「これが噂の飛び降りるアレ」

「誰かっ！！　飛び降りれっ」

「では、拙者がってディード殿？　オットー殿？　何をしてるでござ」

「忍者投下！」

「投下！」

――ポイッ、ヒュー――――ン。

「ご、ござー！！」

「南武先生！！　先生のお連れさんが、長瀬さんを縛って清水から突き落とし…」

「もっと胸を強調した縛り方が……」

「「うっかり」」

「って貴方の仕業ですかー！？」

「本来は、本尊の観音様に能や踊りを楽しんでもらうための装置であり、国宝に指定されています。　有名な「清水の舞台から飛び降りたつもりで…」の言葉どおり、江戸時代で実際に２３４件もの飛び降り事件が記録されていますが、生存率は８５％と意外に高く……」

「うわっ！？　変な人がいるよ！？」

「夕映は、神社仏閣仏像マニアだから」

「うむ、やはり実物はいいな!?　カスミ!!」

「たかが寺だろ？　良いも悪いも知らん」

「こっちはこっちで酷い温度差が!!」

「カスミさんは、こういうの嫌いなのかい？」

「そうだな……「私達」は旅館とかホテルで、はしゃぐ方だったからな」

「なるほど…」

皆、思い思いにはしゃいでるなぁ。　まぁ、平和で何よりということかな……。

でも、ウチは皆とはしゃぐ事は出来ない。　此処はもう敵地なのだから、木乃香お嬢様と薫お嬢様の身に、万が一の事が無いよう。

「そう気張らんでええよ？」

「か、薫お嬢様!?」

私の心を見透かすように、声を掛けてきた薫お嬢様。

「此処には最強の護衛（せっちゃん）が居て、最愛の妹（木乃香）が居て、最強の友達（カスミ達）が居て、無敵の先生（貴史）が居て……自重知らず（ジェイル達）がおるからな…」

神崎さん達の実力は知らないが、確かにこのメンバーで、負けて

る所が想像出来ない。　むしろ敵が憐れに思えてくる。

「せやから、せっちゃんも気を抜いて楽しも？」

「……はぁ。　わかりました」

薫お嬢様のぽわぽわした笑顔を見てると、自分が一線引いて警戒してる事がバカらしくなり、私は心の底からこの修学旅行を楽しむ事を決意した。

決して、ウチだけ楽しい思い出が無いのが嫌なわけやないよ？警戒してても楽しい思い出作れるけど、あえて……そう。　あえて警戒を解いて、楽しい思い出を作るんや！！

▲　刹那　視点▲

▼　三人称　▼

ーーーージャリ…

清水寺の下、木の影から貴史を見つめる二つの影があった。

「……蛮」

一つは、貴史を蛮と呼ぶ女性。

「エリス、あいつは蛮ではない」

もう一つは、女性の言葉を否定する男性。

エリスと呼ばれた女性は、男性方へと振り向き、儚げな表情をしてそっと呟く。

「知ってるわ。　でも、私にとってはあの人も蛮なの。　今度こそ……私は蛮を振り向かせる！！」

「……はぁ。　南武　貴史。　見極めさせてもらうぞ」

エリスの宣言を聞き、もう何を言っても無駄だと悟った男性は、再び貴史が居た場所を強く睨む。

「貴様が、エリスに相応しい人間かを！！」

▲　三人称　▲

油断大敵。　チートでもね！（前書き）

ゲトバのあの人が、なかなかのチートに……。

油断大敵。　チートでもね！

▼　貴史　視点▼

ふぅ…やっと運び終えた。

「すまんな。　手伝わせて」

「まぁ、予想範囲内だ」

「「美味しかったです」」

「酔って寝てる人に何を……」

「コクコク」

ん？　いきなりの展開で、ついて来てない読者が居るなぁ。　説明してやろう。

俺達は今、旅館のロビーに居る。

んで、上の会話がなんなのかと言うと、清水寺から（ちゃんとした順路で）降りて、下にある音羽の滝に向かったんだが、これでわかる通り、音羽の滝の一部に酒が仕込まれてたんだ。

それを知らずに飲んだ馬鹿共が、かなりの量を飲み酔い潰れた。

新田先生に事情を話して、旅館に行く事になった。　その時、酔い潰れた連中をバスに入れたり、旅館の宛がわれた部屋まで運ぶのをジェイル達に手伝ってもらったわけだ。

んで…今はそのお礼に、ジェイル達にジュースを奢ってるとこだ。

カスミ達？　風呂に行ったぞ。

「「…「！！」…」」

しばらくロビーでまったりしてると、風呂場で魔力の反応がした。

「今のは……」

「間違いなく風呂場からだな」

「「シャッターチャーンスッ！」」

「もう遅いと思いますよ……って光化してまで行きたいか！？」

一部が羨ましい事をしてるが、まぁ放置しとこう。　後で写真を買う……いや、師匠権限で貰うか。　ディエチが言う通り遅いかもしれんが、カスミのは間に合ってるはず…。

「刹那ー！！」

「わ、わざとじゃありません！　ってカスミさん！！　後ろ！！」

「何！？」

「富竹フラッシュ（焚いてないけど）！」

「オットー！！　その写真をどうする気だー！！　カメラを寄越せー！！」

「や！」

ふむ、やっぱり良い仕事をしてくれたかオットー。　後で個人的な話があると言って呼び出そう。　というか、声が此処まで響くとは凄っ！　一応、人払いの結界はしてるから安心だが……。

「私のも要るか？」

「ジェイルは実物に触れるが、カスミのはレアだからな……まぁ、俺なんかに見せたくないんだろうけど」

「そうかい……。　（カスミくんが可哀相だ）」

「……。　（可哀相にカスミさん）」

「？」

「そこが良い！」

「何言ってるんだ？　ディード」

と、グダグダ話していると、カスミ達がやってきた。　カスミのこめかみに青筋が見えてる事から、まだ怒ってるようだ。
どんな事になってたのか、激しく気になる。

「説明シクヨロ」

「は、はい…」

刹那が前に出て、さっき起きた事を説明した。

薫達と風呂に入ろうと風呂場に向かい、脱衣所に入った瞬間、猿の式神が現れて皆の服を脱がしはじめたらしい。

そして、そのまま木乃香を持ち去ろうとしたら、刹那が百烈桜華斬を発動。

猿と近くにあったカスミの衣類を細切れにして、あの大騒ぎになったとのこと。

「さらにそこにオットーが現れて、カスミの裸を撮られたと」

「ッ！　そ、そうだ」

顔を真っ赤にして、肯定するカスミ。

ーーーーパシャッ×2

「ん…」

「「激写」」

ついついカスミが可愛くって、オットーと行動が被ってしまったぜ！　後悔も反省もしない！！

「撮るなー！！」

「すまんすまん。　ところで少年は？」

「お風呂から出た後、張り切ってパトロールしに行きました」

「そうか」

まぁ、薫と木乃……。

辺りを見渡すと、木乃香が居ない事に気付いた。

あれ？　これって……やばくね？

▲　貴史　視点▲

▼　千草　視点▼

いやー、こんなん上手く行くとは思わんかったわ。

今、ウチはお嬢様（妹の方）を抱えて、旅館から急いで離れとる。

ん？　お嬢様をどないな方法で、拉致ったか？　そんなん説明しとる暇はない！　早う逃げな、キレた（姉の）お嬢様が破壊光線を……

ーーーカッ！　ズドォオオオンッ！！

「ひ、ひぃぃぃぃぃ！！」

ほ、ほんまに撃ちよった！？　こっちは、木乃香お嬢様を抱えとるにも関わらずにや……。

「待て！！　千草！！　今なら薫お嬢様も許してくれる！！　……たぶん」

「千草ちゃん許さんえー！！」

後ろから、聞こえてくる死神の声。

チィッ！　もう追いつかれてまう！！　ちゅうか刹那の奴、嘘ならもっとマシな嘘をつき！！　破壊光線を牽制につこうた、薫お嬢様が許すかい！！

もうすぐ駅やけど、こらぁ駅前でお縄につくかもしれへん……どないしよう。

困り果てていた時、前方からこちらに向かってくる人影が二つ見えた。

一つはゴルフバックのような、大きなバックを抱えた男性。

もう一つは、小柄でフリフリのドレスを着た女性。

その二人には、見覚えがある。　今回の計画を実行する為に、雇った仲間だ。

「ほっ……助かったわぁ」

とりあえずは、二人の下へ行かなな。

▲　千草　視点▲

▼　貴史　視点▼

まさか俺達の警戒網をかい潜って、木乃香を連れ去るとはな……
これは評価を改めねぇと。

「少年は？」

「今、こちらに向かってるそうです！」

別に来なくてもいいが、念には念を入れないとな…。
おっと…今、千草を追い掛けてるメンバーを紹介しとくぜ？　まずは俺、そして薫と刹那の三人だ。
カスミ達は旅館で、一般生徒の護衛だ。

さて、説明終了！　ちょうど俺達の攻撃範囲内だし、一発噛ますか。

「薫！　刹那！」

「了解や！」

「はい！」

俺が二人の名を言うと、二人は即座に千草へ向かって刀を振り抜く……

ーーーガキィィイインッ！！

が、千草の後ろから二つの影が現れ、薫と刹那の攻撃を防いだ。

「ま、まさか……」

「そんな……」

薫と刹那が信じられないと言った顔で、とある影を見る。
二人が見てる影は、服の上からでもわかる鍛えられた肉体。手には野太刀を持って立っていた。
てか、アレ？　俺もあいつに見覚えが……

「すまんな。　神鳴流だ」

「おはつに～～～」

「「し、師匠！！」」

「久しいな…刹那、薫」

ふむ、どうやら薫達の知り合いみたいだ。　でも、俺も見た事があるんだよなぁ。　あの人。

「とりあえず、誰なんだ？」

「ウチとせっちゃんの剣の師匠で、名は……」

「弥勒　夏彦だ」

は？　って、あああああああああっ！！　思い出した！　Ｇｅｔ Ｂａｃｋｅｒｓ～奪還屋～の七人の弥勒だ！！　京都に居たのか……。

「あぁ～ん。　お師匠さん、ウチの紹介もして欲しいわ－－－－」

「……馬鹿弟子3号だ」

「「！！」」

弥勒の弟子となると、刹那並……いや、刹那より少し上か。　厄介だな。　つか、俺の方をめっちゃ見てるんだが……なんかしたか？

「意地悪やわ～～～～。　月詠いいますー」

「薫はあのぽわぽわを！　刹那は木乃香を！　俺はあいつだ！」

「「わかった（はい）！」」

「願ってもない」

刹那は千草の方へ行き、薫は月詠、俺は弥勒に向かって走り出す。相手側もそれに対応するように、千草はファンシーな熊と、ファンシーな猿を呼び出して刹那の相手をして、月詠は小太刀二刀を構えて、薫の下へ向かい、弥勒は……

「はぁぁあああああああっ！」

凄まじい速度で、野太刀を振り下ろしてきた。

ッ！　結構速い！

「貴様が挑むは、かつて美堂が打ち破った七人の弥勒だ！」

「……」

やはりこいつらあの住人達か……。
波児や卑弥呼達に聞いても、惚けるから確信には至れなかったが……。

「まったく……内緒だって言われたのに」

後ろから女の声が聞こえた瞬間、前に跳びながら振り向くと、槍を突き出してる弥勒　奇羅々の姿があった。

「はぁい」

「誰に内緒って、言われたんだ？」

「教えない♪」

「そうかよ！」

腕を振って、衝撃波を放つもなんなく躱される。

あー、やべーなぁ。　奇羅々だけでも相当強い。　具体的にはチート並かな。　けっして、俺が弱いわけじゃない！！

「ほらほら。　このままじゃ私は疎か、兄さんにも、勝てないわよ」

「チッ」

素早く周りを確認する。
刹那は熊と猿に苦戦してて、薫は月詠相手に苦戦。　というか、薫ですら苦戦を強いられるとは、凄いな月詠は……。

「よそ見とは余裕ね。　神鳴流槍術奥義、百烈桜華断！！」

くそが！！

ーーーーズガアアアアンッ！！

▲　貴史　視点▲

▼　薫　視点▼

ーーーーズガアアアアンッ！！

「！　貴史！！」

「よそ見なんてややわ～～。　ざーんがーんけーん」

ーーードンッ！

くっ…このしつこい。

月詠の斬岩剣を避けて、斬月に月牙を纏わせて一閃し解き放つ。

「あ～～れ～～～～」

巨大な斬撃に吹き飛ばされ、宙に浮く月詠に止めの一撃を放つ為に、宙に虚の字を描く。

すると、一つの火球と火竜が現れた。

「虚空一閃」

ウチが技名を言うと、火球が一直線に伸びた。　それはレーザーのように月詠をつらぬ……

「！　ふっ！」

……かなかった。

まさか、虚空瞬動が出来るなんてな。　流石、師匠の弟子や。　にしても、こうも長引くとは思わんかったわ。　カスミ達も、連れて来るべきやったなぁ。

▲薫　視点▲

▼刹那　視点▼

「ほらほら、お嬢様を返して欲しいなら頑張り」

「くっ…」

このふざけた猿と熊、なかなか強い。　というよりも、私の動きを完全に把握してる。

「弥勒に聞いた通りに、動くどすなぁ」

やはり、情報源は師匠か……。　どうする？　薫お嬢様は、月詠とか言う人の相手で、こっちには

来れない。　南武先生は、師匠を相手に苦戦中。　このままでは……

……

『下がれ、刹那』

「！！」

突然の念話に従い後ろへ下がると、私の横を擦り抜けるように銃弾が通過した。

――ボシュンッ！　ボシュンッ！

「な、なんや？」

「助かった……龍宮」

「何、気にするな」

後ろに頼もしい人物の気配を感じ取り、千草に向かって走る。

「神鳴流秘剣！　百花繚乱！！」

「あひぃ～！！」

一瞬にして千草の背後へと回り、直線状に気を放ち吹き飛ばす。

吹き飛ばされた衝撃で、千草は木乃香お嬢様から手を離した。

「お嬢様！」

瞬動を使い、木乃香お嬢様をキャッチする。

「むにゃむにゃ……もう食べられへん」

ある意味お決まりの寝言を言う木乃香お嬢様に、苦笑するがすぐに神経を研ぎ澄まし、千草の方を見ると、さっきまで南武先生と戦ってた師匠が、月詠を抱えて千草の前に立っていた。

「増援が来た。　引くぞ」

「了解や」

「待て…ッ！！」

千草が式神を出すと、同時に師匠が斬空閃を放ち私の動きを止める。

「やめておけ……。　今のお前では、俺達は捕らえられん。　そして、南武　貴史。　貴様には失望した。　早々に京都から立ち去れ」

師匠は言うだけ言って、縮地で立ち去った。

千草も師匠が斬空閃と、同時に逃げたみたいやし……。

まぁ、木乃香お嬢様を取り戻せたから良しとしよう。

――ゾクッ！

「「「ッ！！」」」

突然、後ろから殺気を感じた。

「失望しただと……クスクス……いいぜ。　次会ったら後悔させて

やんよ。　この南武　貴史様に喧嘩を売った事をよ……クスクス」

怖い。

この時、私は仲間で頼もしいはずの南武先生を怖いと思った。

こんな……

コンナ　バケモノ　ト　イッショ　ニ　イテ　イイノカ？　とそう思った。

▲　刹那　視点▲

油断大敵。　チートでもね！（後書き）

貴史が弱いわけじゃないんだからねっ！

修学旅行二日目。（前書き）

スクナのレベルも上げた方が良いですかね？

あと、あの元プロレスラーの不死身さん。
修学旅行編で出すはずが、弥勒に奪われたという悲劇ｗｗｗ
出番はあるのだろうか？

と、まぁ…前書きで言ってますが……今回の話にまったく関係ありません。

修学旅行二日目。

▼　カスミ　視点▼

夜の襲撃を貴史達が退けて、修学旅行二日目の朝が来た。

「おはようエヴァ、茶々丸、明日菜、真名」

「「「「おはよう（ございます）」」」」

「すまんが今日も、ステルスモード頼む」

「イエス、マスター」

茶々丸に指示を与えると、茶々丸は周りに溶け込むように消えた。

「まさか茶々丸さんが、着いて来てたなんてねぇ」

「足音とかも聞こえなかったし、まったく気付かなかった。　暗殺するなら最高の人材だね」

「私の従者だから当然だ」

「カスミ、朝ごはんに遅れるぞ」

「ああ…そうだな」

エヴァの言葉を聞き、備え付けの時計を見ると、確かに朝食の時

間になろうとしていた。

真名、明日菜、エヴァ、茶々丸と広間に行くと何と言うか、空気が荒れていた。

空気が荒れていると言っても、一般人には気付かれない程度だが、長瀬や苦と言った武芸に精通してる者は気づいてるみたいだ。

おお…美空の奴、ガタガタと震えてるな。　奴も魔法生徒、この空気を感じ取るくらいは出来るようだな。

「おはようカスミくん＋他四名」

「「「最後まで言え（いなさいよ）！」」」

「ジェイル、これはやはり貴史か？　あと、おはよう」

ジェイルにこの荒れた空気の原因を聞くと、「うむ、そうだ」と肯定した。

あのあと、木乃香を連れて戻ってきた貴史と刹那達だが、貴史の機嫌は最悪だった。

「まぁ、これでも昨日よりはマシになってるよ」

「これでかい？」

「うむ」

まぁ、昨日は殺気に魔力や気とかも垂れ流し状態で、近付けなかったしなぁ。

唯一近付けたのは、貴史との実力差が掛け離れてる乱のみ。

「確かに、今の状態なら私も近付けるな」
「共に行動するのは、無理みたいだがね」
貴史の方をもう一度見ると、明石達が声を掛けていたが心此処に在らずといった具合に、無反応だった。
「そうみたいだな……」

奈良公園――。
エヴァの希望を聞いて奈良。
坊やと同じ所だな。　やれやれ、告白場面なんぞ見たくないぞ。
――――くいくい
「カスミ！　ほら、鹿だぞ！！」
「ああ、そうだな。　というか私はもう見飽きたよ」
「何を言う！　こんなに可愛い動物を見飽きた等と……カスミには

愛がないのか！？」

ーーーくいくい

「エヴァと貴史、茶々丸に向ける愛はある」

「な、なななな…何を言ってるんだ！！」

ーーくいくい

私の発言に顔を赤くして、手をバタバタと振るエヴァ。

フフッ可愛いなぁ…もう。

ーくいくい

……というか、さっきからくいくいなんだ？

私が後ろを振り向くと大量の鹿がずらり……大、量……すぎませんか？

▲　カスミ　視点▲

▼　乱　視点▼

「ほら、いつまでもふて腐れてねぇで遊ぼうぜ？」

「あーわかったわかった。　だから引っ張んな」

現在、俺達（母さん、デイエチ、ディード、オットー）は親父と一緒に大阪に来てる。

美味いもん食えば、親父も元気になるだろ。

「大阪といえばタコ焼きに、きつねうどんやマムシと呼ばれるうなぎ丼か…」

「マムシ？」

「うむ、なんでもうなぎの蒲焼きを熱いご飯と挟み、そこにタレを掛けるモノだ」

「なんで挟むの？」

俺の疑問に答えたのは、意外にも不機嫌な親父だった。

「うなぎが冷めないように、工夫がされてるんだよ。　ちなみにマムシという名の由来は、うなぎの蒲焼きに飯をまぶすからという由来だ」

へぇ～。　案外知ってるんだなぁ。　親父って……。

「ではまず何が食べたい？」

「私はマムシというものが…」

「「タコ焼き！」」

「俺はきつねうどんかな…」

「マムシ」

「ふむ……」

まぁ、誰が何を選んだか分かるだろうけど、一応……デイエチと親父がうなぎ丼で、オットーとディードはタコ焼き、俺がきつねうどんだな。

まぁ、この分じゃきつねうどんは最後かな……油揚げ、食べたいなぁ。

「ならきつねうどんにしよう」

「「「「何ぃ～～～～!?」」」」

「やった!」

まさかの逆転勝利!　流石、母さんだぜ!!

「おい、待て多数決にしても引き分けだろ?　なんできつねうどんなんだよ?」

「財布は私が握ってるから、選択権は私にあるのだよ」

「きったねぇー」

親父には悪いけど……。　うん、楽しみだ♪

▲　乱　視点▲

▼　貴史　視点▼

大阪で美味しいもん食ってると、気分がよくなった。　やっぱ食いもんは偉大だな。
いや、それよりもジェイル達に感謝だ。

「お、南武先生じゃん」

「おう。　お前らも大阪に来てたのか？」

旅館に戻ろうと、バスに乗ろうとしたら明石達が居た。

「もう、朝食の時に言ったじゃん！」

「そうだっけ？」

「そうだよー」

「というか先生、機嫌が良くなりました？」

「あん？」

明石と会話してると、大河内が割って入って来た。
まぁ、確かに今朝よりはよくなったが、よく見てんなぁ。

「あ、そういえば…朝の時より絡みやすい」

「まぁいろいろあったんだよ」

「へぇ～」

にしても、明石達の荷物多くね？

「お前ら……それ土産にしちゃあ多くね？」

「ん？　ああ、これはクロナさんにね」

「……は？」

クロナ？　クロナって、アサシンか？　いやいや、きっと違うはずだ。　同名の人物だろ…多分。

「赤屍　クロナさんだよ。　広域指導の先生」

「でも、最近クロナさん会わないんだよねー。　南武先生、なんか知らない？」

「あーうん……そうだなー」

すんげぇ…心当たりのあるクロナさんだぜ。　いや、もう現実逃避はやめよう。　うん。

「クロナなら出張？」

「なんで疑問形？」

気にすんな。

はい、旅館に到着……したはいいが、ロビーで悶えてる少年を発見。

はて？　なんか悪いもんでも食ったか？

雪広や鳴滝姉妹に佐々木、明石も少年の奇行に頭を悩ませてる。

ここは一つ同僚として聞いてみるか……。

「どうした？　少年。　ゴロゴロ転がったりして」

俺は少年に近付いて、聞いてみる事に…。

すると、少年は何か慌て出した。

「い、いやあの、別に何も……誰も僕に告ッたりなんか…」

つまりは宮崎の告白か……青春だねぇ。

それはそうと、少年の言葉を聞いた雪広達が現れて、さらに少年パニック。

なんだよ？　コックさんがコクのあるコックリさんのスープをって……

はたして、あの状態で魔法バレをうまく対処出来るんだろうか…

…心配だぜ。

そして、このあと魔力の反応を感じた。

「……はぁ」

▲貴史　視点▲

▼フェイト　視点▼

京都に、封印されてるリョウメンスクナノカミの偵察に来て、3週間が経過した。

最初は来て早く、リョウメンを復活させる予定だったんだけど、近衛　木乃香ほどの魔力が無いと駄目らしい。

だから、あちらが来るまで待っていたんだけど……

「参ったなぁ。　まだデュナミスへ連絡が繋がらない」

そう……数日前から、デュナミスに定時連絡しようにも、繋がらないのだ。

考えられるのは、拠点を変えた事ぐらいか…。

「彼がクルトやタカミチに、やられるとは思えないしね」

でも、拠点を変えたのなら調達が報告してくるはずだし……。

「ふぅ…」

考えても仕方ないね。　任務を終えたら戻る予定だし、その時に考えよう。

「新入り～」

っと、千草さんが呼んでるみたいだからさっさと行こう。

▲　フェイト　視点▲

修学旅行二日目。（後書き）

短い。　でもやることないんです。
ネギの魔法バレ対策万全ですし……。
カモが居ないから、キスイベントはないですし……。

普通に枕合戦（枕投げ）ってのも味気ないし、なによりロビー正座をより旨い優勝賞品ないですから……。

食券でも、やりそうなクラスではありそうですが……。

ウチらは、護られるだけのお嬢様やない！（前書き）

弥勒が加わっただけで、こんなにも難しくなるとは……。

恐るべし！　七人の弥勒！！

そして、アンケート結果はもうわかってらっしゃると思いますが…
…続編で続けて行きたいと思います。

▼　貴史　視点▼

修学旅行三日目。
今日は、少年と一緒に行動する事にした。
教師二名が一つの班に固まって行動するのは、問題かもしれんがそこは大目に見てほしい。

そして、俺と少年が共に行動する班は……

「今日は南武先生もかー」

「あわわわわ」

「よろしくです」

「貴史と一緒♪　一緒♪」

「お姉ちゃん楽しそうやわ～」

「そうですね」

５班の図書館探検部組＋京都組だ。

「あんま、うるさく言うつもりはねぇから安心しな。　宮崎はいい加減慣れろ。　よろしくな綾瀬。　元気だなぁオメェは…。　木乃香と桜咲もはしゃげる時には、しゃいどきな」

さて、集団で道端に留まってたら迷惑極まりない。　というわけで、早乙女の提案で京都のゲーセンに行くことに……。

京都に来てまでゲーセンって……若者だねぇ。

「のどかはネギ先生と一緒に！　ね」

「あ、え…」

「あ、えーなーそれ♪　せっちゃん、ウチらも撮ろー」

「あ、いえ、私は……」

プリクラかぁ……懐かしいな。

「貴史はウチとなー」

「へいへい」

プリクラの台の前に、薫と並ぶ。　ネギと宮崎コンビを最初に、桜咲と木乃香コンビ、俺と薫コンビ、早乙女と綾瀬とネギトリオ、桜咲と木乃香と薫トリオの順で撮った。

「あ、南武先生が一回しかない」

「俺はそれだけでいい」

「駄目です。　思い出の品は多い方がいいですよ」

俺の言葉を綾瀬が否定する。
思い出の品ねぇ……。　まぁ、いいか…。

「あと一回ならいいぞ」

「じゃあ、南武先生と撮る人ー！」

「は～い！」

「薫は駄目です」

早乙女の言葉に、薫がいち早く手を挙げて主張するも、綾瀬によって却下された。
綾瀬に却下された薫はその場でしゃがみいじけ、それを木乃香が苦笑しながらある提案をした。

「ほなら……ウチとせっちゃんとお姉ちゃんと南武先生で、ええかな？」

「賛成～」

「しょうがないですねー」

「つか四人も入るのか？」

「頑張ればイケるって」

んで、ちょっと無理はしたが早乙女の言う通り、なんとかフレームに収まりプリクラを撮り終えた。
その後は少年がカードゲームをしたりと楽しんでた。

俺？　俺も遊んでるぜ。　遊○王で…。

「エク○ディア揃った～」

「またかよ…」

薫とデュ○ルしてるんだが、薫の運の良さで４、５ターンでエク○ディアが揃い負ける。　イカサマでもしてんじゃないのかと、疑ってしまうほどだ。

「あの…南武先生…」

「ん？　ああ、そろそろ行くか」

後ろから少年の声が聞こえたので、後ろを振り向くと、そこには桜咲と木乃香、少年が居た。

一応、早乙女や宮崎の方を見るとカードゲームに夢中で、気付いていなかった。

その後、気付いてついて来られると困るな……。

ーーーブンッ！

「南武先生？」

「認識疎外の結界を張っただけだ。　ついて来られると厄介だろ？」

「そ、そうですね」

「それでは……木乃香お嬢様、薫お嬢様の護衛と親書を届けるのと、

二手に別れましょう」

桜咲の提案に少し思考する。

確かに、護衛と親書を分けた方がいい。　だが、護衛対象は二人で護衛出来る人間は俺に桜咲、あとは少年くらいなモノ。

薫や木乃香も一応は戦えるが、護衛対象が前線で戦うなんざ前代未聞。　もし罠に掛かり、拉致られたら目も当てられん。

そして少年だが、これも却下だ。

少年には親書を届けるって任務があるし、カスミを倒したとは言え……イレギュラーの介入のお陰だしなぁ。

となると、少年も護衛対象になるか……。

んで、残りが桜咲と俺。

桜咲の実力を考えると、弥勒と月詠の二人……いや、この場合は八人か？　まぁ、それは良いとして……八人を相手は無理だろう。

俺も護りながらになると難しいし……。

アレ？　詰んでね？

「あ…」

「「「「？」」」」

カスミ達呼べば良くね？　いや、カスミ達は駄目だな。　呼ぶならジェイル達か……。

呼ぶか……。

「ちょい待ってろ」

桜咲達に待ってるように伝え、携帯を取り出してジェイルの番号を呼び出す。

「と、いうわけで助っ人を呼んだ」

「よろしくお願いします」

「うむ。　こちらこそ」

「さて、班割はっと……」

薫、木乃香の護衛組……近衛　薫、近衛　木乃香、桜咲　刹那、ディエチ、ディード、オットー。

親書組……少年、俺、ジェイル、乱。

これで問題はないな。

「若干、敵が可哀相な気もしますが……」

何かあってからじゃ遅いんだよ。

キングクリムゾーンッ！！

「退屈だぜ」

「そうだねぇ」

「大丈夫か？」

「この俺を、一撃で……」

「あわわわわ…」

はい、着いて来れてない読者に説明をば……犬上　小太郎が襲い掛かって来るも、俺のデコピンで戦闘不能。

「もちっと鍛えて来い」

「くそぅ…俺はネギと戦いたかったんやぞ……」

弱い者いじめでしかねぇよ。

「僕もあれはどうかと……」

「少年。　少年が受けた任務はこいつと喧嘩する事か？　違うだろ？　俺達は少年が無事に関西呪術協会の長に、親書を渡すまで護衛することだ。　だからやって来る敵を片付けるのは、俺達護衛の仕

事だ。　少年は親書を届ける事に専念しろ。　それがプロの仕事だ！」

「わかりました！　ご指導ありがとうございます！」

俺の言葉に感銘を受けたのか、少年は俺に感謝の言葉を言う。

うん。　素直でよろしい！！

「敵を前に……指導とはずい、ぶん余裕やな……」

というか、この空間には飽きたな。

「つうわけで、俺らは外に出るか。　ジェイルよろしく」

「任せたまえ！」

「アホゥ！　この空間はそう簡単に」

「転移」

――――ブンッ！

ジェイルが展開した魔法陳の上に集まった俺らは、そのまま転移して結界の外へ転移した。

本来なら結界を破壊しない限り抜けれないのだが、そこはジェイルだからという理由でスルーしてほしい。

▲　貴史　視点▲

▼　薫　視点▼

貴史達と別れて、ウチらはそのまま京都を観光しとる。　勿論、後ろには月詠と師匠が着いて来とる。

ウチらが、ハルナから離れたのはその為や。　にしても、参ったわぁ。　師匠がこっちやなんて……てっきり貴史の所へ行くかと思うとったわ。

そして、何事もなくシネマ村へ……。

原作やと、それまでアクションがあったんやけどなぁ。　師匠のお陰やろうか？

「なぁ、せっちゃん？」

「なんでしょう。　薫お嬢様」

「その格好はなんやの？」

シネマ村に入るなり、せっちゃんの格好が制服から新撰組の服に変わっとった。

いや、まぁ…原作でやっとったけど、なにやってるん？

「ディードさんとオットーさんに……」

ああ、あの二人か……ならしゃあないな。

「お姉ちゃん、せっちゃん。　ウチは似合っとる？」

木乃香の方を見ると、どこかのお姫様を思わせる着物を着った。

「似合っとるえ」

「はい。　お似合いですよ」

「きゃーーやったーーーー。　ほら次はお姉ちゃんの番やよ！
ウチらが選んだるな？」

「へ？」

「ほら、せっちゃんも手伝ってぇな」

「は、はい」

木乃香はニコニコ笑顔でウチの背後に回り、ぐいぐいと更衣所へ押していく。
そして、更衣所の入口には……

「「カマ～ン」」

めっちゃええ顔で、迎えてるディード達。

「ちょ、やめ…ウチ、まだ貴史に……ディエチ～助けてぇなぁ！！」

貞操の危機を感じ取り、ディエチに助けを求めようと声を上げるも、何処にもディエチの姿はおらへんかった。

ま、まさか…敵に回った!?

と、思うとった時期がウチにもありました。
更衣所の中に入ると、きわどい巫女服を着て、さらに両手で顔を覆って泣いとるディエチの姿があった。
しゃがんでるので、ディエチが穿いとる袴の横の隙間から見える肌がなんとも……ノーパンやなアレは…。　というか疑ってごめんな？　ディエチ。
って、待てよ。　アレもディードらに着せられたんなら……ウチも？

ぎぎぎぎぎ…と、ディード達の方を向くと露出度が高い忍者服がオットーの手に……あの、布地が少ないんやけど……。

「「ニヤリ」」

「あかん！　それだけは勘弁や！！」

「「覚悟～」」

「い・や・や、言うてるやろ！！」

エロい忍者服を持ったオットーらを、シバいて普通の着物にしてくれた。

しばらくシネマ村を歩いてると、馬車が一台やって来た。
馬車に乗ってるんは、月詠一人や。

「お、お前は！？」

「どうも一一一一。　神鳴流です～～～じゃなかったです。　そこの東の洋館の、お金持ちの貴婦人にございます～～～～」

いや、おもっきし神鳴流言うた後に、「じゃなかったです」って……。

「そこな剣士はん。　今日こそ借金のカタに、お姫様をもらい受けに来ましたえ～～～～」

「なんだと？　なんのつもりだ？　こんな場所で？」

せっちゃんには、もうちょい柔軟性ある思考が必要みたいやな。木乃香に教えられて、ようやく気付いたし……。　それよりも月詠はなんで単体で指定したんやろ？　まぁ、木乃香でもウチでもスクナを復活させるのに、一人で十分やけど……。

ウチが狙われてへんようで、なんや寂しいなぁ。

「そーおすかー。　ほな、仕方ありまへんなー」

あ……寂しいがっとったら、せっちゃんの名言を聞きそびれた。

月詠は手袋をせっちゃんに投げて、木乃香をかけて決闘を申し込んだ。　って、やっぱりウチは蚊帳の外なんか？

「御迷惑と思いますけど、ウチ……手合わせさせて、頂きたいんですー。　逃げたら、あきまへんえー。　刹那センパイ」

せっちゃんの名前を言い、殺気を放つ月詠の目は、闇に堕ちた目をしていた。

「ほな♪　そちらにおる方と、一緒に来てもかまいまへんえ～～～～」

そう言って、月詠は来た時の馬車に乗って去って行った。

そちらにおる方って……ディード達なんやろうなぁ…。　まぁ、月詠程度なら楽勝やろ。　問題は……師匠やな。

師匠対策が思い浮かばず、３０分が経った。　正直、やばい。

師匠は貴史と互角の実力や。　それも七人やで？　オットーやディードが勝てるかどうか、ディエチは論外や！　近距離戦闘が出来る言うても、それはまだまだ月詠にすら届いとらん。

そもそも、ディエチは遠距離の射撃が本領や。　そして、神鳴流には銃撃なんて無意味。　あかん、詰んだ。

い、いや…まだや！　まだ師匠が来るとは……

「逃げ出さずよく来たな。　刹那、薫、木乃香」

「ぎょーさん、連れてきてくれはっておおきにー。　楽しくなりそうですなー――――♪」

橋の上に月詠と師匠がおった。　手には愛刀を持って……。

……空気読んでや。　師匠。

「このか様も、かおる様も、刹那センパイも……ウチのモノにしてみせますえー――――♪　ふふふ♪」

にこやかな顔で、ゆっくりと小太刀を構える月詠。　そして、師匠も……

「月詠は刹那を……俺は他の奴らだ」

「はいー――♪　それでは」

「いざ、尋常に……」

せっちゃんは夕凪を構え、木乃香は扇を、ディエチは無銘の刀を、ディードは干将・莫耶を、オットーも爪具を装備して構えた。

えっ？　ウチ？　ウチも武器を構えとるよ？　佗助の始解モードで…。

「「「「「勝負！！」」」」」

そして、ウチらの言葉に全員が弾け跳ぶように駆け出した。

▲　薫　視点▲

掠われたお嬢様（前書き）

区切るとこ間違えたかなー。
この話の前半を、前話の後半に入れれば完璧だったかも……。

掠われたお嬢様

▼　刹那　視点▼

――ギン、キン、ギキン！！

くっ……流石と言うべきか、お師匠様の弟子なだけ強い。　まぁ、私もお師匠様の弟子なのだが……

「せっちゃん……」

「木乃香お嬢様……大丈夫ですか？」

「う、うん」

「ああん。　よそ見をせんと、私を見てください」

「くっ」

本当に……なんて奴だ。
木乃香お嬢様の加護を受けて、身体能力をさらに上げた私を圧倒するとは……。　このままでは……

チラリと薫お嬢様が居る場所を確認すると、向こうは向こうでかなり激しい戦いをしていた。

「にとーれんげきざんてつせーん♪」

「チッ…」

私の隙をついて、月詠は斬鉄閃二発放ってきた。　私はそれを舌打ちしつつも、夕凪一本で全て切り伏せる。

このままやと、ほんまにやばいかもしれへん。　どないしよ。

▲　刹那　視点▲

▼　薫　視点▼

こりゃあ、あかんわ。

現在ウチはオットーらと一緒に、師匠と戦っとるんやけど……観客の目があってか全力で戦えへん。

まぁ、観客がおらんで全力出せるんは、あっちも同じやけどな。

「どうした？　四人で向かっておきながら、それだけか？」

「師匠が強すぎるんや！」

「それよりも……」

ス、スルーやて？　可愛い可愛い弟子の言葉をスルーするやなんて、ちゃんとコミュニケーションとらなあかんえー！！

「麻帆良に行ってから、俺が渡した鍛練メニューをしたか！？」

師匠の目がカッ！　っと見開くと、同時にウチは目を逸らした。

い、いや…仕方ないんや！　だって師匠の鍛練鬼畜やし、カスミやせっちゃんを弄るの楽しかったし、貴史が来たし……

というか師匠……オットーの半光化した光速の攻撃を避けたり、ディードの攻撃を防いだり、ディエチの攻撃を避けたり、ウチの攻撃を防いでげんこつしたりって……ほんまに人間？

――――ゴツンッ！！

「いっー――――たぁ～～～～～！！　というか、なんでウチだけ攻撃するん！？」

「黙れ、馬鹿弟子」

「敵に回った、阿呆師匠に言われたーない！！」

「ほぅ……」

ウチの言葉にカチンッときたのか、殺気っちゅーかなんか威圧感が上がった。

もうあかんかも……。

「行くぞ」

「腹を括るしかないやろうなぁ」

同時に、地を蹴りウチと師匠は加速する。　此処からはウチと師

匠の舞台。　ディードらの援護は、期待出来ひんやろうな。

――ガキッ、ゴキッ、ギン、ギッ

剣劇はさらに加速して……

――――チャキ

「フッ！」

「ハッ！」

――――神鳴流

「心刃合錬」

「な！」

師匠は刀と一つとなり、神鳴流の技を繰り出す。　ウチもやろうと思えば出来るんやけど、間に合わへん。　大人気ないで、師匠……。

――――奥義、百烈桜華斬！！

迫りくる無数の斬撃を無数の斬撃で弾こうとするも、刀と一つになった者の技を弾けるわけなく、力負けでウチは切り刻まれた。

「マスター！！」

「薫お嬢様！！」

「お姉ちゃん！！」

「「薫さん！！」」

ああ、あかんな……意識が……。

▲　薫　視点▲

▼　夏彦　視点▼

崩れる馬鹿弟子1号（薫）を抱えて、馬鹿弟子2号（刹那）から距離を取る。

「貴ィ様ァァアアアアアアアア！！」

馬鹿弟子1号を本気で斬った事に、キレた馬鹿弟子2号は瞬動を使って、一直線に切り掛かってくる。

「頭に血が上っては、冷静な判断が出来ぬと……教えていたはずだぞ？」

――ザンッ！

馬鹿弟子2号の突進を避けて、交差する瞬間切り捨てる。

「カハッ…」

「南武に伝えろ。　夜にまで待つと……」

馬鹿弟子2号に言伝を言って、馬鹿弟子3号（月詠）と共に立ち去った。　ちなみに戦いを見てた一般人は、馬鹿弟子1号が斬られた瞬間、一人残らず眠らせた。

「自分の身よりも、周りを優先か……」

変わらんな。　と、心の中で呟いた。

▲　夏彦　視点▲

▼　貴史　視点▼

「あ？　今なんて言った？　刹那」

「薫お嬢様が掠われました。　すみません」

俺は今、鳥居を抜けたところの原っぱ辺りで、桜咲の報告を受けてる。

しかし、その報告は最悪な報告だった。　薫が掠われた。　それはつまり、スクナの復活の時間が原作より、早まるということ。　まずいな……

「わかった。　んじゃ、桜咲は俺達と合流してくれ……まずは近衛家に行く」

「はい……」

桜咲の電話を終えて、即座にカスミに電話をする。　薫が掠われたのなら、足止めの鬼共がうざったい程居るだろうし、戦力は多いに越したことはないしな。

「薫が？」

「ああ、弥勒にやられたらしい」

「わかった。　すぐにそちらへ向かう」

「助かる」

さて、これで良し……。
あとは、調子に乗ってる弥勒をブチのめすだけか……。

「どうかしたんですか？」

「ん？　ああ、薫が掠われたらしい」

「えええええっ！？　だ、大丈夫なんですか？」

「大丈夫じゃねぇよ。　これから近衛家に行くから用意しな」

「は、はい！！」

俺の言葉に少年は、杖に跨がり飛ぼうとしていた。

「って、ちょい待てや…。　まずは桜咲やカスミ達と合流だ」

「で、でも!?」

「安心しろ……いくらなんでも薫を殺す事はない」

スクナの復活と制御の為には、な。

「わ、わかりました」

少年を落ち着かせて、ジェイル達と一緒に奥に進むと、でかい門が見えた。　おそらくアレが関西呪術協会・総本山の根城にして、薫と木乃香の実家なんだろう。

そして、門の前に眼鏡をかけた優男が居た。　にこやかに……何も知らずに…。

「ようこそ、ネギくん。　それと、麻帆良の魔法先生、魔法生徒さん」

「こ、こんにちは」

優男は頭を下げると、少年は吃りながらも挨拶をする。　そして、俺は……

「あんたが関西呪術協会の長にして、紅き翼のサムライマスター、そして薫と木乃香の父、近衛　詠春で違いないか?」

「ええ、そうです」

「簡潔に説明するぜ。　今の現状を……」

「！　……何かあったんですか？」

俺の出す雰囲気に気付いて、穏やかな顔を潜めるサムライマスター。　そして、身体から滲み出る魔力と気。　なるほど、いまだ現役ということか。

「薫が七人の弥勒に掠われた」

「なっ！？」

目をこれでもかって言うくらい見開く、その顔は関西呪術協会の長としてではなく、紅き翼のサムライマスターとしてではない、父親の顔だった。

「南武先生！」

「貴史！！」

っと、ちょうど良いところに桜咲と木乃香、カスミの班の到着か……。

「俺達は、今から薫の救出に向かう」

「ならば、私も…」

「組織のトップが、前線に立つなアホ」

「しかし！」

「しかしもかかしもねぇよ！　少年と木乃香、明日菜も此処に…」

「「「嫌です（や）（よ）！！」」」

俺が残るように言おうとすると、言い終える前に拒否られた。
せめて最後まで言わせろよ。

はぁ……正直、木乃香はついて来ていい。　薫からの最強の陰陽師と、お墨付きを貰ってるしな…。　だが、初日に捕まったし……明日菜も実力がわからん。
第一、明日菜って魔法世界の偉い人だろ？　もし怪我でもさせたらやばくね？　そして、少年は完全なる役不足。　あの犬にも負けそうだもん。
さらには、弥勒だろ？　……はぁ。

「と、まぁ……その弥勒にやられた俺には言う資格はねぇか……いいぜ、連れてってやる。　ただし！　少年は戦闘に参加すんな」

「何故ですか？」

「お前には経験が足りないからだ。　戦闘訓練だって、ろくに受けてねぇだろ」

「そう、ですが……」

俺の言葉に俯く少年。　そんな少年の頭に手を乗せると、少年は頭を上げこちらを見る。

「見てるのも修行の一環だ」

「はい！」

「うっし！　それじゃあ」

「行きましょうか」

俺の言葉を被せるように、背後からサムライマスターの声が聞こえた。　振り返て見ると、そこには刀を持った詠春が一人。

そして、詠春の背後に凄まじいオーラが……

「連れていかれた場所は、だいたいわかります。　さぁ！　私についてくぺっ！！」

「お、長ー－－－－－－－！！」

今にも走り出して行きそうな、詠春に一撃喰らわせ気絶させる。

「だから、トップが動くなっつーの」

「ならば、長の代わりに俺達がお前達と、共に行こう」

そう言って、屋敷から現れたのは胴着に袴を着た男と、鈴の音がリアルに聞こえてきそうな女性（？）だった。

「……一応、聞くが……テメェらは？」

「申し遅れました。　僕は風鳥院　花月と言います。　そして、彼が……」

「雨流　俊樹だ」

ゲトバキャラですね。　本当にありがとうございます。　つかさ……

「お前らを寄越した奴って誰よ？」

「さぁ、薫さんが心配だ。　行きましょう」

「そうだな」

……こいつらが、なんでこうも話をはぐらかすのかが、わからない。

まぁ、とにかく……行くか。　かなり大所帯だけど……。

っと、移動の最中に説明でもしとくか。

風鳥院（ふうちょういん）　花月（かづき）。　ＧｅｔＢａｃｋｅｒｓ－奪還屋－では、有名なキャラの一人。　女性にしか見えないその容姿に、男性読者のファンは多い。　何気にサービスシーンがある。　さらには、戦闘で見せる姿に心を奪われる女性読者も居るとか居ないとか。　二つ名は『絃（いと）の花月』、『旋律（戦慄）の貴公子（プリンス）』だ。

次は、雨流（うりゅう）　俊樹（としき）。　ＧｅｔＢａｃｋｅｒｓ－奪還屋－のキャラクター。　花月に付き従う、花月の親衛隊の一人。　技は気を使用したモノが多く、遠当てという気を飛ばす技を多用する。　二つ名は、勝つためなら手段を選ばない事から『地獄の騎士（ヘルナイト）』と言われてる。

と、説明も終わると時刻は夕方。

場所は、原作であった鬼の軍団が現れた場所。　そして、そこには弥勒や千草の姿は無く、代わりに鬼の軍団が居た。

「ふむ、どうやら先に喚ばれたみたいだね」

「エヴァ、真名、明日菜、茶々丸、花月、雨流…この場はお前らに任せた。　楽勝だろ？」

「当然だ」

「むしろ、足りないね」

「任せて！　久々に腕が鳴るわ！！」

「システム、オールグリーンです」

「では、弥勒は貴方に任せます」

「オレ一人でも十分だ」

エヴァ達の顔は、無数の鬼共を前にしても、自信に溢れていた。

まったく、頼もしい奴だぜ。

「それじゃ、頼んだぜ！」

俺が言い終えるや否や、エヴァ達は飛び出す。　そして俺は少年を抱えて、ジェイル達と一緒に先へ進んだ。

▲貴史　視点▲

殲滅戦は嫌いじゃないよ。　特に、調子に乗ってる仲間を落とすのはね。　bl

サブタイトルにああ書いたけど、メインは刹那。

▼　真名　視点▼

「なんやえろう速いなぁ……。　あのあんちゃんら」

貴史達が先へ進んだあと、一体の鬼が頭をポリポリ掻きながらそう言った。

まぁ、確かに速かったね。　正直、ネギ先生が心配だ。　いくら風の加護を受けて身体能力が上がってるとはいえ、あれではジェットコースターに捕まって、遊んでるようなもの。　ネギ先生が、どれだけ速く飛べるかわからないけど、少なくとも貴史の移動速度の半分はないはず。　というか半分出したら身体がバラバラになる。

「そんで、残ったのが女に子供か……。　一人は男やけど」

「不満かい？　私達は大いに不満だね」

「ほぅ……言うやないか」

私の軽い挑発に、目を細め私達を再度見定める鬼達。

「当然だ！　私達をあまり舐めるなよ……」

エヴァンジェリンが宙に浮き、その身に宿る魔力を解放する。

すると一体の鴉天狗が、エヴァンジェリンの下へ飛び立ち切り伏せようとするも、無数の光が鴉天狗を貫いた。

「素晴らしい威力ですね」

無数の光を放ったと、思われるガトリングに似たキヤノンを抱えた茶々丸は、その武器の性能にそう評価を与えた。

というか、一体相手にそれはオーバーキルすぎないか？

「「…「「ウォォオオオオオオ……」」」…」」

そして、爆発する鬼達。

しかし、飛び掛かってくるのは雑魚ばかりで、中堅辺りのレベルはまだ様子見をしていた。　流石だな。

――ゴオオオォォォォォォッ！！

中堅クラスから激戦区へ目を戻すと、目の前に闇の吹雪が通過した。

「……」

「フハハハハハハハ！　その程度か？　雑魚ども！！」

……これは、アレかい？　私にも喧嘩売ってるのか？

あのロリババアは……。

「た、龍宮さん？　なんか、顔が怖いわよ？」

私が怖い？　ハッハッハッハッハッオカシナ事ヲ言ウナ、アスナハ。

「ミサイル発射！　じゃんじゃんばりばり～♪」

そして、私がミサイルの射線に居るにも関わらず、乱射するボケロボ。

「良い度胸だよ。　そこのロリババアとボケロボ…この喧嘩買わせてもらう！！」

まずは転送符からガトリング砲を手元へ、そして撃つ！

「死ね！」

――ズガガガガガガガガガガガ……

「ぬおっ！？」

「私についてこれますか？」

ロリババアは無数の弾丸を避け、ボケロボはデザートイーグルを持ち、私の弾丸を避けながら撃ってくる。

しかし、私についてこれるか？　とは大きく出たものだ。

「こと、射撃について私の右に出る者は居ない！！」

「わかります」

おや？　さっきと言ってる事が……

「常に私が先を行ってますから」

ブチッ！

よし、あの頭が花畑のロボットを蜂の巣にしよう。　私は悪くない。　全てはカスミさんの躾がなってないんだ。

「ちょっ…龍宮さん！　茶々丸さん！！」

「私の後ろにも左右にも、ましてや前にも存在してないことを教えてやる！」

「おい、真名……私に銃を向けて生きて帰れると思うな？」

「ちょっとー！！」

フハハハハハハハ！！　掛かって来い！　ロリババアにボケロボ！！　あとついでに鬼共！！

「なんやワシらはついでかい」

失礼な……等しく殲滅してあげるよ。　あと、心を読むな。

「まったく、もっと真面目にして欲しいものだ」

「まぁ、それが彼女達の良さなのでしょう。　あと、僕を女と言った方は個人的に潰したいですね。　フッフッフッフッ……僕は男です」

関西呪術協会の助っ人達も、流石としか言えないな。　会話しながらも、確実に敵を減らしてる。　中距離から花月さんの絃が鬼を

捕らえ切断し、遠距離と近距離では俊樹さんの遠当てと体術で、鬼達を還していく。
この分だと、あと数分で終えそうだ。

▲　真名　視点▲

▼　貴史　視点▼

「な、南、武……さん！」

「なんだ？」

「は、速……」

「あん？」

森の中を走ってると、抱えてた少年が何か喋ってくるが、何を言ってるのかまったくわからない。　何が言いたいんだ？

「ふむ、どうやらこのスピードはきついらしい」

俺が頭を捻ってると、横から同じ速度でついて来てるジェイルが、少年の今の心境を教えてくれた。　少年を見るとコクコク頷いてるから、ジェイルの言ってる事は本当なのだろう。

というか、この程度できついとか……

「我慢しろ！　男だろ」

「そんな無茶な……」

そして、少し遅れながらも桜咲が苦笑気味に答える。

いやいや、桜咲でもついて来れるんだから平気だろ？　さて、談笑も程々にしねぇとな……

「お客さんだぜ？」

「！！」

「どうも～～～～」

俺達の前から木の枝に跳び移りながら、現れたのはゴスロリを着た神鳴流剣士だった。

「お前は、月詠！！」

「はい～～～～」

桜咲に名を言われて嬉しいのか、頬を赤くしてニッコリ微笑む。

うむ、桜咲に任せよう。

「センパイ……お師匠様から受けた傷は、もう大丈夫ですか～～？」

「フンッ！　当たり前だ！！」

「よし、桜咲……そいつは任せた」

「わかりました。　南武先生……薫お嬢様を……」

「任せろ」

俺の言葉を聞いて、桜咲は表情を明るくして頷いた。

「ウチも残って、せっちゃんの応援する！　せやから、カスミさん」

「任された。　安心しろ……私達は負けん」

「うん！」

「それじゃあな！」

――――シュ、シュ、シュ、シュ！！

俺達は桜咲に月詠を任せて、さらに加速した。　少年の声が聞こえなくなったが、大丈夫だよな？

▲　貴史　視点▲

▼　刹那　視点▼

南武先生と別れたあと、私は足を止めて夕凪を構える。　月詠も小太刀二刀を手に構え、今か今かと待っていた。

なんとまぁ、律儀な奴だ。　あいつと、剣を交えて三度目。　それでわかった事は、月詠は戦闘狂だと言うこと。　自身よりも強い

存在との戦いを渇望し、その戦闘で多くを学び成長する。　だが、解せない事が一つある。　これをスッキリさせないことには、気になって全力で戦えん。

師匠なら……いや、弥勒なら未熟と言って切り捨てるだろうな。

だが、私が未熟なのは私自身わかってる。　だから、私は……月詠に問うた。

「月詠……何故、南武先生でなく私なんだ？」

「はい？」

「お前は強い存在と、戦う事を”楽”としてる。　そんなお前が、南武先生を無視してまで、私にこだわる理由がわからない」

「理由ですか～～～？　そ～～うですね～～～」

月詠は顎に指を当て考えたあと、ニッコリと笑って答えた。

「南武って人はお師匠様のもんやし、魔法より剣同士との戦いが良いんです～～～」

意外に普通の答えに驚いたが、納得も出来た。　カスミさんに向かわなかったのは、そのためか……。　まぁ、体術だけでもカスミさんが、勝つと思うがな。

「ほな、やりましょう♪」

「お嬢様は私の後ろに」

「う、うん」

夕凪を構え、気を身体に張り巡らせて身体を強化する。　そして……

――ダッ！

同時に地を蹴り、突っ込む。

――キン、ギン、ギキン、ガキンッ！！

私の刀と月詠の刀がぶつかり合い、お嬢様の術と月詠のもう片方の刀がぶつかり合う。

それにしても、やはり強い。　だが、もう負けるわけにはいかない！！

「はぁぁぁあああああああああああっ！！」

――ガガガガガガガガガガガガ！！

「あやや」

「せ、せっちゃん……すご……」

月詠に人体の急所すべてに、剣撃を絶え間無く与え続ける。

お嬢様が何か言ってるが、今は気にしてる場合ではない。　何がなんでも月詠を倒す！！

何度も何度も急所へ攻撃してると、一瞬だけ……ほんの一瞬だけ

月詠の防御を弾いた。　月詠は少し驚いた顔をして、後ろへよろめく……

今が勝機！！

――神鳴流、斬鉄閃！！

螺旋状に気を放ち、即座に切り上げさらに……

「あ～～～れ～～～～」

「まだだ！！」

――神鳴流、斬空閃！！

斬撃を飛ばし、瞬動で月詠の真上に移動しまた……

――神鳴流、秘剣！！　百花繚乱！！

そのまま、月詠を地面へ叩き付ける。

「きゃんッ！！」

地面へ叩き付けられた月詠は、小さな悲鳴を上げたまま動かなくなった。

……死んだか？

そう思い、月詠に近付くと……

――ボフンッ!!

「なっ!!」

小さな音を起てて、消えた。

「分身……」

「せっちゃん……あれ」

「ん?」

お嬢様が指をさした場所を見ると、一枚の紙があった。　取りに行って見に行きたいが、場所が場所なだけに行けなかった。　なんせ、その場所が月詠が消えた場所だからだ。

「罠……か?　いや、でも……」

私が悩んでると、お嬢様はトコトコと紙のある場所へって……

「お嬢様!?」

「大丈夫やて。　気配とか無いし、これ見る限りもう来んみたいや」

と言って、紙を見せてくるお嬢様。　何々……

お給料分は働きましたし、ウチは帰ってお師匠様の帰りを待ってますぅ～～～。

それと、薫お嬢様なら心配要りまへんえ。　傷も治ってましたし、もし何かあったらスパイ中のお師匠様がなんとかしますからぁ～～～。

……はぁあああああ!?　え、何?　なんなん?　これ、スパイ?　師匠が?　え?　えぇぇえええ!?

――トサ…

「せっちゃん!?」

「な、なんや……いろいろありすぎて……驚いたと言うか……安心したと言うか……と、とりあえず……よかった」

「せやね……」

まぁ、何はともあれ……三度目の正直、と言ってええかわかりませんが、勝ちましたよ。　南武先生。

▲　刹那　視点▲

奇羅々ＶＳオットー（前書き）

予定より早く出来たので投稿。

奇羅々ＶＳオットー

▼　貴史　視点▼

桜咲に月詠を任せてしばらくすると、少し空けた空間に出た。
その空間の真ん中には一本の槍が地面に突き刺さっており、なんと言えばいいか……神聖な空間って奴を醸し出していた。

――フフッ

「！！　奇羅々か……」

何処からともなく、聞こえて来た声から、声の主を当てる。　まぁ、槍を見た瞬間わかってたがな。

――ええ、そうよ。

ポゥっと槍の周辺に光の粒が現れ、一つとなる。　鍛えられた身体に、男性にはない女性特有の肌。　ＧｅｔＢａｃｋｅｒｓ－奪還屋－の世界よりも、実ったけしからん乳と尻。　後ろを振り向くようなポーズを取ってるから、乳と尻がよく強調されて、さらさらの髪は風にあたり顔と反対方向へ流されて……うむ、妙にエロいじゃねぇか。

「待ってたわよ。　さぁ、誰が私の相手かな？」

「ん？　俺じゃねぇの？」

「あんたは兄さんがやるわ」

へぇ～そいつは意外だ。　てっきり、七人全員が俺とやり合うと、思ってたんだがなぁ。

「師匠！」

「ん？」

いろいろと考えてると、唐突にオットーが声を掛けて来た。

「あのおっぱ……薫さんの仇を取りたい」

……そうか、薫の仇をか……。

「いや、貴史……そいつ明らかに奇羅々の胸目当てだぞ？」

「なんであんな娘に育ったのか……」

「ドクターが子守唄代わりに、～三人の転生者～を読んだから」

「いやいやいやいや、有り得んだろ！？」

「私も狙ってた乳……」

「ディード……頼むからオットーみたいに言い直してくれ……嘘でもいいから」

「彼女らは欲望に忠実だからね」

「「Ｅｘａｃｔｒｙ（その通り）」」

外野がうるさい。　ちなみに俺はオットーの口から、おっぱ……なんて下賤な言葉を聞いてないぜ。

「いや、聞いてたろ？」

人の心を読むような、または聴くような娘に育てた覚えはありません。

「育ててもらった記憶がねぇよ」

そういや、そうだったな。

「ねぇ、まだ？」

「ああ、すまんすまん。　なら、オットー……行け」

「いえ～い」

さてと……。

俺は先に行かずにその場へ座り込むと、ジェイル達は頭に疑問符を浮かべてこちらを見てた。

んだよ？

「先に行かないんですか？」

と、皆の声を代表してネギ少年が言う。

ふむ、先へとな……。

「……俺はこの戦いが見たい！！」

（（（（（此処まで正直だと、いっそ清々しい））））

何人か心の声が聞こえた気がしたが、そんなもんはスルーだ！！

というわけで、奇羅々視点レッツゴー！！

▲貴史　視点▲

▼奇羅々　視点▼

と、言うわけで私視点！！　まぁ、嬉しいんだけどね？　相手がアレじゃなきゃ……。

私の前でジッと、胸を凝視するオットーと呼ばれた子。　正直、あの子の将来が心配だわ。

「それじゃ…始めましょうか？」

「光化…」

オットーが何か小さく呟くと、オットーの身体と武器が光に包まれた。

何かしら？　ん～まぁ、刃を交えればわかるか……。

そう思い、私は瞬動でオットーの後ろへ移動し、槍を穿つが槍はオットーの身体をすり抜けたというか、抵抗なく貫通したというか……。

とにかく、質量とかそういったモノが感じられなかった。

「これは……光そのもの？」

「正解～」

「！！」

光が急速に私の後ろへ回り集まると、オットーが双剣を振る。それを察知して、前に転がるように避ける。　だけどオットーは光速で近付き、また双剣を振る。

――ガキンッ！！

オットーの双剣が迫る前に体勢を立て直し、槍で双剣を受け止める。

どうやら、攻撃してる時は光になってないみたいね。　と、思っていた数秒前の私をハッ倒したいわ。

――スカッ

「！？」

突然、ぶつかり合ってた双剣は槍をすり抜けて、私に迫ってきた。即座に、後ろへ跳んでオットーの攻撃を避けるも、光速の追撃が

やってくる。

「あぁ～もう！！」

――斬魔槍、百烈桜華断・弐の槍！！

斬魔槍。　斬魔剣となんら変わりない技。　本来は青山家の者以外には教えられないらしいが、夏彦兄さんが青山家の当主と勝負をして、勝ったら教えてくれる約束をしたのだ。

そして、私達は夏彦兄さんに教えられてる時に、夏彦兄さんの中でそれを練習すると……まぁ、こんなところよ。

さて、そうこうしてる内に勝負が着いたわね。　勝者は、もちろん……私。　決め手は、斬魔槍　百烈桜華断・弐の槍。

「さぁ、次はだ……」

私が南武達に次の相手が誰か聞こうと南武達に振り返ると、そこには無数のオットーが手を怪しげに動かしていた。

……は？

一瞬、私の目がおかしくなったのかと思い、思考を停止させたのがいけなかった。

――キィンッ！

「な！？」

なんの兆候も無しに、光の輪が私を捕らえる。　というか光の輪

が、胸を強調するように縛ってきつい。　さらに、そのあとに起こるであろうイベントが、容易に想像つく。

「言い残したい事は？」

「……お手柔らかに…」

「うん。　それ、無理♪」

満面な笑顔を見せて近付くオットーらに、軽く絶望を覚えて私は……

「い、いやぁぁぁあああああああああ……」

快楽という拷問によって、意識を失った。

▲　奇羅々　視点▲

▼　三人称　▼

場所は変わり、真名達が戦ってる場所。
そこにはすでに鬼の姿は無く、真名達は貴史達を追わずにまだ仲間割れをしていた。

「リク・ラク、ラ・ラック、ライラック…」

「チャンネル、フルオープン！」

「魔力レーザー。　チャージ完了」

エヴァは自身の最大の魔法を、茶々丸はギミックブレード・カラドボルクを手に最強のギミックを、真名はアーティファクトでアースラを武装して、武器を展開する。

「此処は危ないですし、離れましょうか？」

「そうだな……」

「あ、待って下さい」

花月達は、いまだ仲間割れをしてる三人に呆れて、その場を離れる。

「契約に従い、我に従え氷の女王。　来れ、とこしえのやみ！　えいえんのひょうが！！」

「第七の金貨（セブン・オブ・ペンタクルス）！！」

「照準、ボケロボとロリババア……発射！！」

――ズドドドドドドドドドンッ！！

エヴァの魔法により大地は凍り、茶々丸の一撃で大地はえぐれ、真名のレーザーに天が割れた。

「ハッ！　なかなか粘るじゃないか？　真名！！」

「エヴァンジェリン様こそ……落とす気でやった一撃をかわすとは

……」

「ボケロボも流石だよ。　なんだい？　その武器は……」

しかし、いくら大地が犠牲を払おうとも、三人の戦いはまだまだ続く。　いい加減にしてほしい。

「「「さぁ、決着を着けよう（ましょう）」」」

▲　三人称　▲

時貞ＶＳディエチ（前書き）

弥勒がどんどんチート化していく……。
くっ……自重知らずのナンバーズでは対処出来なくなってきた。
次はどうやって勝たせるか……。

時貞ＶＳディエチ

▼　貴史　視点▼

オットーが奇羅々を倒して、次の相手を待ってると一向に姿が変わらない奇羅々。　なので、先へ進むことにした。
すると、さっきと同じような空間にまた出た。　しかし、さっきとは違って空間の真ん中には、槍ではなく長刀があった。

「あれは……刀だね」

「刀を使う弥勒は、夏彦と緋影に時貞だな」

まぁ、順番的に五男の時貞だろうな……。

「次は私が行く」

スッと、ディエチが手を挙げる。

ふむ、大丈夫か？　相手はあの弥勒一族、さらにはネギま！の世界のチート流派、神鳴流を修めてる相手だ。　射撃専門のディエチが行くのは、どう考えてもお門違いだろう。　しかし、ディエチは自信ありと言った顔を見せてくる。

「シネマ村で披露出来なかったけど、ここならアレが使える」

そう言って、ディエチが取り出したのは、金色とピンクのフレームに赤い宝玉。　うん。　どう見ても管理局の白い悪魔が持つ、デ

バイスだな……。

「オレの相手は、そこの小娘か」

「おおっ！？　いつの間に……」

前から声が聞こえ、ディエチが持つレイハから長刀の方へ移すと、そこには弥勒　時貞が居た。

どうでもいいが、いつから分離して行動できるようになったんだ？　まぁ、とにかくディエチ視点ＧＯ！

▲　貴史　視点▲

▼　ディエチ　視点▼

「七人の弥勒が五男、弥勒　時貞……」

「薫さんの一番弟子、神崎　ディエチ」

「「……参る！！」」

互いに名乗り合うと、彼は私へ向かって駆け、私はアクセルシューターを数十個出して撃ち抜く。

アクセルシューターが彼に近付くと、彼は気で強化した長刀でシューターを全て切り伏せた。

「どんだけ～」

いくら気で強化したからって、全て切り伏せるって……流石は薫（マスター）の師匠。

さて、どうしたものか……。　即座にシューターを出して、死角から襲わせてるにも関わらず、彼は回避したり、長刀で切り伏せたりと完全に対処しながらも、私の方にも攻撃をしてくる。

防ぐにしても力が強く、防御の上からガリガリとダメージがくる。

勘弁してほしいなぁ。

「ハッ！」

いつまでも凌いでる私に痺れを切らしたのか、神鳴流の奥義を使ってくる。　斬岩剣とか、私の対物理無限障壁を一気に破壊してくるって……ちょっと待ってほしい。

ドクターが創った障壁を!?　いくらなんでも出鱈目すぎる!!

まぁ、アイテムによる加護だから脆……いや、有り得ない。

ドクターが創ったアイテムだよ？　斬岩剣・弐の太刀ですらない通常の斬岩剣で？　最悪すぎる!!　何？　あのチート!?　え？　夢ですか？　これ……。

「どうした？　さっきから避けてばっかりだな」

「くっ……」

そろそろ現実逃避をやめて、対策を練らないと死ねる。　どうしよう……

▲　ディエチ　視点▲

▼　貴史　視点▼

苦戦してんなぁ……。　つか、なんだ？　ディエチが張ってる障壁。　どんだけあんだよ……。

「まさか対物理無限障壁を全て砕くとは……アレも改良が必要か」

ディエチの戦いを見ていると、ジェイルがぽつりと呟く。　どうやらあの障壁は、ジェイルの仕業らしい。

「なんだよ？　それ」

「ん？　いや、何……ディエチの戦い方は、相手の射程外からの狙撃だからね。　近接戦闘になると、防御面がどうしてもね。　だからそれを克服するために、私が創ったのだ。　対物理障壁の術式を刻んだ魔法具をね」

それが、あの対物理無限障壁か……。　つか、ジェイルにしては甘い設定だな？

「この世界……というより、あの弥勒が規格外なだけだよ。　並のチートでも勝てるのだよ？　ディエチは」

へぇ～。　まぁ、とりあえずはこの戦いを見守るか……。

▲　貴史　視点▲

▼　ディエチ　視点▼

所々に設置型のバインドを仕掛けつつ、相手の攻撃を回避、回避、回避の連続。　というか、もうバインドで止まってくれないと、攻撃が出来ない。

「はぁぁあああああ……！　なっ！！」

私にさらに攻撃を仕掛けようとする時貞さんが、バインドを設置した場所に足を踏み入れた瞬間、バインドは時貞さんを捕らえた。

時貞さんは一瞬動揺するも、すぐに冷静になりバインドを振りほどこうとするが、私はさらに複数のバインドを時貞さんに掛ける。

「ようやく、捕まってくれた」

「く、まさかこのような仕掛けを用意してたとは……」

数十のバインドで固めてるにも関わらず、尚も振りほどこうとする時貞さん。

というか、体を動かす度に反動が……早々に片を着けよう。

私は出来る限り至近距離で、レイジングハートを構え魔力を集束させる。　使う魔法は勿論……スターライトブレイカー。　一度、至近距離でやってみたかった。　零距離は……さすがに怖いや。

「それでは……これにて」

「……無念」

「スターライトブレイカー……発射」

――ズドォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ！！

この作戦を思いついてからコツコツと溜めてきた魔力、バインドで捕らえギリギリまでさらに溜めた魔力は、あのエース・オブ・エースの総魔力量を遥かに上回っており、時貞さんの事が少し心配になってきた。

大丈夫かな？　死んでないよね？

そう思い、もくもくと立ち込める土煙の中を見る。　そして土煙が晴れると、そこには一本の長刀だけがあった。

……や、殺っちゃった……。

「よし、終わったな。　次行くぞ」

「「お～」」

「さて、次は誰だろうな……。　そろそろ私もやるか」

ぞろぞろと、貴史さんはオットー達を連れて先へ行く。

って、えっ？　ちょ……時貞さんの心配とか……ちょ……ま、待って～

あのあと、貴史さんに弥勒一族について教えてもらった。　なんでも、私と戦ったのは幻みたいなもので、倒しても死なないみたい。
それを聞いてホッと胸を撫で下ろした。

▲　ディエチ　視点▲

時貞ＶＳディエチ（後書き）

なんで一戦ずつかって？

それはね……十話くらい引っ張ろうかと思っ…すいません。　嘘です。　短期間で投稿するには、こうするしかなかったんです。

椿&右狂ＶＳカスミ&ディード（前書き）

カスミが多少本気になるようです。

椿&右狂ＶＳカスミ&ディード

▼　貴史　視点▼

いい加減、この空間の仕組みがわかってきた。　これは小太郎が使っていた結界と同じモノだ。　ジェイルにも、確認を取ったから間違いない。　そもそも都合よく空けた空間なんて、ポンポンあるわけないしな……。

おそらく、弥勒を倒して先に向かってると、武器を回収して違う武器を地面に刺して、俺達が戻ってくるのを待ってるんだろう。

「たく、時間がねぇってのに……」

「では転移で抜けるかね？」

「ダメだ。　夏彦は此処で潰す」

そう、俺が何故結界から抜け出さないのかと言うと、夏彦をぶっ飛ばす為でもある。　任務に私情を挟むな？　何それ？　食えんの？ｗｗｗ

「僕が教えられた事が、活かされてない！？」

「少年。　大人ってのはなぁ……自分の都合の悪い事は忘れんだ。　やったな！？　また賢くなったぜ」

「……」

フッ……俺の豆知識に感動して、言葉も出ないか。　いいぞ、いいぞ。

「いや、あまりの理不尽さに、ショックを受けてるだけだから……」

「俺が正義！！」

「やれやれ、酷い正義もあったものだ」

うっせぇ！

さぁ、そうこうしてるうちに、戻ってきたお馴染みの空間。　斬られた木とか、どうやって修復してんのやら……。

んで？　相手はっと……青龍刀にサバイバルナイフ二本か……。

青龍刀を使う弥勒は、三男の右狂だったな。　そして、サバイバルナイフは、四男の椿。

「ようやくオレの番か……」

「……」

先の弥勒みたいに、登場する椿と右狂。　さて、こっちは誰を出すか……。

「私が行こう。　椿は遠距離からの攻撃に弱いしな……」

「チッ」

確かに、サバイバルナイフでの超接近戦闘を得意とする椿には、

カスミは天敵だろう。　現に舌打ちが、聞こえたしな。　だが、それはあの世界でのこと。　この世界に来て、弱点を克服したって可能性もある。　……チッ、考えても埒があかねぇな。

「わかった。　だが、くれぐれも気をつけろよ？」

「任せろ」

「オレの相手はどいつだ？」

右狂か……俺らの中で戦ってないのは、ジェイルに乱、ディード……そして俺。　俺は夏彦を相手するからなぁ……。

「私もおっぱいが揉みたい」

まだ諦めてなかったのか……ディード。　というかなぁ……せめて、女性と戦いたいと言え。

「しゃあねぇ……ディード、行け」

「！？　師匠！　私の話聞いてました！？」

ああ、聞いてたよ。　ばっちりとこの耳で……。

「報酬は……ヘヴン先生と一泊お泊り」

「全力でやらせてもらいます！！」

俺が報酬を言うと、即座に双剣を構えるディード。　うむ、素直でよろしい。

ん？　ヘヴン先生とは誰かって？　ゲトバキャラの一人で、無駄にデカイ乳を持つ姉ちゃん。　あの西瓜せん……しずな先生とタメを張る程の乳だぜ？　凄くね？　と、まぁ……説明はさておきバトルを見よ。

▲　貴史　視点▲

▼　カスミ　視点▼

さて、久々に本気を出すかな……。

――――ブワッ！！

私は魔力を一気に解放すると、同時に高密度の魔力で身体能力を強化する。　これで、まず相手の異常な身体能力に対抗出来る。　今まで見てきて弥勒達のスペックは、軽くチートを超えてるしな……。

「準備はいいな？　行くぜ……」

椿は身を屈め、地を蹴って猛スピードで突っ込んで来る。　呑気に詠唱しようものなら、サバイバルナイフでざっくりだろう。　まぁ、戦術的に悪くないな。

「遠距離攻撃が苦手なら相手から離れずに、さらには詠唱する間を与えなければ良いか……しばらく付き合ってやる」

私は断罪の剣を使い、椿の攻撃を防ぐ。　椿のサバイバルナイフ

は気が張り巡らせてるのか、断罪の剣でも斬る事が出来ない。

「そらよ！　斬岩剣！！」

「あまっ…！！」

「ハッハー！！　斬鉄閃！！」

ナイフで振り下ろす椿の攻撃を避けると、ディードと戦っているはずの右狂の攻撃が飛んできた。

チッ……ディードは何をしてる。

「お～んそ～くばっと～、しっぷ～ざ～ん」

――シュバババババババババッ！！

「うおっ！」

間の抜けた声が聞こえたあと、無数の斬撃が私の目の前を通り、右狂の攻撃を弾く。　というか……

「危ないだろ！？　私の体質からみると、直撃する確率高いだろ！？」

超がつく程の不幸体質。　シリアス時には早々発動しないが、何かの間違いで死亡フラグがいつ立つのか、冷や冷やモノだ。

まぁ、不死だから死なないがな。

「ごめんごめん」

「オラッ！　百花繚乱！！」

「！！」

「ディード！」

「ハッハー！　雷鳴剣！！」

「チィッ！！」

ディードに注意をしてると、ディードの後ろから椿が襲い掛かり、私が守ろうと動こうとした時、右狂が私の方へやってきた。

――ズガァァアアアアンッ！！

私とディードは間一髪で、椿と右狂の攻撃を避ける。

「まったく、あいつら……神鳴流ばっかり……」

まぁ、技を出してる所が無かったからなぁ……。

「むぅ……意外に強い」

確かに強い。　……仕方ないな。　アレを使うか。

「ディード……しばらく時間を稼げ」

「無理！！」

「なら、無茶をしろ！！」

私は大きく後退して、魔力を集める。　それを見てディードは、

「え？　マジ？」みたいな顔をしてきたが、今は無視だ。

「レク・リク・ラク・ライネック…母に従い、我に従え。　来たれ、えいごうのやみ」

私から溢れ出す魔力は、黒い霧となる。　それを見た椿達は私の方へ向かうが、ディードが時間を稼ぐ為に立ち塞がる。

「漆黒の闇！！」

そして霧は闇となり、椿達を包みこんだ。

「ふぅ……ごちそうさま」

「ん～どうなったんだ？」

状況を掴めてない貴史が、皆を代表するように聞いてきた。

ふむ、まぁ普通じゃあわからんか……。

「結論から……椿達は私の此処に居る」

そう言って、私は自分のお腹をさする。　魔力の塊と言うだけあって、さっき消費した魔力も回復した。　若干魂が邪魔だな……あと武器。　……少々はしたないが出すか。

一一ポゥ

私が手を虚空へ伸ばすと、椿と右狂の武器を出す。　そして、二つの魂も……なんかげっそりしてないか？　まぁいいか……。

「それじゃあ次行くぞ」

「ああ……（カスミを怒らせるのは、極力やめよう。　喰われる）」

次は弥勒　緋影だな。　順番的に……。

▲　カスミ　視点▲

▼　三人称　▼

月詠を退けた（？）刹那、木乃香の二人は先に行った貴史達を追っていた。　だが、その二人の前に一つの影が現れた。

「「！！」」

「待っとったで！！　って、なんや女か」

その人影は刹那達を見ると、女と言うことにあからさまに肩を落とした。

「（待っていた？　南武先生は、まだ来ていないのか？）私達より

先に来た者は居るか？」

「姉ちゃんらが先頭や……」

「せっちゃん……」

（どういうことだ？）

小太郎の言葉に刹那は戸惑う。

自分より、先に進んだ貴史達が来ていないからだ。　貴史達なら自分が月詠を相手してる間に、すでに事件を終わらせる程の実力者だ。　考えられるのは二つ、一つは師匠に足止めをされてるか、もう一つは遊んでるか……と、刹那はそこで考えるのをやめた

それは仲間を疑うのはよくないとか、そんな事ではないからだ。

彼等ならこんな切羽詰まった時でも遊ぶ、そんな予感めいたものを感じたからだ。

（と、とにかく……私達だけでも先に行かないと）

そう思い。　刹那は、いまだ落ち込んでる小太郎を無視して、先へ行った。

（あの子……ウチらを通してええんかなぁ）

と、小太郎を通り過ぎる時、木乃香はそんな事を思った。

▲　三人称　▲

緋影ＶＳジェイル（前書き）

段々と短くなっていく～。
やっぱり、元が他の作者様のキャラだからだろうか？　自分のキャラのようにうまく書けない……。

貴史「差別だな」

いや、差別じゃないよ！？　ただ、今回はジェイルが……

貴史「差別だ」

ジェイル「差別だな。　他と比べて本当に短いとは……完全に差別だな」

ゆ、許してつかーさい！！

ジェイル「父上と母上が許してくれるなら許そう（ニヤニヤ」

百合姫様！　鈴様！！　許して！！

貴史「あれ？　香崎様が居ないようだが？」

！？

ジェイル「それでは、本編スタート！」

ちょっ、まっ……言わせｔ

緋影VSジェイル

▼ジェイル　視点▼

さて、これでいいかな。

「出来たよ」

「おー！！　美味そうだな」

「たくさん食べてくれ」

ん？　やぁ、読者諸君。　私は神崎　ジェイルだ。　今何をしてるか？　いやなに、貴史がお腹すいたと言ったから、食事の用意をしていた所だよ。　ん？　先に行かなくていいのか？　まぁ、確かに薫が気になる。　そろそろ、スクナが召喚される頃だろうしね。　だが、私はあえて貴史の要望に応える！！　ほら、一応妻だしｗｗｗ

「にしても、弥勒があんなに強いとはな」

「びっくり……」

「良いおっぱ……スタイルだった」

「オットー、言い直せてないからね？」

「つか、雪彦は誰が行くんだ？　あむ、もぐもぐ」

「次は私が行こうと思ってる」

「なら……オレ？」

「「…「ご愁傷様だな」…」」

と、戦った弥勒達との感想を言ったり、次は誰が行く等と言った会話をしながら食事をする。

というか、貴史……そんなにバクバク食べないでくれ……。　いや、まぁ……気に入って頂けたのなら何よりだが……。　ちなみに喋った順は、カスミ、ディード、オットー、ディエチ、貴史、私、乱、そして乱とネギくんを除いた私たち全員の順だ。

誰一人として、薫の心配をしていない。　いや、心の底ではしているだろう。　だが、全員顔にまったく出さない。

ただ、それに気づかずに不満そうにしてるのが一人……居るがね。

――バンッ！！

「呑気に、ご飯食べてる場合じゃないですよ！！　早くしないと薫さんが！！」

その一人（まぁ、ネギくんなんだがね）が、机を叩いて叫ぶ。

ネギくんの主張を聞いて、貴史達は……

「もぐもぐ…。　あーむ、むぐむぐ」

「もぐもぐ」

「むしゃむしゃ」

「パクパク」

ご飯を食べていたりする。　ネギくんの発言すら、聞いてなさそうだ。

「あ、あの……」

ふむ、見ていて凄く不憫だ。　だからと言って、助けようとは思わんが……。

「む～～～……貴史さん！！」

「食事中は静かにしやがれぇぇえええ！！」

あ、殴られた。

「ベブッ！！」

この理不尽さ……流石としか言えないｗｗｗ

「んじゃ、行くか……」

あれから一時間、食事も終わり貴史が立ち上がった。　それに合わせて、全員が立ち上がるが……

「その必要はない」

「ん？」

目を閉じた、白髪の青年が現れた。手には一振りの刀。おそらく彼が、私の相手……弥勒　緋影。

「お、わざわざ来てくれたのか」

「時間が無いのでな……」

「お前ら……」

貴史が何か言おうとした時、緋影は遮るように「問答は終わりだ」と言って、居合いの構えを取る。

「来るがいい……」

「……頼んだぜ？　ジェイル」

「任せたまえ」

さて、初めての戦闘だ。勝ち星で飾りたいものだ。模擬戦すらしたことがない。どうしようか？

「とりあえず……コレ（魔法）から行こう」

――パチンッ！

指を鳴らして、無数の魔法の射手を出して放つ。

「ふん…」

――ズバババババババババッ!!

無数の射手を弥勒は、居合いで一つ一つ斬り伏せる。

なんと言うか、一回抜く度に鞘に戻してまた斬るとは……どうやっているのだ？　明らかに、速いっていうレベルじゃない。　クロナや貴史、乱みたいに超越者ならわかるが……居合いの達人だからと言って限度が……。

「次はこちらから行くぞ。　神鳴流居合、斬空閃!!」

弥勒は居合いで、神鳴流の技を使ってくるが、私が用意した対物理無限障壁を抜ける事なく終わった。

どうやら、力は時貞を超えて居ないようだな。　少し安心した。

「硬いな……」

「時貞は粉砕してたがね。　次はコレ（忍術）で行こうか」

――火遁！　豪火球!!

印を組んで大きく息を吸い込み、そして吐き出すと巨大な火球が出て緋影を飲み込もうとした瞬間、火球が半分に斬られて緋影の後ろに着弾し爆発した。

やっぱり規格外だ。

「神鳴流居合奥義、斬鉄閃・弐の太刀！！」

――パリンッ！

弥勒の弐の太刀によって、対物理無限障壁がすべて破壊される。

こうして、戦ってみるとわかる。　神鳴流も、たいがいチートだ。

「神鳴流居合奥義、斬岩剣！！」

「ルール違反だ！　次は私の番だよ！」

迫る弥勒よりも素早く、私は神秘を秘めた武器を二つ創る。　一つは丸い鉄球のような宝具、もう一つは絶世の名剣と呼ばれた宝具だ。

――キンッ！！

弥勒の刀と私の剣がぶつかり合うが、デュランダルに秘められた力を感じたのか、弥勒は一瞬で距離を取った。

良い勘をしている。　あのまま鍔ぜり合いをやってれば、刀を折れたものを……。

「もうあまり、時間はかけていられないか……なら、次で決めるとしようではないか」

「良いだろう」

弥勒は抜き身の刀を鞘に納め、体勢を低くして構える。　私は絶世の剣を正面へ、持って行き構える。　まぁ、平たく言えば剣道の構えなんだがね。

「行くぞ！　神鳴流居合奥義！！」

「遠慮なく来たまえ！！」

「真・雷光……」

私はすかさず絶世の剣を破棄して、周りに浮いていた鉄球を起動する。

「後より出て先に断つ者（アンサラー）」

「……剣！！」

「斬り抉る戦神の剣（フラガラック）！！」

弥勒が技を放ったあと、鉄球は短剣へと姿を変えて、弥勒の技が私に当たる前に短剣は弥勒の心臓を貫いた。　そして、雷は私に当たる前に消える。

「ふぅ……まぁ、なんとか勝てたかな……」

▲　ジェイル　視点▲

緋影ＶＳジェイル（後書き）

感想待っとりまふ！

貴史「えっ？　あとがきこれだけ？」

だってねぇ？

ジェイル「前書きの事を忘れたみたいだな」

あっ！

貴史「それじゃ、今回はこんな裏設定だった！　てのを紹介するぜ」

ジェイル「だった……つまりはボツになった裏設定か……」

貴史「ああ……まずは、転生前の裏設定なんだが、俺の親父とお袋は【南武　貴史】と【赤屍　クロナ（アサシンでなく本体）】だったって話だ」

ジェイル「は？」

貴史「さらに、俺には姉が居て……その姉が【神武　乱】だってさ」

ジェイル「つ、つまり……どういう事だ？」

貴史「つまり……ニワトリはヒヨコから？　卵から？　ってのと同じ」

ジェイル「南武　貴史と赤屍　クロナが居たから剣崎　貴史が生まれて、カスミ達に出会った剣崎　貴史と孤独のまま育った剣崎　貴史が転生神によって殺されて、南武　貴史と赤屍　クロナが生まれる。　そして、南武と赤屍が成長し……南武の子にして、赤屍の弟子たる乱の三人が揃い……南武、赤屍の転生前の世界に行って……剣崎　貴史を産むという、なんとも言えない循環作用が起きてると？」

貴史「そういう事だ。　まぁ、ボツになったがな」

ジェイル「私はどうなってる設定だったんだ？」

貴史「設定としては…南武と赤屍、南武の第一子がってなってた。

だから、乱は赤屍と俺の子ってなってたんだが、まぁ……所詮ボツ設定だ。　気にすんな」

ジェイル「そうか……」

貴史「……はぁ、やれやれ……今夜はたっぷり可愛がってやるよ。　それで良いだろ？」

ジェイル「う、うむ……」

カスミ、薫「「させるかー！！」」

貴史「うお！？　なんだよ？　お前ら」

薫「ウチを助けるまで許さへんえー」

カスミ「というか修学旅行編が終わっても……！！」

貴史「……！？」

薫「……！！」

ジェイル「…」

カスミ、薫「「……！！」」

夏彦ＶＳ貴史（前書き）

連続投稿！！

感想待ってます！！

夏彦ＶＳ貴史

▼　貴史　視点▼

ジェイルが緋影を倒して、先へと進む。　もう空間のからくりはわかってるんだから、さっさと現れればいいものを……まったく勿体振りやがって……。

しかし、一向に現れる気配がねぇのはなんでだ？

「親父、また同じ場所に出たぞ」

「またかよ……」

乱の言葉に、疲れたように言う。　実は、弥勒達と戦った場所に戻って六回目。　延々と何もない空間を、通りすぎるだけだった。

「もしや……いや、まさかな」

「ん？　どうした？　カスミ」

「いや……なんでもない。　……多分」

「良いから言ってみろ」

カスミの自信の無い発言に、興味を持った俺は、カスミの思いつきを言わせる。

「確証は無いが……弥勒　夏彦は結界の外で、私たちを待ってるん

じゃないかと……」

……いやいや、それはないだろ。

「それはな……」

カスミの言葉を否定しようとするが、もしかしたら……という考えが浮上してくる。

「「…「「「……」」」…」」

ふと、ジェイル達を見ると、ジェイル達もカスミと同じ考えなのか、冷や汗を掻いていた。

……え、マジ？

「た、試しに……結界の外に出てみるか？」

俺がおそるおそる提案すると、全員首を縦に振った。

「んじゃ、行くぞ……」

手術メスを体内から取り出す。　ん？　蛇咬は使わないのかって？　いちいち、詠唱がメンドイし、詠唱しなくても出来そうな気がするが……こっちの方が楽。

――スパッ！

手術メスで空間を引き裂き、結界の外へ出ると奥の方に大きい光の柱が見えた。

えっ？　もう召喚してるのか？　緋影が時間が無いって言ってたが……本当だったんだなぁ。

「ようやく戻って来たか……。　蛮と違って頭が悪いみたいだな」

「アァ？」

林の奥から夏彦の声が聞こえ、そして姿を見せてきた。

ていうか、マジで結界の外に居やがった。　つか、結界の外に居るなら、緋影を倒した時に結界を解けよ。

「現在、天ヶ崎　千草は馬鹿弟子1号の魔力を使って、リョウメンスクナノカミを召喚してる最中だ。　馬鹿弟子2号と木乃香お嬢様が、召喚の阻止しようとした所、フェイト・アーウェルンクスと名乗る男が現れて今尚交戦中……と言った所だ」

「なぁ……一つ聞いていいか？」

「なんだ？　早くしろ」

「お前は敵なのか？　それとも味方なのか？」

俺は緋影辺りで、疑問に思った事を夏彦に聞く。

もし敵ならば、緋影は自ら現れずに俺達が来るまで、定位置に居ればいい。　それを時間が無いから……最初は結界の展開時間かと思ったが、すぐにその可能性は振り払った。　現に緋影を倒しても、解けなかったしな。

次は緋影が出ていられる時間だが、これも違う。　奇羅々達みたいに、待機してればいい。

なら、緋影の言う時間が無いってのは？　結界の外に出てわかった……スクナが召喚されるから、時間が無いっていう意味だと……。

「敵か味方で言うなら味方だ。　だが、我らはお前達の試練として、立ちはだかるよう言われた」

なるほど……試練ねぇ。

「誰にだよ？」

「さて、話は終わりだ。　南武以外は先に行け」

「おい……」

「貴史さん。　すいません！」

突然、少年が俺に謝り杖に跨がって、飛んで行った。　まぁ、先生としては妥当な判断だな。

「カスミ達も行け、少年だけじゃ不安だ」

「勝てよ？」

「誰に言ってやがる」

「最強の貴史に言ってる。　じゃ、行ってくる」

「「行ってきます！」」

「すみません。　それでは」

「頼んだよ？　最強」

カスミが飛んで、続いてディードとオットー、ディエチ、ジェイルが林の奥へと飛んで行った。

「お前は行かねぇのか？」

「雪彦って奴と戦ったら行く」

「そうかい」

俺の勘だが、多分雪彦は戦わないと思う。　実力を計れない奴じゃないしな。

「なら、始めようか……貴様がエリスに相応しい男かどうかを」

「ああ……って、ん？」

ちょっと待て……あいつ今なんつった？

「ハァァアアアアアッ！！」

「いやいやいやいや、待てって……なんか趣旨が違くね！？」

雄叫びを上げながら、突っ込んで来る弥勒を軽く避け、俺は待ったをかけるが……

「煩い！　雲丹坊主！！」

まったく、取り合ってくれなかった。

つか、雲丹坊主だと？

――ブチッ！

「ぶっ殺す！！」

「やってみろ！！　弥勒流・綺の太刀、無量新月！！」

夏彦は自らが作り出した真空の刀で、俺を一刀両断しようとするが……

「おせぇんだよ！！」

――蛇咬（スネークバイト）！！

「フンッ……見え透いた攻撃だな。　弥勒神鳴流・綺の太刀奥義、百烈桜華斬！！」

「！！　チィッ…」

弥勒の反撃に危険を察知して回避すると、さっき俺が居た所は空間ごと斬られていた。

……は？　いや、待て……夏彦に空間を切り裂く力は、無かったはずだが？　何が起きてんだ？

「戦闘中に考え事か？」

「！！」

「無量新月！！」

夏彦の気配に気付き、声のした方を向くと、夏彦は真空の刀を振り下ろしている所だった。

「チッ…」

再度舌打ちをしつつ、夏彦の攻撃を回避する。

まったく、考える時間を与えても良いと思うんだがなぁ。しかし、なんで夏彦が空間を裂くなんて、芸当が出来るんだ？　見た感じ……魔力は感じないし、感じるのは気だけ……えっ？　もしかして、気と体術だけで空間を斬ってる？

「正解だ！　綺の太刀、斬空閃！！」

「冗談じゃねぇ……」

ーーーーズガァァアアアアアアンッ！！

全力で夏彦の斬撃を躱すと、後ろの木が吹き飛ぶ。

どんだけ、強くなってんだよ！？　まぁ、空間が斬れるくらいじゃ……

「俺には勝てねぇがな……」

「そんな事……思っていないさ！！」

「ヘッ」

「フッ」

ああ、だんだんと楽しくなって来やがった。　いいね、いいねぇ……やっぱり規格外な奴との戦いは止まらねぇなぁあああ！！

「オラァア！！　どんどん行くぜぇえ！！」

「来い！　南武　貴史ッ！！」

▲　貴史　視点▲

▼　乱　視点▼

うわぁ～……派手に暴れてるなぁ。

「弥勒神鳴流・綺の太刀！！　心刃合煉、百烈桜華斬空閃！！」

「来やがれぇえ！　海星剣皇！！　海星剣皇……最大奥義！　絶対（アポカ）終末（リプス）！！」

弥勒さんはなんか…自分の流派と神鳴流を合わせた流派を名乗り、剣撃の極地とも言える業を使い、百烈桜華斬と斬空閃を合わせたオリジナルのなんか凄い業を放つ。

親父は海星剣皇と呼ばれる神獣騎を召喚して、海星剣皇の背中から無数の斬撃を飛ばした。

――ズガァァアアアアアアンッ！！

あー……段々と周りが酷い有様に……。　やり過ぎだろ……コレ。

「■■■■■■■■■■■■■■■■！！」

「「「！？」」」

オレが二人の戦闘を見てると、突然奥から巨大な雄叫びが聞こえた。

雄叫びが聞こえた場所を見ると、まだ距離があるにも関わらず、天を貫く程の鬼神がそこに居た。

「おっきい～」

「チッ……カスミ達は、間に合わなかったか」

「前に現れた時よりデカイな……」

二人も戦ってる場合じゃないことに気付き、戦闘をやめてスクナと呼ばれてる鬼神を見上げていた。

「ねぇ、競争しようよ」

「「競争？」」

「そう、先にアレの前に着いた人が、アレと戦う」

オレの提案に、二人は顔を見合わせたあと、軽く笑い賛成した。

「んじゃ、カスミに連絡するか……」

「南武にも、お前にも負けんぞ」

「オレだって負けない！」

「ああ、頼む……。　うっし、連絡終了。　そいじゃあ、行きますか！！」

オレの左に弥勒、オレの右に親父が並ぶ。　さて、少し本気を出そうかな……

「レディ……ゴー！！」

――――ダッ！！

親父の合図と共に、オレ達は風となって林を駆け抜けた。

▲乱　視点▲

夏彦ＶＳ貴史（後書き）

今回の裏設定。（今度はボツ設定ではなし）

カスミは転生前の前日まで……水着着用で貴史と入っていたー！！！！

カスミ「うわぁぁあああああああ！！」↑赤面

薫「なんやてー！！！」

しかも、上記でわかる通り……一つ屋根の下でカスミは剣崎家に住んでた！！

薫「ば、馬鹿な……」

繰り返します。　ボツ設定ではありません。

薫「こんなん夢や……そうや、性質（たち）の悪い夢や」

スクナVS乱1

▼　カスミ　視点▼

前話から少し時間を遡り、弥勒を貴史に任せて坊やを追っていたんだが……

「オラオラオラァァアアアッ！！」

「くっ！！」

犬と戯れてたから、無視して先に進む。

「良いのかい？　助けなくって」

「私は坊やよりも、薫を優先する」

ジェイルの問い掛けに、即座に答えるとジェイルは「やれやれ」といった感じで首を振った。

まぁ、薫と貴史なら貴史を優先するがな……。

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト……」

ん？

坊やを無視して光の柱へ向かってると、遠くから西洋魔法使いが使う始動キーが聞こえてきた。　ジェイル達に目でさっきの始動キ

ーについて語りかけると、すぐに答えが返ってきた。

「完全なる世界の一員。　アーウェルンクスシリーズの始動キーだ」

アーウェルンクス、シリーズ？　まぁ、良いか。　すると、相手をしてるのは桜咲　刹那と近衛　木乃香か……一応助けるか……

「おお、地の底に眠る死者の宮殿よ。　我らの下に姿を現せ」

「ジェイル……」

「貴史の命令じゃないと聞くきしないが、彼にはいろいろと研究したいから行こう」

私の指名にいろいろ文句を言うが、あっさりとアーウェルンクスの方へ向かった。　まったく、素直じゃない奴だ。

さて、そうこうしてるうちに、祭壇に着いたな。

「ようやっと……成就する。　ウチの復讐が！！」

「そんな事は、どうでもいい。　薫を返してもらうぞ」

私が千草とか言うメガネ女に声を掛けると、随分と余裕を持った表情で、こちらを見てきた。　なんとまぁ……ムカつく顔だ。

「残念やったなぁ……。　もうちょっとはよう来れば、間におうたのに……」

「！！」

千草が喋り終えると、光の柱から鬼神が顔を出した。　そして、横に寝かせられてた薫と千草は、鬼神の左肩辺りまで浮き上がった。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！！」

「ハッハハハハハハ！！　予想よりデカイけど、これで怖いもん無しや！！」

本当にデカイな……というか、体の良い的だな。　命中率が悪い武器でも、ヒットしやすいだろう。

『聞こえてるかー』

私がゲーム感覚で考え事をしてると、突然貴史の声が頭に響いた。これぞ、愛！！

『馬鹿な事を考えてんじゃねぇよ。　今からそっちに行くから、スクナの動きを止めててくれ』

馬鹿な事って……というか、なんでわかったんだろう？　まぁ、いいか。

『止めるだけで良いのか？』

『ああ、おそらく乱がボコるから』

『おそらく？』

貴史の言葉の一部に反応すると、懇切丁寧に愛情を込めて説明し

てくれた。

「カスミさん！　ちょ、手伝って……」

「「ふんっ！　ぬらばー……ってごめん無理……」」

「ディード、オットー！！　頑張って！！　せめてカスミさんが手伝うまで」

どうやら弥勒と乱と貴史は、誰がスクナを倒すか駆けっこで決めるらしい。　この一大事に何をやってるんだ？　と、小一時間程、語り合いたいモノだ。

「カスミさーん！　そっち行きましたー！」

「ん？　何が…！！」

私がディエチに聞き返そうとした時、急に辺りが暗くなり上を見るとでっかい足が……

――ズシンッ！

「ッ……あー、危機一髪って奴？」

「え？」

一瞬、何が起きたのかわからなかった。　スクナに、踏み潰されそうになってたのはわかった。　うん、これはわかる。　だが、踏み潰さそうになる瞬間……景色が……変わった。

そして気付く、自分が誰かに抱えられてるのが、抱えてる奴の顔を見ようと首を動かすと、そこには……

「大丈夫か？　カスミさん」『大丈夫か？　カスミ』

転生前の貴史と被る乱が居た。

……ああ、流石は親子だ。　カッコイイじゃないか。

▲カスミ　視点▲

▼乱　視点▼

「……」

ん～返事がない。　どっか怪我でもさせたかな？

「おーい」

「えっ？　あ、いや……大丈夫だ！」

あ、ようやく反応してくれた。　良かった良かった。

「と、言うわけでアレはオレの獲物ね？　親父、弥勒さん」

カスミさんを降ろして、やっと来た親父と弥勒さんに確認を取る。

「ああ、　勝ったのはお前だ。　楽しんで来い」

そう言って親父は一瞬で、スクナの左肩まで行き薫さんを助ける。

なんか、メガネの人が騒いでるけどいいのか？

「良いわけあるか。　もうすぐ制御を失って、スクナ暴走だ♪」

最悪だ……この人。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■！！」

「「…「ッ！！」…」」

親父の言う通り、制御を失ったスクナはさっきよりも、大きな雄叫びを上げた。

「なかなか、面白い事になってるねぇ」

「まさかこれほどとはね……。　僕も少し予想外かな」

いつの間にか、母さんと敵であるはずのフェイト（？）が、オレ

らのところに来て感想を述べる。

敵が母さんと仲良くなってるのが気になるけど、今はあの鬼神（おもちゃ）で遊びたいかな……。

「師匠に習って……『それでは、私を退屈させないで下さい、ね？』」

軽めの殺気を放ち、スクナ（おもちゃ）の前に立つ。　というか、マジで加減を間違えると、殺気だけで壊してしまいそうだ。

「神の名があっても、脆いんだな」

「■■■■■■■■■■■■■■■■！！」

オレの言葉を理解したのか、または障害として目を付けられたかは、わからないがスクナ（おもちゃ）は、オレに向かって口から光線を放った。

――ズドォオオオオオオオ……

「赤い楯（ブラッディ・シールド）」

腕を光線に向けて伸ばし、数本のメスを花弁のように展開する。

――――ズガガガガガガガガ……

数本のメスは光線を受け止め、光線の進行を止める。

「そろそろか……」

――ガガガガガガガガガッ！！

暫くすると光線は勢いを失い、そして誰も屠る事なく消えた。

「次はこっちの番……」

一瞬にして、スクナ（おもちゃ）の後ろに跳ぶ。　そして、軽く撫でるように腕を振ると、いとも簡単にバッサリと斬れた。

って……えっ？　脆すぎない？

スクナ（おもちゃ）を見上げると、傷口からボコボコと肉が泡立ち、そしてスクナ（おもちゃ）が風船のように、大きく膨れ上がった。

「……なんか、嫌な予感」

――パンッ

極限まで膨れ上がったスクナ（おもちゃ）は、軽い音を立てて大爆発を起こした。

軽い音なのに、大爆発とかいろいろ間違ってるとおもうけど、本当だからしょうがないと思う。

視界がすべて白に塗り潰され、軽い破裂音だと言うのに耳が聞こえなくなる程。　普通の人なら死ぬだろうね。　普通なら……でも、此処に居るのはオレを含め全員規格外。　この程度……

「どって事ない」

にしても、もう壊れちゃったか……。

そう思って、スクナ（おもちゃ）爆心地を覗くと、鬼の面を被り刀を二本持った着物姿の男（？）が居た。

▲乱　視点▲

スクナVS乱2（前書き）

感想待っとります。

今回も後書きに裏設定あります。

え？　前回は無かった？　書く暇が無かったの！！

スクナVS乱2

▼乱　視点▼

もう終わったのか……と、スクナ（おもちゃ）爆心地を覗いてみると、鬼の面を被り刀を二本持った着物姿の男（？）が立っていた。

……誰？

「……」

ああ、スクナ（おもちゃ）か……。　名前を聞いてないのに、オレは感覚で悟った。

「どうやら、まだ楽しめるみたいだね」

スクナ（おもちゃ）に語りかけ、すぐに解析する。　魔力はデカイ時と変わらない。　むしろ、人型になった事で高密度の技を使ってくるだろう。　身体能力もデカイ時とは、比べモノにならないだろう。　想像しただけでゾクゾクする。

「まさか……真なる姿に戻れる日が来ようとはな……」

ふむふむ、スクナ（おもちゃ）の本来の姿は人型っと……少し意外だな。　まぁ、いいや……。

「第二ラウンドと行こうよ。　スクナ（おもちゃ）」

「……良いだろう」

――ザッ！

オレとスクナ（おもちゃ）は同時に動き、刀と拳がぶつかり合うと衝撃波が発生し、さらに周りが酷くなる。

「今こそ……汝が右手に…」

「！！」

オレが詠唱を始めると、スクナ（おもちゃ）は詠唱の邪魔をするように、手に持つ刀を振るってくる。

「その呪わしき命運尽き果てるまで、高き銀河より下りたもう蛇遣い座を宿すものなり…」

オレは、スクナ（おもちゃ）の斬撃を避けつつ、詠唱する。

流石に、何無量大数分の一（なんむりょうたいすうぶん）の力なら耐えられるでしょ？　大気がビリビリ言ってるけど……。

「くっ！！」

なんで焦るの！？　これでも駄目なの！？

『それはそうでしょう』

『！！　師匠？』

『いえいえ、私は貴女の師匠の分身みたいなもの……アサシンとお呼び下さい』

アサシンって……ああ、親父の従者か。

『それで？　どういう意味？』

オレはアサシンに、先程の言葉の意味を聞いた。　スクナ（おもちゃ）？　スクナ（おもちゃ）なら頑張って、オレを攻撃してるよ。

『私の本体に迫る程のステータス。　妥当なランクは見当たらず、戦闘能力として数値化するにも、妥当な単位が見当たりません』

『つまり？』

『無量大数なんて単位でも、一割も満たしません♪』

……オレ化け物じゃん。

『それでは』

あ……切れちゃった。　にしても、此処まで強くなるとは、思わなかったなぁ……。

「ハァアアアアアッ！！」

まぁ、いいや……。　とりあえず、殺そう。

「されば……我は求め、訴えたり……喰らえ――その毒蛇の牙を以て！！」

一一蛇咬（スネークバイト）！！

スクナ（おもちゃ）が叫びながら、突っ込んで来るのを合わせて、今まで溜めていた魔力を解き放つ。

一一一一ズガァアアアアアアアアアアアアアアアンッ！！

「ガッ！！」

蛇咬をもろに受けたスクナ（おもちゃ）は、下半身が吹き飛び上半身だけとなった。

「ん～……ま、この程度かな？」

最初は期待してたんだけど、アサシンの説明で期待も薄まったから、早く終わらせた。　親父なら、楽しませてくれるかな？　今度、頼も。

▲乱　視点▲

▼貴史　視点▼

さて、スクナも乱が倒した事だし帰るか……。　と、その前に……どっちを対処しようか？

チラリと、薫を見る。　体操座りをして、地面に「の」の字を書

いて、いじけている薫を慰めるか……。

またチラリと、フェイトを見る。　スクナが倒されたら帰ると思いきや、俺の所へ来て地面に膝を着き、主の声を待つ騎士のようにしてるフェイトに、ツッコミをいれるべきか……悩む所だ。

とりあえず……

「聞きたい事は連れてきたジェイルにでも聞くとして、お前の抱えてる疑問については俺の従者が話す」

「従者？」

俺の言葉に顔を上げて、首を傾げるフェイト。　その瞳は硝子のように、透き通っていた。

「後ろに居る奴だ」

「！！」

「クスッ……こんばんは♪」

俺の言葉に、後ろを振り向くフェイト。　そこには魔法世界に行ったクロナが、二人の女性フェイトを連れて立ってた。

つか、クロナが連れてるフェイトはなんだ？　転生者？　オリキャラ？　まぁ、クロナに聞けばいいか。

と、言うわけで……面倒事は後回しにして、薫を慰めるかね。

▲　貴史　視点▲

▼　フェイト　視点▼

南武様に言われるまま、後ろを振り向くと、そこにはセクストゥムと、セプテゥムを連れた黒服の女性が、立っていた。

なんで此処に6と7が居る？　それにこの女性……血の臭いがする。

「貴女は？」

「南武　貴史の従者……赤屍　クロナと言います。　アサシンとでも呼んでください♪」

「……僕は今日より、南武様に仕える事となりました。　『智』のアーウェルンクス……フェイトと言います」

彼女に続いて僕が自己紹介をすると、後ろの二人が何か言いたそうにしていた。　おそらく、『智』の部分にツッコミたいのだろう。

でも、しょうがない。　造物主（ジェイル）より、洗脳と改造をされて造物主（ライフメーカー）から南武様に……『地』から、あらゆる属性を使えるように『智』にされたんだからね。

さらに力がさらに増したし……。

「そうですか。　それで、私に何か聞きたい事でも？」

ああ、そういえば……あの二人がどうして居るのとか……あれ？　一つしかない？　まぁ、いいか。

「あの二人はどうしたの？」

「完全なる世界を壊滅した時に、戴いたものです」

……壊滅？

「それはつまり……」

「デュナミスや他の方達は、殺しました」

アサシンの言葉に、なんとなく納得してしまった。　彼女から感じる力は、デュナミスのソレを遥かに上回る。　以前の……造物主（ライフメーカー）の使徒では、おそらく……いや、絶対気付かなかっただろう。

「そう……」

他の方達……あの変にカッコつけてる二人は良いとして、調達も入ってるんだろうね。

……僕は人形……なのに、この胸の苦しみはなんだろう？　目から溢れ、頬を濡らす一筋の涙は……なんだろう？

わからない。　わからない事だらけだ。

▲フェイト　視点▲

スクナVS乱2（後書き）

～三人の転生者～裏設定。

どうも！　感想が少ないと、寂しい気持ちになる秋代です。
今回の裏設定は……

転生前！　薫は貴史と風呂に入った事があるー！！

薫「やん！　照れるわ～」

貴史「修学旅行の時か……つか、薫は男だったろ？　さらに周りには男子生徒居たし……んな、二人っきりで入ったみたいな事言われてもなぁ……」

転生前の薫は、男の娘ではありません。

貴史「強いていうならクールな主人公系？」

性格は貴史ラヴだけどね（ボソリ）

貴史「え？　なんて？」

んにゃ、なーんも！
それでは！！

薫「次回はウチ視点が」

あると良いね。

薫「前はある言うたやん！！」

所詮、予定さ！　では！

事後処理を書くのがめんどくさい事もあるよね？　原作みたく戦った、勝った、

サブタイトルは私の想いです！
難しい事は大ッ嫌い！！
バトル大好き！！　何も考えずにやれるもん。

さてさて、今回は予想外な人間関係を見るかもです！！

それでは、感想待っとります。

事後処理を書くのがめんどくさい事もあるよね？　原作みたく戦った、勝った、

▼　貴史　視点▼

フェイトがクロナと話してる間、俺は薫の所へ行って慰めてるが……

「どうせウチは主人公でもなければ、メインヒロインでもないんや……」

「……そ、そんな事ねぇって」

「嘘や！　だってウチ、斬られて利用されただけやん！！　救出も一瞬で終わるし！！　助かったけども！！」

なかなか、うまくいかない。　こういう時は、どうしたらいいんだ？　カスミがいじけたら対処しやすいんだが、薫がいじけるの初めてだもんなぁ。

う～ん。　なんか無いかね～。　ま、これが効くかわからんが……

「次の休みの日に、久々に遊ぶか？　どっか出掛けたり」

「約束やで！？」

「ああ」

「やったー！！」

うむ……なんだか、よくわからんが元気になって、良かった良かった。　さて、次は……フェイトとアレだな。

「ジェイル、クロナ」

「なんだい？」

「なんでしょう？」

俺が二人の名前を呼ぶと、すぐに側まで寄ってきた。

「アレはなんだ？」

「フェイトの事かね？」

「セクストゥム達の事ですか？」

「ああ…」

「では、私から説明しましょう。　短髪の娘がセクストゥム。　長髪の娘がセプテゥムです。　彼女達はですね……」

ふむふむ、セクストゥムにセプテゥムね。

クロナは連れて来た二人の名前を言ったあと、仕事の報告からナギとアリカの事、完全なる世界の事、そして二人の事を説明した。

ふむ、アリカとナギは捕獲完了して、完全なる世界は壊滅。　メガロメセンブリアの元老員の暗殺も終了か。
にしても、転生者が居たのはびっくりだったな……。　もしかしたら、まだ居る可能性もあるか……。

「んじゃあ、次はジェイルだな。　アーウェルンクスシリーズとやらの説明と、フェイトについて教えてくれ」

「了解した」

そう言って、ジェイルが取り出したのは、眼鏡だった。

「？」

「かけてみたまえ」

ジェイルに言われるままに眼鏡をかけると、急にレンズから映像が流れた。　どうやら、説明はする気ないみたいだ。

▲　貴史　視点▲

時間は遡り……。

▼　ジェイル　視点▼

フェイトの呪文詠唱が聞こえ、カスミ達と別れて数分、もうそろ

そろ見えてきても良いはずなのだが……

「冥府の石柱」

「くっ、全力！　斬岩剣！！」

――ズガァァアアアアアンッ！！

見つけた。　にしても、刹那が冥府の石柱を斬るとはね。　私が知る限り、ありえない強さだ。　原作の師よりも、こちらの師が優秀な証拠だな。

さて、いつまでも見てないで加勢しよう。

「とりあえず、不意打ちの全力全開……不殺（ころさず）のブレイバー！！　ぶるぅぁぁあああああああああああああああああああああああああああああっ！！」

戦斧を造って出した技は、非殺傷設定のジェ〇サイド・ブレイバー。　あ、秋代は本物のジェ〇サイド・ブレイバーを知らないので、悪しからず。

まぁ、味方（刹那とか木乃香）も一緒に巻き込まれて、閃光に呑まれたが……まぁ、死にはしないだろう。　非殺傷設定だしｗｗ

「しかし、やりすぎたか？」

これでは、管理局の白い悪魔と大差ないのではないだろうか？

……深く考えるのは止そう、鬱になってくるｗｗｗ

さて、まずは彼の主をくら替えさせよう。

▲ジェイル　視点▲

▼貴史　視点▼

「と、まぁ……こんな感じでああなった」

……いや、なんつーか。　味方を巻き込むなというか……まぁ、いいか。

「まぁ、だいたいわかった。　で、アーウェルンクスシリーズってのは？」

「週間少年マガ」

「ＯＫ……説明する気ないと見た。　後で見ることにする」

「作者に優しいキャラを目指す！！」

メタ過ぎる。　つか、秋代に優しくせんでも、良いと思うが……。

そして、説明らしくない説明を受けたあと、桜咲と木乃香を回収して真名達と別れた広場に戻ってきた。

「こおる大地！！」

「メイドのミヤゲ！！　双龍烈火閃！！」

「魔導砲…全力発射！！」

――ズドドドドドドォォオオオオンッ！！

戻ってきたんだが……なんだ？　コレは……。

「あ、南武先生」

「そっちは終わったみたいだな」

「お疲れ様です」

「お、おう」

俺達が呆然としてると、横から明日菜、雨流、花月が声を掛けてきた。　花月と雨流が夏彦を一瞬見て、すぐに目を逸らした所を見ると、俺らの味方ってのは本当らしいな。

だからと言って、薫を斬るのは如何なものだろうか？　まぁ、それはそれ……俺らの知らない所で、やってほしい。

「ハハハハッ！　やるじゃないか！！　ここまで粘るとは、正直予想外だよ」

「メイドのミヤゲ二回も発動して尚、耐えるとは……」

「アルカンシェルで消し飛ばしたい」

そろそろ現実逃避は止めるか。　地上でアルカンシェルを撃たれた日には、いくら俺でもフォローしきれん。

「カスミは、エヴァと茶々丸を止めろ」

「わかった……」

さぁて、少しお仕置きするか……。

――――ブワッ！！

俺が殺気を放つと、俺を中心に蛇の幻が現れ、真名を取り囲む。

「！！」

殺気を当てられた真名は、すぐに後ろを振り向き俺を認識すると、ガタガタ震え出した。　小さい頃のトラウマを思い出したかどうかは知らんが、これはこれで大人しくなるから良しとしよう。

カスミの方を向くと、カスミの体から漆黒の靄（もや）みたいなのを出して、エヴァと茶々丸を止めてた。　若干、エヴァが真名みたいに震えてる事から、エヴァも真名と同じような、トラウマがあるのだろう。

こうして、なんやかんやで修学旅行三日目の長い夜が終わった。

……いや、別に説明とか描写がめんどくさくなったわけじゃないよ？　ただ説明する事も、描写する事も無かっただけ……。

フェイトを見て詠春が暴走したり、夏彦を見て詠春が暴走したり

したけど、ジェイルが全て説明してくれた。　ただ、それだけ……。

「そういや、虚・薫が出てきてないな？」

「ああ、もう一人のウチやったら……」

▲　貴史　視点▲

▼　千草　視点▼

「ハアッハアッ……」

なんでや？　なんでやなんでやなんでやなんでやなんでやなんでや!?　ウチの計画は完璧やったはずや!!　薫お嬢様を誘拐して、スクナを召喚したまでは……

「なんなんや……あの化ケ物は!!」

あの巨大なスクナを一瞬で……。

「ま、まぁ……命があっただけめっけもんや……また、計画を練って仕切り直しを……」

「ハッ！　まだチャンスがあると思ってやがる」

「まったく、面白い方ですね」

「ッ！！　だ、誰や！？」

突然、周りから聞こえた声に反応して、ウチは猿鬼と熊鬼を出す。

「んな、式でどうにか出来ると思ってんのか？」

「クスッ♪」

そう言って茂みの中から現れたのは、鬼の面を被った変な奴と、黒衣を纏った変な女やった。

「だ…」

――ザクッ！

え……

「わりぃが……あたしの主人に手を出した時点で、テメェの運命は決まってんだ」

……なんで、此処に

鬼の面を被った奴は、面に手を掛けてゆっくりと面を外し、ウチにその素顔を見せた。

「これでも、忠誠は誓ってんだ」

香、お嬢……さ、

「あばよ……親友」

▲千草　視点▲

三人の転生者の裏設定。

貴史の家。
剣崎家は……ヤクザとかマフィアとかが、集まる家です。
ちなみに、剣崎家は一般家庭です。
なんの因果か、ヤクザとマフィアが剣崎家の母に月一で挨拶しに来るのだ！！

そして、新入りは剣崎家の玄関前で陣取って……たまに、貴史に（剣崎家の子供だと知らずに）突っ掛かる馬鹿が居る。
こんな具合に……

貴史「ねぇ……」

新入りヤクザ「ああん？　んだ？　ガキ……此処はテメェみてぇな、糞ガキが来て良い場所じゃねぇんだよ」

母「あらあら……私の息子が来ちゃいけない場所なら、誰が来て良い場所なのかしら？」

新入りヤクザ「賢そうな坊ちゃんですね？　兄貴と呼んでも良いですかい？　い、いや……旦那……いや、親分と！！」

母「それはさておき……新入りさん。　お仕置きです♪」

新入りヤクザ「……ぼ、坊ちゃ……いえ、兄貴……生きてたらまた会いやしょう……」

貴史「……強く生きろ」

新入りヤクザ「へい……」

てな、感じです。
では、また次回！！

麻帆良よ！　私達は帰ってきたー！！（前書き）

ほのぼのが書きたいけど、うまく書けない。
どうしたものか……。

あ、感想で〇〇「」があると、読専の方が書きづらいみたいです。
でも、私は〇〇「」の感想大好きです！
ん～どうしたものかなっと今考えてます。
それでは、本編どうぞ↑結局は問題が解決していない。

麻帆良よ！　私達は帰ってきたー！！

▼　貴史　視点▼

さて、詠春に後のことを任せて旅館へ帰ってきた俺達を出迎えてくれたのは、ロビーで正座してる３－Ａの連中だった。

きっと俺達が戦ってる時、騒いでたのだろう。

そして、新田先生に当たり障りの無い報告をした。　そして、生徒を連れてバスに乗って、新幹線に乗り、電車に乗って麻帆良学園へと帰ってきた。

「「麻帆良よ！　私は帰ってきた～」」

「アホな事言ってないで行くぞ」

オットーとディードを抱えつつ、ジェイルと乱、クロナを連れて家に向かう。　えっ？　アーウェルンクス達とナギ達は、どうしたかって？　今頃、別荘で仲良くなってんじゃね？

「つまり、クロナが連れて来たナギ達は、ダイオラマ魔法球に押し込めて、アーウェルンクス達も手紙を渡して、ダイオラマ魔法球に押し込めたと言うわけだ」

「説明ご苦労さん。　つか、ダイオラマとか言うな……作者は名前を覚えきれず、名前を出す時は必死で調べるんだぞ？」

ジェイルにそう言うと、フッフッフッと笑い出した。　作者に優しいキャラを、目指してるんじゃなかったのかねぇ。

「今回は作者に厳しくいく！！」

……これも愛と鞭……愛と核ミサイル？　まぁいいや……。

はい、やって来ましたダイオラマ魔法球。

「オラッ！　千の雷ぃい！！」

「はぁ……冥府の石柱」

――ズガゴォォオオオオオオオンッ！！

「おお～やってるやってる」

中は予想通りというか、なんというかフェイトとナギが戦闘をしていた。　つか、あんちょこ持ってないな……。　まぁ、今まで隠居生活みたいな事してたみたいだし、多少となりとも呪文を暗記出来るくらいにはなるか。

「「！　貴史様」」

「！！」

「貰ったぜ！」

「チッ」

セクストゥムとセプテゥムが俺に気付いてこちらへ向かい、それに気付いたフェイトも来ようとしたが、ナギにその隙を突かれて、舌打ちをしながらナギとの戦闘を続けた。

頑張れ、フェイト！　でも、フェイトって名前被るな……後々。

まぁ、なんとかなるだろ。

「ん……なんじゃ、お主も来ておったのか？」

建物の中に入ると、アリカ姫がソファーで寛いでいた。

なんつーか。　こうして見てると、あのバカにはもったいないというか、なんというか……。

「まぁな。　それより悪かったな。　拉致なんて真似して」

「良い……クロナが数ヶ月分の仕事をしていて、暇だったのじゃ」

……あいつは、何をやってんだか。

「じゃが、何故妾を？」

「ああ、とあるサプライズでな」

「サプライズ？」

俺は「ああ」と答え、詳しく説明する事にした。

▲　貴史　視点▲

▼　薫　視点▼

「♪～♪～」

「ご機嫌やなぁ、お姉ちゃん。　なんか、ええことでもあったん？」

ウチが明日のデートに着て行く服を選んでると、愛しの妹である木乃香がぽわぽわとした笑顔で聞いてきた。

「ふっふ～ん。　明日は貴史とデートなんよ」

「明日はじいちゃんに呼ばれとるやん。　ウチら」

――ピシリッ！

「……え、え？」

「前々から言われとったやん。　多分、お見合いやえ」

……よし、あのぬらりひょんシバこ。

「虚空を放ってもええ？」

「いや、あかんよ！！　ちゅうか、お仕置きに虚空はやり過ぎや！！」

「まぁ、いつも通り無視すればええかな」

「せやね」

せやけど、無視したらしたで黒服のお邪魔虫が、ウチらを探すんやろうなぁ。　いっその事、もう一人のウチに頼もうかな。

（ぜってーやらね）

あはは……やっぱり。

まぁ、なるようになるやろ。　それに、また助けてくれるかもしれんし。

▲　薫　視点▲

▼　カスミ　視点▼

「どうだ？　超、茶々丸の様子は」

「ん～……流石二世代駆体ネ。　問題は無いヨ」

「それはよかった」

修学旅行では、真名とエヴァのバトルロワイヤルをしていたからな。　いくら茶々丸が強くても、経験は他の二人より劣ってるし、なにより茶々丸のシステムはいろいろと異常だからな。
オーバーヒートやスーパーモードは、茶々丸の身体に負担が掛かる。　特にメイドのミヤゲは、な。

「茶々丸も……もう少し経験を積んで、切り札を切れ」

「申し訳ないでござる」

……時々、茶々丸がわからない。

「に、逃げろー！！」

「ん？　どうしたんだ？」

「さぁ？」

「隣の部屋から、膨大なエネルギーを感知。　爆発しますね」

ああ、私の不幸が招いたモノか、爆発オチとはまた久しぶりだな。

「ちょ！　落ち着いてる場合じゃないネ！！　なんとかするヨ！！」

「ハッハッハッ……諦めろ。　私は諦めた」

「カスミはもう出入り禁止ネー！！」

――ちゅっどぉおおおおおおおん！！

▲カスミ　視点▲

麻帆良よ！　私達は帰ってきたー！！（後書き）

今回の裏設定は……

山瀬　薫こと近衛　薫はヒロインです！

薫「ついに裏設定に！！」

いや、みんな忘れてるみたいだから

薫「表設定に戻してぇな！！」

裏設定第二弾！！

みんな突っ込んでくれなかったんで言います。

薫の虚こと虚・薫は、千草とは旧知の仲です。
幼なじみ的な？
名前は咄嗟に名乗った……香です。
うん。
番外編で、この辺りも書くつもりですのでお楽しみに

デートと転生者適性検査（前書き）

今回は薫の慰めデート。

ハハッ♪　先に謝っておく薫ごめんｗｗ

デートと転生者適性検査

▼　貴史　視点▼

修学旅行から、帰ってきた次の日。
現在何をしてるかと言うと、ホンキートンクで薫と待ち合わせだ。

「つか、おせぇ」

待ち合わせ時間は、１０時きっかり。
しかし、今の時刻は１０時１０分。　そう、薫は１０分経ってもまだ来ない。

……今、「うわっ！　こいつ心が狭っ！！」と思った奴。
とりあえず、自分の家の周り百周しとけ。

「遅いって……まだ１０分しか経ってないって……だいたいね？女の子には準備というモノがね？」

「うるへー」

波児（ボール）の、長ったらしくなりそうな話を途中で遮り、珈琲を飲む。
うむ、うんまい。

――２０分経過。

「まだこねぇ……」

「確かに遅すぎるね……」

――３０分経過。

「まさか忘れてんのか？」

「いやいや、薫ちゃんに限ってないでしょ」

――５０分経過。

「……波児…ちょいそこら辺見てくる」

「それは良いけど……代金」

――パタンッ

波児の言葉を最後まで聞かずに、外へ出るとお天道様は天高々と昇っていた。　うん。　もう昼だしな……当然か。

そのままテクテクとぶらついてると、黒服のおっさんらが走り回ってるのを見掛けた。　というか、よく見ると黒服のおっさんらがわんさか居ね？

しかも、誰かを探してると見た。

「……よぉー！　薫ー！！」

俺はわざとらしく、薫の名前を大きな声で叫ぶと、黒服の皆さんがザッ！　と俺が叫んだ方を見る。

……決定だな。　えぇ……認識疎外の結界を張って……お仕置きタイム！！

「なるほどな……テメェらがあいつを探してるから、あいつは隠れて動けなかったわけだ」

――ビクッ！

俺の言葉に黒服は身体をびくつかせ、ギギギ…と振り返るよう

にこちらを見た。　よく、見ればこの間ボコった黒服が居る。

「さて、せっかく薫と遊びに行けると思ったんだが、お前らを見て邪魔された気分だ。　つか、邪魔してるよな？」

「あ、あの……」

「ん？」

俺がお仕置きしようと足を一歩動かすと、黒服の一人が蚊がなきそうな程、小さな声で言ってきた。

とりあえず、遺言は聞いとこう。

「お手柔らかにお願いします」

「却下♪」

――ドカッ、バキッ、ベキッ、ボキッ……

しばらくおまちください。

▲　貴史　視点▲

▼　薫　視点▼

黒服のおっさんらから、逃げてだいたい2時間が経過した。
時刻は12時。　遅刻も遅刻、大遅刻や。　でも、黒服のおっさんらを倒すわけには行かん。　ウチの力は加減が、難しいしなぁ。

と、そんな事を考えてると、いつの間にか黒服のおっさんらが、おらんようになった。

「撒けたんかな?」

まぁ、ええや。　今のうちにホンキートンクに行こう。

――カラン、カラン♪

「いらっしゃい、薫ちゃん。　貴史ならさっき薫ちゃんを探しに行ったよ」

「あちゃー。　入れ違いになってもうたか」

「そうでもねぇみてーだぞ?」

「へ?」

突然聞こえた声のする方へ振り向くと、そこには……

「よう！」

貴史がおった。

▲　薫　視点▲

▼　貴史　視点▼

黒服のおっさんらをボコって、ホンキートンクへ戻ると薫が居た。
時間はもう１２時。　まずは昼飯だな。　そんな事を考えながら、
俺はホンキートンクに入った。

「波児、軽食頼む」

「サンドイッチで良いか？　材料ねぇんだ」

材料くらい揃えとけよ。　まぁ、いいか。

「薫もそれでいいか？」

「ええよ～」

「じゃあ、サンドイッチセット二つ」

「あいよ」

さて、昼飯が来るまで何をしようか。　まぁ、サンドイッチだからすぐに来るだろうけど……。

あ！

「薫、修行はちゃんとしてるか？　修学旅行の二の舞は、ごめんだぞ？」

「ちゃんとしとるえ。　真面目にせなディエチちゃんに抜かれて、用無し師匠になってまうからな」

理由はどうあれ、ちゃんとやってるみたいだな。　薫もちゃんとやれば、弥勒に勝てるわけだし……。

「へい、お待ち。　貴史はブルマンでいいよな？　薫ちゃんはココアと」

「サンキュー」

「ありがとうな」

「「サービス」」

「サンドイッチのセットを頼んだって記憶してるよ？　珈琲代を踏み倒そうとしない」

「「チッ！」」

「君ら蛮より、性質（たち）が悪いよ！？」

おう……少しは自重しよう。

「まぁ、金はちゃんと払うから許してやってくれ」

「君のその図太い態度……まるで蛮を相手してるみたいだよ」

というか、蛮蛮言ってるけど……

「もう隠し事やめたのか？　疾風の王サマ」

「年寄りをからかうなよ。　まぁ、弥勒の奴がバラしたみたいだしな。　もう隠す必要は無いだろ？」

まぁ、それもそうか……。

「あ、そうそう……エリスちゃんが、お前を狙ってるから気をつけろよ？」

は？

「ちょっ！　な、なんでなん！？」

波児の言葉を聞いて、薫が机を叩いて叫ぶ。　というか、エリスの事、知ってるのか？　なら教えてくれ……波児が知ってるって事は、ＧＢキャラなんだろうけど……。

「さぁ？　なんか、電話で私の蛮……とか言ってたけど？」

「あんの勘違い女め！！」

「てかさー。　エリスって誰よ？」

俺の言葉に波児と薫はこちらを向いて、「えっ？　覚えてない？」と言った顔をする。

「しょうがねぇだろ？　転生前のＧＢ知識なんて、あんま覚えてねーよ」

「それもそうか……」

「弥勒一族でわかるやろ？」

弥勒一族？　エリス、弥勒、エリス、夏彦、エリス、蛮さん……

……あ！

「ショタで胸のでかい姉ちゃん」

「お前、それ夏彦君に言ったら斬られるからな？」

しゃーねぇじゃん。　蛮さんがそう評価してんだから……。

「んで、そのエリスは何処に居るんだよ」

「京都やけど？」

意味ねぇーじゃん。

「いや、花月君とこっちに向かってるらしいよ？」

「なんやてー！！」

またGBキャラが、麻帆良に来るのか……。　いい加減、捌きれなくなるんじゃねぇか？　まぁ、いいけどよ。　ん？　ちょっと待てよ。　確か、エリスって夏彦達にとったら保護、護衛対象の姉だよな？

「……もしかして、夏彦も来る？」

「当然だろ」

「げ」

ふむふむ。　そうか、夏彦が来るか……そいつは楽しみだ。　あいつはチートな転生者の強さで表すと、中の上だからなぁ。　十分、楽しめる。　さらに決着も着けれるしな……。　あと薫よ。　そんなにあいつが来るのは嫌か？

「まぁ、いいや……。　んじゃ、情報サンキュー」

「ああ…」

「……」

俺は落ち込んでる薫を抱えて、ホンキートンクを出た。　……

…あ、金払ってねぇ。　まぁいいか。

外を出ると、サイドカー付きのバイクの所まで行く。　誰のかって？　俺のに決まってんだろ。
薫をサイドカーに乗せてバイクに跨がり、魔力を流すと魔導式バイクが起動する。
魔力で動くこいつは、地球に優しいモノだ。　ちなみに、ジェイルの作品。

んで、バイクをテキトーに走らせると、海に出た。　いや、淡々と言ってはいるがそれだけなんだよ。

「うわ～海や海！」

「そうだな……」

まぁ、薫が元気になったから良いんだけど……ていうか、なんで海如きでそんなにはしゃげるんだ？

「実家は山やし、麻帆良は都市やからなぁ」

「確かに少し遠出はするな」

フッ……今更心を読む事に、なんの疑問も感じないぜ！

「読んでへんもん。　聞いこぉえぇたぁだぁけぇやぁ～」

「……なんか久々のやり取りだな」

「せやね～」

かれこれ２０年前……まぁ、薫は１３、４年前だが……そう、転生前のやり取りだ。　……って

「転生前の能力を持ってるのか！？」

「う～ん。　持ってるゆうより……なんやろ……復活？　憑依者がウチらを転生前に戻したやん？」

憑依者……ああ、村上か…。

「確かに戻されたな」

「そっから転生前の能力が、徐々に使えるようになったんよ」

……ふむ。

「とりあえず、心の声を聞くの禁止」

「はぁい」

それから、海を眺めて時間を潰した。　潰しまくった。　それはもう昼から夕方になるくらいに……。

「あのー」

「虚空……」

「ちょ、やめ……ぎゃぁぁあああああああああああああ！！」

――ズガァァアアアアアアアアアンッ！！

なにやら聞き覚えのある声が聞こえたけど、気にしないでおこう。
面倒事に巻き込まれそうだし。

「いやいや、そう避けられたら困るでな」

「ウチの幸せな時間を潰すなんて、シバいたろか？　屑（神）」

あ、やっぱり声を掛けてきたのは屑だったか……。

「それはすまん。　じゃが、ワシの頼みも聞いておくれ」

「なら聞くだけ」

「貴史！？」

薫が、驚いたように声を上げるが、今は無視だ。　どうせ聞くだけだしな……

「転生者適性を頼みたい」

「転生者適性？」

「うむ。　これは以前からあった問題でな？　たまに、ワシらに本性を見せずに特典を貰って、やりたい放題する者がおってな。　その者を狩る為に、君達のような上位転生者に狩らせておる」

やりたい放題な転生者ねぇ。　俺達もじゃね？

「おぬしらは、ギリギリセーフじゃ。　（クロナは違うがな……今は大人しいから良いが）。　それでじゃ、もうこれ以上やりたい放題な転生者が現れぬよう、策を練ったのが転生者適性検査じゃ」

「それで？」

「本当はクロナの仕事なんじゃが、今クロナは手が放せん状態でな？　代わりにおぬし達に、頼みに来たと言うわけじゃ」

クロナの仕事か……あいつも好き勝手してると思ってたんだが、そんな事をしてたのか……。

「検査方法はなんでも良いぞ。　ちなみにクロナは最初に不合格と言って、相手を怒らせて本性を見とる。　当然、能力を与えた後で、適性するからチート戦じゃな」

ほぅ……楽しそうだな。

「まさか……貴史？（なんや嫌な予感が……）」

「その依頼……受けるぜ」

「ちょっ！　ウチとのデートは！？」

デート？　これってデートなのか？

「まぁ、良いじゃねぇか。　少しは運動しねぇとな」

「そらそうやけど……」

渋る薫の頭に手を乗せて撫でると、渋々と言った感じで了承してくれた。

「助かる。　それでは行くぞ？　にょあああああああ！！」

屑（神）の変な叫び声と共に、俺と薫は転生者が待つ世界へ転送された。

▲　貴史　視点　▲

▼　春原　視点　▼

うぃ～っす。　僕、春原陽平。　私立光坂高等学校に通うナイスガイさ！！　実を言うと、僕は転生者なんだ！！

……

……

……

いや、マジなんだって！　そんな哀れみに満ちた目で、僕を見るな！！　へ？　なんで、僕が転生者なのかって？　いや～、それが聞いてよ。

僕がいつものように学校に登校して、授業を寝て過ごそうとした

んだ。　それで、目が覚めたらわけのわからない場所に居た。　んで、目の前に突然ジジイが現れてさ、お前は寝過ぎて餓死したとか言ってきたんだよ。

　一瞬、耳を疑ったよ。　普通、餓死するまで寝れるはずないと思ったからね。　でも、事実なんだよなー。　芽衣の奴……泣いてたなぁ。　岡崎や杏まで、泣いてたのには驚いた。

　まぁ、そんなこんなで神様が転生させてくれるって言うから此処に居るんだけど……ん？　特典？　あ～なんかあったなぁ。　くじで決めたけど……え～なになに

『小さなボケでもツッコミが出来る程度の能力』

「なんでだよ！？　って、突っ込んじゃったよ！！」

　ま、まぁ……あと二枚あるから……なになに……

『怖い人にもツッコミが出来る程度の能力』

「なんてもん入れてやがる！！　あの駄神！！」

　こ、これじゃあ僕の命が……や、ヤバい。　最後のコレに賭けるしか……

『絶対回避生存能力』

「相手の神経を逆撫でする能力ばかりじゃねぇーか！！　うぅ……父さん、母さん……ごめん。　二度目の生……長生き出来そうだけど、精神的に参りそうです」

はぁ……ていうか、いつまで此処に居ればいいのさ。　結構人も集まって来てんだけど……。

数分後、また人がやってきた。

「あの二人も、やっぱり転生者なのかなぁ」

ぼーっと二人を見てると、二人はどんどん前に行ってステージの上に立った。

「「……」」

何も喋らず、こちらを見渡す二人。

「「……「「……」」……」」

二人に注目する僕ら。　しばらくして、男の人が前に一歩出て……

「えー……転生者諸君……全員不合格とみなし転生は無し！」

衝撃宣言をした。

「なっ！」

「ふざけんなテメェ！！」

「こっちは勝手に殺されたんだぞ！！」

「俺のハーレム計画～」

そして、周りから暴動が起きる。

……このままじゃ巻き込まれる！！　か、隠れてよっと……。

そろそろと、端っこに行って騒ぎが収まるのを待つ。

「まったく……何を考えてんだか。　こういうのは、僕の居ない時にやってよ」

――ザクッ！

「ひぃっ！！」

突然、僕の目の前に刀が……ヤバい…死ぬ。　絶対回避生存能力なんてのあるらしいけど、コレ死ぬ……絶対死ぬ！！

あぁーもう！　早く終われよぉぉおおお！！

▲　春原　視点　▲

▼　貴史　視点　▼

「もう居ないか？」

「うん。　おらんえ」

「よし…」

俺の言葉にキレた転生者候補は、俺達にそのチート能力を使って倒そうとしてきたが、俺は薫の指示に従って外道転生者になりそうな奴のみを倒して行った。

んで、あらかた片が付いて、俺は他のまともな転生者達を殺気だけで止める。

「まぁまぁ、落ち着けお前ら……」

「「…「……ぐっ」…」」

にしても、だいぶ減ったな。　１０万人から２０人か……

外道転生者多過ぎ……。

「現在、生き残った奴は転生可能だ」

「ちょっ…ちょっと待った！　え？　何？　どういう事？」

俺の言葉に即座に反応したのは、クラナドの春原似の奴だ。

春原似の後ろでは、他の転生者達もうんうん頷いてる。　まぁ、突然転生出来ないから、転生ＯＫなんて戸惑うよな。

「説明が面倒だが、これも仕事だ。　説明してやるから、有り難く

思え」

「あんたすんごい偉そうっすね！？」

春原似……もう春原でいいや。　春原のツッコミを無視して、俺は説明する。

「近年、最低で外道な転生者が出て来てな？」

「うわー。　清々しいまでの無視ですか」

「んで、そいつらが神を軽く超える力を持つから、それを狩る為に、動くのが上位チートの転生者だ。　んでだ…狩る側にも事情があるんだよ。　家庭や仲間とかな？　いちいち、外道の為に動く時間が無いわけだ。　だったらどうするかと、神が考えた結果……転生させる前に適性検査をさせれば良くね？　ってなったわけよ。　本来なら俺らじゃなく、俺の上位存在が審査員なんだが、今忙しくって俺らが代わりに来たわけだ。　以上！　説明終わり。　それじゃ、よき転生ライフを」

俺の説明が終わると、転生者達の足元に魔法陣が浮かび上がり、転送された……一人を除いて……

「え？　アレ？　皆は？」

「転生した。　てか、お前はなんでしないの？」

俺の目の前に取り残されたのは、転生者候補の春原だった。

「というか、春原陽平にほんま似とるね」

「ああ…」

「え？　なんで僕の名前を？　って審査員だから知ってて当然か…」

え？　もしかしてこいつ……本物？

「なぁなぁ」

薫が春原へ声を掛ける。　多分、確認するんだろう。　どうやって確認するか、楽しみではある。

「ん。　何？」

「柊　勝平は女の子やのうて、男の子やよ？」

「違う！！　柊ちゃんは……柊ちゃんは……う、うわぁぁあああ〜〜〜！！」

「「うん。　春原陽平だ（や）」」

地面に膝と手を着いて、落ち込んでる春原を見て和む。

「和むな！！」

「あれ？　声に出してた？」

「いや、なんとなく……そう、突っ込まないといけない気がしたから……」

「そうか……」

まぁ、とりあえず……早く転生させよう。

「そろそろ転生させるぞ」

「あ、うん」

「なんか言いたい事はあるか？」

「あーじゃあ……名前……名前を教えてよ。　お前、岡崎……僕のダチね？　岡崎みたいな雰囲気だからさ…また会ったら楽しめそうだし」

「貴史だ。　南武　貴史」

「ウチは薫や。　近衛　薫」

「もう一人居るが……これはまた今度な」

「南武に薫ちゃんね。　それじゃ、またな」

「「おう（うん）」」

シュンッ！　と、春原は魔法陣に包まれ転生した。

またな……春原。

▲貴史　視点▲

デートと転生者適性検査（後書き）

今回の裏設定。

春原は本物。

いつか、準レギュとして出てくる。

以上。

修行だよ！　全員集合！？　1（前書き）

うん。　一話で終わらね。
こんな感じになりましたが、如何ですか？　雨季様

修行だよ！　全員集合！？　1

▼　カスミ　視点▼

「カスミさん！　僕を弟子にしてください！！」

「死ね」

朝早くに坊やが、私の所へやって来て「弟子にしてくれ」と言ってきた。

まったく、私の弟子等と笑わせてくれる。

私はお前が嫌いだし、そもそも私はあのオコジョの仇だぞ？　なんでそんな奴を師匠にしたがるんだか……。

「嫌です！　僕はカスミさんや乱さんみたいに、強くなりたいんです！！」

私はともかく乱みたいに？　それこそ無理だな。　乱の強さは常軌を脱している。　どんな手段を使っても届かん。

「強くなりたいなら、タカミチ程度で満足してろ……私達の領域に行くには、時間が圧倒的に少ない。　乱の領域なら特にだ」

そもそも、乱の領域は才能も無いと辿り着けん。

「どうしても……駄目ですか？」

「私はな……どうしても強くなりたいなら、エヴァにしろ」

「なっ！　カスミ勝手に…」

「登校地獄…」

「うっ！」

私がエヴァに押し付けようとすると、エヴァはすぐさま反論しようとするが、私がすかさずナギが掛けた呪いを口にする。

エヴァは今でも、私を巻き込んだ事を引きずってるからな……この言葉は便利だ。

「わかった……」

「今日の夜……ご褒美をやろう」

「よし！　ほら、坊や行くぞ！！　もたもたするな！！」

「え？　わ、ちょ……エヴァンジェリンさん？」

「私の事は、これから師匠（マスター）と呼べ！！」

エヴァはネギの襟首を掴んで、ダイオラマの魔法球がある地下室へ向かった。

さてと……これから先はどうなるかな。

「良かったのですか？　マスター」

窓から空を見上げてると、奥から茶々丸が現れる。

「何がだ？　茶々丸」

「このままでは……エヴァンジェリン様が……あまりにも」

茶々丸は胸の前で手をあて、悲しげな表情で言った。　あまりにも不憫……か。

「……そろそろ許すか」

「そうして下さい」

どこか安心したような茶々丸の声を聞きつつ、私は部屋に戻ろうとした。

――ズガンッ、バキボキベキッ！！

部屋に……

「いってぇぇえええええ！！」

部屋に……

「……茶々丸」

「はい」

私はすぐそばに居る茶々丸に、淡い希望に縋りつつも確認を取る。

「今の音は、誰の部屋から聞こえてきた？」

「マスターの部屋からです」

「声紋…」

「検索……検索終了。　該当者一名。　一条　要様です」

要か……もう常連だから紹介は良いよな？　というわけで、今から要をシバきに行こう。

はい、私の部屋に到着。

到着前に階段に足を引っ掛けてこけてしまったが、そんな事はどうでもいい。　重要なのは、私の部屋だからな……。

扉を開けると、そこには一条　要と神条　叶が土下座して待っていた（正確には要が土下座していただがな）。

「要……来るなとは言わないが、部屋を屋根を突き破るな。　ベッドを破壊するな。　と言いたいが、どうせ私の不幸に当てられたんだろう。　最近、不幸事が無かったから、そろそろかなっと思ってたしな」

「そ、そうか……助かる。　ああ…壊した物は、すずかを呼んで直させるから」

「呼ぶな。　余計壊れる」

いや、すずかの修理で壊れるって意味じゃなく、要が来た時と同じになるって意味だ。

「（相変わらず不幸だな……）」

「で？　今日は何をしに来たんだ？」

「叶と俺の修行……」

「なら、左のダイオラマに入れ……確か、貴史と乱とクロナが修行してる」

「サンキュー。　行くぞ、叶」

「うん」

「あとで私も行くからな」

「おう」

要と叶を見送って、私は部屋を見る。　屋根は青空が見えており、ベッドはバネが飛び出てたり、綿が見えてたり……はぁ、不幸だ。　まぁ、家が無くなるよりマシか……。

「茶々丸……手伝え」

「はい。　マスター……その前に」

「ん？　んんっ！！？」

茶々丸が私の前に来て振り返り、いきなり私に口づけをしてきたって舌も入れて来たぁぁあああああ！！

「ん、はぁ……マスターの魔力……おいひい」

「んんんんんっ！！」

よ、涎を吸うなぁぁあああ……誰か、助けて……幸せすぎて死ねる。

▲　カスミ　視点▲

▼　要　視点▼

三週間前から連絡を取り合って、今日ついに貴史達の修行を受ける事になった！　叶も一緒に……最初は不安だったが、乱も参加してるらしく……それなら叶もいっか的な事を考えてた俺を殴り飛ばしたい。

いやぁ実際、乱の実力なんて知らなかったが、叶と大差ないと考えてたんだ。　だけどさ……

「親父！　止まるな！　止まったら死ねる！！」

「んな事ぁ、わかってんだよ!!　つか、お前ら早すぎだっつーの!!」

「ほらほら、止まってると斬りますよ。　乱も父親の心配より、まずはご自身の心配を……」

「クッ！　数日前まで互角だったのに……」

「チッ……まさかこんな初歩的な修行で苦戦するなんて……情けねぇ……」

なんか、貴史が赤子のように何も出来ないで居るんだけど？　つか、どんな修行してんだよ!?　これで初歩!?　しかも、クロナって……アサシンの方じゃねぇのかよ!!

「パパ……これ、受けるの？」

叶が俺の服を握って、涙目で訴えかけてくる。　叶と貴史達を交互に見て……俺はいい……だが、だが！　叶だけは叶だけは、修行を辞退させても良いだろ？　まだ子供なんだぞ？　こんな修行……やらせたら叶の命がいくつあっても足りん!!

▲　要　視点　▲

▼　乱　視点　▼

京都から帰って来て二日目の日。

オレは今、親父と師匠（クロナさん）と修行をしてる。　その修行内容は、師匠の攻撃をひたすら避ける事。　これは、直感や回避力を鍛える修行法だ。

他にも、攻撃を回避または防御する修行とかある。　これは見切りの修行だな。　回避出来そうなら回避、回避出来なさそうなら防御と師匠の攻撃を見極めるんだ。

でも、今は初歩の初歩……回避の修行からだ。　一応、オレはクリアしてるんだけど、数日間の差は凄まじいらしく、互角だった師匠との差が広がっており、親父と同じようにこの修行に悪戦苦闘中だ。

というか、視線が気になる。　誰だ？

視線を感じる方を向くと、要さんと叶が居た。　要さんはオレ達の修行を見て呆然としており、叶は少し涙目だ。

「よそ見ですか？」

―ゾクッ！

「やばっ！」

考え事＋よそ見をしてると、師匠に気付かずに接近を許してしまった。

「減点１０です」

もうオレに向かって、振り下ろされる剣を避ける事は……

「テメェの相手は俺だぁぁあああああっ！！」

「「！！」」

――ズガァァアアアアンッ！！

剣に当たる直前、親父が師匠を蹴り飛ばす。　その隙にオレは親父によって、距離を取らせて貰った。

「もう大丈夫だな？　たくっ……要ぇえ！！　入んなら勝手に入りやがれ！！　修行内容は、クロナの攻撃をひたすら回避だ！！　あいつは攻撃する相手のレベルに合わせるから、ギリギリ避けれるはずだ！！　叶も来い！　もともとお前の修行でもあんだ」

「オレからも忠告！　止まるな！！　自分の事だけに集中！！　さっき親父がやったのは、悪手だからね！！」

親父は修行内容を、オレは忠告をして迫り来る師匠の攻撃を、ひたすら避けていった。

▲乱　視点▲

▼要　視点▼

おいおい……目茶苦茶だろ。

それじゃあ、叶のフォローが出来ねぇよ。

「お姉～ちゃ～～ん」

って、考えてる場合じゃねぇえええ！　叶が叶が地獄に向かった！？

「貴方は来ないのですか？」

「くっ……」

こうなりゃあ自棄だ！　待ってろ！　叶ぇえええ！！

▲　要　視点　▲

▼　乱　視点　▼

何度も視点変更申し訳ないが、許して！　三人称じゃ書ききれないんだ。

「お、お姉ちゃん…」

「って、叶！？」

ちょっ！　なんで来るの！？　オレへの攻撃は、親父すら干渉出来ないのに……死ぬ気！？

「おやおや……困りましたね。　まぁ、レベルは下げませんが」

師匠は叶が来ても構わず、オレがギリギリ回避できるような攻撃

しかしない。

まずいかも……

――トンッ

「やっとお姉ちゃんのとこ来れた」

「え？」

お尻辺りに人の温もりを感じ振り返ると、そこには同じく後ろを振り返ってる叶が居た。

ありえない。

親父や要さんにも攻撃してるとはいえ、オレの周りは攻撃の嵐だ。こう言ってはアレだがレベルの低い叶が、オレの所まで来れるはずがない。

――ズガァァアアアアンッ！

「くっ！」

「えへへ♪」

「！！」

まただ……。　師匠も驚いている。　なんで、叶も避ける事が出

来るのかと……

「叶……何をしたの？」

「お姉ちゃんの動きに合わせたの！」

オレの質問に、素早く答えてくる叶。

というか、オレの動き!?

今度は叶の動きを見つつ、次の攻撃を回避する。　私がコマ送りのような回避をすれば、叶も見様見真似で同じ動きをする。

動きを模倣した!?　いや、ありえない!!　そもそも、コマ送りは特殊な空間でしか使えない。　そして、オレが使えるのはオレが想像してるから……超越者にしか出来ない事をやってる。　これはいったい？

「面白い方だ。　叶さん」

「はい！」

「乱についていきなさい。　そうすれば、貴女は強くなる」

「は、はい！　頑張る!!」

こうして、叶は妙な才能を発揮して実力をつけていった。

▲　乱　視点▲

▼貴史　視点▼

はい、視点がコロコロしてすまねぇな！！

「おい！　アレはいったいどうなってる！？」

「知るか！　親バカ！！」

要は叶の動きを見て、俺に聞いてくるが俺だって知らん。なんで叶があんな動きが出来るのか、なんで叶が乱の動きを真似出来るのかな……。

「つか、アレ……模倣だよな！？」

「クス…修行中に話し合いとは、私も舐められたものです」

やばっ…こりゃあマジでやらなな……。

「要！　話は後だ！！　今はマジで避け続けろ！！」

「おわっ…ちょ……きちっ！」

教えるまでも無かったな。

「赤い暴風（ブラッディ・ハリケーン）」

クロナは俺達に向けて、無数のメスを遠隔操作しながら放った。

しかも、要のとこは要レベルで、俺のとこは俺レベルと器用に区

別してる辺りがすげぇ。

さて、次のステップまであと何分だ？

▲貴史　視点▲

修行だよ！　全員集合！？　2（前書き）

まだまだ！！
最後にまた別作品のキャラとのコラボ！
どんどんやってきますよ～。

なんせ、悪魔襲撃事件ありませんし！！

修行だよ！　全員集合！？　2

▼　乱　視点▼

回避力の修行を初めて6時間。　要さん達が入って来て、2時間が経過した。

最初は慣れるのに時間が掛かったけど、今では、師匠（クロナさん）の攻撃を冷静に避けれてる。

「それでは……第2ステージと行きますか」

突然、師匠はそんな事を言って、攻撃しながら説明してくる。

「第2ステージ？」

「足が止まってますよ？　要さん」

「うおっ！！」

……うん。　まぁ、予想はしてたよ。　次のステップに行くとは言っても、この修行を止めたとは言ってないからな……。

油断しすぎ要さん。

「避けながら、聞きなさい。　体力の限界が来たなら、頑張って乗り越えなさい」

「！！」

そう言って、師匠は叶に攻撃する。　叶は避けようとするが、体力が尽きたのかまったく動こうとしない。

「チッ…」

オレは軽く舌打ちをして、叶の襟首を掴み引き寄せる。　師匠の攻撃は、叶に届く事なく空振りで終わった。

「お、お姉…」

「喋る体力があるなら動く。　修行に関しては、親族とか関係ないよ？　甘えは許されないから」

「ぴ…」

あ、目にうっすらと涙が……でも、オレは間違ってないはず……甘さが中途半端な力をつける事になり、中途半端な力を持ったが故に大怪我を負おう場合がある。

「第2ステージは見極めです。　回避出来る攻撃なら回避を、回避出来ぬ攻撃なら防御を取りなさい。　ただし、なんでもかんでも避けてると、防御で防げたはずの攻撃が当たり死ぬ事もあります。逆もしかりです」

これは……初心者の叶には無理があるかな？　一応、外しといた方が……

「頑張って鳴いて下さいね？　叶さん♪」

うん。　無理だな。

「お、お姉ちゃ」

「諦めて……ちなみにオレは3時間でどうにか様になった」

そう、様になっただけでクリアしてない。

まぁ、2年でクリアしたけど……微妙に回避しか出来ないような攻撃とか、防御しか出来ないような攻撃をしてくるからねぇ。

ちなみに、これらの攻撃の対処方は……回避しか出来ないような攻撃は防御だ。　回避選んでも、当たるからだ。

んで、防御しか出来ないような攻撃は回避。　防御しても防御の上からダメージが来る。

「それでは……スタート！」

――ダッ！

師匠のスタートの合図で、全員蜘蛛の子のように散る。

別に固まって動いてもいいけど、それは余程息が合う人とだけだ。

それ以外だと、邪魔でしかない。

「ぴー――――――――――――！！」

叶がオレの頭上を通過する。　一人脱落か。

「か、叶ぇぇえええええ！！」

「よそ見すんな！！　見るのはクロナの動きだけだ！！　あとは感

じろ！！　針に糸を通す以上に、神経を尖らせとけぇぇえええ！！」

親父がオレの頭上を通過する。　１０秒か、もったほうかな。

▲　乱　視点　▲

▼　要　視点　▼

叶と貴史が脱落した。

始まって間もない修行で……いや、叶ならわかる。　うん、しょうがない。　だが、貴史！　なんでお前が先にやられるんだよ！？

まぁ、とりあえず貴史が言った事を頭に入れて、避けたり防いだりしてるけど……微妙にきつい！　つか、わかりづらい！！　防げそうにない攻撃だと思って回避しようとしたら、身体が勝手に動いてシールドを張る。　すると、ギリギリ防げた。

今度は回避が出来ず防御で防げそうな攻撃が来たと思い、シールドを張ろうとするも、また身体が動いて回避する。　すると、ギリギリ避ける事が出来た。

「……なるほど……見極めか」

俺がいまだ動けるのは、直感のお陰だろ。　いつまでも、直感に頼っては駄目だ。　なんとしても見極めないと……

「赤い雨（ブラッディ・レイン）」

「はっ！」

「よっ！！」

頭上から、降ってくる無数のメスを避ける。

しかし、乱の奴も粘るな……貴史とは段違いだ。

「俺様、復活！！」

「私も、復活！！」

ジョジョ立ちで現れる貴史と叶……叶……かな、え……。

「テメッ、貴史！　叶に変なもの教える…」

「隙あり♪」

―バキッ！

「なぁぁあああああああああああ！！」

一瞬、クロナから目を離して貴史にツッコミを入れてると、その隙をつかれ吹き飛ばされた。

……あとで覚えておけよ？　貴史。

▲要　視点▲

▼　貴史　視点▼

俺達と入れ違いで、要が脱落した。
くっ……無茶しやがって……要……仇は取ってやるからな？　無理かもしれんが……

と、ふざけた事をしつつも、俺はクロナの攻撃を防いだり回避したりしてる。

「赤い杖刑（ブラッディ・スティック）」

クロナは俺の方へ、メスを複数飛ばす。　この攻撃は……防御！　と見せかけて回避だな。

横へと跳んでメスを避けると、メスは地面に刺さり地面を吹き飛ばした。

……うん。　回避を選んでよかった。　さぁて……この修行……いつになったら終わるのかねぇ。

第２ステップの修行を始めて、１０時間が経った。　腹も減って

来た。　叶と要なんか、もう３００回は飛んでる。　体力が尽きたんだろう。　乱は、ようやく汗を掻きはじめたって感じだ。　まさか此処まで差があるとはな……。

「今日はこれで終わりにしましょう。　赤い槍（ブラッディ・ランス）」

クロナの手に赤い槍が握られ、殺気が一気に濃くなった。

こいつはヤバいかも……

回避は駄目だろうな……。　防御も無理。　最後は仲良く脱落しとけってか？　冗談じゃねぇぜ。

「要、叶、乱……四人で全力の防御するぞ」

「えーもう無理～」

「無茶を言うな！！」

「賛成……このままだと軽く死ぬ」

「「……」」

乱の言葉に、不満の声を上げてた要と叶は押し黙った。

「終わりです」

クロナは、もうすぐ側までやって来てる。　たく、はやくしろよ！！

「わぁーったよ！！　シールド！！」

「もー！　シールド！！」

「オレらもやるぞ？　親父！」

「合わせやがれ！！　乱！！」

「「赤い楯（ブラッディ・シールド）！！」」

最初に叶の張ったシールド、次は要が張ったシールド、そしてシールドと叶、要の間に入って、俺と乱がシールドを張る。

――ズドォオオオオオオオオオンッ！！！

▲貴史　視点▲

▼？　視点▼

此処ですね。　私の剣の教え子になりたい人が居る世界は……。

今、私が歩いてるのは平行世界の麻帆良学園。　上でも言ったように、私の剣を習いたい人が居るらしいです。

「「神鳴流心刃合錬…」」

「し～んめ～りゅ～し～んと～ご～れ～ん……」

おや？　あそこの森で暴れてるのは……

「「奥義！　斬岩剣！！」」

「にと～れんげき、ざ～んが～んけ～ん！」

この世界の刹那ちゃんと月詠さん、木乃香……いえ、木乃香ではありませんね。　似てますが違う。　って、三人が放った技の真ん中に人が！！

「助けないと…」

「夏彦なら大丈夫ですよ」

へ？

突然、後ろから声が聞こえ振り返ると、そこには綺麗な女性が居ました。

私の後ろを……この人出来る！！

「斬岩剣とはこうやるのだ！　馬鹿弟子共ォォオオオオ！！」

――ビクッ！

今度は、先ほど見ていた場所から怒声が聞こえ振り返ると、三人の斬岩剣を一振りで掻き消し、三人とは比べものにならない斬岩剣で三人を吹き飛ばした。

ど、どうしましょう。　私は本当に此処で、神鳴流を教えるので

しょうか？　私が教えるまでもない気が……

「っと、ところで……貴女は？」

「私はエリス。　よろしく」

「はい。　私は」

「あ、ごめんなさい」

「へ？」

自分の名前を言おうとすると、エリスさんがいきなり謝って来た。

な、なんでしょうか？　私は何か失礼な事でも……

「貴女の名前は次回……ね？」

メ、メメタァ……。

▲　？　視点▲

修行だよ！　全員集合！？　3（前書き）

今回は前回の最後の視点から、時間を少し遡った所からです。

修行だよ！　全員集合！？　3

▼　薫　視点▼

貴史とのデートから次の日。
世界樹の近くで、ウチはせっちゃんと修行をしとる。　ん？　ディエチ？　ディエチならジェイルさんとこに、お手伝いしに行っとる。　なんでも、オットーとディードが手伝わず遊んどるらしい。

……う、羨ましゅうないよ？　ほんまやよ！？　……羨ましいです。

「はぁぁあああああっ！！　心刃合錬斬！！」

「ほな、ウチも…」

――心刃合錬斬！！

せっちゃんが夕凪と一つになって切り付けてくるが、ウチも贄殿遮那と一つになって切り付ける。

――ズバンッ！！

「ぐっ…」

せっちゃんが苦悶の声を上げる。　遮那を見ると、うっすら血が着いていた。

深く着いとらんから、傷は浅いみたいやな。

――ザッ…

「！」

後ろで、葉が擦れる音が聞こえ、すぐに響転（ソニード）で距離を取り、振り返るとせっちゃんが夕凪を降ろしてた。

一瞬、遅れとったら真っ二つやな……。　洒落にならへん……。

「……」

ち、沈黙っ！！　恐っ！！

「ち、ちょうせっちゃん？　なんやマジで斬りに来てない？」

「薫お嬢様なら大丈夫かと思って……大丈夫ですよね？」

いや、まぁ……大丈夫やけど……。

「痛いのは嫌ややろ？」

「私も痛かったので、お相子になります」

そう言って、肩の傷に手を当てるせっちゃん。

いや、お相子って……ウチが真っ二つになって、ての酷い差やで？　最近、せっちゃんの教育を間違えたかな？　と、感じ始めた今日この頃……。

まぁ、せっちゃんの教育は木乃香に任せとったけど……。

「フッフハハハハ…ええで……せっちゃんがその気ならウチかて！！」

全力全開で、全壊な無双乱舞……行くでぇえええ！！

「避けきったら褒めたる！！　耐えきったらご褒美や！！」

――崩ッ！！

宙に崩と言う字を書くと、無数の火球と共に火の竜が現れる。

「竜之炎壱式、崩！！」

「ちょっ！？」

「逝きィイ！！」

ウチの合図で、無数の火球はせっちゃんへと向かう。

「くっ…神鳴流奥義、百烈桜華斬・弐の太刀！！」

――ズバババババババババババババッ！！

無数の火球をものすごい勢いで、処理していくせっちゃん。　せやけど、まだまだや。

――焔！！

「竜之炎参式、焔群」

さらに宙に焔の字を書く、すると右手の人差し指から炎が現れ、人差し指に渦のように巻き付く。

「さぁ、開幕と行こうか？」

「！！（まずい！　というか、なんで薫お嬢様は怒ってらっしゃるのだ？　私が何かしたか？）」

人差し指を振ると、炎は鞭のように動いてせっちゃんの腕に巻き付き、そのまま引き寄せる。

「ッ！」

「全部峰打ちですましたる」

まずは第一刀目、贅殿遮那（の峰）で斬る。

「ぐっ！（重……）」

そして、虚空から取り出すように第二刀目、斬月（始解状態の峰）で斬る。　第三刀目、侘助（始解状態の峰）で斬る。　第四刀目、神槍（始解状態の峰）で斬る。　第五、第六と斬魄刀を出しては峰で斬り続けた。

「焔群、崩」

――焔、崩ッ！！

せっちゃんとの距離が開くと、焔群と崩の合成技で無数の炎の鞭

を作り、せっちゃんを縛り上げる。

「うぐっ（な、なんでこんな縛り方……）」

……なんや、エロい縛り方になったけど……まぁ、良し！　かわええし……。

「あ、せや……写メ撮っとこ」

「ちょっ!?　はやく、次の攻撃してください!!」

「おお～。　ドM宣言」

――パシャッ！　ビキ…

ん?　なんか、シャッター音の後になんか聞こえた?　お?　なんや、せっちゃんが顔を俯かせて震えとる。

「お…」

「お?」

「薫ちゃぁぁあああああんっ！　そこに正座ぁぁあああああああ!!」

――バシュンッ！

な、なにぃぃいいいいいい!!　拘束してた炎の鞭を掻き消したやてぇえええええ!!

「くっ……卍解……狒狒王蛇尾丸（ひひおうざびまる）！　狒骨大砲（ひこつたいほう）！！」

身の危険を感じてか、ウチは蛇尾丸の卍解形態で最後の一撃を放った。　それもわりかし、本気で……。

「神鳴流決戦奥義、心刃合錬……真・雷光ぉおおお剣！！」

――ズドォォオオンッッッ！！

狒骨大砲と雷が衝突して、周囲の木々を吹き飛ばす。　だが、徐々に雷は狒骨大砲を押しはじめた。

「って、ちょう待っ……洒落にならんて！！」

「削除してぇええええええなぁぁあああああああああっ！！」

「いやいやいやいや、このままやと…ウチ自体が削除されるって！！」

「（いや……やて？　薫ちゃんは……薫ちゃんはウチが本当に嫌がったら、やめてくれるって信じとったのに……）くっ！！」

あ、なんや勘違いされた気が……

「薫ちゃんの……アホォォオオオオオオオオオオッ！！」

せっちゃんが叫ぶと、気が膨れ上がったと同時に雷が大きくなり、

狒骨大砲を飲み……って、ちょま……

――ボシュンッ！↑ウチも一緒に飲み込まれた音。

このあと、師匠達（夏彦とかエリスとか）が来て、せっちゃんを鎮めたそうな。　ウチ？　ウチは気絶しとったよ。　にしても、チートを倒すなんて……やるやないか……せやけど、せやけどなぁ……ウチを倒しても必ず第二、第三のウチが……あ、もうだめ……がくっ。

▲薫　視点▲

……そろそろ出るか。

「はぁ…はぁ…はぁ……」

▼夏彦　視点▼

「落ち着いたか？　馬鹿弟子2号（刹那）」

「！！　って、師匠」

はぁ……声を掛けるまでわからんとは……情けなさすぎて涙が出る。　まぁ、出んがな。

「こんにちは。　刹那！」

「どうも～先輩～」

「エリスさんに月詠まで!?　何故、此処に？」

「あれ？　何も聞いてないの？」

「はい？」

……ふむ。

馬鹿弟子2号とエリスの会話を聞いて、いまだ気絶してる馬鹿弟子1号（薫）を見る。

まったく、幸せそうな顔をして……。

――ギュム、ギリギリギリギリ……。

「ひはひ、ひはひ、ひはひ～!!」

「うるさい。　馬鹿弟子1号」

馬鹿弟子1号の頬をおもいっきり抓り上げると、馬鹿弟子1号は簡単に目を覚ます。

若干、涙目だが昔っからやってるので、特に罪悪感は感じん。

まぁ、人を殺めていた身だ。　女の顔を抓った程度では、罪悪も何もないな。

「相変わらず厳しいわね。　夏彦」

「それが師匠らしいですけど……」

「はぁ～……ウチにもやってもらいたいわ～」

「「……」」

ふむ、馬鹿弟子3号（月詠）の教育を間違えてしまったか？

「って…なんで師匠が此処に？　あと、エリスに月詠ちゃんまで…」

今頃気付いたのか……。

「ホンキートンクのマスターから、聞いてないのか？」

――サッ…

俺が馬鹿弟子1号に聞くと、素早く目を逸らす。　成る程、あまり考えたくないから、現実逃避をしていたというわけか。

「麻帆良に来て、まだ初日だ。　今日だけは修行をせず、エリスや月詠に案内を頼もう…」

「（やった！）その任務しっかりと…」

「と思っていたんだが、予定変更だ。　馬鹿弟子3号！　修行の準備をしろ！！　1号と2号はそのままだ」

さて、久々に全力戦闘をやるか……。

数分後。

月詠の準備も終わり、俺の周りを囲いながら三人は回る。　退路を潰しながら、ジリジリと……。

ふむ、即席にしてはなかなか……。　ベターな作戦だからこそ良い。

――ザッ…

三人が間合いへ入る。　来るか……。

「「神鳴流心刃合錬…」」

「し～んめ～りゅ～し～んと～ご～れ～ん……」

最大威力で来るか……。　ん？　誰か見ている？

「「奥義！　斬岩剣！！」」

「にと～れんげき、ざ～んが～んけ～ん！」

まぁ……あちらはエリスに任せて、俺はこいつらに集中するか。

しかし、斬岩剣か……スピード、力、技術……並の神鳴流剣士なら合格だろう。

……が、俺は並の神鳴流剣士に、育てるつもりはない！　す

べてを圧倒する最強の神鳴流剣士として、育てるだけ！！

「斬岩剣とはこうやるのだ！　馬鹿弟子共ォォオオオオ！！」

俺は水月（刀の銘）を振り、三人の斬岩剣を弾き、見本として俺が出しうる最大の斬岩剣を放った。　勿論、馬鹿弟子に当たらないようにな。

さて、修行は一旦止めて来客の相手をしないとな……。

▲　夏彦　視点▲

▼　薫　視点▼

うぅ……やっぱり強いなぁ。　師匠は……。

「そこに居る奴。　出てこい」

「「「？」」」

師匠が後ろを向き、誰かに向かって話し掛ける。

誰かおるんやろうか？　むむむ……。

虚（ホロウ）または破面（アランカル）が持つ、探査能力（ペスキス）で周囲の気配を探ると……確かにおった。

「はいはーい」

しばらくして木の陰から現れたのは、真っ白なウチ……いや、この場合は……

「この……ちゃ……いや、違う」

そう、木乃香に似てる。　転生者じゃないか……世界移動者？

「この娘は、近衛の守護者？の主人公さんよ。　自己紹介いいかしら？」

「あ、はい。　初めまして、近衛　雛と言います」

「秋代が三人にって」

さっきからエリスが、メタ発言連発しとるけど無視や。　ん～となるとコラボやな……。

「ウチは近衛　薫や」

「桜咲　刹那です」

「月詠言います～」

自分達も自己紹介をして、小休憩でひななん（随分と親しくなりました）といろいろ会話した。

▲　薫　視点▲

修行だよ！　全員集合！？　4

▼　ひななん　視点▼

誰がひななんですか！　愛称では許しましたが、名前として許した覚えはありません！！　直しなさい！！

▲　ひななん　視点▲

▼　雛　視点▼

よし、これで良いですね。
私を知らない方は初めまして……ていうのはなんか変ですね。
前々回は？として出てましたし……。
まぁ、改めて名乗るとしましょう。　私は近衛　雛と言います。
作者、彼岸花さんが書いてる【近衛の守護者？】の主人公をしております。

さて、メタな発言も此処までにして……。　今、私は薫さん、刹那さん、月詠さんに参の太刀を教えてる最中です。
なんで参の太刀をかって？　だって、弐の太刀を習得してらっしゃるんですもん。　参の太刀を教える以外、私が居る意味ないじゃないですか。

「ひなな～ん」

と、薫さんが呼んでるので、授業に戻らせていただきますね？

「なんですか？」

「斬らずにして斬る……言うのはわかったんよ。　でもな？　一人は必ず振って斬るのが納得出来ひん」

「「あー（ほへー）」」

薫さんの質問に、刹那さんと月詠さんも気付いたような反応をする。　ふむ、なかなか良い質問ですね。

「実を言うと、先程教えた参の太刀は相手の気や魔力を媒介に、広範囲に攻撃するモノです。　そして、薫さんの言う振らずにして、発動させる事は可能です。　ですが、これは相手の気や魔力を媒介にするのではなく、自分の気や魔力を使います。　この参の太刀のメリットは効果範囲ですかね」

私も完成形態を追い求めて、長い年月という時を要しました。　長い道のりでした。

「それでは、とりあえずやってみてください。　あ、注意事項として気をつけないと…」

――ザシュッ

「あふん♪」

「あ…」

……私が言い終える前に、薫さんが刀を振って参の太刀に挑戦したところ、制御出来ずに月詠さんを巻き込んだ。

うん、月詠さんの反応はこの際、無視しておきましょう。

「え～ちゃんと制御しないと、このように味方に迷惑をかけます。最悪…」

――ザシュッ！

「ぐはっ！」

「せっちゃー――ん！！」

また言い切る前に薫さんが（ｒｙ

って、薫さん……運が良いですね？　参の太刀は、高確率で自分にも来ますのに……。

「というか、人の話を最後まで聞く！」

――り～ん♪　バキンッ！！

「な！？」

「参の太刀を使ってたら、だいたい読めたえ」

参の太刀を参の太刀で防いだ。

いや、有り得ない事ではありませんが……しかし……

「それにさっきの見て、コツもわかってきた。　刀が鳴らす音で、敵と味方の区別をつけるんやね。　制御方法は……こんな具合かな？」

そう言って、薫さんは刀を手に構えた。　しかし、言葉にすれば簡単ですが、実際やるとなると難しい。　そう簡単に習得は出来ませんよ？

――キィィイイイイインッ！！　ザァァアアンッ！！

「……」

「やった♪」

……薫さんの刀が鳴った瞬間、周りの木が何本か破裂した。　しかも一帯丸ごとではなく、破裂した木との間に無傷の木があります。　……完全に制御してやがりますね。　こんちきしょうめ。

一応、私の奥の手なんですよ？　それを2回ほど失敗して、完成形を見たあとに完成。　何、このチート怖い。

それに私が長年掛けて編み出した技を……私の努力が……。

「こう……ですか」

――キィィイイイイインッ！　ズバンッ！

「こうですね～」

――ィィイイイイインッ！！　ズバババババババンッ！！

刹那さんは夕凪を出して、月詠さんはなんだか、妖刀……あれは村正？　を出して参の太刀をって……ちょ、ちょっと待ってください！！

え？　何が起きてるんですか？　貴女達……いくらなんでも習得するの早すぎですよ！？

……ふ～んだ。　もう良いですよ～だ。　もう何も気にしません！！

「ひななん師匠」

む、なんでしょう？　チートさん。

私が振り返ると、薫さん達は刀を鞘に納めて右側に置いて、正座していた。

「え？　なんですか？　これ？」

「ありがとうございました！」

「「ありがとうございました（～）」」

薫さんが頭を下げると、刹那さんと月詠さんも少し遅れて頭を下げて、感謝の言葉を言った。

……やっぱり、良いものですね。　人にモノを教えるのは……早い卒業でしたが、嬉しいものです。

「どういたしまして」

にしても、時間が空きましたね。　どうしましょう？

▲　雛　視点　▲

▼　要　視点　▼

どうも、要だ。　今、俺達は飯を食べてる。　叶、クロナ、貴史、乱、ジェイル、カスミ、茶々丸……そして、フェイトとフェイトに似た奴が二人に、ネギをまんま大（外見だけ）人にしたような奴（ナギって言うらしいが）と、金髪で美人な女性（アリカって名前だったか）も居る。

「がつがつがつがつ…」

「ナギ、行儀が悪いぞ」

がつがつ食べるナギに、アリカが注意する。

「良いじゃねぇか。　うめぇんだし」

「まったく…品がない」

「んだと！　じゃあてめぇの主はどうなんだよ！？」

「バクバクバク……ん？」

「「「「貴史（様）は良いんだ（よ）！！」」」」

セプテゥムがナギを貶めるが、料理にバクついてる貴史を出すが、セプテゥム、セクストゥム、カスミ、ジェイル、フェイトが庇う。

「ひ、ひでぇ……」

確かに、数の暴力とは酷い。　一方、乱と叶は……

「お姉ちゃん、これは何？」

「バッカスドラゴンの丸焼き。　アルコールが入ってるから、叶は食べちゃダメ」

ほう……珍しい肉だな。

「じゃあ、これは？」

「ボーン・バード揚げ。　骨の鳥と呼ばれてる生物を揚げた食べ物で、揚げると軟らかくなって意外に美味しい。　カルシウムを取りたいなら、食べると良いよ」

「へ～」

「ちなみに昔はよく食べてた」

「食べる！！」

仲睦まじき事は、美しきかなってな。
お、マジで美味い。　焼く事によって、バッカスドラゴンが生前飲んでた酒が肉に染み渡り、肉をさらに柔らかく……しかも、脂にも酒の味が……一つの食材に二つ味わえるモノ。　うまいうまい。

「そういえば、このあとはどうするんだ？」

「このあとはフェイトは、カスミに魔法講座。　魔法のノウハウを、みっちり教えてもらえフェイト。　カスミも頼む」

「了解」

「ふん。　わかった」

フェイトの奴は魔法か……。

「セクストゥム、セプテゥムは接近戦だ。　お前ら接近戦になるとザコい。　茶々丸に教えてもらえ。　いいな？　茶々丸も」

「「はい…」」

「了解です」

フェイト似の二人は接近戦……あれ？

「接近戦なら俺が鍛えるぞ？」

「要はクロナと模擬戦だ」

……は？

「ちょ…ちょっと待て……。　なんでだ？」

「修行しに来たんだろ？」

「元は叶の修行だがな！！」

「叶は乱と修行だ」

乱……乱なら大丈夫かな？　いや、でも修行になると、厳しくなるよな……乱。

「ヘタに甘えさせると怪我させるぞ」

うっ……た、確かに……。

「親バカは卒業しろ」

「断る！」

これだけは断じて譲らん！！

「……はぁ、ジェイル……どうにかならんのか？」

「私的に貴史は、親バカ分が少な過ぎる気がするのだが？」

「そうだぞ。　貴史こそ子供を大切にしろ！　なんでもかんでも、妻に任せるな！！」

「うっ……（なんで俺が、責められないといけないんだ？　いや、自業自得か……しかし、ジェイルに話を振ったのは間違いだったか）」

「そうですね。　お子さんは、大切にしないといけませんよ」

まさかのクロナ参戦！！　これで勝つる！！　くっくっくっ……貴史のあの驚いてる顔……見物だな。　まぁ、クロナが加勢してくれたのは、俺も驚いたが……。

▲　要　視点　▲

▼　乱　視点　▼

なんだか子供のオレが、置いてきぼりな気が……これ、オレと親父の事だよな？　さらに言えば、オレと亜衣と親父……。

しかも、親父はなんか真っ白になって落ち込んでるし……というか、初めて見るなぁ。　こんな親父。

最初、夢で見たのは胡散臭い人だった……。　でも、新年会や叶と遊んだ日は偉そうで、調子に乗りやすい。　言わば、子供。　でも、何処か頼りがいがあったんだよなぁ。　初めて親らしい事もしてくれたし……。

そういえば、父親と結婚するって女の子なら一度は夢見るって言うけど……オレは無いなぁ。　まぁ、母さんやユリ姉、鈴兄にウーノ姉さん達に、育ててもらったからかもだけど……。

「だいたいだな、お前は責任と言うものを…」

「女の子なんですから、ちゃんと見てあげないと…」

「もっと甘えさせてやってくれ…」

「……」

と、考え事をしていたら、親父のライフがマイナスに！！　オーバーキルもいいとこだ！！

……しゃあねぇか。　親父の味方するか。

――ミシッ

「「…「「！！」」…」」

「オレを置いて話を進めるなよ。　オレは、今！　親父と！　住んでるんだ！！　オレはそれで満足してる。　（亜衣はどうだろう？　まぁ、頻繁に行ってるみたいだから、満足とまでは行かねぇけど不満はないはず）　これ以上言うなら、オレが相手だぜ……要さん」

「俺かよ！！」

「……」

殺気を放ちながら、自分自身の意志を伝える。　親父にも言ったつもりが、聞いてねぇ……。　まだ真っ白だよ。　案外、精神面が弱いのかもしれないな。

▲乱　視点▲

修行だよ！　全員集合！？　5（前書き）

やっとひななんが、要達の居るところへ合流。　と、思ったら貴史が、ががががが

修行だよ！　全員集合！？　5

▼　ジェイル　視点▼

やぁ、諸君。　私は神崎　ジェイルだ。
今、物凄く面白い状態になってる。　主に貴史がｗｗ

「親父……」

「ん？」

「そろそろ修行」

「怪我するからダメ」

「オレは叶に修行をさせる方だよなぁ！？」

「万が一……億が一……世の中絶対はないから」

「だからって……」

貴史が親バカになってブフゥｗｗｗｗ
ダメだ。　耐えられんｗｗｗｗ

ん？　なんで貴史がああなったか？　先に言っておくが、私達は何もしてないぞ。　立ち直った貴史が、急に乱を抱きしめてああなったのだ。　要も叶も驚いてまだ固まってるよｗｗ

「親父……そろそろ…」

「ああ……買い物に行くか」

「違う！　修行だろ！！」

――ズサササササササ……

貴史のボケに、乱がツッコミを入れて、要が滑ったという図が起きた。　なかなか、素晴らしいタイミングで滑るとは流石だ！

「うるせぇぞ？　要。　乱と会話が出来ねぇよ」

「お前、変わりすぎだろ！！」

「何処がよ？　変わってねぇよ」

いやいやいや、十分変わってるよ。　というか、君のその変わってないという自信は何処から来るんだい？　と、聞きたいが止めよう。　きっと、娘を想う心からだ！　とか言いそうだし。

というか、カスミは平気なのか？　さっきから大人しい……というか、居ない？

「貴史、買い物行くなら私も良いか？」

「おう。　良いぞ」

と、思ったら貴史と普通に会話してる。　娘相手に嫉妬はしないとか？　しかし、この変化に動じないとは、逞しいなぁ。

「あの……貴史様？」

「ん？」

カスミが貴史の方へ行った事により、フェイトが貴史に問い掛ける。　まぁ、確かに師事を受ける相手が、居なくなるのは困る。

「ん…」

フェイトの問いに貴史は私に指差し、短く答えたって私なのかい！？

「……よろしく」

「いや、よろしくって」

そもそも、私は受けるとは言って……

「貴史！　って居ない！？」

「もう出口に向かってますよ？」

出入口となる魔法陣がある場所を見ると、フェイトの言う通り貴史が居た。

これはもしかして……親バカを超えてる？　絶対、乱には……いや、娘には戦闘させる気ないと見た！！

……しかし、この取り残されたカオスはどうするか。

▲ジェイル　視点▲

▼貴史　視点▼

ジェイル、要、クロナの言葉にようやく目が覚めた。　ああ、そうだよな……乱がでかくなっても、精神はまだまだ子供だ。　母親の温もりしか知らなくて、父親がいかに頼りがいのある存在なんて知らない。

それに、自分から甘えるという事すら……ああ、俺が馬鹿だったよ。　もう少し子供に優しくしよう。

となると、やっぱり戦闘とか物騒なもんから遠ざけるか。　今度、あっちに行った時も、亜衣に物騒事から遠ざけよう。　怪我したら大事だしな。

と、考えてたんだがなぁ……。　なんだって、そういう日に厄介事が起きるかねぇ。

「おう、コラ雲丹。　聞いてんのか？」

「なんか言えや。　雲丹」

一体全体どうなってるか、読者の皆様にわかりやすく説明しよう。
乱達と別荘に出て、町を歩いてると不良の肩にぶつかった。　そして絡まれた。　説明終わり。

「シカトしてんじゃねぇぞ！　雲丹坊主！！」

「一応聞くが、どうやったら許してくれる」

「後ろの女を置いて去ったら許す」

後ろの女……カスミに乱が居るな…。　フッ……目当てはカスミと乱か……。

「ほら、帰りやがれ」

「死ね」

――ズガァアンッ！！

俺に近付いた不良を殴り飛ばすと、今まで騒いでた不良達が静かになった。　そして、全員が吹き飛んだ仲間の方を見て、次に俺の方を見る。
そして……

「ま、麻帆良の雲丹魔人」

誰かがそんな事を呟いた。　って、ちょっと待て…なんだよ雲丹

魔人って？

「え？　こいつが？」

え？　こいつが？　って有名なのか？　その二つ名は？

「こいつが、麻帆良の悪夢…」

「あのデル・カイザー…」

それ以降も不良達は、（不良達の中の）俺の二つ名を口にする。
つか、デル・カイザーって……どうやって広まったんだよ？

と、これは修行の話だったな。
此処は最強で無敵な俺様に任せて、読者諸君は修行風景でも見てくれ。　ちなみに、このあとの事は、番外にも次話にも書かねぇからシクヨロ！！

▲　貴史　視点▲

▼　フェイト　視点▼

今、僕は造物主（ジェイル）から、魔法を教わってる。　本来は土、石、砂と大地に特化してる僕だったけど、造物主（ジェイル）のお陰で全ての属性を使えるようになった。

「わかってると思うが、君は『全属性特化型』だ。　故に魔法を使う時は気をつけてくれよ？」

「はい」

「では、今日は私の出身の魔法を教える。　私の出身の魔法は、ミッド式とベルカ式に大きく分けて二つある。　今日はミッド式にしよう。　昨日、私が渡したデバイスを起動して」

「了解」

袖を少しずらすと、腕輪になって待機してる僕のデバイスが顔を出す。

「よろしく頼むね」

『こちらこそ……（テルティウム）』

「クライシス（傀儡の主）、Ｓｅｔｕｐ」

『……Ｓｔａｎｄｂｙｒｅｄｈｉ　Ｓｅｔｕｐ』

僕のあとに少し間を空け、クライシスは僕のバリアジャケットと、創造主の掟（コード・オブ・ザ・ライフメイカー）に模した杖を精製する。

「ふむ……学園の下にあったアレの魂を入れたから、なんらかのアクションはあると予想はしたが、何も起きてないね。　しかし、最初見つけた時は驚いたよ。　カスミが相手だったから、てっきり消滅してると思ってたけどね」

僕の姿を見て、造物主（ジェイル）は言う。　確かに発見した時は、驚いたよ。でも、彼は不滅の存在だ。　いくら魔導最強の漆黒でも、彼を消

滅させるのは無理な気がするけど……。

「その考えは間違ってる。　現にアレの魂は、擦り減っていただろう？　復活の時を待ってると、地球は滅んでるよ」

「それもそうだね」

「どうだい？　造物主（ライフメイカー）よ。　人形師が人形に使われるのは？」

『……私の名前はクライシス。　愚かな傀儡の主、それ以上でもそれ以下でもありません』

造物主（ジェイル）の問いに、淡々と答えるクライシス。　僕も主と慕っていた人を使うのは心苦しいけど、今は貴史様の人形……ちゃんと割り切らないとね。

「ところで、貴史様は知ってるの？」

「彼は汚い事を知らなくても良い。　と、言いたいが知ってるだろうね。　私を知り尽くしてるし、原作も知ってるしね」

流石は貴史様。

さて、此処まで引き延ばしてたけど、バリアジャケットがどんな風なのか、教えようと思う。　簡単に言えば、漆黒のマントとフードを被った姿。　さらに簡単に言えば、造物主（ライフメイカー）の姿だ。

「では、ミッド式を教える」

「はい」

こうして、僕の修行が始まった。

▲フェイト　視点▲

▼雛　視点▼

あのあと、修行場所を変えようと言う事で、カスミさんと呼ばれるもう一人の転生者が持つ、ダイオラマ魔法球に行くことになりました。

「でも、本当に入って良いんですか？　勝手に……」

「ええんよ。　部屋を荒らさんとけば」

いやぁ……親しき仲にも礼儀ありって、言うじゃないですか……。

ふむ……

「あまり気にしない方がいいかと、薫お嬢様とカスミさんに取っては、常識みたいなモノらしいので」

「そうなんですか……」

そして何事もなく、ダイオラマ魔法球の中にやってきました。
私達の他に何人か居ますね～。
京都に居たアーウェルンクスに似た女性が二人、可愛らしい女の子に、遠目から見ただけでも、心臓を鷲掴みされるような感覚を覚える人やナニカを内包した男の人、こちらの世界の茶々丸に、白衣を着た女性、そしてっ！！　なんで……なんで……

「なんで……」

「？　ひななん？」

なんで貴方は……

「勝負しようぜ？」

「今、修行中」

「こら、ナギ……修行の邪魔をするでない！！　迷惑じゃろ！？」

貴方達はライフメーカーと、和気あいあい談笑してるんですか！！

「ああ、あんま気にせん方がええよ？　この世界では、それなりの人がハッピーやから」

私が苦悩してると、薫さんがこの世界について話してくれた。
なんでも、この世界はカスミさんと薫さんの他に、もう一人転生者が居るらしい。　そして、そのもう一人の転生者が築き上げた絆が、化学反応を起こしてこうなったとか……うん、まったく理解出来ません。

「それよりも修行を始めるぞ。　此処なら、おもいっきり暴れても良いだろう」

「は～い」

「蛮がいない」

「せやから、蛮やなく貴史やって……」

さてさて、私も修行の準備をしませんと。

エリスさんと薫さんの話を無視して、私は鈴虫を出す。

「久々に行きますか」

▲　雛　視点▲

▼　茶々丸　視点▼

だんだん人が増えて来ましたね。

「もらった！」

「てい！」

あら、大変。　私がよそ見していたらセクストゥム様、セプテウム様が交互に攻撃を放ちます。　まぁ、攻撃と言っても私は接近戦

担当。　彼女達が攻撃してくるのも、体術ですが……。

「甘いです」

腕を鞭のように高速で動かし、セクストゥム様の腕を、セプテウム様の足を絡めてすぐに宙へ投げる。

「なっ」

「くっ」

此処で終わらないのが、マスターの従者。

――ブワッ！　スガガガガガ！！

鞭のように動かす腕で、二人をお手玉のように地面に落とさず回転させる。

――ズバババババババ！！

さらに速く、超高速（はやく）、超光速（ハヤク）、超神速（ハヤク）！！

「コード・神雷鞭（じんらいべん）」

そして……落とす！

――ズドンッ！！

「ぐ……」

「う、ご……け、、ない」

「今日は、これをずっと受けていただきます。　速く抜け出さないと、壊れますよ」

まぁ、口ではこう言いましたが、勝手に壊すとお仕置きされそうですね。　お仕置き……マスターのお仕置きなら……

にしても、アサシン様から力を底上げされたはずなのに弱いですね。

「簡単に貴女レベルまで上げさせると、つまらないじゃないですか」

私が感じた疑問を、アサシン様が答えてくれた。　流石はクロナ様の伝説。　私の背後を取るとは……。

「皆さんが強くなっていく……実に面白そうだ」

「アサシン様は、修行に加勢しないのですか？」

「今回は主から、令呪で禁じられてるので」

令呪……サーヴァントに三回だけ、強制的に従わせるモノ。　アサシン様なら、簡単に跳ね退けそうですが……

「それでは私はこれで」

そう言ってアサシン様は、建物の中へと入って行った。　……

……さて、私は修行の続きと行きましょう。

▲茶々丸　視点▲

修行だよ！　全員集合！？　5（後書き）

今回の裏設定。

貴史は以前にも、ああいう親バカに似た状態がありました。　それは薫すら知らない事実。　知ってるのは、カスミと剣崎家の人だけ！！

だからカスミは、あんなに冷静だったのだ！

修行だよ！　全員集合！？　6（前書き）

なんだこれ？
一グループが長いんですけど……。
もう一グループあるのに……。

すみません。　雨季様、彼岸花様、もう少しキャラを借ります。
多分、次で第一グループ終わります。　きっと……多分……
……メイビー？

修行だよ！　全員集合！？　6

▼　乱　視点▼

どうしよう……。

「他になんか欲しいのあるか？」

「いや、無いから」

「そうか……」

本当にどうしよう。

……あ、どうも乱だ。　親父が必要以上に不良をボコッて、逃げるようにデパートに入って行ったんだけど……親父が急に衣類を置いてある店に行き、オレに合う服を持ってきてはオレに聞いてくるし、要らないと言っても心を読むように買ってくるし……もしかして、オレは顔に出やすいのか？

さらに困ったのが、恋人の話になった時だな。　本当に勘弁して欲しい。　なんせ、オレと付き合う奴の最低条件は……親父を『殺せれる奴』だけ。

別に恋愛云々に興味ねぇけど、親父を『殺せる奴』なんざ居ないだろ！！　言っとくけど親父の言う殺せる奴は、完全に殺す事だから……。　つか、そんな奴居ねぇ～し。

「諦めろ…。　貴史がああなったら目を覚まさせるか、受け入れるしかないぞ」

さっきからオレ達に付き合ってたカスミさんが、オレを諭すように話し掛けて来た。

「体験した事が？」

「私じゃないがな……猫をペットにした時だ。　貴史はかなり甘えさせてな……最初はペットの猫も嬉しそうに懐いてたんだが……度が過ぎたんだろうな。　その猫は、貴史から離れて行ったよ。　そこから猫と貴史の鬼ごっこが始まった。　貴史は猫を愛する為に、猫は貴史から逃げる為に……どんどんストレスを貯めていってたなぁ」

「……その猫はどうなったの？」

「来て一ヶ月で死んだ」

死!?　つか、一ヶ月？　え？　嘘？

「猫の死因を医者から聞いた貴史は、可愛がるなら少しだけにしようという結論に、達したのさ」

「何と言うか……極端だね」

「不器用なだけさ」

それでも極端過ぎ……。

「いつもの貴史に戻すなら、乱自身が目を覚まさせる事だ。　間違っても拒絶はするな。　そうだなぁ……効果的なのは黙ってビンタ

一発。　そして、「お前はお前らしくしろ！」と言えば大丈夫だろうよ」

元に戻せる方法があるんなら、カスミさんが言えば良いのに……。

とにかく、カスミさんが言った事を試そ。

▲　乱　視点　▲

▼　要　視点　▼

さて、また始まりました地獄とも思える修行。　俺は良いんだが、叶がなぁ。

さらに、いつのまにか薫や見慣れない奴もちらほら……秋代もチャレンジャーだなぁ。

「ほらほら、ちゃんと対応して」

「ととっ」

「叶さん。　その回避は相手が、貴女より上の実力者なら意味ありませんので♪」

「きゃ！」

次の修行は、叶と俺ＶＳクロナの模擬戦だ。　前の修行よか楽だが、やはり容赦してくれなかった。

「ほら、真剣に避けないと血まみれになりますよ？　赤い奔流（ブラッディ・ストーム）」

クロナから放たれる大量のメスを避けたり、シールドを張って防いだりする。　叶も俺と同じように動くが、完全に避けれずに所々傷だらけになってる。

「赤い雨（ブラッディ・レイン）」

「チッ…」

さらに追い撃ちを掛けるように、クロナは無数のメスを上空へ投げて退路を断って来る。

「パパ！」

「一緒に防ぐぞ！」

即座に叶と合流して、シールドを上に展開する。

「それでは、赤い奔流（ブラッディ・ストーム）は防げませんよ？」

「なら、フィールドを張るまでだ！！」

防御魔法にはシールド、バリア、フィールドの魔法がある。　シールドやバリアは前方を張るが、フィールドは全包囲を守る事が可能だ。　さらに俺の防御魔法は、それなりの硬度だからな……。

ーース…

「ん？」

「え？」

これで凌げるはずと思い、次の攻撃に備えてると、メスはなんの抵抗もなく、フィールドの中へ入って来た。

「甘いですよ♪」

「ちょ！？」

――ズガァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンッ！！

▲要　視点▲

▼雛　視点▼

いやはや、皆さん強いですね～。

夏彦さんはもうなんか、総合的に……

「神鳴流奥義！　斬岩剣！！」

「円ァアアアア！！」

「弐の太刀！！」

「ちょ！？　フェイント禁止～！」

――ズガァアアンッ！！

薫さんは火を中心とした術と、神鳴流を使いこなしてますね。
でも、いちいち宙に字を書いてると、隙が出来ますよ？

「フェイント禁止だぁ？　アメェ事言ってんじゃねぇよ。　タコ」

はれ？　夏、彦さん？　夏彦さんの口が急に悪く……。　な、何故？

「妖刀千刃……行きますえ？　椿はん」

月詠さんは周囲に千本ものの妖刀を出して、夏彦さん（さっき椿はんって言ってましたが……）に迫る。

「千刃一瞬…ざ～んて～つせ～ん」

月詠さんが村正を振ると、周りに浮いてる妖刀も村正のように動く。　そして、放たれる黒い斬撃は……

「クス……甘いわよ。　神鳴流奥義、百烈桜華断」

――ガキンッ！　ガガガガガガガガガガガガッ！！

ほへー、あの千の斬鉄閃を槍一本で防ぐなんて……。

「斬空閃・弐の太刀や！！」

あ、薫さんが後ろから……

「戯け！　武人たるもの正々堂々と、真っ正面で戦え！！」

え？　あれ？　夏彦さん？　というか、さっきから口調が一定で無いんですが……というか、貴方も後ろから斬りに行ってますよ～！！

「くっ！！」

「真・斬岩剣！！」

――ズガァアアアアアアアアアアアアアアアンッ！！

「わっきゃぁあああああああん」

「時貞師匠！　勝負です！！　斬岩」

――ガスッ！

「ぐっ」

「実戦形式つったろ？　わざわざ、敵のリクエストに答えるかよ。バカヤロウ」

今度は刹那さんが攻撃に入ろうとした瞬間、また夏彦さんの口調が変わったり、刹那さんのお腹を蹴ったり……もう何がなんだか……。

「ふふっ…混乱してるみたいね」

「エリスさん」

私が頭を抱えて混乱してると、エリスさんが話し掛けて来た。

「よろしければ、夏彦について教えましょうか？」

「よろしくお願いします」

正直、あの現象は知らない者には混乱の種ですから……。

「夏彦には、夏彦を合わせて合計7人の魂があるの。　そして、その魂が表に出てる時は、体格や性別、性格が変わるの」

「性格はともかく性別も？」

「ええ。　そうね……夏彦を見てて、私が説明するから」

「はい」

そう言って、視線を元に戻すと……

「ヒャッハハー！！　死にやがれぇ！！」

「ちょっ！？　そんな避け方無茶すぎやろ！！」

く、口が悪い所じゃない！！

「彼は弥勒　右狂で、曲芸に関しては素晴らしい技術を持つわ。少々性格に難ありだけど……得物は青龍刀よ」

少々？

「三人共、まだまだ甘いよ」

「う、うわっ！」

……眼鏡掛けてる。　いつの間に……。

「彼は弥勒　雪彦。　チャクラムと呼ばれる円月剣の使い手よ。七人の中で夏彦と互角の実力者だけど、性格が優しすぎて実力の半分も出せないわ」

珍しい得物ですね。

「今度は、遠距離攻撃に警戒しすぎだ。　懐がアメェよ。　バカヤロウ共が」

「あぁん。　変わりすぎやわ～」

また、口が……

「彼は弥勒　椿。　口が多少悪いけど、悪い人じゃないのよ？　得物は小太刀やナイフを使うわ。　あと、体術も凄いのよ」

接近戦スタイルと……

「防御が甘い！　目だけに頼るな」

「ぬわぁ～！！」

白髪に……そして、迅い。

「彼は弥勒　緋影。　生まれた時から目が見えないけど、その他の

部分が異常に発達して、気配察知がするどいわ。　得物は刀で居合の達人よ」

確かにあの抜刀速度は、目を見張るものがありますね。

「クス……ほらほら次行くわよ」

「なっ！」

飛んでいた刹那さんに、攻撃を当てた！！

「彼女は弥勒　奇羅々。　七人の中で、唯一の女性人格よ。　得物は槍で、遠距離攻撃を得意としてるわ」

なるほど……遠距離攻撃。

「防いでも、ダメージを受けるなら避けろ！！」

「あふぅん♪」

大振り！　しかも速い！！　そして、月詠さん、私はツッコミませんよ。

「彼は弥勒　時貞。　得物は刀。　時貞の剛剣は、あらゆる物を粉砕するわ」

なるほど、剛剣ですか……確かに凄まじい力です。

「結果発表だ。　馬鹿弟子共」

「「「！！」」」

変わった！

「もうわかったみたいね」

「はい。　彼が最後……あの個性豊かな人格の纏め役……」

「貴様ら全員……」

「全力やぁぁあああああ！！」

「「神鳴流心刃合錬……」」

「しんめ～りゅ～し～んとご～れ～ん」

「弥勒　夏彦。　その実力は雪彦さんを除いて圧倒的……」

「「真・雷光剣！！」」

「真・らいこ～け～ん！！」

「正解♪」

「遅いわ！　戯け！！！　合技（ごうぎ）！　真・雷光斬空閃！！」

――ズガァアアアアアアアアアアアアアアンッ！！

夏彦さんの真・雷光剣と斬空閃が合わさった技が、三人の真・雷光剣を飲み込み、三人を吹き飛ばした。

「……大丈夫なんですか？」

「はい♪」

私の問いに、笑顔で答えるエリスさん。　まぁ、大丈夫ならいいでしょう。

「一から修行し直し！」

って、厳しい！？　三人共頑張ってたじゃないですか！！　一からってそれはいくらなんでも……

「特に薫……お前はまた使わなかったな？」

？　なんの話をしてるんでしょう？

「せやけど、アレ危険なんよ」

「危険だからこそ、修行して手加減出来るようにすんだろうが、バカヤロウが」

あ、椿さんに変わった。

「それに、俺達はお前の師匠だ。　止まらなくなったら、俺達が必ず止める」

「う～」

ふむ。　なんの話かさっぱりですね。　エリスさんに、聞いてみ

ましょうか。　そう思い、エリスさんを見ると察してくれたのか、ちゃんと教えてくれた。

なんでも、薫さんには雷帝化と虚化（ホロウ）と言うモノがあるらしく、それを一つ一つなら使えるけど、二つ同時に使うと抑えが効かないらしいとの事……。

なるほど、なるほど……。　とりあえず、潜在能力が大きいと言う事は理解しました。　大変ですね～。

▲　雛　視点▲

修行だよ！　全員集合！？　7（前書き）

第一グループ終了！
次は第二グループかな……。

修行だよ！　全員集合！？　7

▼　薫　視点▼

師匠との模擬戦を終えて、別荘内で三日経った。

三日……フッこの時間全て、修行に費やされたんやで？　考えられる？　まぁ……過ぎた事やし、これはどうでもええ。　結果から言えば、雷帝化の長時間の制御が可能になったえ。

そんで、今は知らん人達で自己紹介が終わって楽しく、ご飯を食べとる。　にしても、貴史遅いなぁ。　皆の話やと、買い物に行ったらしいんやけど……。

「むぐむぐ…美味しいですね。　この蟹（かに）」

「あ、本当ですね。　口に入れた途端とろけて……何？　この食材……」

「普通の蟹を使ってる。　調理方法は企業秘密だ！」

せっちゃんがとろけきった顔を……かわええなぁ……じゅるり。

――ガツンッ！

「ブッ！　痛いやんけど、緋影師匠」

「邪な（よこしま）感情を感じた。　自重しろ」

「はーい」

チッ…緋影師匠がおると、せっちゃんを愛でれんくなるから嫌やねん。　弥勒はウチの天敵やな。

「もう一撃要るか？」

「ハハハハ……マサカ……」

はぁ……にしても、貴史は何処に行ったんやろ？　それにカスミも……ハッ！　まさか、二人でドキドキワクワクのデートに！？

「あかん！　それはダメや！！」

「「…「「……」」…」」

……うぅ、皆の視線が冷たい。

「なんだ。　見ない内に人が増えたな」

「あ、カスミ……と貴史と乱ちゃん？」

カスミの声が聞こえ、そちらを向くと大量の紙袋を持った貴史と、乱ちゃん、カスミがおった。

――ジャキン、ジャキン、ジャキン、ジャキン…カッシャンッ！

「なぁ、薫から聞こえた音はなんだ？」

「ふむ……カスミ＋貴史＋乱＋紙袋＝親子で買い物の図……と、こ

んな所か」

「なんつーかすげぇ……」

要とジェイルが、なんか言うとるけど無視や！　このままやと麻帆良学園で、外堀を埋められてまう。　なんとかして、第一妻候補の座が……

「その座は私で埋まってる……って、聞いてないね」

由々しき事態や。

▲　薫　視点▲

▼　貴史　視点▼

さて、買い物から戻って来た俺達。
そのまま休息を挟まずに、今日のゲスト達と最後の模擬戦をする事にした。

「まずはどいつからだ？」

「叶からだ。　というか、大丈夫か？」

「大丈夫かどうかは、要との模擬戦で教えてやる」

叶が距離を開けて、俺と向かい合う。

さて、クロナとの戦いで、どれほど強くなったかな。　ちなみに、この模擬戦の審判はクロナだ。

「それでは、開始してください！」

「ハッ」

クロナの合図と共に、一瞬で間合いをつめて来る。　手と足はいつの間にか、ＯＲＴ化していた。　そしてその手を振るが、俺は叶の力を受け流すようにして、攻撃を逸らす。

「くっ」

「まぁまぁ、速くなったな。　それに先手必勝と言わんばかりの気迫。　合格！」

一手だけで、叶の上がった技量を見抜いて褒める。　すると、叶はえへへと笑顔になる。　うむ、やはり子供には笑顔だな。

「ほい、次～」

いまだ掴んでる叶の腕を軽く捻って、投げ飛ばす。

「ぴー――――――――――――」

「叶ぇぇえええ！！」

「おら、次は要だろ？　叶なら乱が助けに行く」

「うっしゃぁあああ！　叶の仇……覚悟しろ！！」

さて、次はどうするかなぁ……。

「来い」

「行くぜ！！」

瞬動でこちらへ、向かって来る要。

フッ……キングクリムゾン。　一時間経過。

――パシンッ！！

星の枷を外して、ＯＲＴを武装した要の一撃を片手で止めると、要は驚いたような顔をする。

「化け物かよ！」

「違う。　悪魔だ」

――ズガァァアアアアアアアンッ！！

無詠唱で封印を解いて、悪魔の腕で要を戦闘不能にする。

「いやいや、戦い方が巧くなったな」

アレなら多少上の存在でも、見切り勝つ事が出来るな。

「次は近衛　雛だな」

「私はどちらかと言うと……教える側だったんですが」

「コラボなら戦わな損だぜ。　教えてもらいたいね。　格の違い（さ）ってやつをよ」

――ビキッ

「ええ……教えてあげましょう。　格の違い（れいぎ）というのを」

アレ？　なんか地雷踏んだ？

「（馬鹿めが……）」

「（デリカシーが無いね。　まぁ、私もだが）」

「（クス…）」

「（親父……）」

「（アホ…）」

なんだか外野から、馬鹿にされた視線がちらほら……なんでだ？

「それでは……始め」

――り～ん♪

「！！」

クロナが、腕を振り下ろすと同時に、何かが鳴く音が聞こえた。

――ズバァアンッ!!

「ぐっ!?」

そのあとに、左腕が弾ける。

なんだ？　何が起きやがった？

「考え事ばかりしては、策一つ練れませんよ？」

「チッ！」

思考の海から意識を戻すと、雛は跳んで刀を構えていた。

「神鳴流秘剣、斬空閃・弐の太刀」

あ～、これはヤバいか？

――ザンッ!!　ギュルルッ!!

「なっ!?」

斬空閃で受けた傷と最初に受けた傷が、一気に再生されて怯む雛。

俺にしてみれば、いつもの事だから無問題（モーマンタイ）だ。　伊達にアサシンと戦ってないぜ。

「赤い暴風（ブラッディ・ハリケーン）」

手術メスを大量に出して、雛に向けて放つが、雛は一瞬顔を歪ま

せるもすぐに次の行動に移る。

――り～ん♪

避けるなら今か？　いや……そろそろ上に行くか。

――ズバババババァアンッ

「なっ！？」

「足らねぇな……全然」

攻撃が当たる瞬間、一瞬で雛の後ろへ辿り着く。

「どうやって……跳んだんですか？」

「どうやって……だろうな？」

そう、まだ雛は空に停滞して居る。普通なら、俺が此処に居る事は出来ないだろう。普通ならな……。

「私の目はどうなったんでしょうか。貴方が魔力も無しに、浮いてるように見えるんですが……」

「想像……出来ねぇからな。俺が天を歩けない、佇む事が出来ない姿が……」

「は？」

「自身が想像出来ない事は起きない。そういう力を持ってんだよ。

つまり、自身の死が想像出来なければ、例え心臓を刺されても、存在を消されても、能力の概念を消されても、何も起きない」

「どうやって倒せと？」

「考えな……」

――ズガン、バキン、ガキン、ズガンッ！！

悪魔の腕で攻撃、攻撃、攻撃、攻撃……とりあえず、どういう風に攻撃してるかと言うと、雛レベルで対応出来るような速度で右、左、右、左、左、右、左とこんな感じ？　それを雛は刀で弾きながら下へ落下してるという感じ……。

「確かに死というイメージは出来ないが、倒されるというイメージは出来るんだぜ」

「ギリギリになって言うなんて……意地悪ですね」

「よく言われる」

見せてやる。　悪魔のその先……果てをな！！

「受けてみろ。　蛇咬のバリエーション（スネークバイト）」

「え？　何この嫌なシーン」

――ふわ…

俺の視界に、天使のような純白な羽根が見える。

へっ…これが今の俺の全力だ。

蛇の幻（と言っても、頭が映し出されない）が俺を中心に現れ、天に掲げた悪魔の右腕は人の腕へと戻る。

ーーー行くぜ。

「ッ！！」

ーーー蛇（スネーク）……

「（全力、隠陽結界！！）」

ーーー殺（ジェノサイド）！！

ーーーズガァァアアアアアアアンッ！！！！

俺は隕石の如く、雛に向かって落下するも、雛に掠（かす）る事もなく雛の隣の地面を破壊した。

「「……」」

沈黙……そりゃあそうだ。　決め技として出した技が、決まらなかったんだ。　これほど締まらないものはない。

「えっと……」

「……修行終了。　みんな、よく頑張った」

――ズルッ…

俺の言葉に雛、要、叶がコケる。

コケるのは構わないけど、そろそろ時間も無いので、そのあとのツッコミに付き合う気はない。　故に……

「またな要、叶」

「ちょっと待てぇえええ!!」

「無理矢理すぎるよ～」

――シュンッ！

「ほな、また遊びに来てな？」

「ええ……また会いましょう。　薫さん、刹那さん、月詠さん、夏彦さん、エリスさん、……その他の皆さん」

――シュンッ！

こうして、ぐだぐだな状態で幕を閉じた。

さて、次の修行も頑張るとしよう。

▲　貴史　視点▲

修行だよ！　全員集合！？　8（前書き）

フッ……修行らしい修行は実はしてないんだぜ？

あ、強さ表書き終わったので、強さ表に入れて欲しいキャラの募集終了です。
え？　いつ募集したかって？　活動報告に……。
なんで終了したかって？　もう混乱するので……。
投稿はいつ？　修行が終わって、学園祭が始まる前に……。

さらに、今回は畏無様の【魔法少女リリカルなのは～偽リノ騎士～】の安藤　響介とそのデバイス、スカイとのコラボです

修行だよ！　全員集合！？　8

▼　フェイト　視点▼

貴史様の友達が帰って、外の時間で一日経った。

あの長い修行が、たった一日でやり終えるのは凄い。　こうして見ると、ダイオラマ魔法球は凄いモノかもしれない。　使用者の寿命を考えなければ……。

そうそう、今何をしてるのかと言うと……麻帆良学園女子中等部内を、歩き回っている。　生徒達の視線が鬱陶しいけど、実害がないから無視。　男の僕が、そんなに珍しいのだろうか？

いや、それはないか……貴史様も男だし、サウザウンドマスターの子供も男だ。　じゃあ、どうしてだろう？　まぁいいや。

『マスター、転移反応です。　これは……ミッド式です』

しばらく歩いてると、クライシスが念話で話し掛けてくる。

はて？　造物主（ジェイル）は、この世界にミッド式魔法を使う者は居ないと、聞いてるけど……。　トリッパーと言った人かな？

とりあえず、迎えに行かないとね。　貴史様の客人かもしれないし、トリッパーかもしれないし、低い確率と思うけど、時空管理局かも……。

もしもトリッパーだったら、好き勝手されると困る。　時空管理局だと、いろいろ面倒だ。

「転移反応は何処？」

『世界樹からです』

世界樹か……では、行こう。　客人なら、最上のおもてなしを……。　自己中なトリッパーなら、死を……。　管理局なら、壊滅を……。

一応、貴史様に連絡入れて、世界樹付近へ移動する。

世界樹の前に行くと、男の子が居た。

一人のとこを見ると、時空管理局じゃないと思うけど、警戒しておかないと……。　トリッパーなら尚更ね。

「あ、すいません。　此処は何処ですか？」

……自分達から転移してきておいて、場所がわからないなんて……

「はぁ…」

「（ため息つかれた！？）」

「一応、聞くけど……キミは何者？　答えによって、対応変わるからよろしく」

左手を彼に向けて、いつでも魔法を発動出来るようにする。　当然だよね？

「！！　人に名前を聞く時は、まず自分からって知らないのか？」

「ああ、それは素晴らしい考えだと思うよ。　相手が“一般人”ならね」

「なに！？」

「キミが魔導師ってのは、来る前から知ってる。　転移反応を感じて、来たんだしね」

「……」

だんまりか……口を割らすのは、得意じゃないんだけどなぁ。　生かさないといけないし……

黒耀石で、作りあげた剣を無数に出すと同時に、人払いの結界を展開する。

「！！　魔導師！？」

『いいえ！　違います！　アレは私達とは違うモノです！！』

「そう。　これはキミ達の魔法とは違う。　この世界の魔法だからね。　そして、これが最後だ。　キミは何者？」

『響介……此処は従いましょう』

「スカイ！？」

どうやら、彼のデバイスは優秀みたいだね。　これなら、割らずに済むかな。

『彼は私達が敵であるかが気になってるだけです。　私達が争う気がないなら剣を納めるはずです』

「……わかった。　スカイを信じる」

『ありがとうございます』

話し合いでの解決を望むか。　だったらコレは不要かな。

――パチンッ！　ビキビキビキビキ、ズガァァアアンッ！！

「ッ！！」

指を鳴らして剣を砕くと、響介と呼ばれた人は驚いてこちらを睨む。　……いきなり砕いたのが悪かったのかな？

「ああ、悪いね。　僕らの魔法は魔力に還元する事が出来ないから、放つか破棄するかじゃないと納めれないんだ」

「……そういう事は、事前に言うのが常識だろ？」

「知らないよ」

「あのなぁ！！」

『響介、落ち着いて下さい』

早く、自己紹介して欲しいなぁ。

トリッパーじゃない事は、僕が此処に居て驚かない、名前を知らないって時点でわかってるけど……管理局ってのが残ってるし……。

「……ねぇ」

「なんだよ！」

「早く名乗ってよ」

「誰のせいだー－－－－－！！」

うるさい。　剣を砕いたのは、悪手だったかな。　なかなか、進展しない。　……カフェインが切れたなぁ。　珈琲飲みたい。

「……だ」

ホンキートンクの波児さんの珈琲。　アレは良い。

「……、……？」

素晴らしいモノだよ。　あの味わい深い珈琲を作れるなんて、波児さんの命令なら喜んで引き受けるね。

「……。　……、……？」

勿論、貴史様の人形としての自覚はある。　あ、貴史様も珈琲が上手らしいみたいだけど……いつか飲んでみたいな。

「おい、聞いてるのか？」

「え？　何？　それより、早く名乗ってよ。　いくら気が長い僕でも、限度があるんだし……」

「名乗っただろうが！！」

「え？　嘘」

『本当ですよ』

「！！　誰だ！？」

彼と話してると、痺れを切らしたのかどうかしらないけど、クライシスが念話ではなく、普通に声を出して答えた。　彼も驚いてるし、説明がめんどくさい。

「僕のデバイスのクライシスだよ」

「デバイス！！　なんでお前が！？」

「クライシス……彼は敵かい？」

『おそらくは違うかと』

なら、説明してもいいかな。

「僕は智のアーウェルンクス。　名前は、フェイト。　フェイト・アーウェルンクスだよ。　そして、コレがクライシス」

ポケットから右手を出して袖を捲り、腕輪を見せてクライシスを紹介する。

「俺は安藤　響介で、こっちがスカイだ。　改めてよろしく」

「それじゃ、説明するからついてきてよ」

「（せめて、よろしくと返せよ!!）ああ…」

ん～と、確かカスミさんの所に、居るんだったよね？　学園長は……いいや。　報告しなくても、貴史様には報告してるんだし…。

そして、やって来たカスミさんのダイオラマの魔法球。

『転移……いえ、違いますね』

「あのミニチュアに、本当に入れるとは」

さて、貴史様はと……アレ？　居ない？　とにかく、建物の中に入ろうかな。

――カチャ

「カスミさん？　貴史様？」

「ん？　遅かったなｆ」

「フェイト！！」

「何？」

「いや、お前じゃない」

突然、響介がカスミさんを見て僕の名前を叫ぶ。　僕が返事をすると、僕を呼んだわけではないと言う。　なら……カスミさんの事かな？　カスミさんも溜息ついてるし……。

「私はフェイトではない。　カスミ・ヴェネーラだ」

「何？」

『確かに彼女の魔力からは、フェイトさんの魔力反応は一致しません』

「じゃあ、別人……」

『はい』

スカイと響介は自分達だけわかる話をしてるんだろうけど、カスミさんも僕もだいたい理解してるんだよねぇ。　彼らが話してる意味。　造物主（ジェイル）のお陰で……。

だけど、このままじゃ話が進まない。　話し込みたい気持ちはわかるけどね。

「そろそろ、話を進めていいかい？」

「あ、ああ……すまん」

「「まったくだ（よ）」」

「（この二人ひでぇ！！）」

さて、どう説明しようかな。　カスミさんに、全て任せるってのもありだよね。

▲　フェイト　視点▲

▼　貴史　視点▼

「集まってくれて何よりじゃ。　数分前に侵入者の反応を……」

よう。　今、俺は爺さんに呼ばれて学園長室に居る。　言っておくが、説教されてるとかじゃねぇからな？　現に他の魔法先生が居るし……。

なんで集まったか？　なんでもこの学園に、侵入してきた奴が居たんだと……どう考えても、フェイトが対応しに行った奴だよなぁ。

「では、皆の衆……不審者を見つけ次第、ワシの所まで連れてきてくれい」

「その前に学園長、一つ質問が」

「なんじゃい？」

んだよ？　せっかく解散出来たのに……マフィア面め……。

「今回の侵入者は彼の知人では？」

「「…「……」…」」

グラサンの言葉に、魔法先生全員が俺の所を見る。　はぁ……どっかの胃痛じゃあるまいし、俺様はちゃんと報告してんだろ。　事後で……。　胃痛も報告してんのかね？　まぁ、いいや。

「ああ……知人になる可能性はあるんじゃねぇの？」

「またか……」

おいおい、顔黒……またかってのはなんだ？　可能性の話をしてるだけだろうが、まだ確定じゃねぇよ。　たく、これだから石頭は……

「これだから石頭は……」

「わざわざ口に出すとは、君は僕を怒らせたいみたいだね？」

「そんな言い掛かりだろ。　からかいたいだけだ」
「変わらないだろ！！」
「ハハッ…あばよ～とっつあ～ん」
即座にドアの方へ行き、ドアノブに手を掛けて少し思い留まる。
その間、顔黒がうるさいけど、無視してやったぜ！！
「……んじゃ、また事後報告になる」
「ウム」
言いたい事も終わり、俺は学園長室を出て行った。
「無視するなぁぁあああああっ！！」
聞こえなーい。　聞こえなーい。
んで、やってきたカスミの別荘。　つか、みんな別荘に集まんの好きだね～。
「おら、避けてみやがれ！　千の雷！！」

「スカイ！！」

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！』

――ズガァアアアアアアアアンッ！！

おいおい、何やってんだ？　こいつら……特にナギ……千の雷は対人戦で使うもんじゃねぇぞ。

まぁ、フェイトが間に入ったからいっか。

「戦いの邪魔すんなよ。　フェイト！」

「やれやれ、やっぱりキミはバカだ」

「んだと！！」

「あんな魔法喰らって、彼らが完全に防げるはずないだろう。　どう転んでも蒸発だよ」

「気合いで防げるだろ」

はぁ……それはバグキャラの特権だっつーの。　ん？　チートキャラはどうするか？　んなの、圧倒的な力で捩伏せ敵を沈める。

「普通は無理だ」

「お、貴史」

「貴史様」

「誰？」

俺が近付いてナギに声を掛けると、三人がこちらを向いて様々な反応を示した。

「どうも、俺は南武　貴史。フェイトの主であり、バカのダチでもある」

「俺は安藤　響介です」

『スカイです』

「よろしくな」

「『はい！！』」

「んで、何してたんだ？」

「修行という名のイジメ？」

「あれ？　バトルじゃなかったか？」

「修行ですよ！！」

ほんと……何やってんだ？　こいつら？　とりあえず、どうしてああなっていたのか説明して欲しい。

という訳で、フェイトに聞いてみたところ。

次元漂流者の響介。　カスミが突然、茶々丸の戦闘経験として、

戦わせようと思って実際戦わせたら……。

「勝てました」

「ガトリングとかミサイルとか……仕舞いにはレーザーにビーム…勝てるわけ無いじゃん」

それから、カスミはせめて茶々丸に、人にモノを教えるという経験を積ませようとして、茶々丸が出した修行法は……

「ナギ様と戦闘すれば強くなります！　……（多分）」

「んで、俺が見たアレに至ると」

「はい」

「カスミは？」

「オナ」

「何、どうどうと恥ずかしい事を言ってる！　このボケロボー！！」

――ガツンッ！

「ありがとうございます」

……よし、何が起きたか説明しよう。

茶々丸が響介、フェイト、ナギ、俺が居る前で、カスミにとってもっとも恥ずべき事を言おうとした瞬間、カスミが窓から目覚まし

時計を投げつけ、茶々丸の頭に直撃。　そして、茶々丸はカスミに対して、何故か感謝の言葉を言った。　こんな感じか？

ちなみに、響介やナギは茶々丸が何を言っていたのか、わからずに頭を捻ってる。

俺？　俺はもちろんわかってる。　オカズはなんだろう？

「（……貴史様だよ。　って言ったら、無敵設定無視して消されそうだな）」

とりあえず、響介に修行をつけるか。　そのあとは、少年の修行を見に行くか……。

▲　貴史　視点▲

修行だよ！　全員集合！？　9（前書き）

引き続き、畏無様の【魔法少女リリカルなのは～偽リノ騎士～】の安藤　響介とそのデバイス、スカイとのコラボです。

最初のグループとは違う短さ！！

二話で終わるって……。

修行だよ！　全員集合！？　9

▼　貴史　視点▼

さぁて、響介の修行はどうするかな。
候補としては、フェイトかジェイルかな。　茶々丸はアレだし。

「よし、フェイト！　君に決めた！！」

「僕かい？　まぁ、いいけど……」

「ただし、ミッドのみだ」

「了解」

こっちの世界の魔法との、戦闘経験を積んでも意味ないしな。
それに、他の魔導を修めてるカスミ、セクストゥム、セプテゥム、ジェイルは手加減が出来んしな！！　唯一、手加減出来てミッド式の魔法を使えるのはフェイトのみ！！

「それじゃあ、やろうか」

「ああ！」

「「クライシス（スカイ）、Ｓｅｔｕｐ」」

『『Ｓｔａｎｄｂｙｒｅｄｈｉ　Ｓｅｔｕｐ』』

二つのデバイスは、フェイトと響介を光で包み込んだ。

男の裸を直視したくねぇなぁ……。　でも監督役として、修行を見ないってのは……。

「茶々丸～、セットアップしてよ」

「寝言は寝て言って下さい。　マスターの命令なら（マスターを脱がして、私も）脱ぎますが！！」

素晴らしい忠誠心だぜ。　カスミが羨ましい。　……と、どうやら無事にセットアップ出来たみたいだな。

「そんじゃ、模擬戦を開始してくれ。　そのあとに、悪いとこを指摘するから」

「了解」

「わかった」

さて、どう戦うのかね。

▲　貴史　視点▲

▼　フェイト　視点▼

相手が使う魔法はミッド、ならば中距離と遠距離の魔法が主流。

上位魔導師ならそれなりに、体術も修めてるはず……。　見た所、

上位魔導師には見えないけど……油断せずに、相手を上位魔導師として戦おう。

「クライシス、常にシールドを張れる状態で、まずは牽制を」

『了解です。　マスター』

僕の周囲に、四つの小さな火球が現れる。

『フレイムショット、ファイアシューター』

「ＧＯ！」

四つの内、二つはそれなりの速度で、もう二つは先の二つと比べ遅いが、響介の所へ向かう。

「スカイ！」

『Ｒａｙｓｐｅａｒ！！』

どうやら、響介は同等の魔法で相殺するみたいだね。　でも、あの四つが同じ魔法だと思わない事だね。　さて、動くか……。

二つの火球と光の槍がぶつかった後に、響介はまた二つの光の槍を放ち、後の火球を相殺しようとするが、二つの火球は光の槍を避けるように動いて、再び響介へと向かう。

「誘導弾か！」

――ボンッ、ボンッ

響介はシールドを寸前で展開し、ファイアシューターを防ぐが、その間僕は……

『後ろです！』

「何！？」

スカイの声に振り向く響介。

でも、残念だったね。　これで、終わりだ。　僕は多重影分身によって、１６人となり砲撃を放つ。

「ちょっ…ま、それ卑怯すぎ！！」

卑怯？　知らないなぁ。

――ズガァアアアアアアアアンッ！！

ミッド式の魔法だけと聞かれたけど、忍術はギリギリセーフのはず。　確認の為に、貴史様の方を見ると……

「……」

――ビッ、シュッ！！

素晴らしい笑顔で首を刈っ切り、そのまま親指を下へ……どうやらアウトらしい。　どうしよう……死にたくないなぁ。

「よし、修行を引き延ばそう」

『響介さんは気絶してますよ？』

「……」

なんて事だ。　たかがちょっと強めの砲撃を十六連撃受けて、気絶とはふがいない。　ほら、立ってよ。　僕を助ける為にさ……。　ほら、立ってよ。　強くなる為にさ……。　ほら、立ってよ。　主に僕の為にさ……。

「殆ど……自分の、為じゃねぇか……」

「さて、フェイト。　ちょっとこっちに来い」

「いや、まだ……まだ修行が終わってないよ？　ほら、彼生きてるし」

「これ、以上は……死ねる」

手加減してあげただろ！？　あれで死ねるとか、軟弱すぎる！！

『マスター、さっきの砲撃一人なら大丈夫でしたが、流石に１６人は……』

「「「『『……』』」」」

クライシスの言葉に皆が黙る。　これはもしかして、僕のやりすぎ？　いや、だとしても……だとしてもだ！　このタイミングで、カミングアウトをするかい？　いや、ない！！　デバイスならマスターを守りなよ！！

「ほら遊んでないで行くぞ」

「はい……」

くっ……クライシス、響介……この屈辱……いつか倍にして返してやる。

「俺、関係ねーよな？」

▲　フェイト　視点▲

▼　貴史　視点▼

フェイトにお仕置きを終えて、響介のところへ行くと……

「ふひ～。　お茶がうんまい」

茶をシバいて、どっぷりと和んでた。　……その時、俺はある考えに至る。

「そうだ。　胃痛にしよ」

「やめろよ！！」

うむ、元気でよろしい。　しかし、何するかねぇ……。

ちらりと響介を見る。

「……なんだよ」

もう俺の性格を捉らえてるのか、敬語のけの字もない喋り。いわゆるタメ口だな。よし、イジメよ。

「修行をするに当たって、唯一手加減を知ってるフェイトは却下した。理由はさっきみたいになるからな、それで次の師匠を決めてもらう」

「やっぱり、まだあるんだ……」

「1、手加減を知らないバカ」

「（ナギさん……かな）」

「2、戦闘経験が少ないが容赦のない奴」

「（茶々丸さん）」

「3、死」

「（死!?　え?　何?　俺は師匠を選んでるんだよね?）」

3番目のこれは、アサシンだ。けっして、俺や乱ではない。にしても、面白いほど慌ててるなぁ。その慌てっぷり……プライスレス。

どんどん弄りたくなる。これは、俺の性(さが)だな。きっと根源はイジメとかそんなんだろ。

というか、俺がやれって？　嫌だね。　なんで毎回毎回、俺がやらないといけないんだよ。

「というか、さっきの何処が悪かったか教えてくれ」

「おう。　そういや、そんな約束をしてたかもな」

「かもじゃなくしてたよ……」

悪い所なぁ。　見つける前に、墜ちたしなぁ。

「強いて言うなら、フレイムショットとファイアシューター辺りか？　見ただけじゃわからんだろうが、デバイスを介して見れば違う魔法だとわかるだろ？　あと、牽制のファイアシューターに、シールドを張らない。　避けて次の相手の動きを見る。　すぐに戻って来ないんだし、それくらいの余裕はあるだろ？　あと、ファイアシューターを利用するとかな。　それと、動作は機敏に！　相手の行動を何通りか頭に入れる。　まぁ、これだけ言えばいいか？」

「なんか、基本中の基本を教えられた感じだ」

実際、基本中の基本だしなぁ。

「そうだなぁ……。　作者がまだ理解しきれてないから、こんな基本を疎かになる模擬戦となって、基本中の基本しか指摘出来ない話になった。　苦情は作者に言え」

「（メタ）……はぁ」

なんか、ため息つかれた。　まぁ、あとは作者に任せよう。

「とりあえず、魔法をじゃんじゃん作れ。　でないと、満足に戦えんぞ」

「俺、基本は接近戦なんだけど……」

「俺も基本が接近戦だが、遠距離技を持ってるぞ」

「……頑張ります」

「おう。　さて、そろそろ送るから」

「え？」

「じゃ！」

――ガコンッ！

何故か天から垂れてる縄を引っ張ると、響介の足元に穴が現れる。

「ちょ、まっ！　あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

突然現れた穴に、いきなり対処出来るわけもなく、響介は穴に落ちていった。

ちなみに、穴の中は虚数空間と同じ空間だから、魔法が使えない。

多分、響介の世界に行けるはず……。

▲　貴史　視点▲

▼　響介　視点▼

貴史に落とされてやってきた世界。　そこは俺の世界だった。
ああ、俺の世界だったよ……俺の目の前に俺と亮一が居なければな！！

「え、お、俺？」

「これが噂に聞くドッペルゲンガーか……にしては少し大人びてるな」

帰りてぇ～！！

そのあと？　そのあとは黒衣を纏った女の人に、元の世界に連れてってくれた。　運搬賃として、「成長したら私を楽しませて下さいね♪」って言われたけど……どうしよう。　死亡フラグが建った気がする。

▲　響介　視点▲

修行だよ！　全員集合！？　9（後書き）

今回でコラボ修行終わり。
次回は原作キャラの空気になってるキャラの修行。

修行だよ！　全員集合！？　１０（前書き）

これにて、修行編終了。

さらに、今回緊急で雨季様と香崎様のあるキャラを借りて……後半、コラボになりました。

修行だよ！　全員集合！？　１０

▼　貴史　視点▼

さて、響介も送ったし、そろそろこっち側の修行をするか……。
とりあえず、少年の所に行かないとな……。

と、言うわけで隣のダイオラマ魔法球に移動した俺。　そこには既に皆が揃っていた。
ナギとアリカは、隣のダイオラマだぜ！！　長い時間ダイオラマに居るナギとアリカだが、実は俺達が使わない時は外の時間と同じだから、そんなに年は取らない。

と、話はそこまでにして行くか。

「だから、坊やは魔法使いが合ってるから魔法使いにしろ！！」

「父さんと同じ魔法剣士が良いです！！」

「だ・か・ら！　坊やには、魔法剣士は合わないと言ってるだろうが！！」

少年の所へ行くと、エヴァとネギが、なんか揉めてる声が聞こえた。　話の内容から、魔法使いか魔法剣士のルート選びか……。
少年は父親の魔法剣士を希望して、エヴァは少年の性格から魔法使いを薦め……いや、押し付けか？　これは……。

「魔法使いは前衛が、居ないといけないって言ったのは、師匠（マスター）じゃないですか！！　僕は前衛の従者なんて、居ませんよ！？」

「だから、私が教えるのは前衛すら、必要としない魔法使いにしようとだなぁ～。　だいたい、貴様はカスミみたいな、魔法使いになりたいんだろ！？」

「だから、それが魔法剣士でしょ！？　確かに、カスミさんのような、魔法使いになりたいと言いましたけど、やっぱり父さんみたいな、魔法剣士が良いです！！」

「ええい！　わかった！　前衛すら必要としない、最強の魔法使いと言うモノを見せてやる！！」

お、ようやく話が終わったか。

「カスミ！！」

「はいはい。　薫、あんたが魔法剣士ね」

「は～い」

へぇ～。　これは滅多に見れないカードだな。　しかも、二人とも本気みたいだ。

「（貴史に、良いところを見せるチャンス！！）本気で行くぞ」

「（名誉挽回や！！）ええよ」

さぁて、どうでる？

▲　貴史　視点▲

▼　カスミ　視点▼

エヴァの発案で、魔法使いの戦いを坊やに見せる事になったんだが、正直坊やが魔法剣士の道に歩もうが、私の知った事ではない。だが、そろそろ薫との決着を着けたいし、丁度良いかな。

「行くえ？」

薫はそう言って、何もない所から贄殿遮那を出して構える。

「ああ、いつでも来い」

そして、私も自身が持つ最高峰の魔道書、神明魔祓の書（しんめいまふつのしょ）を出して宙に浮かせる。

戦闘では久々になるか。　確か、造物主（ライフメーカー）戦以来だな。　それに今回は本気だ。　アレも使うかもしれんな……。

「ハッ！　神鳴流心刃合錬奥義！！」

――パチンッ！　ズドドドドドドドドドドドドッ！！

「真・斬岩剣や！！」

私は指を鳴らして、無詠唱で魔法の射手・漆黒の矢を９９９９９本放つ。　漆黒の矢は普通の魔法の矢と違い、一つ一つが古代魔法の中級に位置する魔法と、同レベルの威力だ。　いくら神鳴流とはいえ……

――ズガァァアアアアアアアアンッ！！

「なっ！？」

たった一撃で全て粉砕！？　おいおい、あの短い期間で、どれ程挽回したんだ？　あいつは！！

「もう一丁！！」

――キィイインッ！！

刀の鍔鳴り！？

「参の太刀か！！」

――ズバァアンッ！！

参の太刀の対処に回った瞬間、腕が吹き飛ぶ。　そして、薫はすでに次のアクションへと移っていた。　ソレは鬼の面を被った薫。　向けられた手には、高濃度の霊圧。

「虚閃（セロ）！！」

最大限まで威力を底上げされた虚閃は、私がぼーっとしてる間に放たれた。

たく、参の太刀とかいろいろズルすぎだな。　まったく、動けんではないか。

そして、私は光に飲まれた。

――ズガァァアアアアアアアアアンッ！！

▲　カスミ　視点▲

う～ん。　やったかな？　とりあえず、油断なく構えとこ。

濛々（もうもう）と立ち込める煙の中を注意深く、神経を尖らして見てると一瞬だけ魔法の発動の反応を感じ取った。

▼　薫　視点▼

「ッ！」

すぐさま今居る位置から離れると、煙の中から数羽の黒い鷹がウチに目掛け突っ込んで来て、それだけやなく……

「「「■■■■■■■■■！！」」」

熊や獅子、虎など出て来る出て来る。　終いには黒いクジラ……しかも形、大きさからシロナガスクジラやね。　黒いからクロナガスクジラ？　まぁ、どうでもええか。

「というか、これがカスミの魔法？　地縛神を見とる感覚なんやけど……」

にしても、なんやカスミ……虚閃のダメージを受け取らんなぁ。ん～って、考えなくてもわかるか。　アホらしいまでに、張り巡らした障壁やな。

「すべて砕いて、貫通させる気で撃ったんやけど」

「いやいや、余分に何十枚か張ったからな。　ギリギリ一枚残ったのさ」

あの一瞬で、ようやるわ。

「それで？　今も続々と現れとる生物はなんや？」

「さぁ？　なんだろうな。　行け」

カスミが黒い生物に命令を出すと、一斉にウチの方へ突貫してくるって……そんな、あんなおっきいのはどう処理すればええんやろうか？

――ドドドドドドドド…

クジラ、ゾウ、虎、獅子、龍、熊、豹、鯱、鮫、ネズミ、闘牛、羊、山羊などなど……。　やばい、迫力に飲まれそうやわ。

「とりあえず、虚空、崩！！　んでもって、虚閃！！」

無数の破壊光線で黒い生物に放つが、黒い生物一体一体に複数の

障壁がって……嘘やぁぁあああああ！！
いや、まぁ障壁は問題なく貫通出来たけど、破壊光線の威力が半減して、あの黒い生物を殲滅出来んかった。
というか、通常時ならまだマシも虚化（ホロウ）して、ステータスや技の威力は通常時の三倍やで！？
「ハッハッハッハッハッ！　ほらほら、どうした？　逃げろ逃げろ～」
くっ……おのれぇええ！！　自分だけ高い所で、こちらを見下ろしてからに～！！
「そら、追加だ。　魔法の射手・漆黒の矢９９９９９本！！」
「ちょっ！？　どんだけ魔力があんねん！！」
明らかに魔力量オーバーやん！！　って、早う逃げな！！
――ズドドドドドドドドドドンッ！！
▲薫　視点▲
▼ネギ　視点▼
「す、すごい」
最初は薫さんが押していたけど、今はカスミさんが薫さんを追い詰めてる。　これが、前衛を必要としない魔法使いの戦い。

何と言う、デタラメな戦い。
何と言う、理不尽な戦い。
何と言う、大火力。
全てを飲み込む魔法。
圧倒的。
全てを捩伏せ飲み込むアレは、例えどんな悪魔でも貪り尽くす！！
欲しい……僕にもアレが欲しい。

でも、魔力が足りない。　カスミさんはなんであんなに魔法を使用して、魔力の減りが少ないんだろう？　何か秘密があるのかな？
あの本のお陰？　あの本はなんだろう？　疑問が尽きない。

「アレはカスミの全てだ」

「カスミさんの？」

「あの本はな、カスミが覚えた魔法や創った魔法が、カードとなって納められてるんだ。　魔法を使う時はカードに、ほんの少し魔力を込める事で発動するんだ。　それを創るのに、何年も時間を掛けたんだ」

何年も……でもそれじゃあ、僕がモノにするまでに時間が……

「時間が無い……か？」

「はい」

エヴァンジェリンさんの言葉に、僕は答える。　だってカスミさんみたいな魔法使いになるには、時間が圧倒的に足りないと、カス

ミさんが言ってたし……。

「カスミなら、あの魔法具の作り方くらいは、教えてくれるはずだ。あと、カードに術式を施すくらいはな……」

それだったら、大丈夫かな？　……うん、大丈夫だ。

「そら、そろそろ終わるぞ」

え？　もう！？　僕がカスミさん達の方を見ると、もうすでに戦いは終わりを迎えていた。

▲　ネギ　視点▲

▼　薫　視点▼

はぁ…はぁ…はぁ……。　……別に、興奮してるわけやないよ？　まぁ、冗談はさておき……そろそろ終わらせようかな。　あっちも、そろそろ決着を着けたがっとるみたいやし……。

ちなみに、あの黒い生物は真・百烈桜華斬で細切れにした。　ぶっちゃけシンドイ。

「最後の一撃で終わりにしないか？」

「ええで……」

「では、行くぞ！」

「来(き)ぃぃ！！」

――ズガァァアアアアアアアアンッ！！

ウチは自分の精神世界にある無限城から、無限に近いエネルギーを供給して、雷帝化する。　さらに序盤の虚化も合わさって、ウチのステータスランクが振り切れる。

「（流石だな……。　だが、私も負けてられんのでな）カード選択、二枚ドロー。　レク・リク・ラク・ライネック…漆黒よ」

カスミがカードを握り砕くと、カスミの身体に紋様が走る。　さながら、Ｆａｔｅのイリヤちゃんの魔術回路（令呪）が浮き出てる感じやね。

ただ、違いがあるとしたら、背中とお尻に紋様で象(かたど)ったデーモン系の羽根と、尻尾が着いとるところや。

そして目は今のウチと同じ、本来白い部分が黒い目をしとるところ。　これまた違いが、ウチは黄色と黒でカスミが蒼と黒ってだけ……おそらくあの蒼いのは、直死の魔眼やな。

崩壊せんとこを見ると、能力は使わんみたいやけど。

「マダダ……。　レク・リク・ラク・ライネック……。　クックックッ……見セテヤル。　全力ヲ！！　反転シロ我ガ力(ちから)！！」

――カッ！！

なっ！？　カスミがもう一枚のカードを握り砕くと、カスミの全てが反転した。　種族さえも……それはまるで、貴史の悪魔の腕から天使モードになるように……。

「まさか、完成していたのか！？」

外野のエヴァが、なんか叫んどるけど無視や！！　今はこの圧力（プレッシャー）を放つ、カスミをなんとかせな！！　そろそろ、ウチ自身制御出来んくなるしな。

――シュゥウウ……

光が収まるとそこには、白銀の眼（黒かったとこも白に戻ってる）を持ち、純白なドレスに真っ白な天使の羽根。　見るモノすべてを魅了する存在が居た。

「「「……」」」

現に、ウチもエヴァもネギ坊主も声を出せずに、ただただカスミを見ている。

「綺麗だな……」

そして、ぽつりと貴史が言う。　カスミからしたら、嬉しい言葉やろうな。　ほんまに羨ましいわ。

「せやけど……勝利は譲らん」

「私もだ……」

互いに手を向け合う。　そこから放たれる一撃は全てを消す雷と、全てを赦す光。

――神ニデモナッタツモリカ！！――

――ズキッ！

「ッ！！」

ウチの中の雷帝が暴れる。　創世の王たる雷帝が……今のカスミに怒りをさらけ出す。

――消エロ、消エロ、キエロ！！――

「キ、エ……ロ」

一瞬、ほんの一瞬で雷帝の支配が強くなり、ウチの身体を使って全てを消滅させる雷を放った。

――ズドォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ！！

「！！　避けぇえええ！！　カスミィイイイイイイイ！！」

意識が浮上したと共に、ウチはカスミに向かって叫ぶが、カスミは避けるそぶりを見せずに、向けた手から一条の光を放った。

光は雷に触れると、優しく包み込むように受け入れ雷を消し去り、別荘内を光で満たした。　ウチが覚えとるのはこれだけ……。

ただ、一つ言いたいのは……これ、ネギ坊主の戦闘スタイルを決める模擬戦やったよね？　アレはどうなったん？

▲　薫　視点▲

▼転生神　視点▼

さて、大変な事になった。
これ、始末書だけで済むかのう？　いや、無理か？　なんとか対策を……逃げる？

「よし、逃げよう！」

「ほぅ……何処に逃げるのかなぁ？」

「ヒッ！？」

突然、後ろから圧倒的な圧力と共に現れたのは、雨季様のチートじゃ済まないシリーズの神、ゼウス様。　だが、まだ一人……まだ始末書だけで済むかも！！

「始末書だけで済むわけないでしょう？　一介の中級神があらゆる神を超える可能性を（まぁ、既に超えてますが）秘めた転生者を出すばかりか、神候補ですらない転生者が神へと昇華。　実力も並の神を超えている。　見過ごせませんよ」

「ぬぅ……」

ま、まさか……香崎様の転生夫婦の並行世界旅行の神、真琴様まで……。　というか、ワシも予想外の事態で驚いとるんじゃが……。

「貴様が運命の女神達（ノルニル）に接触せず、自身の力の範疇で転生させんからだ！　どう責任を取る」

「あなたから、神を位を剥奪するの事も考えないと、いけませんが？」

ワシ……マジでヤバい。

『それは困るわ』『困るわね』『困る～』

「「「！！」」」

おお、この声は！！

「まさか……」

「ノルニル！！」

『その神は、私達を楽しませてくれる』『彼が居なくなると、私達の娯楽がなくなってしまう』『それは困る～』

助けてくださる理由が私欲だが、ワシにとっては嬉しい限りじゃ！！

「しかしですね……」

『カスミ様を神にしなさい。　運命の女神が長女、ウルズが決めるわ』『貴史様に任せておきましょう。　運命の女神が次女、ヴェルザンディが決めるわ』『薫ちゃん大好き～』

……ワシは、初めてあの三人を転生してよかったと思う。

「「わかりました……（なんで、彼女達があの三人に……）」」

『すべては』『超越者』『クロナちゃんを満たす為に～』

「「「「（はぃぃぃ！？）」」」」

あ、あの三人よりも寵愛されとるのがアレなのか！？　世の中……わからん。

▲転生神　視点▲

修行だよ！　全員集合！？　１０（後書き）

というわけで、どうでした？　修行編。
え？　最後の修行じゃない？　まぁ、いいじゃないですか。　ネギを魔法使いルートにしたかったんですよ。　他意はないです。

そして、今回のカスミの魔法。
黒い生物を出した魔法は、ナンバー・オブ・ビーストです。
６６６体の大小様々な魔法生物を、召喚します。　ほぼ、全て魔力と気で創った生命です。

そして、漆黒。
すぐに反転魔法使いましたが、これはまぁ……アレですよ。　闇の魔法の上位です。　上がるステータスが闇の魔法の比較出来ないっす！

んで、反転魔法。
種族や能力などを反転する魔法。
もちろん性別も反転しますが、反転するのは任意なのでしないでしょうね。
例えば……直死の魔眼ですが反転魔法を使うと、死者蘇生すら出来る魔眼というか神眼になります。
さらに神を超える力を持つ吸血鬼。
任意反転で神を超える力を持つ天使神（またはね）。
この場合、神の方が正しいですね。　力的に……
そして、神候補ですらないカスミが神となる。　この異常であの二人が来ました。　まぁ、うちの最高神でもなんら問題はないのですが、かなりの異常事態というわけであいう形になりました。

強さ表（前書き）

同ランク同数値でも、若干上下の差があります。

強さ表

ランク	数値	名前（状態・モード）
—	—	赤屍クロナ（超越者＋天使モード）
—	—	赤屍クロナ（天使モード）
—	—	赤屍クロナ（超越者）
—	—	赤屍クロナ（悪魔の腕解放状態）
—	—	赤屍クロナ（通常時（既に手加減が出来ない状態））
—	—	神武乱（超越者＋天使モード）
—	—	神武乱（天使モード）
—	—	神武乱（超越者）
—	—	神武乱（悪魔の腕解放状態）
—	—	神武乱（通常時（既に手加減が出来ない状態））
—	—	南武貴史（超越者＋天使モード）
EX	—	アサシン（超越者＋天使モード）

―　南武貴史（天使モード）

―　アサシン（天使モード）

―　南武貴史（超越者）

―　アサシン（超越者）

―　アサシン（悪魔の腕解放状態）

―　南武貴史（悪魔の腕解放状態）

―　カスミ（反転魔法使用）

―　カスミ（漆黒の魔法使用）

―　近衛薫（雷帝化＋虚化（ホロウ））

―　近衛薫（雷帝化）

―　フェイト（【智】発動状態＋クライシス使用）

―　フェイト（【智】発動状態）

ＳＳＳ　９９９９９　南武貴史（魔力＋気開放）

９９９９９　アサシン（魔力＋気開放）

９９９９９　神崎ジェイル（魔力＋気開放）

９９７００　茶々丸（ハイパーモード）

９９７００　桜咲刹那（ブチ切れモード）

９９７００　マナ（半魔化＋アーティファクト）

９８５００　カスミ（魔力＋気開放）

９８５００　近衛薫（魔力＋気開放）

９８５００　オットー（光化）

９８５００　弥勒夏彦（魔力＋気開放）

９８５００　弥勒雪彦（魔力＋気開放）

９７６００　近衛木乃香（魔力＋気開放）

９２０００　オットー（魔力＋気開放）

９２０００　ディード（魔力＋気開放）

９１８００　ディエチ（魔力＋気開放）

ＳＳ

８９９５０　南武貴史（８８～５１％の力）

８９９００　アサシン（７７～５０％の力）

８７６００　カスミ（コラボで出す戦闘力）

８７６００　近衛薫（コラボで出す戦闘力）

８６２４０　フェイト（非魔法）

８６２４０　セクストゥム（魔法使用）

８６２４０　セプテゥム（魔法使用）

８６２４０　エヴァンジェリン（闇の魔法使用）

８６１８０　弥勒夏彦（５０％）

８６１８０　弥勒雪彦（５０％）

８６１８０　弥勒緋影（魔力＋気開放）

８６１８０　弥勒右狂（魔力＋気開放）

８６１８０　弥勒椿（魔力＋気開放）

８６１８０　弥勒時貞（魔力＋気開放）

８６１８０　弥勒奇羅々（魔力＋気開放）

８００００　茶々丸（オーバーヒートモード）

８００００　桜咲刹那（羽根出し）

S

８００００　龍宮真名（魔眼使用）

７８６９０　南武貴史（コラボで出す戦闘力）

７８６９０　アサシン（４９％～通常時）

７５０００　南武貴史（通常時）

７４５９０　弥勒夏彦（通常時）

７４５９０　弥勒雪彦（通常時）

７４５９０　弥勒緋影（５０％）

７４５９０　弥勒右狂（５０％）

７４５９０　弥勒椿（５０％）

７４５９０　弥勒時貞（５０％）

７４５９０　弥勒奇羅々（５０％）

７００００　エヴァンジェリン（通常時）

７００００　近衛木乃香（通常時）

７００００　茶々丸（通常時）

70000	龍宮真名（通常時）	A
70000	桜咲刹那（通常時）	A
130000	ナギ（魔力開放）	A
12500	ネギ（魔力開放）	A
100000	ナギ（通常時）	A
9000	ネギ（通常時）	A
1	千雨	D

どうも、初めまして（前書き）

今回はとあるフラグの為、コラボになりました。

前半は竜華零様の【魔法先生ネギま～とある妹の転生物語～】からシンシアさん

後半は剣の舞姫様の【英雄と女王の子】のガトウさんです！

どうも、初めまして

▼　貴史　視点▼

カスミが放った光が収まると、俺は焼けた村に居た。　……うん、何を言ってるのかわからないな。

「しっかし、何処だ？　此処は」

来た事ないのに、見覚えのある村だな。　と、なると転生前から知ってる場所？　とりあえず、人を探すか……。

「しっかし、つい先程壊滅させられたみたいだな……ん？」

しばらく歩いてると人影が見えて来たが、まったく動いてる様子が見られない。　そして、近付くにつれて原因がわかった。

「石像……しかも、妙に迫力がある」

……アレ？　此処は過去のウェールズ？　なんでだ？

頭を捻ってもしょうがないので、とりあえず少年の所へ行こうと、気配を探してると、近くに二つと遠くに三つの気配があった。

「多過ぎねぇ？　ネカネとネギ、ナギを入れても三つのはずだが……。　とりあえず、三つある所に行くか」

というわけで、気配が三つある所まで来たわけだが……。
その三つの気配の正体はナギ、倒れてる小さな女の子、そして何かを悟ったような女。
しかも、倒れてる小さな女の子は、何処か見覚えのある顔だった。

それはアリアだった。　アリア・スプリングフィールド。　竜華零様の【魔法先生ネギま～とある妹の転生物語～】の主人公だ。
もっとも今は【魔法世界興国物語～白き髪のアリア～】として続編が出てるが……。
と、しばらく様子を見ていたらナギが消えた。　自然と、幽霊が天に召されるように、スゥーッと……お経を唱えてみたかったのは、みんなには内緒だ。

「と、こんなもんでいいかな。　それとキミ……出て来てくれないか？　そうこそこそされてると、排除したくなる」

へぇ～。　それなりに、気配を絶っていたんだがなぁ。　自身がなくなりそうだ。

と、マジで排除されると困るので、姿を現す。

「どうも、初めまして……。　南武　貴史だ」

「ボクはシンシアという。　さて、なんの用かな？　もし、この娘に手を出すなら……」

うう～ん。　素晴らしい殺気だ。　応えたくなるほどに……。

だが、今はそれを抑えないとな。

「安心しな……。　何もしねーよ」

「証拠は？」

「あるわけない。　だが、何もしないのも事実だ。　未来のダチだからな」

「ふぅん。　その言葉を信じよう」

あーざーすｗｗ

「やっぱり信じるのをやめようかな」

冗談だ。　冗談。　つか、心を読めたりするなんてスゲー。

「もしかしなくても、試された？」

「おう！」

「はぁ……やれやれ、今度は読めなくなるとはね」

俺の回答で、溜息をつきながら肩を落とすシンシア。　まぁ、そういう手合いの奴との対応は、薫で慣れてるからなぁ。

「で？　何をしに？」

「さぁ？」

「さぁって……」

「いやぁ……気付いたら此処に来てたし」

原因はカスミのアレだろうが……。　本当に、なんで此処に来たのかねぇ。

「まぁ、いいか。　誰にも看取られずに、消えるよりマシかな……」

「は？」

「いやいや、友達になったばかりで済まないが、ボクはもう長くなくってね。　消えるまで、看取ってもらって良いかい？」

そう言ってシンシアは、その場に座って眠ってるアリアの頭を撫で続けた。　その姿はコウキと被って、あまりにも俺の心を乱してくれる。

出会って間もないのに……。
友となって間もないのに……。
また俺に友を看取れと？
こいつはあまりにも……

「残酷な事を言うじゃねぇの」

「すまない。　でも、もうどうしようもないんだ」

だろうな……。

わかる。　感じる。　俺の目の前から、存在が薄れていくシンシ

アが……。　俺の目の前から、消えていくシンシアが……。

「チッ……ままならねぇぜ」

「だが、何故だろう。　また会えそうだ」

そうだな……。　会えるだろうよ。　近い内に……。

――フッ

しばらく見つめ合ったあと、シンシアは光となって消えた。　別に長い間、話し合ったわけじゃない。　だから、アリアとどんな関係かわからないが、アリアに取っては大切な存在だというのが、わかった。

シンシアが座って、アリアの頭を撫でた時のアリアが安心したような顔を見せ、寝相か寂しかったのかわからないが、消えるまでシンシアの服を離さなかった手。

シンシアが消えたあとも、暫く眺めていた。　そして、フッとある事を思いついた。　ああ、これは実に良い。　そうと決まれば準備をしないとな……。　そして、アリアが起きる直前まで、俺はその場に居た。

さて、過去のアリアの世界から、元の世界へ戻った……

「嫌だよ！　ガトウさん！！　一緒に……」

はずだったんだがなぁ……。　何コレ？　また、過去の世界？
しかもガトウが本来死ぬ場所。
俺らの世界のガトウは、墓守り人の宮殿での最終決戦だったな。
つまりは、原作世界ないし別の平行世界？　うわぁ……マジやだ。
帰りてぇ……。

と、タカミチとアスナが来るな……。　隠れよ。

数分後、泣いてるアスナを連れたタカミチは、俺が隠れてる木を通過していく。

うむ。　若いねぇ～。　タイトルは……そう、愛の逃避行。　なんつってな。　さて、ガトウのツラを拝んでこよ。

暫く歩いてようやく発見。　ガトウはこちらを見る気力すらないのか、眼だけこちらに向けてくる。

「君は……」

「どうも、初めまして南武　貴史だ」

「はじ、め、まして……ガトウ、ぐぅ…」

「名前くらいは、知ってるから無理すんな」

マジで辛そうだな。　つっても俺は、回復魔法使えないしなぁ～。
助ける気ないけど……。

「なんか言い残しとかある？　願いとか？」

「……そう、だね。　本当は…初対、面の相、手に言うのもアレだけどね。　アリス、くん……に、また会、いたかったな……。
か、れ……は、新しい、風だか……ら」

アリス……確か、カスミの話に出て来たな。　一度だけ……。

「そうかい……。　ワリィな、知ってる顔なら、一目見せてやれたんだが……」

「ハ、ハハハハ、……気持ちだけ、でも……貰って、おくよ……
…」

逝ったか。　こいつは、シンシア同様必要みてーだな。　あんたの最後の願い……聞き届けてやるよ。

さて、やる事いっぱい。　夢いっぱいってな！

「居たぞ！　こっちだ！！」

ガトウを追ってきた連中が、ようやく現れる。　別にこのまま

てやってもいいが、それじゃあ……英雄が静かに眠れないわな。

「アフターサービスだ。　ガトウ……」

さぁて、話す余裕も何もねぇ……。　一気に、片ァ付けさせてもらうぜ。

待ってな、親友。

▲　貴史　視点▲

最強娘、帰郷す！（前書き）

あとがきに次話についてアンケーツ！！

（※）貴史の戦闘、帰還はカットしています。
この話の時間軸は、カスミと薫が超本気バトルをした次の日です。

そして、今回はキャラが崩壊するかも！？
そして、香崎　真琴様の【転生夫婦の並行世界旅行】に登場してる
ナンバーズ達とのコラボレーション。

最強娘、帰郷す！

▼　乱　視点▼

今日は、姉達に会いに帰ろうと思う。　いつものようにギリギリで、手紙を送ったから今頃慌ててるかな？

「乱……なんで、君は毎回毎回突然言うんだい？」

「大丈夫！　他のみんなも、今日手紙が届く日に、帰るって言ったから」

「今度からは、相手の予定というものを考えてくれ」

「はーい」

流石に突発的過ぎたのか、母さんの外せない用事と被っちゃったから、今度からは気をつけよ。

「さて、行く準備は終わった？」

「「終わった～」」

「うん」

ディエチ姉さんの言葉にオットー、ディードとオレは返事を返す。

と、此処で一つ教えておくけど……オットーとディードに関して、姉と言うのを止めた。

しつこいくらいに胸に執着してるし、なんか威厳が無いし……。

「それじゃ、乱。　よろしく」

「うん」

自身の手から一本のメスを出して、空間を引き裂く。　出口は、以前オレ達が住んでた別荘の中だ。

ただし、裏口。

「なんで裏口？」

「ドッキリを狙いたくって」

「はぁ…程々にね？」

「はーい」

とりあえず、中に入ってウーノ姉さんとセッテ姉さんかな。　チンク姉さん達は、まだ幻想郷に居るはずだろうし、セイン姉さんは天界で、お仕事だろうしね。

――カチャ、パンッ！　パパンッ！！

「「「「ッ！！」」」」

裏口のドアを開けると、突然銃を発砲したような音が複数聞こえ、身構えると次の光景に驚いた。

「「…「「お帰りなさい（ッス）！！」」」…」」

オレの目の前に広がる光景は、ウーノ姉さん、ドゥーエ姉さん、トーレ姉さん、クアットロ姉さん、チンク姉さん、セイン姉さん、ウェンディ姉さん、ノーヴェ姉さん、セッテ姉さん、ギンガさんがクラッカーを持って待っていた。

そして、キッチンは派手に飾り付けがされてあり、看板にはデカデカと「お帰りなさい。　放浪娘」と書かれていた。

「……」

「おうおう、ほうけてる。　ほうけてる♪」

え？

「作戦は成功ね」

え？　え？　え？

「いえいえ、私はただゆっくりと、準備をしてただけだから」

え？　何？　どういうこと！？　チンク姉さんはともかく、なんでセイン姉さんが！？　天界でお仕事してたんじゃ？

「グッドタイミングだったぞ。　ディエチ」

「だぁいぶ、混乱してるみたいねぇ～」

「クアットロ姉さん！？」

「ふふっ…実は全員、乱ちゃんの行動をジェイルさんと南武さんから、聞いてたの」

「え！？」

ギンガさんは母さんからの手紙を見せながら、この事態の元凶を教えてくれた。　一応、手紙を見せてもらうと、こう書いてあった……。

▼　手紙　▼

最近、乱の様子がおかしいからジェイルに頼んで様子を見てた所、どうやら故郷に一時帰郷するらしい。
んで、あいつの事だからドッキリの為に、直前にしか言わねぇだろう。　だから、そのドッキリを逆手に取る！！
ジェイルの見立てだと、あと三日は時間があるらしい。
だから、天界の仕事で忙しいセインは、今のうちに休暇を取れ。
幻想郷に居る奴らは、至急帰ってウーノ達の手伝い。　クアットロはギンガとイチャついてないで、すぐにウーノの所へ行け。
私は、どうしても外せない用事があってね。　悪いが、乱を頼むよ。

P．S．
ゼッテー驚かす為に、裏口から来るはずだ！　裏口を見張っとけww

▲　手紙　▲

そんな……読まれてたなんて……。

「手紙が来てラッキーでした。　昨日から天界が急がしくって……」

「私たちの場合は、残念だったわぁ。　【自主規制】してる時に来るんだものぉ」

「一瞬、見られてるのかと思ったくらいだしね」

――コツンッ

「あたっ」

茫然自失してると、セイン姉さんが軽く頭を小突いて来た。　頭を押さえて、セイン姉さんを見ると、呆れたようで疲れきった顔をしていた。

「お願いですから、私『だけ』は連絡して下さいね？」

「「…「「なっ！　セイン（姉さん）（姉）、自分だけずるいぞ（わ）（わよぉ）（ッス）！！　私（姉）だって乱と秘密の共有したい（わ）（わぁ）（ッス）！！」」…」」

セイン姉さんの言葉に、他の皆が反論する。

というか、皆すごっ！！　よく、そんなに口を揃えれるモノだ。

でも、確かにセイン姉さんには、ちゃんと言っておいた方が、良いかもしれない。　天界のお仕事大変らしいし……。

「良いじゃないですか！！　こっちは手紙が無く、直前に知らされたら一ヶ月は、拘束されて仕事三昧なんですよ!?　どっかの中級神さんが出した、神候補でない転生者が神になったんですから！！」

うん。　セイン姉さんにだけは知らせよ。　にしても、神になった転生者か……興味あるなぁ。　誰だろう？

（カスミです）

アレ？　なんか、変な電波が……。　まぁ、いいや。　とりあえず、今日のドッキリは失敗として、いっぱい楽しもう♪

「姉さん達」

「「…「「ん？」」…」」

「ただいま！」

――ニコッ

「「…「「ブハッ！！」」…」」

「え？　えええぇぇえええええ!?」

オレが笑顔でただいまと言った瞬間、姉さん達は鼻血を出したり、血を吐いたりなんだか、キッチンが血生臭い事に……。

と、とととりあえず、救急車？　って此処ダイオラマの魔法球だからダメだ！　えっと……こうなったら軽い手当でも……じ、人口呼吸すればいいのか？　ど、どうすれば！！

しばらくして落ち着き、姉さん達を介抱して皆が元気になると、歓迎会は開かれた。

ちなみにオレは、殆ど両親に甘えた事はほとんどない。　親父は別世界に居たし、母さんは研究とかやってたし、そういった事情で、オレと過ごしてたのは姉さん達だ。

まぁ、母さんにもたまには甘えてたぞ。　親父は一切ないけど……。　んで、何が言いたいかと言うと、オレが誰かに甘えるのは珍しいわけだ。

そして、姉さん達はオレや叶に甘えられるのが、好きみたいでいろいろ世話をしてくる（一部、世話というよりも過度なスキンシップを実行するけど）。

「ほら、肉を食え肉を…うめぇぞ」

「ノーヴェ、そんなに肉を食べさせない。　野菜も取らせないと」

「野菜より肉だ！！」

「栄養が偏るでしょ！！」

ウーノ姉さんも、ノーヴェ姉さんも喧嘩しないでよ。　ちゃんと食べるから……

「乱、あの二人は放っておけ。　それより、何が食べたい？　姉が取ってやるぞ」

いや、まだカレーライス食べてるし……

「腕が短いチンクちゃんじゃぁ、遠くにあるのを取れないから、私とギンガが取るわぁ（訳：ちんちくりんのチンクちゃんは、引っ込んでなさいなぁ）」

「乱ちゃん、何が良い？」

だから、カレーライスを食べて……

「クアットロ、ギンガ……この台は回転するから、不要な気遣いだ！（訳：これは私の役目だから、貴様らは不要だ）」

クアットロ姉さん、チンク姉さん……仲良くね？

「乱～。　この酢豚、お姉ちゃんが作ったんッスよ～」

「あら、ウェンディが作った酢豚より、私が作った青椒肉絲（チンジャオロース）の方が美味しいわよ。　だから、乱はこっちを食べるわよね？」

今度はウェンディ姉さんに、ドゥーエ姉さん……。　そして、セイン姉さん……ＩＳを使って延々とカレーライスを流さないで……

「美味しい？」

「美味しいけど……カレーライスはもういい」

「ガーンッ！！」

そんな、声に出して言うほど？

「「スキンシップとして、その胸に実ったたわわな「今日から帰る日まで、近付かないで」ごめんなさい。　もう言わないからそんな事言わないで！！」」

だったら、最初っから言わないでオットー、ディード。

「このから揚げ美味しかったぞ。　要るか？」

「あ、うん」

「ほら、口を開けろ」

トーレ姉さん？　自分で食べれますよ？

「トーレ姉、あーんは私がする」

「ディエチは一緒の世界に居るから、今日くらいは私に譲れ！」

ディエチ姉さん、トーレ姉さん……武器を下ろしてよ。

――ツンツン

「ん？」

肩を突っつかれ振り返ると、セッテ姉さんがフライドチキンを片手に持って、差し出して来た。

「えっと……」

「……あ～んして」

貴女もか！！　じゃあ、まぁ……一口。

――パリッ

「もぐもぐ……美味しい」

衣がパリパリで、中はジューシー……アレ？　フライドチキンって、こんなんだっけ？

「「セッテ！！　ずるい（ぞ）！！」」

何が？

「「…「「乱、まだまだ料理はあるからな（りますからね）（あるわよぉ）（あるから）！！」」」…」」

うぷっ……お願いだから姉さん達も食べて……。

ご飯を食べたあとは、お風呂だ。

「男子禁制の為、カットさせてもらう」

「トーレ姉さん？」

「いや、なんでもない」

いろいろなハプニングがあったけど、オットーとディードは潰した。　すぐに蘇ったけど……。　そして、寝る時間……なんだけど、ちょっと乙女の雑談。

「やっぱりこういうのは、恋ばなだと思うんッスけど」

「こ、ここ恋ばな！？」

「恋……」

ウェンディ姉さんが話題を決め、チンク姉さんが顔を真っ赤に…好きな人居るのかなぁ。　ディエチ姉さんはどうだろう？　虚空を眺めてるけど……

「あらぁ。　私とギンガのラブラブ生活聞きたいのかしらぁ？」

「それなら、今この場で見せ付けるのもいいかもね」

そして、やはりと言うかやっぱりと言うべきか、クアットロ姉さんとギンガさんが桃色空間を展開中。

『通常空間を徐々に侵食してます！！』

『このままでは危険です！！』

『いけない！！　ただちに迎撃を！！』

『ＡＰＦ（アンチピンクフィールド）を展開』

――パリン♪

『ダメです！　効果ありません！！』

『なんてこと……』

ハッ！？　なんか変な電波が！！

オレがたわいない妄想から、抜け出すと桃色空間は消滅していた。
どうやら、妄想の中と違って、打ち消す事に成功したらしい。

「乱は好きな奴とか居ないのか？」

ぼーっと姉さん達の会話を聞いてると、チンク姉さんが話を振って来る。　うん、振って来るのはいいけど、殺気を納めよう。
オレとしてはなんともないけど、此処に一般人が居たら発狂するよ？　姉さん達。　しかも、話を振って来たチンク姉さんまで殺気立ってる。

これが愛されてるって、証拠なのかな？

「で？　どうなの？　安心して、私達が全力でＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩするから」

安心出来ません。　ウーノ姉さん。

「もし居るんだったら、私が乱の言う事を聞く、奴隷にしてあげるわよ？」

イエスマンは嫌だよ。　ドゥーエ姉さん。

「どれ、私がその馬の骨を見極めよう」

馬の骨って……確実に死合いで、見極める気満々ですよね？　トーレ姉さん。

「女を喜ばせるテクを、教えてあげてもいいわよぉ？」

ノリノリですね。　流石、愛に生きる人。　それでも同性ですか、クアットロ姉さん。

「コロス」

話振ったの、チンク姉さんですよー。　って、泣かなくても……。

「地獄に叩き落とそうかな」

上司に怒られるよ？　セイン姉さん。

「……切り刻む」

あのーオレの恋人の話だよな？　オレを傷つけた奴の話じゃないよな？　まぁ、そんな奴居ないけど……とりあえず、千本桜を納めて……セッテ姉さん。

「乱のオッパ……乱はボクらのモノ」

いい加減自重しやがれ、オットー。

「で？　あたしは誰を殴れば良いんだ？」

オットーをお願いして良い？　ノーヴェ姉さん。

「まったく、皆には困ったなぁ。　もし乱にそういう人が出来たら、私が射殺してるのに……」

射殺……。　ディエチ姉さんだけは、常識人だと信じてたのに……。

「大質量による殲滅が良いッスかね～」

……元の原因はあんただ。　ウェンディ姉さん。

「乱のオッパイは私の」

……ディード。　テメェ…。

「じ、冗談……」

たく……。

「で？　誰が好きなの？」

ギンガさん……貴女までって、この人はクアットロさんみたくしょうがないか……。

「はぁ……。　好きな人は居ないよ。　そうだなぁ、師匠（クロナさん）と親父と母さんに、勝てる人なら好きになれるかも」

「「…「「（誰にも勝てないよ）」」…」」

こんな馬鹿な話をしながら、夜を過ごした。　楽しい一日だったけど……やっぱり母さんと親父も一緒が良いなと思うのは、オレがまだ子供だからだろうか？

明日は皆とお出かけ。　何処に行こうかな……。

▲乱　視点▲

最強娘、帰郷す！（後書き）

次話の内容アンケート。

1、乱とナンバーズ、ミッドで買い物の巻

2、さっさと次へ。

1を選びましたら最大三話、最低あと一話……乱とナンバーズの話が続きます。

2を選びましたら次の話へ行きます。

最強娘と１３人の姉（前書き）

※自分の妄想がリアルブートしないかなぁと、思いながら過ごして一年。
とうとう、リアルブートする事に成功した今日この頃……皆さんはどうお過ごしですか？

と、まぁ……そんな事はさておき……この小説は読者の皆様の妄想がリアルブートして生まれた作品です。

冗談です。
ちなみに、今話は作者の都合が多用されております。
では、どうぞ！！

最強娘と１３人の姉

▼　乱　視点▼

今日はクラナガンで、楽しく買い物！　……のはずなんだけど、そもそもオレって物欲とか無いんだよなぁ。
あるのは、戦闘欲だけ……。　アレ？　オレ、戦闘狂じゃね？
と、まぁそんな新事実は良いとして何しよう？

「何か欲しいものとかありますか？」

「ん～無いからお土産でも買って、その辺ぶらつく」

セイン姉さんにそう言って、１４人で町をぶらつくって大所帯にも程が……。

「え～お土産買って、ぶらつくだけッスか？　欲しい物がないなんて、乱ちゃんは青春を無駄にしてるッス！！　ほら、この【魔法少女ギャクギレなのの】のアクションゲームとかどうッスか？」

何ソレ？

ウェンディ姉さんから見本のパッケージを渡され、表にある作品紹介欄を読む。

「ひょんな事から、魔法を手にした逆ギレ少女なのの。　彼女は世の不条理にキレて、キレて、そして逆ギレ…たまに嘆き、悲しむ事もあるけれど、頑張って世の中の不条理をデストロ～イ」

……え？　ぇえええ！？　何コレ！？

「大人気アニメッスよ」

大人気！？　え？　人気なの！？　コレ！？

「確か、管理局のエース・オブ・エースの体験談も含まれてるらしい」

「へぇ～……要らない。　というか、ゲームしない。　むしろ、白い魔王だかなんだか知らないけど、雑魚そうだし、初心を忘れてそうな人なんか興味ない」

――グサッ！！

「うわ～ん！」

「な、なのは～！？」

なんか、後ろで騒いでる人が居るけど無視の方向で、見たらきっと絡まれるし……。

ゲームのパッケージを棚に戻して、次のコーナーに行こうとしたら、オットーとディードが居ない事に気付く。

「あれ？　オットーとディードは？」

「……向こう」

オレの質問にセッテ姉さんが、オットーとディードが居る方を指

差す。
セッテ姉さんが指を差した方向には、１８という数字に円を描き、斜め線が走ってる垂れ幕があった。

「……あそこ？」

「……うん」

確認のためセッテ姉さんに聞くと、すぐに頷いて返事をしてくれた。
あの容姿であそこへって、店員は何をしてるんだろうか？　追い出される様子も、見つかる様子もないみたいだし、パパッと入って連れ戻そうかな……。

「待て！」

オレが垂れ幕に向かって歩き出すと、横からチンク姉さんが待ったを掛けてきた。

「ん？」

「乱が行く必要はない。　此処は、姉に任せろ！」

そう胸を叩いて、堂々と言った。
オレはチンク姉さんの頭から、足のつま先まで眺めると、絶対店員に追い返されると感じる。
だって言っちゃあアレだが、チンク姉さんは見た目的にもアウト。
同じく見た目的にアウトな、オットーとディードが中に入れたのかがわからないけど、チンク姉さんは多分入れない。

「あの…お客様、こちらは１８歳未満の方は入れませんので……」

「私は１８歳過ぎてる」

「え、えぇぇえええ……」

「なんだ！　その信じきってない顔は！？」

ほらね。

ん～どうしようかな……。　助けてもいいけど、チンク姉さんの泣き顔が可愛いし……

「乱のああいうとこ、ドクターに似てね？」

「さらにあの顔は、からかってる時に貴史兄が見せる顔ッス」

「親子ね」

ノーヴェ姉さんとウェンディ姉さんとドゥーエ姉さんには、お仕置きが必要みたいだ。

とりあえず、買うものが今決まったし買お……。

「お、なんか欲しいもんでもあったか？」

「うん、とりあえず（ドゥーエ姉さんとノーヴェ姉さんとウェンディ姉さんに使う）大人の玩具」

「「…「「！！」」…」」

オレがそう言うと、オットーとディードを除いた姉さん達が、驚

いたようにこちらを見る。
さっきまで店員と、激しく口論をしていたチンク姉さんでさえ……

「だ、ダメだ！　乱には早すぎる！！」

早すぎるって、チンク姉さん……オレ１８歳だよ？

「というか、好きな奴は居ないんじゃないのかよ！？」

「なんで嘘なんかついたんッスか！？」

いや、居ないし、嘘なんかついてない。
貴女達に使うんだし……

「言うんだ。　今すぐそいつの名を……」

「……」

ちょっと、武器片手に何処行く気さ？
トーレ姉さん、セッテ姉さん……正気に戻ってよ。

「とりあえず、指名手配にする？」

「社会的に殺すのも……」

ギンガさん！？　自分の立場を利用しない！　クアットロ姉さんも、癖のある口調を使わないほどって……

「はぁ……」

「みんな、落ち着きなさい」

どう対処しようか悩んでると、落ち着いた声でウーノ姉さんが皆を抑える。

流石、ウーノ姉さんだ。　頼りになる。

「まずは全員でフルボッコよ」

「「…「「！！」」」…」」

ダメだ……。　この人達。

ウーノ姉さんの言葉で、衝撃を受けたあと納得してるよ。

皆でバカやってると、時刻は昼になっていた。

オットーとディードをトーレ姉さんが引き連れて、少し遅めのご飯にすることになった。

「此処のパスタは、美味しくて有名らしいわ」

「……最近出来た」

「一度、ギンガと来たけど確かに美味しかったわぁ」

「でも、高いんだよね～」

ウーノ姉さんの案内で着いた店は、最近出来て味も好評のパスタ

専門店ピリトロ。
なんでも、地球のパスタ専門店ピエ〇ロを参考にというか、パクった店だ。
まぁ、味はギンガさんのお墨付きだから、問題はないと思う。

「お金に関してはドクターから、日本円にして十兆円が送られてきたわ」

「母さん、父さんの方からも、純金のインゴット一本」

孫や娘にあげる金額じゃない！！

「これはまずいな」

「そうねぇ……」

「何がまずいんッスか？」

トーレ姉さんとクアットロ姉さんが顔をしかめて呟くと、ウェンディ姉さんが首を傾げて聞く。

「今回は乱の帰郷パーティーだ」

「それで出されたお金は、乱ちゃんの為に使わないといけないって事よぉ」

え？　そうなの？

「まぁ、ある程度は私達も使って良いだろうが……殆どは乱の為に使わないといけない！！」

……トーレ姉さんの力説で、少し引いた。
というか、すっごく遠慮したいんですけど。

「でもよー、無理して買う事ねぇだろ？　金余っても良いじゃん」

そ、そうだよね。　うん、良いこと言うなぁノーヴェ姉さんは……。

「ノーヴェ…貴女は、私たち家族の共通する性格に自覚ないんですか？」

ノーヴェ姉さんの言葉に呆れたように、セイン姉さんがノーヴェ姉さんに問う。

共通する性格？　なんだろう？

「自分の子供と孫を、溺愛するドクターと父さん、母さん……昨日、今日と来れずにお金を出す事で世話を焼こうとしてる人達ですよ？　それが少ししか使われてなければ……」

「あー落ち込むなー。　そりゃあすっごく……」

ふむ……と、セイン姉さんの言葉を思い出し頭の中で再現すると、確かに地面に手足着けて落ち込んでる姿が目に浮かぶ。

というか、溺愛云々については自覚してたんだ。

「だから、このお金は全部使わないといけない！！」

他の人からしたら贅沢だろうけど、難しい問題だよね、それ……。

「でも、それは難しい任務だよね？」

「姉もそう思う」

オレの意見を代表して、ディエチ姉さんが言い、チンク姉さんが肯定する。

理解ある姉さん達で、オレは幸せ者だ。

出来る事なら、甘えさせるのも程々にしてもらいたい。

「とりあえず、中に入って昼食食べながら考えましょ？　店員さんが、ずっとこっち睨んでるわよ」

ギンガさんの声に、ハッとして中を覗くと、確かに睨んでいた。

というわけで、店内へ……。

「何にするの？」

「カルボナーラ…」

ドゥーエ姉さんの問いに、反射的に答えると満場一致でカルボナーラになった。

しかも、超特盛ビッグカルボナーラ（大）なるメニュー。

というか、超とか特盛とかビッグとか（大）とか何？　どれだけ大きいと表記したいんだろ……。

「それで、どうやってお金を消費するんだ？」

料理が来るまで、ノーヴェ姉さんが先程の話を掘り返す。

まぁ、大切な事だもんね……。

でも、オレ的にもっと大切なのが……

「ん？　どうした？」

オレの視線に気付いたトーレ姉さんは、チンク姉さんを膝の上に乗せて席に座ってる。

別にチンク姉さんが羨ましいんじゃなく、トーレ姉さんが羨ましいので勘違いしないように……。

「チンク姉さん……」

「ん？」

ボソリと呟くと、チンク姉さんが振り返る。

チンク姉さんがよく動かす狐耳、トーレ姉さんの邪魔にならないように左右に揺れる尻尾。

可愛い……昔はチンク姉さんが羨ましいと思ったのか、トーレ姉さんがオレを膝の上に乗せたんだっけ。

あれはあれで、気持ち良かったけど……。

「「？」」

ーーカタ…

少し椅子を引いて、テーブルとの距離を置く。

そして、想像する。

赤屍の超越者としての力は、想像出来ないモノは存在することもない。
森羅万象はそこに存在を認識されて、初めて生まれ出るもの……
『摂理』とはイメージ出来なければ、起こる事はない。
なら、イメージ出来れば？　想像出来ないモノが存在する事が出来ないなら、想像出来るモノは存在する事が出来るということ……

「うっ！」

「チンク姉さん……こっちに来て欲しいな」

チンク姉さんがオレの膝の上に乗らないといけない衝動があるとイメージし、それが今と想像する。
能力の無駄使い？　使ってなんぼじゃない？

――トコトコ、ポスッ

「あ、姉を膝の上に乗せたいなら、い、言えば良いだろう」

あ、失敗した。
まぁ、いいや……座ってくれるし……

「♪～」

――ギュッ

「～～～～～ッ！！」

チンク姉さんを抱きしめると、チンク姉さんは顔を赤く染めてなんていうか、可愛い。

「甘えてるチンク姉も可愛いッスけど、顔が真っ赤なチンク姉も可愛い」

「端から見ると、こうして見えるのか……」

「……記録」

「せ、セッテ！！」

チンク姉さんが、いろいろ叫んでるけど気にしない。

ずっとこうして居たかったし、オットーとディードも最初はこうしたかったけど、性格がなぁ……。

「お待たせしました。　超特盛ビッグカルボナーラ（大）でございます」

姉さん達が騒いでると、台車を押しながら店員がって特盛！！

台車の上には、大皿で山のように盛られたカルボナーラがあった。

カロリー高そ……。

数分後、オレは信じがたい光景を目にしてる。

それは、ノーヴェ姉さんとギンガさんのコンビが、超特盛のカルボナーラを平らげた事だ。

さらに、食べたあとはお腹が多少膨れるはずなのに、ノーヴェ姉

さんとギンガさんは、まったく体に異変がない。
どういう体してるんだろ？

「次は乱の服を買いましょう」

「水着は何が似合うッスかね～」

衣類……着れればなんでもいいな。

そして、着いて来させられたのは、ミッドで有名なデザイナーの家。
ドゥーエ姉さん曰く、一から作ってお金を掛ける作戦！らしい。
これがその光景の一部です。

「この子に合う服を、デザインしていただきたい」

「金は惜しまねぇ……だから、真剣に取り組めよ！！」

「は、はいぃぃいいいい！！」

トーレ姉さんとノーヴェ姉さんが、デザイナーに脅迫紛いな依頼をしたあと……

「乱にジーパンは似合うのは、常識でしょ！　もっと世界に革命を起こすモノを描きなさい！！」

「だからってなんでスカートなの！？　貴女、それでもプロ！？

程度がしれるわね！！」

「フリフリはもうある。　そのフリフリに比べると、ありきたりすぎ」

「ひ～～～ん」

セイン姉さん、ドゥーエ姉さん、ディエチ姉さんが叩き、デザイナーさんが泣く。

「見て！　あのはちきれんばかりの胸！！　あれをもっと目立たせる！！　もう少し露出を！！」

「露出分が高すぎ！　エロスの中に清らかさを！！」

「ど、どうしたら……」

「「プロのデザイナーなら、消費者の要望に答える！！」」

オットー、ディードは露出系の服にいちゃもんをつけ、デザイナーさんは涙目……というか、マジ泣き。

「色が乱に合ってないじゃなぁい。　ほらぁ、モデルをよぉく見なさいよぉ…」

「黒と紫は暗すぎだ！　もっと明るい色を……」

「なんで、そこで赤ッスか！？　もっとあるはずッスよ！！」

「もぅ…貴女達が決めなさいようぅぅぅ」

クアットロ姉さん、チンク姉さん、ウェンディ姉さんがあれこれ口出しし、デザイナーさんの心がバッキボッキ…。

「……これが完成？　……没」

「貴女、達は、ひくっ何、ぐすを望、ひくっんで、るのよおぉぉぉ」

やっと出来たはずのデザインを見て、セッテ姉さんがダメ出し…

…む、酷過(むご)ぎる。

「まぁまぁの出来ね。　じゃあ、あと十枚よろしくお願いします」

「いっそ殺して！！　私を殺して！！」

「お金ならたくさんあるわ」

「鬼ィィイイイイイイイイイイイ！！」

と、まだまだあるけどカットで、一つ言わせてもらうと……お金が有っても他人に迷惑をかけてはいけない。

最後、発狂してたもん……。

「次は装飾品かしら」

いや、装飾品って要らない。

邪魔になるだけだしね。

「それより、カジノとかでお金を消費した方が……」

「多分、増えるだけね」

「お金って……消費するの難しいね」

「（乱は欲が無さすぎ）……あ、本とかは？」

本……かぁ。

「良い案だぞ。　ディエチ」

と、いうわけで本屋さんへ直行。

そして、本屋さん。

「母さんの土産として、何かないかなぁ」

「オットー、ディード！　そっち（18禁コーナー）に行かない！！」

「「オッパイがボク（私）達を呼んでるッ！！」」

「はいはい、変な事言ってないで大人しくしてようね～」

……頑張って、セイン姉さん、ディエチ姉さん。

「買いたい本は決まったか？」

「あ、チンク姉さん……ッ！？」

後ろからチンク姉さんの声が聞こえ、振り返ると絵本を数冊持ってるチンク姉さんが居た。

「？」

「なんて……コンボ」

「お客様……」

しばらくチンク姉さんと話してると、書店の店員が声を掛けてきた。

オススメ商品でも、紹介してくれるのだろうか？　なんて、甘い考えをしてた自分を殴りたくなる。

「作者が限界なので、あとはカットさせてもらうぜ！！　クラナガン書店奥義！！　作者の都合！！　ほのぼのの終わりが想像出来ないんだよ」

ちょっ！？　何、作者の本音を暴露して……くあ、なん、だか……眠く……。

目が覚めると、そこは麻帆良のオレの部屋だった。
日付はオレ達が、ミッドチルダに行って三日経っていた。
ん～と記憶を辿ると、チンク姉さん達と別れた記憶とかがある。

「あれ？　オレ……変な店員に会って……あれ？　何これ？」

謎は深まるばかりだった。

▲乱　視点▲

三人はからかいに行く！（前書き）

ＩＳ七巻読破～。

主人公の鈍感さに、ちょっと引き気味です。
あれは異常すぎないかい？
そして、よくああも約束を被せるなぁ…と、主人公の考えがワカンナイヨー。

と、まぁグチグチ言いましたが、好きですよ。　ＩＳ。　特に楯無会長。

では、今回は黎音様の【魔法少女リリカルなのは～輝く月の滴～】とのコラボです。

三人はからかいに行く！

▼　ゼフィリス　視点▼

本日のＦＷ（フォワード）達の訓練を終えて、シャワーを浴び食事にしようと食堂へ向かうと……

――ピンポンパンポン♪

『ゼフィリス・エーデルフェルト一等空佐、ゼフィリス・エーデルフェルト一等空佐、奥さんが来ています。　至急受付まで来て下さい』

「「……「「な、なにぃぃいいいいいいい！！」」……」」

と、変な呼び出しのあと、機動六課が震えた。

というか、なんだ？　さっきの放送は？　奥さん？　私に妻は居ないはずだが……。

――――ドドドドドドドドドドド…

私がさっきの放送について考えてると、前方から土煙を上げながら、凄まじい形相でギルがやってきた。

「ゼェェエフィィイイリィィイイスゥゥウウ！！！！」

――ガシッ！

私とギルの距離は一瞬で埋まり、ギルは私の襟首を掴んでブンブンと揺らす。
私が一般人なら、確実に鞭打ちになるな……。
「なんだ!!　さっきの放送は!!　我(わたし)という者が居ながら!!」
「私も知らん!　あと、揺らすな!!」
とにかく、ギルを宥めて受付に行く。
「ゼフィ!　あの放送は何!?　どういう事!?」
「ゼフィリス……説明してもらうぞ」
受付に行くと、そこにはフェイトとシグナムが居た。
あとは受付嬢だけ、フェイト達の反応を見る限り野次馬根性なのだろうな……陰で隠れてる狸も……。
となると、私の妻と名乗った人物が居ない。
いったい誰が私を呼んだんだ?
「ゼフィリスさん、これを……」
「これは?」
「ゼフィリスさんの妻と名乗った方が、ゼフィリスさんが来たら渡してくれと……」
そう言って、受付嬢から渡されたのは一枚のメモ。
いったい何が書いてあるのやら……。

▼　メモ　▼

訓練所に来られたし！

▲　メモ　▲

ふむ……行く気がなくなるな……。
といっても、行かないといけないみたいだが……はて？　ギルやフェイト、シグナムは何処に行った？

▲　ゼフィリス　視点▲

▼　三人称　▼

ゼフィリスの横からメモを覗いた、フェイト、ギルガメッシュ、シグナムの三人は、ゼフィリスが考え事をしてる間に訓練所へとやって来た。
あの短い時間とはいえ、思考してたゼフィリスより速いとは、これが恋する乙女と言うものだろうか？

「此処にゼフィリスの妻と、ほざいた雑種が居るのか……」

訓練所は既に起動しており、海にビルが建っていた。

ギルガメッシュ、フェイト、シグナムは辺りを見渡しながら気配を探ると、訓練所の真ん中に建つ、一際大きなビルの屋上から三つの魔力反応を感じ取った。

「あそこだな」

「フンッ、この我が直々に裁いてくれる」

「行くよ…」

シグナムとフェイトは自身のデバイス、レヴァンティンとバルディッシュをセットアップして、ギルガメッシュは王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）からグラムを出して、真ん中のビルへと向かう。

そう、ゼフィリス並の規格外が居ると知らずに……。

「来たのはゼフィラバーズか」

「なら、準備運動にはちょうどいいか」

「ほな行くで」

ビルの屋上から、こちらへと向かって来る三人に、それぞれ自分のターゲットに向かう我らが主人公達。

こいつらはいったい何をしに来たのか、確実にゼフィリスをからかうためだと答えそうな、絶対の確信がある。

「む、散開しろ！！」

「「ッ！！」」

フェイトやシグナムより先に走っていたギルガメッシュは、突然足を止めて二人に指示を出す。

ギルガメッシュの指示を受けたフェイトとシグナムも、自身に迫る危険を感じたのか、すぐにギルガメッシュの指示通り散開する。

「蛇咬（スネークバイト）！！」

フェイト達が回避した直後、上から人が降って来て、強い衝撃と共に地面を揺らした。

そして、フェイトの前に自分と同じ顔をした人物がおり、シグナムの前に残念な大和撫子みたいな、稀有な雰囲気を出した女性が居た。

「え？　わた、し？」

「……フッ」

「……」

「今、残念な大和撫子みたいだなとか思うたやろ？」

「ッ！？　そ、そんな事はない、ぞ？」

女性の指摘で、もの凄くうろたえるシグナム。

どうやら、残念すぎる大和撫子とは裏腹に、勘だけは鋭いようだ。

勘だけは！　大切な事なので……いや、そうでもないな。

「よし、シバく」

「何の事かわからんが、やるなら相手になってやろう。　烈火の将、シグナムと我が魂……炎の魔剣レヴァンティン……」

「炎雷の支配者、近衛　薫と迦愚土……」

シグナムと薫は名乗りを上げ、自身の愛剣を構える。

「いざ……」

「尋常に」

「「勝負！！」」

ーーーズガアアアアアアアーーーーーーッ！！

互いに駆け出し、炎と炎はぶつかり合った。

薫とシグナムが戦ってる一方、フェイトは困惑していた。
自分と同じ容姿、でも何かが違う。
人造魔導師と思ったが、人造魔導師と何かが違うのを感じていた。

「貴女は誰？」

「私はカスミ。　カスミ・ヴェネーラだよ。　フェイト・テスタロッサ・ハラオウン……」

「！！　どうして私の名前を」

「雑誌に書いてあるだろ？　ほら、こんなに……人気だな」

フェイトに似た女性は持っていたコンビニの袋から、フェイトが表紙を飾った雑誌を取り出す。

一冊と言わず五冊ほど……。

ということは此処に来る前、カスミはあれらを買ったと言う事だろうか？　自分の顔に似た雑誌を……。

「私は買う時、別人を意識して買ったから、恥ずかしくともなかったぞ。　まぁ、当然だよな？　別人なんだし」

それはごもっともだ。

だが、それがなんだと言うのだろう？　と、フェイトが首を傾げてると、楽しそうに……それはもう心の底から楽しむように、カスミはこう言った。

「何も知らない人から見たら、自分が飾ってる雑誌を買う執務官だな。　あと記者の質問に答えてやった。　相手は、きっとフェイト・テスタロッサ・ハラオウンと、勘違いしてるだろうな」

「なっ！？」

「雑誌を買ったところも、バッチリ見られて写真を撮られたな……あとなんで雑誌を買ったのかとか、趣味とか……」

最悪である。
もしカスミが変な解答をしてたら、それは全て自分に返ってくる。
出来るならば、カスミが変な解答をしてないことを……

「ちなみに雑誌を買った理由として、執務官の写真を見つめると言った」

最悪だ。
これで自分はナルシストと認識された!?　と、軽く絶望を感じたフェイト。
しかし、まだまだ続くカスミのターン。

「趣味はフェイト執務官の記事がある雑誌に、表紙を飾ってる雑誌集めと答えた」

ナルシスト確定である。
それにさっきから「執務官」や「フェイト執務官」と言ってるが、相手はきっと本当の意味で理解してないだろう。

「好きな人が居るかどうかも聞かれた」

「!!　な、なんて…」

「居ると答えた。　実際私は好きな奴が居るしな」

答えたの!?　と言おうとしたら、無難な解答が返って来て、ホッと胸を撫で下ろす。

「と、これはからかいのネタに、ならなかったか……」

「……やっぱりからかって……じゃあインタビューは!?」

嘘なのか!?　嘘であって欲しい！　嘘と言って!!　お願いします!!　と願いつつカスミの方を見ると、ニヤニヤと卑しく笑うカスミに、本当の事だと悟ってしまうフェイト……。

「インタビューは本当だ」

「……あ、悪魔……」

フェイトは悟ってしまった自分に、さらなる打撃を与えるように、言葉として……より確定的に声に出して言った、カスミが悪魔に見えた。

「……悪魔で構わん。　悪魔らしい弄り方でからかうから」

カスミの言葉にフェイトはガクリと両手、両膝を地面に着けて落ち込む。

なんだか台詞が、以前親友が同じ事をヴィータに言ってた気がしたが……成るほど、管理局の白い悪魔と呼ばれるのもしょうがない。

本人は否定すると思うが……。

「さて、からかいもそこそこにやるか…」

「ッ!!」

突然、カスミからふざけた雰囲気が消えて、代わりに魔力が放出される。

フェイトはバルディッシュをザンバーモードにして、バルディッ

シュで庇うように構え、カスミの魔力に耐える。

「ハンデだ。　雷属性のみで戦ってやる」

ハンデ……それを意味するのは、カスミは自身より強いと言う事。
油断や慢心という可能性はあるが、何処かそれはないと確信してしまうフェイトだった。

「フェイト・テスタロッサ・ハラオウンとバルディッシュ・ザンバー……行きます！」

「漆黒の吸血鬼、カスミ・ヴェネーラ……行くぞ」

フェイトとカスミは高速で飛翔して、バルディッシュの魔力刃とカスミの断罪の剣・雷（エクスキューショナーソード・ライオン）が、激突する。

場所は代わり、ビルが崩壊しまくってる場所。
そこに、ギルガメッシュと一人の男が、戦っていた。

「いい加減に！！　落ちろ！！」

「ハッ！　遅い遅い」

「ざぁっ種うううぅぅぅぅー－－－－－－－－－－ッ！！」

ギルガメッシュは宝具を雨のように降らせ、男性は宝具の雨を余

裕の表情で回避していく。
常人では決して、避ける事は出来ないのにだ。
ゼフィリスと同じ、規格外か……と、ギルガメッシュは感じる。
そう、何処となく似ている。
ゼフィリスとあの男は……それは、ギルガメッシュが培ってきた、洞察力のおかげかもしれない。

「雑種……名乗る事を許す」

「仮面〇イダー」

――ブチッ

「舐めるな！　雑種がああぁぁぁぁー――――ッ！！」

「ブホホホホホホ……」

再度、放たれる宝具の雨。
しかも、さっきとは宝具のランクが上がっており、仮面〇イダーとふざけて名乗った男は、爆笑しながら宝具の雨をかい潜る。
何故、平然とそんな事が出来るのか……。
ある意味称賛モノだ。

「まぁ、冗談はこのくらいにして……南武　貴史。　お前を倒す男の名だ」

「ほざけ！！」

貴史はギアを上げて、宝具の嵐と化した攻撃をかい潜って、ギルガメッシュの後ろを取った。

「このっ！」

「無敵クラス（俺ら）との戦いで、後ろを取られたらそれは終わりを意味してんだぜ？　それが最強クラスでもな…」

ギルガメッシュが振り返ろとすると、ギルガメッシュの身体は急に倒れ込んだ。

「な、にぃぃぃい！？」

「俺様の勝ち…」

そして、貴史はギルガメッシュの首に手を当て、軽く絞めギルガメッシュの意識を落とした。

場所はまた移動して、シグナムと薫の戦場。

「レヴァンティン、カートリッジ」

『カートリッジロード！』

――ガシュンッ、ガシュンッ！

シグナムの指示に、レヴァンティンは内蔵されたカートリッジと呼ばれる薬莢を、二発装填した。

「『火を点せ』迦愚土！！」

一方、残念すぎる大和撫子……もとい、近衛　薫は斬魄刀の始解と呼ばれる、斬魄刀の真の力を解放する。

レヴァンティンと迦愚土は、刀身に炎を纏わせ主人の言葉を待つ。

「紫電…」

「炎熱…」

シグナムと薫は愛剣を振り…

「「一閃！！」」

レヴァンティンと迦愚土は、炎をさらに纏わせ互いに激突した。

――ドガァァアアンッ！！

「ハァアアアアアッ！！」

「えぇぇぇえええいっ！！」

爆発した瞬間、シグナムと薫は交差して、振り返り様に愛剣を振る。

愛剣達は主に応えるように、纏った炎の威力を上げ激突した。

――ズガァァアアンッ！！

二度目の爆発。

辺りは既に瓦解しており、まるで世紀末の世界とか、人造型決戦兵器が人類の敵と戦った跡のようになってる。

まったく、どう戦えば人間サイズの戦闘がこうなるのか……流石は魔法と言ったところだろう。

それに、シグナムの出す技は全て非殺傷設定と呼ばれる、決して相手を傷付けないのに対して、薫の技はどれも相手を傷付け、命を絶つ程のモノ。

だが、シグナムの服は煤(すす)や、埃等で汚れてはいるが、まったくの無傷。

それは一重にシグナムが着てる服、バリアジャケットと呼ばれるミッドの魔導師やベルカの騎士が着る服、または甲冑と、薫の手加減のおかげだろう。

バリアジャケットはともかく、薫の手加減は有り得ないと思うが……。

「し、失礼な!!」

「？」

「あ、いや……なんでもないえ」

「そ、そうか……」

薫が電波を受信して、突っ込んだ事によって微妙に空気が気まずくなった。

これからは余計な電波を受信しても、ツッコミを入れない方が良いと勉強にはなっただろう。

良い事をした。

「次の一撃に全てを賭けへん？」

「いいだろう」

薫は迦愚土をシグナムはレヴァンティンを構えて、己の内にある魔力を爆発させた。

「紅蓮…」

「紫電…」

「「逸（一）閃！！」」

放たれたのは、炎の砲撃と炎の斬撃。
当然、斬撃はシグナムで砲撃が薫。
流石は薫！　汚い、卑劣……本当に主人公の一角？

「うっさいわ！　ボケェ！！」

ーーーズガァァァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアーーーーーーーーーーンッ！！

そして、決着は着いた。
薫の勝利で………卑劣なっ！！

「勝てばええんよ。　勝てば……」

「フハハハハハ、アハハハハハ、ハハッハハハハハハハハハーッ！！」

二つの金がぶつかり合う、。

片方は、苦虫を噛み締めるように顔を歪ませ、片方は、この戦いを楽しむように高笑いしてる。

「くっ…」

「どうした？　もっと楽しませろ」

「トライデントォオ…」

「レク・リク・ラク・ライネック…」

フェイトはミッドの魔法陳を展開して、そこに魔力を集中させていき、カスミは始動キーを口にする。

集めてる魔力は互いに互角。

カスミは、まだまだ楽しむみたいだ。

「スマッシャー！！」

「……雷の暴風！！」

フェイトは三つの雷撃を撃ち込み、カスミは暴風に雷を纏わせ突貫力のある雷の暴風を放つ。

此処で一つ説明を……カスミは吸血鬼であり、その種族柄…光や雷といった属性が苦手である。

しかし、それはつい先日までの事。

いや、昔もなんなく使えはしたが、それでも威力はナギクラスま

で……。

だが、つい先日……神の称号を得て、種族は半魔半神。

これによって、苦手で威力が低い属性だった光と雷は、闇属性と同等までの威力を持つ事が出来たのだ。

――ズガァァアアアアンッ！！

「ぐうぅぅぅっ！！」

そして、突貫力のある雷の暴風はただの雷の砲撃に負ける事なく、フェイトの砲撃を貫き、フェイトを掠めながらも横を通り過ぎた。

「続けるか？」

「ッ！！」

フェイトがカスミの方を見ると、そこには雷のスフィアを無数に出して、こちらを見るカスミが居た。

「……どうする？」

「……降参します」

こうして、カスミとフェイトの対決も終わった。

そして、ゼフィリスが来たのは二分後の事だった。

▲　三人称　▲

理性と本能……正常と狂気……やっぱり思考と反射の融合でしょ！　はい、ガ○ダム！

今日も卑怯王・近衛　薫をよろしくです！

虚・薫の名前は香になりました。

今回も前回と同じコラボです。

次回アンケーツは後書きにて

理性と本能……正常と狂気……やっぱり思考と反射の融合でしょ！　はい、ガ○ダム

▼　貴史　視点▼

フェイト、シグナム、ギルガメッシュを倒したあと、すぐにゼフィリスが現れた。
そして、俺らを見てため息……失礼じゃね？

「久しぶり……か？」

「まぁ、そうなるな」

「何の用だ？」

「薫がバトりたいらしい。　俺は別のとこに用があるから帰る」

ちょっとした用で、世界移動しようとしたらカスミと薫がやってきて、ゼフィリスの所へ行こうと言って来たからなぁ。
俺の話を聞かないから、質(たち)が悪いことこの上ない……。

「んじゃ、俺は行くぞ」

「ちなみに何処へ行くんだ？」

「シグナムとカルタに会いに…」

「私に？」

俺が出した名前に、シグナムが反応するが、俺は違うと答える。
シグナムはシグナムでも、平行世界のシグナムだし……。

「待て」

「ん？」

周りの連中を巻き込まないように、離れようとするとカスミが声を掛けてきた。
というか、なんか怒ってね？　心なしか薫も怒ってるみたいだが……どうしたんだ？

「カルタはわかる。　二人目の妻だしな……だが……」

「シグナムってなんなん？　ウチら聞いてないんやけど？」

そりゃあ、言ってないしなぁ。

「要のとこのシグナムか？」

「残念。　うちの妻（ジェイル）がちょっかい出したとこのシグナム」

別にそこ意外のシグナムでも良かったんだが、最初に着いた世界が妻（ジェイル）が、ちょっかい出した世界だったからなぁ。
と、話はこれくらいに、そろそろ行かないとな……。

「んじゃ、そういう事で！」

「行かせるかぁぁあああ！！」

「絶対、もう増やさせん！！」

――カッ！

「うおっ！？」

俺が走って離れると、カスミと薫が魔法を放って来た。

俺、なんかしたか？　まぁ、とりあえず……シグナムんとこ行くか。

▲　貴史　視点▲

▼　薫　視点▼

貴史が世界を移動したあと、場になんとも言えない空気が漂った。

「またあいつは……なんだ、あいつは……勇〇郎でも目指してるのか？」

「言わんといて、鬱になるやん……」

ほんまになんなん？　なんでああも、奥さんを増やそうとするん？　なんでウチらの気持ちだけ、わからんのやろ……。

真名や他の人の好意には気付いとるのに、やっぱ転生前があかんのやろうか？

「あー、そう落ち込むな……いつか報われるはずだ」

「だからと言って……シグナムはないだろ」
「次に行く世界は、此処の平行世界やで？」
ゼフィリスが慰めてくれるけど、このあとの引っ越しを考えると……はぁ。
もう、ゼフィリスで発散しよ。
「ほな、やろか？　ゼフィゼフィ」
「私はこの三人で発散しよう」
そう言ってカスミは、フェイト達を連れてウチらから離れた。
……シグナム、強う生きてな？　きっとカスミはシグナム繋がりで、フルボッコする気や。
ウチも、シグナムをボッコりたいわ～。
「それじゃあ、やるとしようか」
「せやね」
ウチはゼフィリスと距離を取って、互いに向き合った。
さて、何処まで肉薄出来るかな。

▲　薫　視点▲

▼　三人称　▼

ゼフィリスは、約束された勝利の剣を投影して構え、薫はとある斬魄刀の始解状態を出して構える。

「変わった刀だな…」

「油断しとると、首が飛ぶえ」

「しないさ」

――ダッ！

なんの合図もなく、薫とゼフィリスは駆け出し…

――キンッキンッキンッ！　ギャンッギャンッギャンッ！！

約束された勝利の剣と斬魄刀は何度もぶつかり合い、周りを破壊していく。

はた迷惑極まりない。

そして、十を超えた辺りからゼフィリスは剣が、重くなってるのを感じた。

「（なんだ？　約束された勝利の剣が重くなっていく……まさか！）……その刀…」

「やっぱりバレたか」

ゼフィリスはすぐに剣が重くなった原因を考えると、薫の変わった形をした刀が目に入り、ある考えに思い至った。

ゼフィリスが気付くと、薫はゼフィリスの考えに肯定する。

薫が持っていた斬魄刀は、銘を佗助と言い、その能力は切り付けたモノの重量を倍にするというものだ。

それは人であれ、武器であれ、防具であれ、機械であれ……際限はない。

まったく、さっきといい卑怯極まりない。

「（戦いに卑怯もなんもあらへんわ！！）そろそろ探り合いはやめへん？」

「わかった」

ゼフィリスは、重くなった約束された勝利の剣を破棄して、まったく同じ剣を投影する。

薫は佗助を消して、二本の同じ斬魄刀を取り出す。

それは黒と白の斬魄刀。

鍔（つば）が無く、大きなな刃に布が巻かれてる斬魄刀。

銘（な）は――――

「斬月…」

「そんな大きな剣を、二本使うとは正気か？」

「心配せんでも、ちゃんと扱えるで……」

「そうか……なら」

ゼフィリスは周囲にスフィアを作り、レーザーを放ちながら薫に

接近する。
　周りのスフィアも薫が近くに居ると、反応してレーザーを放つなど、なかなか回避するのも大変だ。
「それならっ！　香（かおる）！！」
（おうよ！！）
「見せたる！」
「本物の超兵っ…」
「やないやない！　ウチらの力や！！」
　はて？　この主人公は何がしたいのか？　一人漫才？　一人でぶつくさと……レーザーの集中放火を受けて、頭がおかしくなったのだろうか？　いやはや、前々からその気はあったようだが…
「（なんでウチは、こんなにもけなされなあかんの？　ウチの事嫌いなんやろうか？）とりあえず……思考と反射の融合やぁぁあああー－－－－－ッ！！」
　薫が叫ぶと同時に回避運動が鋭くなったり、柔らかくなったりとまるで、別人と交互に入れ代わってるような動きをし出した。
「？（動きが……なんだ？　アレは……それにあの仮面は？）」
　ゼフィリスは接近するのを止めて、レーザーを放つ事で薫の動きを見極めようとした。

「後ろ！」

「いんや右だ！！」

薫は自身を包囲してるスフィアからのレーザー攻撃、ゼフィリスのレーザー攻撃を避けながらスフィアを破壊していく。
器用にその大きな剣でだ……。

時に切り伏せ……
時に布を掴んで振り回し……
時に投げ……
時に大きな刀身を楯にして、レーザーを防いだりと……

まるで剣を相棒のように振るのでなく、道具として扱ってるような振る舞いだ。

「おらおらおらおらぁぁあああっ！！」

「香！　右斜め４５。！！」

「わぁてるよ！！」

「左も！」

「テメェも動け！！」

薫は自分に命令するように、スフィアを破壊していくが、どうも薫以外の何かが居るみたいだ。

「この感覚は、あの死徒に似てる…」

ゼフィリスは薫を観察してると、とある知人に似たモノを感じたのだ。

「ふむ、仕掛けてみるか……」

ゼフィリスはいまだレーザーを回避しながら、スフィアを破壊してる薫の後ろに近付き切り付ける。

（取った！！）

完全なる不意打ち、ゼフィリスも決まったと思った時……

「ハッ！　見え見え」

――ガキンッ！！

「何ッ！？」

薫は、ゼフィリスの攻撃を防いだ。

「せいっ！！」

振り向き様に斬月を振るも、ゼフィリスは素早い回避行動で、後ろへ下がる……が、

「月牙天衝！！」

薫が斬月を振り切ると、巨大な斬撃がゼフィリスに向かって放たれた。

しかも、周囲のビルを縦一文字に切り裂きながら……
はた迷惑な技である。
まあ、本物のビルでは無いので、破壊の限りを尽くしても構わないのだが……ストレス発散には便利だね。

「大きい技だが…回避出来ないわけではない」

ゼフィリスは巨大な斬撃を、大きく横へ移動するが、そんな事、薫達は百も承知。
戦い始めた初心者にでもわかる。
だからこその……

「二刀流だろぉおおうが!!　月牙天衝ぉおおおおお!!」

ゼフィリスが避けた所に、薫はまた先程と同じ斬撃を、今度は横一文字に放った。

「それでも!」

今度は上に回避するが……

「斬空閃!!」

薫は逃さないとばかり、今度は小さな斬撃を飛ばして来る。

「だとしても!!」

しかし、小さな斬撃は先程の斬撃よりも避けやすい。
ゼフィリスはそれを避け、薫に切り掛かろうと接近する。

「あめぇよ。　こいつが剣の極地！！　真・百烈桜華斬空閃！！
ｉｎ　月牙天衝！！」

だが、ゼフィリスの接近は許されなかった。
薫が放った技は、あの弥勒　夏彦が神鳴流の技同士を、組み合わせた悪魔が如き技。
それがさらに巨大な斬撃となるので、それはもう半端じゃない。

「なんて出鱈目な」

だが、長年生きていたゼフィリスには、巨大な斬撃が無数に飛んで来ようと、余裕で回避出来るどころか、隙を突いて反撃する事も可能だろう。
だが……

「くっ…まさか小さい斬撃もあるとは…」

巨大な斬撃に隠れて、小さな斬撃も飛んで来るのだ。

ゼフィリスと薫達から、離れた場所。

「立テ……シグナム……」

「あぐっ……」

「シグ……ナ、」

「お、おのれぇえ……」

漆黒を発動したカスミは、ゼフィラバーズをボッコしていた。
それもシグナムを集中的に……
おそらくは貴史への八つ当たりが、１００％は入ってるだろう。
可哀相に……
だが、そんなシグナムにも救いの手が来た。
いや、手というより斬撃……
それも巨大な……

――ザシュッ

「ナッ！　ナンッ！？」

――ズバズバズバズバズバババババババッ！！

突然、腕を斬られたカスミは斬撃が飛んできた方向を見ると、無数に飛んでくる斬撃を認識したあと、その身体は巨大な斬撃に切り刻まれていく。
漆黒を発動してるカスミは、あらゆる攻撃を通すだけなのだ。
例えるなら、気体とか風、闇、光のような実体のないモノだ。
そして、カスミの唯一の救いは、斬魔剣ではないという事か……。

シグナム達も何が起きてるかわからず、斬撃が飛んで来てる方向を見ると、あら不思議……救いの手だった斬撃は、自分達の所にも飛んでくるではないか…。

「って、うわぁぁあああああ！」

「ちょっまっ！」

「おのれぇえええええ！！」

満身創痍な彼女達には、恐怖以外の何者でもないだろう。
避けるのも辛そうだ。

場所は戻り、ゼフィリスと薫の戦場。
そこでは、鎖の激流や剣と槍の嵐、レーザーの雨と無数の斬撃がぶつかり合ってた。

「くっ…埒があかないな」

「ほな、最後の一撃で決めようか？」

「いいだろう……」

あまりにも平行線を辿る戦闘に、妥協策として薫は最後の一撃で、勝敗を決めようと言ってきた。
もうシグナムとの二の舞は、止めて欲しいが相手は薫。
そう簡単に止めないだろう。

「卍、解！！」

――ドゥゥウウウウウウウウウウウウウウウ――――――――――――ッ！！

薫が解合の言葉を紡ぐと、薫の霊圧と魔力、気が膨れ上がり、服装も灰色のコートを纏い、二つの斬月は日本刀のように細く洗礼された姿へと変えた。

「天鎖斬月…」

「それがお前の本気か……」

「全力やないけどな」

「なら、私も今の状態の持ちうる全てを出そう……勿論、それが全力ではないがな。　先手を許そう……」

「ほな、遠慮なく！！　月牙双天衝！！」

二振りの天鎖斬月を振って、先程と比べものにならない月牙天衝を放った。

ゼフィリスは、それを避ける事なく受けた。

――ズガァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアーーーーーーンッ！！

「……やった？」

「いや……やってはおらん」

「ッ！！」

土煙から目を離さないでいたにも関わらず、ゼフィリスは土煙の

上に居た。
いや、ゼフィリスというより、金髪で青と白のドレスを着た……

「姫アルク！！」

「余興にしては楽しめた……では、堕ちろ」

姫アルクが手を向けた時、世界中の……いや、星の魔力が薫の周りに集まり薫を吹き飛ばした。

「これが、星のいぶ…」

――バリィィイイー――――――ンッ！！

姫アルクが薫から背を向けて、ゼフィリスに戻ろうとした時、世界が割れる音がした。
そして……

「なっ！？」

姫アルクは世界が割れた瞬間、ゼフィリスと戻っており、薫がゼフィリスの前に居た。
さっきと同じように……
いや、ゼフィリスの身体には、これでもかってくらいに拘束されており、薫の手には黒い天鎖斬月と違う斬魄刀が、握られていた。

（いったい何が……まさか！？）

「鏡花水月の能力は完全催眠……。　まだやる？」

鏡花水月……その能力は薫が言ったように完全催眠で、五感の全てを支配し、一つの対象の姿・形・質量・感触・匂いに至るまで、全てを敵に誤認させる事が出来る能力。
ただし、完全催眠を掛けるには、相手に鏡花水月を見せなければならない。
それを、ゼフィリスに気付かれずにどうやったのか……

「いったい……いつ？」

「卍解した時や……。　あの時の霊力放出した時に、一瞬だけ斬魄刀を変えたんよ」

「なるほど……」

流石、薫！！　卑怯な事、この上ない！！　いよ！　卑怯王！！

「なんか、やるせないわぁ……」

「……」

「それでどうするん？」

「はぁ…このままでは、泥沼になりそうだな……私の負けだ」

こうして、この戦いはゼフィリスの大人の対応で、ゼフィリスの負けとなった。
流石はゼフィリス！　もう、流石としか言えませんね！！　決闘で完全催眠を使うどっかの誰かさんとは違う！！

このあとは、カスミとフェイト達の怒りが薫に向かった。
そして、そのあともゼフィリス達と、クラナガン郊外を歩き遊んだりした。
そのあと、ゼフィリス一等空佐の女性関係に、邪推したマスコミが取り上げたりもした。

▲　三人称　▲

理性と本能……正常と狂気……やっぱり思考と反射の融合でしょ！　はい、ガ○ダム！

次回アンケート。

1、貴史の恋人と二番目の妻との話

2、いい加減、原作進めろ的な話

※2を選べば、問答無用で（ネギま！編）最終章に入ります。

この人は勇〇郎ですか？　いいえコレは主人公です。（前書き）

これが新・南武家！！

今回は香崎　真琴様のあのチート夫婦の娘達が介入したリリカルなのはの世界と雨季様の【チートじゃ済まない外伝】の後書きの華、ほの管メンバーとのコラボ。

この人は勇〇郎ですか？　いいえコレは主人公です。

▼　三人称　▼

とある世界の極々普通の家のリビングで、黒みがかかったピンクのポニーテールをした女性が罪人よろしくばりに、光の輪で拘束され彼女の家族達に囲まれていた。

「さて、シグナム。　今日という今日は、教えてもらうで？　シグナムをヤリ逃げした人物の居所！！」

「……はぁ」

拘束されてるシグナムと呼ばれた女性は、小さくため息をついて今の状況を作り出した元凶を想う。

その人物はこの場に居ない。
なぜなら、その人はこの世界の住人ではないからだ。
いくら、家族がそいつに会わせろと言っても、会わせる事は出来ない。
いくら管理局が多次元航行出来る船を所有していても、多次元のさらなる向こう側にある世界。
会わせる事は不可能。

そもそも、何故こんな事になったのか……。
それを説明するのも億劫で、めんどくさい事この上ない。
まぁ、簡単に説明すると……ある日突然、次元を引き裂いてやって来た男が、闇の書を持ってシグナムを取り込もうと、上書きプロ

グラムを組み込んだ。
シグナムは当然、闇の書からの上書きプログラムに抵抗したが、成す術なく支配される一歩手前まで来た。
まぁ、その時にというかなんというか、シグナムと酷似したシグナムが現れたが、もう居ないので置いておく。

なんだかんだあって、支配から逃れたシグナム。
え？　逃れた理由が気になる？　どうでも良くない？　まぁ、気になるなら教えるけど、上に書いたシグナムに似たシグナムが、シグナムに上書きプログラムを組み込んだ人物に懇願して、上書きプログラムを消してもらったわけだ。
そして、話は戻るが支配から逃れたシグナムの前に、またその男が現れた。
また支配されると思ったシグナムは、切り掛かるも圧倒的な力で捩伏せられ……

（結局、私は騎士の前に一人の女だと言うことか……にしても、あの日は危険日だと言ったはずなんだがなぁ……）

シグナムは、周りの家族を完全無視しながら、さらに思考の海へ潜って行った。
面白そうだから、また過去描写を入れよう。

あれはシグナムがそいつを意識し始めた時、世間ではデレ期という奴だ。
ちなみに、ツン期でも、何度か身体を重ね合ってる。

まぁ、それはさておき……その日はシグナムの休暇だった。
家に帰る途中、局員がその男を捕まえて地上本部に連行してる途中だった。

シグナムは頭を抑え、局員を止めて男が何をしたのか聞いてみたところ、次元震が起きた場所の近くに居たらしく、事情聴取として連行したらしい。
それを聞いたシグナムは、頭痛が酷くなった気がした。

だが、男を調べられるといろいろまずい事態が起きる。
男は良くも悪くも、最強の部類に入るのだ。
さらに不死身。
もし、対応を誤るとミッドが物理的に消える。
故に、シグナムは局員に「後は任せろ」と言って、男を引き取った。
そして、シグナムはある程度事情聴取して、身体を重ね合ったわけだが……

（いくら外でも回数が回数……）

やってしまった回数は0が、50個ほど……やり過ぎである。

「シ～グ～ナ～ム～！！」

「は、はい！　なんでしょうか！？　主はやて！！」

「とにかく！　お腹の子の父親は誰なん！！」

「……黙秘、します」

あの日、やった後は気持ちよく寝ていたシグナム。
ベッドはぐしゃぐしゃで、ベトベト、ネチャネチャと生臭いベッドの上で、寝ていたシグナムをはやてが発見、悲鳴を上げ、シグナム起き、帰ってきた他の守護騎士達が部屋に乱入、そして守護騎士

達が悲鳴を上げる。
はやてはシグナムに何があったのかを問い、シャマルはシグナムの身体を何日も渡り検査した。
その結果が……できちゃったである。

「黙秘権あるとおもうんか？」

「うっ……」

シグナムは追い詰められ、「もう、バラすしかない」と、そう思った時……

「ハロ～」

雲丹頭をした男が、乱入してきた。

▲　三人称　▲

▼　貴史　視点▼

カスミと薫から逃げて、今は八神家のリビングに居る。
はやてらに、一瞬で拘束されたがな…。
しかし……

「なんでシグナムも捕まってんだ？　なんかした？」

「ああ、したな……主にお前が私に」

「ほぅ～つまりはだ。　シグナムをあんなにしたのは」
「貴様という事か……」
あん？　なんの話だ？　まったく、要領を得ない会話は、やめてもらいたいな。
「おい、チビに犬」
「チビじゃねぇ！　ヴィータだ！」
「我は犬ではない、狼だ。　名はザフィーラだ」
知ってるよ。
そんくらい……。
「前に会った時、私は危険日だと言ったな？」
「ん？　ああ、そう言われた」
「出来たそうだ」
へぇ～、そいつはめでたい。
「誰の子が？」
「さっきの話の流れでわかるやろ！？」
バンッ！　と、はやてはテーブルを叩きながら立ち上がる。
って、まさか俺とシグナムの子？

「え？　マジ？」

「ああ…」

確認の為にシグナムに聞くと、マジらしい。
まだ、性別が判明するまで育ってないらしいが……そうかぁ…
…子供がなぁ。

「……男がいいな」

「娘が二人居るらしいしな」

「ああ…」

俺の独り言にシグナムが、俺の娘情報を暴露する。
それに短く答え、うんうんと頷く俺……って、この状況まず
くね？

「ほう……娘が二人なぁ……」

「その娘は母親が違うらしい。　主はやて」

ー ーピキッ

「母親が違う？」

「一人はあの神崎ジェイル……」

ー ーピキッ、ピキッ

「もう一人は、平行世界のミッドで管理局に働いてる。　名は確か……カルタ…だったか？」

「お、おう」

なんか、はやてが恐いんだが……なんかしたか？

「常識を……持てぇぇえええ！！　しかも、一人は犯罪者やんか！！」

うおっ！？　吠えた。

まぁ、当然か……。

このあと、怒り狂った八神家（シグナム除く）の奴らをからかったりして遊んだ。

そして、数ヶ月……え？　麻帆良は良いのか？　次元世界の向こうの世界では時間すら違うから、一年こちらに居ようとも、向こうでは三時間ぐらいだから平気だ。

んで、ようやくシグナムの身篭ってる子供の性別がわかった。

男だった。

とりあえず、出産は立ち会う事になり、シグナムと子供を幸せにする事ではやて達は、俺らの関係を認めてくれた。

にしても、なのは達の怒りも買う事になったのはびっくりした。

動機は不純だとかなんだとか……理不尽じゃね？

「んじゃ、そろそろ行くわ」
「次来るのはいつになる？」
「しばらくはちょくちょく来るさ…」
「そうか……」
「またな……シグナム」
「ああ」

そして、俺は世界を移動した。
次元震が起きるのはデフォだ。
諦めてもらおう……。

▲　貴史　視点▲

▼　三人称　▼

本日二度目の三人称。
え、これ三人称だと思ってたの？　ってツッコミは受け付けない。
泣けるから……。

さて、ここはミッドチルダ。
管理局地上部隊、七つの大罪部隊。

「暇だにゃ～」

「暇＝平和……良いことじゃないですか」

「もぶっち！　バーベキューしよう！！」

「いきなりですね。　まぁ、構いませんが……」

七つの大罪部隊。
それは管理局地上部隊で、最強のチーム。
あの貴史ですら、凌駕するメンバーが居るのだ。
では、此処でメンバーを紹介しよう。

「参加出来る者を探すでござるよ！！」

この言語が統一されてない喋り方をする女性が、この部隊を率いる隊長……名をカルタ・ナンブ。
貴史の二番目の妻だ。

「とりあえず、うちの部隊から探してみましょう」

彼の名前はもぶ。
名前はアレだが、なんかいろいろと凄いらしい。
この部隊の常識人だ。

「名無しちゃん、はぁっけぇん♪　これからぁ、バーベキューやるんだけどぉ……どぉう？」

「……」

「もぶりん。　名無しん参加だとさ！」

「はいはい」

「……」

このボソボソと、小声で話す人は名無し。
世界で、一番謎の多い存在。
その実力は、クロナと戦って生存出来るほど……。

「私もバーベキューに行く！」

「ドワーフさん参加っと……」

小さい身体を目一杯使って、参加を告げる女の子。
この子は、ドワーフというらしい。
種族名にしか、聞こえないのは気のせいだ。
ちなみに種族はドワーフらしい。
……気のせいだ！！　大変大事な事なので二回言った。

――ガシャ、ガシャ

と、何やらこちらに向かって来る魔導兵。
カルタさんに手紙を渡した所を見ると、アレも管理局員なのだろうか？

「アマテラス、自宅参加」

「魔導兵に料理を渡せば、良いんですね」

「ハイ」

どうやら、アマテラスの魔導兵みたいだ。
アマテラス……彼女は管理局一の引きこもりらしく、連絡するときは魔導兵を介してするらしい。
ちなみに女性。

「おじさんは忙しいみたいですね」

「新人ちゃんの教導は大変ね」

そして今話題に出てるのは、普通のサラリーマン風の局員。
しかし、この最強部隊のＮｏ．１。
だが、今にも言った通り他の部署に引っ張りだこ……自分の部隊に居るのはあまり少ないのだ。

「あとは座敷童子ちゃんですね」

「参加っ！！」

「参加みたいですわね」

この子供としか思えない子は、座敷童子ちゃん。
いつの間にか、七つの大罪に所属していて、いつの間にか副隊長になっていたらしい。

今、紹介したので七つの大罪のメンバーは終わりだ。

「次は問題児（プロブレムチャイルド）ですね」

「さっき電話したら、すぐに来ると言ってたナリ」

「姉よ！　来たぞ」

「「「ゴチになりま～す」」」

「では、近くの公園にでも」

もぶがバーベキューセットを用意して、いざ出発という所でけたたましい警報がなった。

『近くの公園に次元震が発生と同時に、計測器を振り切る程の魔導師が現れました！　局員はただちに武装して、現場に急行してください！！』

「「「バーベキューパーティーをダメにした奴を倒す！！」」」

「あ、ちょっ…」

もぶが止める前に、問題児の隊員は、現場に向かった。

そして、それは七つの大罪にも居た。

しかし、彼女は先の三人とは違って喜々として……まるで愛しの人が来たと言わんばかりの表情だった。

そして、場所は変わりミッドのとある学校。

――キュピーンッ！

「！！　パパ！！　ん？　パパの体にママ達とは別の女の匂い……カスミさんや薫さんじゃない」

「亜衣ちゃん……凄いね」

彼女の名前は、南武　亜衣。
またの名をアイ・ナンブ。
カルタと貴史の娘である。
ただ、今回の出番はこれだけ……。
学校を抜け出して来る可能性もあるが、出番は本当にこれだけです。
次のコラボでは、ちゃんと出番があるので自重してください！！

「む、わかった」

さて、場所は公園に移るとしましょう。
視点は貴史へと変更します。

▲　三人称　▲

▼　貴史　視点▼

さて、やってきましたミッドチルダ！　地上部隊の近くにある公園。

「お父さん！！」

ん？　って、うおっ！？　素晴らしい巨乳が飛んできた！！

一一抱きっ！

うむ、胸元に当たって潰れる胸がたまらん！　つーか……

「先日ぶりだな、カルタ……。　五日酔いは治ったか？」

「パパと亜衣の愛で治った～」

えへへ～と、目尻が垂れてる。

……酔ってるのか？　と思ったらキリッと元に戻したり、また（さっきよりはマシに）笑顔になったりと忙しい奴だ。

「「「バーベキューパーティーを潰した奴は貴様かー！！」」」

「あん？」

カルタの頭を撫でてると、見知った顔が三名ほど隊舎から現れて、襲って来た。

このまま行くとカルタを巻き込むな……まぁ、大丈夫だろうと思うがこれでも男だ。

妻は守らないと……だろ？

「死に」

「さらせぇぇぇえ」

「きぇぇえええええいっ！！」

きぇぇえええええいって……まぁ、いいや。

俺はカルタをそのままに（俺の首にぶら下がって、胸を押し付けてる）しながら、縮地でA、B、C（三人の名前な）の後ろに移動して、げんこつを三発。

「俺を倒したければ、マリアとカルタに頼め」

「ん～情けないぞ？　ンッ…また強くなったか？」

情けない？　出会い頭で実力が上の俺に会った瞬間、俺以上の実力者になる癖にか？　まぁ、レベルが上がったのは肯定するが……

「会う度に強くなってる♪　今回は１０分も掛かったぞ♪」

カルタが言った１０分とは、俺よりレベルが上がるのに掛かった時間だ。

まったく、規格外め……。

「次会ったら勝つからな…」

「クスッ期待してます。　早く、私を満足させて（負かしてく）下さい……ね」

さて、カルタとの挨拶もそこそこに……

「問題児に七つの大罪大集合だな。　欠員も居るみたいだが」

「ええ、バーベキューパーティーをやろうと思いまして」

バーベキューパーティー……だと？　肉食べ放題！！

「…き……ぎ…は？」

「え？」

「焼きおにぎりは？」

「シメに炒飯を作るのでやろうと思えば…」

炒飯！？　くっ……美味そうだ。

「……参加したいんですか？」

「したい！　食べたい！！」

「では、すぐに仕事を終わらせましょう」

「赤い分身（ブラッディ・アバター）……こいつに聞け！　さぁ、バーベキューだぁぁああ！！」

「「…「おー！！」」…」」

「はぁ…しょうがないですね」

というわけで、赤い分身を近くの局員に渡して、俺達はバーベキ

ユーパーティーを始めた。
高級肉ウマウマ。

そして夜。
ほろ酔いカルタを家に送り、成り行きで家に泊まる事に……。

「ママ～、ゲームしよ！」

「それは構わないが、今日は貴史が居るぞ？　貴史と遊ばなくて良いのか？」

「仲間外れか～」

「大丈夫！　私とママどっちがパパの子どm」

「アウト、却下だ。　色ボケ娘」

まったく、何を言い出すかと思えば……。
一応、この小説はＲ－１５指定だぞ？　自重しろ、自重……。

「じゃあ…ぷりぷり」

……何ソレ？

「セ●が発売した、新しいぷ○ぷ○だ」

ぷにぷにの方が良くね？　まぁ、いいけどよ……。
とまぁ、こんな感じでぷりぷりをして過ごした。

▲　貴史　視点▲

▼　三人称　▼

さて、もう一人の南武の妻はと言うと……。

「茶々丸のエネルギー問題についてだガ…」

「GNドライブはどうだね？」

「次元連結システムの方が……」

「確かに……次元連結システムで、得られる莫大なエネルギーは惜しい。　しかし、茶々丸が耐えられるかどうか……」

超と一緒に研究所で、茶々丸の改造に精を出していた。

「ん～？　もしかして、今回はこれだけかい？」

すみませんがそうです。

「ふむ……これは父上達の折檻が必要かな？　貴史の最初の妻を蔑ろにするとは」

ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべる、神崎ジェイル。

次回は貴女が全面に出るので、それだけは勘弁して欲しい。

いや、切実に……

「ふむ……まぁ、いいだろうw」

それでは、また次回！

▲三人称▲

ＣＨＡＣＨＡＭＡＲＵ－ＢＵＲＳＴ（前書き）

茶々丸強化ｗｗ

ぶっちゃけ言うと強さ表がもう意味の無いものへｗｗ
まぁ、茶々丸のところだけですがｗｗｗ

CHACHAMARU－BURST

▼　茶々丸　視点▼

マスター達が出掛けてる間、私は超とドクターの改造を受けてます。
なにやらエネルギーの消費が激しく、どうすればうまく回せるのかと話し合われてます。
中には次元連結システムと言った、危険なシステムまで導入するとか……。
私の駆体が耐えられません。

「ふむ、なら次元連結システムを導入してみるかね？　絶対耐えられないと思うが」

え？

「茶々丸なら大丈夫ネ」

ちゃ、超？　いったい何を？

緊急事態です。
どうやら、私に次元連結システムが組み込まれるみたいです。
これはヤバい。　ドクターも試しに導入してみようとか言ってますし、私は此処でスクラップになるのでしょうか？

大丈夫、マスターの幸運は絶望的ですが、私はまだ大丈夫なはずです。

と、いうわけで次元連結システムが組み込まれました。

「じゃあ、茶々丸。　次元連結システムを起動させるネ」

「了解。　次元連結システム、起動。　多次元より、エネルギーが来ます」

――ズガァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアー―――――――――――ンッッッ！！

エネルギー上昇……各回路に、異常な程の負担を確認。　これは……

「体がもちませんね」

「ム、やはり無理ではないか！　すぐに次元連結システムを停止を」

「そんな事言われずとも、もうやってるヨ！！　くっ…停止信号を受け付けないネ！！」

「だから、(前回)あれほど次元連結システムはやめろと言ったのだ！　急いで処置しないと、茶々丸が死ぬぞ！！　そうなれば、カスミの雷が落ちる！」

マスター……サヨウナラ。

まさか二回も、マスターにお別れの言葉を言うとは思いませんでした。

「思考停止」

あ……。

――ブツンッ！

▲　茶々丸　視点▲

▼　ジェイル　視点▼

――ズドォォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオーーーーーーーーーーンッッ！！

大規模な爆発が起きると、モニター室を残して研究室は更地となった。

此処が、ダイオラマの魔法球の中にある研究室でよかった。

いや、茶々丸の体を壊しておいて、良かったもないのだが……。

「しかし、間に合ってよかった」

『ドクター……ありがとうございます』

あの爆発の瞬間、茶々丸のすべてを電子化して、スパコンに入れて心と記憶を守ったのだ！　フッフッフッ…伊達にドクターと、呼ばれてないのだよ。

「いやいや、すまないネ。　私の技術を少し過信してたヨ」

少しではないだろ!?

「とりあえず、第三駆体に移すよ？」

『はい』

茶々丸の新しい体に、データをインストールする。
そのさい、心は別に……デリケートな部分だからね。

数分後、無事に茶々丸は生まれ変わった。
ＧＮドライヴ内蔵して……。

「じゃあ、早速ツインドライヴの実験を」

「待ちたまえ!!　いくらなんでも早すぎる!!　せめて、今の状

態を慣れてからでないと……」

「だったら、いまからシュミレートをするネ」

まぁ、それならマシか……。

「では、茶々丸。　シュミレーター室に向かってくれ」

「了解しました」

そう言って茶々丸は、研究室を出てシュミレーター室に向かった。

さて、どこまでいけるかな……。

▲　ジェイル　視点▲

▼　三人称　▼

茶々丸がシュミレーター室に入ると、すぐさま実験が行われた。

「では、今から出てくる敵達を相手に無双してくれｗｗ」

無双が絶対条件なのだろうか？　まぁ、今の茶々丸なら無敵クラス以外なら勝てるだろう。

「了解しました」

それがわかってる茶々丸は、了解と答える。

そして、内蔵されてるＧＮドライヴを展開しようとするが、此処

で一つ問題が起きた。

「……あの、ドクター」

「なんだね？」

「このままＧＮドライヴを展開すると、制服が破けるのですが……」

そう、今は体の中に収まってるＧＮドライヴ。

しかし、一度（ひとたび）展開すればコーンの形をしたＧＮドライヴは、服を貫いて出て来る。

下手をすれば裸になるのだ。

いや、このまま戦闘すれば必ず裸になる。

今は、まだいい。

この施設には、女性しか居ないから、だが外は違う。

外には男性が居る。

さらに、茶々丸の体はＧＮドライヴを出しても、人間のそれとあまり変わらない。

結局、何が言いたいのかというと、恥ずかしいのだ。

ジェイルは、見せ付ければいいと言うが、茶々丸には痴女でもないし、野外で進んで露出しようという考えは、持ち合わせていない。

「ふむ、なら次の駆体がよかったか…。　では、体を入れ替えるから戻ってくれ」

何ということでしょう。

まさか、実戦されぬまま……爆発したわけでも、破損したわけでもないのに使わずに、次の駆体に……というか、どれほど茶々丸の体があるのか、かなり気になる。

そして、数分後。
ＧＮドライヴは内蔵されて、内部からの粒子散布に加え、オプション装備によるＧＮドライヴの接続で、一気にレベルアップ。
ダブルオーク○ンタみたいな、ツインドライヴを搭載された形になった茶々丸。
アレ？　どうしてこうなった？　確か、最初は普通に一基だけのＧＮドライヴで試運転して、次にツインドライヴをやるはずだったのに……。

（なんだか、どんどん魔改造されてます。　このまま行ったら、私はどうなるのでしょうか？）

「では、まず内部のＧＮドライヴを稼動して、シュミレートだ」

「了解しました。　ＧＮドライヴ起動。　ＧＮ粒子を散布します」

茶々丸はＧＮドライヴを起動させると、肩、腕、太股と露出してる人工皮膚から、粒子が出て来る。
普通に見れば人が体内から、魔力を解放してる風にしか見えないので、そんなに生々しい感じはしない。
そして、粒子は背中に集まり翼を広げた天使のようになる。
うむ、美しい。

（ふむ、散布量がク○ンタ以上……。　一基だけで、ツインドライヴ並の量を出すとは、流石は私だ！！）

ジェイルは茶々丸の現状に満足そうにうんうんと頷いてるが、散布量の多さ＝すぐに弱体化するという事を知って……いるだろうなぁ。

おそらく散布量が多いのは、その方がカッコイイからなのだろう。

天才の考える事はわからない。

……機器は大丈夫デスカー？

と、そんな事はさておき、茶々丸の前に十数個のバルーンが現れる。

おそらく、基本運動の実験なのだろう。

「では、やってくれ」

ジェイルは茶々丸に指示を出すも、どう動けとか言わない。

普通の機械なら、そんな曖昧な指示を出せば動かないだろうが、茶々丸はそこいらの無能とは違う。

あ、いや……普通の機械やロボットが無能というか、そんなことを言ってるのではなく……まぁ、雰囲気というものだ。

「了解しました。　展開、ＧＮビームライフル」

茶々丸の後ろに科学式魔法陳が展開され、陳の中からライフルが出て来る。

そして、茶々丸はトリガーを引いて、精密射撃を行った。

バルーンは勿論、すべて一発ずつ受けて破裂した。

「ふむ、威力は申し分なし。　粒子の生産量は一基でも、ツインドライヴ並。　……やりすぎたｗｗ」

茶々丸のデータを見て、ジェイルが感想を漏らす。
一基でツインドライヴ並の生産量のＧＮドライヴを造るとか、なんというか凄いの一言である。
イオリアも、これを知ったら驚くだろう。
素晴らしい技術をありがとう。

「しかし……これだけの技術なら、次元連結システムから受けるエネルギーに、耐えられるボディを作れるのにやらないのカ？」

「君もこだわるねぇ。　いくら言っても、褒めてもやらないよ。面白みがなくなるだろ？」

超の言葉に、溜め息混じりに答えるジェイル。
本当に超は、何を考えてるのだろうか。
次元連結システムとか、貴史が茶々丸に目をつけたらバトルが始まる。
それも、世界崩壊レベルの……。
今の段階でも、バトルになりそうだが……。

「まぁ、それはさておき……ＧＮ武装にも、小型のＧＮドライヴを搭載すれば……」

「私が言うのもアレだが、貴女も少しは自重すると良いヨ」

「君には負ける」

いやはや、どっちもどっちな気もしますよ？　そんなマッドはさておき、シュミレーター室の茶々丸はと言うと……

「ジャンジャンバリバリ～」

——ズガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ
ガガガガガガガガガガガガガガ

ＧＮビームマシンガンを撃ちながら、魔族や鬼を殲滅していた。
ちなみにこの魔族と鬼は、実体に近いホログラムで、致命的な攻撃を受ければ消え、あちらの攻撃も実際に受ける事になるのだが、茶々丸はレーダーをフルに使って、ノーダメージで掃討していく。

「ＧＮミサイル、連弾発射！」

——ドシュッ、ドシュッ、ドシュッ、ドシュッ、ドシュッ、ドシュッ、ドシュッ、ドシュッ

科学式魔法陣から、今度はミサイルが現れて、敵密集地帯に撃ち込む。

——ズガガガガガガガガァァァアアアアアアアーーーーーンッ！！

「次、ＧＮソードＶで接近戦をします」

そう言ってＧＮソードＶを召喚して、装着し最大加速で敵陣に突っ込み、斬って斬って斬りまくる茶々丸。
それも一撃で、倒してるのだから容赦がない。

「ＧＮダブルバズーカで、殲滅します」

ＧＮソードＶを戻して、魔法陣からＧＮバズーカ?を二つ召喚して、一つにする。

「ＧＮダブルバズーカ、発射！」
――ズガァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアーーーーーーンッッッ！！
そして、茶々丸は躊躇無く（ちゅうちょなく）、トリガーを引いて敵を消した。
ジェイルは茶々丸が弾き出す数値に、満足げに頷きながら、次のステップへ指示を出す。
「次は、ＴＲＡＮＳ－ＡＭを使ってみようか」
そう言って、再び茶々丸の前に無数の魔族と鬼が現れる。
魔族と鬼が、涙目っぽいのは気のせいだろう。
なぜなら、彼らはホログラムだから………うん、気のせいさ。
「了解。　ＴＲＡＮＳ－ＡＭ」
茶々丸がＴＲＡＮＳ－ＡＭと口にすると、茶々丸の体はオーバーヒート並に赤くなり、粒子の散布量が今までと比じゃないくらい放出される。
それはもはや、高濃度な霧雨だ。
外なら風などで多少は流れるが、この場は密閉された室内。
今まで正常だった機器も異常をきたし、観測が不可能状態となった。
「フッ……だがしかし！　私の機械には、ＧＮ粒子の影響を受けぬモノもあるのだよ！！　さぁ、存分に暴れたまえ！！　茶々丸ぅぅ

ううううう！！」

なんだかんだで、ジェイルも楽しんで見えるのは、気のせいだろうか？　きっと、気のせいでもないだろう。

「敵の殲滅を確認」

一瞬、それは終了した。

茶々丸の周囲には魔族も鬼もおらず、茶々丸だけがそこに居たのだ。

それも、ＴＲＡＮＳ－ＡＭ状態のままで……。

「ふむ、上々の結果だな」

「上々どころかこれは……」

「このままツインドライヴも成功すれば、茶々丸の負担を掛けるハイパーモードやオーバーヒートモードは、破棄しても良いかもしれんな（すでに破棄してるが）」

「だが、ハイパーモードで使える宝具（へいき）はどうするカ？」

「ＴＲＡＮＳ－ＡＭでも使えるはずだ」

「ふむ、なら問題無いネ」

傍から聞けば問題ありまくりな、ジェイルと超の言葉。

なんだ？　宝具（へいき）とは？　宝具並の兵器と言うのか？　とんでもないものを造るな、超は……

「いやいや、アレはカスミが創った世界の一つが造った兵器ヨ」

超まで地文に突っ込む。

というか、カスミが創った世界はいくつあるのだろうか？　ある意味、他のチートより常軌を逸脱している。

「では、次に移ろう」

「了解です」

「ツインドライヴプログラムを起動するネ！」

「ツインドライヴプログラム起動」

茶々丸の言葉に、ＧＮ粒子は濃度を上げて放出し、茶々丸を覆い隠す。

しばらくすると、ＧＮ粒子は分散して中から茶々丸が現れるが、茶々丸の姿は変わっていた。

まず、着ている服がメイド服からエ〇ァンゲリオンのプラグスーツ（綾波）になっており、背中にはＧＮドライヴを搭載したオプションパーツ（まぁ、ダブルオーク〇ンタの肩に着いていたパーツだ）がくっついており、内蔵されてるＧＮドライヴと接続されていた。

「ＴＲＡＮＳ－ＡＭ……ＣＨＡＣＨＡＭＡＲＵ－ＢＵＲＳＴ」

――ブワッ！！

瞬間、ダイオラマの魔法球全体にＧＮ粒子が散布された。

「こ、これは……」

「いやぁぁあああああああああああああああああっ！？！？」

「む、超！？」

ジェイルがＣＨＡＣＨＡＭＡＲＵ－ＢＵＲＳＴの現象に驚いてると、急に超が頭を抱えて悲鳴を上げた。

「カスミがカスミがカスミがガガガガガ…」

「いったい何が！？　ぬぉおおおお！？！？　こ、これは……」

――嗚呼、愛しのマスター……――

粒子に触れ、超とジェイルは茶々丸のマスターへの純粋な愛を感じる。

それはもう洗脳領域に入るくらいに……知らない者からすれば脅威だろう。

強烈な想いが自分にぶつかって来るのだから、しかもその想いはカスミという……此処まで来たら、茶々丸はガイノイドを超越した存在となってるだろう。

これからの茶々丸の活躍が、楽しみである。

▲　三人称　▲

最強（凶）の武芸者と最強（凶）の魔法先生（前書き）

コラボが多いと言われたこの作品。
でも、私はこれを続けたい！
それが私の小説で、私が満足する小説！！

というわけで、今回も錬金術師？様の【真・恋姫無双　最強（凶？）の武芸者】とのコラボです

▼　三人称　▼

妻と別れて、いざ自分の世界に帰ろうと世界移動した貴史。
しかし、貴史が出た場所は麻帆良でも見た事のない場所、なんか……三国志とかで、出てきそうな山とか見える。

「……何処だよ。　此処は…」

貴史は、一人でそうぼやいていた。
まぁ、当然と言えば当然だろう。
いくら博識な貴史と言えど、周りを見て此処が何処かなんて、わかるわけもない。
星を見るにしても、上にはさんさんと輝いてる太陽。
人に聞こうにも、周りに人など……

――ワァァアアアアア！！

「野郎共！　こっからが正念場だぁぁああ！！」

「「「無理ですって、お頭ぁぁああ！！」」」

「ぶるぁぁあああああ！！」

「「…「ぎゃぁぁあああああああ！？」…」」

「……居たよ。　つか、なんだ？　黄色いのが、光線とかに巻き込まれて吹き飛んでね？」

貴史は首を傾げながら、状況把握に勤しむ。
それはそうだろう。　周りは三国志の普通の兵とかなのに、二、三人ほど浮いてる存在が居るのだ。
そのもっとも最たるものが、ぶるぁぁあああああとか言って斧を振って、人を吹き飛ばしてるのだ。
シュールな光景以外何者でもない。

「とりあえず、加勢しに行くか……」

貴史はそう決めると、戦場に向かって歩いて行った。
しかも、その歩き方はゆっくりしてるはずなのに、いつの間にか戦場の中に居たりする。
はて？　かなりの距離があったはずだが……。
まぁ、それはさておいて、戦場を読者諸君と見てみよう。

「蛇咬（スネークバイト）！！」

「きゃぁぁあああああああ！！」

「姉上！？」

「お前も寝てな」

「がっ！？」

まず、蛇咬（スネークバイト）で灼眼のシャナ似の転生者を吹き飛ばす。

かなり強めに放ったらしく、その転生者は気絶して、気絶した転生者を姉と叫んだ関羽の後ろを取って、軽く手刀で気絶させた。

「ぬぅぅうあああああああ！　必然『キングクリムゾン！！』」

しかし、此処で貴史の思わぬ誤算があった。

一つは、自身の力に過信しすぎてたところ。

一つは、バルバトスの台詞を言ってる転生者の力を見誤っていたところ。

そして最後に、キングクリムゾンがなんなのか、わかってなかったところだ。

キングクリムゾンを受けた貴史は、真っ二つに切り裂かれ、転生者は貴史の前で斧を振り下ろしていた。

「手強い相手だったぜぇ」

しかし、その転生者も貴史の実力を見誤っていた。

（あ～……なんで真っ二つ？　さっきの技が原因か？）

そう、貴史は真っ二つにされたぐらいでは死なない。

そもそも、貴史を殺すには死のイメージを抱かせて、殺さないと死なない。

死を理解しきれない。
それが、超越者の悲しき性（さが）。
そして、まだ死んでない……いや、傷が塞がってるのに気付いたのは、さっきまで気絶していた……

「逃げて、狂夜！！　そいつ、まだ死んでない！！」

灼眼のシャナに似た転生者だった。

「何！？」

「おせぇ…蛇咬（スネークバイト）！！」

――ズガァァアアアアアアアンッ！！

狂夜と呼ばれた転生者は、すぐにその場を離れようとするが、反応速度や移動速度で貴史に勝てる者はそうは居ない。
故に貴史は渾身の一撃を叩きつける……が！

（なんだ？　こいつ）

蛇咬（スネークバイト）を叩きこまれた、狂夜は後ろに下がっただけでダメージらしいダメージを受けていなかった。

「おい、あんた……どんだけ固いんだ？」

「俺にもわからん」

「「……」」

二人の間に沈黙が流れた。
しばらくして、狂夜と貴史は地面を蹴り戦場を駆け抜けた。
貴史は狂夜達の部下を……
狂夜は盗賊達を……
互いに攻撃しながら、周りも倒して行った。
その戦いは台風……いや、嵐そのもので大地を割ったり、人を吹き飛ばしたりと凄まじいバトルだった。

「オラオラオラァアアッ！！　もっと速くなるぜ！！」

「ぬぅぅううう……必然『キングクリムゾン』」

狂夜はキングクリムゾンを使い、貴史に攻撃しようとした時、異変が起きた。
それは、貴史が大ダメージを受けて倒れるという結果が、狂夜が大ダメージを受けて倒れるという結果に変わったのだ。

「なっ……（いったい何故？　飛ばした過程に何が……）」

「教えてやるぜ……“勝利という結果にばかりこだわっていたら、いずれ勝利と引き換えに命を落とす。”　キングクリムゾン……攻撃するという過程を飛ばして、その結果を残す……そんな感じの技だろ？　だがよ……お前がすっ飛ばした過程に、俺が干渉出来たらどうだ？」

「ッ！？」

貴史は言う。
イメージ出来ない事は、起こらない。
逆にイメージ出来る事は、起こると……。

貴史は、狂夜が飛ばしたはずの過程の中で動き、狂夜の攻撃が当たる前に渾身の連撃を叩き込んだのだ。
飛ばした過程という時間に、干渉出来るという想像をイメージして、貴史は結果を変えた。

「でも、マジで固いな……８０％ギリギリで、ダメージらしいダメージを受けやがって……」

「結果を変える……あんたの方がすげぇよ」

「へぇ…まだ立てるか」

「ああ……立つ！」

――ダンッ！！

狂夜はボロボロの体に、鞭を打って立ち上がる。
目の前の脅威に、一矢報いる為に……。
貴史は狂夜の瞳に宿る小さな炎を見て、次は全力で当たる事を決意する。

「俺の名は、弦轟だ！！　あんたは？」

「俺の名前は貴史。　南武　貴史だ。　さぁ、やろうぜ……互いの最強をぶつけようじゃねぇか」

「応！！」

二人は名乗り合い、そして……

「今こそ…汝が右手に、その呪わしき命運尽き果てるまで、高き銀河より下りたもう蛇遣い座を宿すものなり、されば…我は求め、訴えたり……喰らえ――その毒蛇の牙を以て！！　汝が神に、我が身を捧げん！！」

貴史は右腕の封印を解いて、悪魔の腕（デモンズ・アームズ）を出して駆ける。

「ぬぅぅうううあああああああああああああっ！！　終焉！！」

狂夜は斧を振りかぶり、最大の技を出そうとする。

「（これが俺の全力だ…）……我こそは、蛇遣い座の使者なり、その呪わしき命運受け入れし者にのみ、賜うべきは毒蛇の牙に秘められし、高き天と深き地獄の力なり、されば愚者共に鉄槌を打ち下ろせ、荒ぶる神魔の怒りを以て！！」

貴史の悪魔の腕は、光に包まれ中から人の腕が現れ、背中に天使の両翼が出現した。

「ワールド！」「蛇（スネーク）！」

貴史と狂夜が交差する。

その光景は、誰にもまったく見えなかったという。

「エンド！！」「殺（ジェノサイド）！！」

瞬間、世界を破壊する程の威力同士……いや、世界を破壊する程

の力とそれを超える技がぶつかり合った。

此処で読者諸君の疑問に答えよう。

貴史が放つ蛇殺（スネークジェノサイド）は、相手を蹂躙し絶命させるだけの技。

次元を裂いたりする事も出来るが、世界を破壊する程の威力は本来は無いのだが、超越者の能力をフルに使うと、それは世界を破壊する以上の技となるのだ。

これが、貴史の全力……超越者＋天使モード。

通常時の神武　乱（貴史の娘）に、一瞬だけ迫る状態だ。

一瞬だけとかどんだけー。

さてさて、そんなこんなで時間も経って、二人のぶつかり合いは終焉を迎えたわけですが……

「「……」」

二人は互いに背を向け合い、貴史は右腕を振り下ろして、狂夜は斧を地面へ刺したポーズで居た。

「凄い……」

「どっちが、勝ったの？」

最後まで二人の戦いを見ていた、シャナ似の転生者と関羽。

そして、吹き飛ばされてなお、戦闘の結果が気になる盗賊達と、狂夜達の部下が固唾を飲んで見守る中、二人の体は揺らいだ。

――ドサッ…

「っしゃぁぁあああああ！　勝ったどぉぉおおおおー――――

ーーーーッ！！」

ーーワァァアアアアアアアアッ！！

狂夜は倒れ、貴史は右腕を天に掲げて勝利宣言。
周りは二人の戦いに感動したのか、敵と味方関係なく、泣き、笑い、抱擁し合い、固い握手をした。
何やってんだ？　こいつら……

▲　三人称　▲

▼　貴史　視点▼

狂夜と戦った日から三日。
俺達は仲良く愛紗と紗那（シャナ似の転生者な）を、容赦なく鍛えていた。

え？　あの後の事が聞きたい？　う～ん、そうだなぁ。
あのあと、仲が良かった盗賊と狂夜の部下なんだが、急によそよそしくなった。
まぁ、さっきまで戦ってた奴らだしな。
んで、紗那が俺と盗賊の関係を聞いてきたんだが……

▼　回想開始　▼

「あん？　こいつら盗賊なの？」

「そうよ。　って、知らなかったの？」

「いや、此処が何処だかわからなくてな……誰かに聞こうかなって思ってたから、チートが弱い者イジメをしてる…。　これはいかんと思い、加勢した次第で……そうか、盗賊だったのか。　おい、お前ら盗賊なんぞ止めとけ、何が楽しいかわからんが」

「そんなんで、止める盗賊が何処に居る！！」

「俺達も、ついさっきまではそう思ってた。　だが、あんたら二人の武のぶつかり合いに感動した！！　そうさ、俺は誰にも負けないくらい強くなって、偉い官僚になり…田舎のお袋が自慢出来る立派な人間になるのが夢だったんだ」

「そうだ……。　俺達も……」

「うんうん、良い志じゃねぇか。　道は踏み外したかもしれん。だが、踏み外したら、戻れば良い！　一度や二度くじけて、人の道から逸れても、過去を振り返り夢を思い出し、元の道に戻ればいいさ」

「ああ、俺は盗賊をやめるぞ！」

「俺もだ！」

「俺も……」

「道を踏み外したまま、終われるかよ！」

「お前達、それで良いのか！？」

「良いじゃない？　愛紗…。　ようし、この私が、あんたらを部下にしてあげるわ！！　どうせ行くとこないんでしょ？」

「姉上！？」

「「……「「やったぁぁあああああ！！！」」……」」

「気前良いなぁ」

「あんたほどでも無いけどね」

▲　回想終了　▲

んで、そこから狂夜も起きて自己紹介タイム！　その時に、三人の真名を教えてもらった。

弦轟の真名が狂夜。
シャナ似の転生者が、関忠で真名が紗那。
んで、関羽で真名は愛紗。

まぁ、性を見ての通り紗那と愛紗は、姉妹らしい。
さて、説明もそこそこに指導、指導♪

「おらぁぁあああ！　さっきから集中力が散漫してっぞ！？　紗那！　愛紗！！」

「ちょっ！　少しは手加減しなさいよってきゃぁぁあああああ！！」

「くっ！　このっ…」

「ぶるぁぁあああああああああああ！！　ジェノサイド・ブレイバーーーー！！」

「き、狂夜殿！？」

ハッハッハッ狂夜もノリノリだな♪

俺は狂夜の横に行き、吹き飛んだ姉妹を視界に納めたまま、狂夜にある提案をした。

「よし、アレをやろうぜ？」

「うむ！」

狂夜はディアボリック・ファングを構え、俺は赤い魔導式銃（ブラッディ・マジックガン）を二人に向けて構えた。

「おーい、お前ら……避けろよ？」

「「ちょっ！？」」

「ジェノサイド…」

「赤い（ブラッディ）…」

ディアボリック・ファングと赤い魔導式銃に、膨大な魔力が篭められる。

「ブレイバーーーーーーッ!!」「不殺の魔弾（バレル）」

瞬間、二つの破壊光線は関姉妹を飲み込んだ。

「やりすぎたか？」

「んな、やわな鍛え方してないだろ？」

「そうだな」

不安そうに眺める狂夜に、俺は心配ないと言うと、あっさり不安に満ちた顔を消した。

「だい、じょうぶなわけ……ない、じゃない……あのバカ共……」

「姉上……今日は、このまま気絶したままでいましょう。　もう、私は無理……です」

ほら、煙の中から原形を留めて気絶……してねぇな。

「狂夜。　どうやら気絶したフリして、俺らを殺（や）る気だぜ？」

「何!?」

――バッ

「ち、違っ！　そんなんじゃ……」

クックックッ掛かったぁ♪

「さぁて、修行再開だ」

「「も、もう嫌だぁぁあああああああ！！」」

弦轟隊隊舎は、今日も平和だ。

それから、一ヶ月が経った。

紗那が拾った盗賊達は、今やどの隊よりも強い。

将軍相手には敵わないが、連携が上手く追い込むまでは出来るほど。

まさか、此処まで強くなろうとは……

そして、紗那と愛紗の実力も上がった。

愛紗なんか……昨日、胡桃（くるみ）を握り潰して、蛇咬（スネークバイト）を習得してたし……。

まぁ、なんだかんだで長居しすぎたな。

「つーわけで、そろそろ帰る」

「ちょっ！？　急だなぁ……。　もっとゆっくりしていけよ」

「わりぃな。　俺にも待ってる仲間が居るんだ」

「そうか……」

「んじゃあな！　紗那や愛紗にもよろしく言っといてくれ」

「ああ」

こうして俺は、狂夜に別れを告げて世界を移動した。

▲　貴史　視点▲

▼　おまけの狂夜　視点▼

貴史が帰って三日。

あのあと、紗那と愛紗が帰ってきて貴史が帰ったと伝えたら、予想通りというかなんというか、紗那達は怒った。

今でも腹を立てる。

困ったもんだ。

――キランッ

「ん？　なんだ？」

空を見上げていたら、キラリと空の一部が光った。

というか、何か落ちてきてないか？

――ゴォォオオオオオオ…

はて？　どっかで見た事ある武器だなぁ。　つか、でけぇ……

――ズドォォオオオオオオオオンッ！！

それは、俺の横に刺さった。
長い銀の棒、先端には槍のように両刃の刃がついており、すぐ下には巨大な刃が左右に……

――ヒラッ

「ん？　紙？」

武器と一緒に落ちてきたであろう手紙を手に取り、内容を見ると貴史から俺に宛てた手紙だった。
手紙の内容はこれだ。

『世話になった礼だ。　真・ゲッターロボのトマホークを送る。大きさと長さは調節出来るから、届いたらちょうどいい大きさにしな。　貴史より』

……そっかぁ。
ゲッターの武器だったかぁ。
通りで、見覚えがあると思ってた。

▲　おまけの狂夜　視点▲

麻帆良祭の準備……してねぇじゃん　ｂｙ貴史（前書き）

ネギま！編　最終章開幕！

麻帆良祭の準備……してねぇじゃん　by貴史

▼　三人称　▼

三人が元の世界へと戻って数日。
麻帆良は祭の準備に、てんやわんやしていた。
そんな中、我らが主人公達は……

「あ～もうすぐ麻帆良祭やな～」

「せやね～」

「もぐもぐ」

薫は木乃香と刹那を連れて歩いていた。
しかし、薫の名誉の為に言おう。
これは、クラスの出し物の買い出しなのだ！　決してサボりではない！！
もっとも、サイドポニーの侍ガールは誘惑に負けて、先程出店で買ったクレープにパクついてる。
これが薫なら何やってんだ？　とツッコムのだが、パクついてるのはあの刹那だ。
しかも、クレープに夢中なのに人混みの中をスルスル避けながら食べていて、口にはクリームが着いてる。
何と言うか和む。

「せっちゃん、前向かなぶつかるえ～」

「探査能力をフル稼働してるので平気です」

「「……」」

薫が注意するも、刹那の言葉に唖然とする二人。

刹那が言う探査能力とは、薫が教えたもので破面（アランカル）が使ってたアレだ。

よもや自身が、教えた（身につけさせた？）能力をこんな事に使うとは、思って無かったのだろう。

もし、これが薫と刹那の師にあたる弥勒に見つかったら、説教所ではないだろう。

彼らは厳しいのだ。

と、そんな事はさておき……三人が教室に向かってると、薫が微弱な霊圧を感じた。

「ちょー、ウチ用事を思い出したわ。後は頼むえ」

「はい」

「気ぃつけてな？」

二人も霊圧を感じたのか、薫を止めない。

彼女達は霊圧を感知出来るが、所詮はそこまで薫みたいに対処の術がないのだ。

まぁ、そんな事は横にでも置いておいて、薫は二人と別れて微弱な霊圧がする森の方へ向かった。

「確か、この辺のはずなんやけど……」

――■■■■■■■!!――

「ん？　迦愚土？」

微弱な霊圧がする方へ、足を進めると普段は心の中で大人しい迦愚土が、悲鳴のような雄叫びを上げた。

「どないしたん？」

（声が聞こえたんだと。　自分を呼ぶ声、自分を侵食していく声がな…）

薫の問いに答えたのは迦愚土ではなく、薫の虚（ホロウ）の力の源である香だった。

（つかよ、他の刀（やつら）が見当たらねぇぞ。　更木とやちる、神槍、鏡花水月、逆撫（さかなで）、流刃若火とかは居るんだが……）

「なっ！？」

香の報告に足が止まる。

薫が使ってる斬魄刀は、神様からのもらいものだが、そのすべてが本物。

故に薫の中は斬魄刀と香、火竜とアレが居る。

しかし、他の斬魄刀達が居ない。

コレを意味するのは、薫はもう居ない斬魄刀を使えないと言うことだ。

（いや、斬魄刀自体はあんだが中身が居ない。　呼び出せるが、始解も卍解も出来ねぇなこりゃあ）

「破面（アランカル）の斬魄刀は！？」

（そいつらは問題なく居る。　死神の斬魄刀共が一部を除いて居ねぇから、普段出て来ねぇ奴も出てやがる）

「死神の斬魄刀が居ない。　それは、目の前に倒れとる死神と関係あると思う？」

薫が再び足を止めると、そこには傷だらけの死神が横たわっていた。

「傷口から察するに刀傷…」

（それも鋭い、そして凄まじい速さで斬られたもんだな……）

「風死（かぜしに）やな」

薫と香は瀕死の死神を双天帰盾で、傷を癒しながら傷口を分析して、もうすでにうろ覚えのＢＬＥＡＣＨの原作を思い返す。

（ルキア救出編……はないな。　う～ん……）

（アニメオリジナル……斬魄刀の反乱じゃね？）

「……はぁ、ほな…やることは一つやね」

（ああ、いやぁ支配系を奪われんでよかったなぁ？）

「鏡花水月や逆撫は、支配系最強やと思う。　そのお陰やろ」

薫は癒した死神を担いで、穿界門を開いて、ネギま！ワールドから出た。

このあと、斬魄刀達を再度調教……躾た薫は何食わぬ顔で、麻帆良祭の準備に加わった。

え？　薫無双を見たかった？　此処はネギま！ワールドですよ？

無理無理（笑）

そして、薫がネギま！ワールドを出た時、一柱の神も動いていた。

「は？　イレギュラー退治？」

（そうじゃ…）

カスミが屋上でぼーっとしてると、突然下級神まで降格した転生神が念話で話してきた。

ちなみにカスミは、反転神という神名を貰って、神位は運命の女神達と同等。

つまりは、オーディンやゼウスと言った最上位の神に意見出来るほど。

「誰がやるか。　お前がやれ、下っ端」

（そ、そこをなんとか！）

そんなカスミに、降格されて下級神となった転生神の頼みは、聴

き入られるわけもなく、話は平行線を辿った。

だが、そこにとある女性の声が、カスミと転生神の頭に響いた。

（カスミさん。　受けて下さったら想い人を、振り向かせるのに協力しますが？）

「何？　それは本当か？」

（はい♪）

女性の言葉に、一瞬たじろぐ。

それもそうだろう。

ちょっと世界を渡って、イレギュラーを殲滅すれば想い人との交際が出来るのだ。

それは神となってなお、超不幸のカスミには千載一遇のチャンス。

もう、一生分の運を使い果たしたような感覚だろう……少し大袈裟な気もするが……。

「わかった。　そのイレギュラー退治とやらを受けよう」

（ありがとうございます）

（すまぬ）

カスミは茶々丸を呼び寄せ、自分の家にあるダイオラマの魔法球に篭り、その準備をした。

「その世界とは何処ですか？　マスター」

「ああ、ＩＳ＜インフィニット・ストラトス＞だ。　私たちはその世界で、自分の分身人形を送り込む。　場所は南極と北極にするか……ノルンに運命を弄って各国に見つけてもらおう。　南極はアメリカで、北極はロシアにするか……代表候補は見つかった南極、北極でいいか」

「マスター…南極と北極は国ではありません。　北極に関しては大陸ですらありません」

「こういうのは、適当でいいのさ……適当で」

カタカタと、キーボードを打ち込む吸血鬼。
いくら彼女が現代人の転生者でも、それは６００年前の事。
何と言うかとても、シュールな感じがする。

「ＩＳはこれでいいか」

カスミは傍にあったジェイル印（じるし）のＩＳを、一つは茶々丸の分身人形に着けて、もう一つは自分の分身人形に着けた。
何故、都合よくＩＳがあるのかと言うと、そこはジェイルだからという事で納得してほしい。

「マスター…ドクターに許可は取ったのですか？」

「まぁ、大丈夫だろ。　転送っと」

――シュンッ！

キーボードを叩き、カスミは人形を転送させた。
そして、さらにキーボードを叩いて、天界へ通信を繋ぐ。

これも、何故繋がるのかは突っ込まないで頂きたい。

『あらあら、ごきげんようカスミ様』

しばらくして、巨大なモニターに運命の女神が一角が映し出された。

「ごきげんようウルズ。　もうわかってると思うが干渉を頼む」

『お任せを……それでは』

ブツンッと通信が途絶えて、カスミの任務はカスミの人形と茶々丸の人形が、行う事になった。

あの世界でどんなストーリーが、繰り広げられてるのか読者様の想像に、任せる事にする。

あえて言うならば、茶々丸による漆黒教なる変な宗教が出来た。

信仰者は、全員ＣＨＡＣＨＡＭＡＲＵ－ＢＵＲＳＴの影響を受けた者だとか……。

その頃、貴史はというと……

「んじゃ、よろしく頼むわ。　少年王さんと天才さん」

「任せなよ。　南武　貴史くん」

「絶対成功させるヨ！」

ホンキートンクで、暗躍していた。

▲三人称▲

一日目は告白、告白、転移（前書き）

最終章、麻帆良祭にはコラボが入っております。
尚、これは最初っから決まっていた事なのでそこのとこヨロシク！！
後半に、剣の舞姫様と竜華零様のキャラが出て来ます。

まぁ、またコラボか……と思って貰っても一向に構いません。
こういう作者なので……

では、本編どうぞ～

一日目は告白、告白、転移

▼貴史　視点▼

朝。
麻帆良祭当日。
朝っぱらからジジイに呼ばれて、世界樹前広場に来てる。
カスミも薫も眠たそうにしてるが、それも当然と言えば当然か。
薫は昨日の夕方から夜に掛けて、尸魂界（ソウル・ソサエティ）で離反した斬魄刀に、迦愚土を卍解して焼きを入れたらしい。
そして、カスミはカスミで自分の人形をＩＳの世界に入れた後、３－Ａに向かって出し物で使う衣装をエヴァ、茶々丸、長谷川、那波でチクチク縫ってたんだと。
つか、今ネギ少年が来るのを待ってんだが……全然来ない。
俺らみたいに、朝早くから呼ばれてないのか？

「なぁ、爺さん。　眠いんだけど」

「もうちっと待ってくれんかのぅ？」

もう待つ事に飽きた俺は、ジジイに正直な気持ちをぶつける。
というか、いつも正直なんだけどな。
だが、ジジイはもう少し待てと言う。
この台詞を聞くのも、すでに五回だ。
はぁ……速く来ねぇかなぁ……。
腹減ったし、眠いし……

「南武先生は、もう少し忍耐というのを持った方がいい」
「顔黒先生は、もう少し柔軟な思考というのを持った方がいいなー」
「なんだと！！」
やれやれ、怒鳴らないで欲しいものだ。
俺は事実を言ったまでなのにさ……。
しばらく、立派な魔法使いを目指す先生や生徒をからかいながら待つこと3時間、ようやくネギ少年がやって来た。
つか、遅ぇ……。
って、そういやこの時間帯に知らされたんだっけ？　少年……。
「はぁ……帰っていい？」
「今、始まるから待っとくれ！！」
あ～ぁ。　足りぃ……。
会議の内容は、世界樹を中心の六ヶ所の地点での告白行為を阻止だと……。
「以上、解散！！」
ジジイの言葉に人払いの結界は解かれて、広場に人が増えはじめた。
俺はカスミ達を連れて、学園祭を回った。
しばらくして……
一一ぼぉっ…

世界樹が輝き出した。
しかも、割かし近くで……
誰だよ！　と思って周りを見ると、そこには宮崎とネギ少年が居た。

「カスミ……あいつは油断しすぎじゃないか？　あれほどジジイが、告白に気をつけろ的な事を言って、アレってどうよ？」

「知らん。　私に聞くな。　頭痛がする」

そこから身を潜めて観察してると、ほうきを手に持った佐倉と数体の使い魔を連れた高音が華麗に参上ｗｗ
無詠唱で魔法の射手・光の矢を複数放って殲滅。
呆気に取られてる瞬間、無詠唱で武装解除して佐倉と高音を真っ裸にした。
そして、標的は宮崎に戻る。

はぁ……使えねぇ魔法生徒だ。

「少年、それくらいにしとけ……。　生徒との不純異性交遊は犯罪だぜ」

「それでもボクは、のどかさんとキスします」

「ハッ俺を差し置いて、イチャラブってんじゃねぇよ」

「おい、妻子持ち」

カスミがなんかツッコミを入れるが、そんなもん知らん！！

こっちとら恋人が神速で、子供孕むから普通にイチャつけねぇんだよ！

いや、まぁ……妻でもイチャつけるがな！！

「では、まず貴史さんにキスで倒します」

……よ、よぉうし、この俺を相手にキスで倒すとはよく言った！

「……やってみろや！　クソ餓鬼！！」

――ふわっ…

軽く殺気を放つと、高音、佐倉、宮崎が気絶した。

「うふふ…」

宮崎については、魔法を見られたから好都合と言えば好都合だ。

だが、高音と佐倉はこの程度で気絶してたらダメだろ……。

さて、暴走してる少年を前にだらだらと解説してるが、実はすでに終わっていたりする。

顎に一発打ち込んだら気絶したのだ。

まぁ、あれだ……まだまだだねって奴だな。

そのあとは、またいろいろなとこを回って遊んだ。

「いやー楽しかったなー。　カスミ」

「そうだな……。　なぁ、貴史……」

「あん？」

どっかの建物の屋根の上で、俺とカスミは麻帆良を見渡してると、顔を真っ赤にしたカスミが声を掛けて来た。

風邪か？

「一応、言っておくが……風邪じゃないぞ」

へー、風邪じゃないんだ。

……アレ？　今、普通に心を読まれた？

「貴史！　私はずっと……あの日、あの時出会った瞬間から……大好きだ！！！」

――ゴーン、ゴーン、ゴーン、ゴーン！

カスミの告白のあと、時計塔の鐘が鳴る。

俺は目を見開き、呆然と突っ立ってる事しか出来なかった。

だって、アレだぜ？　転生前から好きだって事は、アレがああなってこうなって……つまり何が言いたいかと言うと……。

「妻達と子供達が居るんだけど……」

「それでも、好きだという気持ちは抑えられん！！」

カスミの目は真剣だった。

いつものような曖昧な感情は無く、冗談で誤魔化すなどカスミを傷つけるだけだろう。

だから、俺は――

――カスミの唇に重ねて、カスミの告白に答えた。

「決して離さねぇぞ？」

「ああ…」

「逃げても追い掛けて傍に置く」

「ああ…」

「なら良い。　これからもよろしくなカスミ」

「ああ！　貴史」

俺とカスミは、長い月日を掛けて関係を新しくした。

……もしかして、薫もマジなのだろうか？　もし、そうならどうしよう？

▲　貴史　視点▲

▼　真名　視点▼

今日は朝から夜まで、告白生徒の告白行為を阻止せんが為に撃ち抜いてる。
嫉妬を篭めて……。
「こっちは貴史に告白したいってのに、まったく……私を差し置いて、想い人と恋人関係になるなど許せん」
報酬が良かったから食いついたけど、今にして後悔してるかな……。
なかなか、来るものがあるしね。
にしても、貴史はカスミさんとデートとはね。
私にも二日の日にチャンスがあるから良いけど、もし無かったらぶち抜いてる。
――ピピピピピピ…
「チッ…」
初日だと言うのに、いや…初日だからこそ愛しの人と祭を楽しみたいのか。
失恋したら気を紛らせる事もあるし……
――ドカンッ、ジャコッ、ドンッ、ドカッ!!
ふぅ……これで一段落すればいいんだが……。
『ねるとんパーティー告白タイムに入りまーす♪』

――ブチッ！

フッフフッ……そうか、そうかそんなに告白したいか！！　なら良いだろう。

「一人残らず撃ち抜いてやる…」

私は瞬動術で現場に駆け付けながら、告白者を撃ち抜いていく。

「私の管轄エリアで告白する。　お前達の不幸を呪え。　シュツルム！　アングリフ！！」

――ズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ドンッ、ドンッ、ドンッ、ドンッ、ドンッ、ドンッ、ドンッ、ドンッ、ドンッ、ドンッ、ドンッ、ドンッ！

「ふぅ……映画の撮影です。　お気になさらないでください」

周りのフォローをして、立ち去ろうとした時……

「あれ……龍宮くん？」

バイアスロン部の部長に、声を掛けられた。

しばらく見つめ合い、そして部長はコウキに似た姿で、コウキに似た声で……

いや、此処まで来ると昔の自分の未練がましさが嫌になる。

「実は俺……キミのことを……」

だけど、ありがとう。
感謝してるよ。　昔の私よ。
お陰で私は吹っ切れた！！

――バサッ！

私は着ていたワンピースを脱いで、部長を覆い隠す。
ああ、そうそう……脱いだと言っても下には、別の服を着てるからね？
頼むから、人を露出狂にしないでくれよ？

「え？」

「撃ち抜く…」

――バンッ！！

「我を阻む者無し……」

――ドサ…

さて、仕事の続きだ。
私は倒れた部長を放って、仕事へと戻った。

▲　真名　視点▲

▼　三人称　▼

麻帆良学園から少し離れた場所で、魔力が集まった。
そして、魔力は大きな陣を描き人を呼び出した。
人影は三つ。

「あれ？　アリア？」

「アリアさん!?」

「え？　アリス兄様にシルヴィア姉様？」

三つの影は見つめ合うが、こうしてても埒があかないと思い、三人で麻帆良学園に向かった。
そこで、予想外な人達と出会う事を知らず……。

▲　三人称　▲

二日目はイベント、いちゃもん、宣言（前書き）

さーさーよってらっしゃい見てらっしゃい！
麻帆良祭二日目、大イベント編が始まるよ～！！

二日目はイベント、いちゃもん、宣言

▼　三人称　▼

麻帆良祭二日目。
この日、体育館と龍宮神社は賑わっていた。
それもそのはず、麻帆良祭二日目は特大イベントがあるのだ。
それも、全ての出店が閉店するほどの……。

そのイベントがなんなのか、誰も知らされてないが、会場である龍宮神社にはチンピラや武闘家達がうごめいていた。
体育館？　体育館ではイベントに参加しない人達が、巨大なスクリーンの前に居る。
周りは工学部の連中が、編集してるように（・・・・・・・・）見せながら（・・・・・）。

さて、場所は再び龍宮神社。

「へー結構居るなー」

「そうだね。　ん？　あそこに人が集まってる」

会場に着いたネギ、小太郎（いつの間に来たんだ？）が、人が集まってるところへ行くと、そこには……

一位の賞金…￥１００，０００，０００
二位の賞金…￥　１０，０００，０００
三位の賞金…￥　１，０００，０００

と、書かれた掲示板があった。

「「ええー――――っ!?　一億ー――ッ!?」」

「おい!　どうなっとんねん!　ネギ!!」

「ぼ、僕にもわからないよー」

ネギと小太郎が、イベントで出る大金にあたふたと慌ててる時、奥ではとんでも無いことが起きて……いや、それほど大事（おおごと）ではないか……。

―ドシンッ

会場の奥で世紀末で、一子相伝の暗殺者に殺されそうな風貌をした大男に、その大男の右肩に小さな男が場を荒らしていた。

「オラァア、どけチビどもがァァ……!!　賞金はオレ様のモンだ!!　ひねり潰されたくなかったら、命があるうちに辞退しやがれェ!!」

ズシンッズシンッと、さらに奥へ進む大男。

そこに……

―ドンッ

「いてー―よ。　ぼけがぁ!!」

「あ、キタネエ…テメェ!　兄貴にケガさせて、ちょっと有利にな

ろうとおもってんじゃねーだろーな！！」

「あ？」

ただ軽くぶつかっただけなのに、大男と小さい男がぶつかった相手に、いちゃもんをつける。

いちゃもんつけられた男は振り返るが、そこに雲丹頭の男が現れた。

「よ！　士度。　お前も来たのか」

「動物達の餌にな……」

士度と呼ばれた男は、大男の相手から顔見知りの貴史へと変わった。

「大変だなぁ～」

「まぁな……」

士度は貴史と話し込むが、そこに先程の大男がキレた。

まぁ、いちゃもんつけてシカトされれば当然といえば当然である。

「このガキがぁぁ！！　ケンカ売っといてムシしてんじゃねぇ！」

「キタネェまねばっかしやがって！！　そんなに一億が欲しいのか～～～～！！」

と、理不尽な主張をしながら殴りかかる大男。

ケンカを売ってきたのは、明らかに大男なのに理不尽すぎる。

しかし、大男が殴りかかってる相手は、ビーストマスターと名高い、あの冬木　士度。
パンピーのパンチなど……
――百獣擬態（ひゃくじゅうぎたい）、ちょっと手加減した餓狼擬（がろうぎ）！！
「ぐおおおぉぉぉ！！」
無意味に等しい。
「つ、つえぇ……」
大男の肩に乗ってただけの小さい男は、大男を引きずりながら士度の強さに怯え去ろうとするが……
――ドンッ
「キャッ」
「いってぇな、この女！！　今、オレは虫の居所がワリィんだ！！」
「テメェまさか兄貴にケガさせて、一億円もらおうなんてキタないコト考えてんじゃ……」
――アリアに何をする！　森羅万象開放、結構手加減した世界の理！！
「ほげえぇぇぇ！！」
「アリアにアリス、シルヴィアも来てたか」

「お師匠様（マスター）！！」

「久しぶりだね。　カスミ」

「お久しぶりです。　カスミさん」

ぶつかったアリアにいちゃもんをつけるが、アリアを守るようにアリスが自身の切り札を使って吹き飛ばす。

流石に殺しはまずいと思ったのか、結構手加減している辺り流石だ。

「く、くそ！　こうなったら誰でもいい。　ボコボコにして、このイラだちを～～～～」

――ドン…

「いてーじゃねぇか、どうしてくれるテメー――！！」

――ズジシッ！

「兄貴にケガさせて、一億円もらおうなんてキタネェ手ぇ使いやがってー――！！」

自身からありったけの気を溢れ出し、黒衣を纏った女性に向かって吠える。

普通の女性ならすぐに謝っただろう。

なんの非もないのに、涙を流しながらぺこぺこと頭を下げて……。

しかし、今回も相手が悪かった。

「私……ですか？」

主人公からクロナと呼ばれてるアサシンは、大男の気に飲まれる所か、不敵な笑みを浮かべて大男を見るも、そこに大男は居なかった。

「オメーらだ！　オメーら！！（後ろを振り返るな！　あいつはヤバイ！！）」

「兄貴にケガさせて、一億円もらおうなんてキタネェ手ぇ使いやがって！（マジヤバイ！！）」

大男は一瞬にして、アサシンから距離を取って座って、雑談してる男女のグループに向かって叫ぶ。

「俺達に用か？」

「あー一。　テメェにキマってんだろーが！！（振り返るな！）」

「もう謝っても許してやらないからなー一一一！！（振り返るな！）」

なんだか会話が成立してない気がするが、大男と小さい男は必死なのだ。

生きるのに……

「別に許してもらうつもりはない」

「そうね。　折角の楽しい祭を台なしにしてくれた礼……たっぷりしてあげるわ」

「やっちゃえー！　飛翔！！」

大男と小さい男が最後にケンカを売った相手は、神北　鈴と御神百合姫、不破　飛翔、月村　すずか、アリサ・バニングス、アリシア、鈴音（りんね）だった。

ご愁傷様としか言えない。

「そろったみたいネ」

「じゃあ、行こうか」

今回の役者は揃った。

それを確認した天才少女、超　鈴音（チャオ　リンシェン）と少年王、間久部（まくべ）は、司会の朝倉　和美を連れてステージへと現れた。

「ようこそ！！　麻帆良生徒及び、学生及び、部外者の皆様！！イベント内容不明にも関わらず、これ程の勇者達が集まってくれたことを感謝します！！　一位の賞金は一億円というこのイベント！皆様、頑張って下さい！！」

朝倉の司会で、会場に居る参加者達は声を大にして叫んだ。

「では、今イベントの主催者達より、イベント内容の説明を……。

学園人気Ｎｏ．１屋台「超包子（チャオパオズ）」オーナー、超　鈴音と、不良達のカリスマグループのリーダーにして、超（ちゃお）に匹敵する程の天才少年、間久部　昴！！」

「ニーハオ」

「どうも♪」

朝倉の後ろから、超と間久部が現れる。

「今回、このイベントは２０数年前まで、裏の世界の者達が力を競う伝統的な大会、『まほら武道会』を復活させる予定だったネ。しかし、私はとある心境の変化の下……やって楽しい、見ていて楽しいイベントに変更したヨ」

超が言い終え後ろへ下がると、間久部が一歩前に出る。

「では、始めよう…諸君！　第一回!!　麻帆良祭、鬼ごっこ大会を!!」

間久部が、高らかにそう宣言する。

そして、一部を除いた参加者達は銅像のように固まった。

▲　三人称　▲

二日目は、鬼ごっこ、生贄（ターゲット）、監禁（前書き）

今回は言うこと無し！
本編どうぞ！

二日目は、鬼ごっこ、生贄（ターゲット）、監禁

▼　三人称　▼

「麻帆良に集いし、猛者達よ！　ただ今より、第一回！　麻帆良祭、鬼ごっこ大会を開催する！！」

「「……「「なんじゃそりゃ～～～！！」」……」」

間久部の宣言に、大激怒する参加者達。
それも当然だろう。
彼らは悪を自称するチンピラに、己の武を世に知らしめるとか、腕試しの為に来た武術家だ。
そんな彼らが、子供の遊び候補Ｎｏ．１の鬼ごっこなんてするはずがない。
一部の平和主義者な参加者は、ほっと胸を降ろしてるだろうが、そうは問屋が卸さない。
これは、ただの鬼ごっこではないのだ。

「いくら文句言っても無駄だよ。　キミ達はもう参加者なんだ。
それでは今回の鬼ごっこのルールを説明しよう！」

間久部の問答無用発言に、さらに騒ぐ参加者達だが……

「おいおい、いくら鬼ごっこが恥ずかしいからって、その辺にしとこうや……。　それとも何か？　お前ら鬼ごっこで、賞金を掴み取る自信ねぇの？」

「んだと～～～！」

「良いぜ！　やってやろうじゃねぇか！！」

「後で吠え面かくなよ！？」

貴史の軽い挑発に、怒ってる参加者達は勢いの余り、鬼ごっこすることを認める。

単純な奴らである。

「クス！　もう良いかい？　ルール説明するよ？　通常の鬼ごっこでは、鬼は一人――――他の参加者を全員捕まえた時点で、ゲームは終了し、新たな鬼に交代する。　だが今回の鬼ごっこは、その逆！　鬼は、一人を除く全員！　ただ一人のターゲットを、追い掛けて捕まえる！　それが、この麻帆良祭鬼ごっこのルールだ！」

間久部の説明を聞いて、頭の良い連中はすぐに気付き、とある一部ではまたか……という思いがある。

特に麻帆良都市で、ストリート漫才をしてる笑師は恐怖に震えて、今からでも辞退出来ないか考えてる。

「フム…」

「えっと……」

「……？」

「なんだ？　お前ら……よくわかってないって顔だな」

アリスは顎に手を当て、ルールを反復させて理解しようと努力を

し、アリアは誰かに助けを求めるように周囲を見渡し、シルヴィアは完全に混乱していた。
そんな三人に、三人の知り合いであるカスミが声を掛ける。
「お師匠様（マスター）！」
「では、猿にでもわかる解説をしてやれ！　茶々丸」
「カスミがするんじゃないのか！？」
「怠い」
「では、解説を……ターゲットを捕まえた人だけが、賞金を獲得出来ます。　つまり、鬼同士が皆……賞金を奪い合う敵になり、そしてターゲットが逃げ切れば、賞金は独り占め……つまり、賞金を懸けたバトルロワイヤルです。　ただ……」
「ただ？」
「賞金は一位～三位まで……つまりターゲットは……」
「三人になるな。　ユリ……ターゲット候補は？」
「順当に考えて貴史、カスミ、アサシンか薫ね……。　実力からしてアサシンかしら」

「なんでその四人なんですか？」

百合姫が鈴の問いに妥当な解答を言うと、いまだ四人の実力を知らない鈴音が百合姫に質問する。

「私達よりチートだから」

「だが、それだとワンサイドゲームだな。　ある程度は手加減しそうだが、決め付けはよくない」

「そうですね……」

鈴達のグループはある程度予想を立てながらも、主催者達の言うターゲットの知らせを待つ。

だが、ターゲットを知らされる前に、アサシンと呼ばれる彼女が手を挙げた。

「間久部くん。　質問があります」

「！　なんだい？　赤屍」

「ターゲットを捕まえるのは、よくわかりました。　ですが、疑問が一つ……」

「……疑問ねぇ」

アサシンの言葉に、またか……みたいな表情をする間久部。

実際に間久部は、このやり取りを経験済みである。

それは、自分が元居た世界で無限城と呼ばれる場所。

自分の家族を元気付ける為に、開いたイベントだ。

ルールは多少変えたが、それはターゲットが一人から三人になっただけで、種目自体も変わってない。
どうしたものかと考えながら、間久部はアサシンの言葉を待つ。
「生死問わず（デッド・オア・アライブ）で……よろしいですか？」
「う～ん……なるべく生きて捕まえてくれたほうがいいな－－－－」
「なるべくですね♪」
「絶対や！！　またワイがターゲットになったら、どーなると思ってんねん！！　ワイは嫌や！！」
ポリポリと頭を掻きながら、答える間久部に、猛反対の意志を示す笑師。
何故、あんなに必死なのかは……まぁ、察してもらえると有り難い。
「大丈夫ですよ、笑師さん。　遊びなんですから、純粋に楽しみましょう」
「洒落にならへんねん！！」
「で？　その鬼から逃げる不幸すぎるターゲットは、どいつなんだ？」

笑師とアサシンから少し離れた所に居る、貴史は間久部に向かって質問を投げつける。

「最初は、ジャンケンにしようとしたんだけど、それはやめたよ。代わりにスーパーコンピューターが、このイベントを盛り上げてくれそうなターゲットを選抜する事にした」

「ふ～ん。　ま、良いんじゃねぇの？」

「では行くよ？　ターゲット選抜、開始！！」

間久部が、後ろのモニターに振り返ると、どこからともなく、ズガガガガガガガガと太鼓を叩く音が聞こえる。

そして、モニターも参加者の顔を映し出し続ける。

――ドドンッ！！　バンッ、ババンッ、ババババ～ンッ！！

3と表示されたモニターには、アリアの顔が映し出され、2と表示されたモニターには、アリスの顔が映し出され、1と表示されたモニターには、ネギの顔が映し出された。

「モニターにあるこの数字は、一位、二位、三位の鬼となる。　一位の賞金はネギ・スプリングフィールドくん、二位の賞金はアリスくん、三位の賞金はアリアちゃんだ！」

「「「と、ということは……」」」

間久部の説明を聞き、ネギ、アリス、アリアは別々の場所に居るにも関わらず、ハモる。

ーーーポン×3

「「「！」」」

「楽しませてください、ね♪　ネギくん」

「楽しませろよ？　アリス。　くっくっくっ…」

「期待してるぜ？　アリア」

三人の肩に手が置かれる。

ネギが振り向くと、アサシンが手術メスを持ってにこやかな顔で……

アリスには、ドS顔全開のカスミが……

アリアには、貴史が爽やかな笑顔で……

楽しませろ宣言。　普通に死ねる。

「……鬼の皆さん。　一分間、目をつぶってください」

（しゅ、主催者さん……）

（超さんのバカ、超さんのバカ、超さんのバカ、超さんのバカ、超さんのバカ、超さんのバカ、超さんのバカ、超さんのバカ、超さんのバカ、超さんのバカ）

（おのれ……超……）

「では、第一回麻帆良祭鬼ごっこ大会……よーーい、スタート！！」

ーダッ×3

間久部の開始の合図と共に、猛然とダッシュする、ネギ、アリス、アリア。

魔法剣士でもない魔法使いのネギや、後方支援型の魔法具を使うアリアは瞬動の極地である、縮地をなんか習得した気がした。

魔法剣士で、最上級の最強クラスに達してるアリスも縮地で逃げた。

やはり、人は命が懸かってると気合でなんでも出来るということか？

（なんで？　なんで僕が一位なの？　普通なら強いアサシンさんが鬼にって、それじゃあ、誰も捕らえれないか……腕試しに出てみようと思った数分前の僕を、雷の斧と雷の暴風＋魔法の射手・光と風と雷の矢を数千本合わせた魔法で消したい！）

（くっ…カスミに目をつけられてる以上、アリアちゃんを守る事が出来ない！　いくら最強クラスの最上級レベルに達したとは言え、相手はその上を行く！　初めて出会った時に聞いたけど……こちらには無敵クラスってのがあり、カスミはその無敵クラス……最強クラスの最上級レベルのさらなる上って言ってたなぁ……アリアは大丈夫かな？）

（超さんの誘いに、乗るんじゃなかった！　超さんにはただイベントに参加して、楽しんでと言われただけなのに、これじゃあ楽しめません！！　エヴァさん、茶々丸さん、さよさん、スクナさん、晴明さん……誰でも良いから助けてよぅ……お兄様……）

必死に走る三人、頭の中ではどうする？　どうすれば？　死ぬ…などなどと考える事を止めずに考える。

「クス」

（（（死！！！））））

どこからともなく、アサシンの声を聞いた気がした三人。
すでに火葬……ウェールズは土葬か？　まぁ、その辺りまで想像して……

「「「そこまで、行ってない！！」」」

あ、まだですか……。
では、逃げてる三人は置いておき、鬼達を見てみよう。

（さてさて、計画は順調だな。　あとはチート達をどうにかするか……あいつらじゃ、ユリ達は倒せねぇからなぁ）

貴史は目を閉じたまま、思考を張り巡らせる。
カスミとアサシンは事前に、このイベントが出来レースという事を知らせてある。
問題はチート達……飛翔ファミリーとユリをどうするかが問題なのだ。

（ユリ達については、乱を差し出せばいいか……。　飛翔達は……）

「それでは、参加者の皆さん。　ゲーム！　スタート！！」

（と、早く行かないとな）

間久部の開始の合図に、貴史は足早にユリ達の方へ行く。

しかし、超も主催者のはずだが……

「一度やってるからって、仕切っちゃって……このイベントは私が主催したのに、酷い話ネ」

間久部の後ろで拗ねてた。

そして、薫はと言うと――。

「薫や！　悪い事は言わん！　此処から出すんじゃ！！」

「キミが何をしてるのか、わかってるのか!?」

「あーあー、うるさいなぁ。　ウチらが何をやってるか？　わかっとるよ。　あと、出たいんやったら、出てもええんよ？　ウチらに勝てるんなら…」

「うふふっ♪」

「……」

麻帆良都市の端に森。
薫は魔法先生と魔法生徒、そして薫自身の身内である、学園長を結界の中で閉じ込めていた。
そして結界を破られないように、薫と月詠、刹那も結界内で監視をしている。
いくら、魔法先生と魔法生徒達が束になって、監視者を無力化にしようとしても、あいては無敵クラスと最強クラス。
結果は見えてるのだ。
例え、学園長が相手でも鏡花水月の完全催眠の前では、無意味なのだ。

（はぁ……なんでウチがこないなことを……ウチも鬼ごっこをやりたかったわ～）

薫の不幸はまだまだ続く。

（不幸って、それはカスミの専売特許やろ！！）

続くったら続く！！

▲　三人称　▲

二日目は、危機、再会、ぎゃふんｗｗ（前書き）

現在、茶々丸無双作品を執筆中～。

お楽しみに～

では、本編どうぞ

二日目は、危機、再会、ぎゃふんｗｗ

▼　貴史　視点▼

「行くわよ！　鈴！！」

「おう！　待ってろよ～ネギ助！」

「負けませんよ？　鈴さん、百合姫さん」

俺の前を走るチート達。
楽しんでるとこ悪いんだが、俺の計画には邪魔だな。
ま、協力してくれるんだったら良いが……。
とりあえず……

――ビーンッ！！

チート達が通り過ぎる瞬間、事前に用意してた縄を思いっきり引っ張り、チート達の出鼻をくじく。

「うおっ！？」

「えっ？」

「うわっ！？」

「「「きゃっ！？」」」

ーーずて〜〜ん

最初に鈴がコケて、その次にユリ、飛翔、すずか、アリサ、鈴音と連鎖して山になる。

「ブハハハハハ…そろいもそろって単純な罠に掛かんなよｗｗｗ」

「「「「「「「た〜か〜し〜（さ〜ん〜）」」」」」」」

おっと、さっさと逃げるか。

ユリ達から逃げ切り、少年が逃げてる方を見る。

「ふ〜ん、あそこか……あ、魔法の射手を撃ちやがった」

まぁ、誤魔化す事は出来るがなｗｗ

しばらくして、俺の後ろに三つの気配が現れた。

「出来レースだと楽しめねぇけど、ネギがどれくらい強くなってるか楽しみだぜ」

「んじゃ、行ってこい……ナギ」

「おうよ！」

シュンッ！　と、虚空瞬動で少年の居るエリアへと向かうナギ。
俺は後ろを向いて、残った二人を見た。

「キミは……義理堅いというかなんというか……」

二人の内、最初に口を開いたのはタカミチに似たダンディな男性。
いや、タカミチがこいつに似たんだけどな……。

「嫌だったか？」

「いや、感謝してる。　世界は違えどナギやアリカ様に会えたし、新しい風にもまた会える」

「そうか……」

「じゃ、行ってくるよ。　新しい風のとこへ」

ダンディな男も、瞬動でアリスが居るエリアに向かう。
そして残ったのが……

「なんでボクが……」

ぶつぶつと体育座りで、いじけてる女が一人。

「おら、お前も行け」

「帰っていいと？」

「シバくぞ。　……はぁ、なんだよ。　アリアに会いたくねぇのか？」

「……会いたいよ」

だったら何故、落ち込むんだよ。

「でもさ……」

そして、ぶつぶつとまた呟く。

――ブチッ！

「さっさと行きやがれ！　シンシア！！」

――ドカッ！

シンシアの後ろから、アリアが居るエリアまで思いっきり蹴り飛ばす。

さて、他の奴らの邪魔でもしますかね。

ん？　出来レースだと教えるんじゃないのか？　もう怠くなった。

邪魔した方が確実だし……。

そして、俺はアリアの所へ向かった。

▲　貴史　視点▲

▼　アリア　視点▼

並行世界の超さん。
まぁ、ここの超さんですが……その超さんに誘われて、この麻帆良祭にやって来たのですが……
楽しむ云々より、私は悲しくって泣けてきそうです！！

「待てや百万！！」

「ひゃっひゃっひゃっ！　高く売れそうだぜ！！」

というか、追って来る人が恐い！！　私を賞金金額で呼ぶのは、嫌ですけど……まぁ、大丈夫です！　でも、次の人はアウト！　売るとか言ってますし……。

「お師匠様（マスター）～、貴史さ～ん！　助けて下さ～い！！」

――蛇咬（スネークバイト）！！

「「…「ギャァァアアアアアアアアッ！！」…」」

うぇっ！？

後ろから聞き覚えのある……というか、先程助けを求めた人の声が聞こえｔ

「百万え～ん！！」

ダメだ、この人ぉぉおおおお！！　め、目が逝ってる！！　目が¥↑こうなってますもん！　物理的に！！

魔法具とかでいろいろ身体強化して、逃げてますが貴史さんを撒

けるわけもなく、延々と走り続ける。
貴史さんも遊んでるのか、私が必死に走って追いつけない程度に走ってますが、いずれは捕まる。
安全は確保されましたが、何故か私の体は止まろうとしない。
いや、まぁ……まだ捕まりたくないから、走ってるんですが……。

「そら、捕まえた！」

貴史さんの手が私に触れようとした時……

――ボク的必殺、『問答無用拳』！！

あの人の声が聞こえた。

「うーわぁぁー……」

貴史さんは攻撃を受けて、棒読みも甚だしい声を上げて吹き飛んだ。
そして、私の前に一人の女性が降り立った。

「ヒーローが登場する時は、だいたいヒロインの危機をタイミング良く助ける事だと思うんだ」

「シン、シア……姉様……」

「久しぶりだね。　それと、賞金ゲット！！」

呆然としてる私を抱き抱えて、そう宣言するって……えぇぇえええええええ！？
シンシア姉様も参加者！？　なんで？　どうして？　というか、

感動の再会だとか、涙の再会とかないのですか！？

「聞きたい事がいっぱいあると思うけど、とりあえずこのイベントが終わってからにしようか？」

戸惑う私にシンシア姉様は、最初に会った時と同じように、優しい言葉を掛けてくれます。

「……はい」

▲　アリア　視点▲

▼　アリス　視点▼

逃げ続けて二時間半、アリアが捕まったとの放送があった。

「くっ…」

無力な自分が恨めしい。　しかし、私にはアリアに構ってる暇はない。

何故なら、私を捕まえようと迫ってるのは、あのカスミだからだ。

油断すれば、確実に捕まる。

「魔法の射手、雷の１９９９矢！！」

「い、雷の暴風！！」

後ろから魔力を感知して、振り向き様に雷の暴風で魔法の射手を

相殺する。
一般人が見てるところで、普通に魔法を使ってるが、カスミが先に魔法を使い出したのだ。
私は、ただ自衛の為に魔法を使ってる。
まぁ、それもダメだろうが……

「フハハハハ…どうした？　もっと足掻け！！　安心しろ…一般人には後で暗示とか掛けるからな！　雷の斧！！」

「くっ！　縮地！！」

カスミの雷の斧を、縮地を使って回避する。
そして、反撃に出ようと魔法を使おうとした時……

――ゾワリ

横から殺気に近い闘気を感じた。

「そら、回避してごらん」

――豪殺・居合い拳！！

即座に止まった足を動かし、縮地で巨大な気と魔力の砲撃を回避する。

「今のは……」

タカミチか？　と、豪殺・居合い拳が来た場所を見ると……

「え…」

「チッ」

私は自分の目を疑った。

いや、此処は並行世界であの人が、死んでない世界というならわかる。

だけど私が感じるソレは、私が居る世界の住人のモノ。

「大きくなったね。　どら、おじさんに大きくなったキミの力を見せてくれ、アリス君」

「ガトウ……さん」

「おい、ガトウ……私も居る事を忘れるな？　一千万争奪戦だ！」

「キミは？」

「カスミ・ヴェネーラ。　真祖の吸血鬼だ」

「アリス様……私も居ますよ」

カスミ、ガトウさん、シルヴィアが私を囲うように位置取る。

何この詰みゲー。

だが、諦めるのもなんか釈なので、私は姫を構えて戦闘体勢をとる。

「来い！！」

「ランス・オブ・ジュエル！」「漆黒の炎雷！！」「七条大槍・無音拳！！！」

迫って来る近距離技、中距離魔法と中距離体術（？）。
うん、無理だ。

――ズガァアアアアアアアアアンッッ！！

▲　アリス　視点▲

▼　三人称　▼

さて、アリアとアリスが捕まって、残るは賞金一億円のネギ少年のみ。
参加者は躍起になってネギ少年を探すも、ネギ少年が仕掛けたであろう罠に阻害されて、一向にネギ少年を捕らえないでいた。

そんな中、士度、卑弥呼、アサシン、笑師の四人は、罠を突破しながらもターゲットに迫っていた。

「まさかあんたがこの茶番に、また出るなんてね」

「いけませんか？　レディ？」

「別に」

「しっかし、出来レースやわかってても、本気で追いたくなるなぁ～」

「まぁ、本気を出してもいいと思うぜ。　あいつが邪魔してくるだ

ろうしな」

四人は思い思いの感想を言いながら、どんどん走る速度を上げていく。

「なら、こっからは別行動って事で」

「クス♪　私を楽しませて下さい、ね」

「鮮血の道化師（ジョーカー）、金に笑わせてもらいますわ」

「同胞達の鼻と目は、お前らよりも早くターゲットを見つけるぜ」

そう言って四人は別ルートで、ネギ少年を追い詰めて行った。

そして、出鼻をくじかれたチート達はと言うと……。

「行くわよ『黒百合』！！」

「起きろ『鈴雲（すずくも）』」

「変身！」

《ＫＡＭＥＮ－ＲＩＤＥ…ＤＥＣ》

「はい、どーん！」

「きゃぁぁあああああ…」

「鈴音！！」

「やれやれ、敵が変身してくれるまで、ボサッと突っ立ってるはずないだろ？　お前らは変身してなかった時点で終わり」

「え？　ぐはっ！？」

「きゃっ」

「痛っ！！」

貴史と戦っていた。

飛翔達は変身する前に無力化され、百合姫と鈴は……

「破天斬りィイ！！」

「断罪ノ光塵（ジャッチメントレイ）ッ！！」

――ズドォオオオオオオオオオオオンンッッ！！

斬撃、光弾を貴史に向かって放った。

「やったかしら？」

「いんや」

「正解♪」

「うはー、相変わらずしぶといわね～」

「まったくだ」

「つか、おめぇら鬼ごっこしろよ」

「あんたが、ぎゃふんと言うまで止めない！」

「ぎゃふんｗｗ」

「意味がちげぇぇえええｗｗｗ」

何やら主旨が変わってる気がしないでもないが、まぁ、彼らは楽しんでるみたいなので、そのままにしておこうと思う。

▲　三人称　▲

二日目は、親子、激突、千の雷！（前書き）

二日目前半終了！！

二日目は、親子、激突、千の雷！

▼　ネギ　視点▼

僕の名前は、ネギ・スプリングフィールド。　数え十歳。
魔法使いの中では、知らない人は居ないサウザンド・マスターであるナギ・スプリングフィールドと世界を救ったウェスペルタティアの女王、アリカ・アナルキア・エンテオフュシア殿下の一人息子です。
現在は麻帆良学園にて、立派な魔法使い（マギステル・マギ）になるため、魔法使い見習いをしてます。
そんな僕が……

「あっちに逃げたぞー！！」

そんな僕が……

「へっへっへっ…こっちは行き止まりだぜ」

「くっ！」

――かなり手加減した、魔法の射手・光の5矢！！

――ズドドドドンッ！！

「ぐはあぁぁぁぁ……」

そんな僕が……

「赤い雨（ブラッディ・レイン）」

なんでこんな目に～～～～！！！

赤屍さんのメスをかい潜り、杖で空中へと逃げる。

だが……

「遊びとは言え、あの人のメスを避けられるとは凄いなぁ～ボク」

「え？　誰ですか？」

「ワイか？　ワイはただの漫才師や」

漫才師って何？

「漫才師、それはな？　人々を笑かす人の事を言うんや！」

そういいながら関西弁を喋る男の人は、ポーズを取って漫才師について説明する。

まぁ、そんな事……今の僕には関係ないけどね。

逃げてる最中に笑わせられたら、隙が出来て捕まると思うんだ。

「だから……」

「ん？　どないしたん？（これで一億円ゲットや～）」

「ごめん、雷の暴風！！」

「ちょっ！？」

遅延呪文でキープしてた雷の暴風を解放して、関西弁の人を吹き飛ばす。
本当は魔法の射手が良いんだけど、ここの人達を一般人の枠に納めちゃいけない気がするんだ。

しばらく走り回ったり飛んだりしてると、アリスさんが捕まったと放送があった。
なんか、カスミさんとタカミチに似た人と女の人の同時攻撃を受けたとか……可哀相に……。

そんな僕は現在、校舎の中に居ます。参加者じゃない人達は体育館で、このイベントを随時編集してる映像をスクリーンで流してるらしい。
まぁ、編集してるってのは嘘って貴史さんが言ってたなぁ。
一般人には編集したイベント映画って感じで見てるから、魔法を使っても編集した事にしてるからどんどん使えとも言ってきたし……。
参加者の一般人はどうする気だろ？

「鬼ごっこやかくれんぼって、私のためにあるイベントだと思わない、ネギ先生？」

「え？」

突然、後ろから声を掛けられ振り向くと、そこには保健室の先生

が居た。

「この追尾香をふりかければ、貴方を見失うことなく一億円は私のもの～～」

「くっ！？」

保健室の先生が僕に飛び掛かろうとした時、視界の端から影が飛び出した。

「やぁ、ハニー。　僕に追尾香なんて、ある意味告白だね！」

「うわあああ、寄るなキザ男！　つか、なんであんたが此処にいんのよ！？」

――メキョッ！

「ぐふっ！？」

「え？　ちゃ、超さん！？」

保健室の先生と男の人が争ってると、横から超さんが男の人をハンマーで叩き潰した。

なんだか、人を叩いて出る音じゃなかったけど……えっと……怒ってる？

「形而、浮気は許さないヨ？」

「い、いやあ……超、相変わらず過激な愛だね？」

と、とりあえず今のうちに逃げようっと……

あれから、捕まえようと躍起になってる人達から、逃げに逃げて屋上に出た。

「うむ、待っておったぞ」

「たく、おせぇぞ。　ネギ」

「え？」

屋上に出た僕に声を掛けてきたのは、金色の髪を腰まで伸ばして、薄いピンクのワンピースを着飾ったアリカ・アナルキア・エンテオフュシア殿下と赤色がかかったオレンジの髪、白いローブを着たナギ・スプリングフィールド……僕の母さんと父さんが居た。

「どら、どれだけ強くなったか見せてみろ」

「……はい！」

父さんの言葉に、一拍置いて理解した僕は距離を取って無詠唱の魔法の射手を撃ち込む。

▲　ネギ　視点▲

▼　貴史　視点▼

ネギとナギが接触した。
この出来レースも、そろそろ終わりか……。

「よぅし、お前ら……手伝え」

「「…「うぇえええい！」…」」

このイベントに付き合ってくれたチート達に、一般人の連中を片付けるよう指示する。
此処からが、夢と現実の入れ替え作戦！！

龍宮神社の裏に隠された、このイベントに参加した人数分のポット。
そのポットに一人ずつ、気絶させた参加者を入れていく。
これが今回、魔法を使ってもバレないで済む方法。
まず、このイベントは夢をシンクロさせて、一つの舞台で鬼ごっこをするというもの。

夢だから魔法が使える。　有り得ない事が受け入れられる。
そしてこのイベントを見てる観客達は、事前に参加者がポットに向かって寝る所を捏造して見てるから平気！！

完璧すぎる……。

「ガトウさん」

「お別れになるね……」

「シンシアお姉様」

「やれやれ、あんな事があったのにまだお姉様と言ってくれるなんてね」

「当然です！　お姉様はずっとお姉様です！！」

俺の後ろで別れを惜しんでる連中。　まぁ、このイベントの為に呼んだ連中だからなぁ。

イベントが終われば、消えると勘違いしてんだろうな……。　本当はこの学園祭が終わるまで存在出来るんだが……

「ガトウさん！」

「アリスくん！！」

ガシッ！　と熱い抱擁するガトウとアリス。　まだ消えないと知らないとはいえ、これは……笑えるｗｗ

「シンシアお姉様！！」

――サッ！

「ブッ！？」

そして、アリスとガトウの漢の抱擁を見て、こちらもと言った雰囲気でアリアがシンシアに抱き着こうと飛びつくが、照れ屋なシンシアがそんな事を良しとするはずもなく、シンシアはアリア弾を避けた。

「……大丈夫かい？」

「シンシアお姉様がまた避けた」

シンシアが声を掛けるも、アリアは涙目で呟く。

「……さて、良い感じでお別れ雰囲気だが、お前らはこの麻帆良祭が終わるまで消えないし、帰らせんから」

「「「「！？」」」」

俺の言葉に驚く四人。

そして、今のやり取りが恥ずかしくなったのか、ガトウとアリスは顔を赤くして、アリアはホッと胸を撫で下ろしてた。　つか…

「ヤローの赤面なんざ誰得だよ。　キショイからやめろ」

「貴史さんって……性格悪いな？」

「うん、僕は瀕死中だったから気がつかなかったよ」

「というか、理解する時間が無かったね」

「で、でも優しいです……よ？」

聞こえてるし、アリア……疑問形かよ。

「というか、お前らも手伝え」

「「「はーい」」」

「あはは……」

アリス達を見送り、俺は空で戦ってるネギとナギを見る。

「オラァー！　雷の斧！！」

「風楯、魔法の射手！！　連弾・雷の３９９９矢」

ナギの雷の斧を風楯で防ぎ、魔法の射手での反撃か……。

数も質も申し分ないし、エヴァの指導の賜物かな。

――ズガガガガガガガガガガガガガガガガガッ！！

「完全なる世界はもう居ない。　だけど、世界が有り続ける限り、敵はいくらでも現れる。　俺らが居ない間、この世界は頼んだぜ……主人公」

「最後だ。　全力で来やがれ！！　ネギ！！」

「はい、父さん！！」

ネギとナギの戦いから眼を離して、俺は残りの参加者をポットに入れていく。

「「千の雷！！」」

……自重しやがれ、馬鹿共！！

▲貴史　視点▲

二日目は、親子、激突、千の雷！（後書き）

次回は真名と貴史のデート！！

真名の気持ちは伝わるのか！？
そして、死んだはずのあの人が登場！？
次回、二日目の午後は、デート、再会、託されたモノ！！

死んだ人は生きる人へ新たな想いを託す。

二日目は、昼、デート、いろいろ（前書き）

燃えちゃっ……た。　真っ白に

二日目は、昼、デート、いろいろ

▼　貴史　視点▼

鬼ごっこイベントも終わり、学園長室に押し込めた魔法先生と魔法生徒を釈放。

いろいろ言われたが、魔法先生らが騒いで一般人に魔法がバレてはいかないので、その辺を言ったら大人しくしてくれた。

まぁ、あとで罰なりなんなり受けるらしいけど……

「学園祭が終わったら俺ら居なくなるんだがな」

その時のあいつらの反応が見てみたいもんだ。

まぁ、今は……

「待ったよ」

「此処は今来たとこだと言うべきだ」

真名との（真名にとっての）デートを楽しむか…。

「その台詞は男が女に待ちぼうけを食らわせた時に言う台詞であって、女が男に待ちぼうけを食らった時に言う台詞じゃないよ」

「チッ……生意気に育ったもんだ」

まったく、ああいえばこう言う……昔は素直に俺を目の仇にしてたな……。

その素直さを今出さないでどうするよ？　まぁ、今でも目の仇にされたら嫌だけど……。
調子の良いこと言ってるな、俺……。

「まぁ、せっかくのデートだ。　甘えるのも良いね」

「そうかよ……」

とりあえず、昼飯にするか……鬼ごっこで腹減ったし……。
しかし、大イベントが終わった直後故に問題が発生した。

「店がまだ準備中だと？」

「見事に食品系統の出店がないね」

そう、朝から鬼ごっこ大会の非参加者は体育館に集められたから、店を開く準備が出来ていなかったのだ。

なんたることか……。

「なんたることだ……」

「二度も言うほどの事かい？」

一回目は心の声だから問題あるまい？　つか、心読むな。　そのでかい黒糖饅頭を揉むぞ！

「セクハラで訴えるというか射殺する」

「恥ずかしがんなよ」

「……はぁ」

真名の呆れはてたため息を無視して、超包子へと足を運ぶ。
四葉の事だ。　あそこだけは営業中だろう。　むしろ営業中であってほしいものだ、俺の腹のために……。

というわけで超包子に来たわけだ。
そこでは確かに四葉がせっせと働いていた。
茶々丸という戦力も導入して……。
本来なら四葉一人で調理して、あとはウェイトレスなんだが……
今回は客が多過ぎで一人じゃ無理だと判断したんだろうな……。
つか、人多いなぁ……無理もないが…

「あ、貴史さん」

「よう、アリアにその他」

「「その他って……」」

だって俺、アリスとシルヴィアの事知らねぇし……名前だってアレだ。　鬼ごっこに参加してたからだしなぁ。

「そう落ち込むな、アリス君」

「シルヴィアもね…」

落ち込むその他に、ガトウとシンシア（アリスとシルヴィア）が肩に手を置き慰める。

「仲良いな、お前ら」

「まぁ、大会終わってすぐにアリス達が来たしね」

ふぅん。

――くいくい

ん？

袖を引っ張られて顔を引っ張られた方を見ると、ジト目でこちらをジーッと見てる真名の姿が居た。

どうでも良いけど、真名って一発変換出来ないよね？　もうマナで良くね？　今まで頑張ったんだし……ねぇ？　まぁ、今まで頑張ったからこそ、まだ頑張れ的なのもあるけどさ。

「よし、マナでいこう」

「なんの事だ？」

「いや……そんじゃあな、アリア」

「はい！」

アリア達と別れ、茶々丸と四葉が働く車に近付く。

「あ、貴史様に龍宮さん」

―こんにちは―

茶々丸が近付く俺達に気が付き、そのあとに四葉が気付き挨拶をする。

「なかなか繁盛してるな、四葉」

―他の店がまだ開いてませんから―

「注文頼めるか？」

―はい、いつものですよね？―

此処で説明を……四葉が言ういつものとは、俺が超包子でいつも頼んでるメニューだ。

確か、肉まん１０個に焼売（しゅーまい）２０個入りを１０パック、フランクフルト１５本、フライドチキン１０ピース、照り焼きチキンバー１０本、焼き小籠包（しょうろんぽう）５個入り３パックだ。

忙しいってのにコレを作らせて良いのだろうか……。

「良いのか？」

―今日は絡繰さんも居ますから―

「なら頼む」

四葉が良いと言うなら、言葉に甘えさせてもらおう。

つか、マナの奴は何を頼むんだ？

「ん？　私は貴史のを少し貰うよ。　どうせ大量にあるんだろ？」

俺がマナを見たら、俺の聞きたい事を理解したのか、衝撃的な事を口走りやがった。

俺から飯を貰う？　誰がやるか！！　アレは俺の活力だ！　つーわけで……

「四葉！　低カロリー肉まん二つ追加！」

ーわ、わかりましたー

「低カロリー肉まん二つで我慢しろ」

「別に良いけど……（そこまでして自分の食べ物を確保したいのか……）」

これで、俺の飯は食われずに済む。

そのあと、肉まんなどを食べながら校舎の中を歩く。

鬼ごっこが終わって、だいぶ経つから出店はほとんど営業再開して、売り上げを上げていく。

そして、３ーＡの教室に着いた。

どうでもいい事だが、３ーＡの出し物はお化け屋敷だ。　マジで要らん情報だな。

「あ、先生！　よかったら一回どう？」

「ん～そうだなぁ。　かなりめんどそうだ」

「そんな事言って～。　本当は」

「「……「「いやぁぁあああああああああ！！」」」……」」

――ビクッ！

「な、何々！？」

明石が俺をからかおうとした時、３－Ａの連中の悲鳴が廊下まで響いてきた。

明石は勿論、通り掛かった人が驚く。

そして、すぐに正気に戻った明石は出口を開けて中を覗こうとしたが、その前にとある男女のカップルが出て来た。

「あ～楽しかったわ～」

「あいつらの驚いた顔、面白かったなぁ」

「よ、お義父様、お義母様！」

「「はぎゃぁあああああああ、み、耳がー！！」」

出て来たのは妻ジェイルの親であり、チートな転生者夫婦。

そして、俺の義理の親にしてマブなダチの御神　百合姫と神北鈴だ。

「長いわ」

「なげぇな」

「ほっとけ、作者が名前を思いだそうと頑張った結果の紹介だ。
結局は作品を見てコピー&ペーストだ」

「いい加減覚えなさいよ」

「何年の付き合いだと思ってやがる！」

ユリの言わんとしてる事は確かだが、鈴の発言は頂けん。
何年も経ってないしな！！

「覚えてもらいたいなら苗字を統一しろ」

「覚えなくてもいいわ」

「アクセス数が上がるしなｗｗ」

あくどいなぁ。
まぁ、気にしないが……

「せ、先生ー」

俺とユリ達と話してると、中を見てきた明石が戻ってきた。

「なんだ？　どうした？　面倒事は嫌だぞ？」

「そんな事言わずにー！　驚かし役の皆が気絶してて」

おいおい、この夫婦は何してくれてんだ？　高い確率でユリ達のせいだろ？

俺がユリ達の方を見ると、そこにはユリ達は居なかった。

「逃げやがったな……あんにゃろうめ」

いつか、絶対耳元で義母さん、義父さんと言ってやると心に決めて、俺はぶすくれてるマナに待ってろと言って教室に入った。

▲　貴史　視点▲

▼　マナ　視点▼

貴史とのデートをやって、行く先行く先に貴史の知人が現れ、私をそっちのけで話す貴史。

知人との交流も大切だろうけど、私の事ももっと気にかけるべきだと思う！！　このままだと、私は貴史に告白出来ずに一日が終わるんじゃないかと不安に駆られる。

「告白、か」

思い出すのは貴史を怨んでたことの時、だけど時間が経つに連れて私は憎しみよりも寂しさを覚えた。

あの事件のあと、私は使い物にならなくて麻帆良に送られた。

そこで友に出会ったが、それでも心の何処かでは孤独に打ち拉がれていた。

宛がわれた寮の部屋に行くと、三人で楽しく旅をしていた事を思

い出す。
そう、団体に所属する前は私は貴史との仲は良好だったんだ。

『貴史！　的の中心に当たったよ！』

『ハッ！　ようやくかよ、下手っぴ』

『そう言ってやるなよ、貴史』

『む～中々当たらない』

『たり前だ。　だいたいだな、止まってる的にいくら当てた所で、練習になるわけないだろ』

『まだまだ時間はあるんだ、焦らずに行こうマナ』

『どう？　もう百発百中よ！！』

『へーすげーなー。　俺様はもっとすげーけど』

『む～』

『子供相手に大人気ないよ？　貴史』

そんな楽しかった頃の思い出を思い出してしまったら、貴史を憎めなくなった。
それから、無性に貴史に会いたくなった。

「…い」

そして、会いたいから……

「お…、マ…！」

いつしか……

「マナ！！」

「好きになってしまったんだ。貴史を」

「マッ……」

というか、さっきからうるさ……い、な。

私が顔を上げると貴史が目の前に居て、石のように固まっていた。
周りもこちらを見ていて……。

え？　ちょっと待て……私はさっきなんと口走った？　もしかしなくても好きと言ったか？　言ってしまったのか？　無意識に！？
本人（たかし）の前で！？　ど、どうする？　始末する？　いや、無理だ！
というか、始末してどうする！！　あわわわわ…

▲　マナ　視点▲

▼乱　視点▼

現在オレはアーウェルンクスを率いて、麻帆良祭を回ってる。
そのせいか、オレは今すっごく目立ってる。
だってこいつら美少年、美少女ってレベルだもん。
そんな連中を囲ってる平々凡々の胸がでかいだけの女が居たら、ねぇ？

「それ、厭味よね？」

「あ、アスナさん」

オレの心を読んだのか、表情を読んだのかわからないがオレにツッコミを入れるアスナさん。
ネギ助を見捨ててから、モブに成り下がった原作ヒロインだ。

「久しぶりですね」

「そうね、本当は毎日会ってるはずなんだけどね」

確かに放課後になると、親父達の修行や仕事で顔を合わせてる。
く、モブ（原作ヒロイン）にもライトをっ！？

「ねぇ、なんか失礼な事を考えてない？」

「ハハハッソンナコトナイヨー」

「まぁいいけど…」

そういえば、さっきからアーウェルンクス達が静かだ。
元々から静かだけど……

後ろを見てみれば、アーウェルンクス達は囲まれてた。
フェイトは女性陣に、セクストゥムとセプテゥムは男性陣に……
すっごく鬱陶しそうな顔をしてる。

「人気ねー。　あいつら」

「顔は良いしな」

「乱ちゃんも綺麗よ？」

「ありがとうございます」

アスナさんが褒めるも、まったく嬉しくないのはなんでだろうか？　う～ん、オレが歪みきったせいかな？　ま、とりあえずアスナさんとどっか回ろ。

「アスナさん、マッサージやってるとこ知りません？」

「マッサージ？」

「うん、ちょっと肩が」

「……」

オレが肩を回しながら言うと、目を極限まで見開きオレの胸を凝視するアスナさん。

いや、まぁ……うん。　なんかごめん。

アスナさんに睨まれてから数分、アスナさんを元に戻して連れて来られたのがロボット工学部。
ここでは、ロボット工学部の技術力の全てを使ったマッサージチェアを出してるとか……。

マッサージチェア……それは座ってリモコンのスイッチを入れたら、中のローラーみないなのが背中をゴロゴロ転がしたり、肩を揉んだりしてくれたりするモノだ。
決して普通の椅子にディードとオットーが、後ろで待機してるモノじゃないはずだ。

「……」

「いらっしゃいませ」

「どうぞ！」

オレはこいつらの神経を疑う。
幾度も幾度もオレの胸を狙い、襲い掛かればオレの制裁を受けて撃沈する。
それでも尚狙うこの姉共……。
手をわきわきさせるな！！

「とりあえず…」

――バキッボキ、ドガガガガッ！

――――ち～ん♪

オレはセクハラシスターズを沈めて、今度こそロボット工学部が作ったマッサージチェアに座った。

「あ～効く……」

▲乱　視点▲

▼貴史　視点▼

マナを引っ張って人気のない教会の裏、そこでようやくマナから手を放して向き合う。

マナはいまだに顔を真っ赤にして俯いてるが、無理矢理顔を上げさせる。

「ぁぅ……」

そしてそんな反応を見て、あの告白紛いなモノは本心からと……

…いや、再会した時から気付いてたけどさ。

それでも俺に惚れるってどうよ？　一方的に別れた時の関係なんか、最悪の状態だったんだぞ？　怠けて仕事をしない俺、それに怒りを募らせるマナ。

コウキを助けれた力があったにも関わらず、コウキを見殺しにし

てしまったりと……惚れる所か怨まれる所が大きいんだが……。
もしかしてコウキの死に混乱して、記憶が欠落した？　有り得んな、マナはコウキの死を受け止めてたし、前にコウキを助けられたかどうかと聞いてきたしな……。
じゃ、なんでだ？

「いくつか質問する。　なんで俺なんか好きになった？」

「気付いたら好きになった」

「何処が好きなんだ？」

「全てだ」

即答。
まるでどんな質問が、来るのかわかってたような感じで答えるマナ。

「これで最後だ。　うｒ」

「私を一人にした事は怨んだ。　だが、それよりも私は貴史が好きだ！！」

頼むから最後まで言わせろよ。
たく……

「好きにしろ。　言っとくが…」

「二度と離す気はないんだろ？」

「わかってんならいい」

こうして、俺はマナの告白も受けた。

あーあ、もうどうにでもなれって感じだな。

▲　貴史　視点▲

▼　ジェイル　視点▼

――キュピーンッ！

「ふむ、また一人貴史に恋人が出来たか」

「誰？」

「たつみーか？」

私が貴史の状況を感じ取り呟くと、母上と父上がこちらに話し掛けて来た。

「たつみーだｗｗ」

「やれやれ、節操無いわねーｗｗ」

「母上達も所々で家族を作ってるではありませんか」

「最近はそうでもないぞ」

「そうそう」

まぁ、最近は何かと忙しいらしいし、此処は娘として親孝行でもしますか。

「では、私が麻帆良を案内します」

「よろしくね、ジェイル♪」

「乱やディエチ達も誘おうぜ？　金は出す！」

そう言って父上は「貴史の世界のカード」と書かれたカードケースから、ブラックカードをって……

「鈴、出店にカードは使えないわよ？　現金（キャッシュ）じゃないと♪」

そう言って母上は「貴史の世界のお金」と書かれた財布から、万札を十束くらい出すって……

「母上…」

「何？　もしかして足りない？」

「その逆、多過ぎです。　自重して下さい」

まったく、この人達は……

「「お前が言うなｗｗｗ」」

▲ジェイル　視点▲

二日目は、暗殺者、コンテスト、でっぱぁぁあああんっ！！（前書き）

二日目のトリを飾るのはこの方！

二日目は、暗殺者、コンテスト、でっぱぁぁあああんっ！！

▼　アサシン　視点▼

亜子さん、アキラさん、裕奈さん、まき絵さんに誘われて、私たち五人は麻帆良祭を回ってます。

「何処行きます、クロナさん」

「貴女達に任せます」

「あ、じゃあ此処に行こうよ」

そう言って、まき絵さんが地図に指を差した場所は図書館島。

バカレンジャーで名高い、あのまき絵さんが図書館島を選ぶとは……クライアント（貴史）の教育の賜物ですね。

いやはや、嬉しい限りです。

「なんで図書館島？」

「今日此処でコスプレコンテストがあるらしいんだ～」

「こ、コスプレ！？」

「まさかと思わないけど……」

「みんなで出ようよ。　クロナさんも！」

（（ああ、やっぱり……））

にこやかな笑顔で、爆弾を投下するまき絵さん。

少しイラっときました。

そして、私の心情を察してか裕奈さんとアキラさん、亜子さんはまき絵さんから一歩後退した。

「ん？　みんなどうしたの？」

「まき絵さん」

「？」

私が声を掛けるとまき絵さんは、きょとんとした顔で振り向くと、石のように固まった。

「私は出ませんので」

ニッコリと笑顔で、それでいて冷たく言い放つ。

すると、まき絵さんはカタカタと震えながら「はい」と言ってくれました。

わかってくれて、良かった良かった。

何やらアキラさん達の方から、私達は？と言った雰囲気を出してますが無視です。

「いやぁ、楽しみですね。　四人のコスプレは…」

（（助ける気なし（や）！！））

というわけで、四人のコスプレを見ませてもらいました。
亜子さんは、いぬぼくシークレットサービスの第二章の髄々宮カルタ（ろろみや　かるた）。
単に髪を染めて、スーツを着ただけなんですがね。
アキラさんは、テイルズ・オブ・ジ・アビスのティア・グランツ。
彼女も髪を染め髪型も弄って、オラクル騎士団の服を着て、杖とティアが投擲する短剣を所持。
裕奈さんは、空の境界の両儀　式（がらんどう）。
髪を下ろして、あの伽藍洞（がらんどう）の髪型に似せて、カラーコンタクトで直死の魔眼を発動状態に見せ、着物を着せて赤いジャケット、そしてナイフを持たせました。
まき絵さんは、ビ……ビブ……なんとかピンクの格好らしいです。

「私だけなんかテキトーだ！！」

「なんの事やら♪」

そして、四人共良いところまでは行ったのですが、入賞ならず……。

「残念でしたね」

「クロナさんが出れば優勝だったのに～」

それは無いでしょ。

コスプレコンテストも終わって、亜子さん達とブラブラ歩いてると、ベストカップルコンテストなる会場に着きました。

ベストカップル……女性だらけの私達には関係ないですね。

「お、赤屍じゃねぇか」

「これはこれは、波児（ポール）さん」

私達が立ち去ろうとした時、後ろから聞き慣れた波児さんの声に立ち止まり振り返った。

しかし、これがいけなかった。

「お、そこのカップルは我がコンテストに興味がおありで？」

「「は？」」

突如、現れたボディービルダーの人に抱えられて、私と波児さんはコンテストに登録された。

呆然とする亜子さん達を置いて……。

▲　アサシン　視点▲

▼　亜子　視点▼

クロナさんが男の人に連れ去られた。
最初は何が起きたのか、ウチらにはさっぱりわからんかった。
でも、時間が経つにつれて、思考がクリアになった。

「ど、どうする？」

「ん～面白そうだし、見て行こうか？」

アキラがどうするか聞いてきて、そこに裕奈が面白そうに笑いながら、見学を提案してきた。
確かにクロナさんを置いて、ウチらがどっか遊ぶのもあれやしなぁ。
それにウチも見てみたい。

そんなこんなで始まったベストカップルコンテスト。
一組目、二組目、三組目、四組目と流れるように進み、五組目にクロナさんが現れた。

「クロナ&波児ペアー――ッ！！」

ウェイトレスさんと喫茶店のマスターの組み合わせで……。
ウェイトレスさんが、勿論クロナさんなんやけど……正直になん

でそのチョイスなん？って思うてしまった。
盛り上がってた場が、シンッと静まり返っとる。
司会者さんも淡々とした口調で、クロナさん達を端にやった。
酷い対応やけど、気持ちはわからんでもない。

その後、他のペアがなんとか盛り上げて、コンテストは二次審査に移った。
二次審査の内容は水着らしい。

これ、確実に男性はおまけやん。

場が盛り上がったまま、またクロナさんの番になった。
二人が出てきたのは一緒。
やけど、会場の誰もがクロナさんを見た。
普段はスーツ姿しか見ないクロナさんは、白のビキニの水着を着て舞台に立っていた。
スタイルは抜群と言えば抜群やし、綺麗や……だけど会場の皆はクロナさんのある場所に目をやった。
左肩からお腹まで、縦に斬られたような斬り跡があった。

その傷は、ウチが抱えてるモノを壊す程の威力があった。
隠そうともせず、むしろ周りからの視線に興味がないと言った風な態度。

なんで？　なんでなん？　なんでクロナさんはそんなに平然と見せられるん？

ウチはただ黙って見る事しか出来んかった。

▲　亜子　視点▲

▼　アサシン　視点▼

「悪かったな」

コンテストが終わって控え室で、波児さんが私に謝って来ました。
まぁある意味、波児さんのせいで参加することになりましたが、
それなりに楽しかったですし、良しとしましょう。

「私は気にしてませんよ」

「そうか、じゃあ…俺は行くわ」

「ええ…」

控え室で波児さんと別れ、私は亜子さん達の所へ行く。

「あ、クロナさ～ん」

「待たせてしまってすみません」

「別に良いよ。　にしても惜しかったね、クロナさん」

「そうですか？」

「綺麗だった」

「誉めても何も出ませんよ？」

口々に私の水着姿を誉めてくるアキラさん。　それに続いてまき絵さん、裕奈さんも誉めてくれましたが、困りましたね。

「あ、あの……」

「はい？」

私が困ってると、今まで黙ってた亜子さんが声を掛けてくる。

まぁ聞いてくる事は、だいたい予想が着きますが……。

「あの、その……言いにくかったら言わんでええです」

「わかりました」

「あの、クロナさんの傷……堂々と見せてましたけど……恐くないんですか？」

やはり傷の事でしたね。

しかし、恐い……ですか……。

「……いえ、まったく」

仕事柄、傷なんて意識してませんしね。

「なん、で……ですか？」

「私はありのままを見て受け入れてくれる者にしか興味ありませんので、逆に私のあの傷を見て距離を置く者や他人の視線などに興味はありません」

あと成長の見込みがない弱者には……。

「強い、んですね。　羨ましいです」

「……私を羨むなら、憧れるなら求めなさい」

「え？」

「強くありたいなら強さを求めなさい、強さに飢えなさい。　世界は求める者のみに応えます。　逃げる者には応えない、弱者には応えない。　だから――強く願いなさい。　私がそうしたように……」

そう言うだけ言って、私は亜子さん達に背を向ける。

もう十二分に付き合ったですし、良いでしょう。

「三日目のライブ……楽しみにしてます」

そして私は亜子さん達の前から立ち去った。

亜子さん達から別れて、超包子で食事を取ってると飛翔ファミリ

ーの方に出会った。　終わり。

「終わらすんじゃないわよ！！　出番！　私達にも出番頂戴！！」

「お、落ち着いて、アリサちゃん？」

うるさい方だ。　麻帆良祭で、あなた達よりも先に麻帆良祭コラボの参加を申し出た方が居たのに、武闘会が潰れて来れなくなった方が居ると言うのに……。

その人達に比べて、鬼ごっこ大会に出れたあなた達は、かなり恵まれている。

「因みに誰ですか？」

「ギリギリ（？）１５禁死神。　ピンクの死神。　リア充。　桃色で桃色な桃色の中の桃色の死神。　ピンク、ピンク、ピンク、ピンクピンクピンクピンクピンクピンクピンクピンクピンクピンク、ピピピ、ピンク」

「ピンクが多い！？」

仕方ないでしょう。　大半がいちゃラブな小説の主人公なんですから……。

作者なんか四ページあたりで、顔が真っ赤になって匙を投げたんですから…。

「出す事が出来ないって報告したの？」

「違う機会で出すらしいです」

「なら良いじゃない！！　さぁ私達に絡んで出番を」

「あ、そろそろ私の話が終わりますね」

「嘘！？」

「嘘です♪」

「あんたなんか大ッ嫌い！！」

そう言って、何処かに走り去るアリサさん。　いやはや、相も変わらずからかいがありますね。

「皆、アリサを」

「その必要はありませんよ」

「なに？」

少し離れた場所で、チラチラこちらを見てるアリサさんを見て答えると、飛翔さんはため息をついてアリサさんの方へ行きました。

「あなた達は行かないので？」

「お父さんに任せるのが良いと思うし……」

「いえいえ、私が言いたいのは…」

「？　言いたいのは？」

「最強最悪の運び屋（わたし）と一緒に居て良いのか？　って事です」

「…「！？」…」

残った飛翔ファミリーを見るだけで、飛翔ファミリーは臨戦体勢を取った。

「遅いですね。　知り合いだからといって、安心してはいけませんよ♪」

そう言って立ち上がる所で、飛翔さんがアリサさんを連れて戻ってきた。

「もう行くのか？」

「ええ、それでは……」

別れの言葉を告げ、私は歩き出す。

そろそろ……三日目ですね。

▲　アサシン　視点▲

三日目はのんびり、デート、やっと伝えられる想い

▼　貴史　視点▼

さて、今日のスケジュールは薫と……この展開だとまた告白か？　なんでこうも被るんだ？　だいたい回ったし、もうそのまま告白して終わっても良いような回だぞ？

「でも、それだと納得しないよなぁ」

とにかく、待ち合わせに行くか。

クロナは、また運動部仲良し四人組と一緒かな？　いや、クロナより薫の方が先決だ。

あー、ホンキートンクで軽食取って、また水泳部の伝統タコ焼きでも食うか……。

あとはナイトメアサーカスで、士度とザジの活躍ぶりを見るのもいいか。

そういや、花月が琴をやるって聞いたが何処でだ？　ん～、まぁ適当動いてればわかるだろ。

「あ、貴史～」

と、考え事してたら待ち合わせ場所に着いたみたいだな。

「よ、待たせたな」

「ええよ、ウチがはよう来ただけやし」

「そうか。　んじゃ、行くか」

「おー！」

当初の予定通りに、ホンキートンクに向かう。

遊びに行くにも、まずは活力の源である……第三の朝食だろ？

「すっかり板に着いてきたなぁ。　腹ぺこキャラ」

「修行馬鹿になるよりマシだろ？　つか、やることがないから飯を食うしかねぇんだよ」

「せんせ～、仕事はしてるんですか～？」

「してるよ～。　テスト作りに、次の授業の準備、武部先生にそれとなく授業の引き継ぎ」

「……それとなくって」

そんなしょうもない事を話ながら、ホンキートンクへ着いた。

中は麻帆良祭のお陰か、客がそれとなく居る。

カウンター席にはホンキートンクの常連が居るなぁ。

ちょうど二席空いてるのは、俺達の特等席……こういう波児（ポール）の気遣いは嬉しい。

――からん、からん♪

「ちゃーっす」

「こんちゃ～」

「いらっしゃい」

「お、たー坊じゃないか」

「爺さん、たー坊はやめろよ。　いい加減」

俺らが特等席に着くと、隣に座っていたホンキートンクの常連、ジローさんが声を掛けて来た。

別段紹介する人でもないが、まぁ世話になってるから一応紹介するかねぇ。

ジローさんは、さっきも言ったようにホンキートンクの常連で、だいたいは此処に居る。

んで、俺の事をたー坊とか言ってくるわけよ。　さらに言えば、俺が連れて来る連中（カスミや薫を始めとしたジェイル、乱、エヴァ、茶々丸等など）を孫扱い。

エヴァなんざ膝の上に乗せて、頭を撫でるし、たまに菓子やお小遣をやってる。

ちなみに乱やディード、オットーも貰ってる。

「若造が、ワシからしたらみんな坊主じゃて」

と、カッカッカッ笑うジローさん。

カスミやエヴァからしたら、あんた小僧扱いだぞと言いそうになるが、やめる。

年齢ネタはカスミが泣くし、ジローさんがキレる。

女性の年齢云々は言わぬが漢っつーもんよ！　とか妙に漢らしい事を言って……。

まぁ、その前に転生前に母さんからしこたま叱られてるけどな。
あん時は恐かった。　トラウマもんだよ。

「ほい、いつもの」

「サンキュー」

「あんがと」

注文せずとも出してくれる波児。
常連ってのは良いねー。

「しっかし、たー坊はよく食うのう」

「食が俺の活力」

「食い過ぎだがな。　ジロー爺からも言ってやってくれよ」

「フンッ、毎夜女の相手をしとるんじゃろ？　腹上死はするなよ？」

――ブフゥッ！！

「わっ、きたねっ！！」

「なんつーこと言いやがる爺！！　噴いたろーがっ！！」

「爺ちゃん、もう一人増えるで」

「何！？　おい、たー坊！　何人女子を侍らすつもりじゃ！？　つか、今何人！？　ワシにも分けてくれ！！」

「「歳を考えろエロジジイ」」

波児と俺の言葉が重なる。

いや、俺もエロいのは認めよう。

正直な話、ジェイルにカルタ、シグナム、カスミ、真名と恋人、夫婦になった夜に結構相手してるし、だが俺の名誉の為に言うが…

…別世界のカルタやシグナムは昼の時は家族サービスをしてる！！

夜に来た時は……なんだヤッてるが……。

しっかし、増えるってやっぱり薫もなんだなぁ。

友達としてしか見れなかった俺は、やはり最低なんだろうか？

ずっと想ってくれたカスミや薫に……どうしたら良いのかねー。

まぁこう気にしてる事すら、ダメらしいけど……うん、もう考えるの止めた。

俺は受け入れて、逃げ出さないようにしてれば良いだけだし……。

ジェイル以外。

……え？　何故ジェイル以外かって？　だってジェイルは堂々と逆ハー目指してる奴だし……。

ただし、それなりのチートに限る。

最近、自重の知らないチートが居ないって言ってたけど……。

「ごちそうさん」

「ごちそうさまー」

「はい、お粗末様」

「そいじゃ、金は置いてくぞ」

「爺ちゃんもバイバ～イ」

「薫ちゃんも元気でな！　みんなによろしく言っとけよ、たー坊」

「だからやめろって」

「一端の漢になって、また来い。　そん時は名前で言ってやる」

「ケッ」

ジローさんと言葉を交わし終え、ホンキートンクを出る。

そして向かう先は剣道部。

水泳部は剣道部を見た後でも良いだろう。

なんせ剣道部は、レギュラー陣全員と最強の剣道部員を倒したら、こんがり肉だしな！！　夢だったんだよ。　マンガ肉。

んで持って剣道部。

「参加」

「え？　先生がするんですか？」

「おう」

受付の奴に、参加を申し込むと聞き返された。

心当たりが有りすぎて、笑えるｗｗ

多分、タカミチのように広域指導と、桜咲がなんか言ったんだろ……。

「漢ならマンガ肉はロマンだろ？」

「ついさっき、サンドイッチ３０個は食うてたで……」

うるせぇよ、薫。

「い、一回ぽっきりですよ？」

「……チッ、良いだろう」

「ありがとうございます（間がすげぇ空いた……言わなかったらどれだけ利用されたか……）」

つーことで、一回だけやることになったわけだが、遅い！！　俺なんか竹刀持って、力を抑制させて待ってるだけだぞ？　どんだけ掛かってんだ？

「お待たせしました」

「やっとかって……桜咲……お前は最後だろ？」

「レギュラーを潰されないよう、最初っから最終ステージとさせていただきます」

なるほど、確かにレギュラーを潰されたら、商売を続けられんわな。

「良いぜ、来な……」

「では……」

「始め！」

審判の合図と共に、桜咲に面を放つ――

――バシッ！

が、簡単に防がれる。

「小手調べですか？」

「お前相手にか？　冗談言うなよ」

もともと俺には、桜咲ほどの剣道の才はない。

だけど、根っからのチートなカスミ、薫に勝つ為に身につけた技がある。

――ガッ！

「心（めん）！！」

桜咲が竹刀で俺の竹刀を押し返して、縦に振り下ろすも、何度か見た（・・・・・）面打ちを食らうはずもなく、素早く斜め右下に移動。

「なっ！？」

「無駄やよ、せっちゃん。　貴史にそれを打つんやったら」
「もっと俺を疲れさせ、判断力を失わせないとな……技（こて）！！」
「小手一本！！　勝者、南武先生！！」

さて、技の解説解説。
さっきの桜咲がやった面打ちは、薫がよく使う技だ。
心・技・体の内、心を統一……所謂、精神統一だな。
精神統一させた一撃。
鋭いその一撃は、俺とカスミよりも迅い。

んで、俺が使った小手打ちは、カスミと薫を倒す為に開発した技だ。
心・技・体の内、技……自身の技術を一つにした技。
ただ相手の隙を突く技だから、たいしたもんじゃないがな……。

そして、最後はカスミの胴打ち。
心・技・体の内、体……竹刀に全体重を掛けた技。
女の体とは言って侮るなかれ、受けたら確実に吐く。
頭に受けたら面を着けても、脳震盪くらい起こす。
読者にも知ってる人は居るんじゃね？　カスミの胴打ち……いや、面打ちか？　まぁ、それは良いとして……以上が俺達三人の剣道技だ。

「先生、薫お嬢様の面打ちを知ってらしたんですねぇ」
「よく見たり、受けたりしてたからな」
「もっとがんばりましょうや！」

「はい……」

「はい、先生。　商品のこんがり肉」

桜咲と薫とで話してると、奥から部長がやって来て、商品のマンガ肉を渡して来た。

「いただきます。　あむあむ」

う～む、学生にしては頑張った方か？　まぁ、美味いしいいか。

「ごちそうさん、美味かったぞ。　ただ、もう少し欲を言うなら香辛料も加えて、ちょいピリ辛にしたらどうだ？」

「ふむふむ」

俺のアドバイスを聞き、メモを取る部長さん。

そんな部長さんを残して、俺と薫は水泳部に向かう。

まだ食べるぜ！！

「あ、せや……あんな貴史……」

「ん～？」

「実はずっと……男やった時もな……貴史の事が好きやったんよ」

え？　今言うの？

「それで、……あんな？　貴史的にはホモって引く？」

「いんや、別に」

「……えらいあっさりやな」

ん～ぶっちゃけ、転生前の薫って男性ファンも居たし……俺らが居た世界って、同性愛は認められてたしなぁ。

あと近親……。

今の世界の常識でってなっても……

「薫なら引かないかな……。　薫も男同士でするって、感じじゃなかったろ？」

「そらぁな……ヤル時はモンゴル行ってやる事やってからやし……」

「それも一つの愛の在り方さ」

性転換まで行くとホモかどうか疑わしいけど、薫がそう思ってるならそうなんだろう。

「そっか……」

「……薫って、カスミ達みたいに押せ押せじゃないんだな？　告白は」

「そら、そうや……。　元が元やったし……これでも勇気要るんやえ？」

「……俺は好きだぞ。　今も昔も……恋仲になるってんなら、一生逃げられねぇからな？」

「構わへん！！」

そう言って、薫は俺に抱き着いって待った！

――ひょい、どさ！！

「よ、避けたやと？」

「人目があったの忘れてた。　人目がないとこでな」

――ずるずるずる……

そのあともサーカスを見たり、飲食店をはしごして、飲食店の出入り禁止を食らった。

「何故だ？」

「当然やろ。　お金は払っても食べ過ぎや」

意味がわからん。

もう一度言おう。　何故だ！！

▲　貴史　視点▲

三日目はカスミ、アリア、最後の別れ

▼　カスミ　視点▼

今頃、薫は貴史とデートだなぁ……と、考えながら麻帆良を歩く。
茶々丸は茶道部に出て、エヴァは別荘でぐったりしてる。
昨日の夜、少しやり過ぎた。

「……さて、どう暇を潰すかなぁって、ん？　あれは……」

「あ、師匠（マスター）」

私が歩いてると、アリアが一人で歩いていた。

「アリス達はどうした？　それよりも、シンシアは？」

「アリス兄様達は、二人でお土産を買って帰るそうです。　別れも済ましてきました。　シンシア姉様は、今朝……」

「そうか……」

思えばアリアと二人で居た事……無かったな。
ふむ、此処はどうすれば切り抜けられる？　口下手な親が子に「最近……どうだ？」「あー、あれだ……いや、いい」なんて言う気持ちがよくわかる。

「一緒に……」

「ん？」

「一緒に回ってくれませんか？」

「ふむ……」

まぁ、暇してたしなぁ。

「ダメ、ですか？」

「別に構わんぞ」

「ありがとうございます！！」

花が咲いたような笑顔とは、多分このことだな。　アリアの周りに花が見える。

しかし、何処を回ろう？

……その場？

「あのぅ……なんか、変な事考えてません？」

「まさか」

「ですよねー……」

なんかボケすら許されん勢いだ。

「（初めての師匠とお出かけ！　楽しい思い出を！！）何処行きま

す？」

「そうだな……ああ、お料理研究会がかき氷のシロップ作り体験して」

――ガシッ

「師匠！　速く、そのお料理研究会に行きましょう！！　パンフレットによるとこっちですね！」

――ダッ！

私の言葉が終えぬ内に、アリアは私の首を掴んで走り出す。

またこのパターンか……なんて言わないからな！！

というわけで、お料理研究会に来たわけだが……。

めんどくさい。　それも果てしなく……。

「では、さっき教えたようにやってください。　腕に自信がある方は、アレンジしてみると良いですね」

アレンジも何も、かき氷のシロップ如きで、どうアレンジしろと？

私が桃の皮を剥き食べる。

アリアは私の隣で、何かＡＴフィールドみたいな絶対不可侵領域、邪魔する奴ぁデストローイてな雰囲気を出して、苺のシロップを作

ってる。
というか、この桃美味しいな？　何処で買ったモノだ？
「あむあむ…」
「あ、あの～…それシロップ用のｋ」
「アァ？」
「……なんでもないです、はい」
「あむあむ」
まったく、うるさい奴だ。
「出来ましたー！！」
「そいつは、よかったな」
びわを食べようと、手を伸ばそうとした時、アリアが声を上げて完成を喜ぶ。
というか、何故びわがあるんだ？　まさかコレもシロップにしたりするのか？　チャレンジャーな研究会だな……。
苺のシロップ作りを終えて、次にやって来たのが私の魔法研究所。
こんなとこに来て楽しいのか？

「此処が師匠の研究所（ラボ）。　いろんなのが有ります！！」

「まぁ、珍しさではどの研究所よりも負けない自信はある」

なんせ、世界が入ってるダイオラマが数千個ほど浮いてるし、机にはカード化した魔法。

棚には私の研究成果のレポートに、神明魔祓の書の原典である記憶の書。

研究資料などがあったり……。

隅には人形（ドール）のパーツと、造りかけの人形。

さらに床には色んな魔法陣があり、一つ一つが邪魔しないように発動させる事が出来る。

まず仮契約の陣、疲労回復の陣、宝具生成陣、神器生成陣と、とにかくいろいろあるからなぁ。

「……よくよく考えたら仮契約の陣は要らないな」

――パキンッ！

仮契約の陣を踏み付けて、陣を破棄する。

そして何度か、床をコツコツ叩いて新しい陣を組み立て設置する。

「……罠、ですか？」

「そういえば、吸収して跳ね返すんだったな……。　台なしにするなよ？」

「しませんよ！」

「なら良い」

「……そろそろ帰る時間みたいですね」

あれからずっと側に居て、一緒に海を見ていた私達だが、唐突にアリアがそう言った。

私とアリアの最後の別れ。

速いものだと感じるし、もうそんな時間かとも感じる。

私はただアリアを見つめる。

アリアの体は徐々に実体を薄くさせ、たぶん触れる事は出来んだろうな。

「……では、また」

「いや、またなんてのは来ない」

「え？」

アリアがいずれ再会するような事を言うが、私とアリアが会うことは殆どない。

第一、私とアリアとの出会いは事故のようなモノだ。

それが長続きしただけ……。

まぁ、オリジナルの宝石剣のせいでもあるんだがな……。

「ユリや鈴ならいざ知らず、アリスやアリア達が私達と会う事はな

い。　少なくとも、私達が会いに行く以外にはな」

「どう、いう……」

「麻帆良祭が終了と同時に、私達はこの世界を旅立つ。　世界を超えるような奴じゃないと、私達には会えない」

「宝石剣があります！」

「フッ……充電式の宝石剣では限界はある。　私達が居る世界に行くには、奇跡でも起こらん限り会えんさ」

「そん、な……」

もうアリアの体は、存在感が０に近いモノになり、わりと真剣に見ないと見失うくらいだ。

「楽しかった」

「マ、マスターーーーーーーッ！！」

一際、大きな声を上げて消えるアリアを見送り、私はポツリとアリアには聞こえないメッセージを言った。

――お前の幸せを願う。

▲カスミ　視点▲

三日目は別れ、麻帆良祭終了、最後の試練（前書き）

長かったネギま！も最後！！
しかも百話目ですよ、奥さん。
百話目でネギま！編終了して尚且つ、私の誕生日！！
というわけで、後書きにシメとして豪華な感じにしました！！

でもこれ、ネギま！編が終わりってだけなんですけど……。

あと、活動報告にて読者アンケートします。
後書きでやっても良いのですが、後書きが長いので……えへへ

三日目は別れ、麻帆良祭終了、最後の試練

▼　貴史　視点▼

カスミからアリアは帰ったとの方向を聞いたのは、薫とのデートが終わった一時間経ったあとだった。
それを聞いたアリスも帰るらしく、それなりにおもてなしが出来たのか心配だ。

「いえ、十分楽しませてもらいました。　ガトウさんにも会わせてくれましたし……言うこと無しです」

「そうかい、それなら良いがね」

「それではまた……」

「また……か……」

「？」

「いや、こっちの話だ」

「そうですか」

まぁ、これっきりってのもアレだし、結婚式くらいは行ってやるか。
並行世界での木乃香と、良い雰囲気みたいだし？

「んじゃあな」

「はい」

最後に別れの言葉を言って、シルヴィア共々消えた。

んで、次は飛翔ファミリーだけど……。

「まぁ、満足したわ」

「この度は楽しい祭りに招待して下さり、ありがとうございました」

「いえいえ、どうも」

アリサの第一声は無し。

いきなりアレはないと思うし……。

てなわけで、すずかのお礼だけ返したら、ＭＷ１（もうすぐ、喚く、一秒前）。

うん、かなり古いわ～。　まぁ、いいけど。

「飛翔も自分の世界頑張れよ～。　つか、仮面ライダーって強いの？」

「まぁ、一般人でも魔導師並に戦えたりしますし、魔導師じゃ倒せない怪人を倒せますから……」

確かにライダーしか倒せん敵も居るらしいが……

「軽く倒せそうだ」

「軽く消せそうだ」

「軽く捻れそうや」

「みんながみんな貴方達みたいな規格外じゃありませんからね！？」

そらそうだ。

「それじゃあ、帰ります」

「思い出は作れたか？」

「はい」

「土産は買ったか？」

「はい」

「また会おうな？」

「はい」

ではまた！　と言って飛翔達はオーロラの中へ消えた。

さて次はユリ達だな。

「ねぇねぇ……乱ちゃんを借りて良い？」

俺達がユリの方を歩いて行くと、乱を抱いたユリがそんな事を言ってきた。

「別に良いが……なんだ？　可愛がる目的以外ありそうだな」

「転生者狩りをね……」

「？」

転生者を狩るだけなら、ユリ達も楽勝だろうに……。

「転生者の中には、アホな特典を選ぶ奴が居てな」

アホな特典？　なんだろう。

今までの転生者がもらったモノ全部とかか？　それとも誰にも負けない存在になりたいとか？　いやいや、もっと具体的に……今まで負けた事のない転生者のリストと戦闘記録の閲覧、そしてその中で自分が選ぶ転生者の能力をくれ……。

「最後の方ビンゴ」

「……クロナの能力を貰った転生者か？」

「ビンゴ」

おいおい、それこそクロナの仕事だろ？　クロナも転生者の選定はやってたぞ？

「それがねぇ」

「魔神の管轄なんだわ」

なるほどなるほど、魔界側の転生者か……。

「乱はどうする？」

「……」

って、聞いた俺が馬鹿だったな。
ユリや鈴、カスミに薫が震えてやがる。
かく言う俺もかなり震えそうになるがな……。

「強く、なったつもりだったんだがな……」

「ウチも……」

「お前らは張り合う方がおかしい気もするが、相手がクロナと乱、救世主さんしか居ない俺ですら自信喪失するぜ」

とにかく、乱の答えはユリ達に着いていくってところか……。

俺は震える自分に喝を入れ、震えを無理矢理止めて乱の頭をわしゃわしゃ撫でる。

「ん？」

「元気に戻って来い」

「わかった」

「それじゃ、またね」

「またな」

「おう」

転移してユリと鈴、乱は俺達の前から消えた。
この別れが最後になるとも知らずｎ

「死亡フラグは立てさせないわ！！」

「チッ」

何かを感じたのか、ユリは戻ってきて地文を遮った。
良い勘してやがるぜ。

「チッじゃないわよ。　まったく、じゃあね」

そう言って今度こそ別れた。

さて最終日も日が沈んで後夜祭を始めたが、俺達は俺達でやることがある。
引っ越しをな♪

「外はかなり慌ててるよ。　貴史」

ダイオラマでカスミ、エヴァ、茶々丸、チャチャゼロと寛いでると、マナが俺達について来る奴らを引き連れてやって来た。

マナ、桜咲、木乃香、ザジか……。

ん、ザジ？

「なんでザジが居るんだ？」

「姉さんが見聞を広めろって……」

あー、クロナに見逃されたんだっけ？　それでいずれ旅立つ俺達に着いてきて、修行させるのか？

「まぁいいか」

となると、かなりの人数になるな……。

「ならアレを出すか」

「アレ？」

「時を刻まない世界球だ。　各ダイオラマ内に作った世界じゃなく、神となって初めて創った世界だ。　時を刻まない世界だから、生命が誕生しない」

「寂た世界だな」

「だと思うだろ？　だがな、何百万年という時間に、植物の種を植えたらその植物自体に時間を生み成長する時植物（じしょくぶつ）なる植物が誕生して、果実は充実してる」

へーすげぇな。

「出入りは自由だから、いつでも出れる」

「それ採用！」

「ならば肉類は、持ち込んでおかなければね」

「だな……」

そんな事で、カスミ管轄の世界でいろいろ準備する事にした。

麻帆良祭が終わって一週間。

麻帆良はさらに慌ててる。

そらぁ退学届けを大量に出され、関西呪術協会の娘が家出したんだし、当然かな。

そんな中、少年が現れた。

「来たか」

「師匠（マスター）」

「最終試験、とある村を悪魔の群れから守れ」

「え？」

「場所はウェールズ、英雄が生まれた村だ！！　時空逆行！！」

――ドォォオオオオオンッ！！

くっくっくっ…悪魔達から村を守れか。
さて、カスミが鍛えたエヴァに師事を受けたその魔道の力……見せてみせろ。

▲　貴史　視点▲

▼　ネギ　視点▼

「うわぁぁあああああああああ……」

師匠に飛ばされて、時空を漂う……いや、逆行してる。
そして、僕は光に落ちた。

「此処は……ッ！？　村が！！」

そうだ、此処はウェールズ！！　師匠の最後の試練だ！！

「だったから、行かないとね」

杖を握り、年齢詐称薬を飲み込んで、僕はあの日の僕を助けるた

めに駆け出した。
あの時の僕がしたように！！

村に入ってあの頃の僕を探す。
その間に、僕は記憶の整理を行う。
あの時何があったのか……
まずは、悪魔に襲われそうになった自分の目の前に雷の暴風が悪魔を飲み込んだ。

――ズドォォオオオオオオオオオオオオンンッッ！！

そこから、光の射手を無数に悪魔が貫かれる。

―――ズドドォォオオン！！

そして、少なくなった悪魔達に向けて……

「薙ぎ払え、雷の斧！！！」

――ドガァァアアアアアアアンンッ！！！

そうだ。　何者をも寄せつけない戦いを、僕は未来から来た僕に教えられた。
だから、すんなりと戦い方が理解しやすいんだ。

そしてあの日の僕は、未来から来た自分を……

「お父、さん？」

父さんと勘違いしたんだっけ……。
此処で否定して欲しかったなぁ。
でも、黙っておかなくちゃ……。

――フワッ

「…お父さん？」

と、そろそろお別れかな……。
そういや、杖はどうもらったんだっけ？

『お、その杖大事にしてたみたいだな』

『はい、父さんから貰ったモノですから、それとあの時、助けてもらって』

『あ、それ俺じゃねぇーぞ』

『へ？』

『いや、俺も向かってたんだけどよ。　すでに終わってたんだわ。
んで帰んのもアレだから、気絶してるお前に杖を置いて行った』

……問題ないね。　うん。
父さんの活躍を奪ってしまったけど、元々僕の試練だったんだし

……。

でも、これだけは言っておこう。

「お父さん！」

「他人の言葉に流されず、自分で考えて行動しろ。　力には責任が伴うから……」

「お父さあー――――――ん！！！」

絶対聞こえてない。

多分、僕を助けてくれた僕も、こんな気持ちだったんだろうなぁ。

ごめんね。　未来の僕。

目を開けると、そこは自分とアスナ姉さんの部屋。

木乃香さんは家出して、退学した事になってるからこうなった。

「あ、起きた？」

「アスナ姉さん」

「エヴァちゃんから伝言、免許皆伝だってさ……。　そして南武先生から、残ったクラスの連中は頼んだぞ、ネギ先生。　カスミさんから、頑張れよ、ネギ・スプリングフィールドだって」

アスナ姉さんから、聞いた名前とメッセージを理解するのに数秒

掛かった。
師匠の免許皆伝よりも、貴史さんから、カスミさんから名前を言われた事に驚き、嬉しかったからだ。

「うっ……うぅ…」

「ちょっ！？　泣くなって！！」

「だ、だって……」

「あーもう、しょうがない奴ね」

「ぐすっ」

アスナ姉さんの手が僕の頭に置かれて、ゆっくりとあやすように撫でてくれる。

「よかったわね」

それが、とても気持ち良く……

「はい……」

また涙が溢れた。
もっと、もっと頑張りますね。
師匠、貴史さん、カスミさん。

「まずは３－Ａを無事卒業です！！」

▲ネギ　視点▲

魔法先生ネギま！　了。

三日目は別れ、麻帆良祭終了、最後の試練（後書き）

秋代「三人の転生者！」

ネギ「魔法先生ネギま！編」

秋代、ネギ「「完結～！！」」

秋代「いや～長かったですね～」

ネギ「はい！　カモくんが死んだり、村上さんが死んだり、さよさんが転校したりと……最初はどうなるかひやひやしましたよ」

秋代「いやー、何と言うかキミがやった後始末をどう清算していいかわからなかったから、それと原作維持派の転生者……この場合は憑依者だね。　彼女も入れたかったし……」

ネギ「でも、転生者が多くないですか？」

秋代「敵が居ないんだよ。　三人に釣り合う敵が」

ネギ「確かに強いですもんねー」

秋代「我ながらやり過ぎたと思わなかったよ」

ネギ「思わなかったんだ」

秋代「さて、最後にはオリキャラと半オリキャラのデータを見ようか。」

ネギ「なんでですか？」

秋代「なんとなく、最初は死んだ者達から」

名前　コウキ
種族　人間
性別　男
所属　ＮＧＯ
キャラ　半オリキャラ
能力　なし
好きなモノ　貴史、マナ、圧倒的な力
嫌いなモノ　自分、犯罪者

ネギ「圧倒的な力が好きって物騒な人だ！」

秋代「まぁ、自分が弱いからこそ惹かれて好きになるんだよ」

ネギ「変わった人が居るんだなぁ」

名前　村上夏美
種族　人間
性別　女
所属　麻帆良学園女子中等部三年Ａ組、出席番号２８番
キャラ　憑依者、原作維持派
能力　脚本……本に声または文を入力する事で、あらゆる現象を引き起こす。
好きなモノ　演劇、ネギま！
嫌いなモノ　演劇、三人の転生者、原作を崩壊させる奴

ネギ「好きなモノと嫌いなモノに演劇が……」

秋代「もともと演劇が好きじゃなかったみたい、でも原作通りにしたいから演劇部に所属して……知らず知らずのうちに好きになったって事だね」

ネギ「なるほど……三人の転生者って……」

秋代「貴史、カスミ、薫だね。　特に薫は自分を殺した人だし。では次！」

名前　ウルキオラ・シファー
種族　人間
性別　男
所属　完全なる世界
キャラ　転生者
能力　ＢＬＥＡＣＨのウルキオラの能力と容姿をそのまんま
好きなモノ　焔、セクストゥム（両名相手にされてない）
嫌いなモノ　邪魔者、クロナ

ネギ「この方は、僕知りませんね」

秋代「クロナさんがやっちゃったからね」

ネギ「次も転生者さんですか」

名前　メッシュ
種族　魔法世界人
性別　男
所属　完全なる世界

キャラ　転生者
能力　Ｆａｔｅのギルガメッシュの宝具、能力、容姿をそのまま
好きなモノ　金、若い女
嫌いなモノ　神（魔法世界人に転生させられたから、旧世界に行けないため）

ネギ「若い女って……」

秋代「時にネギくんの好きな女性は？」

ネギ「居ますよ」

秋代「ほほぅ。　誰？」

ネギ「テオドラさんです」

秋代「あれ、アスナは？」

ネギ「告白はしたんですけど、弟としか見れないと言われました」

秋代「なるなる、では次は生存オリキャラ、半オリキャラ。　最初は三連で！」

ネギ「ちなみに貴史さん達やＧＢの方は抜きです」

名前　フェイト・アーウェルンクス
種族　人形
性別　男
所属　貴史側
キャラ　半オリキャラ

能力　智……全属性を使え、かつ威力は絶大
好きなモノ　貴史側全員
嫌いなモノ　貴史の敵全て

名前　セクストゥム・アーウェルンクス
種族　人形
性別　女
所属　貴史側
キャラ　半オリキャラ
能力　水系特化型
好きなモノ　貴史側全員
嫌いなモノ　貴史の敵

名前　セプテゥム・アーウェルンクス
種族　人形
性別　女
所属　貴史側
キャラ　オリキャラ
能力　闇系特化型
好きなモノ　貴史側全員
嫌いなモノ　貴史の敵

ネギ「なんか、凄いですね」

秋代「三人とも自分専用のデバイス【クライシス】を持ってるし、強いよ～」

ネギ「怖いなぁ……」

名前　神楽坂アスナ

種族　人間
性別　女
所属　アリカ、ナギ側
キャラ　半オリキャラ
能力　魔法完全無力化
好きなモノ　アリカ、ナギ、今のネギ
嫌いなモノ　カモ、前のネギ

ネギ「前の僕……」

秋代「今のキミならわかるよね？」

ネギ「はい」

秋代「ラストだ！」

名前　ネギ・スプリングフィールド
種族　人間
性別　男
所属　麻帆良学園
キャラ　半オリキャラ
能力　なし
好きなモノ　テオドラ、アスナ、アリカ、ナギ、師匠、世話になった人達
嫌いなモノ　カスミ、以前の自分

秋代「嫌いなモノ……これはカモの仇だから？」

ネギ「そうですね。　カモくんや僕が正しいとは言いませんが、それでも許せないです。　でもやり返そうとは思いません」

秋代「そうか……さて、ネギま！編のあとがきは如何でしたでしょうか？　ここまで読んでくれた方は居たのかわかりませんが、読んでくれたら、また楽しんでいただけたら嬉しいです」

ネギ「それでは、引き続き三人の転生者の続きを楽しんでください」

カスミ「このあとは、１００万アクセス突破記念話を何回かやって、私と薫の転生した後の過去話だ。　というか、今更私達の過去に興味があるのか？」

１００万アクセス突破記念１（前書き）

今回は雨季様とのコラボ～でぃす。

後書きに要ＶＳ乱の戦いがあります。

意外な結末があなたの度肝を抜く……。

１００万アクセス突破記念１

▼　貴史　視点▼

さぁて、やって来ました幻想郷。
と言っても、今回は要に会いに来たんだがな。
ん？　要はスターオーシャンの世界？　んなの関係ない。
なぜなら、スターオーシャンも東方も知らんから。
知らん世界観は、作者がどう頑張っても無理なのは知ってる。
では何故、幻想郷かと言うと……一条家が幻想郷に居るからだ。

「だから仕方なくやって来た」

「俺も仕方なく幻想郷に戻って来た」

「では、ヤルか」

要が現れて、ジェイルも現れる。
そして、要を引っ張り部屋に閉じこもる。
しばらくして、聞こえる喘ぎ声。
このまま居るのもアレなんで……

「マジどうしよう？」

あれ？　俺、客だよな？　めがっさ暇。
つか、やることがない。
どうしよう？

「ウチらとの交流もないしなぁ～」

そう言ったのは、一条木乃香。

要がネギま！の世界で先生した時に、要がフラグを立てた木乃香だ。

「俺もついさっきまで、麻帆良の先公だったがな。　そういや、薫との面識はあったな」

「ちょっとだけな」

「困ったなぁ。　なのはらとの交流もないし……」

「ないね～」

俺の言葉に同意するなのは。

「要もお前らの……特にオメーの話はしないしな」

「なぬ！？」

それは聞き捨てならぬ！！

何故話さない！！　思い出したら胃が痛むのか？　それでも無理して話せば良いよ。

俺が気まずくなるより、マシになるから……。

何が悲しくて交流の無い奴らと一緒に、ジェイルと要が行為してる音を聞かなあかんねん！！

「つか、防音対策しろや！！」

「いや、私達が映像を見て慰…」

「もうやだ……此処……」

というわけで、アウェーな俺は幻想郷を見て回る事にする。

「いってらっしゃ～い」

黙れ。

あー、どうしようかねー。

妖怪の山で暴れるのは止めとこう。

ある種の天狗を怪我でもさせたら、要らん怒りを買いそうだし……。

なら、太陽の畑なるひまわり畑か？　止めとこ、観賞しようにも鬱陶しいだろうし……

「マジやることねー」

「うるさいわね。　あんたの大声で参拝に来た人が逃げたら、どうしてくれんのよ」

「安心しろよ。　こっから人里まで妖怪と蟻にコオロギ、鈴虫くらいしか居ない」

「へー、案外凄いのね。　本当かどうかは良いとして……」

「しっかし、寂れてるねー」
「何？　同情して賽銭くれるの？」
どういう思考回路をしてやがる。
だいたい俺の財布の口は固くて、賽銭箱に入れる金なんざ……

「出してくれたら、美味しいお茶と茶菓子を」

――ジャラ……

すぐさまパンパンに膨れた財布をひっくり返し、五百円玉を滝のように賽銭箱に入れる。
え？　財布の口が固いんじゃないかって？　馬鹿が、美味いもん食えるなら財布の口は、緩む処か閉じないんだよ！！
賽銭箱が五百円玉によって満杯になって、俺はちみっこい巫女を見ると、口を開けてア然としてる。
はて？　どうかしたのか？　とりあえず………
「美味い茶と茶菓子。　俺が気に入らなければ、さら地にしてくれる」

「言うじゃない。　見てなさい、長年鍛えあげた私のお茶を！！」

「はい」

しばらくして、巫女さんがお茶と茶菓子を持ってきてくれた。
まずは美味しいと豪語した茶から…

「ずず…」

「どうよ！」

このほろ苦さと舌を麻痺させるような熱さ、美味い！！　渋味がほろ苦い味にしてるとこなんかまた！！　多分、子供でも飲めんじゃね？

「美味しい茶というのは認めてやる」

「わかる奴でよかったわ」

「時に巫女」

「霊夢で良いわよ」

「んじゃ、レイム」

……変換がメンドイんだよ。

「何？」

「その袋は？」

「賽銭の回収よ」

まぁ確かにあれじゃあ、もう入らないよなぁ。
というか、此処に神様なんて奉ってないだろ？　まぁ、俺には関係ないがな……。
さて茶菓子はって……

「茶菓子……大福がない！！」

「それは大変だな？　もむもむ」

どうなって……ん？
レイムに入れ代わってるように、そこに居たのは魔女。
口元に白い粉、少量の小豆がついてる事からして、犯人はこいつ！！

「時に魔女っ娘」

「ん？　魔女っ娘ってのは、あたしの事か？」

「食べ物の恨みは怖い。　つーわけで死に絶えろ」

一一蛇咬（スネークバイト）！！

「ブフッ！？」

――キラァンッ！

あーあ、大福が……。
俺の活力がああぁぁぁぁ……。

「あれ？　魔理沙が来てたはずだけど」

マリサ？　……もしかして、あの魔女っ娘か？

「魔女っ娘なら星になった」

「そう…よくわからないけど、魔理沙がなんかしたわけね」

「俺の活力を奪ってった……大福～」

「つまりは大福を取られたと……」

まぁ、過ぎた事を気にしてもアレだ。
制裁も加えたし……。

「ところであんたの名前は？」

「名前？」

「そ、私は名乗ったんだし、貴方のを教えてよ」

「山田太郎」

「ふざけてる？」

「あー、じゃ貴史で……。　名前しか名乗ってないから、俺も名前しか名乗らん」

「……本当のようね」

疑うとはなんて巫女だ!!　いーのか、ソレ神に仕える者として!!

「んで、何しに来たの？」

来た？　幻想郷だと連れて来られたにならねぇか？

俺が首を傾げると、考えを読んだかのようにレイムが答えてくれた。

「あんたみたいなの、紫が連れて来るわけないでしょ？　というか、貴方……世界を渡れるわね？」

そこまで見抜けるとは、伊達じゃないみたいだな……。

博麗の巫女ってのは……。

「ちょい知り合いに会いに……その知り合いは妻とよろしくヤッてるから、気の利く俺は外に出て散歩」

「もしかして、知り合いって一条要？」

「正解。　ご褒美にまたこっちに来たら、賽銭箱を満タンにしてやる」

「野口（レギュラー）？」

「福沢（ハイオク）だ」

「神様！！」

ガシッ！っと手を握られ、神様と言われた。

知り合いに神は居るが、俺は神じゃねぇし……まぁ、いいか。

しばらくぼーっとしてると、日が沈んで一日が終わった。

さてはて、どうするかねー。

このまま立ち去るのも良いけど……。

「あ、霊夢ちゃんのとこに居たんだ」

「よーなのは。　リリカルマジカル頑張って子作り終わったか？」

「な、なななななな……なんで知ってるんですか！？　というか、その呪文はやめて下さい！！」

「へいへい」

顔を赤らめるなのはを流して、縁側から立ち上がる。

「もう帰るの？」

「おう、上がったのか」

すると、丁度よく風呂から上がったレイムが登場。
ほんのり赤みがかかった頬が、アクセントだな。

「た、貴史さん!?　霊夢ちゃんにナニしたんですか!?」

「お前ね……。　その思考はやめろ。　割とマジに……お前が恥をかくだけだ」

「え？」

いや、ほんと……レイムも哀れめいた目で見てるし……。
とりあえずは……

「湯冷めしないようにな」

「ええ」

「おら帰るぞ、一条なんとか」

「なのはです!!　わざと間違えないで下さい!!　というか、私の誤解を」

「きっと明日から優しくしてくれるさ」

「いーやーだー。　戻って誤解を解きます～」

「はーいはい、俺が帰った時にやってね～」

今日はホントにアウェーな俺だったぜ。
これを記念話にしていいのかねぇ。
まぁ、悪くは無かったな……。

▲貴史　視点▲

１００万アクセス突破記念１（後書き）

要ＶＳ乱

机に肘をついて握り合う二人。

要「レディ……」

乱「ゴー！」

――ダンッ！　カンカンカンカンッ！

ゴーの合図で、要は乱の手の甲を机にくっつけた。

要「勝ったぞー！！」

乱（泣くほど嬉しかったのかな～）

要は泣く。

普通では手の届かない相手に勝てた事に、泣く。

それは歓喜の涙なのか、生活モードで戦闘力０の乱に勝てて情けないと思う涙なのか……それは要しかわからない。

要「……何をしてるんだろ、俺」

涙を流したあと、要は素に戻り落ち込んだとか……。

１００万アクセス突破記念２（前書き）

今回は黎音様の作品とのコラボです。

１００万アクセス突破記念２

▼　カスミ　視点▼

今日はゼフィリスに、リベンジ戦の意見が通った。
今度は勝とうと思う。
しかし、その前にやる事が……

「大人しく私が用意した世界に行くか、フェイトをからかって私に殺されるかッ！！　なんだ？　この濃厚な殺気は…」

「ああ、たぶん貴史かな」

「何？」」

恋人になって以来、私を守るように私に向けてる悪意を放ってる相手に強烈な殺気を送る芸当を何回か見た。
愛されてるってのは、何度受けても嬉しい。

「来てるのか？」

「いや」

「世界を跨いで飛ばすとか、私にすら出来んぞ！！（というか、監視してるのか？）」

「ああ、監視はない。　貴史曰く、ビビッと来た！らしい」

「……（欲しいんだが、その力）」

まぁ、バトル中には来ないだろ。
バトル時と違う時を見抜けるらしいからな…。

「まぁ、見つかってしまったのは仕方ない。　では早速移動しようじゃないか」

「わかった」

すぐにゼフィリスと転移してやって来たのは、以前ゼフィリスと貴史が戦った場所。
なんも変化しないな。　この場所は……。

「戦いの為に造られた場所だからな」

「地文に突っ込むな……」

「それはすまんな。　では、始めよう」

ゼフィリスは、お馴染みの約束された勝利の剣を構える。
そして、私は神明魔祓の書を構えて一一一対峙する

▲　カスミ　視点▲

▼　三人称　▼

荒地に、二つの影。

一つは黄金の剣を構えてる、女性とも見える中性的な顔をした男性……ゼフィリス。
もう一つは自分の周囲に一冊の本を浮かせてる、フェイト・T・ハラオウンに似た女性……カスミ。

一度ぶつかり合い、その時はゼフィリスが勝ったが、あれから時間はかなり経つ。
強者であるカスミならば、その費やした時間をゼフィリスを超える為に、研鑽に研鑽を重ねて強くなってるはず、しかし一度勝ったとは言え、ゼフィリスも黙ってない。
自分が認めしライバルと技を高め合い、そして一秒一秒と自分の限界を超えて来た。
以前のままと思って戦えば、火傷では済まされないだろう。

「そろそろ始めるか……な！」

最初に動いたのは、カスミだった。
瞬時に魔力を高め、無詠唱で複数の属性の魔法の射手を数億単位で放つ。

「多過ぎて無駄だな」

「撃ってなんぼの魔法だ。　牽制如きで使う魔力量じゃないな」

「だが魔力は減る。　牽制如きで使う魔力量じゃないな」

流星群の如く迫る魔法の射手を避けながら、ゼフィリスはカスミに接近する。

「シューター同様、誘導も可能だ。　誘導出来る数は……今放って

る射手以上」

つまりは……と、カスミが言いながら魔法の射手を操作し、ゼフィリスに全弾落とした。

「避けても無駄だ」

「なら耐えるまで……」

無数の魔法の射手が爆発したせいで発生した煙が消えると、そこには全方位にバリアを張り巡らせたゼフィリスが居た。

「チッ耐えたか」

「牽制の威力じゃなかったんだが……」

「気にするな」

カスミがゼフィリスに手を伸ばし向けると、カスミの影が溢れ出して無数の動物が現れる。

しかしその動物には生命が感じられず、まるで影のようだった。

「さっきの魔法といい、量がおかしい気がする。　まさか量で攻めて勝とうとしてないか？」

「さぁな、行け！」

カスミの命令に従い、駆け出す動物達。

上からは鳥達が、前と左右からは地上を駆ける動物達が、後ろには宙を泳ぐように鯱（しゃち）、鮫（さめ）が向かってくる。

流石のゼフィリスも、魔法の射手同様にバリアを張るだけでは耐えられないと感じて抜け道を探すが、抜けれそうな道を見つけると、人形（ドール）が加わって来た。

「人形も馬鹿には出来んぞ？　傀儡億鬼操術（くぐつおっきそうじゅつ）！！」

「「……「「ケケケケケッ」」……」」

「なら、消すまで……」

そう言ってゼフィリスは、二つくっついたライフルを投影し、くっついたライフルを分けて左右に向ける。

「ん？　あの構えは……」

「殲滅開始」

ゼフィリスが呟くように言うと、二つのライフルから光が放たれ、左右に向かって来た動物を消し飛ばし、回転し始めると前の動物、後ろの海の生き物、迫り来る鳥と人形を消し飛ばした。

「さて、次は私から行くぞ？」

「もっと防御に回ってもいいぞ？」

「冗談…」

ゼフィリスは、この戦いを楽しむように口元をつり上げた。

そして、ゼフィリスの背中に天使のような純白な翼を出し、ツインバスターライフルを破棄して、約束された勝利の剣を投影して、

一気にカスミに近付いた。

「ッ！？（速い！？）」

カスミに振り下ろされる一撃は、カスミが咄嗟に強化した障壁に遮られる。

「破壊すれば問題はないな」

そして、零距離から放たれる青いレーザー光線。　蒼崎青子の魔術である。

――ガシャァアアアアアーーーーーンッ！！

青いレーザーを受け止めた障壁は、大きな音を立てて崩れ去り、黄金に輝く剣を受け止めていた障壁も無くなり、再度カスミに襲い掛かる。

「舐めルナァァアアア！！」

――ザンッ！！

カスミが吠えるが、剣は止まらずにカスミを斬り裂いた――――

「手応えが……ない」

が、その一撃に手応えはなく……まるで雲を斬ったような、そんな感覚を感じた。

「いや、雲も斬った……という手応えは残る。　そこにあるのに、

そこにないような感覚。　幻術の類いか？」

「イヤ、違ウ」

ゼフィリスが後ろを振り向くと、そこには紋様で闇のような何かを縛り、羽を生やした人の形をした何かが居た。

「声からして、カスミか？」

「アア……コノ魔法ハ漆黒。　アラユル攻撃ハ、私ノ体ヲ通リ……スリ抜ケル。　所謂、無敵状態ト言ウワケダ」

漆黒。　カスミを漆黒の吸血鬼と言われる所以である。

だが、カスミの言葉には誤りがある。

無敵状態と言っても物理攻撃のみで、魔法や魔術と言った攻撃は多少効果はある。

だがそれを知ってるのは、まだ誰も居ない。

闇の魔法を開発したエヴァも、一度対峙したが一瞬にして姿が変わったせいで、力がわからなかった薫も、あの状態でも物理攻撃でダメージを与えられる貴史、乱でさえ知らない。

知ってるのは、カスミのみ。

「厄介だな……。　だが、いくら無敵と豪語しても、穴はあるものだ。　死のイメージが出来ず、死ねない奴を倒せるように……」

「ナラ、試シテミロ」

瞬間、青いレーザーと黒い魔力砲がぶつかり合う。

ゼフィリスがサイファスで空間を斬り裂けば、カスミが爪で空間を切り裂く。

ゼフィリスが約束された勝利の剣の真名解放すれば、カスミは約束された勝利の剣の真名解放を模倣した魔法を放つ。

時間が経つにつれて、カスミ達が居る世界は悲惨な状態となる。
しかし止まらない、止まれない。
一度負けた相手に負けぬと、這い上がって来る若者を年長者としての意地の張り合い。

ゼフィリスの剣がカスミを捉え、カスミの爪がゼフィリスを捉える。
ゼフィリスの魔術がカスミを捉え、カスミの魔法がゼフィリス捉える。
剣はカスミをすり抜け、爪はゼフィリスを裂く。
魔術はカスミの腹に風穴を開け、魔法はゼフィリスの肩を抉(えぐ)る。

「漆黒ノ炎嵐!!」

「ブロウニング・スターマイン!!」

すでに大半の魔力を失った二人は、ありったけの魔力を使い、魔法を放つ。

――ズドォオオオオオオー――――――ンッ!!

「くっ……」

「ハァ、ハァ……やはり魔法、魔術は効くみたいだな。　漆黒とやらが解けてるぞ」

煙が晴れて、現れたのはボロボロの二人。
互いに魔力が尽き、カスミも漆黒が解けていた。

「フッ……そっちも魔力が尽きてるじゃないか」

「お互い様だろ」

「まだ、やるか？」

「引き分けは後味が悪い」

しかし、魔力が尽きようともカスミはまだ戦う。
それに応えるように、ゼフィリスも痛む身体に鞭を打ち、周囲にある魔力を集める。
そしてカスミも……

「我、汝と契約する者也。　星よ！　輝け！！」

星の契約。　カスミがアルクエイドのように、星のバックアップを求めて開発した契約の儀式魔法。
これにより、星の魔力を自分の魔力のように操る事が可能となった。

「……そんな切り札を持っているとはな」

「ハァァアアー――――ッ！！！」

周囲にある魔力をありったけ集め纏ったゼフィリスと、星の魔力を纏ったカスミがその場で佇む。

先に最後の札を切った方が負ける。

ゼフィリスもカスミも、それは分かっている。

しかし、ゼフィリスはカスミの動きを待つ時間はない。

「約束された勝利の双剣（エクスカリバーズ）！！」

ゼフィリスは、二つの約束された勝利の剣を投影し、真名を同時解放した。

「真・星光の殲滅砲（スターライトブレイカー）！！」

黄金の双光と、星の魔力を使った真の星光がぶつかる。

――ズガァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアーーーーン
ッッ！！！

鼓膜を裂くような音がしたあと、カスミは即座に次の魔法を構成するが………

「遅い」

――ズドォォォオオオオオオオオオオオオーーーーーーーーン
ッ！！

「！？」

煙の中から見えた青と白いドレスを来た金髪を見たカスミは、ゼフィリスの切り札を理解した。

だが、カスミが構成した魔法を放つより先に、真祖の姫は星の息吹を放つ。

「ぐっ……く……ァァアアアアアアアアアッッ！！」

光の奔流の中、カスミも星の輝きを放つ。

――ドガァァアアアアアアアアアアアアアンッッ！！

真祖の姫が放つ光を押し返すように、漆黒の真祖が放った光は勢いを増す。

「これが、私の……星の息吹だ！！！」

「イメージだけで構築した事は褒めてやる……が、私のとは足元にすら及ばん」

――カッ！！！

真祖の姫の星の息吹が一層輝き出して、カスミの星の息吹ごとカスミを吹き飛ばした。

光が消え、土煙も晴れて立っていたのは――――

「ボロボロだな…」

――――カスミだった。

「……完全に吹き飛ばしたつもりだったがな、私の敗北だな」

「いや……光が止んだあと、飛びそうな意識を無理矢理繋げて、カードを使っただけさ」

「カー、ド？」

「魔法や装備をカード化した奴だ。　少量の魔力で大魔法を使える。あの撃ち合いが終わったあとだ、お前の勝ちだよ」

――パキンッ！

カスミはカードを握り砕くと、カードは魔法を発動してゼフィリスを少しだけ癒していく。

「……自分は、全、かいの……くせに」

「ハッ、敗者に傷を完治させるまで治させるとか鬼畜だな」

黒い笑顔全開のカスミ。　とても敗者とは思えない。

「ぐ、なんか負けた気分だ」

「次は勝つ。　またな……」

片手を振って、カスミは世界から消えた。

▲三人称▲

１００万アクセス突破記念３（前書き）

今回は畏無様の作品とのコラボです。

１００万アクセス突破記念３

▼　貴史　視点▼

少し前に俺達三人と他二名の弟子にさせて欲しいと、思考回路がイカレてる転生者に出会った。
ん？　思考回路がイカレてるって評価は酷いって？　当然の評価だと俺は思うよ。
本来師匠ってのは、一人居れば良いんだ。
それを専門に分けて、鍛えて貰おうなんざ……不出来な弟子の完成だ。

以前読んだ漫画に一流の麺職人と、一流のスープ職人、一流の具職人を集めて最高のラーメンを作りましょうってのがあった。
……結果は、そこそこうまいラーメンが出来ただけ。
一流の職人が集まったのに、出来たのは一流どころか二流も怪しい三流ラーメン。
それがその弟子だ。

「此処で問題……一流の職人が鍛えたのに関わらず、三流の弟子が出来上がったのは何故でしょう？」

「一流が作るモノが、他の一流の職人が作るモノと調和せず、自分勝手に主張してる、からです」

「正解」

だが、人はラーメンじゃない。

だったら三流の弟子は、どうやったら一流になれるか……。
答えは簡単だ。
器……弟子が調和すれば良い。
ラーメンの器は、ただ一流のモノを乗せてるからこそ三流止まり……。
だが弟子はただの器じゃない。　人間だ　。
鍛えられた術を、調和させる事が出来る！！

「だけどお前と来たら、ただ使ってるだけ……最高級のモノを乗せてるだけの器で動いてきた！！　と、怒りたいのもあるが、俺も初めての弟子だ。　薫やカスミ、その他二名と違い、弟子なんか持った事すらない。　俺の術が全てを台なしにしたかもな……」

「そんな事は！！」

「というわけで、俺は俺なりに鍛える事にした」

「……と言うと？」

「命懸けの全力全開、限界バトル～魔王が怒り狂う修行法の巻き～」

「……もし失敗したら？」

「安心しろ……この修行法に『もし』だとか『仮に』だとか、そんな戯言（たわごと）は聞かん！！　一流と調和しろよ？」

「い、いやだぁぁあああああああああああ！！」

逃げる霧夜を見て、俺はゆっくりと歩いて霧夜の後を追い掛ける。

しっかし、逃げ足速いな。
やっぱり命が懸かってると、限界を超えるもんだな……。
逃げろ逃げろ～、せ～かいの果てまで～っと……。

霧夜の修行を始めて、数秒が経った。

「ハァハァ……ぐっ……く」

結果はご覧の通り、ボロボロの弟子が出来上がったとさ……。

「……弱くなったな。　なんだ……あー、お前の力って……
お前の中に居たアインストなわけ？」

「な、何が……」

「お前の力は、内に眠るアインストの力だけかって言ってんだ！！
基礎力は俺と霞として、カスミは何を教えた！？　薫は何を教えた！？　アインストの力に頼るんだったら要だけで十分だろーが！！」

――ブンッ！！

尻餅着いてる霧夜を投げ飛ばし、静かに呪文の詠唱を始める。

「今こそ……汝が右手に、その呪わしき命運尽き果てるまで、高き銀河より下りたもう蛇遣い座（アクスレピオス）を宿すものなり、されば…我は求め、

訴えたり……喰らえ――その毒蛇の牙を以て！！」

「！？」

――蛇咬（スネークバイト）！！！

蛇咬が霧夜の心臓を捉える。

あとは貫くだけで、霧夜の人生は終わる。

記念話とか、コラボとか……んなのどうでもよくなった。

俺がやるのは、腑抜けきった弟子を始末する事！！

「ッ！？（死！！　殺される？　俺が…。　誰に？　貴史師匠に…。　嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だぁぁあ！！）……まだ、死にたくない！！」

――バシィイッ！！　カッ！！

霧夜の心臓を貫く寸前、霧夜は俺の蛇咬を左手で止めて、空いてる右手に魔力を篭めて、カスミの魔法を放った。

それは、たった一本の魔法の射手（サギタ・マギカ）。

俺達の弟子にしては、クソみたいな弱い魔法。

――ドサ、ドサッ

まぁ、それでも俺が驚いて尻餅着くくらいの力はあるがな。

さて修行も終わったし、弟子を起こすかねぇ。
つか、腹減った。

「んなわけで、起きろクソ弟子」

ガシガシと、弟子の頭を蹴っ飛ばして起こす。
え？　酷いって？　るろ剣の師匠よりマシだろ？

「う、貴史師匠？」

「とりあえず、合格点だ。　はなまるをやる」

「いや、いりません……いつつつ…」

「生意気だ。　オホーツク海にでも流すか」

「酷い！！」

「つか、漫才してる暇はねぇんだよ。　こっちは腹減って死にそうなんだから、なんか美味いもん作れ。　まずければ消す」

「え？　何、この理不尽」

うるさいなぁ。　こっちは、ソレで通ってるんだから良いんだよ。

「というか、奥さんに作って貰えば……」

「薫は次の世界に行ってるし、カスミはゼフィリスのとこで戦闘、カルタは部隊に出撃要請があったらしく出撃してる、シグナムも同じく、乱は祖父母に連れられてる、他の奴らも出払って居ない、ジ

ェイルは子育てで幻想郷に行ってるんだよ」

「最後の方は取り消して構わんよ？」

「ん？」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえ振り向くと、そこには幻想郷で子育てしてるはずのジェイルが居た。

「さっきキッチンを見たら、生ごみが増えてるんだが……いったい私たちが居ない間に何日絶食したんだい？」

「絶食！？」

「何を驚いてる？　キミが止めた蛇咬は、本来の無詠唱以下の威力だ。　まともな食事をしてたら、文字通りキミは死んでいた」

絶食するはずじゃ、なかったんだがねぇ……。

どうも舌が肥えると、まずくて食えねぇ。

見た目が普通で、味が劇的にまずいってどうよ？って思う事が多々あるし……。

「つか、子育ては？」

「ダイオラマを使って、のびのび成長させたよ。　第一私も帰ろうとしたのに、子供には両親が必要だ～とか言って帰さなかっただろ」

「当然だろ」

子供には両親。　乱や亜衣には出来なかったが、それを要の子供

にまで強要すんのもわがままじゃねぇし……。
それにあそこは母親が多いんだよ。

「ガキの最初の言葉は、産んでくれた母親のもんだ。それをなのは達が、お前より先に聞かせるわけには、いかねーだろ」

「フッ……まぁ、そのおかげで私が最初に聞かせてもらったよ」

「まぁ、終わって帰って来たんなら良い。というか、帰ってきて早々悪いが飯……もう意識がもたん」

「寝てるといい。作ったら起こす」

ああ……って、あー声を出すのも億劫だ。死にてぇ……。

「俺、空気だ」

うるせー、クソ弟子。

――ガスッ！

「いってぇ！！」

……今日は最高の飯にありつけそうだ。

▲貴史　視点▲

１００万アクセス突破記念４（前書き）

今回の話は、レティウス様の作品とのコラボ。

１００万アクセス突破記念４

▼　貴史　視点▼

突然だが、俺と薫は天界から召喚された。
本来なら召喚してくれた奴を締め上げるんだが、カスミにそんなこと出来るはずがねぇ。

「すまんな、急に呼び出して」

「お前ならいいさ」

「で、どないしたん？」

「ああ、実は－－－」

薫が呼び出した理由について、カスミに問い掛けると、カスミはとある人物を紹介してきた。

「こいつの名はトール。　神だ」

「「よし、消そう」」

「ちょ、ちょっと待って！！　え？　いきなり！？　なんで！？」

なんでって、お前……。

「カスミを使って呼び出せば、ボコられないと思ってる考えが許せ

ん！！」

俺の言葉に、うんうんと強く頷く薫。　そして言わんこっちゃないと、この展開を予想していたカスミは、事の成り行きを見てる。

「ちょっと待って、お願い待ってよ！　もう一人のあんたが関わってるから、あんた以外頼れないのよ！！」

……ん？　もう一人の俺？

「どういう事なん？」

「実はね。　赤屍クロナって転生者が、私が担当してる転生者に目をつけたのよ」

「それはそれは、ご愁傷様で」

「他人事みたいに……」

他人事だもん。

「それで、今殺されるわけにはいかないのよ。　だから、鍛えてほしいの！」

クロナ相手に、対策として俺を指定するのはわかるが……。

「俺が鍛えてもクロナには届かんぞ？」

「死なないようにしてくれれば……」

それ無理。　一回だけクロナが鍛えてくれたけど、まったく歯が立たなかったし……。
全力で訓練に挑んだんだぞ？　マジになっても勝てん。

「はっきり言うが無理」

「何故！？」

「俺よりレベルが高いから……」

「ハンパなく高いもんなぁ」

「少なく見積もって、娘一人分開くしな」

「ｏｈ…」

俺らの発言に、リアルにｏｒｚするトール。

「まぁ見捨てるのもアレだし、鍛えるだけ鍛えてみるか」

「ありがとう！！」

復活早いなぁ。　まぁ、しょうがないか。　アレでも一応俺だし、責任って事で……。

「とりあえず、喚んでくれ」

「わかったわ！」

そう言って、一瞬で消えるトール。

俺は喚べと言ったんだが、まさか召喚出来ないのか？

「どうしたんだよ？　いつに無く急かして」

「良いから来なさい！　あんたの今後が掛かってんだから！！」

「何ソレ？　ん、あんた達は？」

お～連れて来た、連れて来た。　意外に速かったな。

「南武　貴史」

「カスミ・ヴェネーラ」

「近衛　薫や」

「はぁ……赤羽　紅那岐です」

アカバネ　クナギ？　言いにくい名前だな、おい。

俺のそんな考えを読んだのか、はたまた経験からなのか紅那岐とやらは、「呼びにくかったら呼びやすい呼称で良いです」と言われた。

「んじゃあ、少年で」

「いくらなんでも酷すぎる！！」

「私はガキで」

「俺、第一印象でなんかしくった！？」

「フッ…坊ややからな」

「もう扱いが酷いってもんじゃない！！」

チッ……我が儘な。　馬鹿弟子なんか、泣いて喜ぶ愛称だぞ？
何がイケない？

「いやいやいやいや、首を捻って何がイケないんだ？的な感じですけど、自分がそう言われて嬉しいですか！？」

「何を馬鹿な事を……少年って歳じゃないし」

「ガキって歳でもない」

「坊やと言われるほど、ウチは甘くはないえ」

「「「というか、言った奴はボコる」」」

「理不尽すぎる……」

それが俺達だからな……。

「まぁ、天災が降り懸かったと思って諦めな」

「天災？」

「まず幾千万の落雷と消える事のない大火災（薫）、日食と停電、地震に地割れ、津波も追加（私）、さらに核ミサイルの自爆に無数の隕石（貴史）、終いにはビックバン（クロナ）」

「カオス過ぎて逆にわからない！！　けど最後には何も残らないってのだけは、わかった！！」

「うるせぇ～！！」

――ドカァァアアアンッ！！

「くぼはぁぁあああ！！？（なんで殴られたの？）」

「男なら細かい事の一つや二つや三つや四つや……もう纏めて大きい事は気にするな！！」

「そこは気にしろぉぉおおおお！！」

おう、少年の魂の叫びが俺に届いたぜ。
だから何？　という者も居るだろう。
だが、あえて言わせてもらうと……

「大声を出すな！！　近所迷惑だろ！！！」

「え、ぇぇぇえええええええ！？」

さて、このままでは話が進まないので、問答無用に話を進める。

「お前がなんで此処に来させたのは、先に話した天変地異……これの最後が起きないようにする為だ」

「最後と言うとビックバン？」

「そうそう、それ」

「俺としては、最後から二番目のも起きないでほしいんだけど……」

「それ、俺だから無理」

「ｏｈ…」

「そこでだ、少年。　少年には、まず門を開けてもらう」

「門？」

「ああ、カスミ」

「了解だ」

俺がカスミに声を掛けると、カスミは一枚のカードを出して、握り潰した。

パリンッと軽い音を起てたあと、カスミの後ろから巨大な門が現れた。

「これは試練の門と言ってな、ＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲで出て来たゾルディック家の門に似せた奴だ。　ゾルディック家の門と違うのは、これは力を計る門でな……現在の自分のレベルを知る事が出来る」

「へぇ～」

「ちなみに俺は千の門まで」

「私は六百の門だったな」

「ウチも六百やった」

「ビックバン（クロナ）はどれくらいか知らんが、少なくとも全部の門を開けられる」

乱の記録が全門だしな。　乱より強いクロナなら、全門を開けるのも簡単だろ。

「全部って……いったいいくつあるんですか？」

「一万」

「……（少ない？）」

「ちなみにこの門は、一の門を開けるだけで異常な戦闘力（バグレベル）は必要だ」

「……チートだったらどれくらい……」

「確か十の門から反則的な戦闘力（下位チートレベル）で、百の門から規格外な戦闘力（中位チートレベル）、三百の門から理不尽（上位チートレベル）だ」

ちなみにこの門、十の門辺りからレベル差が大きく離れるから、十の門を開けた者と十一の門を開けた者のレベル差は月とスッポン、天と地程の差があるんだぜ。

「でも、これって自分自身の力を計るもんでしょ？　俺の切り札って宝具なんですが……」

「俺も宝具使うぜ。　手加減用に」

「……はぁぁあああああ!?」

「ウチも武器を使うけど、これも手加減やね。　本気の全力は雷帝＋虚化（ホロウ）やし」

「私は魔法一択だが、魔法合戦なら負ける気はない（ゼフィリスに負けたけど…）」

「……」

俺達の言葉に、口を開けてポカンとしてる少年。
ものすごくだらし無い。

――パシャリ

「ッ！　なんで写真を撮ったぁぁあああ!!」

「少年の事が好きな相手に贈る為だが？」

「嫌がらせかっ!!」

「嫌がらせ？　何を馬鹿な事を……いいか、好きな人の意外な一面ってのは、むしろプラスなんだぜ？」

「俺が嫌だよ！　マイナスだよマイナス!!」

「そっから過負荷（マイナス）が目覚めて、新たな能力が手に入り良いこと尽く

し」

「過負荷（マイナス）って、一生勝てない人種じゃなかったっけ？」

あーだこーだと……最近では過負荷の能力も流行り出してるんだぞ？　俺には良さがわからんが……。

というか、完成（ジ・エンド）だったか？　あれも俺自身どうかと思う。

完成って終点だよな？　限界を決められて、もう此処から先は超えられませんよ～って、線引きされてるだけじゃん？　力に終点は要らない。

と、此処まで語っておきながら、今回は異常（アブノーマル）だとか過負荷（マイナス）だとかじゃない。

少年の修行だ！！

「とりあえず、門を開け」

「ちなみにトールの記録は、七十五の門」

「百すら届かなかった……」

「……わかった」

――ギィッ…

開いた門は三十八の門まで……。

「「…「……」…」」

その結果に誰も言えない。
ただ、落ち込んでる少年を見るだけ……。

１００万アクセス突破記念話　４　～了～

「いやいやいやいやいやいや、修行をつけてよ！！　まだ死にたくないです！！」

「とは言っても、相手はクロナだしなぁ」

正直な話、最低でも五百の門まで行ってくれないと……無理だな。
どう修行をつけたとて、一日で五百まで行くなんて……要がさらに卑屈になる。
というか、泣くんじゃね？
と、ぐだぐだやってるけど、そろそろ終わる頃だ。
残念ながら此処までのようだね。

「嘘だ、嘘だよね！？　力を見て終ってあんまりだ！！」

「……しょうがない。　修行をつけてやるか」

「あーざーッす！」

まず少年と距離を取って、力を引き出す。

俺の本気の全力。

「全力で耐えろよ、気を抜けば死ぬぜ？」

「ッ！！」

俺は赤い天使の翼を自分の能力で、生やしてるように見せる。

これは桜咲のように、実際に生えてるわけじゃない。

幻のように実体がなく、そこにあるように見せてるだけ、しかし見せてるだけと言っても、カッコつけてるわけじゃない。

超越者として、蛇遣い座（アクスレピオス）を宿す者としての力をフルに使ってる証拠。

これが強さ表に出していた、超越者＋天使モードだ。

そしてこの状態で動けば……

ーーッ…

「え…」

相手は俺を認識出来ずに、沈む。

「俺がお前の背中を取るまでに、億単位で死んでるぜ？　ちなみにクロナはこれ以上だ」

「！！」

俺がそう言い終わると、すぐに後ろを振り返る少年。
ようやく俺を認識したのか、まぁこのままだと本気でやばそうだな。

「これでそれなら、クロナを相手にするのは苦労するぞ？　多分、お前はクロナから目を逸らすからな」

「目を逸らす？　危険人物を目の前に？」

「人間の脳はな、簡単に記憶をなくすように繊細なんだよ。理解したくないモノ、認めたくないモノを見ようとは思わない。今、お前が俺を認識してるのは、俺が殺気を放ってないから……殺気を放てばこのように……」

――ゴウゥッ！！

「消えた！！」

俺が殺気を少年に向けると、少年は突然俺の姿を見失う。
しかし実際に見て、俺はまったくその場を動いてない。
いまだ少年の目の前に居る。
これは少年の脳が、俺という存在を認めたくないから、少年の脳はわざと俺を認識（みない）ようにしてるだけなのだ。

――フッ…

まぁ、クロナは此処までの事はしないだろ。　戦いを楽しむ為にな。
では、何故こんな事をしたのかと言うと……俺達レベルはこんな事が出来るんだぞっと、単に自慢したかっただけだ。

「んじゃ、修行を始めますかね。　カスミと薫も手伝ってくれ、ついでにトールも」

「わかった」

「了解や」

「はいは～い」

さぁて、少年。　この修行で百の門まで開けれるよう、頑張れよ？

▲　貴史　視点▲

▼　ジェイル　視点▼

貴史がカスミに召喚されて、暇を持て余している。
しかしこんなに暇な時間を貴史は、以前過ごしたのだから、私も文句言うわけにはいかない。

「だけど暇だ」

こう暇だと、何かを造ってみようかという気になる。
何を造ろうか？　兵器は飽きたし……

「ごめんくださ～い」

おや？　客か？　それにこの声は……

私はすぐにモニターに映して、来客の姿を確認すると、そこには月村すずかが居た。

何しに来た？　というか、何処の月村すずかだ？

モニター越しで彼女を解析して、そこにあらゆるリリなのシリーズの創作小説が入ってるデータバンクにアクセスする。

「神々のゲームと転生者。　主人公は赤羽（あかばね）　紅那岐（くなぎ）」

そして、その主人公のヒロインＡの月村すずか……。　何の用だ？

「あの～」

「ふむ、待たせてしまって悪いね。　まぁ、家に入れる前に聞きたいのだが、目的はなんだね？」

そろそろ待たせるのも可哀相なので、備え付けのマイクから彼女に話し掛ける。

まぁ、中に入れても問題はないのだけど、彼女はあらゆる世界の真祖の力を使えるらしいし、用心に越したことはないだろ？

「神崎ジェイルさんに弟子入りを……」

「夫の所へ行きたまえ……オススメは要の所だぞ」

「い、いえ、科学者方面です」

「要の所へ行きたまえ、同じすずか同士だ。教えてくれるかもしれん」

「ジェイルさんが良いんです！！」

何故、私にこだわる？

「まぁ構わないがね」

さて、何を教えようか……。

▲ジェイル　視点▲

▼貴史　視点▼

さて、修行を始めて随分と経つが……

「まだ目が覚めないのか？」

「みたいだな、やり過ぎた」

「根性ないなぁ～」

「いや、あれはどうなの？　私でも引いたわよ？」

引くだなんて、とんでもない。　俺は２０％の力で、カスミは魔法の射手のみ、薫なんか炎術だけの模擬戦をしただけじゃん。

まぁ俺の２０％は、アサシン（クロナ）の６５％相当の力はある

けど……。

「本当のクロナは、こんなんじゃ済まないぞ？　要がチートじゃ済まないなら、クロナは理不尽じゃ済まないだ」

「……説得力あるわねぇ」

「ハッ！？　此処はいったい」

「お、起きたな」

「それじゃあ、第六十五ラウンド」

「……も、もう少し休ませて欲しいなぁ～なんて」

「死ぬ気で頑張り～や」

「悪いけど、あんたを殺されるわけにはいかないの」

「ハ、ハハハハ……」

カスミは詠唱を始め、薫は『崩』と『虚』と言う字を宙に書き、トールは気の毒そうな顔をしつつも、雷を迸らせ、俺は２０％から４０％（アサシンからすると８９％相当）の力を引き出す。

「虚・魔法の射手（サギタ・マギカ）、全一の６９９４５矢！！」

「虚空（こくう）、千条焼滅（せんじょうしょうめつ）」

「総てを射抜く雷光（トールハンマー）」

「蛇咬（スネークバイト）ぉぉおおおおあああああー――――ッ！！！」

「う、うわぁぁあああ！！！！」

世界から音が消えて、光が世界を照らした。

▲　貴史　視点▲

▼　三人称　▼

ダイオラマの魔法球。　そこにある研究室に、二つの高笑いが響く。

「フフフフ……」

「アハハハ……」

「フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ……」

「アッハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ……」

ジェイルとすずかである。

すずかの弟子入りを断れなかったジェイルは、渋々とそれを了承して何かを造ろうとした。

そして、ダイオラマの魔法球を使って三十年。

寝ずに研究を重ねた彼女達は、ハイテンションである。　眠くな

いの？

「ついに完成した」

「ええ、やりましたね！」

「うむ、ペルソナ３のとあるキャラクターを参考した存在を私達は作り上げた！！」

彼女達の前に立つ、一人の青いナース服を着たエリザベスがそこに居た。

「これはもう力を司る者じゃありませんよ！　そう力を超越せし者と呼ぶしかありません！！」

「それ採用！！」

さて、此処ですずかがエリザベスの事をなんで知ってるかと言うと、一重にジェイルがペルソナ３を薦めたからである。

「では、力を超越せし者……クイーン・エリザベス。　それがキミの名前だ！！」

「個体名称登録ーーーークイーン・エリザベス。　了解でございます」

エリザベスは小さく頭を下げて、造物主に挨拶をする。

「うんうん、それとキミの武器だ。　ペルソナ全書を造った。　中身は当然空っぽ。　まずは、自分自身のペルソナを登録するといい。

覚醒するかどうかは、キミ次第だがね」

「かしこまりました」

「あ、ドクター。　余った子はこちらに……」

「好きにすると良い。　秋代では流石に扱いきれんからね」

「ありがとうございま～す」

こうしてすずかは、膨大な知識と技術力を上げて、元の世界へ戻ったのだった。

一体の力を超越せし者を連れて……。

▲　三人称　▲

▼　紅那岐　視点▼

「虚・魔法の射手（サギタ・マギカ）、全一（ぜんいち）の６９９４５矢（せんじょうしょうめつ）！！」

「虚空（こくう）、千条焼滅（せんじょうしょうめつ）」

「総てを射抜く雷光（トールハンマー）」

「蛇咬（スネークバイト）ぉぉおおおおあああああー－－－－－－ッ！！！」

俺に向かって来る、無数の攻撃。

これに耐えて俺は強くならないと、俺と戦いたがってる人に勝て

る処か死ぬらしい。
なんとしても、耐えて強くならねば！！
「うぉおおおおお！！　目覚めろ！　俺の中に眠る何か！！！」
――パキィィイインッ！！
瞬間――――視界が広がり、全てがスローモーションのようにゆっくり動くように見えた。
ハッハハッ！　これなら勝てる！！
『――きろ。　お――、――ろ！』
「総てを消滅せ（オーバーロード・）し極光の雷槍（トールハンマー）」
俺が放った雷の槍は、貴史さん、カスミさん、薫さん、トールを飲み込んだ。
そして……
『おき――が――！！』
って、さっきからうるさいなぁ。
もう少し、この余韻に浸らせてよ。
『起きろー！！』
へ？　起き、ろ？

「ハッ！？」

「おー、やっと起きたか」

「あれ、俺……」

「あんたは私達の攻撃に直撃して、何度か死んだわ」

「死んだ！？」

「間一髪でカスミが蘇生させたがな」

い、いったいどういう事だ？　俺は確か……あれ？　さっきまで鮮明に覚えてた事が思い出せないぞ？

「そういえば、さっき勝ったとか言ってたな……お前、まさか自分が勝った夢でも見てたんじゃ」

……夢かよ、チクショー！！！

こうして、俺のいつもとちょっと辛い修行は終わった。

もちろん、門は百一の門まで開けれた。

トールは、二百の門まで開けてたけど……。

▲　紅那岐　視点▲

１００万アクセス突破記念４（後書き）

レティウス様の所の月村すずかが得たモノ。

・神崎ジェイルばりの知識と技術力。
・ペルソナシリーズの力を司る者を超える、力を超越せし者を従者に!?（レティウス様の小説では、誰のモノとなるかお楽しみに♪）

得れなかったモノ。

・力を超越せし者を造る技術と知識。

理由は３０年間休まずに研究してた為、頭が働かない状態で造ったから……。

～アフターストーリー～　カスミの過去1（前書き）

補完話です。

～アフターストーリー～　カスミの過去1

▼　カスミ　視点▼

貴史、薫より先に誕生した私。
原作よりも６００年以上に誕生した。
これから長い時間、貴史無しで生きていくのかと考えたら、軽く死にそうになる。

しっかし、赤ん坊のまま延々と過ごす生活を書いても、読者は楽しめないだろう。
というか、読者に気を遣う必要ないよな？　貴史が見てるわけでもないし……。
まぁ、読者に私の黒歴史なんぞ見せてたまるか！！　私のプライドに傷がつく！！　貴史なら……まぁ、見てもいいがな！！

というわけで、キングクリムゾン。
今では元気に……とは言えんが、軽く鬱な状態で１４才まで成長した。
何故、鬱状態なのかわからない？　両親も心配して神官らしき奴に預けられ、祈りを捧げられたりしたが……効果無し。
悪魔が取り憑いたとか、いろいろ言ってるが……私はこの鬱状態に心当たりというか、原因がわかる。
その原因とは……

「たかし、たかし、たかし、たかし、たかし、たかし、たかし、たかし、たかし、タカシ、タカシ、タカシ、タカシ、タカシ、タカシ、タカシ、タカシ……会いたい」

なんて事ない、貴史に会いたいという欲求に駆られただけさ。

そんな私の呟きを聞いた私の両親は、とうとう悪魔に魅入られただの、なんだのと言ってぶっ倒れた。

そして、しばらくするとむくりと起きた私の両親は、私の陰気な雰囲気に当てられたのか「タガシ」とか「ダカシ」とか、訳のわからん事を呟き始めた。

いろいろと危険な家族だな。　なんだ、タガシって？　ダカシってなんだよ。

ちなみに町の奴らからは、タダシの呪いだ！！　とか言って騒いでる。

意味がわからん。　と、まぁこのまま行けば殺されそうなんで、私は騒がれたその日の夜……家を出た。

「そういえば、転生特典で真祖になりたい的な事を言ったが、いつになったら私は真祖になれるんだ？」

夜の山をそんな事を考えながら歩いてると、ポツンと建っている山小屋を見つけた。

「とりあえずは、あそこで寝るか。　そう言えば、筋肉バグが闇の魔法に随分と侵食されてるなーとか、あとは旧世界に居るエヴァンジェリンにどうにかしてもらえとか言ってたな。　……侵食されたら真祖の吸血鬼になったりしてな」

と馬鹿な考えを止めて、とりあえずは床につく事にした。　……おやすみなさい。

今日も最悪な一日が始まった。
貴史が居ないこの世界で、私にとって世界は灰色。
死んでる世界。　興味のかけらもない世界。　太陽なんて爆発……は、毎日してるか…。

「さて、まずは真祖化だよなー。　どうするよ、どうしよう」

完全にエヴァを吸血鬼にした奴が、私にも目を付けてやってくれると期待して、魔法の勉強なんてせずに、鬱気分全開で過ごしてたんだが……まさか、鬱全開生活がダメだったのか!?　これではダメだ!!　これじゃあ、私は貴史に会えずに寿命で死んでしまう!!　そして、薫と貴史が楽しく過ごしてるのを草場の陰から見てるしか!!

「ダメだ!　それだけはダメだ!!　耐えられん!!」

薫なんかに貴史はやらん!!　あいつはずっと貴史の友達止まりで良いんだ!!

「各なる上は……」

我が野望（貴史と再会してピンクな生活をする）の為に……魔

法の勉強でもしよう。
　幸い超能力者だったから、魔力という超常的な力があることを理解して、感じてる。

「始動キーはテキトーに……レク・リク・ラク・ライネックで良いか」

　こうして、私の魔法の修行が始まった。
　私の熱意とかそんな熱いモノを酷使して、一日で野菜坊主が使っていた、武装させた精霊に私を似せて突撃させる魔法や闇の吹雪とか雷の暴風だとか、原作二巻までに出て来たモノは覚えた。
　イメージと感覚と（調教した）精霊の働きでなんとかなるもんだな！

「アッハッハッハッハッハッ！！」

　さて楽しくなって来た所で、真祖化について研究しよう。
　まずは原作で、エヴァンジェリンがどうやって吸血鬼になったのかだが、気が付いたらなっていたと言ってたが、一コマに二つ以上の死体に囲まれて、ぺたんと座ってるエヴァンジェリン……場所は教会みたいなとこだったか？

「とりあえず死体……あれは両親か？　肉親の血肉で何かしらの儀式をするとか？」

　私は周りを見渡す。　当然ながら両親は居ない。
　だって一人で抜け出したし……。
　今頃、悪魔が取り憑いたと思われて討伐され、埋められてるかも……

「使えん肉だ。　親なら子供の傍に居ろ！！」

と、何やら理不尽な事を言ってる気がするが、気にせずに次の考察。

ずばり、闇の魔法による……ナニカに進化。

昨日の夜にも考えたが、闇の魔法は魔の眷属専用魔法。

それをただの人間が使うとどうなる？

「そこで出て来るのが野菜坊主だ。　筋肉バグの闇の魔法に侵食されてる発言。　そのまま行けば死ぬか、魔の眷属になるかのどちらかだろう」

何故、魔の眷属になるという二つ目の選択肢が出たのかと言うと、魔の眷属専用魔法なら、体と魂が闇の魔法に馴染もうとして、自(おの)ずと魔の眷属になるかもしれないからだ。

さて、此処まで考えて私がやるべきなのは、闇の魔法なんだが……ぶっちゃけ魔の眷属のナニカになるだけで、確実に真祖になれるという保証はない。

いや、まぁ魔の眷属になっても不老不死にはなるだろうが、闇の住人の代名詞として名が高い吸血鬼。

それも、上位である真祖に憧れるのは当然だ。

なんせ貴史の特典って、強い弱いの次元に居ないからな。

「……というか、貴史の単語で一気に鬱に……」

アァ……タカシニアイタイヨ。

▲　カスミ　視点▲

～アフターストーリー～　カスミの過去2（前書き）

カスミ編終了。

～アフターストーリー～　カスミの過去2

▼　カスミ　視点▼

あの時に鬱になって十日。
何と言うことか、無駄な時間を過ごしてしまった。
お腹も空いてたので、川魚を焼いて食べつつも真祖化の研究に勤しんでる。
風呂はどうしてるのかって？　気にするな、消すぞ。
と言って、勝手に不衛生だとかバッチイとか思われたくないので、冷たい川で身体を洗っている。

そうそう、この十日間。
私の捜索隊が編成されたみたいだ。
悪魔に取り憑かれた娘として……。
今のところ見つかって居ない。
何故かって？　それは山小屋に入った瞬間、私が催眠術と魔力を使った洗脳でいろいろしたから……。
そのおかげか、我流洗脳魔法、我流記憶操作魔法を修得した。
鬱状態でよく動けたモノだと、我ながら感心する。

まぁ、そんな事は割とどうでもいい。
今、重要なのは真祖化だ。

「とりあえず闇の魔法を修得しようか、魔族から真祖になるのも簡単だろ。　とりあえずは不老不死だ！！」

と、思ってた時期が私にもあった。
周りは木がいっぱい。
私の足元には真っ赤な液体と、胴体を無くした熊。
そして、現在再生中の腕。

「……おいおい」

いつの間に私は、真祖となっていたんだ？　……そう、
真祖化の研究をせずとも、私はいつの間にか真祖となっていた。
では、何故真祖になっていたという自覚があるのか、回想どうぞ！

▼　回想　▼

魔法の研究をやっていて、ちょうど昼になったのに気付いた私は、
腹ごなしに川へ行った。
するとそこには、魚を捕ってる熊。

「うわぁ……目を付けられたら死ぬ」

しかし、ここは山。
コソコソとすれば、当然鳴り響く枝が折れる音。
はい、私の右足がやってくれました。

「がう？」

「……がうがう」

熊の発した声を真似て、言い訳っぽい事を言ったら、熊は考えるような雰囲気を醸し出し、イケるか？と考えてたら熊が私に向かって走り出す。

当然、私は逃げるわけだが……また都合悪く、木の根に足を引っ掛けて転んだ。

そして転んだ私に向かって熊は……

――バクッ！！

私を頭からパックンチョ☆

▲　回想　▲

そこからよく覚えていない。

もしかしたら真祖になっていた。　ではなく、食べられた事により人としての生を終えて、真祖として再誕したのでは？と言う可能性に至る。

次にあいつにあったら、どうしてくれよう。

消し炭にしようかな。

というわけで、私はそろそろエヴァンジェリンを救助しに旅へ出るのであった。
あ、熊は埋葬しました。
熊が捕った魚は、私が美味しく頂いたりもした。
「ポンポン都合ヨク事態ガ動クカラ良イナー！」

というわけで、金髪の魔女を探している私だが……私もたまにエヴァンジェリンと間違えられる。
まぁ金髪で魔法使いだから、あながち間違いではないけど……
「私の名前は、カスミ・ヴェネーラだ。　貴様らが探してるエヴァンゲリオンではない！！」
「何をわけのわからんことを！」
「やっちまぇぇえええ！！」
「「…「「「ォォォオオオオオオオオオ！！」」」…」」
というか、今現在……疑われ中。
「頼むから……私を怒らせるな……な？」
一一直死の魔眼、発動！！

魔眼を発動させて、数秒ぐらいで人は崩壊する。
実は私の魔眼、ただ見るだけでも殺す事が出来ます。
というか、わざわざ線に沿って切るとか……手間だよ、手間。

「さて、エヴァンジェリンを探そう」

あれから数ヶ月。
よく休んだりして、ようやく追われてるエヴァンジェリンを発見。
ついでに私が味方と印象付ける為に、追っ手を殺したけど無問題（モーマンタイ）。
詳しくは、私と吸血鬼と…俺と未来のマギステル・マギと…俺と二人の妹と…（２３／４／２８修正）を見てくれ。

「さてさて、エヴァは寝たし……続きは明日にしよう」

コケコッコー！　……すまん、遊びたかっただけだ。
というわけで、朝です。
ろくに食事も取れてなさそうなエヴァの為、私は一人で川に向かって魚取り。
大漁の魚を抱えて戻った頃には、エヴァはすでに起きており、半ベソをかいてた。
なんでも助けられたのは、夢だと勘違いしたみたいだ。
そして私を認識したあと、飛びつかれたが……避けておいた。

「ふぇ…」

「エヴァ……孤独だった気持ちはわかる。　体験済みだしな。　しかしだ……私はそれだけで助けてない」

「え……」

床に顔面ダイブかまして、涙目のエヴァに追い討ちをかけるみたいで、心苦しいが……私は貴史第一に生きてるんだ！！　好きなキャラの前でも、これだけは譲れん。

「正直に言う……私はお前に同情して助けた」

正直に言った結果、真祖の身体能力を使って殴られた。
エヴァの気の済むまで、殴られてやった。
まぁそんな事もあって、今では腹を割って話し合える仲になった。
もちろん転生者だと言ったし、未来の事も若干教えて、貴史とプラスαの事も話しておいた。
しかし何をまずったか知らんが、私の転生前（主に貴史）の話を終えたら……

「私の魅力でカスミを私のモノにする！！」

「はいはい、頑張れ……どう転んでも無理だがな」

と、何やら貴史に対抗心を燃やした。
当然、私は相手にしなかったがな。
貴史の敵（というか、ライバル？）になるなら、とことんドライになれる！！　薫ならこうは行くまい。

さて、エヴァを交えて魔法の研究でもするかーと、気合いを入れてみればエヴァは魔法を使えないと来た。
だから仕方なく、その辺に引きこもってる魔法使い達から、書物とか技術とか掻っ攫った。

「カスミは教えてくれないのか？」

「私のは所詮、イメージで固めたなんちゃって魔法。　基礎がなってないからな。　この際だ、基礎を習うとしよう」

そして始まった魔法の勉強会。
場所は、最初に殺した魔法使いが隠し持ってたダイオラマの魔法球。
基礎を習い終わったら、大魔法球を造ろうかな。

「カスミ、基礎だけじゃ造れないと思うんだけど……」

「全ては基礎さえやれば、どうにでもなる」

「ならないよ！？」

「まぁ、見ていろ。　きっと度肝を抜く」

こうしてエヴァの冷たい視線を受けたまま、魔法の基礎を学んでいく。

そしてダイオラマ内で一時間、掻っ攫った書物とかレポートを読んで、基礎とある程度の応用を頭に詰め込んで、ダイオラマの大魔法球を造り始めた。

ダイオラマ内で十日。

「嘘……」

「さて、この中で修行しようか。　頑張って一日を三百年にしたんだから」

エヴァの本当に造っちゃった。　というか、本当に一日を三百年に設定出来たの!?という言葉を無視した。　理論は完璧だ!!

結果から言えば大成功。

貴史に褒めてもらいたいくらいだ。

あ……

「たかし、たかし、たかし、たかし、たかし、たかし、たかし、たかし、たかし、タカシ、タカシ、タカシ、タカシ、タカシ、タカシ、タカシ、タカシ、タカシ……会いたい」

「カ、カスミがまた鬱に入ったー！！　くっ……貴史め！！　カスミをこんなにして……というか三百年間、暇を見てはカスミを誘惑したのに一向に靡(なび)かないなんて！！　逆に私が優しくリードされちゃって……うわぁ～～～～ん、カスミ戻ってよ～～～～～～！！」

アイタイヨゥ……タカシ。

ああ、またあの禁断症状が出て来たな。
これはイケない兆候かも知れん……。
それはさておき、修行の成果だが……まずあの糞神、絶対殺す。
大魔法球で、年が明ける度になんか幸運値が下がってる。
あれで何度も研究中の魔法が、暴発して消し飛んだか。
まぁ魔法が完成すれば、暴発なんてしないがな……。

とりあえず、成果報告をしよう。
記憶の書なるモノを編み出した。
これには、魔法や魔法具などなど……私の研究の成果がカードと化して、登録されている。
そして、記憶の書のコピー……神明魔祓の書を造った。
これは戦闘中に破壊されても、原典である記憶の書が有る限り、

復活する魔法具だ。
登録されてるカード化した魔法は、少ない魔力でも発動出来て、人形や宝具にマジックアイテムを召喚したりする事が出来る。

そして次に、自立式人形を造った。
これは魔力を生成する魔力石を動力に動く人形で、そいつらを手作り魔法球内で遊ばせてたら、いつの間にか文明とか築きあげやがった。

さらに次、上の現象を利用して宝具の製作に精を出したら、本当に宝具が出来た。
これらは武器庫の中に仕舞う。
私は魔法を極めたいから……。

そして次、今度はエヴァと一緒に闇の魔法製作。
そこから発展させて、漆黒を生み出した。
その副産物として、世に漆黒の精霊なるモノが広まった。
しかし漆黒の精霊達はプライドが高く、ごく少数の人間の言うことしか聞かず……漆黒の精霊王も私との契約以外する気がないらしい。

まぁ何が言いたいのかと言うと、この三百年で凄く成長しました。

それからと言うもの、私が知ってる限りの魔法や技を再現させた。
しかしいくら魔法を開発しようにも魔力が無ければ、魔法を使えない。
膨大な魔力があっても、魔力切れは起きる。
そのために私はアルクエイドの、星からのバックアップに目を付けた。
星、魔術師なら足りないところは、別の場所から調達するべし…

……よし、星からの魔力供給を受けよう！！　それで開発したのが、星の契約魔法。

魔力問題も解決出来た事なんで、片手間にエヴァを悦ばせて、どんどん魔法を造り続けた結果……

「カスミ……」

「何？　エヴァ」

「やり過ぎ……」

私達の首を取りに来た連中に、出来上がった魔法を自慢するように放っていったら、いつの間にか私の首に、五百億ドラクマなる賞金が懸けられた。

「しかし、エヴァ…」

「何？」

「五百億もの大金を誰が払うんだ？」

「……いや、それ私達が気にする事じゃないし……」

まぁ首を取られる気、さらさらないけど……。

「早く貴史に会いたいなぁ」

「くっ……またその話！　いい加減、私に振り向け！！」

「ん？　エヴァの事なら……もう私の身内だぞ？　愛してるよ、この世で二番目に……」

「ッ！！　フ、フンッ……当分はそれで我慢してやる。　だから、今日も……私を可愛がってくれ……」

もじもじと赤面して言うエヴァ。

今夜はどう遊ぼうかなー。

と、まぁこんな生活が紅き翼が現れるまで続いたってところで、私の過去話は終了だ。

誰もイチャラブの話なんて、見たくないだろ？　しかも片方（つまり、私）はドライ。

▲　カスミ　視点▲

～アフターストーリー～　カスミの過去2（後書き）

次は薫編です。

～アフターストーリー～　薫の過去（前書き）

薫編終わりｗｗ

～アフターストーリー～　薫の過去

▼　薫　視点▼

カスミや貴史から出遅れて、転生する形になった近衛薫、四才です。

妹達が可愛い過ぎて困る。　ん？　貴史はどうしたかって？　貴史とは違った愛……そう親愛が木乃香達にはあんねん！！　カスミかて、エヴァを前にデレッデレなはずや。

「お姉さま、ここはどうなるん？」

「かおるお姉さま、素振り千回終わりました」

「ここはな……」

今は魔法バレした木乃香に呪術の勉強を、せっちゃんには剣の修行を同時進行しとる。

何故また途中からとか、四才以降の話がないとか思う気持ちはわかる。

でもな、ちゃうねん。　これには海より深く、山より高いわけがあるんよ。

……ウチ、四才以降の記憶がないねん。

まぁ、ウチの事はどうでもええな。
とりあえずはウチが修行しとる間、木乃香の愛くるしい姿を見とってや～。

「遅い、何度言ったらわかる！！　こうだ、馬鹿弟子がぁぁあああ！！」

「ちょ、時貞（ときさだ）さん！？　四才児に求めるレベルやないって！？」

「問答無用に決まってんだろ、タコ」

「椿さ、うひゃぁぁあああああああ……」

「あ、ちょうちょ～～～」

「くすっ、ほらほらもっとしなやかに避けないと当たるわよ？」

「奇羅々（きらら）さん、ストップ、ドクターストップや！！」

「このちゃん、待ってください……」

「ドクターストップ？　そいつはテメーの命が尽きたら考えてやらぁあ」

「はい、右狂さんダメ！　もう常識とか身につけな！！」

「見るのではない。　体で感じるのだ」

「緋影（ひえい）さんがかっこよすぎて、修行に身が入らへん！！　感じようとした瞬間、バッサリ行くわ！！」

「せっちゃんはやく～」

「ならば、死ね」

「あんたが酷い！！　夏彦師匠！！」

「兄さん達は厳しすぎだよ……」

「そう言って、ブラックホール発生させる雪彦さんは鬼畜や！！」

「待ってくださ～い」

いかがでしたでしょうか、可愛い木乃香とせっちゃんを御堪能いただけたやろうか？　まぁ時折、ウチの悲鳴が混じっとったみたいやけど、概ね問題無いやろ？

さてさて、皆さんお気づきでしょう。

京都神鳴流の門下に、ＧＢ（ゲットバッカーズ）で有名な七人の弥勒が居ます。

そして、ウチはその人の弟子になってます。

修行がめっちゃきついです。　何度か死を体験しましたもん。
……生きとるんやけど……。

まぁこれもさておいて、木乃香の川ぽちゃんイベントですが、ありませんでした！！　というか代わりのイベントが、私と吸血鬼と…俺と未来のマギステル・マギと…俺と二人の妹と…（２３／４／２８修正）にあった鬼の誘拐事件。
イベント攻略難易度高すぎやろ、コレ。

さぁ、ウチも木乃香もせっちゃんも六才。
辛い現実も受け止める小学一年生や。
今日、ウチは……自分が転生者であることを明かします！！

ちゅうわけで、説明終了。

「「……」」

口をポカンと開けて、固まってる妹達の出来上がり。
おかしい。　何があかんかったのか、わからへん。

今、お前の頭がおかしいとツッコミを入れた失礼な人は、グランド十周！！　……と、こんな事しとる場合やないな。

「ほら…木乃香、せっちゃん。　麻帆良に引っ越す準備するえ」

「「ハッ！　そうやった！！」」

ウチの言葉にハッとして、いそいそと引っ越しの準備をする二人。

う～ん、二人に話すのは早かったかなぁ？

はい、木乃香達に秘密を打ち明けて一週間。

地元の小学校に、別れを済ませて麻帆良へＧＯ！　楽しみやな～、

カスミおるかな？　お父様の話やと、原作崩壊させてるみたいやし、

来て……ないわけないわな。

あの貴史第一主義にして、貴史至上主義の人間が……。

と、ぼーっとしてたらもう麻帆良に着いちゃった。

麻帆良を包む結界に、何か懐かしさを覚える。

エヴァの魔力で働いてるんだよね？　コレ……。

じゃあ、なんで？と疑問だったけど、学園長室に入ったら原因がわかった。

なんの封印もされとらんエヴァに、六百年以上生きたわりには、

一般人と変わらん魔力を持つフェイト姿の女の子。

「フォッフォッフォツ、待っといたぞい。　薫、木乃香や」

「久しぶりやな～。　お爺ちゃん」

このジジイ……カスミに首輪着けたな。

『薫、今は静かにしておけ』

ウチが殺気を出してジジイを殺そうと動くも、ウチの殺気にいち早く気付いたカスミが念話で止めに来た。

『静かにって、カスミはええの？　貴史やないジジイに飼われとるんよ！？』

『ほざけ、誰が飼われてるだ。　私に魔力の大小は関係ないのさ。その気になれば学園を更地に出来る』

『……』

『そう睨むな……お前が来たって事は、もうすぐ貴史に会えるんだ』

ニゴォリと、カスミの瞳が濁る。

ウチはそんなカスミを直視出来ず、目を逸らして……

至上主義が悪化しとる……。　などと考えた。

『アァ……タカシニアイタイ』

頼むから念話で、病まないでほしい。

恐いで……。

ジジイへ挨拶を終えて、ウチは木乃香達とわかれてカスミの別荘に来た。
ちなみにエヴァもおるで…。

「で、薫……木乃香達は知ってるのか？」

「一応教えたけど、なんやショックが大きすぎたらしく、無かった事にされたな」

「ふぅん」

しっかし、あれやね。　茶々丸がおらんエヴァって違和感ありまくりや。
代わりにチャチャゼロがおるけど……。

「ん？　……そういえば貴様はカスミと同じ転生者なんだよな？」

お？　なんや、カスミ。　貴史だけしか言うとらんと思っとったのに、ウチの事もちゃんと言っとったんやね。

「口では酷い事言うて、本当はウチの事も気にかけてたやなんて…
…このこの、憎い演出やんか～」

黙って紅茶を飲んでるカスミに、肘をぐいぐい当てる。

そしてエヴァの口から放たれるは、カスミの純粋な評価！！

「カスミの奴隷らしいな」

……純粋、な、ひょう、か？

――ギ、ギギギギ……

「ん？」

――ニヤニヤ

……ふっ。

「何、嘘言うてんの！！　ウチら友達やろ！！」

「私にとっては邪魔だ！！」

「うわっ！　ハッキリ言いよった！！」

そして口喧嘩は徐々に熾烈を増して、とうとう……

――ガキィィイインッ！！

「ぐぬぬぬぬぬぬ……」

「ぎぎぎぎぎぎ……」

ウチは更木の斬魄刀を、カスミはオリジナルの魔剣を手にぶつかり合った。

▲　薫　視点▲

▼　三人称　▼

カスミのダイオラマの魔法球。
今、ここで二人のチートが割と本気でぶつかっていた。

「前々から気に入らなかった。　後からひょっと現れて、貴史の横に居るお前が！！」

「ウチを引き込んだのは、他でもないカスミや！！」

――ズガァァアアアンッ！！

剣と刀のぶつかり合い。
それで何故爆発が発生するか不思議だが、カスミと薫は互いを高め合っていった。

「あれは貴史が言うからしょうがなく！」

「ならライバルとか言いようはあるやん！！　それを言うに事欠いて、カスミの奴隷って！！　奴隷はないやろ！！」

――ズドォォオオオンッ！！

一筋の破壊光線と一つの漆黒の矢がぶつかり、砂浜と海が吹き飛ぶ。

「男と恋のライバルなんて、私が許すか！！」

「ええやん！　ウチらの世界じゃ、認められてたんやから！！」

――ズドドドドドドドドッ！！

互いに手に持つ武器に霊力や魔力を篭めて、無数の火球と無数の魔法の矢を放ち、突き進む。

「此処では認められてない！！」

「だから女として生まれ変わった！！」

主張を繰り返す内に、薫の口調は京言葉から転生前の口調となり叫ぶ。

おかしくない、今は女なのだから。

男性同士の恋愛も、確かに認められてた。

だが薫は、それでも貴史に拒絶される事を恐れて、そのままで居た。

霞を応援していた。

「でも……自分に嘘をつきとうない！！　もう、諦めたくない！！　せやから、これからは正々堂々と張りおうたる！！」

「やってみせろ！！　薫ぅぅうううううう！！」

「カァァアアスミィィイイイイイイ！！」

――カッ！

薫の斬魄刀とカスミの魔剣は、ぶつかり合い……何度目かの爆発を起こした。

その爆発は、今までの爆発とは比べものにならない程のモノで、この喧嘩を見ていたエヴァと海のエリアを消し飛ばすモノだった。

「おいおい、オレもほとんど全壊だぜ？　ケケケ……ケ…」

「チャチャゼロォォオオオオ！！」

顔半分のチャチャゼロに、真っ裸なエヴァの叫び声が、海だったエリアで木霊（こだま）した。

その頃、爆心地では……

「負けるか……」

「ウチかて……負けへん」

互いを恋のライバルとして、絶対に負けないと魂に刻んでいた。

なんだかんだで、仲良しな二人である。

▲　三人称　▲

次元最強の龍ＶＳ理不尽な転生者（前書き）

八神カイト様の作品のコラボ。

次元最強の龍ＶＳ理不尽な転生者

▼　三人称　▼

とある空間、地も天もない空間に二つの影があった。
一人はポケットに手を突っ込んで、油断無く立っている男性。
名は南武　貴史。
もう一人はただ腕を組んで、目を閉じ合図を待つ女性。　名は黄宇。

この二人が、何故このような不可思議空間に居るかと言うと……
互いの武、互いの力をぶつけるため。
または更なる高みへと目指すため、弱者の挑戦を受けるため……
この二人は対峙してる。

「此処は我が主が創りし空間。　私がいくら動いても壊れはしない」

「なら、本気で全力勝負が出来るんだな」

「そうなる」

交わす会話も少なく、一人が戦闘態勢に入れば戦闘は始まると、
貴史も黄宇も理解した。
そして……

ー ードッ

「「ッ！！」」

戦闘は始まった。

――ズガガガガガガ、ドドドドドッッ！！

高速で動く二人、互いがぶつかり合う瞬間に、一度に数千から数万の攻撃オプションを組み込む貴史と黄宇。

しかし、この衝突には決定的な差があった。

それは黄宇の方が、貴史より強いという差。

そう、黄宇はわざわざ貴史に合わせて攻撃してるだけなのだ。

「チッ」

「その程度で私に挑んで来たのか？　紅蓮を倒したという力を見せてみろ」

刀と拳、蹴りがぶつかり合う中、黄宇は貴史に隠し持ってる力を使えと言う。

明らかに上に立つ者の言葉。

それを自身の強さに誇りを持つ貴史は当然……

「だったら受けてみろやぁぁあああ！！」

――蛇殺（スネークジェノサイド）！！

「弱い」

無詠唱で放つ蛇殺を黄宇は刀の鞘で防ぎ、技硬直で固まってる貴史を居合い斬りで切り裂く。

「ガッ！？」

その居合いは貴史が気付く頃には、すでに貴史を切り裂いており、文字通り手も足も出せずに貴史を無力化した。

この戦いを外から見ていたカイトと紅蓮を除いた四神達は、黄宇の勝ちだと判断してカイトは終わりを告げようとするが……

「「まだだ」」

それを止めたのは、紅蓮と父の戦いを見に来た乱だった。

「まだ親父は負けてないよ」

「あいつがこの程度でくたばれば、俺様が負けるわけねぇ……」

カイトらにそう言って二人は、また貴史と黄宇の居る世界に目を向けた。

それを見たカイト達も、また世界に目を向けたのであった。

場所は戻り、世界は蛇の体が浮かび上がっていた。

「これは……」

――今こそ…

「何!?」

――――汝が右手に、その呪わしき命運尽き果てるまで……

――――――高き銀河より下りたもう蛇遣い座（アクスレピオス）を宿すものなり…

……

――――――――されば…我は求め、訴えたり、喰らえ……

……

――――――その毒蛇の牙を以て!!

倒したと思った黄宇は、驚愕する。

それは、先程まで見えていた貴史の底が闇に隠れたからだ。

そして感じる。

「ッ！（強くなった!!）」

「まだだ。　もうちょい付き合えや」

「……（立ってるだと？　起き上がる所なんて見てないぞ）」

強くなったと感じて、より一層警戒した黄宇は二度目の驚愕する。

それは倒れていた貴史が、自分が認知されずに起き上がった事に対して……。

「……なるほど、どうやら強くなるというのは、一段二段と言った具合じゃないらしいな。　お前の成長速度は、十段も二十段も……刻一刻（こくいっこく）と成長している。　それこそ無限に、本来なら届くはずのない相手に対して、届くように」

「ガタガタとうるせぇ。　お喋りが好きなら次回のコラボでやりな。今は俺様との戦いだ」

――ズガァァアアアアアアアアンッッ!!!

「ガッ!?」

一瞬。　今度は立場が入れ替わるように、貴史が黄宇に一撃を入れ吹き飛ばした。

そして貴史は封印を、己の宿命を解き放った。

――汝が神に、我が身を捧げん!!

それは悪魔の腕と呼ぶに相応しく、禍々（まがまが）しいオーラを放っていた。

「さぁ、進化の時だ」

さらに貴史は、その腕に禁術をかけた。
禁術をかけられた悪魔の腕は、赤く紅く朱く鮮血の色に染まり、いつしか見た娘の悪魔の腕のようになった。

「赤い悪魔の腕（ブラッディ・デモンズアーム）」

「～～～～ッ！！！」

ゾクリッと、黄宇に駆け抜ける悪寒と予感。
負ける、敗北、死、と思考が加速する。
そしていつしか、黄宇は人の形から龍の姿へとなっていた。

黄宇は自身の尾を振り、貴史を沈めようとするも、貴史の出す速度はさらに速くなり、掠める程度から完全に回避しながら近付くレベルに達した。

「（いくらなんでも速い！！　異常だ！！）」

「変身したくらいで甘いんだよ！！　俺様はあと二段階くらい強さが上がるぜ」

「嘗めるなッ！！」

懐にまでやって来た貴史に、黄宇は自身の爪で貴史を引き裂こうとするが、黄宇の爪は貴史の悪魔の腕の爪によって防がれ……

――ビキッ！

黄宇の爪にヒビを入れるも、一瞬にして威力が上回る。

――バキィィイインッッ！！

硬い音が、世界に響き渡る。
負けたのはもちろん、黄宇の爪。
貴史の爪は、いや悪魔の腕はさらに禍々しさを増して、力強く呼

応していた。

「嘗める？　冗談だろ？　おら、もっと力を出しやがれ！！　上回ってやるよ」

「ならば、死ね。　星々を破滅せしモノ（アトミックスター）！！」

黄宇は空間を歪ませ、そこから無数の星々を隕石のように貴史にぶつけ、それによって発生する全エネルギーを貴史に集中させた。
もちろん、今の貴史なら星がぶつかってくる前に破壊が出来ただろうが、貴史の受けてみたいと言う気まぐれによって、貴史はその身に全エネルギーを受ける。

——ズガァァァァァァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアー——————————————ンンンッッッ！！

聞いただけで鼓膜が破れる所か、脳が破裂しそうな爆音が轟き、ゆらゆらと煙が立ち込める。

「バカな！！」

そう、煙り。
黄宇が放った技は、対象を完全に消滅させせる程の威力を持つ。
消滅するなら煙は立たない。　しかし煙りが立つと言う事は、対象がそこに残ってるからだ。
そして相手は明確な死のイメージが無ければ、決して死ぬ事はない超越者。

「消滅じゃあ、俺に死をイメージさせる事は無理だぜ。　そもそもあれだけじゃ、既に消滅すらしない」

無傷。　死なないにしても、負傷してるとは思っていた黄宇だが、相手は傷どころか服すら燃えていなかったのだ。
根性ある服だ。

「真の姿とやらを出せよ。　俺様はさらにその上を行く」

「……ならば、望み通りに見せてやる」

そう言って黄宇は、最後の変身を遂げる。

黄龍・五行形態。
その大きさは貴史が、目に見えない塵や微生物以下で、貴史が見えるのは黄龍の鱗一枚の一部だけという巨大さ。

「でけぇ……つか、こんだけデカイと単なる的じゃねぇか」

「フッ……やってみろ」

「なら、遠慮なく……！？」

やる気が一気に低下した貴史だが、悪魔の腕が黄龍を捉える前に、黄龍は貴史の後ろへと回り込む。

「大きいからと言って、遅くなったわけではない」

そう言って黄龍は、撫でるように爪を動かして貴史を切り裂く……が、貴史も貴史でただそこに居るわけではない。
黄龍の爪に触れた瞬間、まるで映像のコマが飛んでるような動きを見せて、黄龍の後ろに回っては、攻撃する。

そしてその攻撃を黄龍は、貴史の認知外の速度で回避しては攻撃と……巡るましいまでの攻防を繰り広げていた。

だが、それも貴史が成長しきるまでの間。

貴史の実力はすでに乱を超え、本気の黄龍の実力に差し掛かっていた。　いや――――

「ォォオオアアアアアッ！！」

「（赤い翼……闇が深まっただと！？）」

――――赤い悪魔の腕は人間の腕へと戻り、貴史の背中には真っ赤に染まる天使の翼……貴史は、すでに黄龍を超えていた。

――赤い蛇咬（ブラッディ・スネークバイト）！！

「グッ……ガハァアッァアアア！！」

貴史の手が黄龍の体をえぐる。

「喰らい尽くせ……」

貴史と黄龍を取り巻く赤い蛇の体が、黄龍の体に触れては、食べたかのようにえぐる。

速（はや）く、迅（はや）く、高速（はや）く、光速（はや）く、神速（はや）く、ハヤく……貴史の力は、スピードは、成長速度を加速するのをやめない。

数分のラッシュが続き、ついに黄龍は倒れた。

「……」

「フッ……グッ……ガッ……」

静かに黄龍を見つめる貴史と、消えかける意識を必死に繋ぎ止め、まだ立ち上がろうとする黄龍。

「起きるんじゃねぇよ。　次の衝突は、間違いなくお前が死ぬぜ？」

「負けるわけには……いかんのだ。　貴様に意地、と誇りがある、ように……我らにも、意地と、誇りがあるのだ！！」

「だな、でも今は寝とけ。　次はお前が俺に挑戦する。　そん時は最初っからやり合おうぜ」

そして貴史は静かに詠唱する。

一一我こそは、蛇遣い座の使者（アクスレピオス）なり……

弱者の挑戦を受けてくれた事に感謝して……。

一一一一その呪わしき命運受け入れし者にのみ、賜うべきは毒蛇の牙に秘められし、高き天と深き地獄の力なり……

自身を此処まで押し上げてくれた事に感謝して……。

――――――されば宿敵（ライバル）に終焉の槌を打ち下ろせ……

愚者共を宿敵（ライバル）と読み替えて……

――――――――荒ぶる神魔の感謝を以て！！

「またな」

――――赤い蛇終（ブラッディ・スネークエンド）……

貴史は静かに振り下ろした。

貴史の最後の一撃を見ていた四神らは、黄宇の意地に貴史の成長に魂を震わせた。

誰にも超えさせぬと……。

「勝者……」

疲れて目を閉じる黄宇を見て……。

「南武　貴史！！！」

カイトの声が四神達に、貴史の娘に、眠る黄宇に、そして蛇終を放ったまま立ってる貴史の耳に届いた。

▲三人称▲

薫の下へやって来たチートな弟子（前書き）

時空の旅人様とのコラボ。

次と次もコラボなので、本編はちょっと待っててね♪

薫の下へやって来たチートな弟子

▼　薫　視点▼

カスミが用意してくれた世界で、私は暇してる。
まぁ最近忙しかったから、良いんだけど……。
貴史もカスミもせっちゃんも、木乃香すら居ないってどういう事？　最近入ってきたエリザベスは、コミュがどうとか言って話にならない。
そんな暇してる時……

「ごめんくださ～い。　近衛　薫さん宅でしょうか～」

来客が来たから居留守を使う。

「……あの～」

懲りずにドアをノックする来客のしつこさには、思わず迦愚土（かぐつち）の炎で焼滅させようかなと考えが過（よ）ぎる。
迦愚土……出番の無さに読者の方も忘れてると思うから説明すると、ようは私の斬魄刀。
火力が流刃若火（りゅうじんじゃっか）より強いから、使い処がないというか、なんというか。
お？　となると炎熱系最強は私の迦愚土のモノ？　最ッ高じゃん！！

「居ないんですか～？」

って、まだやってたの？　しつこいなぁ……。

「おらんよー」

「そうですか……。　って、居るじゃん！」

お～、ノリツッコミとはまた高等な技術を……。

いや、それほど高等な技術でもないかな？　まぁ、とにかくバレたからには対応しないと。　可哀相だし……。

「んで、あんた誰？」

「俺の名は神威と言います。　此処に近衛　薫って転生者が居ると聞いて……」

「居たら何かな？」

「俺もＢＬＥＡＣＨの技を使えるので、薫さんに指導をと……で、薫さんは居ますか？」

……さっきから、その薫さんと話してますが？　会いに来たんなら特徴とか知っておかないと……。

「私がその薫」

「えぇえええ！？」

「何さ」

「だって……薫さんって京都弁を使う人」

それだけしか判断基準ないの？　こっちには木乃香が居るのに……。

それに京都の人に京都弁は……せめて京言葉でしょ。　まぁ知らないならしょうがないけど……。

「京言葉を使ってもいいけど、少しイメチェン？　昔の口調に戻してもいいかなってね」

一人称は私だけど……。　これはウチのままの方がいいだろうか？

「そうなんですか」

まぁ評判が悪かったらやめるけど……。

……木乃香が泣きそうだなぁ。

「で、指導と言っても例えば？」

「鬼道や破面（アランカル）の技、滅却師（クインシー）の技などの」

「……」

「……あ、あれ？　薫さん？」

「悪いけど……私、虚閃（セロ）と斬魄刀しか使わないよ」

「……え？」

「たまに虚化するくらい」

「な、なんで！？」

いや、なんで？　と聞かれても、私の敵居ないから……。
ほとんど貴史とカスミが倒してくれるから、私の出番まで回って来ないんだよね～。
戦うとしたら、師匠の模擬戦にコラボで私に挑んで来る人（と言っても、コラボでも私を指名する人は居ない）。

……私は要らない子とか、考えないようにしよう。

「で、どうする？」

「あー、でも使えますよね？　鬼道とか！！」

「まぁ実戦レベルぐらいには……」

でないと、師匠が怒るし……。

「お願いします！」

いや、お願いしますって……ぶっちゃけ鬼道の無詠唱を、詠唱ありレベルの威力にする方法って簡単なんだけど……。

私がその事を話すと……

「え？」

なんて言って来たから、驚いた。
普通は気付くはずなんだけどなぁ。

「滅却師の特性を使えば」

「滅却師の特性？」

滅却師……クインシーの戦闘法のほとんどは、周囲の霊力または相手の霊力を自分の武器に利用する戦闘。
つまりは鬼道を使う時、周囲の霊力を取り込めば無詠唱でも高威力を出せる。

「というわけ」

「なるほど……」

「はい、ＢＬＥＡＣＨ講座終了。　バイバイ」

「ちょっ、待って！　早すぎません！？」

いやいやいや、滅却師の特性はあらゆる分野において応用が利くよ？　某魔砲少女の最大魔砲……スターライトブレイカーも、周囲の魔力を集束させてさらに収束させる魔法なんだし……。
つまりは、集束方法さえ身につけてしまえば、簡単に強くなれる。
それでも一ランク、ニランク程度だけど……。

「他にないですか？」

「なら斬魄刀でも？」

「お願いします」

「と言っても神威くんって、無条件で卍解（ばんかい）してない？　良いなぁ。私なんか、わざわざ屈服させたよ？」

「そうなんですか？」

「特に鏡花水月なんか、あれはきつかった。　まぁ雷帝になって消滅寸前に追いやってあげたけど……」

「……えげつない」

ほっといてよ。　今じゃ快く力を貸してくれるんだし……。

「それと神威くん……自分の斬魄刀使ってる？」

「は？」

「私の斬魄刀って、死神達が持ってる斬魄刀と同じで、全部オリジナルなんだけど……流刃若火が私の斬魄刀の存在を教えてくれた」

「……え？　だって、俺……自分が知ってる魔法や魔術を扱えて、自分が知ってる武器とかを換装出来るようにしか……」

となると、斬魄刀は無いのかな？　私が言ったのって、ＢＬＥＡＣＨの技全てだし。

つまりは、死神が自分の斬魄刀に向き合える技術もあるって意味だし……。

まぁこの技術、他の斬魄刀に向き合うと思ってたモノだけど……。

「って、私が教える事ないじゃん！！」

「あー言われてみれば……」

「はぁ……さいなら」

――ぐいっ

私が背を向けて奥に引っ込もうとした時、神威くんが私の肩を掴んで引き止めた。

「何？　離してよ」

「も、もう少し頑張りましょう！」

「……」

虚化（ホロウ）の完全制御。

使いたい斬魄刀は、卍解からでも換装ＯＫ。

鬼道だって出来るし、滅却師の技も破面の技も使える。

他に何かあったかなぁ。

「……織姫とチャドの技出来る？」

「はい。　出来ます」

……何を頑張れと？　正直、教える事が無さすぎる。

「なら、戦闘でもしようか。　ＢＬＥＡＣＨ限定で」

「ありがとうございます！！」

これで少しは暇を潰せるかなぁ。

▲　薫　視点▲

▼　三人称　▼

空。　雲一つも無い、真っ青な空。

そこに移動した薫と神威。

薫は霊力を……

神威は魔力を高めて、互いに一本の刀を取り出す。

「さぁ、戦り合おうか」

薫は刃が研ぎ澄まされた更木の斬魄刀を……

「？　刃がボロボロじゃない？」

薫が出した斬魄刀に疑問を感じつつも、神威は一護の斬魄刀の天鎖斬月を取り出した。

「オリジナルと言っても、最初は真新しい斬魄刀。　更木が使ってる斬魄刀は長年、更木の霊力に触れてああなってるけど……私は更木より荒々しくないから……この状態が続いてる」

それだけだよ。　と言って、薫は瞬歩で神威の背後に回った。

「速い！」

神威もすぐに反応して振り返るが、すでに斬魄刀は振られたあと……。

――斬ッ！！

「私の瞬歩は瞬神とまでは行かんでも、二番隊隊長を撒くくらいは出来るよ」

「ぐっ……双天、帰…」

「虚弾（バラ）」

――ズガガガガガガガガガガ……！！

神威が傷を拒絶しようとするも、それをさせまいと連続で虚弾を撃ち続ける薫。

「！！　盾、三天結盾！！　俺は拒絶する！！」

――キンッ！

しかし間一髪と言った処で技の発動を成功させ、修復と防御を同時操作する。

「たまには、アレを使うかな」

攻撃が通らないと感じて、薫は虚弾を撃つのをやめて、虚（ホロウ）の仮面を被る。

「虚化！？」

神威の言う通り、本来ならば虚化なのだろうが、薫の虚の仮面には右頭部の部分が欠けていた。

「虚化とは違うかな。　まぁ間違いじゃないけど……これは破面（アランカル）化。　破面の斬魄刀を使うには、虚化から破面化へとやらないと使えないんだ」

そう言って一本の斬魄刀を持ち、さっきまで持ってた更木の斬魄刀を自身の中に仕舞う。

「破面の斬魄刀……」

「『謳（うた）え、』　羚騎士（ガミューサ）」

――ドォォオオンッ！！

負の霊力の奔流。

そして負の霊力が収まり姿を現したのは、騎士が持つ槍を持ち、下半身は馬のような四本足。

帰刃状態のネリエルの格好をした薫が居た。

「なっ……」

「一応、最強（失笑）の第０十刃の斬魄刀もあるけど、私は破面中

……羚騎士（ガミューサ）が好きだから。　転生前はウルキオラの黒翼大魔（ムルシエラゴ）だけど……」

「くっ…散ｒ」

神威がもう一本の斬魄刀を取り出し、解合を口にする瞬間、薫は神威の背後を取って虚閃を放てる状態にいた。

「ッ！（速いってもんじゃない！！）」

「まだ続ける？　続けるなら、虚化するまで待っててあげる」

薫の最後の慈悲。　無抵抗よりも多少の抵抗をという、強者の余裕が神威に感じられた。

「……知ってる？　ＢＬＥＡＣＨには虚化よりも上がある事を……」

――ドォオオンッ！！！

「……」

魔力の柱が立ち、神威はその中で斬魄刀と同化する。

以前の薫ならそんな技があることも知らずに居ただろうが、薫達にはあらゆる原作を持つジェイルが居る。

当然、斬魄刀の一体化なんてのは知ってるが、薫の特典にデメリット無しというのは無い。

「これが現在、ＢＬＥＡＣＨの中でも最強の状態」

「ふぅん、なら来なよ」

薫は破面状態を解いて、自身の斬魄刀よりも使い慣れた……あの斬魄刀を取り出す。

「無月！！」

いまだ余裕の表情の薫に苛立つ神威は、容赦無くその力を解放した。

――ズズ……ズガァァアアアアアアアアアアアー――――――ンンッッ！！

黒い魔力は薫を飲み込み、吹き飛ばしたかに見えたが……。

あの薫がやられるはずがない。

そも薫の本領は、火竜や迦愚土と言った攻撃力じゃなく、神鳴流などの接近戦ではなく、幻炎の墨や鏡花水月と言った幻術、催眠、操作、支配などの変化球を使った戦闘。

――パキィィイイインッ！！

「な……」

「なんだ、一回放てば終わるんだ。　それだったら、やっぱり虚化の方がいいんじゃない？」

故に世界が割れて、神威が目にしたのは青く染まる空。

そして背後から聞こえる薫の声……。

「不死身ってわけじゃないんでしょ？　後ろからバッサリだね～♪」

「卑怯者！！」

「水月ちゃんになんて事を言うんだ、この転生者は……」

「ちゃん！？　女の子なの！？」

「惑わすのは女性の特権♪　それに卑怯卑怯言うけどさ……これもれっきとした能力。　無双乙とか使われたら勝てないとか言う馬鹿居るけど、これアスナには効かないって実証済みだし、貴史レベルとなると掛かってもすぐに対策を取られる」

「うぅ……」

「ようは掛かる方が悪い！」

「ぐっ……」

薫の言い分に反論出来ない神威は、二度と薫さんと戦わないと心に誓うのであった。

「まぁお腹も空いたし、ご飯にしよっか？」

こうしてこの戦いは終わり、鏡花水月を使った事への詫びなのか、神威の好きな食べ物を作って、貴史達が帰ってくるのを待ってたとさ……。

▲　三人称　▲

▼　おまけ　▼

「お姉ちゃん、標準語似てないえ」

「その姿で標準語は……」

「あー、まー……京言葉のお前が一番だ」

「ほな、これで行くわ……はぁ」

▲　おまけ　▲

チートを持つ少女ＶＳ漆黒の少女（前書き）

今回は十六夜　白爛様の作品。

これで大丈夫か激しく不安です。

チートを持つ少女ＶＳ漆黒の少女

▼　三人称　▼

カスミが創った世界。
此処は、貴史達について来る者達が待機する場所であり、貴史達に挑戦または修行しに来る者が、やって来る場所である。
そして今回は、カスミに挑む者がやってきた。

「やれやれ、私と戦いたいとか……そうだな、普通に戦うのもアレだ。　殲滅ゲームをしようじゃないか」

「殲滅ゲーム？」

「説明しよう！」

殲滅ゲームとは、文字通り殲滅するゲーム。　またの名は、無双ゲーム。
これは決められた数の敵を、どれだけ相手より多く敵を倒せるかの勝負だ。
ルールは、簡単だ。
相手プレイヤーを殺さない。
ただそれだけだ！！

「得点方法は以下の通り！」

殲滅と見なされるのは、千体の敵の消滅を確認。
千体で１０００ポイントだ。

さらに、殲滅技から殲滅に繋げる殲滅コンボもあるし、コンボ補正で1殲滅コンボで、１０ポイント獲得できる。
ただし魔法の射手、宝具の射出などは殲滅コンボに入らないので注意が必要だ。
なお、魔力切れなんて（転生者なら）起きないだろうから、一時間という時間の中で競う。

「理解したか？」

「もちのろん！！」

「では、スタート！」

カスミの合図に、無数のモンスターがあらわれた。
種類はゴブリンといった、比較的まともなモンスター。
しかし、そのモンスターも数が多ければ恐怖の何者でもない。

「先手必勝！　タイダルウェーブ！！」

だが、そこはチート。
ゴブリンの群れ如きに、怯むことはない。

――ドバァアアアア！！

セレナの出した津波は多くのゴブリン命を奪うが、ゴブリンの数は減るどころか増える一方。

「タイダルウェーブ連打ぁぁあああ！！」

減らないゴブリン達を前に、若干プライドに来たのか連続で津波

を出しては、ゴブリンの群れを消していく。

「ビックバン！！」

そして放たれる膨大なエネルギーは、ゴブリンを消し飛ばした。

しかし、それでも減らない……むしろ攻撃すればするほど増えてると言われた方が、納得するような勢いでゴブリン達は増殖して行く。

「ゴキブリみたいに……」

「ゴキブリとゴブリン……ふむ、ニュアンスは似てるな」

「って、あんたも参加しなさいよ！！」

「ん？」

セレナは、怠けてるカスミに八つ当たりするようにツッコミを入れるが……

「なんだ、もう私の出番で良いのか？　なら、遠慮なく……」

カスミはそう言って、魔法を放つ。

魔法の射手千本から始まり、千の雷、漆黒の炎嵐、冥府の石柱に引き裂く大地。

さらに続く、大魔法の連続使用。

そこで気付く。

「こ、このままじゃ……負ける！！　巡り踊れ、地水火風！　深奥に集いて我が鉄槌となれ！　エレメンタルメテオ！！」

セレナの負けじと魔法を放つが、出るは出るはカスミの魔法。
ペルソナの万能スキル、メギドラオン、ハルマゲドン。
火炎スキル、マハラギオン、マハラギダイン、マララギダイン。
氷結スキル、マハブフーラ、マハブフダイン。
疾風スキル、マハガルーラ、マハガルダイン。
電撃スキル、マハジオンガ、マハジオダインと……セレナはカスミに追い付く事が出来ないでいた。

「なら……ケイオス・ゼロ！！」

セレナは自身のオリジナル魔法を使い、ゴブリン達を殲滅しにかかった。
さらにセレナは、宝具を使い真名解放を使用。
約束された勝利の剣（エクスカリバー）、転輪する勝利の剣（エクスカリバー・ガラティア）、無毀なる湖光（ロンダイト）、突き穿つ死翔の槍（ゲイ・ボルク）と、いつしかカスミの放つ魔法と拮抗していた。

「やるじゃないか。　にしても飽きたな……そろそろ勝利を譲るか」

意地になってるセレナを尻目に、カスミのやる気は底辺まで来ていた。

「勝利すべき黄金の光（カリバーン）！　宝具再現魔法は撃ち切りっと……」

カスミは舞う、あらゆる魔法と共に……。

ただ放つだけじゃなく、修めた魔法をさらに効率良く改良していく。

「死の波動、漆黒の剣、スターライトブラスター！！！」

そしてカスミは、最後に放つ魔法を準備する。

放つタイミングは、ゲームが終わる五秒前。

そして、一時間という長い時間が経とうとした。

得点は僅かにカスミが勝っている。

当然と言えば当然だろう。

カスミはあれから途絶える事なく、殲滅魔法を放っている。

そしてセレナは、途中何度か魔法が途切れて、殲滅コンボを止めていた。

その差が今になって、セレナを追い詰めていた。

「く……」

「残り十秒か……」

「だったらこれで終わり！」

「やれやれ、勝たせようと思っていたが……やはり負けるのは性に合わん」

「ＤＥＡＴＨ」「ゼロカウント・ネプテューン！！」

カスミの体から赤黒い魔力が指先に集まり、一握りの塊が指先からこぼれ落ちる。
セレナは全魔力を使い、擬似的なブラックホールを生み出し、ゴブリン達を闇に飲み込んでいく。

「すまんな、私の勝ちだ」

爆発。

赤黒い魔力は、弾け飛びゴブリン達を一瞬にして死に追いやった。
そして流れる終了のブザー。
勝敗は……
セレナ……３３２１００００００ポイント
カスミ……０００００００００００００ポイント。

「え、何これ？」

「どうやら規定の数値をオーバーしてしまったようだな」

貴史がそう言うと、カスミは「そんな事もあるか」と、それはそれは軽い口調で言った。

「……計測不能ってあんた」

「まぁ今回は私の勝ちだ」

「く、魔法を途切れさせなければ……」

「まぁ頑張れ（殲滅で私に勝てるなら）」

悔しがるセレナに、カスミは家に帰って行った。

「ちょっ！　私のコラボこれだけ！？」

これだけです。

「納得行かない……」

こうして、セレナとカスミの戦いは終わった。

▲　三人称　▲

最強の死神ＶＳ理不尽な転生者（前書き）

今回でコラボ最後！

ＲＥＤＥＸ様の作品です。

最強の死神ＶＳ理不尽な転生者

▼　三人称　▼

世界には、転生者の天敵が居る。
一つは、世界。
物語として確定してる世界を介入して壊そうとすると、修正力が働き、転生者を排除する存在。
一つは、神。
特典として与えた転生者の能力を、任意で取り除いたりして、転生者を無力化する存在。

今回の話は、転生者の天敵である神と転生者の戦いの話。
神が見せるは、抗いようのない力。
転生者が魅せるは、あらゆるものを超越し、理不尽な力。

「こっちでは初めまして、死神の如月優太」

「そして久しぶりだな、あらゆるものを超越する南武貴史」

二人の魔力は肥大してぶつかり合い、中心で嵐を巻き起こす。
貴史にとって、この現象はもう馴染みのモノ。
だが優太にとって、これが馴染みのモノかと言うと……

「へぇ、魔力のぶつかり合いってこうなるんだな」

違う。

優太が戦う者は、自身に対して弱い者と自身に対して強い者だ。
互角同士の魔力の衝突は、今までなかった。

「初めてか？」

「見るのはな。　聞いたことがあるってだけさ」

「そうかい……。　まぁ、話してもしゃーねぇから、ぼちぼち始めようかね」

「そうだな」

ーーードガッ！！！

貴史と優太が駆けると、数秒で拳と拳がぶつかり合い、さらに蹴りと膝が、肘と抜き手が、爆音を轟かせながらぶつかる。
毎度毎度、爆音を轟かすや爆発させながらと描写してるが、何故体術だけで爆発するのか、まったくわからない。
これが、チートというモノなのだろうか？

「やるじゃんか、貴史！」

「お前みたいに弱い者イジメしてないから、なっ！」

「言って、ろっ！！」

ーーーズガァァアアンッ！！

蹴りと拳の激突で、周囲の大地が爆発する。
それでも構わず、貴史と優太の動きは止まらない。

二人とも避ける事は考えず、攻撃が来たら攻撃で相殺して攻撃するを繰り返すばかり……。
だが、これは避けれないわけじゃなく、二人は避けるよりも相殺して、相手よりも速く、相手よりも強く、相手よりも多く攻撃をしようという考えなのだ。

「そろそろギアを上げようか」

「ならトップだ！」

「いいけど、ついて来いよ？」

「お前もな！！」

身体もだいぶ温まったのだろう、貴史と優太はさらにスピードを上げていく。
そして、互角だったスピードはズレていく。
貴史の攻撃に優太が相殺しか出来ず、徐々に優太の攻撃が追いつかなくなり防御を取る。
そして終(つい)に、貴史の攻撃力は優太の防御力を上回った。

「なっ！？」

「これが俺の娘レベルで、俺にとってはギリギリ６０％ぐらいか？」

「これで６０だと！？」

優太は自身の耳を疑った。
何も自分が最強とは思ってない。
上には上が居る。

でも、自身の上と言えばゼウスだとか最高神レベルだ。
転生者よりかは、強いと思っていた。

「転生者も馬鹿みたいに強者に挑めば、神くらい超えられる。　いや、超える！！　大事なのは、夢に絶望した正義の味方が言ってた事！！」

――イメージしろ、自身に勝る敵は居ないと……常に想像するのは――

「最強の自分！！」

「！！」

貴史の言葉に、ハッと何かに気付いたような表情をする優太。
そして……

「なら、そうしてやる」

優太は、自身の力を解放した。
漆黒の翼を八枚出し、手には白銀の大鎌を持って、貴史と対峙するが……

「ふわぁ～……ねむゅい……」

――イラッ

貴史は欠伸をしていた。
まるで、それでは足りないと言った具合に……。

「だったら、無力化してやるよ！　お前の能力と技を！！」

――封印の鎖開放――終焉の序曲！！　怠惰の無力！！

世界は、優太の魔力に包また。

「準備が終わったんならやろうか」

「後悔すんなよ」

「まさか…」

貴史は不敵に笑い、赤い剣（ブラッディ・ソード）を出す。

そう、能力を無効化する効果を持つ世界で、貴史は超越者の能力を使った。

「何？」

「能力を奪う、無くす、無効にする。　全て俺の想像外の話だ」

例えば、死。

心臓を貫かれ、穿（うが）たれ、引き裂かれ、取り出されても、そこに死を想像出来なければ、死ぬ事はない。

例えば、あらゆるものを切断する光のナイフ。

そんなものが実在するのか？　と言われれば、答えは否。

誰もそんなナイフを見た事はないし、ましてや形を持たない光がナイフなど、想像出来ない。

貴史と戦うに至って必要なのは、貴史にそれがあると想像させる事。

貴史に勝つには、貴史に倒されるというイメージを持たせる事に他ならない。

「くっ……」

「さて、第二ラウンドだ」

――ダッ！

貴史が優太に向かって駆ける。

優太は魔法を放つが、超スピードで動く貴史を捉えきれず、気付けば優太の手の届く範囲に居た。

「ッ！！」

「喰らえ……」

「ただいまー」

「おう、おかえり」

貴史の攻撃が当たる寸前、乱が外から帰ってきて、貴史は優太に攻撃するのをやめて、優太の肩に手を置き仲の良い友人のような行動を取った。

「は？」

「ん、親父の知り合い？」

「おう、ダチだ」

「ふぅん」

「乱はこのあとどうすんだ？」

「いや、あの…」

「飯かな……」

「それは奇遇だな。　俺達もちょうど飯にする処だったんだ」

「あれ？　戦闘は？」

「なら、オレが作るよ」

「助かる。　ほら、風太行くぞ」

「風太って言うんだ」

「違…」

「下半身が風太だ。　女性に大人気だぞ」

「……近付かないでくれ、風太さん」

「優太だ！！　それとダチの娘相手に立てねぇよ！！」

何やら不当な扱いをされる優太。

しかし、優太も黙っては居られずに反論するが……

「んで、何が良い？」

「すき焼き」

「わかった」

無視される始末。

なんか納得出来ないも、優太は貴史達の後を追うのであった。

▲　三人称　▲

我が名は、ルガルハンダ！！（前書き）

真の英雄王登場ｗｗ

我が名は、ルガルハンダ！！

▼　貴史　視点▼

「んじゃ、行ってくる」

「ああ」

俺達のダチが、やって来なくなって数日。　そろそろ次の世界に行くかと思い、俺とジェイル、乱、そして最近仲間になったエリザベスと共にカスミの世界を渡った。

ちなみに、カスミ、薫、ディード、ディエチ、俺達について来たネギま！勢はまだ動かないらしい。

とりあえず、世界移動～。

はい、やって来ました。　異世界もとい、多分リリカルなのはの世界。

なぜ、多分なのかと言うと……。

「荒野だね」

「荒野だな」

「荒野でございますね」

周りが荒野だからさ！！　林らしきモノが、遥か遠くの前方にあるのを確認。　右は荒野、左は砂漠、後ろはなんか山？　丘みたいなとこ。

「此処は何処だ？」

「どうすんの？　親父」

「人に聞こう」

「人……居るのですか？」

俺の言葉に、青いナース服を着たエリザベスが聞き返してくる。

うむ、まったくもってけしからん太股だ。

「あ、あの……」

「娘の女の脚を変な目で見んな親父」

「悪い悪い。　にしても、乱が百合に目覚めるとはね～」

まぁいい加減、エリザベスの立ち位置について、読者の皆に説明しておくか…。

名前は、クイーン・エリザベス。
通称、エリザベス。
性別は女性、外見的年齢はだいたい１８歳。
容姿は、ペルソナ３のエリザベスが青いナース服を着て、手には

ペルソナ全書。
強さは、乱と同等。　さらにまだまだ成長する。
備考として、１００万アクセス突破記念４で、ジェイルとコラボ先のすずかが造った【力を超越せし者】。
モデルのエリザベスより強い。
なんせ生まれたばかりで、本気全力の乱に苦戦を強いられてた。
そこから乱との対等な間柄になるも、互いが求め欲した為にライバルから恋人へ。

と、こんなもんかな。

「もういいや。　で、何処の誰に聞くのさ？」

「ん、ああ……それはな」

俺が右を向くと、黄金の甲冑に黄金の長髪、深紅の双眼を携えた男が全速力でこちらへやって来ていた。

このくらいなら全員見えるか……。

「あのおっちゃんに聞く」

「うわぁ…黄金の甲冑とか……」

「ふむ、気色悪いな」

「敵の意表を突くため、あえて黄金の甲冑を身に着ける。　そして黄金の輝きに敵を魅了させ、その隙に敵を討つ……人の欲を的確に突いた見事な一品！！　このエリザベス、不覚にも感動してしまいました」

うむ、一人おかしいのが居るが、概ね予想通りだ。
確かにアレは引く。
ネギま！の世界で、ギルガメッシュを見てなかったら、数秒は固まっていたな。

「我が名は、ルガルハンダ！！　異界の戦士よ。　いずれ世界の王となる我の糧となれい！！」

ルガルハンダ？　……もしかして、ルガルバンダか？

「ふむ、間違いなく彼はルガルバンダだろ」

「え、マジ？」

「ルガルバンダって何？　パンダか？」

ちげぇーよ。　アレはどう見ても人間だろうが…。
乱には、歴史の勉強が必要だな。

ルガルバンダ……ギルガメシュの父親であり、ギルガメシュの伝説とかは、だいたいがルガルバンダの伝説に似てたりする。
ギルガメシュの盟友は、さておきな。
つまり、彼こそが真の英雄王。

にしても異界の戦士ねぇ。
俺らの事を知ってるのか、はたまた次元世界の事を言ってるのか……まぁ、どっちでもいいか。
俺らは……今、喧嘩を売られたんだからよ！！

「俺の名前は、南武貴史だ。　貴史で良いぜ」

――ゴゥッ！！

自己紹介をして、魔力と気を開放する。

それを見たルガルハンダは、猟奇的な顔をしてあるモノを起動させた。

「Ｅａ　Ｓｅｔｕｐ」

『Ｓｔａｎｄｂｙｒｅｄｈｉ　Ｓｅｔｕｐ』

エア……ルガルハンダは、確かにそう言った。

▲　貴史　視点▲

ルガルハンダVS南武貴史

▼　三人称　▼

『Ｓｔａｎｄｂｙｒｅｄｈｉ　Ｓｅｔｕｐ』

ルガルハンダの腕輪が輝き出すと、ルガルハンダは赤い魔力の柱に包まれる。
しばらくして赤い魔力の柱から、パーツとパーツが組み合うような音がし、音が止んだあと、赤い魔力の柱は消えて中から黄金の槍を持ったルガルハンダが現れた。

「またせたな。　異界の戦士よ」

「さほど待ってはないさ」

「そうか」

対峙する貴史とルガルハンダ。
それを見守るように、乱達が対峙する二人を見る。
そして……

――ピィィイヒュルルルー――ッ

遠くから鳥が鳴いたのを合図に、二人は動いた。

「行けい！」

ルガルハンダは後方へ跳ね、周囲にスフィアをいくつも作り射出する。

「直射弾か誘導弾か？　まっブッ叩けば良い話だな」

「――蛇咬（スネークバイト）！」

貴史はお馴染みの蛇咬をもって、ルガルハンダが放つ魔力弾を掻き消していった。

だが、ルガルハンダも負けじと魔力弾を豪雨の如く放ち続けるも、ルガルハンダの魔力弾は貴史を一つも捉える事なく、消されていく。

「肉体一つで、オレの魔法に対抗するとはな……」

「ハッ！　テメーよか修羅場潜ってんのさ……こっちはよ！！」

「ならば！！　風よ、王の命に従え！！」

そうルガルハンダが言うと、ルガルハンダの周りに風が吹き荒れる。

「お……（風の変換資質か）」

「切り裂けぇい！！」

『烈風斬』

ルガルハンダがエアを大きく横へ振ると、巨大な風の刃を飛ばして貴史を切り付けようとするが、そんな大振りが貴史に当たるはずもなく……

「あらよっと…」

上空に跳んで、簡単に避けられる。

「甘い！　鎖よ！！」

「鎖如きに拘束される俺じゃねぇ、よ！」

しかし、それを読んでたルガルハンダは、チェーンバインドを使い貴史を拘束しようとするが、チェーンバインドすらも蛇咬で消す貴史。

そもそも、この男を拘束する事が出来るモノはあるのだろうか？

仮にあったとしても、ルガルハンダはソレを持ってはいないだろう。

「化け物か！？」

「なんとー！　って、失礼だろうが！！」

ルガルハンダの評価にネタを使った返事をするも、ルガルハンダの正しい評価にキレる貴史。

「オレも化け物だと思うよ」

「確かにあの強さは、マジありえなーいって感じですね」

「人間であの強さは、ちょうキモーいだなｗｗ」

「よぉうし、テメーらは後でシバく！！」

どうやら、貴史とルガルハンダの戦いを観戦していた乱達も、ルガルハンダと同じ気持ちのようだ。

「風よ、矢となりて眼前の敵に放て！！」

「赤い杖刑（ブラッディ・スティック）！！」

ルガルハンダの風の矢に、貴史はメスを投げて対抗する。

本来なら風の矢がメスを押し退けるが、そこは超越者というか化け物、矢とメスがぶつかると風の矢は力を失って、メスはルガルハンダへ向かう。

「熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）！！」

――ズガガガガガガッ！！

向かって来るメスに危険を感じたのか、ルガルハンダは瞬時にシールドを七枚張ると、七枚のシールドは全て破壊されて、メスはようやく止まった。

「チッ突破は出来なかったか」

「親父のメスを止めるとか、手加減されてる割には凄いね」

「まぁ、本気ならあの王様は血達磨（ちだるま）だしね」

「どうやら、あの王様も手加減されてる事には、気付いてるみたいですよ」

そう、先程から……というか前々回の話から、貴史はリミッターを付けてる。
何故なら貴史は人としての領域を超えすぎて、そのままだと生活もままならないのだ。
故にリミッターを付け、実力を抑えてるのだ。

「ふむ、やはり手心を加えておったか」

そしてルガルハンダ自身も、何処かで勘づいていたが、確証は持てなかった。
しかし観戦してる乱達の言葉を聞いて、ルガルハンダは自分の考えが当たっていた事を確信した。

「まぁ、本気出したら（物理的に）弾けるし……」

「うむ、その心遣いに感謝しよう。　だが！！　あえて言おう！！
余計なお世話じゃ！！　小童（こわっぱ）！！！」

ルガルハンダは叫ぶ。
真剣に戦っていた自分を愚弄する行いに……。
自分の掲げる誇りを傷付けられた相手に……。

ルガルハンダは風の力で駆けて、貴史を殴った。
今まで捉えきれなかったルガルハンダの攻撃は、ルガルハンダの怒りと共に貴史を捉えた。

「ぐっ！（重い……良い一撃じゃ、ねぇか……）」

――グッ！

ルガルハンダのパンチを喰らった貴史は、崩れそうになる足に力を入れて倒れるのを踏み止まった。

「オレの事なんざ心配すんな。　本気で来い……小童」

「ヘッ……上等だ、クソジジイ！（俺の目を覚まさせた事、感謝するぜ）」

――バキンッ！

貴史が力を入れると、硬いモノが砕ける音がしたあと、ルガルハンダの視界から貴史が消えた。

「（消えた？　いや、居るな……少し気合いを入れるか）カァアッツ！！」

――ズドォオオンッ！！

ルガルハンダが気合いを入れると、ルガルハンダの目にはしっかりと貴史が見えた。

「おいおい、おっさん。　俺を認識するって俺が落ち込む」

「何を言う。　これからが本番だ。　目を逸らしてはおれん」

ルガルハンダの言葉を聞いて、一瞬驚くも、すぐに口元を吊り上げて笑った。

「腰を抜かすなよ？」

「行くぞ！！」

戦いは加速し……。

そして、ルガルハンダの伝説が始まる。

貴史が本気になった途端、状況は一変した。

一進一退の戦いから一方的な戦いへと……。

もっともこれは誰もが予想してた事態だが、たった一つだけ乱達の予想を裏切った。

それは……

「ゲホッゲホッ……ヌゥゥウウウ……」

「頑丈だな、おっさん」

「当然だ！　オレは王だぞ！！」

ボコボコにされながらも、立ち上がるルガルハンダの根性だった。

「なら、その敬意を評して見せてやるよ。　俺の剣をよ！！」

――赤い乖離剣（ブラッディ・エア）

「む！？」

「加減用だが、あんたに応えるには相応しいもんだろ？」

「面白い……なれば、我が最強の魔導をもって汝を打ち倒そう」

「ならやってみろやぁぁあああああ！！」

貴史とルガルハンダが構える。

その構えは何処となく似ており、二人が持つ武器も同じように風を巻き起こす。

そう、似てるの当然だ。

彼らが放つのは、まったく同じ技なのだから……。

「乖離せよ！」「目覚めやがれぇえ！！」

二つのエアに、暴風が渦巻く。

「赤い（ブラッディ）…」

貴史が、技の一部を先に言う。

それも当然だろう。　貴史の技はルガルハンダの技より、一言多いのだから……。

「「天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリィィイイイッシュ）！！」」

そして二人は、チャージした魔力を解き放った。

ーーズガァアアアアアアアアアアアアアーーーーーー

――ンンンッッ！！！

二つの赤い風がぶつかり合う。
ぶつかり合ってる所を中心に、大地が割れ、上空に浮かぶ雲は掻き消される。
そして被害は乱達にも及んだが、乱達も貴史に負けるもチートだ。
平然とまでは行かないも、観戦を続けていた。

「あのおっさん凄いなぁ」

「あの男……どうやら貴史と同じ才能を持ってるね。　いやいや、化け物が此処にも居るとは驚いた」

「才能……ですか？」

「私もさっき気付いたがね。　最初に会った頃よりも、強くなってるのだよ。　彼は……」

「へ～」

と、なんかとんでもない事を言ってるが、そこはスルーして、二人の戦いがどうなったかと言うと……

「クハハハハハ、いやいや愉快愉快。　これほど圧倒されたのは、初めてだ」

「頑丈だねぇ～おっさん」

「そんじょそこらの雑魚と一緒にするな。　うむ、今日は気分が良い……良いぞぉお！！」

「なら宴と行こうや。　美味い飯に美味い酒、美人が居る……そして何より」

「戦友（とも）が居る！！　よし、宴じゃ！！」

なんか仲良くなっていた。

「やれやれ宴なら少し待て、料理を用意しよう」

「サンキュー」

「そこの女も来い。　というか、オレとどうだ？　あんたも」

「悪くない誘いだが、娘に手を出すと死ぬぞ？」

「ん？」

「おっさん……乱に手ぇ出すんなら俺を倒してからだな」

「むぉおっ！？」

乱に手を出そうとするルガル ハンダを、貴史は強烈の殺気を放って牽制する。

どうやら父親として、男の恋人は許せないらしい。

というか、おっさんは父親としても許さないだろう。

「まぁ、何はともあれ……騒ぐぞ！！」

「「「「オー！！」」」」

こうして、新たな世界での最初の一日がバトルと宴によって終わった。

▲　三人称　▲

ようこそ、我が国へ！（前書き）

■■■「こうしんせんげん！！」

■■■「せん、げん！！」

いや、その台詞は活動報告でだから……

■■■「うるさい！」

■■■「うるさ～い」

――蛇弾（スネークショット）！！

久しぶりですよぉぉおおおー――――ッうぎゃぁぁあああああああ！！

ようこそ、我が国へ！

▼　貴史　視点▼

宴会をやったあと、ジェイルが簡易ハウスを造ってそこで寝た。
そして朝。
ルガハン（ルガルハンダのあだ名だ）の案内で、ルガハンが治める国に行く事になった。

「でもどうやって行くんだ？」

「走る！」

「失礼ながら飛んだ方がよろしいかと…」

「修行のために走れぃ！！」

まぁ、ルガハンの言ってる事に一理ある。
此処は一つ、ルガハンの修行に付き合うとしよう。
だけど、ただ走るのも味気ないな。

「ルガハン」

「ん、なんだ？」

「ただ走るのもアレだ。　速度を上げ下げしながら走ろうぜ？　均等にすると疲れないからなぁ……切り替えるタイミングは、バラバラで」

「楽しそうではないか！」

ルガハンなら、そう言ってくれると思ったよ。

ルガハンの声を聞いて、ジェイルの方を見ると「待ってました」と言わんばかりに、ジェイルは懐からデバイスを取り出した。

「切り替えの合図なら、私に任せたまえ！　このデバイスが出す」

―ビー！

「この音がバラバラの間隔で鳴れば、切り替えるでいいかな？」

「うむ、構わん」

「オレも良いぜ」

「私（わたくし）も構いません」

「決まりだな」

さて、ルガハンが何処まで行けるか楽しみだ。

走り出して5時間が経った。

ルガハンは息を切らしながらも、俺達について来てる。

案内人のルガハンが後ろって、勘弁して欲しいんだが……。

―ビー！

と、此処で切り替えの合図か。

「負けるかぁぁあああああああぁぁぁぁ……」

「ルガハン、トップからローに確認。　罰ゲーム」

――バチチチチチッ！！

「ギョバババババババババ…」

トップスピードからローになった事で、ルガハンはジェイルによって電撃を喰らわせられる。

実はこれ、三回目なのだ。

大丈夫か？　ルガハン。

数時間走ってると、うっすらと町が見えてきた。

おそらくアレが、ルガハンの国なのだろう。

「町が見えてきたぞー」

「何処？」

「見えんぞ？」

「見えません」

「見えないね」

……訂正、俺が見える範囲で町が見えた。

俺がみんなにそう言うと、なんとも言えない空気が場を支配した。
それからさらに数時間、ようやく全員が見える範囲で町が見えた。
そこからルガハンが、馬鹿笑いしながら猛ダッシュ。

なんか恐いんだが……。

「オレが帰って来たー！！　フハハハハハハ」

いやいやいやいや、何ネタに走ってんだよ！！　いや、あれは素か？

―ビー！

あ、ローに切り替えなきゃ……。

「アバババババ…」

切り替え合図を無視して、トップスピードのまま駆け出すルガハンは、ルール通り身体に電気が放たれる。
なんだか可哀相になってきた。　止めないけど…。

▲　貴史　視点▲

▼　乱　視点▼

どうも、乱です。
現在オレ達はおっさんの招待で、城に居る。
最初はおっさんに対する親父の馴れ馴れしさに、兵達は剣を取ってたけどおっさんがソレを止めた。
んで、今はかなりの持て成しを受けてる。

「好きに食べるといい」

そう。　少ししか走ってないのに、もう飯の時間なのだ。
ついてすぐに飯を用意させるとか、おっさんは腹ぺこだったんだね。

「「…「いただきます」…」」

まぁ、それでも出されたら食べる。
残すなんて料理人と、食材になってくれた動植物に失礼だからな。

「この時代に調味料がないから味気ないと思ってたが、味がしっかりついてるんだな」

「調味料という言葉がないのだろう。　存在はして、食材の一つと数えられてたかもしれん」

「火も十分に通ってて、美味しく仕上がってますね」

「これでパンが柔らかければ文句ないけど……」

――ブチブチブチッ！

パンをかじる音じゃねぇ……。

普通もふもふとかじゃない？　それかはむはむ？　ブチブチはない。

と、遠慮のない感想を述べながら料理を残さず食べる。

「確かにジェイルが作ったモノより劣るな。　いや、オレにとってはこれが最高の飯だったが、あの味を知った今となると……満足出来ん」

「なら明日にでも、城の調理師に私の料理を教授させよう」

「おお！　やってくれるか!!　どうだ？　そのついでにオレの妻に」

「正妻は埋まってるし、最低限ランを電撃を受けないようにしてくれ」

「そうか……」

というか、娘の前で口説くなよ。

つか、親父は反対しないのか？　まぁ反対しようがしまいが、母さんを止められないだろうけど……。

「これと同じのおかわりー！」

「あ、鳥の丸焼きが無くなった」

「何!?　鳥の丸焼きもー!」

オレの言葉に大きく反応し、メイドさん（この時代にメイドなんて単語ないだろうけど、オレは知ってるから使う）に注文する親父。

その間オレは野菜サラダにパクつく。

――もしゃもしゃ

「ドレッシングがないとダメだな。　激しく味気ない」

「それは飾りなんだが」

……サラダじゃなかったようだ。

「野菜のサラダとかある?」

「ない!」

じゃあ、野菜で取れる栄養は肉料理に申し訳ない程度について来る奴だけ?　肉と野菜の対比率がハンパないんだけど……。

栄養が偏る!!

「サラダの方も私がなんとかしよう」

「葉っぱでは腹が膨れん!」

「肉やパンだけってのも問題があるのだが……」

「スープもあるぞ」

それでも問題だろうが！！　ってか親父がやけに静かだな。

オレが親父の方を見ると、黙々と料理を平らげていた。

話に参加せず、自分だけ……。

まぁオレや母さん、エリザベスはそんなに食べないから良いけどさ。

なんか言う事は無いのか？

「俺は飯が食えればいい」

あっそ……。

そして飯を食べ終わると、母さんは調理師に料理を教え、親父は城を出て町に、オレとエリザベスは城内を探検した。

「あらかた見て回ったかな？」

「そうですね」

――ピピピピピッ！

「ん？」

長い廊下を歩いてると、懐に仕舞ってある連絡用のデバイスが鳴った。
これは、あの世界に残ったカスミさん達と連絡する事が出来るのだ。
『元気にしてるか？　乱』
通話モードにして、聞こえてきた声はカスミさんだった。
一瞬だけあの子かと身構えたけど、ソレは無かったみたいで何より。
「親父も母さんもエリザベスもオレも元気だよ」
「お久しぶりです。　カスミ様」
『そうか。　ああ、久しぶり』
「どうしたの？」
『ん？　ああ……実はな』
「「？」」
何やら歯切れが悪いカスミさんに、首を傾げるオレとエリザベス。
そして、ようやく喋り出したカスミさんの内容に、オレとエリザベスは耳を疑った。
『■■■が■■■をベルカに連れ出した。　安心して良いかわからんが、お前達が来るまで大人しくしてるらしい』

名前を聞いた瞬間、オレ達の耳は右から左へと流れて、カスミさんの言葉が頭に入らなかった。

▲乱　視点▲

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7049j/

～三人の転生者～

2011年12月13日05時58分発行